八代集

上

古今和歌集序

（源俊頼卿筆）

古今和歌集序（源俊頼筆）

例言

一、本卷は八代集上卷として、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集を收めました。

一、本卷は植松安が擔當しました。

一、本文は正保四年版の八代集をもととし、左記の諸註釋書を參考して校訂しました。

一、古今和歌集は顯註密勘、古今集童蒙抄、古今餘材集、古今和歌集打聽、古今集遠鏡、古今集正義等を參考して註釋しました。

一、後撰和歌集の註釋は後撰抄、後撰和歌集新抄、後撰和歌集標註等を參照しました。

一、拾遺和歌集は拾遺抄註及び拾遺和歌集標註を、後拾遺和歌集は後拾遺抄註を參考して註釋を施しました。

校註 國歌大系 第三卷目次

古今和歌集……一―一六六

後撰和歌集……一六七―三七四

拾遺和歌集 三七五—五六六

後拾遺和歌集 五六七—七七二

目次終

解題

古今和歌集

こと夏はいかゞ鳴きけむほとゝぎす今宵ばかりはあらじとぞ聞く

承香殿の東の閒で、歌を選びつゝ候ふ歌人達がある。四月六日の夜はやう〳〵に更けて行く。と仁壽殿の櫻のほとりで、杜宇が仄かに鳴き渡る。五月前の杜宇の聲は珍らしいものである。「あれを詠ぜよ。」といふ勅が下る。歌人達は皆御前に參つた。

夏には幾度も逢つた。杜宇の聲も屢聞いた。しかし、今宵ほど、光榮に且愉快に聞いた夏はない。まことに、今までの夏はどんなに啼いたであらうか。明らかな記憶はもとよりないが、今宵ほど淸い、さやかな聲ではなかつたやうである。杜宇は、自分らと同じ心をもつてゐるのであらうか。

歌人達の一人の紀貫之の、かく歌つたのは、たゞ、御前に召された喜びのみではなかつた。從來の漢詩集勅撰の例を破つて、和歌集勅撰の仰せを蒙つてゐたからである。

まことに、從來勅撰といふ光輝ある文學的編纂事業は、漢詩に限られてゐた。邦人が漢詩を作つた始めは、分明でないが、大友皇子の御作が、今日では、その最初のものとして傳へられてゐる。邦人が支那の律格によつて

作爲するといふことは、邦人の思想感情の發露の方法としては、不自然千萬である。が、優良な文化の前に頭を擡げ得なかつたのみならず、一意專心、その摸倣に腐心して、早く同一程度までに上らうとした邦人としては、正當な努力であつた。その故に、天皇に次いだ作家は數多あらはれて、時に應じ事に就いて吟詠した。懷風藻の序の「宸翰垂文、賢臣獻頌、彫章麗筆、非唯百篇。」といふのは、誇張の辭であらうが、一斑は想像せられる。その後、壬申の戰亂があつて、悉く灰燼に歸したが、また起つて詞人が輩出した。「騰茂實於前朝、飛英聲於後代。」も誇張であるが、盛んであつた事は事實である。これが懷風藻の一篇となつたのであるが、その間に、石上乙麿の銜悲藻の如き、個人の集さへも現はれた。

かくして平安朝に入つて、皇室の御奬勵があつたので、詩賦の道は愈旺んとなり、弘仁年中に、嵯峨天皇の命によつて、小野岑守が主で、菅原清公、勇山文繼と議し、更に賀陽豐年にも相談して、選進したものに凌雲集がある。これが勅によつての選進のはじめである。次いで、同じ弘仁中に、藤原冬嗣が勅を奉じ、仲雄王、菅原清公、勇山文繼、滋野貞主、桑原腹赤等が選進したものに文華秀麗集がある。更にまた、淳和天皇の天長中に、勅によつて、良岑安世を總裁として、滋野貞主が菅原清公、安野文繼、南淵弘貞、安倍吉人等と相議して選進したものに經國集がある。個人の集は、この時代にはすでに多くあつたのであらう。而して、それらが、この資料となつたに相違ない。

以上の如き有様で、長からざる年序の中に、三度まで光輝ある勅撰集が出來た。しかも、それが詩賦の集に限られてゐたのである。そして、正當の事業として、萬民に認められて、少しも非難の聲がなかつたのである。時

勢の趨くところ思ふべしである。

然るに、何時しか時勢は逆轉した。萬民は覺醒した。邦人の思想感情は、邦人の言語で攄ぶべきであり、固有の律格によつて歌ふべきであるといふ傾向が起つた。乃ち、彼は彼として摸倣するが、眞は上代、奈良朝の、記紀、萬葉の遺響を繼ぐのが、邦人としての道であり、務めであるといふ觀念が生じた。その故に、詩賦の試作は猶引續くが、和歌の道が、漸次盛んとなつた。遂に、延喜五年に、醍醐天皇の勅によつて、紀貫之等四人が、承香殿の東の間に机を竝べて、和歌の選述に從事するまでに到つた。貫之が、序文に記した如く、四人は「今もみそなはし、後の世にも傳」へて、「大空の月を見るが如く」、一世のみならず、後世の仰望の的とし、人麻呂はなくなつても、歌の事はこゝにとゞまれ」る如くならしめようといふ意氣で進んだ。この時の夜啼いたのが杜宇であり、それが天聽に達して、人々は召されて、御前に參り、而して歌を奉つたのである。その中に、貫之が奉つたのが、前の歌であつたのである。

貫之以外の三人は、大内記紀友則、前甲斐掾凡河内躬恆、右衞門府生壬生忠岑であつた。これらは、貫之と共に何れも微官であつた。併し、歌名があつたので、共に任命せられて、選述に從事したのである。友則は貫之の姻戚で、この選錄の筆頭であつたと見えて、序に最初に書されてゐる。併し、奏上に及ばぬ中に卒去してゐる。躬恆は寛平の頃に甲斐權少目となり、延喜の頃に御書所に候し、御廚子所預になり、また和泉大掾ともなつて、歌に巧みで、後には、貫之と優劣如何を論ぜられて決しなかつたほどであり、更に後には、その上に立つとも云はれた。忠岑は、貫之の門下といはれる。左近衞番長、右衞門府生、御廚子所預、攝津大目に歷任した。貫之そ

の人は、御書所預、少内記、大内記等を經て、延長中、土佐守、天慶中、玄蕃頭、木工權頭となつた。選者中の棟梁として尊重せられて後に及んでゐる。この人々の以外に「野邊に生ふる葛」「林にしげき木の葉」の如く多數の歌人達が居り、「歌とのみ思ひてその樣しらぬ」ものもあるが、「歌のさまをも知り、事の心を得た」のも多くあつて、この集の資料を豐かに提供したのであつた。

以上の四人の選者が選錄して、古今和歌集を作り上げた和歌を見ると、三つの體に分れてゐる。乃ちいはゆる長歌、旋頭歌、短歌がそれである。この三體は、上代の樣々の體が、おのづから凝集したものである。上代の人人は、事に當り、物に觸れて、隨意に吟詠した。全體の長短も極まらず、一句の音數も定まつてゐない。併し、自ら、一句は五音となり、七音となり、それが重なつて、五句以上のもの、六句のもの、五句のものとなつた。五句以上のものが長歌、六句のものが旋頭歌、五句のものが短歌である。奈良朝の萬葉集はこれらを載すること、四千五百餘首に及んだ。而して、長歌と短歌とが、心境に融合するものがあつて、多く吟誦の用に供せられた。その中で短歌は唱嗟の用に適するところから、ことに多く諷詠せられた。

併し、この勢ひは平安朝初期の詩賦の流行の爲に壓倒せられた。萬葉の遺響は繼ぐもの少なく、いはゆる「ここに、いにしへの事をも、歌の心をも知れる人、僅かに一人二人」の有樣となつた。詩賦の應制は盛んでも、歌の唱和はすでに少なかつた。仁明天皇の四十賀に奉つた興福寺の僧の作の長歌の拙劣なものさへ、國史に記載せられて賞揚にあづかつた。然るに、この形勢は長く續かず、國民の自覺が起り來ると、和歌の述作は漸次多くなり、光孝天皇の朝には、讌飲の際でも、羣臣に和歌を奉らしめられるに及んだ。

すぐれた作家は、道の盛んなのに連れて起らざるを得ない。小野篁はその前たるものであり、古今和歌集の序に掲げた僧正遍昭、在原業平、小野小町、大伴黒主、文屋康秀、喜撰、後にいはゆる六歌仙は、それに繼いだものである。この外に、在原行平、元方、藤原敏行、興風、淸原深養父、坂上是則、伊勢等があつた。詩賦を專らとした名家の菅原氏から道眞も出で、大江氏から千里もあらはれて、いづれも和歌を巧みにした。ことに、千里の如きは、歌に聞えて詩に聞えなかつた。かくの如くして、歌人は漸次數を加へた。

試作の數が多くなると、それに就いての興味ある遊戲も起つた。詩の鬪詩に擬した歌合は、在原行平の家で催した歌合が最初の一として殘つてゐる。是貞親王の家でも催された。「是貞の親王の家の歌合」といふのが、古今集の資料となつてゐる。宇多天皇の后宮溫子も好ませられて、寛平御時后宮歌合が殘つてゐるのみならず、やはりこの集の資料となつてゐる。これに過ぎて、宇多天皇は御執心で、屢廷臣に、事に就いて歌を奉らしめられ、また寛平歌合の名で傳はつてゐる歌合をも催さしめられた。醍醐天皇の御代に、貫之等に勅して和歌集の選進に從事せしめられたのは、この天皇の御指揮ではなからうかと云ふ說もある。蓋し眞に近いものであらう。

貫之等は、杜宇が櫻樹の上になくまで、日を以て夜に繼いで、選述に努力した。而して、遂に延喜五年四月十八日に選進した。初め、奈良朝の萬葉集の後を襲つて、續萬葉集と云つた。ところが、勅があつて、奉るところの歌を部類せしめられた。而して二十卷として、改めて古今和歌集と云つたのであつた。

延喜五年四月十八日といふ選進の時日に就いては、異論がある。それは、この集の和文序に「延喜五年四月十八日に、萬葉集に入らぬ古き歌、自らのを奉らしめたまひてなむ。」とある。乃ち、四月十八日は、貫之等が奉勅

の日である。從つて撰述し終つたのは、その後の何日かであらねばならぬ。それは、今日知ることが出來ぬ。更に集中に、延喜七年の大堰川行幸の時の貫之、躬恒の歌があり、また延喜七年六月に逝去せられた七條の后を悼み奉る伊勢の歌がある。これらを以て見れば、此の集の選進の時日は不明ではあるが、延喜七年以後である事は明らかである、といふのである。これに立脚したと見え、拾芥抄には、すでに「延喜五年奉仰、延喜末奏聞之。」と書いてある。

和文序によれば、以上の如くもいへるが、漢文序によれば、聊か異なつた見解が下される。漢文序には、選述の由を書いた次に「延喜五年歳次乙丑四月十八日、臣貫之等謹序。」としるしてある。乃ちこの日に選進したと云はれる。が、序文には、奉勅の日を一方に書けば、選進の日を他方に書くべきである。たゞ奉勅の日を書いて、他を省くのでは體をなさない。また和文序の十五日を奉勅の日とし、十八日を選進の日としては、出來方が餘りに速急である。この十八日は、恐らくは誤りで、實は十五日であつて、和文序のと合すべきであらう。從つて選進の日は、延喜七年以後でなくして、猶五年四月十五日と解すべきであらう。大堰川行幸の時の歌、伊勢の奉悼の歌は、猶藤原清輔が袋草子に云つた如く、後から插入したものと見るのが穩當であらう。

和文序、漢文序、古今集には二樣の序文がある。一書に兩序あるのは、不審しい次第である。普通用ゐられてゐる貞應本には、和文序が卷頭にあり、漢文序が卷末にある。卷末に序文があるのは、全く體をなさない。これは、何れか一つ原本にはあつたに相違ない。原本は今傳はらないから、見る譯には行かないが、それに比較的近い元永三年の古寫本には、卷頭に和文序が一つあるのみである。これが正當かと思ふと、それと殆んど時日の相

違なくして書寫せられたと思はれる筋切には、兩序が卷頭に出て、漢文序が先に、和文序が後にあると思ふと、またそれと同筆と考へられる卷子本には、和文序のみが遊離して傳へられてゐる。まことに、何れが主となるべきか、迷はざるを得ないのである。

これに就いて、おのづから樣々の議論が生じた。乃ち從來の書の序は、皆漢文である。和文ではない。和歌の書といへども、この不言の規約に從はねばならぬ。漢文ならずして突如として和文を用ゐるのは、餘りに習慣に反し過ぎて居る。故に紀淑望が漢文の序をまづ作つた。これを摸倣して貫之が和文の序を書いた。であるから、その文が著しく漢文的で、和文的ではない。四六駢儷の體を守つて、雙々相對して華麗に過ぎ、修飾に滿ちて居る。かかる國文があるべきではない。故に漢文の序を正當とすべきで、和文の序は貫之の詞藻を愛する人が、故意に後に添加したものであるとする論が成り立つ。更に、これに理由を附して、まづ淑望が漢文の序を作つた。これは、自覺的態度を有した人々の飽かぬところであつたらしい。敕命はこれによつて下つて、貫之はこれを和文に書き改めた。從つて、漢文の規格によつて成り、純乎たる和文ではなくなつてゐるとの說も生じた。

以上に反して、從來の書の序は皆漢文である。かくの如きものが和歌集の最初にあるのは、著しく內容に反する。この故に、貫之は和文序を書いた。而して漢文の法則に從つた。それは、從來和文でかかる場合に用ゐるべき體裁がなく、却つて漢文に多くあつたから、それを基礎としたのである。從つて和文としては、貫之の創始した一體である。こゝに、貫之の技倆の認めらるべきがあるのみならず、その自覺的態度の徹底的なのに驚嘆すべきものがあるのである。この文辭の絢爛なのを見て、淑望が試に漢文に譯出したのが、漢文の序であるといふ論

も生じた。更にまた、貫之は、この前例のない和文の序の執筆には苦しんだ。故にまづ淑望に託して、漢文で書いて貰つた。勿論これは貫之が指導したに相違ないが、長谷雄の子たる淑望は、立派に書き了つた。これを根據として、貫之は、殆んど逐字的に譯し出した。しかし、和漢勢ひを一にしないから、處によつては添加し、或は省畧してゐる。こゝに、飜譯の妙を見るとともに、創意の新しさも知られて、興趣が極めて深いのである、といふ說もある。

上揭の諸說は、何れが正しいであらうか。現存の古寫本に就いて見ると前述の如く種々であるが、袋草子に「陽明門院御本貫之自筆……「於故公信朝臣許燒失之、此本無序也。」といふのもあるが、他は「小野皇太后宮御本貫之自筆。假名序也とあり、又「花園左府御本貫之妹自筆假名序是閑院贈太政大臣轉來云々。」とあつて、皆和文序を有してゐる。後に、藤原定家の證本とした貞應年間校訂の本には兩序を載せてゐるが、嘉祥年間の本には和文序のみを載せてある。これを以て見れば、大體に於て、和文序は作者の貫之その人が、後世に尊重せられた結果として載せたのみではなくして、その原本に近いと思はれる本には卷の始めに揭げてあるのである。榮花物語は後の物ではあるが、後撰集の事を書いて、「古今には、貫之序いとをかしう作りて仕う奉れり。後撰集にも、さやうにやと思召しけれど、今はさやうの事に堪へたる人なく云々。」と記してある。これも云傳への儘に書いたのであらうから、天曆當時の本には既に和文序は初めに揭げられてゐたに相違ない。しかすれば、その原稿を淑望が作つたか、或は後に漢譯したかは詳かにし難いが、貫之は、撰述の了ると共に、和文序を以て卷頭を飾り、この本が一たび出て、後人は古を思ひ、延喜の今を戀ふるに相違ないとの氣焔を上げたのであらう。しかし、眞の斷案は、原本に最も近い古

寫本が現はれるによつて、下されるべきで、それまでは問題は保留せらるゝが正當である。

和漢兩序の意を前述の如く解すると、古今集は、延喜五年四月十八日選進となるのであるが、その原本は今日に殘存しない。皇室には勿論あり、それを傳寫したものが、民間にも多數存在すべきであるが、その事がない。古今集は、甚しく尊重せられて、枕草子にもあるが如く、高貴の人は、兒女に讀誦せしめて、教科書の樣にもしてゐたのであるから、立派な寫本のあつたのは事實であつた。乃ち貫之、道風の自筆といふものもあつた。しかるに、これらは一も殘存しないのは遺憾の極みである。世に貫之の筆として高野切、道風のとして本阿彌切、佐理のとして筋切、通切、紫式部のとして久海切、又、公任、行成、少し下つては俊頼のとしての古今集切があるが、皆筆者は信憑するに足る證を有しない。たゞ皆、藤原氏全盛以後、平家覆滅頃までの寫本の斷片とのみ見るべきである。但しこれらの中で、元永三年八月二十四日に書寫したといふ奧書のある一本は、少しの缺字はあるが、缺行などはなく、首尾完全して渾然たる美玉の有樣で、三井男爵家に現存してゐる。今日この集の古寫本で最も古く、且最も完全なものはこれを措いて他にない。

傳說によると、榮花物語に、御裳著の卷に、禎子内親王の御事を書いて、「二日の夜さりかへらせたまへば、一品宮(禎子)の御贈物に、貫之が手づから書きたる古今二十卷、御子左(兼明親王)の書きたまへる後撰二十卷、道風が書きたる萬葉集などをぞ奉らせたまひける。世にめでたきものどもなり。圓融院より一條院にわたりける物どもなるべし。世にたぐひあるべき物にもあらずなむ。」とある。また袋草子に擧げた、陽明門院御本は、「是延喜御本相傳也。後、顯綱朝臣申賜、其後轉々して」、公信朝臣の許に燒失した。又、小野皇太后宮御本は「於宮燒失、

した。又、花園左府の御本もあつたが行方不明である。これらは、貫之の自筆、及び貫之妹自筆と傳へられるものであつた。しかし、大抵燒失して、現存しないのは、極めて遺憾である。たゞこれらの中で、小野皇太后宮の御本といふのを通宗が燒失前に寫し、更にまた藤原清輔が、これを傳寫したといふものが、前田侯爵家にある。これは、極めて珍とすべきものである。しかし、この清輔は、承安二年、白河倚裔會の時六十九であつたから、それより遡ること五十二年前の元永三年には、まだ二十に達してゐない。この年に書寫せられた元永本は、その傳來は詳かならぬが、清輔のそれよりも、層一層、古いものであるから、これは甚しく尊敬を價すべきものである。而も、これを傳佐理筆、傳行成筆、又俊頼筆のそれらと對校して見ると、大體同樣で、後の本にない歌も含まれてゐるのであるから、延喜當初の面目は、多くの誤りなく傳へられてゐることと思ふ。吾人は、この書を以て、今日滿足するより仕方がないのである。

從來、世間に古今集として流布してゐるものは、前述の諸種の系統を受けたものではあるが、處々相違の點のあるものである。それが大體二種ある。その一は貞應本といはれて、(藤原定家が貞應二年七月に校定したのをいひ、その二は嘉祿本といはれて、同じく定家が、嘉祿二年四月に校定したのである。この前者を二條家が傳へ、後者を冷泉家が傳へた。兩家の中、二條家の一流がことに榮えたので、貞應本は盛んに流布して、嘉祿本を壓したのみならず、その以前の諸本をも壓してしまつた。遂に貫之筆といふものがあつても、定家が一度定めて將來の證本としたものを捨てて、それを採ることは出來ぬと云つた古人もあり、またそれと同樣の意を述べる今人もあり、貞應本は古今集、古今集は貞應本と云ふ觀念が現に猶動かずにゐる。

定家は古今集の校定はしたが、必ずしもそれを完全の物として、何人をもこれに從はしめようとしたのではなかつた。貞應、嘉祿兩本の奥書に、「但如此用捨、只可隨其路之所好、不可存自他之差別、志同者可隨之。」と記してゐる。であるから、必ずそれに據らなければとて、定家の意思に背くのでもない。これより以前の古寫本を用ゐても差支ないのである。然るに、專らこれに據つて、今日に到つてゐるのは、あまりに偏してゐる。

上述の貞應本も、嘉祿本も、その以前の古寫本と甚しい差異はないが、小異は數多ある。全體古今集そのものが歌の本であるから、歌が主で、他は從である。從つて作者名、端書の書方でも、意が通じればそれで足れりとした有樣である。元永本を見ると、「木貫之」ともあり、「河内躬恆」ともあり、「典侍因香」ともある。これは極端で、他の筋切傳行成本等では、これがない、これは貞應、嘉祿兩本も一致して、かゝる事がなく、其の他もよく整頓してゐる。併し作者と歌との關係を見ると、高野切で、「吹くからに」の歌が、文屋朝康の作であり、他は皆康秀の作であつて、二つに分れてゐるのを、貞應、嘉祿兩本共に、康秀に隨つておくが如き差異がある。この作者の差異は、ことに元永本に見える。これによれば作者部類の如きは、餘程改めねばならぬ結果を惹起す。

端書も諸本において、差異がある。簡單なものは、大體一致してゐるが、すこし長いものになると、よほどちがふ。例へば、「人はいさこゝろもしらず」の歌の端書は、元永本では、「初瀨に詣づるごとに、例宿りける人の家に、久しうやどらで、程經て罷りけるに、かくさだかになむやどりはある、と主いひ出したれば、そこなる梅を折りて。」とある。筋切には、「長谷寺に詣づる毎に、例宿る人の家に久しう宿らで、程經て罷りたるに、かくさだかになむ宿はある、と主いひ出したれば、そこなる梅を折りて。」とある。然るに、貞應、嘉祿兩本では、「初瀨に

詣づる毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程經て後に到れりければ、彼の家の主、かくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければ、そこに立てりける梅の花をりてよめる。」とある。前二者は字句の不足したところがあるが、後者はよほど完備してゐる。恐らく、後者は、前二者の宜しきを取り、足らざるを補うて、作り上げたのであらう。その作つた人は、定家以前の何人であらうか。或は定家その人であらうか。

以上の訂正は巧みではあるが、時には反對に、意義が徹底しなくなつたと思はれる物もある。例へば、雜歌の「わびぬれば身を浮草の」の歌の端書が、元永本では、「文屋康秀、小町を年來いひ侍りけれど、聞かずなりにけるを、漸くわるくなりにける時に、康秀三河の掾になりて、縣見にはえいでたたじやといひたりける返事に。」とある。貞應、嘉祿兩本には、たゞ「文屋康秀が三河の掾になりて、縣見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる。」とのみある。前者は周匝で、小町の思ひ迷つた様がよく現はれてゐるが、後者は單純であるので、前者の意が餘程なくなつてゐる。又同じ部の、「憂世には門させりともみえなくに」の歌の端書が、元永本では、「官解けて侍りける時、人の國へ罷りなむといでたちけるを、親の切に留め侍りければとゞまりてよめる。」とある。貞應、嘉祿兩本ではたゞ「官の解けて侍りける時よめる。」とのみある。前者で、「出る」は、家を出る事たることが明らかであるが、後者では家を出るとも、世に出るとも、いづれにも取れる。かやうな事は外にもある。從つて訂正は必ずしも眞意味の訂正となつてゐない。

以上は、作者や、端書に就いて云つたのであるが、更に、歌そのものに就いて見ると、貞應、嘉祿兩本にある墨滅歌は、定家が、諸本に書いて墨で消してあつたのをその儘に載せたのであるが、元永本で見ると、皆また本

文中にあるのみならず、この歌以外に、貞應、嘉祿兩本に存在しない歌が十四首も書かれてある。それを擧げて見ると、

春　行く水に風の吹き入るゝ櫻花消えず流るゝ雪かとぞ見る

月影も花も一つに見ゆる夜は大空をさへ折らむとぞする

秋　をみなへしなき名やたちし白露をぬれ衣にのみきてわたるらむ

旅　しながどり猪名野をゆけば有馬山夕霧たちぬ明けぬこの夜は

戀　おちたぎつ川瀨に靡くうたかたの思はざらめやこひしきものを

須磨のあまの汐燒衣馴れぬればうとくのみこそ思ふべらなれ

ことでしは誰ならなくに小山田の苗代水の中よどみする

とこしへに君に逢へむやいそなどりおきの玉藻のよる時々に

雜　柏木の森のわたりをうち過ぎて三笠の山にわれは來にけり

おきつ波うちよする藻にいほりしてゆくへさだめぬわれからぞとは

增鏡底なる影にむかひゐて見る時にこそ知らぬ翁にあふこゝちすれ

わが乘りしことをうしとや消えにけむ草葉にかゝる露の命を

いかにしてこれを隱さむ紅のやしほの衣まくりでにして

てる月を弓張としも云ふことは山の端さして入ればなりけり

はそれである。これらの中には、「しながどり」の歌の如きは、「しながどり猪名野をくれば有馬山夕霧たちぬ宿はなくして」と、「近江より朝たちくればうねの野に鶴ぞなくなるあけぬこの夜は」と二つの歌を一つにした樣で、意義の徹底しないやうなのがあるから、おのづから省畧せられたのもあらうが、さうでないのもあるに拘らず、何時の間にか抹殺せられたのは、どういふものであらうか、訝しい限りである。

更に、歌中の語句の、元永本と、貞應、嘉祿兩本と相違したところは甚だ多い。勿論後者の方に取るべきもあるが、前者の方にも據るべきが多い。前者には、「徒らに過ぐる月日は多かれど花みてくらす春ぞすくなき」とあるのが、後者には、第三句、「おもほえで」とある。後者の方も含蓄があるが、當時では「多」「少」の對照に興味を有する事、前者の如くあつたのでもあらう。又前者には「朝ぼらけ有明の月とみるまでによしのの山にふれる白雪」とあるその第四句が、後者では、「よしのの里」となつてゐる。これも山に降る方が自然かと思はれるが、どうであらうか。前者には、「わが君は千代にましませさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」とあるが、後者には、第二句が、「千代に八千代に」に變つてゐる。後者にも餘韻があるが、前者には整頓があると思ふ。

猶云ふべきところが多いが、大體古今集が延喜に作られたのであるから、その當時に近いものに據れば、その眞相とは行かなくとも、それに近似したものが窺へる譯である。故に研究者は、古寫本を重んぜねばならぬ。しかし整頓してゐて、缺陷の特に指示すべきもののないのは、後の校訂本、乃ち貞應、嘉祿二本であるから、それも輕んずべきではない。

以上は、證本に就いて云爲したのであるが、翻つてこの集の歌の特質に就いて、簡短に述べなければならぬ。

平安朝時代の人々は感情を主とした生活をした。この事は、この時代のみではない。上代から奈良朝に續いて皆さうであつた。たゞこの時代は、文獻の徵すべきものが多々あるところから、この傾向が甚しく目に觸れるのである。しかし、感情の動きは過去の時代よりも極めて微妙で、細緻で、今まで想到しなかつたところにまで及んでゐる。それは、漢文學や、佛教や、その他の外國文化の影響が甚しかつた爲であるが、また時代の進步に伴つた、おのづからの發達もある。この感情の昂まるに連れて、觀察の眼も鋭く光つた。纖細の事でも見逃さぬやうになつた。「霞を憐み、露を悲しみ」、「年毎に鏡のかげに見ゆる雪と泡とを歎き」、「秋萩の下葉を眺め、曉の鴫の羽搔を數へ」る等は、それの一端である。

自然の美に當時の人は甚しく愛著した。花の咲くを待ち、散るを惜しみ、月の遲いのを佗び、入るのを歎く。これは何時もある事であるが、當時の如く、昔も今も甚しくはない。從つて人々は月花の盛りを樂しむ餘裕はない。咲くは散るの前提で、滿つるは缺くるの準備である。遂に花には、「絕えて櫻のなかりせば」と歌はなければならぬ。月には、「ちゞに物こそ悲しけれ」と歎ぜざるを得ない。從つて、風を恨み、雲を憎み、世をはかなみ、身を佗びる心のみが先に立つ。人に就いても同樣である。戀の成らむことを祈る。早く逢はむことを願ふ。しかし、成つた樂しみ、逢つた喜びは旣に述べない。成れば破れるを愁へ、逢へば別れるを悲しむ。「逢ふといへばことぞとも明けぬる」夜は恨めしい。「鷄より前に泣き始め」ねばならぬ。かくして焦燥、破綻、悔恨、追懷等が主材となるに及んだ。この故に、喜びは少なく、悲しみは多い。「嬉しさを何につゝまむ」といつたのは、僅かに一つである。「ふりにし里に花も咲」いた類は、數ふるに足りない。「咲きてとくちる物思ひ」のない、「光なき谷」に

居るのを安易に思ふ結果は、おのづから生じる。この爲に、露骨でなく、餘情があり、膚淺でなく含蓄があり、ゆかしい匂ひ、尾を曳く韻は、また自ら生じてゐる。

かく消極的であるからして、歌は、すべて自然の影を樂しみ、情、特に戀の匂ひを喜ぶ態度を持してゐる。「色よりも香こそあはれと思ほゆれ」は、たゞに梅そのもののみではない。當時の全體に及んでゐる。

以上の感情を、當時の人は、率直に現はしたものも少なくないが、理智の分子を甚しくそれに混じて、屈曲的にしたものが殊に多い。「咲ける咲かざる花の見」えるのを、「春の色のいたりいたらぬ里は」ないのに、何故かと難詰し、「山の木の葉の千ぐさ」なのを秋の露が、「色々ごとに置く」からだと解釋し、「年」は「速し」であるが故に、「今年はいたく老い」たといひ、露のおほい山邊にすむから、「衣の袖はひる時もな」いといふ。何等か理智の影がないものは殆んどない。この影のあるが故に、歌に潤ひが乏しく、匂ひがなくなり、前代のそれらと比して甚しく下る感じがあるのである。

この理智の影は、語にまで及んでゐる。當時の歌に殊に多いのは懸詞である。上代は譬喩に富んでゐる。譬喩の時代とも云はれる。奈良朝は枕詞が最も多い。枕詞の時代とも云はれる。當時は懸詞が全然他を凌いでゐる。懸詞の時代と云ふべきである。同音異義を利用して、一語にして二語を兼ねしめるこの修飾は、すでに有つたのではあるが、大體枕詞の本義と連關する場合にのみ用ゐられてゐた。これを單獨に文中に使用し、且その度の多きに及んだのは、この時代である。一語の形の二語兼有は、氣の利いた轉換の法で、極めて面白く、對者の放笑とまでは行かなくとも、叡智の閃きに微笑、時には輕快の驚きをも感ぜしめたのに相違ない。然るにこの時代

になると、それらもあるが、進んで、斷片的の多くの思想を短い形式の間に表はれしめる唯一の方法として採用したと思はれる。人を祝ふにも、「萬世を待つにぞ君を祝ひつる」と云つて、「待つ」に「松」、「つる」に「鶴」をかけた如き、「世をうみべたにみるめすくなし」と云つて、「海邊」に「憂」、「見る目」に「海松海布」をかけた如き、二つの思想を、順を趁うて率直に云はず、同樣の結果を齎せようとしつゝ、同時に云はうとしたのであるが、甚しく理智的である。從つて、懸詞には、轉換の妙から催さるべき興味は伴はず、狹い範圍では、かくの如く云はねば、他に方法がないといふ修辭的教訓が生じた。「物名」の一體もこれで出來た。これが後世に傳はつて、懸詞の本質的意義はなくなつてしまつた。しかし、これを烈しく用ゐると、滑稽の意義を起すといふ觀念は、轉換で笑ひを催さしめたといふ觀念の延長として猶存在した。誹諧の一部の立てられたのは、內容上失笑にたへぬものもあるによるが、多くはそれに基いてゐる。「鶯の去年のやどりのふるすとや」といひ、「胸走り火に心焼けをり」といふの類、擧げ來れば甚だ多い。

懸詞の構成の因となつてゐる二つの思想は、おのづから一が主で、他は從の關係を有つてゐる。その主が表に立ち、從が裏に居る。その從なものが短くあれば、懸詞は一處ですむが、比較的長い場合には、一處のみでは表はれ盡さず、他處に到つて始めて完くなる。この一處、時に二處は、懸詞によつて表はし得るも、他處に及びえぬ事もある。この餘されたものが、いはゆる緣語となつて出て來るのである。「山川の音にのみ聞くもゝしきをみをはやながら見るよしもがな」の、物の「音」と、「噂」の「音」と、「水脈早」と自分の「身を早」と懸詞をなしてゐる。この「音」及び「水脈早」は山川に限るが故に、こゝに懸詞によらずして、その語を點出した。而して、他と不可分

の關係を保たしめてゐる。かくして、殆んど從來表はれなかつた緣語が出て來て、懸詞と連關して作用することとなつた。かくの如きは、理智の影の甚だ濃いものではあるまいか。當時の歌の多くは、感情の體を包むに、理智の衣を以てしたものと云つて、可なりであらう。

しかし時と共に洗煉されて、優美となり明快となつた感情は、從來の聲調によつて歌ひ出され難くなつた。必ずそれを適合し、一致した形式を取らねばならなくなつた。前代で、「つき草に衣はすらむ朝露にぬれて後にはうつろひぬとも」と云つた第四五句を、「ぬれての後は、うつろひぬとも。」と云つて、第四句の「三四」の重いのを、「四三」の輕いのにせねば十分でなくなつた。すべて輕快になり、流滑宛轉になつて行つた。これとともに、全體の聲調も同樣になつたのは云ふまでもない。抑、上代から、先づ五音が來り、次に七音が來り、それで一連をなして、次の五音七音の一連に及んで行く。かく五七が續々一連づゝとなつて、最後に七音の獨立したのが來て終結するのが、普通の形であつた。この體裁は、奈良朝に於ても繼承せられたが、時に短歌に於て、第三句で中斷せられた體があらはれた。乃ち五七の一連が變じて、七五の一連となつたのが見えた。しかしこれは少數であつたが、この時代に於ては、この形勢が大いに進んで、七五の一連が基調となつて、前長後短が、全體の聲調を形成するに到つた。故に、「あれにけりあはれいくよの宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ」の如き、第一句又第三句で切斷せられた形も出來た。また七五、七五と調べ下して、「おきつなみ、あれのみまさる宮の中は。」の如き長歌も表はれた。かくの如きは、前代では思ひ及ばなかつたところであらう。

この推移は、古今集中でも見える。集中には、萬葉集に入らぬ歌を取ると云ひつゝ、それに反して重複したも

のもあり、また眞にそれに入らぬ古いものもあり、また平安朝初期乃ち延喜以前の什と考へられるものもある。讀人不知といふものは、多くこれに屬するのである。その中で、おのづから新體古體の別が見える。乃ち、「立田川紅葉流る神なびのみむろの山に時雨降るらし」は古體であつて、「み山よりおちくる水の色みてぞ秋はかぎりと思ひしりぬる」は今體である。意から云へば同樣であつても、著眼に於て後者がことに細かになつてをり、形から云へば前者は五七、後者は七五を含んでゐて、前の沈重に對して後者は甚だ輕快である。かくの如きものは隨處に發見せられる。

以上の事は、同一の歌のうへにも見える。古今集の選者は、資料を得るとともに、それが古體であれば、當時の風體に合致すべく添削をした。「夏の夜はまだよひながらあけにけり雲のいづこに月かくるらむ」の第三句以下を、「あけぬるを雲のいづこに月かくるらむ」と變へ、「おほ空に蕋なき花ぞちりまがふ雪のあなたは春にやあるらむ。」の第一二三句を、「冬ながら空の花のちりくるは」と改めて、全體を輕妙であり、流麗であり、宛轉滑脱たるべくした。その努力は注意すべきであらう。從つてこの聲調は、古今集全體を被つてゐる。これが後世の動かすべからざる模範となつたので、歌はおのづから、千篇一律となつて殆んど今日まで及んでゐる。

後撰和歌集

堯の子丹朱は不肖であつたが、延喜の聖主の御子の天曆の御門は、御心ばへ雄々しく、氣高く、賢く、御才も限りなく、萬に情深く、父の御門さながらでおはしました。數多の女御、御息所の、御志のすぐれたのも、さな

らぬのも、一様に御もてなしになつた。それで人々も情を交して居られたので、宮の中は極めて平和であつた。その人々の中で廣幡の御息所は、ことに、心ばせある方であつた。ある時御門から「逢坂もはては行き來の關もゐず尋ねてとひて來なばかへさじ」との御歌を人々に賜はつたが、思ひ惑ふのが多かつた。御息所一人は、直に薫物を奉られた。これは、「あはせたきものすこし」といふ語を沓冠にして、御歌に入れてあつたからであつた。この御息所はかく聰明でゐさせられた。

この御息所は、萬葉集を讀まうとせられたが、漢字の音訓を借りて書いた、いはゆる萬葉假名が極めて讀みにくい、前代の寶典も捨てられねばならなかつた。そこで、御門にこれに假名をつけて誰にも讀めるやうにしたいと申し上げられた。御門は、これによつて源順等の五人を御召しになつて、萬葉集の讀方を研究せしめられた。これから萬葉集訓點の大事業が始まつたと云ひ傳へられてゐる。

御門は極めて和歌を御好みであり、且到り深うおはしました。當時の名人の小野宮大臣實賴と贈答をも遊ばされた。であるから女御の御勸めの如何に拘らず、萬葉集訓點の事業は御企てになつたであらう。この御時の天曆五年十月に初めて和歌所を昭陽舍乃ち梨壺に置かせられた。その別當として藏人少將藤原伊尹を任ぜられた。その任用の文は當時の才人源順が起草したが、その中の「雄劍在腰、拔則秋霜三尺、雌黃自口、吟亦寒玉一聲。」は名句として、朗詠集に載せられて、今に傳はつてゐる。

猶御門は無用人の、この和歌所に入るのを禁ぜられた。その文も順が作つた。この役所へ出た人は、讚岐大掾大中臣能宣、河內掾淸原元輔、學生源順、近江少掾紀時文、御書所預坂上望城いはゆる梨壺の五人であつた。而

して萬葉集の訓點に從事したのであつたが、難解の個處が多いので讀誦の歩みはしば〳〵留つた。順が「左右手」に、訓を附し困じて、石山の觀音に參籠して祈つたが、その意を得ず、卻つて歸途につく朝、早發の旅人から、偶然に「まで」の語を聞いて、初めて讀法を悟つたといふが如き、その眞僞はおくが、かかる苦心の一再ならずあつたといふことは想像するに難くない。しかし、この五人の焦慮が積り積つていはゆる古點が出來上つた。

萬葉集訓點の次に、御門は、別に五人をして古今集に入らない古い歌、また新しい歌を選び整へしめられた。これが積つて二十卷になつた事古今集の通りである。これを後撰集となづけられた。古今集に後れ選ぶ意であるのは云ふまでもない。

古今集が延喜に出て、從來の詩集勅撰の慣例を破つて、和歌勅撰の新例を拓いた。これに次いだ此の集は、それを一意專心摸倣した。從つて、その部立も大體古今集と同一であるが、古今集の春秋二册と違つて三册あり、戀五册は玆に一册を加へ、雜の二册は四册となつてゐる。この以外に古今集に物名、雜體、短(長)歌、誹諧、旋頭歌、大歌所の別があつたが、この時にはなくなつてゐる。殊に當時は、短歌以外の體が全くなくなり、長歌旋頭歌は製作せられなかつた、或は殘つてゐなかつた事を示してゐる。

この集は、何年に著手せられたか明らかにしえない。天曆五年十月は和歌所を置かれた年であつて、著手の年でない。選進の年も何時であるか、記載がない。この兩者ことに後者の記載のないのは、何故であらうか。集の體裁から見て、この事はなかつたのではなからうかといふ議論も生ずべきである。この兩者、ことに後者の記載のないのは、何故であらうか。或は選進その事があるに及ばずして止んだのではなからうか。

従來後撰集に對する議論は少なからずある。袋草子に「此集未定にて止之云云仍本無四度計。」とあるのが初めであつて、以後それの布衍や總合が相次いでゐる。それは主として内容の不完全、組織の不十分に端を發してゐる。乃ちこの集にある所の歌は、四季戀雜の區別がありながら、相雜樣して載せられてあること、詠者の名の書方も整はず或は誤り記したのも見える。又端書も云ひ足らず、歌の意を解するに苦しむものもある。更に歌そのものにも、誤寫もあらうが、幼稚なもの拙劣なものもある。すべてに於て、古今集に倣つたものでありながら、甚しく蕪雜であるから、未定稿に屬するものであらうと云ふのである。

前者と少しく變つて、この内容の不完全組織の不十分は、寧選者の技倆の古今集當時の選者よりも劣つたのに歸するとするのもある。八雲御抄の「梨壺の五人めでたしといへども、彼の古今の四人に及ぶべからず。能宣、元輔は重代の上、尤も可然の歌人なり。順又稽古の者也。望城、時文は父が子といふ許りなり。」がそれである。

實にこの集は形式的に不完全である。內容の交雜して戀、雜が四季に入つた如きは、今から考へれば滑稽であるが、古今集にもすでにある。讀者の名前の書方の整はぬのも、古今集の貞應、嘉祿二本には殆んどないが、その以前の寫本にはある。端書も同樣で、定家校訂以前の古書には明らかに不整頓の點がある。袋草子當時より以前元永頃書寫の古今集は、必ずしも整頓完備したとは云へない。況んや、その後流布の古今集と比較しては、不十分の事が少なからずある。であるから、今の古今集を本として、後撰集をそれに倣つたもの、しかも全く倣ひ得なかつたものとは云ひ得られないであらう。

後撰集は僅かに古今集に倣つたのであるが、その手本がすでに不完全不十分であるのをその儘に承けたのみな

らず、更にそれより甚しい傾のあるのは否み難い。それは選者の技倆等の到らなかつた爲か、他の事情で整頓に到らなかつたか眞に明らかにし難いが、序文の現存してゐないのは、後者の方に理由のあることを示してゐるではなからうか。

この集には序文がない。古今集を模範とし、一意それに據らむとしつゝ、しかも、その最前頭に立つた序文のあるのに倣はなかつたのはどう云ふ譯であらうか。榮花物語にはそれを解して「古今には、貫之序いとをかしうつくりてつかうまつれり。後撰集にも、さやうにやとおぼしめしけれど、かれは、その時の貫之、このかたの上手にて、古をひき、今を思ひ、行末をかねて、おもしろくつくりたるに、今はさやうの事に堪へたる人なくて、くちをしく思召しけり。」と云つてある。乃ち、貫之ほどの才學のある人がないから、御門は遺憾ながら、御書かせになり得なかつたといふのであつて、無いのを、選者の不才に歸してゐる。併し北村季吟は「此の時にも、源順などありて、野宮の歌合の判詞、當座にいみじく書きたりし事などあれど、猶貫之には及ぶまじく思召しけるにや。又、此の集未定にて、これを止む、と袋草子にも侍れば、序を書かしめ給ふまでにも及ばざるにや。計り難き事なるべし。」と評つて居る。實に順の如き才人は、序を書くのは容易であつたであらう。それが無いのは、御門の御思召がなかつたのかも知れない。しかし、模範とした書にあつて、これに無いのを考へると、或は季吟の後の説の如く、この集が未定稿であるので、從つて完成の後附すべき序も、書かしめられなかつたのではなからうか。

更に、後撰集の歌に就いて考へて見ると、古今集と違つて、この集は、選者の歌を一首も含んでゐない。これ

は何故であらうか。甚しい自卑心から出でた事であらうか。或は他の因があるのであらうか。古今に範を取りながら、何故に、これのみは背いたのであらう。傳によると、古今集初度の進奏の本には、貫之の歌は一も加はつてゐなかつた。それを勅によつて後に加へたと、通宗の古今集の書入にあるといふ。貫之のがなければ、勿論、他の選者のもなかつたに相違ない。勅があつて後加へて、今の如きに到つたのだといふ。序文に、「萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。」とあるから、この事は信じ難いとも云はれるが、序文は、精選の後に書いたと考へれば、この疑問は忽ちに氷解せられる。選者らが、かく自分の歌を加へなかつたのは、謙遜の意から出た事であらう。それによつて勅を受けたのであるから、こゝにおのづから二段の順序があつて、古今集は出來上つたのである。これを範としたとすると、後撰の此の度は選者は、又この轍を履んで、自己の詠は加へなかつたのであらう。しかし、稿成らず、奉るに及ばなかつたので、選者の歌を加へよとの勅も蒙るにいたらなかつたのであらう。而してその結果として、永久に選者の詠は、集中に一も見るところがないのではなからうか。しか考へて來ると、この一事も、また後撰集が未定稿であるとの證とすべきに似てゐる。

後撰集は、かくの如く未定稿であるために、不完のことが多い。端書の如きは、主客錯雜して、意の通らぬのまでである。これを宣長は「後撰集詞の束緒」によつて、丁寧に訂正してゐる。しかし、端書の不完全なのは、すでに古寫本の古今集でも同様であつて、曖昧の個處も出來てゐるから特に此の集に限つたやうにいふに及ばぬのである。たゞ、その程度の甚しいのは、注意すべきであらう。

端書の不完全なのは、また所載の歌の不完全なのに連なる。難解の歌の少なくないのは、その語句の、「さくさ

めのとじ」、「はちすばのはひ」等の、こゝに初めて見えるものがあるにもよるが、それよりも、全體の組織構成に、十分ならぬ個處が存するためが多い。「夏の夜の月はほどなくあけぬれば朝の間をぞかこちよせつる」「よひながら書にもあらなむ夏なればまちくらすまのほどなかるべく」等前者は强ひても解せられるが、後者は遂に、その意を得がたい。また、歌と歌との順序排列に於て、不備の點があり、贈歌と答歌と、意氣相合せぬのも見える。前者は、多少の語句の補足によつて解しえられるが、後者は、他の歌集、或は家集等から、不足した歌を發見して補充することによつてのみ意を知ることが出來る。これは甚しく煩雜な事である。宇多法皇と伊勢との贈答の如きはこれである。これも、未定稿たる一證であらうか。

歌の作者題目等に就いても、疑義がある。後撰集選述のため、當時資料として徵した家集は、少なからずあつたであらう。それの資料の歌の作者は、變換せられずに、集中に記載せらるべきである。然るに、それが他人のとなり、また讀人不知ともなつてゐるところもある。又、古今集を範とした位であるから、その中の歌は、選者の何人も知悉した事であらう。それを、些しの變換も施さず、さながら登載せられたのもある。更に、資料の歌の製作の因由は重んぜらるべきであらう。それも、變換せられたらしいのもある。煩を厭うて、この例のみを一つ擧げると、「神さびてふりにし(ぬる)里にすむ人は都に匂ふ花をだに見ず」は、大江千里の句題和歌には「不見洛陽華」を譯したものとなつてゐる。然るに、後撰集では、「宮仕し侍りけるもの、石の上といふところに住みて、京の友だちのもとに遣はしける。」となつてゐる。句題和歌は、その序表にあるが如く、寛平六年四月二十五日に上つたものであらう。さうすると、天暦より遙か以前に出來てゐる。これを詠者の知られぬものとし、因由

をも異にせしめたのは、後の誤傳によつたのであらうか。或は選者が故意に變換したのであらうか。これは明らかにし難いが、恐らくは前者であらう。これらの不穿鑿と思はれるのも、亦この集の未定稿たることを證する一例ではなからうか。

後撰集の選進の時日は、今日、到底審にし難いが、古今集選進の延喜五年から、四十餘年後に成つたのは云ふまでもない。この間に幾何の傑作が出來たであらうか。古今集の歌風の傳播は盛んであつて、新意新調は、天下に滿されたであらう。しかし、貫之、躬恒の上にたつ程の歌人は、現はれなかつた。元輔や、順や、能宣や、父の後を襲つたのみと云はれる望城、時文を省いても、巧慧さは見えるが、延喜の盛を承くべき力量はない。況んや、超ゆべきではない。この時に、勅撰の大命を奉じて、奮勵努力しても、古今集を凌ぐものが出來はしない。故に、選者は、古今集に後れて撰び、その殘屑を拾ふの意で、事務に執掌して、大體編輯し、遂にそれに、その意を顯はすべき「後撰」の二字を附したのであらう。古今集の、「大空の月を見るが如く」一世をして仰望せしめる等の大理想は、更に存せなかつたに相違ない。

以上の故に、後撰集には、意外に、古體の什が多い。集中、前代の伊勢、貫之のが最も多く、兼輔、躬恒のがこれに次いで多く、當時では只實頼、師輔のがやゝ多いのみである。かく全體が殆んど、前代の集の觀をも呈してゐるのであるから、延喜當時をも、これによつて、再び廻想する事が出來る。更に又、これらの間にあつて、しかも多いのは「讀人不知」の歌である。これらの中のあるものは、古今集中の同じ「讀人不知」のと、相對すべき單純さと、率直さを有つて、古朴の趣を強く出してゐる。これは選者が、延喜以前に出て、古今集に採錄せられ

なかつたものを發見して、多く加へた爲であらう。故に吾人は、これと古今集のとあはせて、平安朝初期の趨勢にも想到することが出來る。しかしこれとともに、天暦當時の空氣は、極めて稀薄にのみ現はされるのを知るであらう。

以上の故に、全體を通じて、歌の趣致は古今集と多く異ならない。古今集の主情的傾向、それに纒繞してゐる理智的傾向も、殆んど同一である。併し、些か異なつてゐるのは、懸詞と緣語との增加である。懸詞は多いが一倍を多く超えない。緣語は出づることいよ／＼夥しく、才藻の現はれは否むことは出來ないが、煩縟の感はますます甚しい。而して、その數は、實に古今集にあるものの二倍にも上つてゐる。この情勢は、多少の變化を以て、次々に及ぶのである。

袋草紙に、後撰集の證本に就いて、「朱雀院塗籠本、又靑表紙、是範永本也。」と云つてある。これらは、皆いつしか散佚したらしい。藤原定家が、「貞應二年九月二日爲後代之證本」といふ奧書した本、又、「天福二年三月二日重以家本終書功畢」と、同じく奧書した本、又藤原行成自筆の本と校合して、「天福二年四月六日校之」といふ本があつた。北村季吟が、これらによつて印行した八代集抄本が、世に流布した。吾人は、これによつて後撰集に接したのである。而して、數次反覆して、以上の言をしたのであるが、當を得てゐるか居ないか、あへて識者の教へを待つのである。

拾遺和歌集

古今和歌集が延喜中に出來てから、四十餘年過ぎて、天暦の間に後撰和歌集が現はれ、また五十餘年を經て、寛弘附近に拾遺和歌集が成つた。四五十年を隔てて勅撰歌集が編せられるのは、偶然ではあるが、息みなく變轉して、極まるところをしらぬ時勢の流れが、四五十年を經ると、暫く停屯の狀をなして、そこに一時期が劃せられるからではあるまいか。抑勅撰歌集は、上に好文の君が出でまし、下に才藻ある臣下があらはれると、「君も臣も身をあはせ」て、こゝに、「今もみそなはし、後の世にも傳はれ」とて出來るものである。古今集がさうであつた。後撰集もまたさうであつた。拾遺集もさうであるべきであらう。併し拾遺集のみは、君のみの選述で、臣下は殆んど加はらず。且それと不離の關係ある拾遺抄は、君臣の意志の合致せず、卻つて、忤離したところから選述の事が生じたといふ傳說がある。集、抄合はせ說くために云ふと、それは、君の花山院、臣の藤原公任に關してゐる。

藤原道長が一代の英資を以て、反對者を倒し、政權を確實に掌握して、「望月のかけたる事のない」榮華を極めてゐた時、大堰川に詩歌管絃の舟を浮べた。藤原賴忠の子公任は何事にも才幹があつた。道長の父兼家が嘗て、自分の子には、公任の影をもふめないと歎息したが、道長一人は、影よりもその頭をふまうと傲語した。この言にたがはず、道長は遂に公任の上に立つた。公任はその眷顧に逢ふことを榮譽とするに到つた。この日、道長は公任を顧みて、「卿の多才何れの舟を選び給ふか。」と問うた。公任は、ために大いに面目を施したが、遂に歌の舟に乘つて、「朝まだき嵐の山の寒ければちる紅葉を著ぬ人ぞなき」と歌つた。當時の人皆秀逸として、賞讃した。公任また榮譽としたが、「詩の舟に乘つて、かほどの什を作つたならば。」とも後悔した。しかし、この歌は喧傳せ

られて、花山院の御耳にも達してゐた。院は拾遺集二十卷を御選びになつた。この時、この歌を選入しようとして、その語句の散る紅葉は穩當でない。「寒ければ」に對しては「紅葉の錦」でなくてはならぬと思召して、改作して編入せられた。得意の公任は、これに承伏しなかつた。歌のあしくば除かれるのが例である。改删せられるには及ばないとして、遂に集から拾遺集を抄出して拾遺抄十卷を編し、自己の歌を、原の儘で入れてしまつた。この故に、一方に拾遺集があり、他方に拾遺抄があつた。世人は後者を尊んで、前者の二十卷を顧みず、後者の十卷を模範として、次の後拾遺集、更にその次の金葉集、詞華集、皆十卷に編述した。恰も、勅撰和歌集は、十卷でなければならぬ有樣となつた。

かくの如くして、拾遺集は花山院の御選、拾遺抄は公任の選と云はれたのであるが、以上はたゞの傳説で、根據は薄弱であるが、八雲御抄、三代集開之事、井蛙抄、その他に於ても、院御選の事が見えてゐる。三代集開之事には、公任の拾遺抄を選んだのは、院御歿後の事で、院の知召さぬことであるとも書いてある。

しかし、これと違つて、拾遺集も拾遺抄も、共に院の御選で出來たものである、との説がある。しかし集の選は大事業であるから、御一人にはあまり煩雜である。必ず臣下で、仰せを承つた者があつたであらう。それは、當時の歌人の長能、道濟等であらうかとも想像した。更に又、院は藤原氏のために誑かれて、御落飾になつた。そして、諸國を修行して御めぐりになつた。その時、笈に入れるべくあまりに大冊なので、分量を少なくせられたのが、拾遺抄であるとも推量した。しかし、これは誤つてゐる。何となれば、以上によれば、集は御在位中の御選となつてゐる。が、集中には、御出家後に於ける人々の歌をあまた載せてあるから御出家後の選であると、

和田英松博士はいはれてゐる。

集、抄共に院の御選といふ事を確實に證明してゐるのは、群書類從の拾遺抄に奥書した塙保己一の説である。それは集中の作者官位から考へたものである。乃ち「玩讀兩書、其題書之辭、但似不出人臣之手也。爲花山法皇製作者、得其實歟。姑書俟識者點竄術。」といふのがそれである。この端書の人臣の手に出てゐないといふのは、藤原定家が引用した「はじめて平野祭に男使たてし時歌ふべき歌よませしに。」のごときである。定家は「平野臨時祭、殿上五位使東遊等自寛和始、凡人寧注此旨哉。」といつてをる。又「冷泉院の五六のみこ袴著侍りける頃、いひおこせて侍りける。左大臣。」といふのも、それである。乃ち、五六の宮は、昭登、清仁兩親王で、花山院の御子であるのを、冷泉院の御子とせられたのである。御自身の御子であるから、かくの如き書方をなされたのであると云つてをる。これによつても、院の御選であることの證明とせられるであらう。從つて又、これの平野祭のと同樣の端書が、抄にもあるのをみれば、これも御選である一證とすべきであらうと、和田英松博士は云はれてゐる。

集、抄に就いては、先師藤岡作太郎博士が、精細に考究せられたが、和田博士が、又明確に研究せられた。和田博士は、更に藤原行成の權記をひいて、その長保元年十二月十四日の條に「詣東院、奉返先日所借給拾遺抄、歸宅。」とあるのを擧げて、東院は行成の祖父伊尹の室惠子女王の第であり、花山院の御母は伊尹の女で、女王は御外祖母でいらせられる。當時院は、東院にいらせられたから、この拾遺抄は、法皇に御かへし申し上げたものと思はれる。乃ちこれも院の御撰である一證とするに足りると云つてゐられる。これには、必然性はないやうで

あるが、參考とするには十分である。かくして、集は御撰であらう。而して「朝まだき」の歌の逸話は、たゞ傳說に止まつて、抄も或はまた御撰であらう。しかし、猶研究を要すべきこと、藤岡先生の言の如くであらう。

集、抄兩著選了の時日はどうであらうか。塙保己一は、拾遺抄の奧書に、「今試以集中所載作者官位推其時、此書之撰、卽在長德二年、後數年、經刊修、且稍有所增加、至長保二年、乃改爲拾遺集二十卷也。」と云つて、抄を長德二年の選とし、集を長保二年としてゐる。藤岡先生は、兩書中公任を右衞門督としてある。公任のこの官にゐたのは、長德二年から長保三年までである。又藤原道綱を春宮大夫としてある。道綱がその職に任ぜられたのは長德三年である。又集には藤原實資を右大將としてある。實資がこの職に任ぜられたのは、長保三年である。しかすれば、集は長保三年に出來たのである。併し抄には、實資の右大將がない。故に抄は長德三年以後、集の成つた長保三年までに成つた。乃ち抄が先づ成り、集はこれを增補して後れて成つたものと云はれてゐる。和田博士は、抄には、藤原高遠を左兵衞督（長德二年九月任）、公任を右衞門督（長德二年九月—同三年十月）、藤原道綱を右大將（長德二年十二月—長保三年七月十三日）とも、春宮大夫（長德三年七月兼—長保三年七月）とも記してある。これによれば、いづれも長保三年七月が最後であつてその後のはない。しかして、行成が抄を返上したのが長保元年十二月である。しかすれば、抄は長德三年から長保元年までの間に出來たものである。これに反して、集には、また長保以後の現官を記してあり、また公任の籠居の如き、寬弘元年九月以後の事さへ載せてあり、藤原行成を左大辨（寬弘二年六月—六年三月）とも云つてある。而して、寬弘五年二月に院の崩御があつたのであるから、集は寬弘二年から五年までに成つたものであらうと說かれてゐる。これは確乎として動かすべからざるものであらう。從來不明瞭であつた集、抄の疑義は、これによつて解決せられ

てゐる。

四五十年にして時勢が一小時期を示すとすれば、百年は、更に一大時期を劃せねばならぬ。古今集から四十餘年後の後撰集は、當時の人士が、一意古今集を摸倣して、その範疇から脱しないやうにと心がけてゐた。乃ち、一新風を拓いた延喜の歌風を繼承して、天暦の今に於ても、失墜せしめざらむとした。その故に、梨壺の五人には守成の才は見えるが、獨創の力は認められなかつた。しかも、時勢の流れは如何なるものをも現位置に止まらしめないものであるから、後撰集當時の歌は、古今集の通りにはならなかつた。かなり變化のあるもの、推移の見えるものであつた。これは、當時の人々の家集に於て著しい現象である。しかし、舊習を舊習をと志して、當時の風體は、悉く表面に表はれなかつたために、後撰集には、古體の歌の多くさへあつた。

天暦からして五十年許り、延喜から百年許りにして寛弘が來た。古今集の繼承は、後撰集を限度として、當時の新傾向の、裏面にあつたものが、表面に立ち、その勢ひを盛んにして、拾遺集に來た。拾遺集には、天暦時代の歌人の能宣、元輔、兼盛、順等は、皆二十首以上も載せられてゐる。拾遺集の選者は後撰集の作者及びその以外の人々のは、ことに力を盡して蒐集してゐるかの如く見える。天暦に埋れた人々は、寛弘に復活した觀を呈してゐる。後撰集當時の歌風は、これらによりて、勅撰集に初めて見ることが出來るのである。

以上に加ふるに、當時の歌人達の什がある。公任の十餘首の如きは、その首たるもので、長能、好忠、實方、道濟、輔親等のがあり、ことに、女流の齋宮女御、赤染衞門、和泉式部、馬内侍、伊勢大輔等のが、少數ながら這入つてゐる。而して、當時には當時の風體がある。必ずしも古人を宗としないといふ意氣を現はしてゐる。こ

れは、古今集と相通ずるところである。

前期よりして起つて、此の期につらなつて新風體をなしたものは、第一、語句の變化である。古今集から起つて後撰集まであつた「べらなり」は、すでになくなつてしまつてゐる。今日から見ても、耳遠い語は殆んど跡を絕つてゐる。この故に、難解の個處が極めて少なくなつた。第二、聲調の變化である。從來も、流暢宛轉たることを希望してゐたのは明らかであるが、これが更にこゝに歩を進めた。「春は猶われにて知りぬ花ざかり心のどけき人はあらじな。」の如きは、語々句々、さながら舞踏しつゝあるのである。第三、主觀から客觀への變化である。從來の歌は、大體主觀のみであつた。これは、上代からしかあつて、奈良朝に傳はり、更にこの時代に連なつたものである。感情中心の生活をするこの時代にあつて、感情のさながらの流露が歌をなすのは、當然、過ぎる當然である。この故に、歌は殆んど主觀であつて、他ではなかつた。しかし、自然の美は、いかにしても看過する事は出來ない。私己の感情を交へること多からずして、この美をさながら詠出しようといふ傾向が、おのづから生じた。この傾向も、すでにあることはあつたが、美な自然物に寄託して、自己の感情を現はさうとするに急であつたので、閑卻せられ來つた。しかるに、こゝに到つては、反對に、自然の美を表現すべく、更に他の自然物に寄託するに及んだ。主は自然であり、人は遂に客となつた。更に進んで、たゞ自然の美を、直接に如實に描寫すべく、「あさみどり野邊の霞はつゝめどもこぼれて匂ふ花櫻かな。」の如きをも採錄するに及んだ。當時鬼神もこれを詠歌したとさへ傳へてゐた。これからして、歌を作るのは、さながら繪を作るが如くなり、淡粧濃抹、美はますく美、艷はいよく艷なるに及んだ。この語句の明晰、聲調の宛轉、客觀的傾向の發展は、前期前々期と

著しく異なつた狀態を呈せしめた。この故に、幽奧の致が乏しく膚淺となり、森遠の趣が減じて、鄙近の觀を呈した。無名抄に、「拾遺の比より、その體殊の外もの近くなりて、ことわり隈なくあらはれ、姿すなほなるを宜しとす。」と云つてあるのは、これを指したのであらう。延喜から約百年にして、かかる變化が現はれたのである。

以上の如き狀態は、今樣といふ一語に盡きるであらう。明快、流暢清新は實に當時の風で、古今、後撰二集とは、甚しく異なつてゐるところである。しかし、後撰に續いた拾遺の名は、遺れるを拾ふの意に外ならない。古今、後撰二集に選び遺したものを拾ひ集めて大成する意に相違ない。今樣の境地にありながら、當時の人は、よく此くの如くし得たであらうか。

拾遺集を撿すると、驚くべきことは、奈良朝時代の歌人の、安貴王、湯原王、赤人、家持、百世等の歌が現はれ、人麻呂に及んで更に多く、遂に百餘首にも及んでゐることである。人麻呂の名は、すでに古今集にもあつたが、他の人々のは、こゝで初めて勅撰集に揭げられたのである。これらは、前朝の遺を拾ふの意であらうが、實は大抵、萬葉集にあるところのものであるから、改めて登載する要は見出さぬのである。それを敢てしたのは何の意であらうか。

天曆時代の歌人の詠の、多く拾遺集に載せられてゐるのは、既に述べた。これも、遺を拾ふの意であらう。これよりも、更に多く揭げられてゐるのは、延喜時代の人々のである。是則、忠岑、躬恆、伊勢と順次に上つて、貫之に到つてことに多數となり、百餘首に達してゐる。かくの如きは、また遺を拾ふの意に外ならぬであらう。前期の遺を拾ふのは、當時の新傾向の始源と見て、意義がある。前々期のは、どういふ意味であらうか。

拾遺集卷頭の歌は、「春たつといふはかりにや」で、前々期の作者の忠岑の作である。これを、古今集卷頭の「年の内に春は來にけり」の元方のと比し、また後撰集卷頭の、「ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ」の敏行のと比すると、徑庭甚しきものがある。拾遺集のは他と異なつて、明るさ淸さ爽やかさに於て、明らかに勝つてゐる。この一事が全體を被ふに足りる。拾遺集中の貫之、躬恆等、延喜の作家のは、大體においてこの風である。難解がなく苦澀がなく、流暢であり、淸新である。すべてに於て今樣であり、または今樣に近いものである。この集の全體と歩趨の殆んど忤はざるものである。これ遺を過去に拾ひつゝ、意を現在に存したのである。

　これを本として、前代の什、人麻呂、家持等のを見ると、これまた前者と違ふことの多からぬのを見出す。人麻呂と傳へて、而もその人らしからざるもの、乃ち、「ちゝわくに人はいふとも織りて著むわがはたものにしろき麻衣」とか、「白なみはたてど衣にかさならず明石も須磨もおのがうら／＼」とかいふ類は、何人の作が誤つて、人麻呂の名を冠したのであらうか。怪しむべきではあるが、聲調の極めて流麗で、當時の風趣の一面を備へてゐるのは否み難い。この他の、人麻呂ならざる萬葉集中のものをその人とした類も、共に選者の疎漏、不穿鑿を示す材料となるのではあるが、載せてあるものは、皆解し易く、口に上り易いものである。その中で原作と異なるもの、乃ち、「年にありて一夜妹に逢ふ彦星もわれにまさりてものおもふらめや」の第四句が、「おもふらむやぞ」であり、「あしびきの山鳥のをのしだりをのながきなが夜をひとりかもねむ」第四五句が、「なが／＼し夜をひとりかもねむ」であるの類、眞淵は萬葉を讀み誤つたものだと非難するが、實はかくの如きが當時の好尙の存するところである。眞の人麻呂の詠もまた同樣である。些の變改もなくして載せられてゐるのは、皆當時に偶然合致し

たものである。變改せられたこと、「見れどあかぬよしのの川のとこなめのたゆることなくまたかへりみむ」の第三句以下が、「ながれてもたゆるときなくゆきかへりみむ」となつた如きは、原歌の嚴肅味、緊張味がすつかりなくなつて、甚しく落寞となつたのであるが、明快、流暢、清新の趣はそれに代つて入つて來てゐる。當時の人々はこれによつて、意識か無意識か恐らくは後者で、古典の現代化をして、滿足してゐたのである。自主的傾向の甚だ強いのは看過すべからざるものと思ふ。

かく當時の人々は、天曆以來の新傾向を發展せしめて、明快、流暢、清新の今樣振を樹立したのである。更にそれを古歌にさへも及ぼしたのである。遺を拾ふといふも、遺を改めて新としたのである。拾遺の一集は、花山院の御撰であらうが、實は當時の一般人士の好尙の存するところであり、新傾向の著しい表現である。

後拾遺和歌集

寛弘期の名匠の藤原公任が隱退して長谷に住んで、谷の嵐を寂しんでゐた長久の頃、歌合の卷を持つて、一つ車に相乘りして來た兄弟の大宮人があつた。それは、勅命をうけた兄の源經長と、弟の經信とであつた。經信はまだ十八であつた。公任はこの若人が歌に執心であると聞いて、欣然として、具に敎へるところがあつた。この人は、遂に、詩歌にも、管絃にも達し、ことに歌の名家となつた。承保の頃、白河院が大堰川に行幸があつた。詩歌管絃の舟を浮べ給ふ事、道長の時の如くであつた。この時、特に遲參して、河の汀に跪いて、「いづれの舟なりとも寄せたまへ。」といつた人がある。それが經信であつた。これから三舟の才公任に繼ぐと云はれたと傳へら

れる。

經信は、公任の後繼者の如く目せられた。當時の棟梁の如く考へられた。承曆の頃の殿上の歌合に、「君が代はつきじとぞおもふ神風やみもすそ川の澄まむかぎりは。」と詠んだが、或人の夢に、唐裝束した女たちが、この歌を歌つて「これによつて、帝王の御壽が增すであらう。」と云つたといふ。この名聲ある人が、前の拾遺集の後を襲つて、勅撰歌集を選ぶべき大命を拜するかと思ふと、さうでなかつた。

拾遺集以後、すでに八十餘年が過ぎてゐる。必ずこゝに一新勅撰歌集があるべきである。これ一般世人の腦裏に往來した考へであつた。遂に、應德三年九月に、これが出來た。しかも、それが中納言藤原通俊の手によつてゐた。これは、世人の驚くところであつた。

藤原通俊は歌には自負を有してゐた。嘗て大江匡房に「君は詩賦に長じてゐられる。知らぬ道に入つて、歌を好まれるのはどうか。」とさへ云つた。この自負から選集を作つて、御氣色を取つた。乃ち後拾遺集は天機から起つた撰述ではなくて、通俊の私選である。それが遂に、勅選になつたのだといふ。

以上の事は、眞であらうか。後拾遺集は、古今集以後初めて序文をもつ。これは珍らしい事實であつて、これのみでも、通俊の自信の強いのを見ることが出來る。それによつて見ると、通俊は、すでに承保二年九月に選集を作るべきよしの仰せを承つてゐた。しかし、承保の末に右中辨、永保のはじめに藏人頭に任ぜられて、「あしたにみことのりをうけたまはり、夕にのべたまふことまことに繁」くあつたので、この事が、心にかゝりながら年を送ること九年になつた。ところが、應德の初年に參議に轉じて、「五日のいとまも妨げな」くなつた。こゝに於

て心を專らにして選述に從事した。遂に三年を經て、完成して進奏したと云つてゐる。選述の時日は短くない。全體に於て十二年を費した事となる。これを、歷代和歌勅撰考に、仰せを承つてから九年を經て選び上げたものだ。從つて、「承保」は「承曆」の誤りだと云つたのは、却つて序文の讀み誤りであらう。かく內實は知らず、表面は多くの時日を費してゐるのである。これは事實であらう。仰せもないのにあつたと云ひ、しかも公務の暇々にそれに努力してゐたとは、いかにしても書けないであらう。選者は、十二年前に確かに仰せは承つたのである。それを上述の如く云ふのは、世人が、經信に同情することが深かつたためでもあらう。

後拾遺集は、「拾遺集に入らざる中頃のをかしき言の葉もしほ草かきあつむべきよし」の仰せで選び出したものである。從つて、古今、後撰二集に入つてゐる人々の家の集の歌は入れない。しかし、梨壺の五人、乃ち元輔、順、時文、望城等のは先として、今の世の人のまでをも入れた。世人は耳を尊み、目を卑しむ。遠いものはいいとし、今のものは惡いとする。これは誤つた見解である。集としては萬葉、古今、後撰、拾遺諸集の外に、公任の選んだ諸集がある。皆立派なものであつて、知らない人はない。能因の選んだ玄々集も知られてゐるから、これらは採り用ゐない。別に、麗花集といひ、山伏集といひ、樹下集といふものがある。これらの歌は、善惡混合であるから、土から金、石から玉を選るやうに善きを選んで揭げることにした。而して、「身はかくれぬれど、名は朽ちせぬものなれば、古も今も、情ある心ばせを行末に傳へむ事を思ひて選」んだと通俊は云つてゐる。選者としては、かくあるべきであらう。

以上の通俊の言の如く、後拾遺集には、その當時及びそれに近い時期の作が多い。乃ち拾遺集に多數載せられ

た奈良朝の人麻呂、赤人、延喜の貫之、躬恆等のはすでに影を隱したことは、序文に云つてある通りである。天暦の順、能宣、元輔、兼盛等に到つて漸次多く揭げられる。寛弘の公任、實方、道濟、長能、輔親、好忠、能因等もこれに續いてゐる。殊に順よりも能宣、元輔が多く、公任よりも道濟、長能が多く、能因が一層多いのは、たゞ位置や聲望に眩惑せずして、眞の技倆に重きをおいたのであらう。更に、寛弘の女流において、和泉式部、赤染衞門、紫式部、伊勢大輔、馬内侍、相摸等も多くあるが、和泉式部が最多數で、全然他の何人をも凌いでゐるのも、前と同じく選者の眼識の高いのを思はしめる。

應德附近においては、經信、匡房、國基、經衡、兼房、賴綱等があるが、前者に比すると、いづれも少數である。これによつて見れば、選者は、寛弘期に力を入れて選んだ如くに見える。乃ち當時に薄くして、前期に厚いやうである。前期の濟々たる多士が拾遺集に多く入つてゐないので、こゝにそれらを輯載して、遺漏なからしめようとしたやうである。乃ち拾遺に次ぐといふ意の「後拾遺」の名の意味は、こゝに存するであらう。

當時の歌の揭載の數の少ないのは、從來の勅選集の例である。古今集は措く。後撰、拾遺兩集共に多いのは、選者等及びその當時の人のではなかつた。これが習慣となつて、この時に傳はつて來てゐる。これを打破するのは極めて難い。この故に、當時は序に云つた如く、古いのは省き新しいのは取るとはしてゐるが、思ふやうには行かず、猶重きは前期にある事となつたのである。しかし歌としては、當時の好尙に適し、傾向に合したのを選んでゐる。揭載數の多い前期の風趣よりも、現代の情調に合したものを選んでゐる。無名抄に、「後拾遺の時、今少しやはらぎて、むかしの風を忘れたり。やゝその時の古き人などは、これをうけざりけるにや。後拾遺すがた

と名づけて、くちをしき事にしけるとぞ、ある先達語り侍りし。」と云つてゐるのは、一面を穿つてゐる。拾遺集は、すでに述べた如く、歌が著しく近體になつて、淺近で、姿態があるのが宗とせられると云つてゐる。これは眞實であつた。而して同書は、更に次の後拾遺に就いては、上掲の如く述べてゐる。これを比較すると兩者の差異は、明らかに考へられる。乃ち後拾遺集は拾遺集當時の歌も、後拾遺集當時に合致したのを選び、それらを、眞の當時の風調ある時人の作に混合して成つたのである。主は專ら當時にあつて、前期にはない。後拾遺姿の一語は、集全體を被うて、餘りあるものである。かくの如きは、確かに、前期から引き續いた自主的傾向の、一層盛んになつたのを證明してゐると思ふ。

後拾遺姿とは、上掲の無名抄によると、拾遺集よりも「今すこしやはら」いだもの、そして「昔の風を忘れた」ところを指したのである。「やはら」いだとは、どんなことであらうか。寛弘期の藤原範永が、「見る人もなき山里のあきの夜は月のひかりもさびしかりけり。」と詠んだのを、公任が見て、「範永何人哉。和歌得其體。」と評したといふ。意義に於ける新味の有無に關せず一氣に調べ下して、全般に弛緩の風のない所が當時の正體として尊ばれたものであつたと、想像せられる。應徳附近でも、この風は確かにあつた。經信の如きはそれを詠んだ一人で、上に述べた「君が代はつきじとぞおもふ。」の類はこれである。かく、本格的とも云ふべきものがあるにはあるが、後拾遺集中に多くはなく、却つて、これに反して、逸興の特に多いのを希ひ、才華の著しく現はれたのを愛する風が盛んに起つた。前期の曾根好忠が、「なけやなけ蓬が杣のきり〳〵す過ぎゆく秋はげにぞかなしき。」は、長能が、「狂惑の奴也。」と罵つた程であつたが、此の時には、集に載せられたのみならず、同じ趣のものが、

多く掲げられてゐるのである。新趣を詠んで、人の意表に出でようと努めてゐるのは、當時の作者一般の風である。

花見にと人は山べに入りはてて春は都ぞさびしかりける

おもひつゝ夢にぞみつる櫻花春はねざめのなからましかば

わがやどにちぐさの花をうつしうゑて鹿のねきかぬのべとなしつる

千代をへむ君がかざせる藤の花松にかゝれるこゝちこそすれ

の類は、皆想像の外に出ようとしたものである。それの、十分に遂げられたのもあり、その反對になつたのもある。その後者は著しい破綻を示して、集の瑕瑾をなしてゐるのである。これを救濟すべく、特に新味はないが、時の作者は、從來の修飾法の懸詞と緣語とで、破綻の原因となつてゐる唐突の感を、幾分でも除くやうにと企ててゐる。

山櫻見にゆく道をへだつれば人のこゝろぞ霞なりける

まだ宵にねたる萩かなおなじ枝にやがておきゐる露もこそあれ

紫の雲のかけても思ひきや春の霞になしてみむとは

等擧げ來れば甚だ多い。隔つるは霞、おきてゐるは露、かけるは雲である。而して、霞と花、露と萩、雲と霞、各相互に不離の關係をもつてゐる。懸詞と緣語とが、これらの歌の構成の因をなしてゐるのである。この修飾法は、前期にすでに多かつた。この時も、それを繼承して一歩を進めてゐる。すべて、語句が皆敏感的に働いてゐ

て、すでに古撲味がなく、故態を存せず、目して正體とせられたものではない。乃ちよほど、「やはら」いだ歌である。さらに「古風を忘れ」たとも稱せらるべき歌である。舊風を墨守した人々には、非難せられるのが當然であらう。

しかし、主觀を變へぬ敍事、敍景の風は、前期に、すでにあつたが、この時にいよ〳〵增加した。

たづねつる宿は霞にうづもれて谷のうぐひす一聲ぞする

は範永が、「我が身今生の秀歌は、此歌也。」と云つたのは、當時の風尙をよく現はしてゐる。

山たかみ都の春をみわたせばたゞ一むらの霞なりけり

おきあかしみつゝながむる萩の上の露ふきみだる秋の夜の風

君なくてあれたる宿の淺茅生に鶉なくなり秋の夕暮

あけぬるか河瀨の霧のたえ〴〵に遠方人の袖のみゆるは

の如きも、それにつらなるべきであらう。客觀的傾向は、歌に繪畫的趣致を與へた。自然の好景は、これによつて眼前に躍動することとなつて、歌の範圍はおのづから廣きをなした。が、歌の始源からは、おひ〳〵遠ざかつて來た。

自然を、見るが如く描き來るのは、直寫のみでは足らぬところが多い。こゝに、多くの譬喩の新味のあるものを用ゐて、一層明瞭に、且精細に描出しようとした。當時の人々はこれにも苦心した。

藤の花咲きぬる時は庭の面におもひもかけぬ波ぞたちける

見わたせば波のしがらみかけてけり卯の花さける玉川の里

みなかみは紅葉ながれて大堰川むらごにみゆる瀧の白絲

これらは、悉く成功したのではないが、その苦心は認めておかなければならぬ。津守國基が、「鶯の初音や何の色ならむきけば身にしむ春の曙」の歌を淡んで、不食になつて、他事もなく歌を案じて、「薄墨にかく玉章とみゆるかなかすみの空をかへるかりがね」と詠んで、人々の賞讃を得たといふのも、妙は譬喩にある。新意があるとともに、新調がそれに伴つて生ずるのは、自然の事である。前の、「なけやなけ」の載せられたのも、これに外ならない。

うらやましいかなる花かちりにけむ物おもふ身しも世にはのこりて

月はよし烈しき風の音さへぞ身にしむばかり秋はかなしき

いかならむこよひの雨になでしこのけさだに露のおもげなりつる

わすれなむそれも恨みず思ふらむこふらむとだに思ひおこせよ

等數多ある。源頼實が住吉に參詣して、秀歌を一首詠ませたまへ。命を召されても顧みない、と祈つて詠み得たといふ、

木の葉ちる宿はききわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

も、著意の奇警にもよるが、聲調の變化の面白いのに、當時の讃辭はあつたのであらう。併し、これが進んで、

秋も秋こよひもこよひ月も月ところもところみる君も君

に到ると、過ぎて嫌厭の情をのみ起さしめる。

かくの如き、いはゆる後拾遺姿を非難したものは、多くあつたのであらう。元來この集には非難が多かつた。それは、多田賴綱の歌が、秀詠でもないのに數多入つてゐるといふのもあつた。これは事實に反してゐると、袋草子にすでに云つてゐる。次に選者通俊に明がなかつた。それは、秦兼方が、「去年見しに色はかはらず咲きにけれ花こそものは思はざりけれ」といふ得意の歌を、集に載すべく望んで、通俊に示すと、「花こそ」は童女の名のやうであると、非難した。兼方は、公任の、「はなこそやどの主人なりけれ」があるではないか、この人は物をしらぬと、退いて呟いたといふ。これは、あまりの話である。眞かと疑はれる。さらに、この集の異名を小鰺集といつた。それは、津守國基が、通俊に夥しくの小鰺を贈つたので、多く歌を入れられたといふ。これも實否不明であらう。また誹諧歌が集にある、誹諧歌は、公任さへも知らないのであつた。それを、通俊が入れた。これによつても、集の惡さがわかる、と經信が云つたといふが、これらは、古今集にあつた誹諧を踏襲したのであるから、難ずるにも足らぬであらう。しかし、以上の非難は、當時眞にあつたのであらう。勅撰集の非難は、從來聞かなかつた事である。かくの如きは、やはり通俊の云つた如く、耳を尊み目を卑しむ結果であらう。それよりも通俊その人に、世の信望を受け得るほどの歌才がなかつたためであらう。

上述の非難は、皆些事であつて、歌の眞核に觸れぬものであるが、こゝに、特にこの集の歌に向つて、内容或は形式の方面から、手痛い非難を加へたものは難後拾遺抄である。この名は、後に加へたもので、當時は何といつたのであらうか。そはともかく、堂々と一書を著はして、勅撰集を非難するのは、これが初めてである。「汀もえ

いづる」は、「汀にもえいづる」でなくては意をなして居らぬ。「杖つき、つままほしき」といふが、杖をついて行く事は出來る。これをついて摘むのはむづかしい。「いそぎつゝ我こそ來つれ」とあるが、題は、「居易初到香山」であるから、急ぐといふことは、更に要がない。かかるものを數多く擧げて、集全體に及んでゐる。選者の通俊もこれには驚いて、集中の歌三百六十首を選んで、續新撰を作つたと傳へられる。が、どんなものか。殘らないので、知る由がないのは遺憾である。

難後拾遺抄は、何人の著であらうか。明らかにし難いのである。袋草子に、集中の春の歌「梅が香をよはのあらしの吹きためて眞木の板戸のあくる待ちけり」の原歌は、作者大江嘉言が、「軒にあらしの吹きためて」と云つた。選者がそれを直したのであるが、甚だ亂暴であると、經信が云つたと書いてゐる。然るに、難後拾遺抄には作者嘉言が、「よものあらしの吹きためて」と云つた。それを書き代へたのであらうか。もとの方が今少し優つてゐると書いて居る。これによると、前者が經信ならば、後者は他人でなければならぬ。或はこの反對でなければならぬ。しかし又、袋草子に、經信の孫の俊惠が、或時、吾が妹の女房逝去した後、遺物を開いて見ると、父俊頼の遺草が少しあつた。その中に、難後拾遺の草案があつた。これで見れば父俊頼の仕業であらうかと云つたとある。或はさうかも知れぬが、著者清輔は、父の經信が口授をして、俊頼に書かせたので、それで出來た草案ではなからうか、と云つてをる。兩雄は竝び立たず、況んや、通俊が、技能に於て二三階を下つたに於てをやである。經信が、怒りと嫉みとで、非難の爆彈を強く抛つたのは、當然の事であらうか。當時はしかし信じて居たやうである。

併し、以上の事を、眞に經信の所爲とすれば、大人げない事をしたと思ふ。優越者は寬容な長者風を持して、高處から大觀してゐるべきであらう。あまりに燥急なのは、三船の才の聲譽を永久に傷けると思ふ。他の正確な資料の出現を望むこと、切なるものがある。

解題 終

古今和歌集

古今和歌集序

紀淑望

○人之在レ世不レ能ニ無爲ニ云々　人がこの世に生まれて、しわざのないと云ふ事はない。四季の詠め喜怒哀樂の情は常にうつりやすくかはりやすいもので、その折々につけて心に思ひあまる事を詠んで慰めとするのである。

○天神之孫　彥火々出見の命を申す。

○海童之女　海神の女豐玉姫を云ふ。

○旋頭混本　同じことを重ねて云つたもの。

○富緒川之篇　聖德太子が片岡山の飢人を見て歌を詠まれたのに答へ奉つた飢人の歌で、これは拾遺集の最終に出てゐる。

夫和歌者。託ニ其根於心地一。發ニ其花於詞林一者也。人之在レ世不レ能ニ無爲一。思慮易レ遷哀樂相變感。生ニ於志一詠形ニ於言一。是以逸者其聲樂。怨者其吟悲。可ニ以述レ懷可ニ以發レ憤。動ニ天地一感ニ鬼神一。化ニ人倫一和ニ夫婦一。莫レ宜ニ於倭歌一。倭歌有ニ六義一。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若下夫春鶯之囀ニ花中一。秋蟬之吟中樹上上。雖レ無ニ曲折一各發ニ歌謠一。物皆有レ之自然之理也。然而神世七代。時質人淳。情欲無レ分。倭歌未レ作。逮三于素盞嗚尊到ニ出雲國一。始有ニ三十一字之詠一。今反歌之作也。其後雖ニ天神之孫海童之女一。莫乙不下以ニ倭歌一通上情者甲也。爰及ニ人代一。此風大興。長歌短歌旋頭混本之類。雜體非レ一。源流漸繁。譬猶下拂レ雲之樹生レ自ニ寸苗之煙一。浮レ天之波起中於一滴之露上。至レ如下難波津之什獻ニ天皇一。富緒川之篇報中太子上。或事關ニ神異一。或興入ニ幽玄一。但見ニ上古歌一。多存ニ古

○大津皇子　天武天皇の第三皇子で、持統朝に謀反を企てて死を賜うた。年二十四。

○長短不レ同　假名序に、「得たる所えぬ所たがひになむある。」とある意を云つたもの。

○花山僧正　僧正遍昭を云ふ。

○文琳　文屋康秀を云ふ。

質之語一。未レ爲二耳目之翫一。徒爲二教誡之端一。古天子毎二良辰美景一。詔下侍臣預二宴筵一者上獻二倭歌一。君臣之情由レ斯可レ見。賢愚之性於レ是相分。所下以隨二民之欲一擇中士之才上也。自三大津皇子之初作二詩賦一。詞人才子慕レ風繼レ塵。移二彼漢家之字一化二我日域之俗一。民業一改倭歌漸衰。然猶有二先師柿本大夫者一。高振二神妙之思一獨二步古今之間一。有二山邊赤人者一。並倭歌仙也。其餘業二倭歌一者綿々不レ絕。及下彼時變二澆漓一人貴中奢淫上。浮詞雲興艶流泉涌。其實皆落其花孤榮。至レ有下好色之家以レ此爲二花鳥之使一。乞食之客以レ此爲中活計之媒上。故半爲二婦人之右一。難レ進二丈夫之前一。近代存二古風一者纔二三人而已。然長短不レ同論以可レ辨。花山僧正尤得二歌體一。然其詞花而少レ實。如三圖畫好女徒動二人情一。在原中將之歌。其情有レ餘其詞不レ足。如下萎花雖レ少二彩色一而有中薰香上。文琳巧詠レ物然其體近レ俗。如三賈人之著二鮮衣一。宇治山僧喜撰。其詞華麗而首尾停滯。如下望二秋月一遇中曉雲上。小野小町之歌。古衣通姬之流也。然艶而無二氣力一。如三病婦之著二花粉一。大友黑主之歌。古猿丸大夫之姿也。頗有二逸興一而體甚鄙。如三田夫之息二花前一也。此外氏姓流聞者不レ可二勝計一。其大底皆以レ艶爲レ基。不レ

知二歌之趣一者也。俗人爭事二榮利一不レ用レ詠二倭歌一。悲哉悲哉。雖下貴兼二相將一富餘中金錢上。而骨未レ腐二於土中一名先滅二於世上一。適爲二後世一被レ知者唯倭歌之人而已。何者語近二人耳一義慣二神明一也。昔

平城天子詔二侍臣一令レ撰二萬葉集一。自レ爾以來時歷二十代一。數過二百年一。其後倭歌棄不レ被二採用一。雖下風流如二野宰相一。雅情如中在納言上。而皆以二他才一聞。不下以二斯道一顯上。伏惟

陛下御宇于レ今九載。仁流二秋津洲之外一。惠茂二筑波山之陰一。淵變爲レ瀨之聲寂々閉レ口。砂長爲レ巖之頌洋々滿レ耳。思レ繼二既絕之風一。欲レ興二久廢之道一。爰詔二大內記紀友則御書所預紀貫之前甲斐少目凡河內躬恆右衞門府生壬生忠岑等一。各獻二家集幷古來舊歌一曰二續萬葉集一。於レ是重有レ詔。部二類所レ奉之歌一勒爲二二十卷一。名曰二古今倭歌集一。臣等詞少二春花之艷一。名竊二秋夜之長一。況乎進恐二時俗之嘲一。退慙二才藝之拙一。適遇二倭歌之中興一。以樂二吾道之再昌一。嗟呼人麿既歿。倭歌不レ在レ斯哉。于レ時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序。

○野宰相　宰相は參議の唐名。小野篁をいふ。
○在納言　中納言在原行平をいふ

古今和歌集序

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事わざしげき物なれば、心に思ふ事を見る物きく物につけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和げ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。この歌天地の開け始まりける時より出できにけり。しかあれども世に傳はることは、久方のあめにしては、下照姫に始まり、あらがねのつちにしては、すさのをの尊よりぞおこりける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの尊よりぞ、三十もじあまり一もじはよみける。かくてぞ、花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心詞おほくさま〳〵になりにける。遠き所も出でたつ足もと

○やまと歌　和歌。から歌に對する名稱であるが、こゝでは單に歌といふほどの意。
○事わざ　事と業と。
○生きとし生けるもの　生きてゐるものすべて。あらゆる生きもの。
○天地を動かし　天地を感動させる。
○あはれと思はせ　感動させる。
○下照姫　大國主神の女、天若日子の妻。その歌は「あめなるや、おとたなばたの云々。」といふのである。
○人の世となりて　この下の「すさのをの尊よりぞ」は衍文といふ。

○難波津の歌　王仁の詠んだと稱する「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」。をさしたもの。
○帝の御始め　天皇の御代始を祝ひ奉る歌のはじめといふ意。
○淺香山の言葉　萬葉集の「あさか山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわがおもはなくに。」をさす。
○そへ歌　詩の風に當るもの。そへて云ふのである。
○かぞへ歌　賦に當る。
○なずらへ歌　比に當る。
○たとへ歌　興に當る。
○たゞごと歌　雅に當る。
○いはひ歌　頌に當る。
○人の心花に云々　人の心が花々しいことにつくの意。
○はかなき　無益な。

より始まりて年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまでおひのぼれるが如くに、この歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は帝の御(おほん)始めなり。淺香山の言葉は、采女のたはぶれよりよみて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始めにもしける。そも〳〵歌のさま六つなり。からの歌にもかくぞ有るべき。その六くさの一つにはそへ歌。おほさゝぎのみかどをそへたてまつれる歌、なにはづにさくやこの花冬籠り今ははるべと咲くやこの花といへるなるべし。二つにはかぞへ歌。咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずてといへるなるべし。三つにはなずらへ歌。君にけさあしたの霜のおきていなば戀しきごとに消えやわたらむといへるなるべし。四つにはたとへ歌。わがこひはよむともつきじありそ海の濱の眞砂はよみつくすともといへるなるべし。五つにはたゞごと歌。僞りのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからましといへるなるべし。六つにはいはひ歌。この殿はむべもとみけりさき草のみつばよつばにとのづくりせりといへるなるべし。今の世の中、色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかな

○まめなる所　まじめな、かたい所。

○くねる　女の若い盛りの早く過ぎたことを愚癡にくよ〳〵と思ふ意。

きことのみ出でくれば、色ごのみの家に、埋木の人しれぬ事となりて、まめなる所には、花薄ほにいだすべき事にもあらずなりにたり。その始めを思へば、かかるべくなむあらぬ。いにしへの代々の帝、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつゝ歌を奉らしめ給ふ。あるは花をこふとて（もてあそぶイ）、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さゞれ石にたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心にあまり、富士の煙によそへて人をこひ、松蟲のねに友をしのび、高砂住の江の松もあひおひのやうに覺え、男山の昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又春のあしたに花のちるを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の露、水の沫を見て、我が身をおどろき、あるは昨日は榮えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、曉の鴫のはねがきをかぞへ、あるは呉竹のう

きふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中をうらみきつるに、今はふじの山も煙たたずなり、長柄(ながら)の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。古(いにしへ)よりかく傳はるうちにも、奈良の御時(おほんとき)よりぞひろまりにける。かの御(おほん)世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時におほきみつのくらゐ柿本の人麿なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身を合はせたりといふなるべし。秋のゆふべ龍田川に流るゝ紅葉をば、みかどの御目(おほんめ)には錦と見給ひ、春のあした吉野山の櫻は、人麿が心(目イ)には雲かとのみなむ覺えける。又山邊赤人といふ人あり(けりイ)、歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人がかみにたたむ事かたく、赤人は人麿がしもにたたむ事かたくなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、呉竹のよゝに聞え、片絲のよりよりに絶えずぞ有りける。これよりさきの歌をあつめてなむ、萬葉集となづけられたりける。爰にいにしへの事をも歌の心をも知れる人、わづかにひとりふたりなりき。しかあれど、これかれ得たる所えぬ所、互になむある。かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世はとつぎになむなりにける。古(いにしへ)の事をも歌をも知れる人よむ人多からず。今こ

○おほきみつのくらゐ　正三位。柿本人麿を正三位と云ふのは誤りである。
○君も人も身を云々　君臣合體の意。
○人麿は赤人がかみに云々　人麿と赤人との伎倆が伯仲してゐたといふのである。

○たやすきやうなれば　輕々しく無禮であるから。慮外なやうであるから。
○僧正遍昭　以下の六人は所謂六歌仙である。
○四つの時九のかへり　九年。寛平九年に御卽位、翌年昌泰と改元せられて昌泰四年と延喜五年とを合はせたものをいふ。
○うつくしみ　いつくしみ。御慈愛。

の事をいふに、つかさ位高き人をば、たやすきやうなればいれず。その外に近き世にその名聞えたる人は、すなはち僧正遍昭は、歌のさまはえたれども、誠すくなし。たとへば繪にかける女を見て、徒に心を動かすが如し。在原業平はその心餘りて詞たらず、しぼめる花の色なくて、にほひ殘れるが如し。文屋康秀は、詞たくみにてそのさま身におはず、いはば商人のよききぬ著たらむが如し。宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして始め終りたしかならず、いはば秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し。よめる歌おほく聞えねば、これかれかよはしてよく知らず。小野小町はいにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにてつよからず、いはばよき女のなやめる所あるに似たり。つよからぬはをうなの歌なればなるべし。大友黑主はそのさまいやし、いはば薪を負へる山人の花の陰にやすめるが如し。このほかの人々、その名きこゆる、野邊におふるかつらのはひひろごり、林にしげき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひてそのさま知らぬなるべし。かかるに今すべらぎの天の下しろしめすこと、四つの時九のかへりになむなりぬる。あまねき御うつくしみの波、八島のほかまで流れ、

廣き御惠みの陰、筑波山の麓よりも繁くおはしまして、よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろ〳〵の事を捨て給はぬあまりに、いにしへの事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書の所のあづかり紀貫之、前の甲斐のさう官凡河内躬恆、右衞門の府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それが中にも、梅をかざすよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また鶴龜につけて君をおもひ、人をもいはひ、秋萩夏草を見て妻をこひ、逢坂山にいたりてたむけを祈り、あるは春夏秋冬にもいらぬくさ〴〵の歌をなむ、えらばせたまひける。すべて千歌二十卷、名づて古今和歌集といふ。かくこのたびあつめえらばれて、山下水のたえず、濱の眞砂の數おほくつもりぬれば、今は飛鳥川の瀨になるうらみも聞えず、さゞれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。それまくら言葉は春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ秋の夜の長きをかこてれば、かつは人のみゝにおそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく

（飛鳥川瀨になるうらみ云々）歌の風が惡く變つてゆく心配もないと云ふ意。

（さゞれ石の云々）歌道が末長く榮えてゆくよろこび。

（それまくら言葉は）書きあやまりであらう。「まくら」は「かれら」であらうとも、また「それがしら」であらうとも云はれてゐる。

（人のみゝにおそり）人の聞くところもどうであらうかと恐れ。

雲のたちゐ、なく鹿のおきふしは、貫之らがこの世におなじくうまれて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。人麿なくなりにたれど、歌のことゝまれるかな。たとひ時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の絲たえず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長くつたはり、鳥の跡ひさしくとゞまれらば、歌のさまをも知り、ことの心をも得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、いにしへをあふぎて、今を戀ひざらめかも。

古今和歌集　卷第一

春歌上

ふる年に春立ちける日よめる　　在原元方

年の内に春はきにけり一年を去年(こぞ)とやいはむ今年とやいはむ

春立ちける日よめる　　紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

題しらず　　讀人しらず

春霞立てるやいづこみよしのの吉野の山に雪は降りつゝ

二條の后の春のはじめの御歌

雪のうちに春は來にけり鶯の氷れる涙いまやとくらむ

題しらず　　讀人しらず

梅が枝にきゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだ雪はふりつゝ

雪の木に降りかゝれるをよめる　　素性法師

春たてば花とや見らむしら雪のかゝれる枝に鶯のなく

○年の内に云々　春は年の初めに立つのが普通である。然るに年内に立春があつたので、此の一年を舊年といはうか新年といはうかと云つたのである。

○袖ひぢてむすびし水　袖をぬらして掬うた水。

○春霞立てるやいづこ　春が來て霞の立つたといふは何處ぞ。

○二條の后　清和天皇の皇后、藤原長良の女、高子。

○雪のうちに　舊年の雪がまだ消えずに積つてゐるところに。

○花とや見らむ　松に降りかゝつてゐる雪を、鶯が花と思つてであらうか。

題しらず　讀人しらず

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

或人の曰くさきのおほきおほいまうち君の歌なり。

二條の后の東宮の御息所と聞えける時正月三日御前に召して仰言ある間に日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるをよませ給ひける　文屋康秀

春の日の光にあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき

雪の降りけるをよめる　紀貫之

かすみ立ち木の芽も春の雪ふれば花なき里も花ぞちりける

春のはじめによめる　藤原言直

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

春のはじめの歌　壬生忠岑

春來ぬと人はいへども鶯の鳴かぬ限りはあらじとぞおもふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　源當純

谷風にとくる冰のひまごとにうち出づる浪や春のはつ花

紀友則

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

○をりければ　居りければ。
○さきのおほきおほいまうち君　藤原良房。天安元年に太政大臣となつた。諡は忠仁公。
○東宮の御息所　東宮は貞明親王である。東宮の御生母の意。

○春の日の光云々　東宮の御恵みを蒙るといふ意にかけたもの。

○木の芽もはるの　木の芽が張る即ち木の芽がめぐむといふ意と春の雪と兩樣に云ひかけたのである

○春やとき　ときは疾きで、春が早く來過ぎたのかといふ意。

○鳴かぬかぎりは　鳴かない間は
○寛平　宇多天皇の御代の年號。この后の宮は藤原基經の女、七條后溫子。
○冰のひまごとに　あちらこちらとさける冰のひま〳〵から。
○たぐへて　副へて。
○鶯さそふしるべにはやる　鶯を誘ひ出して來る案内者として遣る。

○ものうかる音　はりあひのない聲。

○今日はな焼きそ　今日は焼くなの意。

○かすが野の飛火の野守　春日野には昔烽を置かれたので飛火野ともいふ。飛火野の番人。

○梓弓おして春雨　弓は押して張るものであるからこのやうに云ひかけたのである。おしなべて春の雨がの意。

○仁和のみかど　光孝天皇。

○ふりはへて　袖を振るといふ意と、わざ〳〵とをかけたもの。

○ぬき　横絲。

○うすみ　弱いので。

○べらなれ　べらはべしの變つたもの。べきなれの意。

鶯の谷よりいづる聲なくば春くることをたれか知らまし　　大江千里

春たてど花もにほはぬ山里はものうかる音に鶯のなく　　在原棟梁

題しらず　　讀人しらず

野邊ちかく家居しをれば鶯のなくなる聲はあさな〳〵聞く

春日野は今日はな焼きそ若草の妻も籠れりわれも籠れり

かすが野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ

み山には松の雪だにきえなくに都は野邊の若菜摘みけり

梓弓おして春雨今日降りぬ明日さへふらば若菜つみてむ

仁和のみかど皇子におまし〳〵ける時に人に若菜たまひける御歌

君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつゝ

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる　　貫之

春日野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人の行くらむ

題しらず　　在原行平朝臣

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそ亂るべらなれ

寛平の御時后の宮の歌合に詠める　　源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

歌奉れと仰せられし時詠みてたてまつれる　　貫之

我がせこが衣はる雨ふるごとに野邊の綠ぞ色まさりける

あをやぎの絲よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける

西大寺（にしのおほてら）のほとりの柳をよめる　　僧正遍昭

あさみどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか

題しらず　　讀人しらず

百千鳥（もゝちどり）さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

雁の聲を聞きて越（こし）へまかりける人を思ひてよめる　　凡河内躬恒

春くれば雁かへるなり白雲のみち行きぶりにことやつてまし

歸る雁をよめる　　伊勢

春霞たつを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる

題しらず　　讀人しらず

折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯の鳴く

○せこ　男にも女にも通じて云ふ詞であるが、こゝでは妻が夫の衣を張るの意に見るべきであらう。○衣はる雨　衣を張ると春雨と兩樣にかけたもの。○綻びにける　花の咲く事を云つたもので、上の絲縒りかくるに應ずる文飾。○玉にもぬける　玉にしてつないでゐる。ぬけるは貫ける。

○百千鳥　もろ〳〵の鳥。顯注にはこれを鶯と云つて居る。○たづきも知らぬ　たよりも知らぬ。案内も知らぬ。

○折りつれば袖こそ匂へ　梅の枝を折つたので花の香が移つて袖が匂ふのである。

色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

梅の花を折りてよめる　　東三條の左のおほいまうち君

鶯の笠にぬふてふ梅の花をりてかざさむ老いかくるやと

題しらず　　素性法師

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける　　友則

君ならでたれにか見せむ梅のはな色をも香をも知る人ぞ知る

くらぶ山にてよめる　　貫之

梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをるとてよめる　　躬恒

月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しくやどらでほどへて後にいた

○たが袖ふれし云々　このやうによい匂ひのするのは誰が袖をふれたのであらうかといふ意。

○あぢきなく　わけもなく。つまらなく。花があぢきなくの意。

○立ちよるばかりありしより　一寸立ち寄つたといふ程の事があつたが、それから。

○東三條の左のおほいまうち君　嵯峨天皇御子源常。左大臣であつた。

○笠にぬふ　鳥が枝の間をつたひあるくのをぬふといふ。

○くらぶ山　暗部山。山城にあるといふ。こゝは梅の名所であるから、その香によつて闇夜でも暗部山たる事がわかるといふ意。

○あやなし　役に立たぬ。無益なものである。

○人はいさ云々　人は心もいさ知らずの意。
○春ごとに云々　川の岸に梅があつて水に映るのを、眞の花と思つて折らうとしてはその水で袖が濡れる。これを毎春繰りかへすのである。
○ちりかゝる　花の散りかゝるを塵かゝるに通はせたもの。
○暮ると明くと　朝夕。毎日。
○めかれぬ　目を離さぬ。
○人ま　人の油斷して居る間。
○とゞめては　とめて置いたならば。
○うたて　いとはしい。
○春知りそむる　咲きはじめる。

れりければ彼の家のあるじかくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければそこにたてりける梅の花を折りてよめる　貫之

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける

水のほとりに梅の花の咲けりけるを詠める　伊勢

春ごとに流るゝ川を花と見て折られぬ水にそでやぬれなむ
年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

家に有りける梅の花のちりけるをよめる　貫之

暮ると明くとめかれぬ物を梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　讀人しらず

梅が香を袖に移してとゞめてば春は過ぐとも形見ならまし

素性法師

散ると見てあるべきものを梅の花うたて匂ひの袖にとまれる

題しらず　讀人しらず

散りぬとも香をだに殘せ梅の花戀しきときの思ひ出にせむ

人の家にうゑたりける櫻の花咲きはじめたりけるを見てよめる　貫之

ことしより春知りそむる櫻花ちるといふことは習はざらなむ

題しらず　　讀人しらず

山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわびそわれ見はやさむ

又は里とほみ人もすさめぬ山櫻

山櫻わが見に來れば春がすみ嶺にも尾にもたちかくしつゝ

染殿の后の御前に花瓶に櫻の花をささせ給へるを見てよめる

前のおほきおほいまうち君

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

渚の院にて櫻を見てよめる　　在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

題しらず　　讀人しらず

いはばしる瀧なくもがな櫻花たをりてもこむ見ぬ人のため

山の櫻を見てよめる　　素性法師

見てのみや人にかたらむ櫻花手ごとに折りていへづとにせむ

花ざかりに京を見やりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞはるの錦なりける

櫻の花の下(もと)にて年の老いぬる事を歎きてよめる　　紀友則

○すさめぬ　賞翫しない。

○染殿の后　文徳天皇の皇后。藤原良房の女、明子。

○花をし見れば　自分の女が皇后となつて榮えて居るのを花によそへて詠んだもの。
○渚の院　河内國にあつた。

○いへづと　家への土産。

色も香もおなじ昔に咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける

をれる櫻をよめる　　貫之

たれしかもとめてをりつる春霞立ちかくすらむ山の櫻を

歌奉れと仰せられし時によみてたてまつれる

櫻花咲きにけらしもあしびきの山のかひより見ゆる白雲

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　友則

みよし野の山邊にさける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

やよひに閏月の有りける年よみける　　伊勢

さくらばな春くははれる年だにもひとの心にあかれやはせぬ

櫻の花の盛りに久しくとはざりける人の來りける時によみける　　讀人しらず

あだなりと名にこそたてれさくら花としにまれなる人も待ちけり

かへし　　業平朝臣

今日こずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

題しらず　　讀人しらず

ちりぬれば戀ふれど驗なきものをけふこそ櫻折らば折りてめ

折りとらばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散るまでは見む

○年ふる人云々　年を經た人は若い時とは變つてしまつた。

○たれしかも　誰が。しは助詞。

○山のかひ　山の峽。山の間。

○春くははれる年　閏で春が四箇月あるからである。

○としにまれなる云々　たまにしか訪ねて來ぬ人をさへ今日まで待つて散らずにゐた。

○消えずはありとも　消えないで殘つてゐても。

○けふこそ櫻云々　櫻を折るならば今日のうちに折るべきである。

さくら色に衣は深く染めてきむ花のちりなむ後のかたみに　　紀在友

櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける人によみておくりける　　躬恒

我が宿の花見がてらにくる人は散りなむのちぞ戀しかるべき

亭子院歌合の時よめる　　伊勢

見る人もなき山里のさくら花ほかのちりなむ後ぞ咲かまし

○散りなむのちぞ云々　花が散つたならば訪ねても來ないだらうから、散つた後にその人が戀しからう。

○亭子院　宇多法皇の御所。

古今和歌集　卷第二

春歌　下

題しらず　讀人しらず

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

待てといふに散らでしとまるものならば何を櫻に思ひまさまし

のこりなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての憂ければ

このさとに旅寢しぬべし櫻ばなちりのまがひに家路わすれて

うつ蟬の世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散りにけり

僧正遍昭によみておくりける　惟喬のみこ

櫻花ちらば散らなむ散らずとてふるさと人のきても見なくに

雲林院(うりんゐん)にて櫻の花のちりけるを見てよめる　そうく法師

櫻散るはなのところは春ながら雪ぞふりつゝきえがてにする

櫻の花の散り侍りけるを見て詠みける　素性法師

花ちらす風のやどりはたれかしるわれに敎へよ行きて恨みむ

○色かはりゆく　霞の色が。

○何を櫻に云々　櫻に思ひ增すものが何があらう。

○ちりのまがひに　散るまぎれに

○かつ散りにけり　一方ではもう散つてしまつた。

○ちらば散らなむ　散るならば散つてしまへ。

○ふるさと人　遍昭を指して云はれたもの。

○きえがてにする　がては難。消えにくい。

雲林院にて櫻の花をよめる　　そうく法師

いざ櫻我もちりなむひとさかりありなば人にうき目見えなむ

あひ知れりける人のまうできて歸りにける後によみて花にさしてつかはしける　　貫之

ひとめ見し君もやくると櫻花けふは待ちみて散らばちらなむ

山の櫻を見てよめる

春がすみなにかくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

心地そこなひてわづらひける時に風にあたらじとておろしこめてのみ侍りける間に折れる櫻の散りがたになれりけるを見てよめる　　藤原よるかの朝臣

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

東宮の雅院にて櫻の花の御溝水(みかはみづ)にちりて流れけるを見てよめる　　菅野高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ

櫻の花のちりけるをよめる　　貫之

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花みるわれさへにしづ心なし

櫻のごと疾くちる物はなしと人のいひければよめる

さくら花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

○ひとさかり云々　一盛りが過ぎて衰へたならば憂き目の人に見られるだらうから。

○ひとめ見し云々　僅かに一目見て歸つた人、あなたが又見に來るかと今日一日だけは待つて見て。

○ちるまをだにも　せめて散る間なりとも。

○東宮の雅院　東宮の御學問所。東宮は保明親王。

○こそなれ　異本にこそ見れとある。

○ことならば　同じことなら。このやうに早く散る位ならば。

○風もふきあへぬ　風の吹くまでもなく、早く移つてしまふ。

さくらの花のちるをよめる　　紀友則

久かたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちるらむ

東宮の帯刀(たちはき)の陣にて櫻の花の散るをよめる　　藤原好風

春風ははなのあたりをよきて吹け心づからやうつろふとみむ

櫻のちるをよめる　　凡河内躬恆

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹くらむ

ひえに登りて歸りまうできて詠める　　貫之

山たかみ見つゝわがこし櫻花風はこゝろにまかすべらなり

題しらず　　大伴黒主

はるさめの降るは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなければ

亭子院の歌合の歌　　貫之

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに波ぞ立ちける

ならのみかどの御歌

故郷となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり

春の歌とてよめる　　良岑宗貞

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

○よきて吹け　避けて吹け。
○心づから　心から。花が自分の心から。
○いかにちれとか云々　此の上にどんなに散れといふので風は吹くのだらうか。
○風はこゝろに云々　風は心まかせにするであらう。
○涙　花の散るを惜しむ涙。
○なごり　餘波。海で風の止んだあとに浪の立つこと。風の吹いたあと。
○ならのみかど　平城天皇。

寬平の御時后の宮の歌合の歌　　素性法師

花の木も今はほり植ゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり

題しらず　　讀人しらず

春の色の到りいたらぬ里はあらじ咲けるさかざる花の見ゆらむ

春の歌とてよめる　　貫之

三輪山をしかもかくすか春がすみ人にしられぬ花やさくらむ

雲林院の皇子(みこ)の許に花見に北山の邊(ほとり)にまかれりける時によめる　　素性

いざけふは春の山邊にまじりなむ暮れなばなげの花のかげかは

春の歌とてよめる

いつまでか野邊に心のあくがれむ花し散らずば千代も經ぬべし

題しらず　　讀人しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

花のごと世の常ならばすぐしてし昔はまたもかへり來なまし

吹く風にあつらへつくるものならば此の一本はよきよといはまし

待つひとも來ぬものゆゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　　藤原興風

○花の木　花の咲く木。
○ほり植ゑじ　掘つて來て植ゑまい。
○到りいたらぬ云々　春はどこにでも皆一樣に到るべきものであるのに。
○しかも　さも。このやうにも。
○雲林院の皇子　仁明天皇第七皇子常康親王。
○なげの花のかげかは　花の陰がないではない。日が暮れたならば花の陰に宿らうといふ意。
○花し散らずは　花が散らずにあつたなら。しは意を強める助詞。
○ありなめど　あらうけれども。
○花のごと世の常ならば　世の中が花の年々きまつて咲くやうに定まつてかはらぬものならば。
○すぐしてし昔　過して來た昔。
○かへり來なまし　歸つて來るであらうに。
○あつらへつくるものならば　頼んでいひつけられるものならば。
○來ぬものゆゑに　來もしないのに。

○ちぐさながらに　どんな花でもすべて。

○鶯のなく野邊　なくは鶯が惜しんでなく意。

○仁和の中將の御息所の家　光孝天皇の御代、中將の御息所と云つた家。
○たつたの山　霞が立つと、立田山と兩方にかけたもの。

○誰におほせて　誰の咎にして。
○こゝら　幾許。多い意。こゝではしきりにの意が當る。

咲く花はちぐさながらにあだなれどたれかは春を恨みはてたる
春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも　　在原元方

かすみたつ春の山邊はとほけれど吹きくる風は花の香ぞする

　　うつろへる花を見てよめる　　躬恒

花みれば心さへにぞうつりける色には出でじ人もこそ知れ

　　題しらず　　讀人しらず

鶯のなく野邊ごとに來てみればうつろふ花にかぜぞ吹きける
吹くかぜをなきてうらみよ鶯はわれやは花に手だにふれたる　　典侍洽子朝臣

散る花のなくにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは

　　仁和の中將の御息所の家に歌合せむとてしける時によめる　　藤原後蔭

花のちることやわびしき春がすみたつたの山のうぐひすの聲

　　鶯の鳴くをよめる　　素性

木傳へばおのが羽風にちる花を誰におほせてこゝら鳴くらむ

　　鶯の花の木にて鳴くをよめる　　躬恒

しるしなき音をもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらず　　讀人しらず

駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそ花は散るらめ

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もともにあらむものかは

小野小町

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとてしける時によめる　　素性

をしと思ふ心は絲によられなむ散る花ごとにぬきてとゞめむ

志賀の山越にをんなの多くあへりけるによみて遣はしける　　貫之

梓弓はるのやまべを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春の山邊にねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや

○しるしなき　詮ない。役にも立たぬ。

○駒なめて　一本「駒なべて」とある。

○世にふる　男女のかたらひをすること。

○ながめ　物思ひと長雨とをかけて云つたもの。

○絲によられなむ　絲によられるものならよいに。

○道もさりあへず　道もよけられぬほど。

○花ぞ散りける　花は女らを云つたもの。

○やどりして云々　春の山邊にやどりしてねたる夜はの意。

志賀より歸りける女どもの花山に入りて藤の花の下に立ちよりて歸りけるに詠みて送りける　僧正遍昭

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

家に藤の花さけりけるを人の立ちとまりて見けるをよめる　躬恒

我が宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ

題しらず　讀人しらず

今もかも咲きにほふらむたちばなのこじまのさきの山吹の花

はるさめににほへるいろもあかなくに香さへなつかし山吹の花

山吹はあやなな咲きそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに

吉野川の邊に山吹の咲けりけるをよめる　貫之

吉野川きしのやまぶき吹く風に底のかげさへうつろひにけり

題しらず　讀人しらず

かはづなく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

此の歌は或人のいはく橘のきよともが歌なり

春の歌とてよめる　素性

思ふどち春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅寢してしが

○今もかも　もは共に助詞。今やといふ意。
○あかなくに　何とも云へずよいのに。
○あやなな　あやなしに同じ。
○な咲きそ　咲くな。
○あはましものを　逢ふやうに來るべきであつたのに。
○そこともいはぬ云々　何處と定まつた旅でなく心のむくまゝに歩いて旅寢をして見たい。

○かへる道にし云々　歸る道に旅立つたので。霞はたつの緣に云つたもの。

○ものとはなしに　ものでもないのに。

○散る花　花つみの女どもをさして云つたもの。

春のとく過ぐるをよめる　　躬恒

梓弓春たちしよりとしつきの射るがごとくもおもほゆるかな

やよひに鶯の聲久しう聞えざりけるをよめる　　貫之

鳴きとむる花しなければ鶯もはてはものうくなりぬべらなり

やよひのつごもりがたに山を越えけるに山川より花の流れけるをよめる　　深養父

花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もなくなりにけり

春を惜しみてよめる　　元方

をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　興風

聲たえずなけや鶯ひととせにふたたびとだに來べき春かは

やよひのつごもりの日花つみより歸りける女どもを見てよめる　　躬恒

とゞむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

やよひのつごもりの日雨の降りけるに藤の花を折りて人に遣はしける　　業平朝臣

ぬれつゝぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

亭子院の歌合に春のはての歌　　躬恒

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

㈠今日のみと云々　春をもうけふだけであると思はぬ時でも。㈡たつことやすき云々　花の下はたち去りたくない。かはは反語。

古今和歌集　卷第三

夏歌

題しらず　　讀人しらず

我がやどの池の藤波さきにけり山ほとゝぎすいつか來なかむ

この歌ある人のいはく柿本人麿がなり

卯月にさける櫻を見てよめる　　紀としさだ

あはれてふ事をあまたにやらじとや春に遅れてひとりさくらむ

題しらず　　讀人しらず

さつきまつ山郭公うち羽ぶきいまもなかなむ去年のふるごゑ

伊勢

五月(さつき)こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや

讀人しらず

さつき待つ花たちばなの香をかげば昔のひとの袖の香ぞする

いつのまに五月きぬらむあしびきの山郭公いまぞ鳴くなる

○あまたに　あまたの櫻に。

○うち羽ぶき　羽を振ふこと。

○五月こば　五月になつたならば

○まだしきほどのこゑ　まだその時節にならぬうちの聲。

○昔のひと　前かたのなじみの人

けさきなきいまだ旅なるほとゝぎす花たちばなに宿はからなむ

音羽山を越えける時に郭公の鳴くをききてよめる　　紀友則

音羽山けさ越えくればほとゝぎす梢はるかに今ぞなくなる

郭公の初めて鳴きけるを聞きてよめる　　素性

ほとゝぎす初聲きけばあぢきなく主さだまらぬ戀せらるはた

奈良の石上寺にて郭公の鳴くをよめる

いそのかみふるきみやこの郭公聲ばかりこそむかしなりけれ

題しらず　　讀人しらず

夏山になくほとゝぎす心あらば物おもふわれに聲な聞かせそ

ほとゝぎすなく聲きけばわかれにし故鄕さへぞこひしかりける

郭公ながなく里のあまたあればなほ疎まれぬ思ふものから

おもひいづるときはの山の郭公からくれなゐのふり出てぞ鳴く

こゑはして涙は見えぬほとゝぎすわが衣手のひづをからなむ

あしびきの山郭公をりはへて誰かまさると音をのみぞなく

いまさらに山へかへるな郭公こゑのかぎりは我がやどに鳴け

みくにのまち

○いまだ旅なるほとゝぎす　今朝はじめて來たばかりで、まだ住みつかず旅心持で鳴く郭公。

○はた　又。三句の上に置いて見る。面白くはあるがまた。

○聲ばかりこそ云々　すべてが昔とは變つてゐるが、郭公の聲だけは昔の通りである。

○ながなく里　汝が鳴く里。
○思ふものから　思ひはするが。
○からくれなゐの　次の句の序。
○ふり出てぞ鳴く　聲に出して泣く。
○わが衣手のひづを云々　わが袖の濡れてゐるのを借りるがよからう。
○をりはへて　時長く。間斷なしに。

○わがやどをしも云々　鳴き過ぎられぬやうにわが宿でばかり鳴いてゐる。

○あかずとや鳴く　あまり夜が短いのを残り惜しく思つて鳴くのか

○それかあらぬか　去年の郭公かしら、さうではないかしら。

○夜たゞ　夜一夜ひたすら。

やよやまて山郭公ことづてむわれ世のなかにすみわびぬとよ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　紀友則

さみだれに物思ひをれば郭公夜ぶかく鳴きていづち行くらむ

大江千里

夜やくらき道やまどへる郭公わがやどをしも過ぎがてに鳴く

紀貫之

やどりせし花たちばなも枯れなくになど郭公こゑたえぬらむ

壬生忠岑

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひと聲に明くるしのゝめ

紀秋岑

暮るゝかとみれば明けぬる夏の夜をあかずとや鳴くやま郭公

讀人しらず

夏山にこひしき人や入りにけむ聲ふりたてて鳴くほとゝぎす

題しらず

去年の夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

郭公の鳴くを聞きてよめる　　貫之

五月雨のそらもとゞろに郭公なにをうしとか夜たゞ鳴くらむ

○ひとまつやま　人を待つてゐる松山。
○われうちつけに云々　自分も人を待つ心がにはかにまさつた。
○早くすみける所　以前に住んでゐた所。
○むかしべや云々　昔が今でも戀しいのか。

○まだよひながら　まだ宵のまゝで更ける暇もなくもう明けた。

○いもと我がぬる　とこと云ふ爲の序。

さぶらひにてをのこどもの酒たうべけるに召して郭公まつ
歌よめとありければよめる　躬恒

郭公こゑもきこえず山びこはほかに鳴く音をこたへやはせぬ

山に郭公の鳴きけるを聞きてよめる　貫之

郭公ひとまつやまに鳴くなればわれうちつけに戀ひまさりけり

早くすみける所にて郭公の鳴きけるを聞きてよめる　忠岑

むかしべや今も戀しきほとゝぎす故郷にしもなきてきつらむ

郭公の鳴きけるを聞きてよめる　躬恒

ほとゝぎすわれとはなしにうの花の憂きよの中に鳴き渡るらむ

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月の面白かりける夜あかつきがたによめる　深養父

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらむ

鄰より常夏(とこなつ)の花をこひにおこせたりければをしみてこの歌をよみて遣は
しける　躬恒

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしよりいもと我がぬる常夏の花

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ

古今和歌集　卷第四

秋歌上

秋立つ日よめる　藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

秋立つ日うへのをのこども賀茂の川原に川逍遙しけるともにまかりてよめる　貫之

川風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

題しらず　讀人しらず

我がせこが衣の裾を吹きかへしうら珍らしき秋のはつ風

昨日こそさ苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風ぞ吹く

あきかぜの吹きにし日より久かたのあまの河原にたたぬ日はなし

ひさかたの天の河原のわたしもり君渡りなばかぢかくしてよ

天の川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ

こひ戀ひて逢ふ夜は今宵あまの川霧たちわたりあけずもあらなむ

○涼しくもあるか　かは、かなの意。

○君渡りなば　織女星の心として詠んだもの。君は牽牛星をさす。
○たなはたつめ　織女星。

寛平の御時七日の夜うへにさぶらふ男ども歌奉れと仰せられける時人にかはりてよめる　　友則

天の川あさせしら波たどりつゝわたりはてねば明けぞしにける

同じ御時きさいの宮の歌合の歌　　藤原興風

契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

なぬかの日の夜よめる　　凡河内躬恒

年ごとに逢ふとはすれどたなばたのぬる夜の數ぞすくなかりける

たなばたにかしつる絲のうちはへて年のを長く戀ひや渡らむ

題しらず　　素性

今宵來む人にはあはじたなばたの久しきほどに待ちもこそすれ

七日の夜の曉によめる　　源宗于朝臣

今はとてわかるゝときは天の川渡らぬさきに袖ぞひぢぬる

八日の日よめる　　壬生忠岑

けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみ待ち渡るべき

題しらず　　讀人しらず

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり

○あさせしら波　淺瀨を知らぬので。
○渡りはてねば　まだ渡つてしまはぬのに。
○年にひとたび云々　一年に一度逢ふ位なら逢ふとは云はれない。
○たなばたの久しきほどに云々　棚機にあやかつて久しく待つやうな事になるかも知れぬので。
○今こむ年　今から來る年。來年
○いつしかとのみ　いつか〳〵とそれをひたすら。

○おほかたの秋　世間一般の秋。自分一人のではない秋。
○わが身こそ　自分一人が。
○これさだのみこ　光孝天皇第二皇子。是貞親王。
○いつはとは　いつは物を思はぬ時さいふ時節はない、いつでも物思ひはあるが。
○かんなりのつぼ　襲芳舍をいふ

おほかたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

わが爲にくる秋にしもあらなくに蟲の音きけばまづぞ悲しき

ものごとに秋ぞ悲しきもみぢつゝ移ろひゆくをかぎりと思へば

ひとりぬる牀は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり

これさだのみこの家の歌合の歌

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける

かんなりのつぼに人々集まりて秋の夜惜しむ歌よみけるついでによめる　躬恒

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらに寐て明すらむ人さへぞうき

題しらず　讀人しらず

しら雲に羽うちかはしとぶ鴈のかずさへみゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし鴈がねのきこゆる空に月渡るみゆ

是貞のみこの家の歌合によめる　大江千里

月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

忠岑

久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ

月をよめる　在原元方

秋の夜のつきの光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

人の許にまかれりける夜きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる　藤原たゞふさ

蟋蟀(きりぎりす)いたくな鳴きそあきの夜のながき思ひはわれぞまされる

是貞のみこの家の歌合のうた　敏行朝臣

秋の夜の明くるも知らず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ

題しらず　讀人しらず

秋萩も色づきぬればきりぎりす我がねぬごとや夜は悲しき

秋の夜は露こそことにさむからし草むらごとに蟲のわぶれば

君しのぶ草にやつるゝ故郷はまつむしの音ぞ悲しかりける

秋の野に道もまどひぬ松蟲のこゑするかたにやどやからまし

秋の野にひとまつ蟲の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ

もみぢ葉の散りて積れる我が宿に誰をまつ蟲こゝら鳴くらむ

ひぐらしのなきつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

初雁をよめる　在原元方

○くらぶの山もこえぬべらなり　闇いといふ名のくらぶ山も越えられようと思はれる。

○さむからし　寒いらしい。

○やつるゝ　見苦しくなつてゐるさま。

○ひとまつ蟲　人を待つと松蟲と兩方にかけたもの。

○なきつるなべに　鳴いて居ながら引續いて。

待つ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしきかな

是貞のみこの家の歌合の歌　友則

秋風に初雁がねぞきこゆなるたがたまづさをかけて來つらむ

題しらず　讀人しらず

我が門に稲おほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は來にけり

いと早も鳴きぬる雁かしら露の色どる木々ももみぢあへなくに

春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりの上に

夜を寒み衣かりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり

此の歌は或人のいはく柿本人麿がなりと

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船は天のとわたる雁にぞありける

雁のなきけるを聞きてよめる　躬恒

うきことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合の歌　忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音にめをさましつゝ

讀人しらず

○待つ人にあらぬものから　待つて居る人ではないが。

○もみぢあへなくに　十分に紅葉もしないのに。

○衣かりがね　衣を借ると雁とにかけある。

○聲をほに云々　空を海に見立てて、雁を船といひ、聲高く鳴くのをほにあげるといつたもの。

おくやまに紅葉ふみわけなく鹿の聲きくときぞ秋はかなしき

題しらず

秋萩にうらびれをればあしびきの山したとよみ鹿の鳴くらむ

秋はぎをしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ

是貞のみこの家の歌合によめる

秋萩のはな咲きにけりたかさごのをのへの鹿は今や鳴くらむ

昔あひ知りて侍りける人の秋の野にて逢ひて物語しけるついでによめる

躬恒

あき萩のふるえにさける花みればもとの心は忘れざりけり

題しらず　　讀人しらず

秋萩の下葉色づくいまよりやひとりある人のいねがてにする

なきわたる雁の涙やおちつらむ物思ふ宿の萩のうへの露

萩のつゆ玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ

ある人のいはくこの歌は奈良の帝の御歌なりと

をりてみばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露

萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

○紅葉ふみわけ　鹿がふみわけるのである。

○うらびれをれば　物思ひをして居るのに。

○とよみ　ひゞくほどに。

○しがらみふせて　踏み荒しおしふせてしがらみとして。

○ふるえ　古枝。去年の古枝。

○けぬ　消えぬ。消えた。

○たわゝに　たわむほどに。

○ぬれてを　をは感動の助詞。

是貞のみこの家の歌合によめる　文屋朝康

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくもの絲すぢ

題しらず　僧正遍昭

名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな

僧正遍昭が許に奈良へまかりける時に男山にて女郎花を見てよめる　布留今道

女郎花うしとみつゝぞゆきすぐる男山にしたてりと思へば

是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

題しらず　小野美材

女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

朱雀院の女郎花合に詠みて奉りける　左のおほいまうち君

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつを誰によすらむ

藤原定方朝臣

秋ならであふことかたき女郎花あまの川原におひぬものゆゑ

貫之

○名をむつましみ　女郎花といふ名がむつましいので。

○あまの川原におひぬものゆゑ　天の川の川原に生えてゐるのでもないのに。

たがあきにあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ　　躬恒

妻こふる鹿ぞなくなる女郎花おのがすむ野の花としらずや

女郎花ふきすぎてくる秋かぜは目には見えねど香こそしるけれ　　忠岑

人の見ることやくるしき女郎花秋ぎりにのみたちかくるらむ

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ宿にうゑて見ましを

物へまかりける人の家に女郎花うゑたりけるを見てよめる　　兼覧王

女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたるやどに獨りたてれば

寛平の御時藏人所のをのこども嵯峨野に花見むとてまかりたりける時歸るとて皆歌よみけるついでによめる　　平貞文

花にあかでなに歸るらむ女郎花おほかる野邊にねなましものを

是貞のみこの家の歌合の歌　　敏行朝臣

何人かきてぬぎかけしふぢばかま來る秋ごとに野邊を匂はす

藤袴をよみて人に遣はしける　　貫之

やどりせし人のかたみか藤ばかま忘られがたき香に匂ひつゝ

○たがあきに云々　誰が飽きたといふ秋でもないのに。

○ながむる　しをしをと物思ひにしづむ。

○うしろめたく　氣遣はしい。女郎花を女に見立てて云つたもの。

○きてぬぎかけし　著てぬぎかけたものだらうか。

ふぢばかまをよめる　素性

ぬししらぬ香こそ匂へれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも

題しらず　平貞文

今よりは植ゑてだに見じ花薄ほにいづる秋はわびしかりけり

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋の野のくさのたもとか花薄ほにいでてまねく袖とみゆらむ

素性法師

われのみやあはれと思はむ蛬（きりぎりす）なくゆふかげのやまとなでしこ

題しらず　讀人しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

もゝ草の花のひもとく秋の野におもひたはれむ人なとがめそ

月草に衣はすらむあさ露にぬれてののちはうつろひぬとも

仁和の帝みこにおはしましける時ふるの瀧御覽ぜむとておはしましける道に遍昭が母の家に宿り給へりける時に庭を秋の野につくりて御物語のついでによみて奉りける　僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

○ほにいづる秋　穗の出る秋。

○ほにいでてまねく　色にあらはして戀しい人をまねく。

○ひもとく　花の開くこと。
○おもひたはれむ　興がり戯れよう。

○人はふりにし宿　住んで居るものは老人である。
○宿なれや　宿にてあればにやの意。

古今和歌集　巻第五

秋歌　下

是貞のみこの家の歌合の歌　　文屋康秀

吹くからに秋の草木の萎るればむべ山風をあらしといふらむ

草も木も色かはれどもわたつ海のなみのはなにぞ秋なかりける

秋の歌合しける時によめる　　紀淑望

もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたるらむ

題しらず　　讀人しらず

霧たちて鴈ぞ鳴くなる片岡のあしたのはらはもみぢしぬらむ

神無月(かみなづき)しぐれもいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびの森

ちはやぶる神なびの山のもみぢ葉におもひはかけじうつろふものを

貞觀の御時綾綺殿の前に梅の木ありけり西の方にさせりける枝の紅葉

そめたりけるをうへに侍ふ男どものよみけるついでによめる　　藤原勝臣

おなじえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋の初めなりけれ

○吹くからに　吹くとそのまゝ。
○むべ　尤もなこと。

○あしたのはら　朝の原。片岡にある原。
○かねて　はや。すでに。
○神なびの森　神なび山と共に大和國高市郡にある。

○おなじえ　同じ一本の木の枝。

石山に詣でける時音羽山の紅葉を見てよめる　貫之

秋風の吹きにし日より音羽山みねのこずゑも色づきにけり

是貞のみこの家の歌合によめる　敏行朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちゞにそむらむ

壬生忠岑

秋の夜の露をばつゆとおきながら鴈の涙や野邊をそむらむ

題しらず　讀人しらず

秋の露色々ことにおけばこそ山の木の葉のちぐさなるらめ

もる山のほとりにてよめる　貫之

しらつゆも時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

秋の歌とてよめる　在原元方

雨降れどつゆももらじを笠とりの山はいかでか紅葉そめけむ

神の社の邊をまかりける時にいがきのうちの紅葉を見てよめる　貫之

ちはやぶる神のい垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

是貞のみこの家の歌合によめる　忠岑

雨ふればかさとり山のもみぢ葉は行きかふ人の袖さへぞてる

○みねのこずゑ　峯の木の梢。

○ひとつを　一つであるのに。

○露をばつゆと云々　露は露として其のまゝおいて。

○色々ことに云々　たゞ白い色のみでなく、いろ／＼の色で置くからこそ。

○もる山　漏る山を守山にかけたもの。

○い垣　齋垣。瑞籬。
○あへず　堪へず。

○雨ふれば　かさといふ爲の序。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　讀人しらず

散らねどもかねてぞをしきもみぢ葉は今はかぎりの色と見つれば

大和の國にまかりける時佐保山に霧のたてりけるを見てよめる　　紀友則

たがための錦なればか秋霧のさほの山べをたちかくすらむ

是貞のみこの家の歌合のうた　　讀人しらず

秋霧は今朝はなたちそさほやまの柞(はゝそ)のもみぢよそにても見む

秋の歌とてよめる　　坂上是則

佐保山のはゝその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

人の前栽に菊に結び附けて植ゑける歌　　在原業平朝臣

うゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへ枯れめや

寛平の御時菊の花をよませたまうける　　敏行朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

この歌はまだ殿上許されざりける時に召し上げられてつかうまつるとなむ

是貞のみこの家の歌合の歌　　紀友則

露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかるべく

○散らねども云々　紅葉はまだ散りはせぬが、散らぬさきから。

○よそにても見む　よそからなりとも眺めたいから。

○うゑし植ゑば　植ゑてさへおいたならば。しは助詞。○秋なき時や云々　秋のない年には咲かないだらうが。○花こそちらめ　今年の花は散つてしまはうけれども。○雲のうへ　禁中。

○老いせぬ秋云々　いつまでも年のよらぬ秋を久しく重ねて長生するやうに。

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　大江千里

植ゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

同じ御時せられける菊合に洲濱をつくりて菊の花植ゑたりけるにくはへたりける歌

吹上の濱に菊植ゑたりけるをよめる　　菅原朝臣

秋風のふきあげにたてる白菊は花かあらぬか波のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　　素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけむ

菊の花のもとにて人の人待てるかたをよめる　　友則

花見つゝ人まつ時はしろたへの袖かとのみぞあやまたれける

おほ澤の池のかたに菊植ゑたるをよめる

ひともとと思ひし花をおほさはの池の底にもたれか植ゑけむ

世の中のはかなきことを思ひける折に菊の花を見てよめる　　貫之

秋の菊匂ふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

白菊の花をよめる　　凡河内躬恒

こゝろあてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花

○あはむとや見し　やは反語。

○秋風のふきあげ　秋風の吹く吹上の濱。

○露のま　菊の露と露の間と兩方にかけたもの。

○袖かとのみ云々　白菊の花を、待つ人の袖に間違へる意。

○折らばやをらむ　折つたならば折れもしようか。

○秋をおきて云々　秋が過ぎてから又一度盛りの時節がある。

○散りぬべみ　散りさうに見えるので。

○いはがき紅葉　墻壁のやうに立つてゐる岩の陰にある紅葉。

是貞のみこの家の歌合の歌　　讀人しらず

いろかはる秋の菊をばひとゝせにふたたび匂ふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花めしける時に歌そへて奉れと仰せられければよみて奉りける　　平貞文

秋をおきて時こそ有りけれ菊の花移ろふからに色のまされば

人の家なりける菊の花を移し植ゑたりけるをよめる　　貫之

咲きそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらず　　讀人しらず

さほ山の柞(はゝそ)のもみぢ散りぬべみよるさへ見よと照らす月かげ

宮づかへ久しうつかうまつらで山里にこもり侍りけるによめる　　藤原關雄

奥山のいはがき紅葉ちりぬべし照る日のひかり見る時なくて

題しらず　　讀人しらず

たつたがは紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

此の歌は或人奈良の帝の御歌なりとなむ申す

龍田川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

又はあすか川もみぢ葉流る　　此歌不レ注ニ人麿歌一

○戀しくは　散つた紅葉の戀しい時には。「もみぢ葉を」とあるのは紅葉の落葉をさしたもの。
○もみぢ葉のゆくと云々　紅葉の行方定まらぬやうに。

○更にや訪はむ　やは反語。

○見よとか　見よといふことなのか。

○からくれなゐに云々　川の水を紅のくゝりぞめにするといふ意。

戀しくば見てもしのばむもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくと定めぬわれぞ悲しき

秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみ分けてとふ人はなし

ふみわけて更にや訪はむ紅葉のふりかくしたる道と見ながら

秋の月やまべさやかに照らせるはおつる紅葉の數を見よとか

吹く風の色の千種に見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり　　關雄

霜のたて露のぬきこそ弱からしやまの錦の織ればかつちる

雲林院の木のかげにたゝずみてよみける　　僧正遍昭

わび人のわきて立ちよる木の下は賴むかげなく紅葉散りけり

二條の后の春宮の御息所と申しける時に御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる　　素性

もみぢ葉の流れてとまるみなとには紅ふかき波やたつらむ　　業平朝臣

ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くゝるとは

是貞のみこの家の歌合の歌　　敏行朝臣

○散りこまがふに　散りまがふ。

○錦たちきる　錦を裁つて著る。

我がきつる方も知られずくらぶ山木々のこの葉の散りとまがふに

忠岑

かみなびのみむろのやまを秋ゆけば錦たちきるこゝちこそすれ

北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる　貫之

見るひともなくて散りぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり

秋の歌　兼覧王

龍田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ

小野といふ所に住み侍りける時もみぢを見てよめる　貫之

秋のやま紅葉を幣(ぬさ)とたむくれば住むわれさへぞ旅心地する

神なび山を過ぎて龍田川を渡りける時に紅葉の流れけるをよめる　清原深養父

かみなびの山を過ぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

寛平の御時后の宮の歌合の歌　藤原興風

しら波にあきの木の葉のうかべるをあまの流せる船かとぞ見る

龍田川のほとりにてよめる　坂上是則

もみぢ葉の流れざりせば龍田川みづの秋をばたれか知らまし

志賀の山越にてよめる　春道列樹

○しがらみ　川の中に杭を打ち横に竹をわたしたもので、水の流れを防ぐために造る。
○散らぬ影さへ云々　まだ散らずに枝にある紅葉の影まで底にうつつて散つてゐるやうに見える。
○見てを渡らむ　をは感動の意を表はす助詞。
○山田もる　山田の番をする。
○ほにもいでぬ　まだ穂も出ぬ。
○ふぢ衣　賤人の著物。
○穭　刈り取つた後に再び自生する稲をいふ。
○あき果てぬ　秋がはてたと、飽き果てたと、兩方にかけたもの。

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　躬恒

風ふけばおつるもみぢ葉水きよみ散らぬ影さへ底に見えつゝ

亭子院の御屏風の繪に川渡らむとする人の紅葉のちる木のもとに馬をひかへて立てるをよませ給ひければつかうまつりける

立ちとまり見てを渡らむもみぢ葉は雨と降るとも水はまさらじ

是貞のみこの家の歌合の歌　忠岑

山田もる秋のかり庵におく露はいなおほせ鳥の涙なりけり

題しらず　讀人しらず

ほにもいでぬ山田をもるとふぢ衣稲葉の露にぬれぬ日はなし

刈れる田に生ふる穭(ひつぢ)のほに出ぬは世を今更にあき果てぬとか

北山に僧正遍昭と茸狩にまかれりけるによめる　素性法師

もみぢ葉は袖にこき入れてもて出なむ秋はかぎりと見む人のため

寛平の御時ふるき歌奉れとおほせられければ龍田川もみぢ葉流るといふ歌を書きてその同じ心をよめりける　興風

みやまより落ちくる水の色みてぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

○秋はくるらむ　秋は暮れてしまふのであらうか。

秋のはつる心を龍田川に思ひやりてよめる　　貫之

年毎にもみぢ葉ながす龍田川みなとや秋のとまりなるらむ

ながつきのつごもりの日大井にてよめる

ゆふづくよをぐらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ

同じつごもりの日よめる　　躬恒

道しらば尋ねも行かむもみぢ葉を幣とたむけて秋はいにけり

古今和歌集　巻第六

冬　歌

題しらず　　　　讀人しらず

たつた川にしきおりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

冬の歌とてよめる　　　　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

題しらず　　　　讀人しらず

おほぞらの月の光し清ければかげ見し水ぞまづこほりける

夕されば衣手さむしみよしのの吉野の山にみゆきふるらし

今よりはつぎて降らなむわが宿のすゝきおしなみふれるしら雪

ふる雪はかつぞけぬらし足びきの山の瀧つ瀬おとまさるなり

この川にもみぢばながる奥山のゆきげの水ぞいままさるらし

ふるさとは吉野の山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし

我が宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

〇たてぬき　竪と横。機の竪絲と横絲と。

〇人目も草も云々　人目も離れ、草も枯れる。人目も離れるとは誰も訪ねて來る人もない意。

〇夕されば　夕方になること。

〇つぎて降らなむ　續いて降つてほしい。

〇おしなみ　押しなびかして。

〇かつぞけぬらし　降るうちに、もう一方では消えるらしい。

〇山の瀧つ瀬　山から流れ落ちる川水。

〇ふるさと　吉野の里を指す。

冬の歌とてよめる　　紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲きける

志賀の山ごえにてよめる　　紀あきみね

白雪のところもわかず降りしけば巖にも咲くはなとこそ見れ

奈良の京にまかれりける時に宿りける所にてよめる　　坂上是則

みよしのの山のしら雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　藤原興風

浦ちかく降りくる雪はしら波のすゑの松山こすかとぞ見る

壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへやおもひきゆらむ

雪のふるを見てよめる　　凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬ道なれや跡はかもなくおもひ消ゆらむ

雪のふりけるをよみける　　清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

雪の木に降りかゝれりけるを詠める　　貫之

○さむくなりまさる　寒さがだんだん強くなる。

○すゑの松山　奥州の歌枕。

○おもひきゆらむ　雪は消えるものであるが、その雪のやうに心も消え入るやうに思ふであらう。

冬ごもり思ひかけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける

大和の國にまかれりける時に雪の降りけるを見てよめる　坂上是則

あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降れるしら雪

題しらず　讀人しらず

けぬがうへにまたもふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め

梅のはなそれとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

此の歌は或人のいはく柿本人麿が歌なり

梅の花に雪のふれるをよめる　小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく

雪のうちの梅の花をよめる　紀貫之

梅の香の降りおける雪に紛ひせば誰かことごと分きて折らまし

ゆきのふりけるを見てよめる　紀友則

雪ふれば木毎に花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし

物へまかりける人を待ちてしはすのつごもりによめる　躬恒

我がまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

年のはてによめる　在原元方

○思ひかけぬを　思ひがけもないのに。

○けぬがうへに　消えない上に。○またもふりしけ　なほも續いて降り重なれ。○あまぎる雪　空が曇るやうにして降る雪。○なべて　おしなべて。どこもかも一面に。

○香をだに匂へ　香なりとも匂へ

○ことごと云々　別々にはつきりと見分けて。

○かれにし人　よそに行つた人。冬草の枯れると、離れた人と、兩方にかけたもの。

あらたまの年の終りになるごとに雪もわが身もふりまさりつゝ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　讀人しらず

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

年のはてによめる　　春道列樹

昨日といひ今日と暮してあすか川ながれて早き月日なりけり

歌奉れと仰せられし時によみて奉れる　　紀貫之

行く年の惜しくもあるかなます鏡みる影さへにくれぬと思へば

○雪もわが身も云々　雪も降るしわが身も古くなつて年寄る。

○ます鏡云々　年の積るにしたがつて、鏡で見る影までが、老い暮れてゆくと思ふこと。

○ありかず　ある數。ある限りの數。生きながらへる齡。
○しほの山　さしでの磯と共に甲斐の國にあるといふ。
○とゞめおきては　留め置いたならば。
○逢ふよしもがな　逢ふやうにしたい。
○つくからに　つくからしては。つけば。
○堀河のおほいまうちぎみ　太政大臣藤原基經。

古今和歌集　巻第七

賀歌

題しらず　讀人しらず

我が君は千世に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ君が千とせのありかずにせむ

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞ鳴く

我が齡きみがやちよにとり添へてとゞめおきてば思ひでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝとにもかくにも長らへて君が八千代に逢ふよしもがな

仁和の帝のみこにおはしましける時に御をばの八十(やそぢ)の賀にしろがねを杖につくれりけるを見てかの御をばにかはりてよめる　僧正遍昭

千早ぶる神のきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

堀河のおほいまうちぎみの四十(よそぢ)の賀九條の家にてしける時によめる　在原業平朝臣

櫻花ちりかひ曇れおいらくの來むといふなるみちまがふがに

さだときの皇子のをばの四十の賀を大井にてしける日よめる　紀これをか

龜のをのやまのいはねをとめておつる瀧の白玉千世の數かも

さだやすのみこの后の宮の五十の賀奉りける御屏風に櫻の花のちる下に人の花見たるかた書けるをよめる　藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみて書きける　紀貫之

春くれば宿にまづ咲く梅のはな君がちとせのかざしとぞ見る

素性法師

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ

ふして思ひおきて數ふる萬世は神ぞしるらむわが君のため

藤原三善（みよし）が六十の賀によみける　在原滋春

鶴かめも千年ののちは知らなくにあかぬ心にまかせ果ててむ

此の歌は或人在原のときはるがともいふ

良岑のつねなりが四十の賀にむすめにかはりてよみ侍りける　素性法師

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年のかげに住まむと思へば

○ちりかひ曇れ　散り合うてあたりが曇るやうにせよ。○おいらく　老。四十を初老といふから。○まがふがに　迷ふやうに。迷ふために。○さだときの皇子　淸和天皇第七皇子貞辰親王。○龜のをのやま　龜山。大井川の近くにある。○いはねをとめておつる　岩根にそうて落ちる。○さだやすのみこ　淸和天皇第五皇子貞保親王。○おもほえで　何とも思はずに、うかうかと暮すが。○もとやすのみこ　本康親王。仁明天皇の皇子。○ありきあらずは云々　あつたかなかつたかは知らぬが。○神ぞしるらむ　神がおはからひになるであらう。○千年ののち云々　鶴龜は千年の壽を保つといふが、千年の後はどうなるか知らぬが。○萬代をまつにぞ　待つと松とをかけたもの。次の「いはひつる」も松に對して鶴の意を込めたもの

内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に四季の繪かける後（うしろ）の屏風にかきたりける歌

春

かすが野に若菜つみつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらむ

躬恒

夏

やまたかみ雲居に見ゆる櫻花こゝろのゆきて折らぬ日ぞなき

友則

めづらしき聲ならなくに郭公こゝらの年をあかずもあるかな

躬恒

秋

すみの江の松をあきかぜ吹くからに聲うちそふる沖つしらなみ

忠岑

千鳥鳴くさほの川霧たちぬらし山の木の葉も色まさりゆく

是則

秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける

貫之

冬

白雪の降りしくときはみよしののやました風に花ぞちりける

○こゝらの年　多くの年。

○よそのもみぢを云々　よその山の紅葉を風が吹いて持つて來て此の常磐山に借すことである。

春宮の生まれたまへりける時にまゐりてよめる　　典侍藤原よるかの朝臣

みねたかき春日の山にいづる日はくもる時なく照らすべらなり

古今和歌集　巻第八

離別歌

題しらず　在原行平朝臣

立ち別れいなばの山の嶺に生ふるまつとしきかば今かへりこむ

讀人しらず

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ

限りなきくもゐのよそに別るとも人を心におくらさむやは

小野のちふるが陸奥の介にまかりける時に母のよめる

たらちねの親のまもりとあひ添ふる心ばかりは關なとゞめそ

さだときのみこの家にて藤原のきよふが近江の介にまかりける時にむまのはなむけしける夜よめる　紀としさだ

今日別れあすはあふみと思へども夜や更けぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人によみて遣はしける

かへるやまありとは聞けど春霞たちわかれなば戀しかるべし

○立ち別れいなばの山　往なばと因幡とをかけたもの。

○いつとか待たむ　今度逢ふのをいつと思うて待たうぞ。
○人を心に云々　思ふ人をあとに殘して置かうや、心では常に一緒に行く。

○あすはあふみ　逢ふ身と近江とをかけたもの。

○かへるやま　越前國敦賀郡にある山。

人のむまのはなむけにてよめる　　紀貫之

をしむから戀しきものを白雲の立ちなむのちはなに心地せむ

ともだちの人の國へまかりけるによめる　　在原滋春

別れては程をへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

あづまの方へまかりける人によみて遣はしける　　いかこのあつゆき

思へども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

逢坂にて人を別れける時に詠める　　なにはのよろづを

あふさかの關しまさしきものならばあかず別るゝ君をとゞめよ

題しらず　　讀人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてし行けばけぬべきものを

この歌はある人つかさを賜はりてあたらしき妻につきて年經て住みける人を捨てたゞ明日なむ立つとばかりいへりける時にともかくもいはでよみて遣はしける

常陸へまかりけるときに藤原公利によみてつかはしける　　寵

朝なけに見べききみとしたのまねばおもひたちぬる草枕なり

紀のむねさだがあづまへまかりける時に人の家に宿りて曉出でたつとて

○をしむから　名殘惜しく思ふので。

○程をへだつ　遠い道をへだてて久しく逢はれぬ意。
○かねて　もう今から。

○身をし分けねば　人の身を二つに分ける事は出來ぬから。
○たぐへて　添はせて。

○まさしき物　まさしくその名の通りであるものだから。

○朝なけに　日に〳〵。
○草枕　旅。

まかり申しければ女のよみていだせりける　讀人しらず

えぞ知らぬいまこゝろみよ命あらばわれやわするゝ人やとはぬと

あひ知りて侍りける人の東の方へまかりけるを送るとてよめる　深養父

くもゐにも通ふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

友のあづまへまかりける時によめる　良岑ひでをか

しらくものこなたかなたにたち別れ心をぬさとくだく旅かな

みちのくにへまかりける人によみて遣はしける　貫之

白雲のやへにかさなるをちにても思はむ人に心へだつな

人を別れける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ

あひしれりける人のこしの國にまかりて年へて京にまうできて又歸りける時によめる　凡河內躬恆

かへる山何ぞはありてあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ

こしの國にまかりける人によみてつかはしける

外(よそ)にのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ我が身は　貫之

音羽山のほとりにて人を別るとてよめる

○いま　今に。おつつけ。

○おくれねば　殘つてはゐないから。

○わかると人に云々　自分の身があとに殘ると見られるばかりで、心は別れはしない。

○ぬさ　五色の絹などを細かく切つたものを旅立つ人に贈り、それを道祖神に手向けるのである。

○何ぞは　何の役に立つことぞ。

○ゆき見る　行き見ると雪見るとをかけたもの。

おとはやまこだかくなきて郭公きみがわかれを惜しむべらなり

藤原の後蔭がから物の使に長月のつごもり方にまかりけるに上(うへ)のをのこども酒たうびけるついでによめる　　藤原かねもち

もろともに鳴きてとゞめよ蛬(きりぎりす)秋のわかれは惜しくやはあらぬ

平もとのり

秋霧のともに立ちいでて別れなば晴れぬおもひに戀ひやわたらむ

源のさねがつくしへ湯あみむとてまかりける時に山崎にてわかれ惜しみける所にてよめる　　しろめ

いのちだに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし

山崎より神なびの森まで送りに人々まかりて歸りがてにしてわかれ惜しみけるによめる　　源さね

人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ

今は是れより歸りねとさねがいひけるをりによみける　　藤原かねもち

慕はれて來にし心の身にしあれば歸るさまには道も知られず

藤原のこれをかが武藏の介にまかりける時に送りに逢坂を越ゆとてよみける　　貫之

○から物の使　唐や渤海等の船が來た時、その貨物をしらべる役。

○人やり　人からさせられる。

○慕はれて　其許を慕はしく思って。

かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

大江の千古が越へ罷りける馬の餞（はなむけ）によめる　　藤原兼輔朝臣

君が行くこしの白山しらねども雪のまに〳〵あとはたづねむ

人の花山に詣できて夕さりつ方歸りなむとしける時によめる　　僧正遍昭

夕暮のまがきは山と見えななむ夜は越えじとやどりとるべく

山に登りて歸りまうできて人々別れけるついでによめる　　幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまに〳〵

雲林院のみこの舍利會に山に登りて歸りけるに櫻の花のもとにてよめる　　僧正遍昭

山風に櫻ふきまきみだれなむ花のまぎれに立ちとまるべく

幽仙法師

ことならば君留（と）まるべく匂はなむ歸すは花の憂（う）きにやはあらぬ

仁和の帝みこにおはしましける時にふるの瀧御覽じにおはしまして歸り給ひけるに詠める　　兼藝法師

あかずして別るゝ涙たきにそふ水まさるとやしもは見ゆらむ

かんなりのつぼにめしたりける日おほみきなどたうべて雨のいたう降り

○人だのめ　人にたのもしく思はせて、實は賴りにならぬ。

○夕さりつ方　夕方。

○見えななむ　見えればよいに。

○立ちとまるべく　上に君のと人れて見る。

○ことならば　とても見事に咲く位ならば。

○あかずして　名殘をしくて。
○しも　川下。

ければ夕さりまで侍りて罷り出で侍りける折に杯をとりて　　貫　　之

秋萩のはなをば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

とよめりけるかへし　　兼　覽　王

をしむらむ人の心をしらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

兼覽のおほきみに初めて物語して別れける時によめる　　躬　　恆

別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひみぬ先に何を戀ひまし

題しらず　　讀人しらず

あかずしてわかるゝ袖の白玉は君がかたみとつゝみてぞゆく

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじあはむ日までに

かきくらしことは降らなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめむ

しひて行くひとをとゞめむ櫻花いづれを道とまどふまで散れ

志賀の山越にて石井のもとにて物いひける人の別れける折によめる　　貫　　之

むすぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな

道にあへりける人の車に物いひつきて別れける所にてよめる　　友　　則

下(した)の帶の道はかたがた別るとも行き廻りても逢はむとぞ思ふ

○雨にぬらせども　雨にぬらすのは惜しい事ではあるが。

○身ぞふりにける　身が古くなつたといふのに、秋の時雨が降るといひかけたもの。

○あひみぬ先に云々　お逢ひしなかつたうちには　何をお懐かしう思ひませうぞ。

○白玉　涙をいつたもの。

○ことは降らなむ　降る位ならば強く降つてほしい。

○ぬれぎぬきせて　春雨を口實にして。

○しひて行くひと　とめても止らずにしひて別れてゆく人。

○あかでも　殘り多いのに。上の一二三句はこれを云ふための序。

古今和歌集　卷第九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよみける　安倍仲麿

あまの原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山にいでし月かも

この歌は昔仲麿を唐土に物ならはしに遣はしたりけるにあまたの年を經てえ歸りまうで來ざりけるをこの國より又使まかりいたりけるにたぐひてまうできなむとて出でたりけるにめい州といふ所の海邊にてかの國の人むまのはなむけしけりよるになりて月のいと面白くいでたりけるを見てよめるとなむ語り傳ふる

おきの國に流されける時に船にのりていでたつとて京なる人の許に遣はしける　小野篁朝臣

わたの原八十島かけてこぎいでぬと人には告げよ蜑のつり舟

題しらず　讀人しらず

都いでて今日みかのはらいづみ川かはかぜさむし衣かせやま

○わたの原　海。
○みかのはら　次のいづみ川かせ山と共に山城國相樂郡にある。泉川は今の木津川である。
○衣かせやま　衣をかせといふを鹿背山にかけたもの。

ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島がくれ行くふねをしぞおもふ

此の歌はある人のいはく柿本人麿がなり

あづまの方へ友とする人一人二人いざなひていきけり三河國八橋といふ所にいたれりけるにその川のほとりに杜若いと面白う咲けりけるを見て木の陰におりゐて杜若といふ五文字を句のかしらにすゑて旅の心をよまむとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにし妻しあればはる〴〵きぬる旅をしぞ思ふ

武藏の國と下總の國との中にある角田川の邊に到りて都のいと戀しう覺えければしばし川のほとりにおりゐて思ひやれば限りなく遠くも來にけるかなと思ひわびてながめをるに渡守はや舟に乘れ日も暮れぬといひければ舟に乘りて渡らむとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なくしもあらずさる折に白き鳥のはしと足と赤き川のほとりに遊びけり京には見えぬ鳥なりければ皆人見しらず渡守にこれは何鳥ぞと問ひければこれなむ都鳥といひけるを聞きてよめる

名にしおはばいざこととはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

題しらず

讀人しらず

○明石の浦の云々　明石の浦をこめた朝霧の中にかくれて行く船を思ふの意。

○なれにし　なじんだ。

○名にしおはば　都といふ名に負かないならば。

○ありやなしや　無事でゐるかどうか。

北へゆく鴈ぞ鳴くなるつれてこし數はたらでぞ歸るべらなる

此の歌はある人男女もろともに人の國へまかりけり男まかりいたりて即ちみまかりにければ女ひとり京へ歸る道に鴈の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ

あづまの方より京へまうでくとて道にてよめる　おと

山かくす春のかすみぞ恨めしきいづれ都のさかひなるらむ

越の國へまかりけるとき白山を見てよめる　躬恒

消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

あづまへまかりける時道にてよめる　貫之

絲によるものならなくに別れ路の心ぼそくも思ほゆるかな

甲斐の國にまかりける時道にてよめる　躬恒

夜をさむみ置くはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたたびねぬ

但馬の國の湯へまかりける時に二見の浦といふ所に泊りて夕さりのかれいひたうべけるに共にありける人々歌よみけるついでによめる　藤原かねすけ

夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそみめ

惟喬のみこのともに狩にまかりける時に天の川といふ所の川のほとりに

○消えはつる　殘らず消えてしまふ。

○絲によろ云々　絲によれば何でも細くなるものであるが、それではないのに。

○玉くしげ　ふたにかけて云ふ枕詞。

○狩り暮し　一日中狩をして。

○ひとゝせに云々　彦星をいふ。

○ぬさもとりあへず　ぬさの用意もしなかつた。

○神のまに／＼　神の御心まかせに。御心のまゝに。

○手向には　神への手向には。

○つゞりの袖　袈裟。

○きるべきに　切つてぬさとして手向ける筈であるが。

おりゐて酒など飲みけるついでに皇子のいひけらく狩して天の川原にいたるといふ心をよみて杯はさせと云ひければよめる　　在原業平朝臣

狩り暮したなばたつめに宿からむ天の川原にわれは來にけり

みこの歌をかへすがへすよみつゝかへしえせずなりにければともに侍りてよめる　　紀有常

ひととせにひとたび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞおもふ

朱雀院の奈良におはしましける時に手向山（たむけやま）にてよめる　　菅原朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢの錦神のまにまに

　　素性法師

手向にはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

古今和歌集　卷第十

物名

うぐひす　　藤原敏行朝臣

心から花のしづくにそぼちつゝうくひずとのみ鳥の鳴くらむ

ほとゝぎす　　在原しげはる

くべきほどときすぎぬれや待ちわびて鳴くなる聲の人をとよむる

うつせみ

波のうつせみれば玉ぞみだれける拾はば袖にはかなからむや

かへし　　壬生忠岑

袂より離れて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

うめ　　讀人しらず

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香は匂ひつゝ

かにはざくら　　貫之

かづけども波のなかにはさぐられで風吹くごとに浮き沈む玉

○心から　自分の心から好きで。○うくひず　憂く乾ずの意。これを鶯にかけたのである。

○ときすぎぬれや　時節が過ぎたのであらうか。○人をとよむる　人を騒かせる。

○袖に云々　袖に入れようとしたならすぐに消えるであらうか。

○袂より離れて　袂以外には。

○常なるべくも云々　常住見られさうにも見えぬことかな。

○かづけども　水をくゞっても。

すもゝの花

今いくか春しなければうぐひすもゝのはながめて思ふべらなり

からもゝの花　　深養父

あふからもゝのはなほこそ悲しけれ別れむことをかねて思へば

たちばな　　小野しげかげ

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

をかたまの木　　友則

み吉野の吉野の瀧に浮びいづる泡をかたまのきゆと見ゆらむ

山がきの木　　讀人しらず

秋はきぬ今やまがきのきり／＼す夜な／＼なかむ風の寒さに

あふひ　かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかがつらしと思はざるべき

人めゆゑ後にあふひの遙けくばわがつらきにや思ひなされむ

くたに　　僧正遍昭

散りぬれば後はあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな

さうび　　貫之

○今いくか云々　もう春の間も何程もないから。

○あふからも　逢ひながらも。

○泡をか　かは疑問の助詞。

○うひにぞ見つる　はじめて見た

○さゝがに　蜘蛛。

○野山をみなへしりぬる　野山をどこもこゝも皆通つて知つた。

○みねたちならしなく鹿　峯をあちこちと歩いて鳴く鹿。○へにけむ秋　經て來た秋の數。

○ふりはへて　わざ〳〵。

○とりうたん　鳥を追うてやらう○のはなければや　住む野がないからであらうか。

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

をみなへし　友則

しら露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも絲をみなへし

朝露をわけそぼちつゝ花見むといまぞ野山をみなへしりぬる

朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしといふ五文字を句のかしらに置きてよめる　貫之

をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

きちからの花　友則

あきちかうのはなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく

しをに　讀人しらず

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞ移ろひにける

りうたんの花　友則

我が宿の花ふみしだくとりうたんのはなければやこゝにしもくる

をばな　讀人しらず

ありと見てたのむぞ難き空蟬の世をばなしとや思ひなしてむ

けにごし　矢田部名實

うちつけにこしとや花の色をみむおく白露のそむるばかりを
二條の后春宮の御息所と申しける時にめどにけづり花させりけるをよませ給ひける
文屋康秀

花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし果(このみ)なるときもがな
しのぶぐさ
紀としさだ

山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞ散りける
やまし
平あつゆき

郭公みねの雪にやまじりにし有りとは聞けど見るよしもなき
からはぎ
讀人しらず

空蟬のからはきごとにとゞむれど魂のゆくへを見ぬぞかなしき
かはなぐさ
深養父

うば玉の夢になにかはなぐさまむうつゝにだにもあかぬ心を
さがりごけ
たかむこのとしはる

花の色は唯ひとさかりこけれどもかへすぐ〵ぞ露はそめける
にがたけ
滋春

命とて露をたのむにかたければものわびしらになく野邊の蟲

○花の木　花の咲くべき木。

○ものわびしらに　物寂しさうに

かはたけ　　景式王

さよふけてなかばたけゆくひさかたの月吹きかへせ秋の山風

わらび　　素性法師

煙たち燃ゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびと名づけそめけむ

さゝまつ　びは　ばせをば　　紀のめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

なし　なつめ　くるみ　　兵衛

あぢきなし歎きなつめそ憂き事にあひくるみをば捨てぬものから

からことといふ所にて春の立ちける日よめる　　安倍清行朝臣

波のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべや改まるらむ

いかが崎　　兼覧王

かぢにあたる棹の雫を春なればいかがさき散る花と見ざらむ

からさき　　阿保のつねみ

かの方にいつからさきに渡りけむ波路はあとものこらざりけり

伊勢

波の花おきからさきて散りくめり水の春とはかぜやなるらむ

○わらび　蕨に藁火をかけたもの

○いさゝめに　僅かの間。

○人に見えつゝ　人に見られながら。

○捨てぬものから　捨てもせずにゐながら。

○ことにきこゆる　異なつて聞える。

○水の春とは云々　水のために風が春となつて。

紙屋川　　　　　貫之

うばたまの我がくろかみやかはるらむ鏡のかげにふれるしら雪

よど川

あしびきの山邊にをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき　　忠岑

かた野

なつくさのうへはしげれる沼水のゆくかたのなきわが心かな　　忠岑

桂の宮　　　　　源ほどこす

秋くれど月のかつらのみやはなる光をはなとちらすばかりを

百和香　　　　　讀人しらず

花ごとにあかず散らしし風なれば幾そばくわがうしとかは思ふ

すみながし　　　　　滋春

春がすみなかし通ひ路なかりせば秋くる鴈はかへらざらまし

おき火　　　　　都良香

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむ時やそこは知られむ

ちまき　　　　　大江千里

のちまきの後(おく)れて生ふる苗なれどあだにはならぬ頼(たの)みとぞ聞く

○かつらのみやはなる　桂の實はなりはせぬ。

○おきひむ時　沖の水が干る時。

はをはじめるをはてにてながめをかけて時の歌よめと人のいひければよめる

僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分けゆけば心ぞ共に散りぬべらなる

○めにあくやとて　目に見飽くかと思つて。

○きくの白露　音にのみ聞くと、菊の白露と兩方にかけたもの。○おもひにあへず　戀しさに堪へかねて。

○あはれとぞ思ふ　逢ひたいことよと思ふ。○よそにても　よそに離れてゐても。

古今和歌集　巻第十一

戀歌一

題しらず　　讀人しらず

郭公鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬこひもするかな

素性法師

音にのみきくの白露夜はおきて晝はおもひにあへずけぬべし

紀貫之

吉野川いはなみたかくゆく水のはやくぞ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白波のあとなきかたに行く船も風ぞたよりのしるべなりける

在原元方

音羽山おとに聞きつゝあふさかの關のこなたに年をふるかな

貫之

立ちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら波

世の中はかくこそありけれ吹く風のめに見ぬ人も戀しかりけり

右近の馬場のひをりの日むかひにたてりける車の下簾より女の顔のほのかに見えければよみて遣はしける　　在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や眺め暮さむ

かへし　　讀人しらず

知る知らぬ何かあやなく分きていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

春日の祭にまかれりける時に物見に出でたりける女のもとに家を尋ねて遣はせりける　　壬生忠岑

春日野の雪まを分けておひ出くる草のはつかに見えし君はも

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける　　貫之

山櫻かすみのまよりほのかにも見てしひとこそ戀しかりけれ

題しらず　　元方

たよりにもあらぬおもひの怪しきは心を人につゞるなりけり

凡河内躬恒

はつ鴈のはつかに聲を聞きしよりなかぞらにのみ物を思ふかな

○見ずもあらず云々　見ないでもなく又見たでもない人。

○知る知らぬ云々　見たとか見ないとかなどと分けては何の云はうことぞ。

○雪ま　雪の間。

○なかぞらにのみ云々　夢中になつてしまつて物思ひをする。

貫之

逢ふことは雲居はるかになるかみの音に聞きつゝ戀ひわたるかな

讀人しらず

片絲をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせむ

ゆふぐれは雲のはたてにものぞおもふあまつ空なる人を戀ふとて

かりごもの思ひみだれてわが戀ふと妹しるらめや人しつげずば

つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとは忍ばむ

千早ぶる賀茂のやしろのゆふだすきひともひも君をかけぬ日はなし

わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

駿河なるたごの浦波たたぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし

夕づく夜さすや岡邊の松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

あしびきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

吉野川いはきりとほしゆく水の音にはたてじ戀ひはしぬとも

瀧つ瀬のなかにもよどはありてふをなどわが戀の淵瀨ともなき

山高みしたゆく水の下にのみながれて戀ひむ戀ひはしぬとも

おもひ出づるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しきものを

○片絲　まだより合はせてない一筋の絲。

○あまつ空なる人　空のやうな何のとりとめもない遠い人。

○かりごも　刈つたこも。亂れるといふための序。

○おくとはなげき　起きると云つては歎き。

○ぬとは忍ばむ　寢ると云つては慕ふ。

○かけぬ日はなし　言葉にかけて云ひ出して思はぬ日とてはない。三の句までは五の句をいふための序。

○戀ひはしぬとも　戀ひ死にに死ぬるとしても。

○よど　淀。水のよどむ所。淵。

○淵瀨ともなき　淵とか瀨とかいふ區別もない。

○下にのみながれて云々　いつまでも心の中でばかり思つてゐよう

人しれず思へばくるし紅のすゑつむ花の色にいでなむ
秋の野の尾花にまじり咲く花のいろにや戀ひむあふよしをなみ
わがそのの梅のほつえに鶯のねに鳴きぬべきこひもするかな
あしびきの山郭公わがごとや君にこひつゝいねがてにする
夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下もえにせむ
戀せじと御手洗川(みたらしがは)にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも
哀れてふことだになくばなにをかは戀のみだれのつかねをにせむ
思ふには忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを
我が戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ
あさぢふのをのの篠原しのぶとも人知るらめやいふ人なしに
人知れぬ思ひやなぞと蘆垣(あしがき)のまぢかけれどもあふよしのなき
おもふとも戀ふとも逢はむものなれやゆふ手もたゆくとくる下紐
いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたにもの思ふころぞ
伊勢の海につりする蜑のうけなれや心ひとつを定めかねつる
伊勢の海の蜑のつりなは打ちはへて苦しとのみや思ひわたらむ
涙川なにみなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり

○秋の野の云々　三句までは四句にかゝる序。
○つかねを　束ね緒。
○いふ人なしに　云ふ人なしには
○ゆふ手も云々　結ぶ手もだるい程に下紐が度々解ける。
○打ちはへて　長い年月の意。

○戀ひをし戀ひは云々　むづかしい戀でも骨を折りさへしたならば逢はれぬといふことはあるまい。

○いかにねし夜　どちら枕にどうして寢た夜。

○ならはし物を　習慣によるものであるが。

○あはずして　戀しい人に逢はないでゐてもそれが習慣となつて逢はずに居られるものかどうか。

○來む世　來世。次の世。

○思はぬ人　こちらを思うてもくれぬ人。

○われにあらねばや　わが心ではないのであらうか。

○ねむ方もなし　どうして寢たら夢に逢へるかと思ひ迷うて寢樣がない。

○夜はすがらに　夜は夜通し。

種しあれば岩にも松は生ひにけり戀ひをし戀ひばあはざらめやも

朝な〳〵たつ川霧の空にのみうきておもひのある世なりけり

忘らるゝ時しなければあしたづの思ひ亂れてねをのみぞなく

から衣ひもゆふぐれになる時はかへす〴〵ぞ人は戀しき

よひ〳〵に枕さだめむ方もなしいかにねし夜かゆめに見えけむ

戀しきに命をかふるものならばしにはやすくぞ有るべかりける

人の身もならはし物をあはずしていざ心みむ戀ひや死ぬると

忍ぶれば苦しきものを人しれず思ふてふこと誰にかたらむ

來む世にもはやなりななむ目の前につれなき人を昔と思はむ

つれもなき人を戀ふとて山彥の答へするまで歎きつるかな

ゆく水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

人を思ふこゝろはわれにあらねばや身の惑ふだに知られざるらむ

思ひやるさかひ遙かになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき

夢のうちにあひみむ事を賴みつゝ暮せる宵はねむ方もなし

戀ひ死ねとする業ならしむば玉の夜はすがらに夢に見えつゝ

なみだがはまくら流るゝうきねには夢もさだかに見えずぞありける

戀すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきて燃ゆらむ

篝火のかげとなる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけり

早き瀨にみるめおひせばわが袖の涙の川に植ゑましものを

おきべにもよらぬ玉藻の波の上にみだれてのみや戀ひ渡りなむ

蘆鴨のさわぐ入江の白波の知らずや人をかくこひむとは

人しれぬ思ひを常にするがなるふじの山こそわが身なりけれ

とぶ鳥の聲もきこえぬ奥山のふかき心を人は知らなむ

あふさかのゆふつけ鳥もわがごとく人やこひしき音のみなくらむ

あふさかの關に流るゝ岩しみづいはで心におもひこそすれ

浮草のうへはしげれる淵なれや深き心を知る人のなき

うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

こゝろがへするものにもが片戀はくるしきものと人に知らせむ

よそにして戀ふれば苦しいれひものおなじ心にいざ結びてむ

春たてば消ゆる氷ののこりなく君が心はわれにとけなむ

明けたてば蟬のをりはへ鳴きくらし夜は螢のもえこそわたれ

○そはぬものゆゑ　添ひもせぬもののくせに。

○かげとなる身　戀にやつれて影のやうになつた身。

○知らずや　思ひもよらぬことかな。上三句は四句を云ふための序

○人は知らなむ　わが思ふ人はわが心を知つてくれよかし。

○浮草の云々　上には浮草が茂つて底の見えない淵であらうか。

○こゝろがへ云々　人の心を互にとりかへられる物にしたいものだ

○いれひも　入紐。袍、直衣、狩衣などの紐。雌紐の輪と雄紐の結びこぶとをとりあはせ掛けおくもの。

○明けたては　夜が明ければ。

○蟬のをりはへ云々　蟬のやうに一日中ないて暮らし。

夏蟲の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなりけり

夕さればいとゞひがたき我が袖に秋の露さへおきそはりつゝ

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり

秋の田のほにこそ人を戀ひざらめなどか心に忘れしもせむ

秋の田のほの上を照らす稻妻の光のまにもわれや忘るゝ

人めもる我かはあやな花薄などかほにいでて戀ひずしもあらむ

あわ雪のたまればがてにくだけつゝ我が物思ひのしげき頃かな

奧山のすがのねしのぎ降る雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

○一つおもひ　火を取らうといふ思ひ一つ。

○あやしかりけり　特に堪へられぬ。

○はにこそ人を云々　表面にあらはして思ふふりをこそせぬが。

○人めもる云々　人目をはゞかるわが身でもないに。

○たまればがてに云々　たまるかと見ればたまらずにくだけて消えるやうに。

○けぬ　消える。死ぬる。上三句は消ぬといふための序。

古今和歌集　卷第十二

戀　歌　二

題しらず　小野小町

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

いとせめて戀しき時はむば玉のよるの衣をかへしてぞ著る

素性法師

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ賴むくるゝ夜ごとに

しもつ出雲寺に人のわざしける日眞せい法師の導師にていへりける言葉を歌によみて小野小町がもとに遣はしける　安倍清行朝臣

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人をみぬめの涙なりけり

かへし　小町

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつ瀬なれば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

○思ひつゝぬればや　思ひながら寝るためか。

○人のわざ　人の追善供養。

○袖にたまらぬしら玉　袖につゝんでもたまらずにこぼれ出る白玉
○人をみぬめ　戀しい人を見られぬ目。

戀ひわびてうちぬるなかに行き通ふ夢のたゞぢはうつゝならなむ

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人目よくらむ

小野よしき

我が戀はみ山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき

紀友則

宵のまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされる戀もするかな

夕されば螢よりけに燃ゆれども光みねばや人のつれなき

笹の葉におく霜よりもひとりぬる我が衣手ぞさえまさりける

我が宿の菊の垣根におく霜のきえかへりてぞ戀しかりける

川の瀬になびく玉藻のみがくれて人にしられぬ戀もするかな

壬生忠岑

かきくらし降るしら雪の下ぎえにきえて物思ふころにもあるかな

藤原興風

君こふる涙の牀にみちぬれば身をつくしとぞわれはなりける

死ぬる命いきもやするとこゝろみに玉の緒ばかりあはむといはなむ

侘びぬればしひて忘れむと思へども夢といふものぞ人だのめなる

○うちぬるなか　中は思ふ人との間をいふ。
○たゞぢ　直路。
○よるさへや　夜までも。上二句は三句を云ふための序。
○人目よく　人目をはゞかつてよける。

○宵のまも云々　火をさらうとして宵の間も保たずに死んでしまふ夏蟲。
○けに燃ゆれども　一層まさつて燃えるが。

○きえかへりてぞ　消え入るやうに。上の三句は四句を云ふための序。
○みがくれて　水にかくれて。

○夢といふものぞ云々　夢といふものは人に頼もしく思はせて置いて何の役にも立たぬものだ。

讀人しらず

わりなくも寢ても覺めても戀しきか心をいづちやらばわすれむ

戀しきにわびて魂まどひなば空しきからの名にやのこらむ

紀貫之

君こふる涙しなくばから衣むねのあたりは色もえなまし

題しらず

世とともにながれてぞゆく涙川ふゆも氷らぬみなわなりけり

夢路にもつゆや置くらむよもすがら通へる袖のひぢて乾かぬ

素性法師

はかなくて夢にも人を見つる夜は朝（あした）の牀ぞおきうかりける

藤原忠房

いつはりの涙なりせばから衣しのびに袖はしぼらざらまし

大江千里

音になきてひぢにしかども春雨に濡れにし袖と問はば答へむ

敏行朝臣

我が如く物や悲しき郭公ときぞともなく夜たゞ鳴くらむ

○魂まどひなば　魂がまようて他に行つてしまつたなら。

○世とともにながれてぞゆく　常に流れてゐて止まる時がない。

○はかなくて　たゞちよつと。

○音になきて云々　泣いてこのやうに濡れた袖だが。

○ときぞともなく　いつといふ時もなく。たえまなく。

○たゞ鳴く　ひた鳴きに鳴く。

さつきやま梢を高みほとゝぎす鳴く音そらなる戀もするかな　　貫　之

秋霧のはるゝ時なき心にはたちゐの空もおもほえなくに　　凡河内躬恒

蟲のごと聲にたてては鳴かねども涙のみこそ下にながるれ　　清原深養父

是貞のみこの家の歌合の歌

秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我おとらめや一人ぬる夜は　　讀人しらず

題しらず

秋の野にみだれて咲ける花の色のちぐさにものを思ふころかな　　貫　之

ひとりして物を思へば秋の田の稲葉のそよといふ人のなき　　躬　恒

人を思ふ心は鴈にあらねども雲居にのみも鳴きわたるかな　　深養父

秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ　　忠　岑

○鳴く音そらなる　泣いてはかりゐて心もそゞろな。上の三句は四句を云ふための序。

○おもほえなくに　覺えぬ。

○ちぐさに　いろ〳〵に。上句は四句を云ふための序。

○そよ　それよ。その通り。御尤も。

○かきなす　ひき鳴らす。

まこもかる淀の澤水雨降れば常よりことにまさる我がこひ　貫之

大和に侍りける人に遣はしける

越えぬまは吉野の山のさくら花ひとづてにのみ聞きわたるかな

やよひばかりに物のたうびける人のもとにまた人まかりてせうそこすと聞きてよみてつかはしける

露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物おもひぞつく

題しらず　坂上是則

わが戀にくらぶのやまのさくら花まなく散るともかずはまさらじ

むねをかの大頼

冬川の上はこほれる我なれや下に流れてこひわたるらむ

忠岑

たきつ瀬に根ざしとゞめぬ浮草のうきたる戀も我はするかな

友則

よひ〱にぬぎて我がぬるかり衣かけて思はぬときのまもなし

あづまぢのさやの中山なか〱になにしか人を思ひそめけむ

○物のたうびける人　物宣ひける人。
○また人まかりて　又他の人が行つて。

○まなく散る　ひまもなく散る。

○下に流れて　水が氷の下を流れるやうに思ひを外にあらはさずに

○なか〱に　なまなかに。上の二句は三句を云ふための序。

敷妙の枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひずぞありける

年をへて消えぬ思ひはありながらよるの袂はなほ冰りけり

貫之

我が戀は知らぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

くれなゐのふりいでてなく涙には袂のみこそ色まさりけれ

白玉とみえし涙も年ふればからくれなゐにうつろひにけり

躬恒

夏蟲をなにか云ひけむ心からわれもおもひに燃えぬべらなり

忠岑

風吹けば峯にわかるゝ白雲のたえてつれなき君がこゝろか

月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

深養父

戀ひ死なばたが名はたたじ世の中の常なきものと云ひはなすとも

貫之

津の國の難波の蘆のめもはるにしげきわが戀人知るらめや

手もふれで月日へにける白眞弓おきふし夜はいこそ寐られね

○人をみるめ　戀しい人を見るめ

○あらなくに　でもないのに。

○ふりいでてなく　聲をあげて泣く。

○夏蟲をなにか云ひけむ　夏蟲の火に飛び込んで死ぬるのを愚かな事だとは何故に云つたであらう。

○君がこゝろか　君の心かな。

○手もふれで云々　思ふ人に久しく逢はないので。

○下に通ひて　下の方を通って水が流れるやうに心の中に思って。

○思ひねに寐し夢　思うて寐て見た夢。

○よるこそまされ　晝よりも夜の方が一層戀しく思ふ心がまさる。上の三句は四句の序。

○あひみむと云々　逢はうと先方から云つたのを賴みにして。

人知れぬ思ひのみこそわびしけれわがなげきをば我のみぞ知る

友則

言にいでていはぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて戀しきものを

躬恒

君をのみ思ひねに寐し夢なればわが心から見つるなりけり

忠岑

命にもまさりて惜しくあるものはみはてぬ夢の覺むるなりけり

春道列樹

梓弓ひけばもとすゑ我がかたによるこそまされ戀のこゝろは

躬恒

我が戀は行方も知らずはてもなし逢ふをかぎりと思ふばかりぞ

われのみぞ悲しかりける彥星も逢はですぐせる年しなければ

深養父

今ははや戀ひ死なましをあひみむと賴めしことぞ命なりける

躬恒

たのめつゝ逢はで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ

〇命やは云々　命が何だ。

命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへば惜しからなくに

友則

古今和歌集　卷第十三

戀歌　三

やよひのついたちよりしのびに人に物を云ひて後に雨のそぼ降りけるに詠みて遣はしける　業平朝臣

起きもせず寐もせで夜を明しては春の物とてながめ暮らしつ

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみて遣はしける　敏行朝臣

つれ〴〵のながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもなし

彼の女に代りてかへしによめる　業平朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへ流るときかばたのまむ

題しらず　讀人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかげとなりにき

いたづらに行きてはきぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

逢はぬ夜のふる白雪とつもりなばわれさへ共にけぬべきものを

此の歌はある人の曰く柿本人麿が歌なり

○ながめ暮らしつ　詠めと長雨とにかけたもの。

○あさみこそ云々　涙の川が淺いので袖だけ濡れるのでせう。

○よるべなみ　近くよる手段がないので。

業平朝臣

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひぢまさりける

小野小町

みるめなき我が身をうらと知らねばやかれなで蜑の足たゆくくる

源宗于朝臣

逢はずして今宵あけなば春の日のながくや人をつらしと思はむ

壬生忠岑

ありあけのつれなく見えし別れより曉ばかり憂きものはなし

在原元方

逢ふことのなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立ち歸りける

讀人しらず

かねてより風に先だつ波なれや逢ふことなきにまだき立つらむ

忠岑

みちのくにありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまだき無き名の立田川渡らでやまむものならなくに

○みるめなき云々　逢はれぬ身だと知らないのかして。

○つれなく見えし　有明月がわが心も知らずに空に照つてゐることに對して云つたもの。

○逢ふことの云々　逢ふこともない人の所に行くわれなれば。

○まだき　また逢つた事もない先からもう。

元　方

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ

讀人しらず

こりずまに又も無き名はたちぬべし人にくからぬ世にし住へば

東（ひんがし）の五條わたりに人を知りおきて罷り通ひけり忍びなる所なりければ門よりしもえいらで垣の崩れより通ひけるを度重なりければ主人（あるじ）聞きつけてかの道に夜毎に人をふせて守らすればいきけれどえあはでのみ歸りてよみてやりける

業平朝臣

人知れぬ我が通ひ路のせきもりはよひ〳〵ごとにうちもねななむ

題しらず

貫之

忍ぶれどこひしき時はあしびきの山より月のいでてこそくれ

讀人しらず

戀ひ〳〵て稀に今宵ぞ逢坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ

小野小町

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬるものを

凡河内躬恒

○こりずまに　こりもせずに。

○人を知りおきて　戀人をこしらへておいて。

○人知れぬ　人に知らされぬ。

○あしびきの山より月の　出でてを云ふための序。

○事ぞともなく　これがかうといふこともなしに。何のひまもなしに。

長しともおもひぞはてぬ昔よりあふ人からのあきの夜なれば　　讀人しらず

しのゝめのほがら〳〵と明けゆけばおのがきぬ〴〵なるぞ悲しき　　藤原國經朝臣

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

明けぬとていまはの心つくからになどいひ知らぬ思ひそふらむ　　敏行朝臣

あけぬとて歸る道にはこきたれてあめも涙も降りそぼちつゝ　　寵

題しらず

しのゝめの別れを惜しみわれぞまづ鳥よりさきになきはじめつる　　讀人しらず

ほとゝぎす夢かうつゝか朝露のおきて別れしあかつきのころ

玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人みけむかも　　大江千里

人に逢ひてあしたによみて遣はしける

今朝はしもおきけむ方もしらざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき　　業平朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり增るかな

○あふ人からの云々　逢ふ人によつて秋の夜も短く思はれるものである。

○おのがきぬ〴〵　一緒に寢てゐた二人の著物か別々になつてわかれる。

○いまはの心　いよ〳〵別れだと思ふ心。

○こきたれて　物をこきおろすやうに落ちて。

○夢かうつゝか　郭公の聲を聞いたのは夢かそれとも現か。

○夜深くこしを　まだ夜の深いうちに別れて來たか。

○おきけむ方云々　別れに心が亂れて、どうして起きたか覺えなかつた。

○世人さだめよ　世間の人が定めてくれい。

○したにを思へ　心の中で思うて居れ。をは助詞。

○ほに出てこひば云々　あらはに戀したなら名が立つであらうと。

業平朝臣の伊勢の國にまかりける時齋宮なりける人にいとみそかに逢ひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりける間に女のもとよりおこせたりける　　讀人しらず

君やこしわれやゆきけむおもほえず夢か現か寐てか覺めてか

かへし　　業平朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

題しらず　　讀人しらず

むば玉の闇のうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

さ夜更けて天のと渡る月かげにあかずも君をあひ見つるかな

君が名も我が名もたてじ難波なるみつともいふな逢ひきともいはじ

名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひみそめけむ

吉野川みづの心ははやくともたきの音にはたてじとぞおもふ

戀しくばしたにを思へむらさきの根ずりの衣色にいづなゆめ

小野春風

花薄ほに出てこひば名ををしみ下ゆふひものむすぼほれつゝ

橘のきよきが忍びにあひしれりける女の許よりおこせたりける　　讀人しらず

思ふどちひとり／＼が戀ひ死なばたれによそへて藤衣きむ

かへし　　橘清樹

泣きこふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへがてら夜こそは著め

題しらず　　小町

現にはさもこそあらめ夢にさへひとめをもると見るがわびしさ

限りなき思ひのまゝによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ

夢路には足もやすめずかよへども現にひとめ見しことはあらず

讀人しらず

思へども人めつゝみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね

たきつせの早き心をなにしかも人めつゝみのせきとゞむらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　紀友則

くれなゐの色には出でじかくれぬの下に通ひて戀ひは死ぬとも

題しらず　　躬恒

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな

笹の葉におく初霜の夜をさむみしみはつくとも色に出でめや

讀人しらず

○ひとり／＼が　思ひ合つた同志のうち、どちらか一人が。○藤衣　喪服。

○ひとめをもる　人目をはゞかる

○よるもこむ　夜の夢になりとも

○人めつゝみ　人目をつゝむ心。○かは　川。彼はの意を含めたもの。

○そこに通ふ　其處の家に自分が通ふ。上の三句を序として底と受けたのである。

山しなの音羽の山のおとにだに人のしるべくわが戀ひめかも

此の歌ある人近江のうねめのとなむ申す

清原深養父

滿つ汐の流れひるまを逢ひ難みみるめの浦によるをこそまて

平貞文

白川のしらずともいはじ底清み流れてよゝにすまむと思へば

友則

したにのみ戀ふれば苦し玉の緒の絶えて亂れむ人なとがめそ

我が戀を忍びかねてはあしびきの山たちばなの色に出ぬべし

讀人しらず

大方は我が名もみなと漕ぎ出なむよをうみべだにみるめ少なし

平貞文

枕よりまた知るひともなき戀を涙せきあへずもらしつるかな

讀人しらず

風ふけば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

此の歌は或人のいはく柿本人麿がなり

○流れひるま　干るを晝間にかけたもの。次の「よる」も寄るを夜にかけたもの。

○底清み　眞實な心底であるから

○玉の緒の絶えて　次の亂れむを云ふための序。

○ねにあらはれて　根と音とをかけたもの。

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれど顯はれにけり

あふことは玉の緒ばかり名のたつは吉野の川の瀧つ瀬のごと

村鳥の立ちにし我が名今更にことなしふともしるしあらめや

君により我が名は花に春がすみ野にも山にも立ちみちにけり

伊勢

知るといへば枕だにせでねし物を塵ならぬ名の空に立つらむ

○ことなしふとも云々　そんな事はないと云うても何の役にも立たぬ。
○君により　君故に。
○知るといへば　隱してゝも枕は知るといふことだから。

古今和歌集　巻第十四

戀歌四

題しらず　　讀人しらず

みちのくの淺香の沼の花がつみかつ見る人に戀ひやわたらむ

あひみずば戀しき事もなからまし音にぞ人を聞くべかりける

貫之

いそのかみふるの中道なか〳〵に見ずば戀しと思はましやは

藤原たゞゆき

君といへば見まれみずまれ富士の嶺の珍らしげなく燃ゆる我が戀

伊勢

夢にだに見ゆとはみえじ朝な〳〵我が面影にはづる身なれば

讀人しらず

石間ゆく水の白波立ちかへりかくこそは見めあかずもあるかな

伊勢の蜑の朝な夕なに潛くてふみるめに人を飽くよしもがな

○かつ見る人　かつ〴〵に一寸逢つたばかりの人。上の三句はこの句を云ふための序。

○見まれみずまれ　逢つても逢はないでも。

○伊勢の蜑の云々　上三句までは四句の序。

春霞たなびく山のさくらばな見れどもあかぬ君にもあるかな　友則

心をぞわりなきものと思ひぬる見るものからや戀しかるべき　深養父

かれはてむ後をば知らで夏草のふかくも人のおもほゆるかな　凡河内躬恒

飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ　讀人しらず

寛平の御時后の宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬものにはあるらむ

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治の橋姫

又は宇治のたまひめ

君やこむ我や行かむのいさよひに槇の板戸もささずねにけり

今こむといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな　素性法師

○わりなきもの　わけのわからないもの。無理なことを思ふもの。
○見るものからや　現在眼の前に逢つて居ながら。
○かれはてむ　枯れると離れるとを通はせたもの。この歌、古今六帖には第二句「こととは知らで」第五句「人を頼みけるかな」とある。
○夏草の　「深く」の枕詞。
○飛鳥川云々　雜下讀人不知「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」
○飛鳥川　大和國高市郡。
○衣かたしき　獨寐の丸寐をする
○宇治の橋姫　山城國宇治河畔に住む遊君。
○君やこむの歌　古今六帖には第三句「やすらひに」第四五句「槇の板戸をささで寐にけり」とある。
○いさよひに　ためらひに。
○有明の月云々　待つてゐるうちに有明月がもう出たわい。

月夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず

讀人しらず

君こずばねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも

宮城野のもとあらの小萩露をおもみ風を待つごと君をこそまて

あな戀しいまも見てしが山賤の垣ほに咲けるやまとなでしこ

津の國のなにには思はず山城のとはにあひみむことをのみこそ

貫之

敷島のやまとにはあらぬ唐衣ころもへずして逢ふよしもがな

深養父

戀しとはたが名づけけむことならむ死ぬとぞ唯にいふべかりける

讀人しらず

みよしのの大川のべの藤波のなみにおもはばわがこひめやは

かく戀ひむものとはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける

天の原ふみとゞろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

梓弓ひき野のつゞらすゑつひに我が思ふ人にことのしげけむ

此の歌は或人あめのみかどあふみのうねめにたまひけるとなむ申す

○月夜よし云々　萬葉集卷六「我屋戶の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たり散りぬともよし」

○月夜よし夜よし　月夜よしの意

○來てふに似たり　來れと促すやうでもある。

○君來ずは云々　萬葉集卷十一に「待ちかねてうちへは入らじ白妙のわが衣手に霜はきぬとも」

○こ紫わがもとゆひ　わが濃紫の元結。

○もとあらの小萩　本だちの繁くない萩。

○いまも見てしが　今も逢ひたいものだ。

○とはに云々　逢ひたいといふ事を常に思うてゐる。

○なみにおもはば　一通りに思ふことなら。上三句は四句の序。

○心のうら　心のうらなひ。

○さくる　遠ざける。

○ことのしげけむ　いろ〳〵と噂がしげくなるであらう。

夏引の手びきの絲をくり返しことしげくとも絶えむと思ふな

此の歌はかへしによみて奉りけるとなむ

里人のことは夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは

藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女をあひ知りて文遣せりける言葉に今まうでく雨の降りけるをなむみわづらひ侍るといへりけるを聞きてかの女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

數々に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

ある女の業平の朝臣を所定めず歩(あり)きすと思ひてよみてつかはしける

讀人しらず

大幣(おほぬさ)の引く手あまたに成りぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

かへし

業平朝臣

大幣(おほぬさ)と名にこそたてれ流れてもつひによるせはありてふものを

題しらず

讀人しらず

須磨のあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心の嬉しげもなし

誰が里によがれをしてか時鳥たゞこゝにしもねたるこゑする

○くり返し　いつまでも。

○數々に云々　わが事を深く思ひ下さるやら思ひ下さらぬやら。

○つひに　どこかでは。

○よるせ　流れ寄る瀨、寄る所。

○たえぬ心　自分の方を絶えないでも。

○よがれ　泊るのを一夜闕かして

○ことのみぞよき　口先ばかりのものである。
○うつしごゝろ云々　うつりやすい心は口とは非常な違ひである。
○ものから　ものながら。
○世の人ごと　世間の人の噂。
○忘れぬもの云々　忘れはしないだらうが自然と遠のくであらうと思はれる。
○あかでこそ云々　思ふ中なら互にあきの來ぬうちに離れてしまはう。
○ありしよりけに　今までよりもなほ一層。

いで人はことのみぞよき月草のうつしごゝろは色ことにして

偽りのなき世なりせばいかばかり人のことの葉うれしからまし

いつはりと思ふものからいまさらにたが誠をかわれは賴まむ

素性法師

あき風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかゞとぞおもふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　友則

蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむとおもへば

題しらず　讀人しらず

空蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬもののかれぬべらなり

あかでこそ思はぬなかは離れなめそをだに後の忘れがたみに

わすれなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき

わすれなむわれをうらむな時鳥人のあきにはあはむともせず

絕えずゆくあすかの川のよどみなば心ありとや人の思はむ

此の歌ある人のいはくなかとみのあづま人が歌なり

素性法師

淀川のよどむと人は見るらめどながれてふかき心あるものを

素性法師

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたて

讀人しらず

くれなゐの初花ぞめのいろふかくおもひし心われ忘れめや

河原左大臣

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れむと思ふわれならなくに

讀人しらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

ちゞの色にうつろふらめど知らなくにこゝろし秋の紅葉ならねば

小野小町

蜑の住む里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ

しもつけのをむね

くもり日の影としなれる我なれば目にこそ見えね身をば離れず

貫之

色もなき心を人に染めしよりうつろはむとはおもほえなくに

讀人しらず

めづらしき人を見むとやしかもせぬわが下紐のとけわたるらむ

○思ふより云々　これほど深く思ふのにまだ此の上にいかにせよとてか。
○色こゝになる　心がはりのしたことか。

○染めしより　思ひ込んだからは

○珍らしき人　久しく逢はぬ人。
○しかもせぬ　こきもせぬ。

かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖ぞぬれぬる　伊勢

堀江こぐたななし小船こぎ歸りおなじ人にやこひわたりなむ　貫之

わたつ海とあれにし牀を今更にはらはば袖やあわとうきなむ　大伴黒主

いにしへに猶たちかへる心かな戀しきことにものわすれせで

人をしのびにあひしりて逢ひがたくありければ其の家のあたりをまかりありきけるをりに鴈の鳴くを聞きてよみて遣はしける

思ひ出でて戀しきときは初鴈のなきてわたると人しるらめや

右のおほいまうち君すまずなりにければかの昔おこせたりける文どもを取りあつめて返すとてよみて送りける　典侍藤原よるかの朝臣

たのめこしことの葉今はかへしてむ我が身ふるればおき所なし

かへし　近院右大臣

今はとて返す言の葉ひろひ置きておのがものから形見とやみむ

題しらず　よるかの朝臣

玉ぼこの道は常にもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ

○ふるひと　久しく逢はなかつた人。

○なきてわたる　初鴈が鳴いて渡るやうに自分も人の門を泣いて通る。

○すまずなりにければ　通つて來ないやうになつたので。

○たのめこし言の葉　末賴もしく仰せられた御文。

○ふるれば　古されれば。飽きられれば。

○おのがものから　もとは自分のものではあるが。

○道は常にも云々　今晩お出でなされたは道を間違へられたものでせうが、いつでも間違へられればよい、そして私の方へお出で下されはよい。

待てといはばねてもゆかなむしひて行く駒の足をれ前の棚橋　讀人しらず

中納言源昇の朝臣の近江の介に侍りける時によみてやれりける　閑院

逢坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなく〳〵も見め

題しらず　伊勢

故郷にあらぬものからわがために人の心のあれてみゆらむ　寵

山がつの垣ほにはへる青つゞら人はくれどもことつてもなし　さかゐのひとざね

大空はこひしき人の形見かはもの思ふごとにながめらるらむ　讀人しらず

逢ふまでの形見も我はなにせむに見ても心のなぐさまなくに

親の守りける人のむすめにいと忍びにあひて物らいひけるあひだに親のよぶといひければ急ぎかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りにけるそののち裳を返すとてよめる　興風

逢ふまでの形見とてこそとゞめける涙に浮ぶもくづなりけり

○待てといはば　お待ちなされと申すからには。
○駒の足をれ　駒の足をつまづかしてくれ。
○人の心のあれて云々　人の心がうつろうて自分の方に疎くなる意。
○人はくれども　上の三句はくるの序。
○形見かは　形見でも何でもないのに。
○ながめらるらむ　戀しく思ふごとにこのやうに大空がながめられる事だらう。
○なにせむに　何にしようぞ。何の役にも立たぬ。
○親の守りける人　親のついてゐる人。
○涙に浮ぶ云々　海の涙に浮ぶ藻のやうにわが涙に浮ぶ藻である。

題しらず　　讀人しらず

形見こそ今はあたなれこれなくば忘るゝ時もあらましものを

(一)あたなれ　にくい仇のやうなものである。

（）ほいにはあらで　公然とではなくて。

（）あばらなる板敷　戸障子なども無い板敷。

（）月やあらぬ　月は昔のまゝの月である。やは反語。

（）渡るとなしに　逢ふでもなく。

（）さてもや　自分が思ふ程自分を思つてくれる人があつても。

古今和歌集　卷第十五

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對に住みける人にほいにはあらでものいひ渡りけるを睦月の十日餘りになむ外へ隱れにけるあり所は聞きけれどえ物もいはで又の年の春梅の花盛りに月の面白かりける夜去年をこひてかの西の對にいきて月の傾くまであばらなる板敷にふせりてよめる　在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

題しらず　藤原仲平朝臣

花薄われこそしたに思ひしかほに出て人にむすばれにけり

藤原兼輔朝臣

よそにのみ聞かましものを音羽川渡るとなしにみなれそめけむ

凡河内躬恒

わがごとくわれを思はむ人もがなさてもやうきと世を試みむ

元方

久方のあまつ空にもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる

讀人しらず

見てもまた又も見まくのほしければなるゝを人は厭ふべらなり

紀友則

雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ

讀人しらず

花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらむ數ならぬ身は

うきめのみ生ひて流るゝ浦なればかりにのみこそ蜑はよるらめ

伊勢

あひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるゝがほなる

讀人しらず

秋ならでおく白つゆはねざめする我がたまくらの雫なりけり

須磨の蜑の鹽燒衣(しほやきころも)をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

山城の淀のわかごもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき

逢ひみねば戀ひこそまされ水無瀨川なにに深めて思ひそめけむ

曉のしぎのはねがきもゝ羽がき君がこぬ夜はわれぞかずかく

○あまつ空にもすまなくに　空に住んでゐる自分でもないのに。
○見まくのほしければ　見たいのに。
○いとはれて　いと晴れてと、厭はれてとを通はせたもの。
○めならぶ人　幾人ものよい人。
○あひにあひて　同じやうに。
○まどほにあれや　道の間が遠いためや。上三句は四句の序。
○かりにだに　刈りにさへ。かりそめにも。兩様にかけたもの。
○しぎのはねがき　鴫がしげく羽ばたきをすること。
○われぞかずかく　幾度となくしげくためいきをついて歎く。

○まだきしぐれ　まだその時節でもないのに降る時雨。
○かげばかりのみ云々　いつでも影だけ見えてよりつかれぬ。
○我やいをねぬ云々　自分が眠られぬためかそれとも君が自分を忘れて心が通はぬためか。
○つま　軒。
○思ひくらし云々　思ひ暮してひぐらしのやうに泣いてばかりゐる。
○こめや　來はせぬ。
○今しはと　今はもう來ないものだと。
○さゝがにの云々　蜘蛛の絲が著物にかゝるのは待つ人の來る前兆。
○われをたのむる　頼みのあるやうに思はせる。

たまかづら今はたゆとや吹く風のおとにも人の聞えざるらむ

わが袖にまだきしぐれのふりぬるは君がこゝろにあきやきぬらむ

山の井のあさき心も思はぬにかげばかりのみ人の見ゆらむ

忘れ草たねとらましを逢ふことのいとかく難きものとしりせば

こふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへやおひ茂るらむ

夢にだにあふことかたくなり行くは我やいをねぬ人や忘るゝ

兼藝法師

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞ遙けかりける

貞登

ひとりのみながめふるやのつまなれば人を忍ぶの草ぞ生ひける

僧正遍昭

我が宿は道もなきまであれにけりつれなき人を待つとせしまに

讀人しらず

今こむといひてわかれし朝（あした）より思ひくらしのねをのみぞなく

こめやとは思ふものからひぐらしのなく夕暮はたち待たれつゝ

今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝりわれをたのむる

今はこじと思ふものから忘れつゝ待たるゝことのまだもやまぬか

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなむ侘びつゝもねむ

植ゑていにし秋田刈るまで見えこねばけさ初鴈のねにぞ鳴きぬる

こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ

久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しきものにぞありける　兼覽王

住の江のまつほど久になりぬれば蘆たづのねになかぬ日はなし

仲平の朝臣あひしりて侍りけるをかれがたに成りにければ父が大和の守に侍りけるもとへまかるとてよみて遣はしける　伊勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

題しらず　雲林院のみこ

吹きまよふ野風をさむみ秋はぎのうつりもゆくか人のこゝろの

小野小町

今はとて我が身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

かへし　小野さだき

人を思ふこゝろ木の葉にあらばこそ風のまに〳〵散りもみだれめ

○忘れつゝ　來ないだらうと思つてもすぐにそれを忘れて。

○植ゑていにし云々　田植の頃田を植ゑて歸つた人が、既に刈る時節になるまで來ないので。

○かれがた　疏遠になりかゝつたこと。

○言の葉さへに　前に仰せられた御約束のお言葉までが。

○木の葉にあらばこそ　木の葉であつたならば。

○すみけるを　かよつてゐたが。
○ゆきかへり云々　行つたり來たりして足を留めずに過すのよ。
○なれば　著なれれば。
○身にこそ纏はれめ　身に親しうなる筈だのに。
○ひとの心の云々　木の葉が風に吹かれて空に上るやうに、思ふ人の心が他に移つたのはどうしたことだらうか。
○心地そこなへりける頃　病氣であつた頃。
○心地おこたりて　病氣回復して
○しでの山　死出の山。
○まづこえじとて　先には越えまいと思つて。

業平の朝臣紀の有常がむすめにすみけるを恨むることありてしばしのあひだひるは來て夕さりは歸りのみしければよみて遣はしける

天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆるものから

かへし　　業平朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることは我がゐる山の風早みなり

題しらず　　かげのりの王

唐衣なれば身にこそ纏はれめかけてのみやは戀ひむとおもひし

友則

秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ

源宗于朝臣

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

心地そこなへりける頃あひしりて侍りける人のとはで心地おこたりて後とぶらへりければよみて遣はしける

兵衞

しでの山麓を見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

あひしれりける人のやうやくかれがたになりけるあひだにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける

小町が姉

時すぎて枯れゆく小野の淺茅には今はおもひぞ絶えずもえける

伊勢

物思ひける頃物へまかりける道に野火のもえけるを見てよめる

冬枯の野邊と我が身を思ひせばもえても春をまたましものを

友則

題しらず

水の泡のきえでうき身といひながら流れて猶も賴まるゝかな

讀人しらず

水無瀬川(みなせがは)ありて行く水なくばこそ終に我がみをたえぬと思はめ

躬恒

よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

讀人しらず

世の中の人の心ははなぞめのうつろひやすき色にぞありける

心こそうたてにくけれ染めざらばうつろふ事も惜しからましや

小町

色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

讀人しらず

われのみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなば

○時すぎて　時節過ぎて。年寄つて。

○きえでうき身　消えないで浮くやうなこの憂き身。

○流れて　ながらへて。

○ありて行く水云々　有つて流れる水がないならば。

○はやくいひてしこと　以前に言ひ置いたこと。

○染めざらば云々　自分の方で思はなかつたならば先方の心の變るのも何の惜しいことがあらう。

○かれなむ人　遠のいてゆく人。

○霜は置かなむ　霜が置けばいいに。霜が置けば忘れ草が枯れて、また思ひ出してくれるかもしれぬから。

○なにをかたね　何を種として生えるものかと思つたが。

○いねてふことも云々　往ねといふことも云はないのに。

○いとながるらむ　ひどくこぼれることであらうか。

思ふともかれなむ人をいかゞせむあかず散りぬる花とこそ見め　素性法師

今はとて君がかれなば我が宿の花をばひとり見てやしのばむ　讀人しらず

忘れ草かれもやするとつれもなき人のこゝろに霜は置かなむ　宗于朝臣

寛平の御時御屏風に歌かかせ給ひける時よみてかきける

わすれ草なにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり　素性法師

題しらず

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ　紀貫之

初鴈の鳴きこそわたれ世の中の人のこゝろのあきしうければ　讀人しらず

あはれとも憂しともものを思ふときなどか涙のいとながるらむ

身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても經ぬる世にこそ有りけれ　典侍藤原直子朝臣

○我から　蟲の名。我が身からの事である。

○あひみぬも云々　逢ひたい人に逢はれぬのもその人のつらいのも皆わが身からの事である。

○物のかなしきは　人をいとしく思ふのは。

○鏡に見ゆる影　鏡にうつるわが影。

○人なき牀　君が來て寢るでもない牀。

蜑のかる藻に住む蟲の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ　いなば

あひみぬもうきも我が身の唐衣思ひしらずも解くるひもかな

寛平の御時后の宮の歌合の歌　菅野忠臣

つれなきを今は戀ひじと思へどもこゝろよわくもおつる涙か

題しらず　伊勢

人知れず絶えなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

讀人しらず

それをだに思ふこととて我が宿をみきとないひそ人のきかくに

逢ふことのもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ

わびはつるときさへ物のかなしきはいづこをしのぶ涙なるらむ

藤原興風

うらみても泣きてもいはむかたぞなき鏡に見ゆる影ならずして

讀人しらず

夕されば人なき牀をうちはらひ歎かむためとなれる我が身か

わたつみの我が身こす波立ちかへり蜑の住むてふ浦みつるかな

あら小田をあらすきかへし返しても人の心を見てこそやまめ

ありそ海の濱の眞砂と賴めしは忘るゝことの數にぞ有りける

蘆べより雲居をさしてゆく鴈のいやとほざかる我が身かなしも

しぐれつゝもみづるよりも言の葉のこゝろの秋にあふぞわびしき

あき風の吹きとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

小　町

秋風にあふたのみこそ悲しけれ我が身むなしくなりぬと思へば

平　貞　文

秋風の吹きうらがへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかな

讀人しらず

秋といへば外にぞ聞きしあだ人の我を古せる名にこそ有りけれ

忘らるゝ身をうぢ橋の中たえて人も通はぬとしぞへにける

又はこなたかなたに人も通はず

坂　上　是　則

逢ふことを長柄（ながら）の橋のながらへて戀ひわたるまに年ぞへにける

友　則

○あらすきかへし云々　幾度も人の心をよく考へて見て。

○いやとほざかる　だん／＼と思ふ人が遠のいてゆく。

○言の葉のこゝろの秋　前に云つた詞のかはる人の心の秋。

○秋風にあふたのみ　人の秋風に賴みに思うた事が皆徒らになる。

○我を古せる　自分を見捨てた。古せる名は、飽きと秋とを通はせたもの。

○忘らるゝ身を　人に忘れられた身は。

○逢ふ事を云々　逢ふこともないのにながらへて。

うきながらけぬる沫ともなりななむ流れてとだに頼まれぬ身は

讀人しらず

流れてはいもせの山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

○なりななむ　なればよいに。

○流れては　久しくなれば。

○いもせの山　妹山と背山。共に紀伊國にある。

○世のなか　男女の仲を云つたもの。

古今和歌集　卷第十六

哀傷歌

妹の身まかりける時よみける　　小野篁朝臣

泣くなみだ雨とふらなむ渡り川水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいまうち君を白河の邊に送りける夜よめる　　素性法師

血の淚落ちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそありけれ

堀河のおほきおほいまうち君身まかりにける時に深草の山にをさめて後に詠みける　　僧都勝延

うつ蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草のやま煙だにたて　　かむつけの岑雄

深草の野邊のさくらし心あらばことしばかりは墨ぞめにさけ

藤原敏行朝臣の身まかりける時によみてかの家に遣はしける　　紀友則

寢ても見ゆねでも見えけり大方はうつ蟬の世ぞ夢には有りける

あひ知れりける人の身まかりにければよめる　　紀貫之

○渡り川　三途の川。
○かへりくるがに　歸つて來ることもあらうそのために。
○送りける夜　送葬した夜。
○君が世までの名　血の淚が落ちて流れるので白河ではなく赤河であるとの意。

○うつ蟬は云々　蟬はからをぬいでどこかへ行くが、しかしあとにはからだけは殘つて居る。

夢とこそいふべかりけれ世の中に現あるものと思ひけるかな

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる　壬生忠岑

ぬるが内(うち)に見るをのみやは夢と言はむはかなき世をも現とはみず

姉のみまかりにける時によめる

瀬をせけば淵と成りてもよどみけりわかれをとむる柵(しがらみ)ぞなき

藤原のたゞふさが昔あひ知りて侍りける人の身まかりにける時にとぶらひに遣はすとてよめる　閑院

さきだたぬくいの八千度(やちたび)悲しきは流るゝ水のかへりこぬなり

紀友則が身まかりける時よめる　貫之

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ

忠岑

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを

母がおもひにてよめる　凡河内躬恒

神無月(かみなづき)しぐれにぬるゝもみぢ葉はたゞわびびとの袂なりけり

父がおもひにてよめる　忠岑

ふぢごろもはつるゝ絲はわび人の涙の玉の緒とぞなりける

○瀬をせけば　瀬を柵でせきとめれば。

○わかれをとむる云々　死んでゆく人をとめる柵はない。

○さきだたぬくい　自分が先に早く死なかつた事が口惜しい。

○人こそ云々　人の死んだのが悲しい。

○時しもあれ　時節もあらうに。

○たゞわびびとの云々　まるで悲しい事のあるものの袖だ。

○はつるゝ絲　ほつれる絲。

おもひに侍りける年の秋山寺へまかりけるみちにてよめる　貫之

朝露のおくての山田かりそめにうきよの中をおもひぬるかな

おもひに侍りける人をとぶらひに罷りてよめる　忠岑

すみぞめの君がたもとは雲なれや絶えず涙のあめとのみふる

めの親のおもひにて山寺に侍りけるをある人のとぶらひ遣せりければ返事によめる　讀人しらず

あしびきの山邊にいまはすみぞめの衣の袖のひるときもなし

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる　篁朝臣

水の面にしづく花の色さやかにも君がみ影の思ほゆるかな

深草の帝の御國忌(みこき)の日よめる　文屋康秀

草深き霞の谷にかげかくし照る日のくれし今日にやはあらぬ

深草の帝の御時に藏人の頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇に成りにければ更に世にもまじらずして比叡の山に登りてかしらおろしてけりその又の年みな人御ぶくぬぎてあるはかうぶり給はりなどよろこびけるを聞きてよめる　僧正遍昭

みな人ははなの衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ

○おもひ　喪。

○かりそめに云々　今までは世の中をたゞかりそめに憂いものと思つてゐた。眞に憂いことは今度はじめてわかつた。

○めの親　妻の親。

○しづく　物が水の中にうつつて見えること。

○照る日のくれし云々　先帝が盛りの御齢で崩御なされた御一周忌

○苔のたもと　苔の衣の袂。

河原のおほいまうち君の身罷りての秋かの家の邊を罷りけるに紅葉の色まだ深くもならざりけるを見てかの家によみていれたりける　近院右大臣

うちつけに寂しくも有るかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり

藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又の年の夏郭公のなきけるを聞きてよめる　貫之

郭公けさなく聲におどろけば君にわかれしときにぞありける

櫻を植ゑてありけるにやうやく花咲きぬべき時にかの植ゑける人身まかりにければその花を見てよめる　紀のもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先に戀ひむとか見し

あるじ身まかりにける人の家の梅の花をみてよめる　貫之

色も香もむかしの濃さに匂へどもうゑけむ人の影ぞこひしき

河原の左のおほいまうちぎみの身まかりて後かの家にまかりてありけるに鹽釜といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまのうら寂しくも見えわたるかな

藤原の利基の朝臣の右近中將にてすみ侍りけるざふしの身まかりて後人もすまずなりにけるに秋の夜ふけて物よりまうできけるついでに見いれ

○うちつけに　俄に。急に。

○人こそあだに　植ゑた人の方が先に死んでしまつた。

○むかしの濃さに云々　以前と同じ濃さに咲いて居る事であるが。

○早くそこに云々　以前に自分もそこに居たので。
○一むら薄　たゞ一むらの薄がしげくなつて。
○うたどもとこひければ　歌を見せてくれと請はれたので。
○ことならば　とても死なれるならば。
○消えななむ　消えればよいに。
○かけて　常に思うて。
○白雲のたつ野　里遠いさびしい野。
○すみわたりける　常に通つて居られた。

ければもとありし前栽（せんざい）いと茂く荒れたりけるを見て早くそこに侍りければ昔を思ひやりてよみける　　みはるのありすけ

君が植ゑし一むら薄蟲の音のしげき野邊ともなりにけるかな

惟喬のみこの父の侍りけむ時によめりけむうたどもとこひければかきて送りける奥によみて書けりける　　友則

ことならば言の葉さへも消えななむ見ればなみだの瀧まさりけり

題しらず　　讀人しらず

なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ

誰みよと花さけるらむ白雲のたつ野とはやくなりにしものを

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるをいくばくもあらで女のみこの身まかりにける時にかのみこの住みける帳のかたびらのひもにふみをゆひつけたりけるを取りてみれば昔の手にてこの歌をなむ書きつけたりける

かず〲にわれを忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ

をとこの人の國にまかりけるまに女にはかに病をしていとよわくなりける時よみ置きて身まかりにける　　讀人しらず

聲をだに聞かで別るゝたまよりもなき牀にねむ君ぞかなしき

やまひにわづらひ侍りける秋こゝちのたのもしげなくおぼえければよみて人のもとにつかはしける　大江千里

もみぢ葉を風に任せて見るよりもはかなきものは命なりけり

みまかりなむとてよめる　藤原これもと

露をなどあだなる物と思ひけむ我が身も草におかぬばかりを

やまひして弱くなりにける時よめる　業平朝臣

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

甲斐の國にあひ知りて侍りける人とぶらはむとてまかりける道なかにてにはかに病をしていま〳〵となりにければよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌　在原滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今は限りのかどでなりけり

○たま　魂。
○なき牀　死んでしまつて私の居りません牀。

○風に任せて見る　風の吹くなりにして置いて見る。

○草におかぬばかりを　たゞ草に置かぬといふだけで、はかないことは露と何の變りもない。

○つひに行く道　死は誰でも是非通らなければならぬ道。

○いま〳〵となりにければ　今か今かといふ程になつたので。

○ゆきかひぢ　往來。

古今和歌集　卷第十七

雜歌上

題しらず　　讀人しらず

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのしづくか

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける

うれしきをなにゝつゝまむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを

かぎりなき君がためにと折る花は時しもわかぬものにぞありける

或人のいはく此の歌はさきのおほいまうち君のなり

紫のひともとゆゑに武藏野のくさはみながらあはれとぞ見る

めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりける　　業平朝臣

紫の色こきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

大納言藤原のくにつねの朝臣宰相より中納言になりける時にそめぬうへのきぬのあやをおくるとてよめる　　近院右大臣

○露ぞおくなる　露が降つて來る

○まとゐ　團居。團欒。

○袂ゆたかに云々　著物の袖をも少しゆつたりと裁てと云はうであつたものを。

○紫　草の名。

○みながら　皆ながら。すべて皆

○めのおとうとを云々　妻の妹を妻にもつて居る人。

○紫のいろ云々　妻を大切にする意。

色なしと人や見るらむむかしよりふかき心にそめてしものを

石(いそ)の上(かみ)のなんまつが宮仕もせでいその上といふ所にこもり侍りけるを俄にかうぶり給はれりければ悦(よろこ)びいひ遣はすとてよみて遣はしける　布留今道

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花も咲きけり

二條の后のまだ東宮の御息所と申しける時に大原野に詣で給ひける日よめる　業平朝臣

おほはらや小鹽の山も今日こそは神代のことも思ひ出づらめ

五節(ごせち)の舞姫を見てよめる　良岑宗貞

あまつ風雲のかよひぢ吹きとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

五節のあしたにかむざしの玉の落ちたりけるを見て誰がならむととぶらひて詠める　河原左大臣

ぬしや誰とへどしら玉いはなくにさらばなべてや哀れと思はむ

寛平の御時にうへのさぶらひに侍りけるをのこども瓶を持たせて后の宮の御方におほみきのおろしときこえに奉りたりけるを藏人ども笑ひて瓶を御前にもて出でてともかくもいはずなりにければ使の歸りきてさなむありつるといひければ藏人のなかに送りける　敏行朝臣

○色なしと　白の綾であるから。

○やぶしわかねば　どんな所でもわけへだてがないから。

○神代のこと　天照大神が大原野の神に仰せられた事。

○をとめの姿　五節の舞姫の姿。

○おほみきのおろし　御酒のおさがりを下さいと申してやつたこころが。

○玉垂の云々　催馬樂にある詞。

○かつ見れど　一方には月を見てはゐるが、

玉垂のをがめやいづらこよろぎの磯の波わけ沖に出でにけり

女どもの見て笑ひければよめる　　けんけい法師

かたちこそみやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

方たがへに人の家にまかれりける時にあるじのきぬを著せたりけるをあしたにかへすとてよみける　　紀友則

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

題しらず　　讀人しらず

遲く出づる月にもあるかな足引の山のあなたも惜しむべらなり

我が心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

業平朝臣

大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

月おもしろしとて凡河内躬恆がまうできたりけるによめる　　紀貫之

かつ見れどうとくも有るかな月影の到らぬ里もあらじと思へば

池に月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなぞこに山の端ならで出づる月影

題しらず　　讀人しらず

あまのがは雲のみをにてはやければ光とゞめず月ぞながるゝ
あかずして月の隱るゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

惟喬のみこの狩しける供にまかりてやどりに歸りて夜ひとよ酒をのみ物語をしけるに十一日の月も隱れなむとしける折にみこ醉ひて內へ入りなむとしければよみ侍りける　業平朝臣

あかなくにまだきも月の隱るゝか山の端にげて入れずもあらなむ

田村の帝の御時に齋院に侍りけるあきらけいこのみこを母あやまちありといひて齋院をかへられむとしけるを其の事やみにければよめる　あま敬信

おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせども光けなくに

題しらず　讀人しらず

石の上ふるから小野のもとがしはもとの心は忘られなくに
いにしへの野中のしみづぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ
古のしづのをだまき賤しきもよきもさかりはありしものなり
今こそあれ我もむかしは男山さかゆく時もありこしものを
世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり
笹の葉に降りつむ雪のうれを重みもとくだちゆく我が盛りはも

○雲のみをにて云々　天の川は雲の水脈で瀨が早いから。
○あなたおもて　月の隱れる山の向う側。

○あかなくに　まだ十分に見足らぬのに。

○さかゆく時　繁昌した時。榮えた時。
○ありこしものを　あつて來たものを。
○うれ　末。
○もとくだちゆく　本の方がかたむいてゆく。

おほあらきの森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし

又はさくらあさのをふの下草おいぬれば

數ふればとまらぬものをとしといひて今年は痛く老いぞしにける

おしてるや難波のみつに燒く鹽のからくも我は老いにけるかな

又はおほとものみつの濱邊に

老いらくのこむと知りせば門さしてなしと答へて逢はざらましを

此の三つの歌は昔ありけるみたりの翁のよめるとなむ

さかさまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齢や共に歸ると

とりとむる物にしあらねば年月を哀れあなうとすぐしつるかな

留(とゞ)めあへず宜(むべ)もとしとは言はれけり然かもつれなくすぐる齢か

鏡山いざたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

此の歌はある人のいはく大伴黑主がなり

業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りけるときに業平みやづかへすとて時時もえまかりとぶらはず侍りければしはすばかりに母のみこのもとよりとみの事とて文をもてまうで來たりあけて見ればことばはなくて有りける歌

○すさめず　賞翫せず。喰はず。
○とし　疾しと年とをかけた詞。
○老いらく　老。
○門さし　門を閉して。
○なし　不在。留守。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

かへし　業平朝臣

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子のため

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

白雪のやへふりしけるかへる山かへる〴〵も老いにけるかな

同じ御時うへのさぶらひにてをのこどもにおほみき給ひておほみあそびありけるついでにつかうまつれる　敏行朝臣

老いぬとてなどか我が身をせめぎけむ老いずは今日にあはましものか

題しらず　讀人しらず

千早ぶるうぢの橋守なれをしぞあはれとはおもふ年のへぬれば

我が見てもひさしくなりぬ住吉（すみのえ）のきしの姫松いく世經ぬらむ

すみよしの岸の姫松ひとならば幾代か經しと問はましものを

あづさゆみ磯邊の小松たがよにか萬代かけてたねをまきけむ

この歌はある人のいはく柿本人麿がなり

かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに　藤原興風

○さらぬ別れ　どうしてものがれられぬ別れ。死。

○千代もとなげく　親の壽命をどうか千年もと願ふ。

○おほみあそび　管絃の御遊。

○せめぎけむ　恨みあらそふ。不足に思ふ。

○世をやつくさむ　一生涯を終るであらう。

たれをかも知る人にせむたかさごのまつも昔の友ならなくに

讀人しらず

わたつ海の沖つ鹽あひに浮ぶ沫の消えぬものからよる方もなし

わたつみのかざしにさせる白妙のなみもてゆへるあはぢ島山

わたの原よせくる波のしば〳〵も見まくのほしき玉津島かも

なにはがた汐みちくらしあま衣たみのの島にたづなきわたる

貫之が和泉の國に侍りける時に大和よりこえまうできてよみてつかはしける

藤原忠房

君を思ひ沖つの濱に鳴くたづの尋ねくればぞありとだに聞く

かへし

貫之

沖つ波たかしの濱のはままつの名にこそ君をまちわたりつれ

なにはにまかれりける時によめる

難波潟おふる玉藻をかりそめの蜑とぞわれはなりぬべらなる

あひ知れりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける

壬生忠岑

すみよしと蜑はつぐともながゐすな人忘れ草おふといふなり

難波へまかりけるとき田蓑の島にて雨にあひてよめる

貫之

○知る人にせむ　相手にせう。友にせう。

○消えぬものから　消えはしないが。

○なみもてゆへる　浪を帶に結んでゐる。

○尋ねくればぞ云々　尋ねて來たればこそ御無事なといふことも聞いた。

○名にこそ君を　松といふ名の通りに君を待つてゐた。

○かりそめの　當分の間。

雨により田蓑の島を今日ゆけばなには隱れぬものにぞ有りける

法皇西川におはしましたりける日鶴洲にたてりといふことを題してよませ給ひける

あしたづのたてる川邊を吹く風によせて歸らぬ波かとぞ見る

中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじめてあそびける日法皇御覽じにおはしましたりけり夕さりつかた歸りおはしまさむとしける折によみて奉りける　伊勢

水の上に浮べる船の君ならばこゝぞとまりといはましものを

からことといふ所にてよめる　眞せい法師

都までひゞきかよへるからことは波の緒すげて風ぞひきける

布引の瀧にてよめる　在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうきときの涙にぞかる

布引の瀧のもとにて人々あつまりて歌よみける時によめる　業平朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

吉野の瀧を見てよめる　承均法師

誰がためにひきて晒せる布なれや世をへて見れどとる人もなき

○雨により　雨が降るによつて。
○なには隱れぬ云々　名は蓑であるが名には身は隱れぬもので、雨にぬれた。

○あしたづ　白い鶴。

○こゝぞとまり云々　こゝが船の泊る所と申して今宵は御留めしようものを。

○ぬき亂る云々　貫いてある玉の緒をといてばら〳〵にする人があるらしい。

○瀬々の白絲　瀬々に立つ白絲のやうな涙。
○わが心と　自分の心で。
○落ちたぎつ　わきかへつて落ちる。
○所もさらぬ　同じ所を去らぬ。
○世をへておつる　昔から落ちてゐる。
○おもひせく　思ひをおしこらへて隠して居る心。

題しらず　神たい法師

きよたきの瀬々の白絲くりためてやまわけ衣おりてきましを

龍門にまうでて瀧のもとにてよめる　伊勢

たち縫はぬきぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

朱雀院の帝布引の瀧御覽ぜむとてふん月の七日の日おはしましてありける時にさぶらふ人々に歌よませて給ひけるによめる　橘長盛

主なくてさらせる布をたなばたにわが心とや今日はかさまし

比叡の山なるおとはの瀧を見てよめる　忠岑

落ちたぎつ瀧のみなかみ年積り老いにけらしな黑きすぢなし

おなじ瀧をよめる　躬恒

風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞありける

田村の御時に女房のさぶらひにて御屛風の繪御覽じけるに瀧落ちたりける所面白し是れを題にて歌よめとさぶらふ人に仰せられければよめる　三條の町

おもひせく心のうちの瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

屛風の繪なる花をよめる　貫之

咲きそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の繪によみ合はせてかきける　坂上是則

刈りてほす山田の稻のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

○うちはへて　ひきつゞいて。

○こきたれて　淚をひた〳〵と流して。

古今和歌集　卷第十八

雜歌　下

題しらず　　　　　　讀人しらず

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬になる

幾世しもあらじ我が身をなぞもかく蜑の刈藻におもひみだるゝ

鴈のくるみねの朝霧はれずのみおもひつきせぬ世の中のうさ

然りとてそむかれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中　　　　小野篁朝臣

甲斐の守にて侍りける時京へまかりのぼりける人につかはしける　　　　小野貞樹

みやこびといかにと問はば山高みはれぬ雲居にわぶと答へよ

文屋の康秀が三河のぞうに成りてあがた見にはえ出でたたじやと云ひやれりける返事によめる　　　　小野小町

侘びぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

題しらず

○なにか常なる　いつまでも變らないものがなにがあらうぞ。○幾世しもあらじ　もう生きてゐる間もいくらもないであらう。

○そむかれなくに　のがれられもせぬ世の中だのに。

○はれぬ雲居　雲のはれぬやうに心もはれぬ。

○侘びぬれば　難儀をして居るので。

あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ

讀人しらず

あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり

世の中は夢か現かうつゝともゆめとも知らずありてなければ

世の中にいづら我が身のありてなし哀れとやいはむあなうとやいはむ

山里はものの寂しきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり

惟喬のみこ

白雲の絶えずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ

布留今道

知りにけむ聞きても厭へ世の中は波のさわぎに風ぞしくめる

素性

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

讀人しらず

世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか

世の中をいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出でにけむ

○あはれてふこと　人が氣の毒だと云つてくれる詞。

○いづら　どこ。どこにわが身があるぞ。

○ものの寂しき云々　物寂しいといふことだけはあるが。

○風ぞしくめる　風が烈しくしきりに吹くやうなものである。

○いづくにか云々　世を捨ててどこに住まうぞ。

○昔よりやは云々　昔から憂いものであつたが、それともまた。

み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけ路ふみならしてむ

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ

足引の山のまに／＼かくれなむうき世の中はあるかひもなし

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし

おなじ文字なき歌　　もののべのよしな

世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ

山の法師のもとへつかはしける　　凡河内躬恒

世をすてて山に入る人やまにても猶うき時はいづち行くらむ

物おもひける時いときなき子を見てよめる

今更になに生ひいづらむ竹の子のうきふし繁きよとはしらずや

題しらず　　讀人しらず

よにふればことの葉しげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべらなり

ある人のいはくたかつの皇子の歌なり

わが身からうき世の中と歎きつゝ人のためさへ悲しかるらむ

○世にふれば　世間にかうして住んで居ると。
○巖の中　深山の中の意。
○山のまに／＼　山の奥にどこまでも。
○うけく　うき。うき事。
○なに生ひいづらむ　何故に生まれて來たのか。
○ことの葉しげき　人にとやかくと云はれて。

隱岐の國に流されて侍りける時によめる　篁朝臣

思ひきやひなの別れにおとろへて蜑のなはたぎいさりせむとは

田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣はしける　在原行平朝臣

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ

左近將監とけて侍りける時に女のとぶらひにおこせたりける返事によみて遣はしける　小野春風

あまびこの訪れしとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に

つかさとけて侍りける時よめる　平貞文

うき世には門させりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする

ありはてぬ命待つまの程ばかりうきことしげく思はずもがな

みこの宮の帶刀は侍りけるを宮づかへつかうまつらずとて解けて侍りける時によめる　みやぢのきよき

筑波嶺のこのもと每に立ちぞよる春のみ山のかげを戀ひつゝ

時なりける人の俄に時なくなりて歎くを見てみづからのなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる　清原深養父

○おとろへて　おちぶれて。
○なはたぎ　繩たぐり。
○わくらばに　たまさかに。若しも自然と。
○あまびこ　天上の人。
○われか人かと云々　宮を召し上げられて當惑して居る意。
○ありはてぬ命　いつまでも生きて居ることの出來ぬ命。
○時なりける人　時めいてゐた人

○光なき谷　自分の身の上を云つたもの。

○ひさかたのなか　月の中。

○今ぞ知る　人を待つのは苦しいものである事を今はじめて知つた
○人またむ里　人を待つてゐる所
○かれず　無音に打過ぎないで。

○むろ　庵室。

○忘れては　小野にお籠りなされた事をふと忘れては。

○年をへて　年久しく。

光なき谷には春も外(よそ)なれば咲きてとく散るものおもひもなし

桂に侍りける時に七條中宮とはせ給へりける御かへり事に奉りける

伊勢

ひさかたのなかにおひたる里なれば光をのみぞ賴むべらなる

紀の利貞が阿波の介にまかりける時むまのはなむけせむとて今日といひおくれりける時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければ遣はしける

業平朝臣

今ぞ知る苦しきものと人またむ里をばかれず問ふべかりけり

惟喬のみこの許にまかり通ひけるをかしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるに比叡の山の麓なりければ雪いと深かりけりしひて彼のむろにまかりいたりてをがみけるに徒然(つれづれ)としていと物悲しくて歸りまうできてよみて送りける

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは

深草の里にすみ侍りて京へまうでくとてそこなりける人によみておくりける

年をへて住みこし里を出でていなばいとゞ深草野とやなりなむ

かへし　讀人しらず

野とならば鶉と鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

題しらず

われを君難波の浦に有りしかば憂きめをみつのあまと成りにき

この歌はある人むかし男ありけるをうなの男とはずなりにければ難波のみつの寺に罷りて尼になりてよみて男に遣はせりけるとなむいへる

かへし

難波潟うらむべきまも思ほえず何處をみつのあまとかはなる

今さらにとふべき人もおもほえず八重葎してかどさせりてへ

友だちの久しうまうでこざりけるもとによみて遣はしける　躬恒

水の面におふるさ月の浮草のうきことあれや根を絶えてこぬ

人をとはで久しうありけるをりにあひうらみければよめる

身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

むねをかのおほよりが越の國よりまうできたりけるときに雪の降りけるを見ておのがおもひはこの雪の如くなむ積れるといひける折によめる

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

○難波の浦　何でもないものにした意。憂き目と海布、見つと三津、海士と尼を通はせたもの。

○八重葎して云々　八重葎でとぢて門を閉してあると云へ。

○うきことあれや　不足に考へる事があるのか。

○頼まれず　たのみにならぬ。

かへし　宗岳大頼

君をのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆるときある

越なりける人に遣はしける　紀貫之

思ひやるこしの白山しらねどもひとよも夢にこえぬ夜ぞなき

題しらず　讀人しらず

いざこゝに我が世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

我が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひきませ杉たてるかど

喜撰法師

我が庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢやまと人はいふなり

讀人しらず

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

奈良へまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるをききてよみていれたりける　良岑宗貞

侘人のすむべき宿と見るなべになげき加はる琴の音ぞする

初瀬に詣づる道に奈良の京にやどれりけるときよめる　二條

人ふるす里をいとひてこしかどもならの都もうき名なりけり

〇しかぞすむ　この通りに住んで居る。

〇幾世の宿なれや　人が住まぬ宿となつて已に何年も經過したことであるよ。

〇人ふるす里　人を古いものにしてみすてる所。

題しらず　讀人しらず

世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿と定むる

逢坂のあらしの風はさむけれど行方しらねば侘びつゝぞぬる

風の上にありか定めぬ塵の身は行方も知らずなりぬべらなり

家をうりてよめる　伊勢

飛鳥川ふちにもあらぬわが宿もせに變りゆくものにぞありける

つくしに侍りける時にまかり通ひつゝ棊うちける人の許に京に歸りまうできてつかはしける　紀友則

故郷は見しごともあらず斧の柄のくちし所ぞこひしかりける

女ともだちと物語して別れて後につかはしける　みちのく

あかざりし袖の中(なか)にや入りにけむ我がたましひのなき心地する

寛平の御時にもろこしのはう官にめされて侍りける時に東宮のさぶらひにてをのこども酒たうべけるついでによみ侍りける　藤原たゞふさ

なよ竹のよながきうへに初霜のおきゐて物をおもふころかな

題しらず　讀人しらず

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにやきみがひとりこゆらむ

○いづれかさして云々　どの家をこれときしてわが家ときしようや。○行方しらねば　所をかへて他に行つても、そこがどんなだかわからぬので。

○ふちにもあらぬ　淵ならば瀨に變るものだが。

○見しごともあらず　先年のやうでもなく大層變つてゐる。○斧の柄のくちし所　棊をうつて何事も忘れた所。○あかざりし袖　名殘惜しく思つた其許の袖。

或人この歌はむかし大和の國なりける人のむすめにある人すみ渡りけるこの女おやもなくなりて家もわろくなりゆくあひだこの男河内の國に人を相知りて通ひつゝかれやうにのみなりゆきけりさりけれどもつらげなるけしきも見えで河内へいくごとに男のこゝろの如くにしつゝいだしやりければあやしと思ひてもしなきまにことごゝろもやあるとうたがひて月のおもしろかりける夜河内へいくまねにて前栽の中にかくれて見ければ夜ふくるまで琴をかきならしつゝうちなげきてこの歌をよみてねにければこれを聞きてそれよりまたほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつ田の山にをりはへてなく

わすられむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへもしらぬ跡をとゞむる

貞觀の御時萬葉集はいつばかりつくれるぞと問はせ給ひければよみて奉りける　　文屋ありすゑ

神無月時雨降りおけるならの葉の名におふ宮の古ことぞこれ

寛平の御時歌奉りけるついでに奉りける　　大江千里

あしたづのひとりおくれてなく聲は雲のうへまできこえつがなむ

○たがみそぎ云々　誰が禊をして放して置いた鷄であらうか。
○をりはへて　時長くつゞいて。引續いて久しく。
○跡をとゞむる　手跡を殘して置く。
○ひとりおくれて云々　自分一人おくれて立身もせずに歎いて居る聲。

藤原勝臣

人しれずおもふこゝろは春霞たちいでて君がめにも見えなむ

歌めしける時に奉るとてよみておくに書きつけて奉りける

伊勢

山川のおとにのみ聞く百敷をみをはやながら見るよしもがな

たみをよやながら　以前の宮仕し
○頃の通りの身で。

古今和歌集　巻第十九

雜體

長歌

題しらず　　　　讀人しらず

逢ふことの　まれなる色に　思ひそめ　我が身はつねに
あまゞもの　晴るゝ時なく　富士のねの　燃えつゝとはに
思へども　逢ふことかたし　なにしかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　思ひてし　思ひはいまは
いたづらに　なりぬべらなり　ゆく水の　絶ゆる時なく
かくなはに　思ひみだれて　降るゆきの　消なばけぬべく
おもへども　閻浮(えふ)の身なれば　なほ止まず　おもひは深し
あしびきの　やましたみづの　木がくれて　たぎつ心を
たれにかも　あひ語らはむ　色にいでば　人知りぬべみ

○とはに　常に。

○閻浮の身　凡夫の身。

○人知りぬべみ　人が知るだらうと思はれるので。

○せむすべなみに　せんかたなさに。

○くれたけの　ふし、よ、の枕詞。

○あまびこの　山彦の。雜下のあまびこは違ふ。

○おもひするがの　思ひをするこ駿河こにかけたもの。

すみぞめの　ゆふべになれば　ひとり居て　あはれ〳〵と
歎きあまり　せむすべなみに　庭に出でて　立ちやすらへば
しろたへの　ころもの袖に　置くつゆの　消なばけぬべく
思へども　なほなげかれぬ　春がすみ　よそにもひとに
あはむと思へば

ふる歌奉りし時目録のその長歌　貫之

ちはやぶる　かみの御代より　くれたけの　よゝにもたえず
あまびこの　おとはのやまの　はるがすみ　おもひみだれて
さみだれの　そらもとゞろに　さ夜ふけて　やまほとゝぎす
鳴くごとに　たれも寐覺めて　からにしき　たつたのやまの
もみぢ葉を　見てのみしのぶ　かみなづき　しぐれ〳〵て
ふゆの夜の　にはもはだれに　降るゆきの　なほ消えかへり
としごとに　ときにつけつゝ　あはれてふ　ことをいひつゝ
きみをのみ　千代にといはふ　世のひとの　おもひするがの
富士の嶺の　燃ゆるおもひに　あかずして　わかるゝなみだ
ふぢごろも　おれるこゝろも　やちくさの　ことの葉ごとに

○まき／＼の　卷々の。

○のばへまし　述べまし。
○むかしべ　昔。
○身はしもながら　身分は卑いけれども。

○ちりにつげとや　人麿のあとをつげとのことか。

すべらぎの　おほせかしこみ　まき／＼の　なかにつくすと
伊勢の海の　うらのしほがひ　拾ひあつめ　取れりとすれど
たまの緒の　みじかきこゝろ　思ひあへず　なほあらたまの
としを經て　おほみやにのみ　ひさかたの　ひるよるわかず
つかふとて　かへりみもせぬ　わがやどの　しのぶ草おふる
板まあらみ　降るはるさめの　もりやしぬらむ

ふる歌にくはへて奉れる長歌　　壬生忠岑

くれたけの　よゝのふるごと　なかりせば　伊香保のぬまの
いかにして　おもふこゝろを　のばへまし　あはれむかしべ
有りきてふ　ひとまろこそは　うれしけれ　身はしもながら
ことの葉を　あまつそらまで　きこえあげ　すゑの世までの
あととなし　いまもおほせの　くだれるは　ちりにつげとや
ちりの身に　つもれることを　問はるらむ　これをおもへば
いにしへも　くすりけがせる　けだものの　くもに吼えけむ
こゝちして　ちゞのなさけも　おもほえず　ひとつこゝろぞ
ほこらしき　かくはあれども　照るひかり　ちかきまもりの

○このへもる身　御殿のほとりを守護する身。
○をさ／＼しくも　はか／″＼しくも。
○やよけれは　よけいになつたので。

身なりしを　たれかはあきの　くるかたに　あざむきいでて
みかきより　とのへもる身の　みかきもり　をさ／＼しくも
おもほえず　こゝのかさねの　うちにては　あらしのかぜも
きかざりき　いまは野やまし　ちかければ　はるはかすみに
たなびかれ　なつはうつせみ　鳴きくらし　あきはしぐれに
そでをかし　ふゆはしもにぞ　せめらるゝ　かかるわびしき
身ながらに　つもれるとしを　しるせれば　いつゝのむつに
なりにけり　これに添はれる　わたくしの　おいのかずさへ
やよければ　身はいやしくて　としたかき　ことのくるしさ
かくしつゝ　ながらのはしの　ながらへて　なにはのうらに
たつなみの　なみのしわにや　おぼほれむ　さすがにいのち
をしければ　こしのくになる　しらやまの　かしらはしろく
なりぬとも　おとはのたきの　おとに聞く　老いず死なずの
くすりもが　きみが八千代を　わかえつゝ見む

君が世にあふさかやまの岩清水こがくれたりと思ひけるかな

冬のながうた　凡河内躬恒

ちはやぶる　かみなづきとや　けさよりは　くもりもあへず
うちしぐれ　もみぢとともに　ふるさとの　よし野のやまの
山あらしも　さむく日ごとに　なりゆけば　たまの緒とけて
こきちらし　あられみだれて　しもこほり　いやかたまれる
庭のおもに　むら〳〵見ゆる　ふゆくさの　うへに降りしく
しらゆきの　つもり〳〵て　あらたまの　としをあまたも
すぐしつるかな

七條の后うせ給ひにける後によみける　伊勢

おきつなみ　あれのみまさる　宮のうちは　としへて住みし
伊勢の蜑も　ふねながしたる　こゝちして　よらむかたなく
かなしきに　なみだのいろの　くれなゐは　われらがなかの
しぐれにて　あきのもみぢと　ひと〴〵は　おのがちり〴〵
わかれなば　たのむかげなく　なりはてて　とまるものとは
はなすゝき　きみなきにはに　むれたちて　そらをまねかば
はつかりの　なきわたりつゝ　よそにこそ見め

旋頭歌

題しらず　讀人しらず

うち渡す　をちかた人に　ものまうすわれ
そのそこに　しろくさけるは　なにの花ぞも

かへし

春されば　野邊にまづさく　見れどあかぬ花
まひなしに　たゞなのるべき　花の名なれや

題しらず　貫之

はつせ川　ふる川のべに　ふたもとある杉
としを經て　またもあひみむ　二もとある杉

君がさす　みかさの山の　もみぢ葉のいろ
かみなづき　しぐれのあめの　染めるなりけり

誹諧歌

○旋頭歌　かうべをめぐらす歌。本かと思へば末となり、末かと思へば本となる。上の句、下の句共に五、七、七の三句からなる。

○うち渡す　うち見わたす。

○春されば　春になれば。

○まひなしに　おくりものなしには。何か御禮を貰はないでは。

○誹諧歌　ざれ歌。利口した様のこと。一說、單に思ひがけない風情をよんだ歌。

題しらず　讀人しらず

梅の花見にこそきつれうぐひすのひとく〱と厭ひしもをる

素性法師

やまぶきの花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさを朝な〱よぶ

七月六日たなばたの心をよめる　藤原かねすけ

いつしかとまたく心をはぎにあげて天の河原をけふや渡らむ

題しらず　凡河内躬恒

睦言（むつごと）もまだ盡きなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は

僧正遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひとときく

讀人しらず

秋くれば野邊にたはるゝ女郎花いづれの人かつまで見るべき

秋霧のはれてくもればをみなへしはなの姿ぞ見えかくれする

花と見て折らむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

○ひとく〱　鶯の鳴聲に人が來るとかけたもの。

○くちなし　梔子と口が無いと通はせたもの。

○またく心　待つ心。待ちわびてゐる心。

○はぎにあげて　待つ心を見せるために。

○いづらは云々　秋の夜が長いといふのは一體どこが長いのか。

○あなかしがまし　あゝやかましい。

○花もひとゝき　花の美しいのもひとさかりの僅かの間である。

○つまで　摘まないで。

○はれてくもれば　晴れたり曇つたりすれば。

○はなの姿　美しい姿。

○うたゝあるさまの名　へんな不都合な名。

○つゞりさせ　ほころびをつゞくりさせ。きりぎりすの鳴き聲。
○たゝるに　たゝつて。
○かたこそありときけ　やつれながらも其の身だけはあるものと聞くのに。
○たてれをれども　立つてゐても坐つてゐても。
○ありぬやと　逢はず居ることも出來るものかと。
○たはぶれにくきまで　そんな戯れもして居られぬ程。
○おもひの色　戀の思ひの緋の色
○山田のそほづ　案山子。
○おのれ　そなた。相手を卑しめていふ詞。
○我をほしといふ　自分を望んで逢ひたいといふ。
○ならぬおもひ　出來ぬ戀の思ひ
○もえばもえ　燃えるなら燃えよ
○人につきなみ　人に逢はれる手がゝりがなさに。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋かぜにほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴く

あす春立たむとしける日鄰の家の方より風の雪を吹きこしけるを見て其の鄰へ詠みて遣はしける　清原深養父

冬ながら春のとなりのちかければなか垣よりぞ花はちりける

題しらず　讀人しらず

石の上ふりにし戀の神さびてたゝるにわれはいぞねかねつる

枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞ牀なかにをる

戀しきが形もかたこそありときけたてれをれどもなき心地する

ありぬやと心見がてら逢ひ見ねばたはぶれにくきまでぞ戀しき

みゝなしの山の口なしえてしがなおもひの色の下ぞめにせむ

足引の山田のそほづおのれさへ我をほしといふうれはしきこと　紀のめのと

富士のねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬ空し煙を　紀のありとも

逢ひ見まくほししは數なく有りながら人につきなみ惑ひこそすれ

○思ひおきて　思ひ起きてと火がおきてとを通はせたもの。

○かひよ　鹿の鳴く聲を甲斐よにかけたもの。

○なれば　馴れたならば。

○くるな厭ひそ　來るのを厭がるな。

○思はずとやは云々　思はない厭だとなぜ云はぬのか。

○玉襷なる　ひつかゝつて居るのか。

人に逢はむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心やけをり　　小野小町

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　藤原興風

春霞たなびく野邊のわかなにもなりみてしがな人もつむやと

題しらず　　讀人しらず

思へどもなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじとおもへば

平貞文

春の野のしげき草葉のつま戀にとびたつ雉のほろゝとぞなく

紀のよしひと

秋の野につまなき鹿の年をへてなぞ我が戀のかひよとぞ鳴く

躬恆

蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなむものにやあらぬ

忠岑

隱沼(かくれぬ)の下より生ふるねぬなはの寐ぬ名はたたじくるな厭ひそ

讀人しらず

ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世のなかの玉襷なる

思ふてふ人の心のくまごとに立ちかくれつゝ見るよしもがな

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

我をのみ思ふといはばあるべきをいでや心はおほ幣(ぬさ)にして

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれをおもはぬ

深養父

思ひけむ人をぞともに思はましまさしや報いなかりけりやは

讀人しらず

出でて行かむ人をとゞめむよしなきに鄰のかたに鼻もひぬかな

くれなゐにそめし心もたのまれず人をあくには移るてふなり

厭はるゝ我が身は春の駒なれや野がひがてらに放ち捨てつる

鶯のこぞのやどりのふるすとや我には人のつれなかるらむ

さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

平中興

逢ふ事の今ははつかに成りぬれば夜深からではつきなかりけり

左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山に籠るとも後れむと思ふわれならなくに

○いなや思はじ　いや〳〵、もうこれからは思ふまいぞ。
○あるべきを　それでよいが。
○おほ幣にして　引く手が多いから。

○思ひけむ人をぞ云々　以前に自分を思つてくれた人があつたらその時に自分もその人を思うてやればよかつた。
○鼻もひぬ　くさめもしない。

○ふるすとや　古いものにしての事か。
○人まね　人なみに云つて。

○つきなかりけり　寄りつくべき方もない。

○人の心を云々　わが心をはっきりと見定めてその上で止めるなら止めるべきものである。
○ながらの橋もつくるなり　長柄の橋も新しく出來た。
○まめなれど　自分はまじめに身を持つか。
○何ぞはよけく　何のよい事もない。次の刈萱の上に、世間の人はさ入れて見る。
○知りて　戀をすれば名が立つといふ事を知りながら。
○よそへて　さうでもないことをあるやうに云ひなす意。
○我が身にいとのよる　自分にいとこが戀するやうに。
○すく　すきごとをする。
○なげきこる　歎き凝るを、木を樵るにかく。

なかき
くもはれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

伊勢
難波なるながらの橋もつくるなり今は我が身を何にたとへむ

讀人しらず
まめなれど何ぞはよけく刈萱(かるかや)の亂れてあれどあしけくもなし

興風
何かその名のたつことのをしからむ知りて惑ふはわれ一人かは

くそ
いとこなりける男によそへて人のいひければ
外(よそ)ながら我が身にいとのよるといへばたゞ偽りにすくばかりなり

讃岐
題しらず
ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそはてはなげきの森となるらめ

大輔
なげきこる山とし高くなりぬればつら杖のみぞまづつかれける

讀人しらず
なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり

人戀ふることを重荷と荷ひもてあふごなきこそ侘しかりけれ

宵の間に出でて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

そへにとてとすればかかりかくすればあないひ知らずあふさきるさに

世のなかの憂きたびごとに身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ

在原元方

世の中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人に恨みらるれば

讀人しらず

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむことぞやさしき

興風

身は捨てつ心をだにも放らさじ終にはいかゞなると知るべく

千里

白雪のともに我が身はふりぬれど心は消えぬものにぞありける

題しらず　　讀人しらず

梅の花咲きての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ

法皇西川におはしましたりける日猿山のかひにさけぶといふことを題にてよませ給うける

躬恒

○あふご　荷をになふ朸と逢ふ時節とを通はせたもの。

○そへにとて　それがよからうと定めて。

○とすれば　かかり　其の通りにすれば又一方には差支へがある。

○あふさきるさに　左右。こちらがよければあちらがわるくて。

○こゝらの人　多くの人。

○やさしき　はづかしい。

○心をだにも放らさじ　せめて心だけは大切にしよう。

○すきものとのみ　人が誰でも自分の事を好色者といふ。實に身、酢きに好きをかけたもの。

○わびしらに　詫傷さうに。

○うつぶし染の云々　そのまゝで寢る五倍子染の麻の衣である。

わびしらに猿（ましら）な鳴きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ

題しらず　　讀人しらず

世を厭ひこのもとごとに立ちよりてうつぶし染の麻の衣（きぬ）なり

古今和歌集　卷第二十

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始めにかくしこそ千年をかねてたのしきをへめ

日本紀にはつかへまつらめよろづ代までに

ふるきやまと舞のうた

しもとゆふかづらき山に降る雪のまなく時なく思ほゆるかな

近江ぶり

近江より朝立ちくればうねの野に鶴(たづ)ぞ鳴くなる明けぬ此の夜は

みづぐきぶり

水ぐきの岡のやがたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

しはつ山ぶり

しはつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟

○大歌所御歌　大内裏の内教坊即ち大歌所で舞妓の歌ふ風俗歌。

○かくしこそ　此の通りに。

○たのしきをへめ　樂しい事を極めよう。

○岡のやがた　山城國岡屋縣。

○霜のふり　霜の降り方。

神あそびの歌

とりものの歌

神垣のみむろの山の榊葉はかみのみ前にしげりあひにけり

霜やたびおけどかれせぬさかき葉のたちさかゆべき神のきねかも

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがにやまかづらせよ

みやまには霰ふるらし外山(とやま)なるまさきのかづら色づきにけり

陸奥(みちのく)のあだちのま弓わがひかば末さへよりこしのびのびに

我が門の板井の清水里とほみ人し汲まねばみくさおひにけり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

かへしものの歌

あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ

まがねふくきびの中山おびにせるほそ谷川のおとのさやけさ

此の歌は承和のおほんべのきびの國の歌

美作やくめのさらやまさらさらにわが名はたてじ萬代までに

○神あそびの歌　神樂歌。

○とりものの歌　手に取る物をよんだ歌。

○霜やたび　霜彌度。霜が幾度も幾度も。

○神のきね　神の木根。根は添へた詞。榊の意。

○見るがに　見るやうにそのために。

○やまかづら　あけぼのの雲をいふ。(密勘)

○末さへよりこ　末々まで寄つて來い。

○ひるめの歌　太日靈貴(オホヒルメムチ)卽ち天照大神のことをよんだ歌。

○しばし水かへ　しばらく駒に水を飼へ。

○かへしものの歌　催馬樂の呂の壁調が律の平調になつたのを反聲(カヘリゴヱ)といふ。其の意の歌。

○おほんべ　大嘗。

これは水の尾のおほんべの美作の國の歌

みののくに關の藤川たえずして君につかへむよろづ代までに

これは元慶のおほんべの美濃の歌

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは仁和のおほんべの伊勢の國の歌

近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆるきみが千とせは

これは今上のおほんべの近江の歌

大伴黑主

東歌

みちのくうた

あぶくまに霧たちわたり明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

みちのくはいづくはあれど鹽竈のうらこぐ舟の綱手かなしも

わがせこを都にやりて鹽竈のまがきのしまのまつぞ戀しき

をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを

みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露はあめにまされり

○東歌　あづまの國俗(クニブリ)の歌。

○あぶくま　磐城國阿武隈川。
○いづくはあれど　どこにも面白い所は多くあるが。
○かなしも　面白い。

○みつの小島の人ならば　みつの小島が人ならば。
○都のつと　都へのみやげ。
○みさぶらひ　御供の衆。

○のぼればくだる　上るのもあれば下るのもある。○いなにはあらず云々　いやではないが此の月だけは承知出來ぬ。

○めざし　子供。

○さやにも見しが　はつきりと見たものだが。○けゝれなく　心なく。○人にもがもや　人にしたいものである。

○なりもならずも　なることならぬとは兎も角として。許しを受けて夫婦となる事が出來る出來ぬは別として。

最上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山なみもこえなむ

さがみ歌

こよろぎの磯立ちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波

ひたち歌

筑波嶺の此面(このも)彼面(かのも)にかげはあれど君がみ影にますかげはなし

筑波嶺の嶺のもみぢ葉落ちつもりしるもしらぬもなべて悲しも

甲斐うた

かひがねをさやにも見しがけゝれなく横をりふせるさやの中山

甲斐が嶺をねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらむ

伊勢うた

をふの浦にかたえさし覆ひなる梨のなりもならずもねて語らはむ

冬の賀茂の祭の歌　藤原敏行朝臣

ちはやぶる賀茂のやしろの姫小松萬代ふとも色はかはらじ

杣人　山に入つて材木をとる人
宮木　大宮をつくる料の木。
かけりても　死者の魂が空を飛びかけつても。
何をかたまの　何をか魂の。
くれのおも　和名抄「懷香一名懷芸、和名久禮乃於毛」とある。

家々ニ稱スル二證本ト一之本ニ乍ニ書キ入レ一以レ墨滅シタル歌今別ニ書クレ之ヲ

卷第十　物名部

ひぐらし　　　貫之

杣人は宮木ひくらしあしびきの山のやまびこよびとよむなり

在二郭公下空蟬上一

をかたまの木　友則下　　　勝臣

かけりても何をかたまのきてもみむからは焔（ほのほ）となりにしものを

くれのおも　　　貫之

こし時と戀ひつゝをれば夕ぐれのおもかげにのみ見え渡るかな

忍草　利貞下

おきの井　みやこじま　　　小野小町

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこしまべの別れなりけり

からこと　清行下

（）此の歌は云々　清和上皇が染殿から粟田院におうつりになつた事は三代實錄の元慶三年五月の條に見えて居る。

（）犬がみ　近江國犬上郡。

（）いさと答へよ　いさは知らずの意。いさや川はいさといふための序。

（）やましなの音羽の瀧の　次の音を云ふための序。

そめどの　あはた　あやもち

うきめをばよそめとのみぞのがれ行く雲のあはたつ山の麓に

此の歌は水のをの帝の染殿より粟田へ移り給うける時によめる　桂宮下

巻第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪下

けふひとをこふる心はおほゐがは流るゝ水におとらざりけり

わぎもこにあふ坂山の篠すゝきほには出でずも戀ひわたるかな

巻第十三

戀しくばしたにを思へ紫の下

犬がみのとこの山なるいさや川いさと答へよわが名もらすな

この歌ある人あめの帝の近江の釆女（うねめ）にたまへると

かへし　うねめの奉れる

やましなの音羽の瀧の音にだに人のしるべくわがこひめやも

○わがせこが云々　書紀允恭天皇の巻に出てゐる歌。せこは女から男をさして云ふ詞。夫。

巻第十四

おもふてふことの葉のみや秋をへて下

衣通姫（そとほりひめ）のひとりゐて帝をこひ奉りて

わがせこがくべき宵なりさゝがにの蛛の振舞かねてしるしも

深養父　戀しとはたがなづけけむことならなむ下　　貫之

道しらばつみにもゆかむ住の江の岸におふてふ戀わすれ草

古今和歌集 終

後撰和歌集

後撰和歌集　巻第一

春歌上

元日に二條の后の宮にて白き大うちぎをたまはりて　　藤原敏行朝臣

降る雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

春たつ日よめる　　凡河内躬恒

春立つときゝつるからに春日山きえあへぬ雪の花と見ゆらむ

　　兼盛王

今日よりは荻のやけ原かきわけて若菜つみにと誰をさそはむ

ある人の許ににひまゐりの女の侍りけるが月日久しく經て睦月のついたち頃にまへゆるされたりけるに雨のふるを見て　　讀人しらず

白雲のうへしる今日ぞ春雨のふるにかひある身とは知りぬる

朱雀院の子日(ねのひ)におはしましけるにさはる事侍りてえつかうまつらずして延光朝臣につかはしける　　左大臣

松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしか櫻はやもさかなむ

○大うちぎ　單に袿ともいふ。婦人の禮服として衣の上、裝束の下に著るもの。
○みのしろ衣　蓑代衣の義。雪がふれば蓑を著るが、その代として白い衣を著てといふ意。

○にひまゐり　今參り。新參。

○ふるにかひある　雨の降ると、身の古くなるとを通はせたもの。
○子日　正月の初の子の日に野に出て小松を引いて遊び、千代を祝つたこと。

○我もかたみに　かたみは互にの意で、併せて籠の意を含めたもの

○なりみてしがな　なつてみたいものだ。

○としをこそつめ　若菜を摘むといふ縁から、年を積むといひかけたもの。

○あや吹きみだる　あやは文。風のために波紋の出來ること。

○事につきて　用事によつて。おほやけの御使で。

院御かへし

まつにくる人しなければ春の野の若菜もなにもかひなかりけり

子の日にをとこのもとより今日は小松引きになむまかり出づるといへりければ　　讀人しらず

君のみや野邊に小松を引きにゆく我もかたみにつまむ若菜を

題しらず

霞たつ春日（かすが）の野邊のわかなにもなりみてしがな人もつむやと

子日しにまかりけるに人におくれてつかはしける　　躬恒

春の野に心をだにもやらぬ身は若菜はつまでとしをこそつめ

宇多院に子日せむとありければ式部卿のみこをさそふとて　　行明親王

故郷の野邊みにゆくといふめるをいざもろともに若菜つみてむ

はつ春の歌とて　　紀友則

水のおもにあや吹きみだる春風やいけの氷をけふはとくらむ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　讀人しらず

ふく風や春たちきぬとつげつらむ枝にこもれる花さきにけり

しはすばかりに大和へ事につきてまかりける程に宿りて侍りける人の家

のむすめを思ひかけて侍りけれどもやんごとなき事によりてまかりのぼりにけりあくる春親のもとに遣はしける　　躬恒

春日野におふるわかなを見てしより心をつねに思ひやるかな

かれにけるをとこのもとにその住みけるかたの庭の木の枯れたりける枝を折りて遣はしける　　兼覽王母

もえ出づる木のめを見てもねをぞなく枯れにし枝の春を知らねば

女の宮仕にまかり出でて侍りけるに珍らしき程はこれかれ物いひなどし侍りけるを程もなく一人にあひ侍りにければ睦月のついたちばかりにいひ遣はし侍りける　　讀人しらず

いつのまに霞たつらむ春日野のゆきだにとけぬ冬とみしまに

題しらず　　閑院左大臣

なほざりに折りつるものを梅の花こき香にわれや衣そめてむ

前栽(せんざい)に紅梅を植ゑて又の春遲く咲きければ　　藤原兼輔朝臣

宿近くうつして植ゑしかひもなくまち遠にのみにほふ花かな

延喜の御時歌めしけるに奉りける　　紀貫之

はるがすみたなびきにけり久方の月のかつらも花やさくらむ

○枯れにし枝　疎々しくなつて逢はれぬやうになつた自分の身の意を含めたもの。

○なほざりに　かりそめに。深く思ひこむこともなく。

おなじ御時みづし所にさぶらひけるころしづめるよしを歎きて御覧ぜさせよと覺しくてある藏人におくりて侍りける十二首がうち　躬恒

いづこ とも春の光はわかなくにまだみよしのの山はゆきふる

人のもとに遣はしける　伊勢

白玉をつゝむ袖のみながるゝは春はなみだもさえぬなりけり

人にわすられて侍りけるころ雨のやまず降りければ　讀人しらず

春たちてわが身ふりぬるながめには人の心のはなもちりけり

題しらず

わがせこに見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪のふれれば

きて見べき人もあらじなわがやどの梅の初花をりつくしてむ

ことならば折り盡してむ梅の花わがまつ人のきても見なくに

吹く風にちらずもあらなむ梅のはなわがかり衣ひと夜やどさむ

我がやどのうめの初花ひるは雪よるは月かと見えまがふかな

梅の花外(よそ)ながら見む吾妹子(わぎもこ)がとがむばかりの香にもこそしめ

梅の花をればこぼれぬ我が袖ににほひかうつせ家づとにせむ　素性法師

○みづし所　御廚子所、禁中で樂器や書籍などを納めて置かれる所
○まだみよしのの山は云々　自分の身の沈んでゐることを云つたもの。
○ながめ　長雨と詠歎とをかけたもの。
○きて見べき　來て見るだらうやうな。
○ことならば　こんなことなら。同じことなら。
○にほひか　匂ひ香。
○家づと　家へのみやげ。

をとこにつきて外にうつりて　　讀人しらず

心もてをるかはあやな梅の花香をとめてだにとふ人のなき

年を經て心かけたる女の今年ばかりをだに待ちくらせといひけるが又の年もつれなかりければ

人心うさこそまされ春たてばとまらず消ゆるゆきかくれなむ

題しらず

梅の花香をふきかくる春風にこゝろをそめば人やとがめむ

はるさめのふらば野山にまじりなむ梅の花笠ありといふなり

かきくらし雪はふりつゝしかすがに我が家のそのに鶯ぞなく

谷さむみいまだすだたぬ鶯のなく聲わかみひとのすさめぬ

鶯のなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞわれは來にける

花だにもまださかなくに鶯のなくひとこゑをはるとおもはむ

きみがため山田の澤にゑぐつむとぬれにし袖はいまもかわかず

あひしりて侍りける人の家にまかりけるに梅の木侍りけりこの花さきなむ時は必ずせうそこせむといひけるを音なく侍りければ　朱雀院の兵部卿のみこ

うめの花いまは盛りになりぬらむたのめし人のおとづれもせぬ

○香をとめてだに　香を尋ねてさへも。

○ゆきかくれなむ　消える雪と、ゆきくれることを通はせたもの。

○こゝろをそめば　心を染めたならば。

○かきくらし　空が一面に曇つて

○谷さむみ　谷が寒さに。谷が寒いので。次の、「わかみ」のみも同じ用法。

○すさめぬ　めではやさぬ。

○ゑぐ　葉は蘭に似て小さく根は慈姑に似たもの。又芹の異名ともいふ。

○ちるてふなべに　散るといふことにつけて。
○ふりでつゝなく　春雨の降ると聲を出して鳴くことを通はせたもの。
○はひり　門の入口。

○ちらぬまばかり　散らない間だけのものである。

○ことごとに　別々に。異なっては。

○かつもけななむ　降る一方から消えてほしい。

かへし　紀長谷雄朝臣

春風にいかにぞ梅や匂ふらむわが見る枝はいろもかはらず

春の日ことのついでありてよめる　讀人しらず

うめの花ちるてふなべにはるさめのふりでつゝなく鶯のこゑ

かよひすみ侍りける人の家の前なる柳を思ひやりて　躬恆

いもがいへのはひりにたてる青柳にいまやなくらむうぐひすの聲

松の下にこれかれ侍りて花を見やりて　坂上是則

深みどりときはの松の陰にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ

藤原雅正

花の色はちらぬまばかりふるさとにつねには松の緑なりけり

紅梅の花を見て　躬恆

紅にいろをばかへて梅のはな香ぞことごとににほはざりける

これかれ圓居して酒たうべけるまへに梅の花に雪のふりかゝりけるを　貫之

ふる雪はかつもけななむ梅の花ちるにまどはず折りてかざさむ

兼輔朝臣のねやの前に紅梅を植ゑて侍りけるを三とせばかりの後花さき

（一）咲きまさるべき花　年々美しさのまさるべき花。

などしけるを女どもその枝を折りてみすのうちよりこれはいかゞといだしてけれは

春毎に咲きまさるべき花なれば今年をもまだあかずとぞ見る

はじめて宰相になりて侍りける年になむ

○よどこね　夜寢るの意。
○あさい　朝寢。

○いははいはなむ　云ふならば云へ。

○かたみに見れば　折つた枝と本木のまゝの枝とを比べること。形見に通はせたもの。

後撰和歌集　卷第二

春歌中

年老いて後梅の花植ゑてあくる年の春おもふところありて　藤原扶幹朝臣

植ゑしとき花見むとしも思はぬに咲きちるみれば齡老いにけり

ねやの前に竹のある所に宿り侍りて　藤原伊衡朝臣

竹ちかくよどこねはせじ鶯の鳴くこゑきけばあさいせられず

大和のふるの山をまかるとて　僧正遍昭

いそのかみふるのやまべのさくら花うゑけむときをしる人ぞなき

花山にて道俗酒たうべけるをりに　素性法師

やまもりはいはばいはなむ高砂のをのへの櫻をりてかざさむ

面白き櫻を折りて友だちのつかはしたりければ　讀人しらず

櫻花いろはひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

かへし　伊勢

見ぬ人の形見がてらは折らざりき身に准(なぞら)へる花にしあらねば

櫻の花をよめる　　讀人しらず

吹く風をならしの山の櫻花のどけくぞみる散らじとおもへば

前裁に竹の中に櫻のさきたるを見て　　坂上是則

櫻花けふよく見てむくれたけの一よのほどに散りもこそすれ

題しらず　　讀人しらず

さくら花にほふともなく春くればなどかなげきのしげりのみする

貞觀の御時弓のわざつかうまつりけるに　　河原左大臣

けふ櫻雫にわが身いざぬれむ香ごめにさそふかぜのこぬまに

家より遠き所にまかる時前裁の櫻の花にゆひつけ侍りける　　菅原右大臣

櫻花ぬしをわすれぬものならば吹きこむ風にことづてはせよ

春のこゝろを　　伊勢

あをやぎのいとよりはへて織るはたをいづれの山の鶯かきる

花のちるを見て　　凡河内躬恒

あひ思はで移ろふ色をみるものを花にしられぬながめするかな

歸る鴈をききて　　讀人しらず

かへるかり雲路にまどふ聲すなり霞ふきとけこのめはるかぜ

○一よ　呉竹を受けて一節と云ひこれを一夜に通はせたもの。

○香ごめに　香ぐるみに。香をも共にこめて。

○このめはるかぜ　木の芽を張ると春風とをかけたもの。

朱雀院の櫻の面白きことと延光朝臣のかたり侍りければ見るやうもあらまし物をなど昔を思ひ出でて　　大將御息所

咲きさかずわれになつげそ櫻花人づてにやはきかむと思ひし

題しらず　　讀人しらず

春くれば木がくれ多きゆふづく夜おぼつかなくも花陰にして

たちわたる霞のみかはやまたかみ見ゆる櫻のいろもひとつを

大空におほふばかりの袖もがな春さく花をかぜにまかせじ

やよひのついたちごろ女に遣はしける

歎きさへ春をしるこそわびしけれもゆとは人に見えぬものから

春雨のふらばおもひのきえもせでいとゞなげきのめをもやすらむといふ

古歌の心ばへを女にいひ遣はしたりければ

もえ渡るなげきは春のさがなれば大方にこそあはれとも見れ

女のもとにつかはしける　　藤原師尹朝臣

青柳のいとつれなくもなりゆくかいかなる筋に思ひよらまし

衞門の御息所の家うづまさに侍りけるにそこの花面白かなりとて折りにつかはしたりければきこえたりける

（）咲きさかず　咲いたとか咲かぬとかいふことを。

（）いろもひとつを　櫻の花の色も霞と一つに見える。

（）かぜにまかせじ　風のまゝにさせない。

（）大方にこそ　おしなべては。ひととほりに。

（）うづまさ　太秦。京都の西郊。

（）面白かなり　面白い。

やまざとに散りなましかば櫻花匂ふさかりも知られざらまし

御かへし

にほひこき花の香もてぞしられける植ゑてみるらむ人の心は

小式につかはしける　藤原朝忠朝臣

ときしもあれ花の盛りにつらければ思はぬ山に入りやしなまし

かへし

わがためにおもはぬ山のおとにのみ花さかりゆく春を恨みむ

題しらず　宮道高風

春の池の玉藻にあそぶにほどりの足のいとなき戀もするかな

寛平の御時花の色霞にこめて見せずといふ心をよみて奉れとおほせられければ　藤原興風

やまかぜの花の香かどふふもとには春の霞ぞほだしなりける

題しらず　讀人しらず

春雨のよにふりにたる心にもなほあたらしく花をこそ思へ

京極の御息所におくり侍りける

春霞たちてくもゐになりゆくは鴈のこゝろのかはるなるべし

○散りなましかば　散るだらうならば。

○ときしもあれ　時節もあらうに

○いとなき　いとまなき。ひまのない。上三句は此の語を云ふための序。

○花の香かどふ　花の香をかどはかす。

○よにふりにたる心　春雨の降ることゝ世に古ることをかけたもの。○あたらしく　惜しく。

題しらず

寐られぬをしひてわがぬる春の夜の夢を現になすよしもがな

忍びたりける男の許に春行幸あるべしと聞きて裝束一くだりてうじて遣はすとて櫻色の下襲に添へて侍りける

我がやどの櫻の色はうすくとも花のさかりはきてもをらなむ

忘れ侍りにける人の家に花をこふとて　兼覽王

年をへて花の便りにこととはばいとゞあだなる名をや立てなむ

呼子鳥を聞きて鄰の家におくり侍りける　春道列樹

我が宿のはなにな鳴きそ呼子鳥よぶかひありて君もこなくに

壬生忠岑が左近のつがひのをさにて文おこせて侍りけるついでに身を恨みて侍りける返事に　紀貫之

ふりぬとて痛くなわびそ春雨のたゞにやむべきものならなくに

後撰和歌集　卷第三

春歌下

贈太政大臣あひわかれて後あるところにてその聲を聞きてつかはしける　藤原顯忠朝臣母

鶯の鳴くなるこゑは昔にてわが身ひとつのあらずもあるかな

櫻の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て中務に遣はしける　貫之

久しかれあだにちるなと櫻花かめにさせれど移ろひにけり

かへし

千代ふべき瓶にさせれど櫻花とまらぬことは常にやはあらぬ

題しらず　讀人しらず

散りぬべき花の限りはおしなべていづれともなくをしき春かな

朝忠朝臣の家の鄰に侍りけるに櫻のいたう散りければいひ遣はしける　伊勢

垣越（かきごし）にちりくる花を見るよりは根ごめに風の吹きもこさなむ

○かめにさせれど　瓶に插すの意を上聲の龜に通はせたもの。

○常にやはあらぬ　常である。とまらぬの常である。

○散りぬべき云々　散るだらう花はすべて。

○根ごめに　根ごともに。根ながら。

女につかはしける　　讀人しらず

春の日のながきおもひはわすれじを人の心にあきや立つらむ

題しらず　　貫之

よそにても花見る每に音をぞなくわが身に疎き春のつらさに

風をだにまちてぞ花の散りなまし心づからにうつろふがうさ

荒れたる所に住み侍りける女つれ〴〵におもほえ侍りければ庭にある菫の花をつみていひつかはしける　　讀人しらず

我が宿にすみれの花の多かればきやどる人やあると待つかな

題しらず

やまたかみ霞をわけてちる花を雪とやよその人はみるらむ

吹く風のさそふものとはしりながら散りぬる花のしひて戀しき

清原深養父

うちはへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらむ

常にせうそこ遣はしける女ともだちの許より櫻の花のいと面白かりける枝を折りてこれそこの花に見くらべよとありければ　　こわかぎみ

○心づからに　自分の心から。

○うちはへて　永々と。○なにいそぐらむ　何故散るのを急ぐのであらうか。○そこの花　そなたの花。そちらの花。

我が宿のなげきは春もしらなくに何にか花をくらべてもみむ

父のみこのこゝろざせるやうにもあらで常に物思ひける人にてなむありける

春の池のほとりにて　讀人しらず

春の日のかげそふ池のかゞみには柳のまゆぞまづはみえける

春の暮にかれこれ花惜しみける所にて

かくながら散らで世をやは盡してむ花の常磐もありとみるべく

延喜の御時殿上のをのこどもの中に召しあげられておの〳〵かざしさしけるついでに　凡河内躬恒

かざせども老も隱れぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなる

題しらず　讀人しらず

一とせに重なる春のあらばこそふたたび花をみむとたのまめ

花のもとにてかれこれ程もなく散ることなど申しけるついでに　貫之

春くれば咲くてふ事を濡衣にきするばかりの花にぞありける

春花見に出でたりけるを見つけて文を遣はしたりける其の返事もなかりければあくるあした昨日の返しとこひにまうできたりければいひ遣はしたり

○かくながら　このまゝで。

○重なる春の云々　一年に二度春があつたなら。

○濡衣に云々　咲いてすぐに散る花であるから咲かぬのもおなじ事で、それから云へば咲くといつても事實無根の事即ち濡衣のやうなものだといふ意。

ける　讀人しらず

春霞立ちながら見し花ゆゑにふみとめてけるあとのくやしさ

男のもとよりたのめおこせて侍りければ

春日さす藤のうらばのうらとけて君しおもはば我もたのまむ

題しらず　伊勢

鶯に身をあひかへば散るまでもわがものにして花は見てまし

元良のみこ兼茂朝臣の女（むすめ）にすみ侍りけるを法皇のめしてかの院に侍ひければえあふ事も侍らざりければあくる年の春櫻の枝にさして彼の曹司にさしおかせける　元良のみこ

花のいろは昔ながらに見しひとの心のみこそうつろひにけれ

月の面白かりける夜花を見て　源さねあきら

あたら夜の月と花とをおなじくは心しれらむ人に見せばや

あがたの井戸といふ家より藤原治方につかはしける　橘公平女

みやこびと來てもをらなむ蛙なくあがたのゐどの山吹のはな

助信が母のみまかりて後も時々かの家に敦忠朝臣のまかり通ひけるに櫻の花の散りけるをりにまかりて木のもとに侍りければ家の人のいひいだ

○うらば　末葉。次の句の序。
○うらとけて　心とけて。內心へだてなく。

○昔ながらに　昔のまゝであるが

○あたら夜　惜しい夜。

しける　讀人しらず

いまよりは風にまかせむ櫻花ちる木のもとにきみとまりけり

かへし　敦忠朝臣

風にしもなにかまかせむ櫻花にほひあかぬに散るはうかりき

櫻川といふ所ありときゝて　貫之

つねよりも春べになれば櫻川なみの花こそまなくよすらめ

前栽に山吹あるところにて　兼輔朝臣

わがきたるひとへ衣は山吹の八重のいろにもおとらざりけり

題しらず　在原元方

一年にふたたびさかぬ花なればむべ散ることを人はいひけり

寛平の御時櫻の花の宴ありけるに雨のふり侍りければ　藤原敏行

春雨の花の枝よりながれこば猶こそぬれめ香もやうつると

和泉の國にまかりけるに海のつらにて　讀人しらず

春ふかき色にもあるかな住の江のそこもみどりに見ゆる濱松

女ども花見むとて野邊に出でて　典侍因香朝臣

春くれば花見むと思ふこゝろこそ野邊の霞とともにたちけれ

○いまよりは云々　今までは花の散るのを惜しんだが今からは風のまゝにさせよう。

○散ることを云々　散るのを人が惜しむ。

○なほこそぬれめ　更に一段と濡れよう。

○海のつら　海の面。

○たちけれ　霞が立つと、花を見ようと思ふ心が起ると兩方にかけたもの。

あひしれりける人の久しうとはざりければ花盛りにいひつかはしける　　讀人しらず

我をこそとふにうからめ春霞はなにつけても立ちよらぬかな

かへし　　源清蔭朝臣

たちよらぬ春のかすみをたのまれよ花のあたりと見ればなるらむ

山櫻を折りておくり侍るとて　　伊勢

君みよとたづねて折れる山櫻ふりにし色とおもはざらなむ

宮づかへし侍りける女のいそのかみといふ所に住みて京の友だちのもとに遣はしける　　讀人しらず

神さびてふりにし里に住む人はみやこにゝほふ花をだに見ず

法師にならむの心ありける人大和にまかりて程久しく侍りてのちあひしりて侍りける人のもとより月ごろはいかにぞ花は咲きたりやといひて侍りければ

みよしのの吉野の山のさくらばな白雲とのみ見えまがひつゝ

亭子院(ていじゐん)の歌合の歌

山ざくら咲きぬるときはつねよりも峯のしら雲たちまさりけり

○とふにうからめ　訪ねるのが厭だらうが。

○神さびてふりにし里　石の上をいふ。

○たちまさりけり　白雲が立つこと立ちまさつて一層美しいことを通はせたもの。

山櫻を見て　　貫之

しらくもと見えつるものを櫻花けなば散るとや色ことになる

題しらず　　讀人しらず

我が宿のかげともたのむ藤の花たちよりくとも波に折らるな

花ざかりまだも過ぎぬに吉野川かげにうつろふ岸のやまぶき

人の心たのみがたくなりにければ山吹のちりさしたるをこれ見よとてつかはしける

しのびかねなきて蛙のをしむをも知らずうつろふ山吹の花

やよひばかりの花の盛りに道まかりけるに　　僧正遍昭

折りつればたぶさにけがるたてながら三世(みよ)の佛に花たてまつる

題しらず　　讀人しらず

みなそこの色さへふかき松が枝に千年をかねてさけるふぢ波

三月の下の十日許りに三條右大臣兼輔朝臣の家に罷り渡りて侍りけるに藤の花咲ける遣水の邊にてかれこれ大みきたうべけるついでに　　三條右大臣

限りなき名におふ藤の花なればそこひもしらぬ色のふかさか　　兼輔朝臣

○色ことに　色が異なつて見える

○波に折らるな　波は藤なみをいふ。この波に等閑の意をよせたもの。

○たぶさ　拳。こぶし。

○名におふ藤　藤と淵とを通はせたもの。

色ふかくにほひしことは藤波のたちもかへらで君とまれとか

貫之

棹させど深さもしらぬふちなれば色をば人もしらじとぞ思ふ

ことふえなどしてあそび物語などし侍りける程に夜更けにければまかりとまりて又のあしたに

三條右大臣

きのふ見し花の顔とてけさ見ればねてこそさらに色まさりけれ

兼輔朝臣

一夜のみねてしかへらば藤の花こゝろとけたる色みせむやは

貫之

あさぼらけしたゆく水はあさけれど深くぞ花の色はみえける

題しらず　　讀人しらず

うぐひすのいとによるてふ玉柳ふきなみだりそ春のやまかぜ

櫻の花のちるを見て　　躬恒

いつのまに散りはてぬらむ櫻花おもかげにのみ色をみせつゝ

敦實のみこの花見侍りける所にて　　源仲宣朝臣

散ることのうきも忘れてあはれてふことを櫻にやどしつるかな

○たちかへらで　藤波の立ち返ると、立ち歸らないで留れとにかけたもの。

○ねてこそさらに　花を人に見たてて云つた詞。

○深くぞ花の色は云々　あさけれど、對して云つたもの。花の色は深く見えるといふ意。

○玉柳　玉は美稱。

○ふきなみだりそ　吹き亂すな。

○をしけくもなし　惜しくもない

○つかさめし　京に在る官人の除目。

○申文　訴へ申す文書。訴狀。

○年だにも　常の年は兎も角として今年だけは。

○春に必ず云々　自分の身に良い事のあるのを春と云つたのである

○常よりも云々　閏月があるから云つたもの。

櫻のちるを見て　　讀人しらず

櫻いろにきたる衣のふかければ過ぐる月日もをしけくもなし

やよひにうるふ月ある年つかさめしのころ申文に添へて大臣家につかはしける　　貫之

あまりさへ有りて行くべき年だにも春に必ずあふよしもがな

かへし　　左大臣

常よりものどけかるべき春なれば光にひとの逢はざらめやは

常にまうでき通ひける所にさはる事侍りて久しくまできあはずして年かへりにけりあくる春彌生のつごもりに遣はしける　　藤原雅正

君こずて年は暮れにき立ちかへり春さへ今日になりにけるかな

かへし　　貫之

共にこそ花をもみめとまつ人のこぬものゆゑに惜しき春かな

君にだにとはれでふれば藤の花たそがれ時もしらずぞありける

やへむぐら心のうちに深ければ花見にゆかむいでたちもせず

題しらず　　讀人しらず

をしめども春のかぎりのけふの又夕暮にさへなりにけるかな

躬恒

ゆく先をゝしみし春のあすよりは來にし方にもなりぬべきかな

やよひのつごもり　　貫之

ゆく先になりもやするとたのみしを春の限りはけふにぞありける

讀人しらず

花しあらば何かは春の惜しからむ暮るともけふは歎かざらまし

躬恒

暮れて又あすとだになき春の日を花の陰にて今日はくらさむ

三月のつごもりの日久しうまうでこぬよしいひてはべる文の奥にかきつけ侍りける　　貫之

またもこむ時ぞと思へど頼まれぬ我が身にしあれば惜しき花かな

貫之かくて同じ年になむ身まかりにける

○暮れて又　暮れてしまへば。

○またもこむ時ぞ云々　春は去つても又來年になれば來る、今年だけではないとは思ふが。

後撰和歌集　巻第四

夏歌

題しらず　　讀人しらず

今日よりは夏の衣になりぬれど著る人さへはかはらざりけり

うの花の咲ける垣根のつききよみいねず聞けとや鳴く郭公

卯月ばかり友達のすみ侍りける所近く侍りて必ず消息(せうそこ)遣はしてむと侍りけるに音なく侍りければ

郭公きゐる垣根はちかながら待ちどほにのみ聲のきこえぬ

かへし

郭公こゑまつほどは遠からでしのびに鳴くを聞かぬなるらむ

物いひかはし侍りける人のつれなく侍りければ其の家の垣根の卯花を折りていひ入れて侍りける

恨めしき君が垣根のうの花はうしと見つゝも猶たのむかな

かへし

○ちかながら　近くながら。

○こゑまつほど　ほどは間。

憂きものと思ひしりなばうの花のさける垣根もたづねざらまし

　卯花の垣根ある家にて

時わかずふれる雪かと見るまでに垣根もたわにさけるうの花

　友達のとぶらひまでこぬ事を恨みつかはすとて

白妙ににほふ垣根のうの花のうくも來てとふ人のなきかな

時わかず月か雪かと見るまでにかきねのまゝに咲けるうのはな

なきわびぬいづちかゆかむ郭公なほうの花のかげははなれじ

　卯月ばかりの月面白かりける夜人に遣はしける

あひ見しもまだ見ぬこひも郭公月に鳴く夜ぞよに似ざりける

　女のもとに遣はしける

ありとのみ音羽の山の郭公ききにきこえて逢はずもあるかな

　題しらず　　伊勢

木(こ)がくれてさ月まつとも郭公はねならはしに枝うつりせよ

　藤原のかつみの命婦(みやうぶ)にすみ侍りける男人の手にうつり侍りにける又の年

　杜若(かきつばた)につけてかつみに遣はしける　　良岑義方朝臣

いひそめし昔の宿のかきつばた色ばかりこそかたみなりけれ

○時わかずふれる雪　いつといふ時もなしに常に降つてゐる雪。

○垣根もたわに　垣根と云ふは枝のさまを云つたもの。枝もたわむばかりに。

○までこぬ　まうでこぬ。來ない

○うくも來てとふ　上三句は此の句を云ふための序。

○ききにきこえて　耳には聞えて

賀茂の祭の物見侍りける女の車にいひいれて侍りける　　讀人しらず

行きかへるやそ氏人の玉かづらかけてぞたのむあふひてふ名を

かへし

木綿襷(ゆふだすき)かけてもいふなあだびとのあふひてふ名は禊(みそぎ)にぞせし

題しらず

このごろはさみだれ近みほとゝぎすおもひみだれてなかぬ日ぞなき

待つ人はたれならなくに郭公おもひのほかに鳴かばうからむ

にほひつゝ散りにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしげれば

朱雀院の春宮(とうぐう)におはしましける時帶刀(たちはき)等五月ばかり御書所にまかりて酒などたうべてこれかれ歌よみけるに　　大春日師範

さみだれに春のみやびとくるときは郭公をやうぐひすにせむ

夏の夜深養父が琴ひくを聞きて　　藤原兼輔朝臣

みじか夜の更けゆくまゝに高砂のみねの松風ふくかとぞきく

同じ心を　　貫之

あしびきの山下水は行き通ひことのねにさへながるべらなり

題しらず　　藤原高經朝臣

○あふひ　葵に逢ふ日をかけたもの。

○禊にぞせし　禊で罪穢を去り水に流してしまつた。

○帶刀　東宮武官。

○春のみやびと　春の宮人。東宮に奉仕のもの。これを春に通はせたのである。

○山下水　琴に臨水流泉の曲といふがある。これを山下水と云つたもの。

○ながるべらなり　流ると泣かるとをかけたもの。

○あふ名のみして　逢ふといふのは名ばかりで。
○敷たへの塵　敷たへは夜寢牀に敷くもの。牀の枕詞。即ち牀の塵

○又のあした　翌朝。

○をりはへて　時長くつゞいて。

夏の夜はあふ名のみして敷たへの塵はらふまに明けぞしにける　壬生忠岑

夢よりもはかなきものはなつの夜の曉がたのわかれなりけり

あひしりて侍りける中のかれもこれも志はありながら包む事ありてえあはざりければ　讀人しらず

外ながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

夏の夜しばし物語して歸りにける人の許に又のあしたつかはしける　伊勢

ふた聲ときくとはなしに郭公夜ふかくめをもさましつるかな

人のもとに遣はしける　藤原安國

逢ふと見し夢に習ひて夏の日の暮れがたきをも歎きつるかな

思ふ事侍りける頃郭公を聞きて　讀人しらず

うとまるゝ心しなくばほとゝぎす飽かぬ別れにけさは鳴かまし

をりはへて音をのみぞなく郭公しげきなげきの枝ごとにゐて

四五月ばかり遠き國へまかり下らむとするころ郭公を聞きて

ほとゝぎす聞けばたびとや鳴きわたるわれは別れのをしき都を

題しらず

ひとり居てもの思ふわれを郭公こゝにしも鳴く心あるらし

玉くしげ明けつるほどの郭公たゞふたこゑも鳴きてこしかな

五月ばかりに物いふ女に遣はしける

數ならぬわがみ山邊のほとゝぎす木の葉がくれの聲は聞ゆや

題しらず

とこ夏になきても經なむ郭公しげきみやまになにかへるらむ

ふすからにまづぞ侘しき郭公なきもはてぬに明くる夜なれば

三條右大臣少將に侍りける時しのびに通ふ所侍りけるをうへのをのこども五六人ばかり五月の長雨少しやみて月朧(おぼろ)なりけるに酒たうべむとておし入りて侍りけるを少將はかれがたにて侍らざりければ立ちやすらひてあるじいだせなど戯れ侍りければ　　あるじの女

五月雨にながめくらせる月なればさやかに見えず雲隠れつゝ

女子もて侍りける人に思ふ心侍りて遣はしける　　讀人しらず

ふた葉よりわがしめゆひし撫子の花のさかりを人にならすな

○玉くしげ　枕詞。明けにかゝる又この語によつて次にふたこゑと云つたのである。

○わがみ山邊の云々　わが身は山べの郭公のやうなものである。

○とこ夏に云々　一夏中をなき通してくれゝばよいに。

○ながめくらせる月　あるじの女が自分を月に譬へたのである。

○しめゆひし　標結ひし。占有する意。

○うちはへて　うち續いて。長々と。

○香をとめば　香を尋ねるならば。
○しるべ　みちびき。これに知つた人の意をこめたもの。

○おぼめかれつゝ　おぼろげにそれと思はれる。

○ながめ　長雨と物思ひとをかけたもの。

○あふご　逢ふ時。逢ふ機會。

題しらず

足引の山ほとゝぎすうちはへて誰かまさると音をのみぞ鳴く

五月なが雨の頃久しくたえ侍りにける女の許に罷りたりければ　女

つれ／＼とながむる空の郭公とふにつけてぞ音はなかれける

題しらず

いろかへぬ花たちばなに郭公ちよをならせる聲きこゆなり

旅寐してつま戀すらしほとゝぎす神なび山にさ夜更けてなく

夏の夜に戀しき人の香をとめば花たちばなぞしるべなりける

女の物見にまかり出でたりけるにこと車傍に來りけるに物などいひかはして後に遣はしける　伊勢

郭公はつかなる音を聞き初めてあらぬもそれとおぼめかれつゝ

五月ふたつ侍りけるにおもふこと侍りて　讀人しらず

五月雨のつゞける年のながめには物おもひあへる我ぞわびしき

女にいと忍びて物いひてかへりて

ほとゝぎす一こゑにあくる夏の夜の曉がたやあふごなるらむ

題しらず

うちはへて音をなきくらすうつ蟬のむなしき戀も我はするかな

つねもなき夏の草葉におくつゆを命とたのむせみのはかなさ

八重むぐらしげき宿には夏むしのこゑよりほかにとふ人もなし

空蟬の聲きくからにものぞ思ふわれも空しき世にしすまへば

人のもとにつかはしける　　藤原師忠朝臣

いかにせむ小倉のやまの郭公おぼつかなしと音をのみぞなく

題しらず　　讀人しらず

ほとゝぎす曉がたのひとこゑはうきよのなかをすぐすなりけり

人しれずわがしめし野の撫子は花さきぬべきときぞきにける

わがやどの垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつゝみむ

常夏の花をだに見ばことなしにすぐす月日もみじかかりなむ

とこなつに思ひそめては人しれぬ心のほどは色に見えなむ

かへし

色といへば濃きもうすきもたのまれず大和撫子ちる世なしやは

師尹朝臣のまだわらはにて侍りける時常夏の花を折りて持ちて侍りければこの花につけて內侍のかみの方におくり侍りける　　太政大臣

○つねもなき　いつまでも置いてゐるといふわけのものでもない。

○花に咲かなむ　花となつて咲いてほしい。

○とこなつに思ひそめては　ひとゝ時も忘れられぬやうに思ひそめたならば。

撫子はいづれともなく匂へどもおくれて咲くは哀れなりけり

題しらず　　讀人しらず

なでしこの花ちり方になりにけり我がまつ秋ぞ近くなるらし

よひながら晝にもあらなむ夏なれば待ち暮すまの程なかるべく

夏の夜の月はほどなく明けぬれどあしたのまをぞかこちよせつる

かさゝぎの峯とびこえてなきゆけば夏の夜わたる月ぞかくるゝ

秋ちかみ夏はてゆけばほとゝぎす鳴く聲かたきこゝちこそすれ

桂のみこの螢を捕へてといひはべりければ童のかざみの袖につゝみて

つゝめども隱れぬものは夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

題しらず

天の川水まさるらしなつの夜はながるゝ月のよどむまもなし

月頃煩ふ事ありて罷りありきもせでまでこぬ由いひて文の奥に　　貫之

花もちり郭公さへいぬるまできみにも行かずなりにけるかな

かへし　　藤原雅正

花鳥の色をも音をもいたづらにもの憂かる身はすぐすのみなり

題しらず　　讀人しらず

○いづれともなく　どれもこれも

○かざみ　汗衫。宮女や子供が初夏の頃上著にした服。

○ながるゝ月　空を照りゆく月。上句の縁によつた詞。
○よどむ　滯ること。
○までこぬ　まうでこぬ。行かぬ

〇我こそまねばむ　我からまねよう

〇なつばらへよる　上に照る月とあるから、この夏祓は六月三十日の大祓を云つたのではない。

夏蟲の身をたきすてて魂(たま)しあらば我とまねばむ人めもる身ぞ

夏の夜月おもしろく侍りけるに

こよひかくながむる袖のつゆけきは月の霜をやあきとみつらむ

みな月祓しに河原にまかり出でて月のあかきを見て

賀茂川の水底すみて照る月をゆきて見むとやなつばらへする

みな月二つありける年

たなばたは天の川原を七かへり後のみそかをみそぎにはせよ

後撰和歌集　巻第五

秋歌上

是貞の親王の家の歌合に　　讀人しらず

俄にも風のすゞしくなりぬるか秋たつ日とはむべもいひけり

題しらず

うちつけにものぞ悲しき木の葉ちる秋の初めをけふぞと思へば

物思ひける頃秋立つ日人につかはしける

たのめこし君はつれなし秋風はけふよりふきぬ我が身悲しも

思ふこと侍りける頃

いとゞしく物おもふ宿の荻の葉にあきとつげつる風のわびしさ

題しらず　　大江千里

秋かぜのうちふきそむる夕ぐれはそらに心ぞわびしかりける

露かけし袂ほすまもなきものをなどあき風のまだき吹くらむ

○うちつけに　卒爾に。俄に。

○秋風は　飽き風にかけたるの。

○いとゞしく　いよ〳〵甚しく。

○そらに　いたづらに。

女のもとよりふみ月ばかりにいひおこせて侍りける　　讀人しらず

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人のこゝろもうたがはれけり

かへし　　在原業平朝臣

あき萩をいろどるかぜはふきぬとも心はかれじ草葉ならねば

源昇朝臣時々まかり通ひける時に文月の四五日ばかりに七日の料に装束
てうじてといひつかはして侍りければ　　閑院

逢ふ事は棚機女（たなばたつめ）にひとしくてたちぬふ業はあえずぞありける

題しらず　　讀人しらず

天の川わたらむそらもおもほえずたえぬ別れとおもふものから

七月七日に夕方までこむといひて侍りけるに雨ふり侍りければまでこで　　源中正

雨ふりて水まさりけり天の川こよひはよそに戀ひむとやみし

かへし　　讀人しらず

水まさり淺き瀬しらずなりぬとも天のとわたる舟はなしやは

七日の日に女の許に遣はしける　　藤原兼三

たなばたも逢ふ夜ありけり天の川このわたりには渡る瀬もなし

○心はかれじ　心は枯れじと心は離れじとを通はせたもの。

○てうじて　調じてよの意。造つて下さい。

○あえず　ふさはしくない。似合はない。

○たえぬ別れと云々　これが最後の別れではないとは思ふものの。

○までこで　きうで來で。來ないで。

○よそに戀ひむ　よそながら戀する。

○このわたりには云々　逢ひにゆくことが出來ぬといふ意。

かれにける男の七日の夜まできたりければ女のよみて侍りける　　讀人しらず

ひこ星の稀にあふ夜の牀なつはうちはらへども露けかりけり

七日人の許より返事にこよひあはむといひおこせて侍りければ

こひ〳〵て逢はむと思ふ夕暮はたなばたつめも斯くやあるらし

かへし

類(たぐひ)なきものとはわれぞなりぬべきたなばたつめは人めやはもる

題しらず

天の川流れて戀ひばうく〳〵もぞある哀れとおもふせに早くみむ

玉かづらたえぬものからあら玉の年のわたりはたゞ一夜のみ

秋の夜の心もしるく棚機のあへるこよひは明けずもあらなむ

ちぎりけむ言の葉今はかへしてむ年のわたりによりぬるものを

七日の日に越後の藏人につかはしける　　藤原敦忠朝臣

逢ふことの今宵すぎなば棚機におとりやしなむ戀はまさりて

七日の日　　讀人しらず

棚機のあまの戸わたる今宵さへをちかた人のつれなかるらむ

七夕をよめる

○露けかりけり　まれにしか逢へないので歎く涙のために。

○哀れとおもふせ　あはれと思ふ時。

○秋の夜の心もしるく　秋の夜に心があるといふこともしるく。

○たゞ渡りなむ　そのまゝ渡らう

○たてぬき　機絲の經と緯。棚機の縁によつて云つたもの。あれこれさ、いろ／＼に。

○ふねもかよはぬ云々　船も通はないやうな高い波が立つてほしい

あまの川とほきわたりにあらねども君がふなでは年にこそまて

天の川岩こすなみの立ちゐつゝ秋のなぬかの今日をしぞまつ

紀友則

今日よりや天の川原はあせななむ底ひともなくたゞ渡りなむ

讀人しらず

天の川ながれてこふるたなばたの涙なるらしあきのしらつゆ

天の川せゞのしら波たかけれどたゞわたり來ぬまつにくるしみ

秋くれば川霧わたる天の川かはかみ見つゝこふる日のおほき

天の川こひしきせにぞ渡りぬるたぎつ涙に袖はぬれつゝ

たなばたの年とはいはじ天の川雲立ちわたりいざみだれなむ

秋の夜のながきわかれを棚機はたてぬきにこそ思ふべらなれ

七月八日のあしたに

兼輔朝臣

たなばたの歸るあしたの天の川ふねもかよはぬ波もたたなむ

おなじ心を

貫之

朝戸あけてながめやすらむ棚機はあかぬ別れのそらをこひつゝ

思ふこと侍りて

讀人しらず

秋風の吹けばさすがに侘しきは世のことわりと思ふものから

題しらず

まつむしの初聲さそふ秋かぜは音羽山より吹きそめにけり

業平朝臣

行くほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くとかりにつげこせ

讀人しらず

秋風の草葉そよぎて吹くなべにほのかにしつるひぐらしの聲

貫之

ひぐらしの聲きく山の近けれや鳴きつるなべに夕日さすらむ

讀人しらず

日ぐらしの聲きくからにまつ蟲の名にのみ秋をおもふころかな

心ありて鳴きもしつるか日ぐらしの何れも物のあきてうければ

秋風の吹きくる宵はきり〴〵す草の根ごとに鳴きみだれけり

わがごとくものや悲しききり〴〵す草のやどりに聲たえずなく

來むといひしほどや過ぎぬる秋の野に誰まつ蟲ぞ聲の悲しき

秋の野に來宿る人もおもほえずたれをまつ蟲こゝらなくらむ

○いぬべくは　ゆくならば。

○かりにつげこせ　雁にことづけて云ひよこしてくれよ。

○吹くなべに　吹くにつれて。

○近けれや　近いからであらうか

○聲きくからに　聲をきくによつて。

○まつ蟲の名にのみ云々　しきりにまたれる意。

○誰まつ蟲　誰を待つ松蟲。

○來宿る人もおもほえず　來て宿る人があるとも思はれない。

秋風のやゝ吹きしけば野をさむみわびしきこゑに松蟲ぞ鳴く　藤原元善朝臣

秋くれば野もせに蟲のおり亂る聲のあやをば誰かきるらむ　讀人しらず

秋さむみ鳴くまつむしの涙こそ草葉いろどる露と置くらめ

是貞のみこの家の歌合に

秋風の吹きしく松は山ながらなみ立ちかへるおとぞきこゆる　壬生忠岑

秋大輔がうづまさの傍なる家に侍りけるに荻の葉に文をさしてつかはしける

まつのねに風のしらべをまかせては龍田姫こそ秋はひくらし　左大臣

題しらず

山里のものさびしきは荻の葉のなびくごとにぞ思ひやらるゝ　小野道風朝臣

二人の男に物いひける女のひとりにつきにければ今ひとりがいひつかはしける

穗には出でぬいかにかせまし花薄身を秋風にすてや果ててむ　讀人しらず

明け暮し守るたのみをからせつゝ袂そほづの身とぞなりぬる

○秋風のやゝ吹きしけば　秋風がたん〴〵と吹きすさんでくるので

○野もせに　野の面も狹い程に。

○山ながら　山ではあるが。

○守るたのみ　守る頼みに守る田の實を云ひかけて次に枯らせ刈らせにかけて續けたのである。

○袂そほづの身　袂を濡らす身に案山子をかけたもの。

○ひつぢ穂　刈り取つた後に再び自生する稲。自分の身を卑下したもの。

○ぬく　貫く。つなぐ。

かへし

心もておふる山田のひつぢ穂は君まもらねどかる人もなし

題しらず　　　藤原守文

草の絲にぬく白玉とみえつるは秋のむすべる露にぞありける

後撰和歌集　巻第六

秋歌中

延喜の御時に秋の歌めしありければ奉りける　　紀貫之

秋霧のたちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見えわたりける

花見にと出でにしものを秋の野の霧にまよひて今日はくらしつ

寛平の御時后の宮の歌合に　　讀人しらず

うらちかくたく秋霧のもしほやく煙とのみぞ見えわたりける

おなじ御時の女郎花合に　　藤原興風

折るからに我が名はたちぬ女郎花いざおなじくば花々に見む

　　讀人しらず

秋の野のつゆにおかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝやふる

女郎花はなの心のあだなればあきにのみこそあひわたりけれ

母のぶくにて里に侍りけるに先帝の御文給へりける御返事に　　近江更衣

さみだれにぬれにし袖にいとゞしく露おきそふる秋のわびしさ

○つゆにおかるゝ　露におかされる。露に嫁ぐの意である。
○ぬれつゝやふる　露に濡れて世を經るの意。
○あきにのみこそ云々　秋に飽きを通はせて、常に人に飽きたことに逢ふと云つたのである。

御かへし　延喜御製

おほかたも秋は侘しきときなれど露けかるらむ袖をしぞ思ふ

亭子院の御前の花のいと面白く朝露のおけるをめして見せさせたまひて　法皇御製

白露のかはるも何か惜しからむありての後もやゝうきものを

御かへし　伊勢

植ゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらむ

大輔が後涼殿に侍りけるに藤壺より女郎花を折りて遣はしける　右大臣

折りてみる袖さへぬるゝ女郎花つゆけきものと今やしるらむ

かへし　大輔

萬代にかゝらむつゆを女郎花なにおもふとかまだき濡るらむ

又　右大臣

置き明す露のよな／＼經にければまだきぬるとも思はざりけり

かへし　大輔

いまははやうちとけぬべき白露の心おくまで夜をやへにける

相知りて侍りける女のあだ名たちて侍りければ久しく訪(とぶ)らはざりけり八

○置き明す　起き明すにかけたもの。
○まだきぬるとも　濡ると寝るとを通はせたもの。

月ばかりに女の許よりなどかいと無情(つれな)きといひ遣(おこ)せて侍りければ　讀人しらず

しら露のうへはつれなくおきゐつゝ萩の下葉のいろをこそみれ

かへし　伊勢

心なき身は草葉にもあらなくにあきくる風にうたがはるらむ

男のもとに遣はしける　讀人しらず

人はいさことぞともなきながめにも我は露けき秋も知らるゝ

人の許に尾花のいと高きを遣はしたりければ返事に忍草を加へて　中宮宣旨

はなすゝきほに出ることもなき宿は昔しのぶの草をこそ見れ

かへし　伊勢

宿もせに植ゑなめつゝぞわれはみる招く尾花に人やとまると

題しらず　讀人しらず

秋の夜をいたづらにのみおきあかす露はわが身の上にぞありける

おほかたに置く白露もいまよりは心してこそ見るべかりけれ

右大臣

露ならぬ我が身と思へど秋の夜をかくこそ明かせおきゐるながらに

秋のころほひある所に女どもの數多みすの内に侍りけるに男の歌のもと

○うへはつれなく　表面はさりげなくしてゐて。

○あきくる風　秋くる風と飽きくる風とを通はせたもの。

○ことぞともなきながめ　これといふ程のこともない何でもないこと。

○宿もせに　宿も狹いほどに。庭前を云つたもの。

○歌のもと　歌の上の句。これに對して末は下の句をいふ。

をいひ入れて侍りければ末はうちより　讀人しらず

白露のおくにあまたの聲すれば花のいろ〳〵有りとしらなむ

八月中の十日ばかりに雨のそぼ降りける日女郎花ほりに藤原のもろたゞを野邊にいだして遲く歸りければつかはしける　左大臣

暮れはてば月もまつべし女郎花あめやめてとは思はざらなむ

題しらず　讀人しらず

秋の田のかりほの庵の匂ふまで咲ける秋萩みれどあかぬかも

秋の夜をまどろまずのみ明かす身は夢路とだにもたのまざりけり

萩の花を折りて人につかはすとて

時雨ふりふりなば人にみせもあへず散りなばをしみをれる秋萩

秋の歌とて　貫之

往きかへり折りてかざさむ朝な〳〵鹿立ちならす野邊の秋萩

宗于朝臣

我が宿の庭の秋萩ちりぬめりのち見む人やくやしとおもはむ

讀人しらず

白露のおかまくをしき秋萩を折りてはさらに我やかざさむ

○白露のおくに云々　白露が置くと云つて、これを奥に數多の人の聲がするを云ひかけたのである。

○まどろまずのみ　うつら〳〵ともせず。少しも眠らず。

○おかまくをしき　置くのが惜しい。

年の積りにける事をかれこれ申しけるついでに　　貫之

秋萩の色づく秋をいたづらにあまたかぞへて老いぞしにける

題しらず　　天智天皇御製

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我が衣手は露にぬれつゝ

　　讀人しらず

わがそでに露ぞおくなる天の川くものしがらみ波やこすらむ

秋萩の枝もとをゝになりゆくは白露おもくおけばなりけり

わがやどの尾花がうへの白露をけたずて玉にぬくものにもが

延喜の御時歌めしければ　　貫之

さを鹿のたちならす小野の秋萩における白露われもけぬべし

秋の野の草は絲とも見えなくに置くしらつゆを玉とぬくらむ

　　文屋朝康

しら露にかぜのふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

　　忠岑

秋の野におく白露をけさ見れば玉やしけるとおどろかれつゝ

題しらず　　讀人しらず

○とまをあらみ　屋根に葺いた苫の目が荒いので。苫は菅や茅などを編んだもので屋根の覆ひとするもの。

○とをゝ　たわゝ。たわむこと。

○けたずて　消さないで。

○玉にぬくものにもが　玉として絲に貫きたいものだ。

○つらぬきとめぬ玉　貫きとめぬ玉。つなぎとめない玉。白露を云つたもの。

○玉やしけると　玉を敷いたのかと。

○そでくつるまで　袖が朽ちるまで。

○物思ふなべに　物思ひをするので、その涙で。

○かつらのえだ　月にあるといふ桂の枝。

おくからに千ぐさの色になるものを白露とのみ人のいふらむ

白玉の秋の木の葉にやどれると見ゆるは露のはかるなりけり

秋の野に置くしら露のきえざらば玉にぬきてもかけて見てまし

唐衣そでくつるまでおく露は我が身をあきの野とやみるらむ

大空に我が袖ひとつあらなくにかなしく露やわきておくらむ

朝ごとにおく露そでにうけためて世のうきときのなみだにぞかる

秋の歌とてよめる　　貫之

秋の野の草もわけぬを我が袖の物思ふなべにつゆけかるらむ

深養父

いくよへて後かわすれむ散りぬべき野邊の秋萩みがく月夜を

讀人しらず

秋の夜の月のかげこそ木のまよりおちば衣と身にうつりけれ

袖にうつる月のひかりは秋ごとに今宵かはらぬ影とみえつゝ

秋の夜のつきにかさなる雲はれてひかりさやかに見るよしもがな

小野美材

秋の池の月のうへこぐ船なればかつらのえだに棹やさはらむ

秋の海にうつれる月をたちかへり波はあらへど色もかはらず
深養父

是貞のみこの家の歌合に
秋の夜の月のひかりは清けれど人のこゝろのくまは照らさず
讀人しらず

秋の月つねにかく照るものならば闇にふる身はまじらざらまし
藤原雅正

八月十五夜
いつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひの珍らしきかな

月かげはおなじひかりの秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり
讀人しらず

月を見て
空とほみ秋やよくらむひさかたの月のかつらの色もかはらぬ
紀淑望朝臣

ころもでは寒くもあらねど月かげをたまらぬ秋の雪とこそ見れ
貫之

天の川しがらみかけてとゞめなむあかず流るゝ月やよどむと
讀人しらず

あきかぜに波やたつらむ天の川わたる瀬もなく月のながるゝ

○わきて見ゆる　秋の夜の月だけが寂しく見えるといふ。
○心なりけり　心からである。寂しい心で見るからである。
○秋やよくらむ　秋がよけて行かぬのであらうか。
○たまらぬ　降つてもすぐに消えてしまふ。
○あかず流るゝ月　見飽きもせぬに西に向つてうつつてゆく月。天の川の縁から流るゝを云つたもの

秋くれば思ふ心ぞみだれつゝまづもみぢ葉とちりまさりける

深養父

消えかへりものおもふ秋の衣こそなみだの川の紅葉なりけれ

讀人しらず

吹く風にふかきたのみのむなしくば秋のこゝろをあさしと思はむ

是貞のみこの家の歌合の歌

秋の夜は人を靜めてつれ〴〵とかきなす琴の音にぞなきぬる

露をよめる

藤原清正

ぬきとむる秋しなければしら露のちぐさにおける玉もかひなし

八月十五夜

秋風にいとゞ更けゆく月影を立ちなかくしそあまのかはぎり

延喜の御時秋の歌めしありければ奉りける

貫之

をみなへし匂へる秋の武藏野は常よりもなほむつましきかな

人につかはしける

兼覽王

秋霧のはるゝはうれし女郎花たちよる人やあらむとおもへば

題しらず

讀人しらず

をみなへし草むらごとにむれたつは誰まつむしの聲にまよふぞ

女郎花ひる見てましを秋の夜の月のひかりはくもがくれつゝ

貫之

をみなへし花のさかりに秋風のふくゆふぐれを誰にかたらむ

しろたへの衣かたしき女郎花さける野邊にぞこよひねにける

躬恒

名にしおへばしひてたのまむ女郎花花の心のあきはうくとも

讀人しらず

たなばたに似たるものから女郎花秋よりほかにあふ時もなし

秋の野によるもや寐なむ女郎花はなの名をのみ思ひかけつゝ

をみなへし色にもあるかな松蟲をもとに宿して誰を待つらむ

前栽にをみなへし侍りける所にて

女郎花匂ふさかりを見る時ぞわが老いらくはくやしかりける

すまひのかへりあるじの暮つかた女郎花を折りて敦慶(あつよし)の親王(みこ)のかざしに

さすとて　三條右大臣

女郎花はなの名ならぬものならばなにかは君がかざしにもせむ

○ひる見てまし　晝の間に見ようもの。

○名にしおへば　女といふ名を負うてゐるから。

○あきはうくとも　飽かれても。秋は憂くともの意を含めたもの。

○老いらく　老いる。老年。

年ごろ家のむすめにせうそこ通はし侍りけるを女のためにかる〳〵しなどいひてゆるさぬあひだになむ侍りける

法皇伊勢が家のをみなへしをめしければ奉るをききて　枇杷左大臣

女郎花をりけむ枝のふしごとに過ぎにし君をおもひ出やせし

かへし　伊勢

女郎花折りも折らずもいにしへを更にかくべきものならなくに

○折りも折らずも　折つても折らないでも。

○きるひとなみや　著る人がないためか。
○たちながら　立つたまゝ。生えたまゝ。
○あひとしあへば　逢へばといふを強く云つたもの。

後撰和歌集　巻第七

秋歌　下

題しらず　　讀人しらず

ふぢ袴きるひとなみやたちながらしぐれの雨にぬらし初めつる

秋かぜにあひとしあへば花薄いづれともなく穗にぞいでける

寛平の御時后の宮の歌合に　　在原棟梁

花薄そよともすれば秋かぜの吹くかとぞきくひとりぬる夜は

題しらず　　讀人しらず

花薄ほに出でやすき草なればみにならむとはたのまれなくに

秋風にさそはれわたるかりがねは雲居はるかに今日ぞきこゆる

越の方に思ふ人侍りける時に　　貫之

秋の夜に鴈かもなきてわたるなりわが思ふ人のことづてやせし

題しらず

秋風に霧とびわけてくる鴈のちよにかはらぬ聲きこゆなり

物思ふと月日のゆくもしらざりつ鴈こそ鳴きて秋をつげけれ　讀人しらず

大和にまかりけるついでに

かりがねの鳴きつるなべに唐衣たつたのやまは紅葉しにけり

題しらず

秋風にさそはれわたる鴈がねはものおもふ人の宿をよかなむ

誰きけと鳴くかりがねぞ我が宿の尾花がすゑを過ぎがてにして

往き返りこゝもかしこも旅なれやくる秋ごとにかり〳〵となく

秋毎にくれど歸ればたのまぬを聲にたてつゝかりとのみなく

ひたすらに我がおもはなくに己さへかり〳〵とのみ鳴き渡るらむ

人の鴈は來にけると申すを聞きて　躬恒

年ごとに雲路まどはぬかりがねは心づからやあきを知るらむ

大和にまかりける時これかれともにて　讀人しらず

天の川かりぞとわたるさほ山のこずゑはむべも色づきにけり

兼輔の朝臣左近少將に侍りける時武藏の御馬むかへにまかりたつ日俄に
さはる事ありてかはりに同じつかさの少將にてむかへにまかりて逢坂よ

○物思ふと　物思ひのために。
○しらざりつ　知らなかつた。
○宿をよかなむ　宿をよけてわたつてもらひたい。
○過ぎがてにして　過ぎにくさうにして。
○かり〳〵　鴈の鳴聲。假り〳〵と云つて假りの宿の意を含めたもの。
○心づから　心から。自分の心だけで。

○秋霧のたち野の駒　武藏國のたち野の御牧の名を、霧の立つといふにかけたもの。

○いづれをかわきて忍ばむ　どの草もどの草も皆色がかはつてしまふか、その中でどの草をとりわけて忍はうか。

○壁たかさごに　壁高く高砂に。

○まづもみづらむ　先に紅葉するだらうか。
○露ならし　露にあるらし。露だらう。
○もみだすものは　紅葉させるものは。

り隨身を返していひ送り侍りける　　藤原忠房朝臣

秋霧のたち野の駒をひくときはこゝろにのりて君ぞこひしき

題しらず　　在原元方

いそのかみふる野の草も秋はなほ色ことにこそあらたまりけれ

讀人しらず

秋の野のにしきのごとも見ゆるかな色なき露はそめじとおもふに

秋の野にいかなる露の置きつめばちゞの草葉の色かはるらむ

いづれをかわきて忍ばむ秋の野にうつろはむとて色かはる草

紀友則

こゑたてて鳴きぞしぬべき秋霧に友まどはせる鹿にはあらねど

讀人しらず

たれきけと聲たかさごにさを鹿のなが〳〵し夜をひとり鳴くらむ

うちはへてかげとぞたのむ峯の松いろどる秋の風にうつるな

初時雨ふれば山べぞおもほゆるいづれのかたかまづもみづらむ

妹がひもとくとむすぶとたつたやま今ぞもみぢの錦おりける

鴈なきてさむきあしたの露ならし龍田の山をもみだすものは

○秋霧のあたるごと　秋霧のかゝるたび。梓弓、射る、に對しその緣語として當るを云つたもの。

○やまもりもる山　山守のまもるもり山。

○はた物　機を織るに用ゐる道具

見る毎に秋になるかな龍田姫もみぢそむとや山もきるらむ

源宗于朝臣

あづさゆみいるさの山は秋霧のあたるごとにや色まさるらむ

はらからどちいかなる事か侍りけむ　讀人しらず

君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬるものにぞありける

題しらず　元方

おそく疾く色づく山のもみぢ葉はおくれさきだつ露や置くらむ

龍田山をこゆとて　友則

かくばかりもみづる色のこければや錦たつたの山といふらむ

題しらず　讀人しらず

からころも龍田の山のもみぢ葉はものおもふ人の袂なりけり

もる山を越ゆとて　貫之

あしびきの山のやまもりもる山も紅葉せさする秋はきにけり

題しらず

から錦たつたのやまもいまよりは紅葉ながらにときはならなむ

唐衣たつたのやまのもみぢ葉ははた物もなきにしきなりけり

人々もろともに濱づらをまかる道に山の紅葉をこれかれよみ侍りけるに

忠岑

いく木ともえこそ見わかね秋山のもみぢの錦よそにたてれば

題しらず　讀人しらず

秋風のうち吹くからにやまも野もなべて錦におりかへすかな

などさらにあきかととはむ唐錦たつたの山の紅葉するよを

あだなりと我は見なくにもみぢ葉を色の變れる秋しなければ

貫之

たまかづら葛城山のもみぢ葉はおもかげにのみ見えわたるかな

秋霧の立ちしかくせばもみぢ葉は覺束なくも散りぬべらなり

鏡山をこゆとて　素性法師

鏡山やまかきくもりしぐるればもみぢあかくぞ秋は見えける

鄰に住み侍りける時九月八日伊勢が家の菊に綿をきせに遣はしければ又の朝(あした)折りてかへすとて　伊勢

かずしらず君が齡をのばへつゝなだたるやどの露とならなむ

かへし　藤原雅正

○えこそ見わかね　え見わかず。見わけることが出來ぬ。

○のはへつゝ　のべつゝ。

○なほざりに　かりそめに。深く注意することもなく。
○錦きて家にかへる云々　著レ錦歸ニ故郷一といふ朱買臣の故事によつたもの。

露だにもなだたる宿の菊ならば花のあるじやいくよなるらむ

なが月の九日鶴のなくなりにければ　　伊勢

菊の上に置きゐるべくもあらなくに千年の身をも露になすかな

題しらず　　讀人しらず

菊の花なが月ごとに咲きくればひさしきこゝろ秋や知るらむ

名にしおへば長月ごとに君がため垣根の菊はにほへとぞおもふ

ほかの菊を移しうゑて

故郷をわかれて咲ける菊のはなたびながらこそ匂ふべらなれ

男の久しくまでこざりければ

なにきく色そめかへし匂ふらむ花もてはやす君もこなくに

月の夜に紅葉のちるを見て

もみぢ葉の散りくる見ればなが月のありあけの月の桂なるらし

題しらず

いくちはた織ればか秋の山ごとに風にみだるゝ錦なるらむ

なほざりに秋のやまぢを越えくればおらぬ錦をきぬ人ぞなき

もみぢ葉を分けつゝゆけば錦きて家にかへると人や見るらむ

うちむれていざわぎもこが鏡山こえて紅葉の散らむかげみむ　貫之

山風の吹きのまに〳〵もみぢ葉はこのもかのもに散りぬべらなり　讀人しらず

秋の夜に雨ときこえて降りつるは風にみだるゝ紅葉なりけり

立ちよりて見るべき人のあればこそ秋のはやしに錦しくらめ

木のもとに織らぬ錦のつもれるは雲の林の紅葉なりけり

秋かぜに散るもみぢ葉は女郎花やどにおりしく錦なりけり

足引のやまのもみぢ葉散りにけり嵐のさきに見てましものを

もみぢ葉のふりしく秋の山邊こそたちてくやしき錦なりけれ

龍田川いろくれなゐになりにけり山のもみぢぞ今は散るらし

たつたがは秋にしなれば山ちかみながるゝ水ももみぢしにけり　貫之

もみぢばの流るゝ秋は川ごとにしきあらふと人や見るらむ　讀人しらず

たつた川あきは水なくあせななむあかぬ紅葉のながるればをし

○吹きのまに〳〵　吹くまゝに。

○嵐のさきに　嵐の吹かぬ前に。

○もみぢばの流るゝ秋は云々　文選の註に、「蜀有レ江、織レ錦之所、其流紅浪除。」とする心を詠んだのであらう。

○をし　惜しい。

文屋朝康

波わけて見るよしもがなわたつ海の底のみるめも紅葉ちるやと

藤原興風

木の葉ちる浦になみたつ秋なればもみぢに花も咲きまがひけり

讀人しらず

わたつみの神にたむくる山姫のぬさをぞ人は紅葉といひける

貫之

ひぐらしの聲もいとなくきこゆるは秋夕暮になればなりけり

讀人しらず

風の音のかぎりと秋やせめつらむ吹きくるごとに聲のわびしき

もみぢ葉にたまれる鴈の涙には月のかげこそうつるべらなれ

あひ知りて侍りける男の久しうとはず侍りければ長月ばかりにつかはしける

右近

おほかたの秋の空だに侘しきに物思ひそふる君にもあるかな

題しらず

讀人しらず

我がごとくもの思ひけらし白露の夜をいたづらにおき明しつゝ

○いとなく　いとまなく。ひまがなく。せはしく。

○物思ひけらし　物思ひをしたらしい。

あひ知りて侍りける人のち〱まで來ずなりにければ男の親聞きてなほまかりとへと申し敎ふときゝて後まうできたりければ　　平伊望朝臣女

秋ふかみよそにのみきく白露のたが言の葉にかゝるなるらむ

かれにける男の秋とぶらへりけるに　　昔の承香殿のあこぎ

とふことの秋しもまれに聞ゆるはかりにや我を人のたのめし

紅葉と色こきさいでとを女のもとに遣はして　　源とゝのふ

君こふる涙にぬるゝわがそでと秋のもみぢといづれまされり

題しらず　　讀人しらず

照る月の秋しも殊にさやけきは散るもみぢ葉を夜も見よとか

故宮の内侍に兼輔朝臣しのびてかよはし侍りける文をとりてかきつけて内侍に遣はしける

など我が身下葉紅葉となりにけむ同じなげきの枝にこそあれ

秋閑なる夜かれこれ物がたりし侍るあひだに鴈のなきて渡りければ　　源わたすの朝臣

あかからば見るべき物を鴈がねの何處ばかりに鳴きて行くらむ

菊の花折れりとて人のいひ侍りければ　　讀人しらず

○さいで　布の小切。

○いづれまされり　いづれまされりや。どちらがまさつてゐるか。

○何處ばかりに　どの邊に。

いたづらに露におかるゝ花かとて心もしらぬひとや折りけむ

身のなりいでぬ事など歎き侍りける頃紀友則が許よりいかにぞと訪らひにおこせて侍りければ返事に菊の花を折りてつかはしける　藤原忠行

枝も葉も移ろふ秋の花みればはてはかげなくなりぬべらなり

かへし　友則

しづくもて齡のぶてふ花なれば千代の秋にぞかげはしげらむ

延喜の御時秋の歌めしありければ奉りける　貫之

秋の月光さやけみもみぢ葉のおつるかげさへ見えわたるかな

題しらず　讀人しらず

秋ごとにつらをはなれぬ鴈がねは春かへるともかはらざらなむ

をとこの花かづらゆはむとて菊ありける所にこひに遣はしたりければ花につけて遣はしける

みな人に折られにけりときくの花君のためにぞ露はおきける

題しらず

吹く風にまかする船や秋の夜の月のうへよりけふは漕ぐらむ

紅葉のちりつもれるもとにて

○なりいでぬ事　立身出世しないこと。

○かげはしげらむ　陰が繁るだらう。厚い御めぐみを被るだらう。

○光さやけみ　光が明らかであるので。

○つらをはなれぬ　列を離れぬ。

○吹く風にまかする船　この船は木の葉を云つたものであらう。

紅葉はちる木の下にとまりけり過ぎ行く秋やいづちなるらむ

忘れにける男の紅葉を折りて送りて侍りければ

思ひ出でてとふにはあらじあきはつる色の限りを見するなるらむ

長月のつごもりの日もみぢに氷魚をつけておこせて侍りければ　ちかねがむすめ

宇治山の紅葉をみずは長月の過ぎゆくひをも知らずぞあらまし

九月つごもりに　貫之

なが月の有明の月はありながらはかなく秋は過ぎぬべらなり

同じ晦日に　躬恒

いづかたに夜はなりぬらむおぼつかなあけぬ限りは秋ぞと思はむ

（一）あきはつる色　秋が終るといふに飽きてしまふの意を含めたもの

（二）過ぎゆくひをも　過ぎゆく日をもといふに氷魚を含めたもの。宇治山と云つたのは氷魚は宇治の名物だからである。

後撰和歌集　巻第八

冬歌

題しらず　讀人しらず

はつ時雨ふれば山邊ぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらむ

初しぐれ降るほどもなく佐保山の梢あまねくうつろひにけり

神無月ふりみふらずみ定めなきしぐれぞ冬のはじめなりける

冬くればさほの河瀬にゐるたづもひとりねがたき音をぞ鳴くなる

ひとりぬる人のきかくに神無月にはかにもふる初しぐれかな

秋はてて時雨ふりぬるわれなれば散る言の葉をなにか恨みむ

吹く風は色も見えねど冬くればひとりぬる夜の身にぞしみける

秋はてて我が身しぐれにふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

神無月時雨ばかりは降らずしてゆきがてにさへなどかなるらむ

神無月しぐれとともに神なびの森の木の葉はふりにこそふれ

女につかはしける

○山邊ぞおもほゆる　山邊が思はれる山邊が氣になる。

○ふりみふらずみ　降つたり降らなかつたり。

○きかくに　聞くに。

○しぐれにふりぬれば　時雨と降ると、古くなつたのでとを通はせたもの。

○頼む木も枯れはてぬれば　離れはてぬればの意し通はせたもの。

○身にそへて　身に添へて身につけ加へて。

○時雨にそひてふるさと　時雨に添うて降る古里。○こさ　濃さ。

頼む木も枯れはてぬれば神無月しぐれにのみもぬるゝ袖かな

山へいるとて　　増基法師

神無月しぐればかりを身にそへて知らぬ山路に入るぞ悲しき

十月ばかりに大江千古がもとにあはむとてまかりたりけれども侍らぬほどなれば歸りまできてたづね遣はしける　　藤原忠房朝臣

もみぢ葉はをしき錦とみしかども時雨とともに降りてこそこし

かへし　　大江千古

もみぢ葉も時雨もつらし稀にきて歸らむ人を降りやとゞめぬ

題しらず　　讀人しらず

神無月かぎりとや思ふもみぢ葉のやむ時もなく夜さへにふる

ちはやぶる神垣山のさかき葉はしぐれに色もかはらざりけり

すまぬ家にまできてもみぢばにかきていひつかはしける　　枇杷左大臣

人すまずあれたる宿をきてみれば今ぞ木の葉は錦おりける

かへし　　伊勢

涙さへ時雨にそひてふるさとは紅葉のいろもこさまさりけり

題しらず　　讀人しらず

○かきくらし　暗くなつて。

○たはやすく　たやすく。

冬の池の鴨のうは毛におく霜のきえて物思ふ頃にもあるかな

親の外にありて遲くかへりければ遣はしける　　　人の娘のやつなりける

神無月しゞれふるにもくるゝ日を君まつほどは長しとぞ思ふ

題しらず

身をわけて霜やおくらむあだ人の言の葉さへも枯れも行くかな

冬の日むさしに遣はしける

人知れず君につけてし我が袖のけさしも解けず冰るなるべし

題しらず

かきくらし霰ふりしけしらたまをしける庭とも人の見るべく

神無月しぐるゝときぞみよし野の山のみゆきも降りはじめける

けさの嵐さむくもあるかな足引の山かきくもり雪ぞふるらし

黑髪のしろくなり行く身にしあればまづ初雪をあはれとぞ見る

霰ふるみやまの里のわびしきは來てたはやすくとふ人ぞなき

ちはやぶる神無月こそ悲しけれ我が身時雨にふりぬとおもへば

式部卿敦實のみこ忍びてかよふ所はべりけるをのちのちたえだえになり
侍りければ妹の前齋宮のみこの許よりこの女のもとにこの頃はいかにぞ

○ゆきふりぬれば　雪が降つたからといふに古くなつたの意を含めたもの。
○こしぢ　越路と來し路とをかけた詞。

とありければ其の返事に女

白山にゆきふりぬればあとたえて今はこしぢに人もかよはず

雪のあした老を歎きて　貫之

降りそめて友まつ雪はむばたまのわが黒髪のかはるなりけり

かへし　兼輔朝臣

くろ髪の色ふりかふる白雪のまちいづる友はうとくぞありける

又　貫之

くろ髪と雪との中のうきみれば友かゞみをもつらしとぞおもふ

かへし　兼輔朝臣

年ごとにしらがの數をますかゞみ見るにぞ雪の友は知りける

題しらず　讀人しらず

年ふれどいろもかはらぬ松が枝にかかれる雪を花とこそみれ

しもがれの枝となわびそ白雪のきえぬ限りは花とこそ見れ

こほりこそ今はすらしもみ吉野の山の瀧つ瀨こゑもきこえず

夜を寒みね覺めてきけば鴛ぞ鳴くはらひもあへず霜やおくらむ

雪のすこしふる日女に遣はしける　藤原かげもと

○かつきえて　一方には消えて。

○ふりはへてこそ云々　わざ〳〵思ひ立つて訪ねないにしても。

○心あてに　おしはかりに。推測して。

○見ばこそわかめ　見たならばわかるだらう。

○おしなべて　どこもこゝも一様に。

○うれ　梢。枝葉の上の方。

かつきえて空もみだるゝ沫雪はものおもふ人のこゝろなりけり

師氏朝臣のかりして家の前よりまかりけるをききて　讀人しらず

白雪のふりはへてこそ訪はざらめとくるたよりをすぐさざらなむ

題しらず

おもひつゝ寐なくにあくる冬の夜の袖の氷は解けずもあるかな

あらたまの年をわたりてあるがうへにふりつむ雪のたえぬ白山

まこもかる堀江にうきてぬる鴨の今宵の霜にいかにわぶらむ

白雲のおりゐる山とみえつるは降りつむ雪のきえぬなりけり

ふるさとのゆきは花とぞふりつもるながむるわれも思ひきえつゝ

流れゆく水こほりぬる冬さへやなほうき草のあとはとゞめぬ

心あてに見ばこそわかめしら雪のいづれか花の散るにたがへる

あまのがは冬は氷にとぢたれや石間にたぎつおとだにもせぬ

おしなべて雪のふれれば我が宿の杉をたづねてとふ人もなし

冬の池の水にながるゝあしかもの浮寐ながらにいく夜へぬらむ

山ちかみめづらしげなくふる雪の白くやならむ年つもりなば

松の葉にかゝれる雪のうれをこそ冬の花とはいふべかりけれ

○きえでもしばし云々　消えないでしばらくはとまつてほしい。

○めのうちつけ　一寸見たばかりの時。

○こしの白根　越の白嶺。根は山の峯。

降る雪はきえでもしばしとまらなむ花も紅葉も枝になきころ

涙川身なぐばかりのふちはあれど氷とけねば行くかたもなし

降る雪に物おもふわが身おとらめや積りつもりて消えぬばかりぞ

よるならば月とぞみまし我が宿の庭しろたへにふりつもる雪

梅が枝に降りおける雪を春ちかみめのうちつけに花とこそ見れ

いつしかと山の櫻もわがごとく年のこなたに春をまつらむ

年ふかくふりつむ雪を見るときぞこしの白根にすむこゝちする

年くれてはるあけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪

春ちかくふる白ゆきはをぐらやまみねにぞ花のさかりなりける

冬の池にすむにほ鳥のつれもなく下に通はむ人にしらすな

むばたまのよるのみ降れる白雪は照る月かげのつもるなりけり

この月のとしのあまりにたたざらば鶯ははや鳴きぞしなまし

關越ゆる道とはなしにちかながら年にさはりて春をまつかな

みくしげどのの別當に年をへていひわたり侍りけるをえあはずして其の
年のしはすのつごもりの日遣はしける　　藤原敦忠朝臣

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに今年もけふに果てぬとかきく

後撰和歌集　卷第九

戀歌一

からうじてあひしりて侍りける人につゝむ事ありて又あひがたく侍りければ　　源宗于朝臣

東路のさやの中山なか〳〵にあひみてのちぞ侘しかりける

忍びたりける人に物語し侍りけるを人のさわがしく侍りければまかりかへりて遣はしける　　貫之

曉となにかいひけむ別るればよひもいとこそわびしかりけれ

源おほきが通ひけるを後々はまからずなり侍りにければ鄰の壁のあなよりおほきをはつかに見て遣はしける　　するが

まどろまぬかべにも人を見つるかな正(まさ)しからなむはるの夜の夢

あひしりて侍りける人のもとに返事見むとてつかはしける　　元良親王

くや〳〵と待つ夕暮といまはとてかへる朝(あした)といづれまされる

かへし　　藤原かつみ

○なか〳〵に　却つて。上二句はこの句を云ふための序。

○曉と云々　わびしい別れをするのは曉であると云はれてゐるがといふ意を入れて考へる。

○まどろまぬかべ　かべは夢の異稱。

○正しからなむ　正夢であつてほしい。

○くや〳〵と　來るか來るかと。

○いねてふ事　稻と往ねとを通はせたもの。

○うたかた　泡沫。はかない意に譬へたもの。

○あふ坂の關云々　逢はないといふ意。

夕暮はまつにもかゝる白露のおくるあしたや消えははつらむ

大和にあひしりて侍りける人のもとにつかはしける　讀人しらず

うちかへし君ぞ戀しき大和なるふるのわさ田のおもひ出でつゝ

かへし

秋の田のいねてふ事をかけしかば思ひ出づるが嬉しげもなし

女につかはしける

人こふる心ばかりはそれながら我はわれにもあらぬなりけり

まかる所しらせず侍りける頃又あひしりて侍りける男のもとより日頃尋ね侘びてうせにたるとなむ思ひつるといへりければ　伊勢

思ひ川たえずながるゝ水のあわのうたかた人にあはで消えめや

題しらず　三統公忠

おもひやるこゝろはつねに通へどもあふ坂の關越えずもあるかな

女につかはしける　讀人しらず

消え果ててやみぬばかりか年をへて君をおもひの驗(しるし)なければ

かへし

おもひだに驗なしてふ我が身にぞあはぬなげきの數はもえけれ

題しらず

ほしがてに濡れぬべきかな唐衣乾くたもとのよゝになければ

よとともにあぶくま川の遠ければそこなる影を見ぬぞわびしき

わがごとくあひおもふ人のなき時はふかき心もかひなかりけり

いつしかと我がまつ山に今はとてこゆなる波にぬるゝ袖かな

女のもとにつかはしける

人ごとは誠なりけりしたひもの解けぬにしるき心とおもへば

むすび置きし我が下紐の今までにとけぬは人のこひぬなりけり

女のもとに遣はしける

ほかの瀬は深くなるらし飛鳥川きのふの淵ぞ我が身なりける

かへし

淵瀬ともいさやしら波たち騒ぐ我が身ひとつはよるかたもなし

題しらず

光まつつゆに心をおける身はきえかへりつゝ世をぞうらむる

ある所にあふみといひける人のもとにつかはしける　　貫之

汐みたぬ海ときけばやよとともにみるめなくして年のへぬらむ

○ほしがてに　乾し難いやうに。乾しかねるほど。

○人ごと　人の言葉。

○ほかの瀬　他の人との間柄。
○きのふの淵　けふの瀬の意。

○いさやしら波　いさ知らずの意

○みるめなくして　海松がなくても、見る目がなくてと、兩方にかけたもの。

あつよしの親王まうできたりけれど逢はずしてかへして又のあしたに遣はしける　　桂のみこ

唐衣きてかへりにしさ夜すがらあはれと思ふを恨むらむはた

あひ待ちける人の久しう消息なかりければ遣はしける　　紀のめのと

影だにも見えずなりゆく山の井は淺きよりまた水やたえにし

かへし　　平定文

淺してふこゝをゆゝしみ山の井はほりしにごりに影はみえぬぞ

題しらず　　讀人しらず

いくたびかいく田の浦に立ちかへる波に我が身をうち濡らすらむ

かへし

立ちかへりぬれては干ぬる汐なれば生田の浦のさがとこそみれ

女の許に

逢ふことはいとゞ雲居の大空に立つ名のみしてやみぬばかりか

かへし

よそながらやまむともせず逢ふことは今こそ雲の絶間なるらめ

又をとこ

○きてかへりにし　來たまゝですぐに歸つた。唐衣はきにかかる枕詞。
○さ夜すがら　夜すがら。終夜。
○影だにも云々、淺香山の歌によつて詠んだもの。
○淺きより　淺い時から。まだ深くもなかつたのに。
○ゆゝしみ　いやさに。

○さが　性。もちまへ。

○やみぬばかりか　やむだけであらうか。

今のみと頼むなれども白雲のたえまはいつか有らむとすらむ

かへし

をやみせず雨さへふれば澤水のまさるらむとも思ほゆるかな

題しらず

夢にさへ見ることぞなき年を經て心のどかにぬる夜なければ

見そめずてあらましものを唐衣たつ名のみしてきる夜なきかな

女のもとに遣はしける

かれはつる花の心はつらからで時すぎにける身をぞうらむる

かへし

あだにこそ散ると見るらめ君にみなうつろひにける花の心を

その程に歸りこむとて物にまかりける人の程をすぐしてこざりければ遣はしける

こむといひし月日を過す姨捨（をばすて）の山のはつらきものにぞありける

かへし

月日をも數へけるかな君こふる數をもしらぬ我が身なりけり

女に年をへて志ある由を宣ひわたりけるを女なほ今年をだに待ちくらせ

○有らむとすらむ　あらうとするたらうか。あるだらうか。

○をやみせず　やむ間もなしに。少しのやむ間もなく。

○かれはつる　枯れてしまふと、離れてしまふと通はせたもの。花の心は女の心をいふ。

○時すぎにける身　古くなつたわが身。

○君にみな云々　君ばかりを深く思つてゐる私の心を。

○その程　いつ／＼の頃。

とたのめけるをその年もくれてあくる春までいとつれなく侍りければ

このめはる春の山田をうちかへしおもひやみにし人ぞこひしき　贈太政大臣

心ざしありながらえあはず侍りける女のもとにつかはしける

ころをへてあひみぬ時はしらたまの涙も春はいろまさりけり

かへし　伊勢

人こふる涙は春ぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

男のこゝかしこに通ひすむ所おほくて常にしもとはざりければ女も又いろごのみなる名たちけるを恨み侍りける返事に　源たのむがむすめ

つらしともいかゞうらみむ郭公わがやどちかく鳴くこゑはせで

かへし　あつよしのみこ

里ごとになきこそ渡れほとゝぎすすみか定めぬ君たづぬとて

えがたかるべき女を思ひかけてつかはしける　春道列樹

數ならぬみやまがくれの郭公ひと知れぬ音をなきつゝぞふる

いと忍びたる女にあひ語らひて後人めにつゝみてまたあひ難く侍りければ　これたゞのみこ

あふことのかた絲ぞとは知りながら玉の緒ばかり何によりけむ

○ころをへて　長らくの間。

○たえぬおもひ　絶えない思ひの火。

○すみか定めぬ君　女をさして云つたもの。

○なきつゝぞふる　泣きながら日を送る。

女の許より忘草に文をつけておこせて侍りければ　　讀人しらず

思ふとはいふものからにともすれば忘るゝ草の花にやはあらぬ

かへし　　たいふのごといふ人

植ゑてみる我は忘れであだ人にまづ忘らるゝ花にぞありける

平定文が許より難波の方へなむ罷るといひおくりて侍りければ　　土佐

浦わかずみるめかるてふ蜑(あま)の身はなにか難波の方へしもゆく

かへし　　定文

君を思ふ深さくらべに津の國の堀江みにゆくわれにやはあらぬ

つらくなりにける人につかはしける　　伊勢

いかでかく心一つをふたしへに憂くもつらくもなして見すらむ

題しらず　　讀人しらず

ともすれば玉にくらべしますかゞみ人の寶と見るぞかなしき

忍びたる人につかはしける

磐瀬山たにのした水うちしのび人のみぬまはながれてぞふる

人をあひしりて後久しう消息も遣はさざりければ

嬉しげに君がたのめし言の葉はかたみに汲める水にぞありける

○花にやはあらぬ　やはは反語。

○ふたしへに　二重に。

○かたみに汲める水　籠に汲んだ水。はかないことを云つたもの。

題しらず

行きやらぬ夢路にまどふ袂にはあまつそらなき露ぞおきける

身ははやく奈良の都となりにしを戀しきことのまたもふりぬか

住吉のきしの白波よる／＼は海士のよそめに見るぞかなしき

君こふとぬれにし袖の乾かぬは思ひの外にあればなりけり

あはざりし時いかなりしものとてかたゞ今のまも見ねば戀しき

世の中に忍ぶる戀のわびしきはあひての後のあはぬなりけり

戀をのみ常にするがの山なれば富士のねにのみ泣かぬ日はなし

君により我が身ぞつらき玉だれのみずば戀しと思はましやは

男の初めて女の許に罷りて朝(あした)に雨のふるに歸りて遣はしける

いまぞしるあかぬわかれの曉は君をこひぢに濡るゝものとは

かへし

よそにふる雨とこそきけ覺束な何をか人のこひぢといふらむ

つらかりける男に

たえはつるものとはみつゝさゝがにの絲をたのめる心ぼそさよ

かへし

○あまつそらなき露　夢中の涙を云つたもの。

○奈良の都　古い都、古いといふ意。

○よる／＼は　寄る／＼は。夜々は。

○君をこひぢに云々　君を戀しく思つて涙をこぼすと云ふに併せて雨の緣から泥に濡れると云つたもの。

○さゝがにの絲　蜘蛛の絲。

うちわたしながき心はやつ橋のくもでに思ふことはたえせじ

思ふ人侍りける女に物のたうびけれど無情(つれな)かりければ遣はしける

思ふ人おもはぬ人の思ふ人おもはざらなむおもひ知るべく

かへし

こがらしの森の下草かぜはやみ人のなげきは生ひそひにけり

男のこと女迎ふるを見て親の家に罷り歸るとて

別れをば悲しきものときゝしかどうしろやすくもおもほゆるかな

題しらず

なきたむる袂こほれるけさ見れば心とけてもきみをおもはず

身をわけてあらまほしくぞ思ほゆる人は苦しといひけるものを

雲居にて人を戀しと思ふかなわれはあしべのたづならなくに

人につかはしける　源ひとしの朝臣

淺茅生の小野のしのはら忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき

兼盛

雨やまぬ軒のたまみづ數しらず戀しきことのまさるころかな

心みじかきやうに聞ゆる人なりといひければ　讀人しらず

○物のたうびけれど　ものを仰せられたが。
○おもはぬ人のおもふ人　女の思ふ人。
○おもはざらなむ　女を思はなければよいに。
○忍ぶれど云々　忍んでも忍びきれずに。

○はへてもあまる　延しても延しきれずにあまる。一二三の句は下の句の序。

○わりなきもの　やるせないもの　せん方ないもの。

○いとゞしく　更に、その上に。
○こさまさる　濃さがまさる。

伊勢の海にはへてもあまる栲縄(たくなは)のながき心はわれぞまされる

人につかはしける

色にいでて戀すてふ名ぞたちぬべき涙にそむる袖のこければ

かく戀ふるものとしりせば夜はおきて明くればきゆる露ならましを

逢ひもみず歎きもそめずありし時思ふことこそ身になかりしか

戀のごとわりなきものはなかりけりかつ睦れつゝかつぞ戀しき

女のもとに遣はしける

わたつ海に深き心のなかりせばなにかは君をうらみしもせむ

みなかみにいのるかひなく涙川うきても人をよそに見るかな

かへし

祈りける水上(みなかみ)さへぞうらめしき今日よりほかに影のみえねば

大輔につかはしける　右大臣

いろふかく染めしたもとのいとゞしく涙にさへもこさまさるかな

題しらず　讀人しらず

見る時はことぞともなく見ぬ時はことあり顔に戀しきやなぞ

男のこむとてこざりければ

山里のまきの板戸もささざりきたのめし人を待ちしよひより

はじめて女のもとに遣はしける

行く方もなくせかれたる山水のいはまほしくも思ほゆるかな

女につかはしける

人の上のこととしいへば知らぬかな君も戀するをりもこそあれ

かへし

つらからば同じ心につらからむつれなき人を戀ひむともせず

女につかはしける

人しれずおもふ心はおほしまのなるとはなしに歎くころかな

男のもとに遣はしける　　中務

はかなくて同じ心になりにしを思ふがごとはおもふらむやぞ

かへし　　源信明

侘しさをおなじ心ときくからに我が身をすてて君ぞかなしき

罷らずなりにける女の人に名たちければ遣はしける

さだめなくあだに散りぬる花よりは常磐の松の色をやはみぬ

かへし　　讀人しらず

○ささざりき　閉さなかつた。

○いはまほしくも　岩の閒がほしい、云ひ度い、兩方にかけたもの

住吉のわが身なりせば年ふともまつよりほかの色をみましや

をとこにつかはしける

現にもはかなきことのあやしきは寐なくに夢の見ゆるなりけり

女のあはず侍りけるに

しらなみのよる／＼岸にたちよりてねも見しものを住吉の松

男に遣はしける

ながらへてあらぬまでにも言の葉の深きはいかにあはれなりける

○まつよりほかの色　松より外の色、君を待つこと以外の心、兩方にかけたもの。

○ねも見しものを　松の根も見たのに、寢たこともあるのに、兩方にかけたもの。

○空に戀ふる　見もしないで戀しく思ふ。

○おなじ心に　自分と同じ心に。

後撰和歌集　卷第十

戀歌二

女の許にはじめて遣はしける　藤原忠房朝臣

人を見て思ふおもひもあるものを空に戀ふるぞはかなかりける

壬生忠岑

ひとりのみ思ふはくるしいかにしておなじ心に人ををしへむ

紀友則

わが心いつならひてか見ぬ人をおもひやりつゝ戀しかるらむ

まだ年若かりける女につかはしける　源中正

葉を若みほにこそいでねはなすゝき下のこゝろにむすばざらめや

人をいひはじむとて　兼覽王

あしびきの山下しげくはふ葛のたづねて戀ふる我としらずや

年月をへて忍びていひ侍りける人に　忠房朝臣

隱沼(かくれぬ)にしのびわびぬる我が身かな井手の蛙となりやしなまし

○女のざふし　女の部屋、
○霧とはなしに　霧ではないのに
○はゆる心　もえる心。
○そほつ　濡れる。
○おりたちてこそ　ひたすらに思ひ沈んで。
○わざとにはあらで　わざ／＼ではなく。
○とのゐもの　宿直の時に用ゐるもの。

女のざふしによる／＼立ちよりつゝものなどいひて後　藤原輔文

阿武隈の霧とはなしによもすがら立ち渡りつゝよをもふるかな

文つかはせども返事もせざりける女の許に遣はしける　讀人しらず

あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき

くにもちが音もせざりければ遣はしける　本院右京

ともかくもいふ言の葉の見えぬかないづらは露のかゝり所は

題しらず　橘敏仲

わび人のそほつてふなる涙川おりたちてこそ濡れわたりけれ

かへし　大輔

ふちせともこゝろも知らずなみだ川おりやたつべき袖のぬるゝに

又　敏仲

こゝろみになほおりたたむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと

わざとにはあらで時々ものいひふれ侍りける女の心にもあらで人にさそはれてまかりにければとのゐものにかきつけて遣はしける　藤原敦忠朝臣

かかりける人の心をしらつゆのおけるものとも頼みけるかな

あひしりて侍りける女を久しうとはず侍りければいといたうなむ侘びは

○かりかはむ　刈り取つて飼ふべき。
○あせぬれば　淺くなつたので。
○あけぬ／＼　戸をあけると夜が明けるとをかけたもの。
○そらなき　虚鳴き。

べると人のつげはべりければ　　藤原顯忠朝臣

鶯のくもゐにわびてなくこゑを春のさがとぞわれはききつる

ふみかよはしける女のこと人にあひぬと聞きてつかはしける　　平時望朝臣

かくばかり常なき世とはしりながら人を遙かになにたのみけむ

男のこざりければ遣はしける　　小町があね

我がかどのひとむら薄かりかはむ君が手なれの駒もこぬかな

題しらず　　枇杷左大臣

よをうみの泡と消えぬる身にしあれば恨むることぞ數なかりける

かへし　　伊勢

わたつみと頼めしこともあせぬれば我ぞわが身のうらは恨むる

人のもとに遣はしける　　源等朝臣

あづまぢの佐野の船橋かけてのみ思ひわたるをしる人のなき

人につかはしける　　紀長谷雄朝臣

ふしてぬる夢路にだにもあはぬ身はなほ淺ましき現とぞ思ふ

女につかはしける　　讀人しらず

天の戸をあけぬ／＼といひなしてそらなきしつる鳥の聲かな

○あしづゝ　蘆の節のなかにあるあま皮。うすいもの。

○有らむとぞ思ふ　生きてゐようと思ふ。

○けぬると　消ぬると。死んだかと。

○歸る優れり　歸る方がまさつてゐる。

よもすがらぬれてわびつる唐衣あふさかやまに道まどひして

男につかはしける

思へどもあやなしとのみいはるれば夜の錦のこゝちこそすれ

女のもとに遣はしける

音にのみききこし三輪の山よりも杉の數をばわれぞ見えにし

おのれの思ひ隔てたる心ありといへる女の返事に遣はしける　　兼輔朝臣

難波潟かりつむ蘆のあしづゝのひとへも君をわれやへだつる

遠き所にまかりける道よりやむことなき事によりて京へ人遣はしけるついでに文のはしにかきつけ侍りける　　讀人しらず

わがごとや君もこふらむ白露のおきてもねてもそでぞかわかぬ

あひしりて侍りける人の許より久しくとはずしていかにぞまだいきたりやとたはぶれて侍りければ

つらくとも有らむとぞ思ふ外（よそ）にても人やけぬると聞かまほしさに

人のもとにしば〳〵まかりけれどあひ難く侍りければ物にかきつけ侍りける　　在原業平朝臣

暮れぬとてねて行くべくもあらなくにたどる〳〵も歸る優れり

をとこ侍る女をいとせちにいはせ侍りけるを女いとわりなしといはせければ　　元良のみこ

わりなしといふこそ且は嬉しけれおろかならずと見えぬと思へば

女の許より心ざしの程をなむえ知らぬといへりければ　　藤原興風

我が戀をしらむと思はば田子の浦にたつらむ波の數を數へよ

いひかはしける女の許よりなほざりにいふにこそあめれといへりければ　　貫之

色ならばうつるばかりも染めてまし思ふ心をえやは見せける

物のたらびける女の許に文遣はしたりけるに心地あしとて返事もせざりければ又つかはしける　　大江朝綱朝臣

足引のやまひはすともふみかよふ跡をもみぬは苦しきものを

おほつぶねに物のたうびつかはしけるを更にきき入れざりければ遣はしける　　元良親王

大かたはなぞやわが名のをしからむ昔のつまと人にかたらむ

かへし　　おほつぶね

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今もしらずとをいはむ

○なほざりに　かりそめに、當座だけに。

○やまひはすとも　山居と病とをかけたもの。

○ふみかよふ跡　踏み通ふに文通ふをかけたもの。

○なき名　跡方もない評判。

○あと見れば　あとは筆跡。文を見ること。
○心なぐさ　心なぐさめ。
○かは　川と彼はとをかけたもの
○何處をはかと　何處が墓かと、何處えその場所かと、兩方に通はせたもの。

返事せざりける女の文をからうじてえて　　讀人しらず

あと見れば心なぐさのはまちどり今は聲こそきかまほしけれ

同じ所にて見かはしながらえあはざりける女に

かはとみてわたらぬ中に流るゝはいはで物おもふ涙なりけり

心ざしありける女に遣はしける　　橘公賴朝臣

あま雲に鳴きゆく鴈の音にのみ聞きわたりつゝ逢ふよしもなし

貫之

住の江のなみにはあらねど夜とともに心を君によせ渡るかな

兵衞に遣はしける　　讀人しらず

見ぬほどに年のかはれば逢ふことのいやはるぐ\と思ほゆるかな

まかり出で御文つかはしたりければ　　中將更衣

今日すぎば死なまし物を夢にても何處をはかと君がとはまし

御かへし　　延喜御製

現にぞとふべかりける夢とのみ惑ひしほどやはるけかりけむ

題しらず　　藤原ちかぬ

流れてはゆくかたもなし涙川わがみのうらや限りなるらむ

○しるしなき　験のない。

○消ちこそしらね　消し方を知らぬ。

○あふごなみ　逢ふ時がないので

在原棟梁

我が戀の數にしとらばしろたへの濱の眞砂もつきぬべらなり

貫之

涙にもおもひの消ゆるものならばいとかく胸はこがさざらまし

坂上是則

しるしなき思ひやなぞと蘆たづの音になくまでにあはず侘しき

年久しくかよはし侍りける人に遣はしける

貫之

玉の緒のたえて短きいのちもてとしつきながき戀もするかな

題しらず

平定文

我のみや燃えてきえなむ世と共に思ひもならぬ富士の嶺のごと

かへし

きのめのと

ふじのねの燃え渡るとも如何(いかゞ)せむ消(け)ちこそしらね水ならぬみは

心ざせる女の家のあたりにまかりていひいれ侍りける

貫之

わびわたる我が身は露をおなじくば君が垣根の草にきえなむ

題しらず

在原元方

みるめかる渚(なぎさ)やいづこあふごなみ立ちよる方も知らぬわがみは

東宮に鳴門といふ戸のもとに女と物いひけるに親の戸をさしてゐて入りにければ又のあしたに遣はしける　藤原滋幹

鳴門よりさしいだされし船よりも我ぞよるべもなき心地せし

題しらず　讀人しらず

高砂のみねのしらくもかゝりける人のこゝろを頼みけるかな

長明のみこの母の更衣さとに侍りけるにつかはしける　延喜御製

よそにのみまつぞはかなき住の江の行きてさへこそ見まくほしけれ

題しらず　源等朝臣

かげろふに見しばかりにや濱千鳥ゆくへもしらぬ戀に惑はむ

あり所しりながらえあふまじかりける人につかはしける　藤原兼茂朝臣

わたつみのそこの在所(ありか)は知りながら潛(かづ)きていらむ波のまぞなき

女のもとに遣はしける　橘實利朝臣

つらしともおもひぞはてぬ涙川ながれて人をたのむこゝろは

かへし　讀人しらず

流れてとなにたのむらむ涙川かげ見ゆべくもおもほえなくに

人をいひわづらひて遣はしける　平定文

○あり所　ゐる場所。

○そこの在所　底の在る場所。その許のゐる場所。兩方に通はせたもの。

何事を今はたのまむちはやぶる神もたすけぬ我が身なりけり

かへし　　おほつぶね

ちはやぶる神も耳こそなれぬらしさま〴〵祈る年もへぬれば

女の許にまかりたりけるをたゞにてかへし侍りければいひいれ侍りける　　貫之

うらみても身こそつらけれ唐衣きていたづらに返ると思へば

あひしりて侍りける人を久しうとはずしてまかりたりければ門より返し遣はしけるに　　壬生忠岑

住の江のまつに立ちよる白波のかへる折にやねはなかるらむ

男の許より今はこと人あんなればといへりければ女にかはりて　　讀人しらず

思はむと頼めし事もあるものをなき名をたてでたゞに忘れね

かへし

春日野のとぶひの野守みしものをなき名といはば罪もこそうれ

題しらず

忘られて思ふなげきの茂るをや身をはづかしの森といふらむ

人の心かはりければ　　右近

○耳こそなれぬらし　あれこれと常に異なつた事をいろ〳〵祈るので神様がききあきられただらう。
○たゞにてかへし侍りければ　そのまゝで歸したので。
○きていたづらに　唐衣を著てと來て徒らにと兩方にかけたもの。
○こと人　他の人。他の男。
○たゞに　ひたすらに。いちづに
○忘られて　忘られて。

○うらみ所　裏の見る所と、恨む所とを通はせたもの。
○うしろめたくは　不安心には、

○ことにぞありける　ことは異。世の常のものとは異なつてゐる。

○いそま　磯と磯との間。

思はむと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちいにけむ

定國の朝臣の御息所と清蔭の朝臣とみちのくににある所々をつくして歌によみかはして今はよむべき所なしといひければ

源清蔭朝臣

さてもなほ籬の島のありければ立ちよりぬべく思ほゆるかな

こと女の文を妻の見むといひけるに見せざりければ恨みけるに其の文の裏にかきつけて遣はしける

讀人しらず

これはかくうらみ所もなきものをうしろめたくは思はざらなむ

久しうあはざりける女に遣はしける

源さねあきら

思ひきや逢ひ見ぬ事をいつよりと數ふばかりになさむものとは

題しらず

藤原治方

世の常の音をしなかねば逢ふ事の涙の色もことにぞありける

大伴黑主

白波のよするいそまを漕ぐ舟のかぢとりあへぬ戀もするかな

源らかぶ

戀しさはねぬに慰むともなきにあやしくあはぬめをも見るかな

年を經ていひわたりける女に

源すぐる

久しくもこひわたるかな住の江の岸に年ふるまつならなくに

題しらず　藤原清正

逢ふことのよゝをへだつるくれ竹のふしの數なき戀もするかな

かれがたになりにける人に末もみぢたる枝につけて遣はしける　讀人しらず

今はてふ心つくばのやま見ればこずゑよりこそ色かはりけれ

女の許より歸りてあしたに遣はしける　源重光朝臣

歸りけむ空もしられずをばすての山よりいでし月を見しまに

兼輔朝臣にあひはじめて常にしもあはざりける程に　清正母

ふりとげぬ君が雪げのしづくゆゑたもとにとけぬ冰しにけり

方ふたがりける頃たがへにまかるとて　藤原有文朝臣

片時もみねば戀しき君をおきてあやしやいく夜ほかに寐ぬらむ

題しらず　大江千古

思ひやる心にたぐふ身なりせばひと日にちたび君はみてまし

忍びて通ひける女の許より狩さうぞく送りて侍りけるにすれるかりぎぬ侍りけるに　元良のみこ

逢ふことは遠山ずりのかり衣きてはかひなき音をのみぞなく

○方ふたがり　陰陽家の語で、行かうと思ふ方角に天一神が居て行かれぬ事。これに對して、その方角を避けて他の方角に行くことを方たがへといふ。

○たぐふ　おなじやうなものになる。副ひならぶ。

題しらず　　あつよしのみこ

深くのみ思ふ心はあしのねのわけても人にあはむとぞおもふ

忍びてあひわたりける人に　　藤原忠國

漁火のよるはほのかにかくしつゝありへば戀の下にけぬべし

寛平の帝御ぐしおろさせ給うての頃御帳のめぐりにのみ人は侍はせ給ひて近うもめしよせられざればかきて御帳に結びつけける　　小八條御息所

たちよらば影ふむばかり近けれど誰かなこその關をすゑけむ

男のもとに遣はしける　　土佐

わがそでは名にたつ末のまつ山かそらより波のこえぬ日はなし

月をあはれといふはいむなりといふ人の有りければ　　讀人しらず

獨寐の侘しきまゝに起き居つゝ月をあはれといみぞかねつる

男のもとに遣はしける

唐錦をしき我が名はたちはてて如何にせよとか今はつれなき

はじめて人にのたまひ遣はしける　　貫之

人づてにいふ言の葉の中よりぞ思ひつくばのやまは見えける

みそかに人を見て遣はしける

○あしのねの　わけてもといふための序。

○かくしつゝ　このやうにして、隱しながら、兩方に通はせたもの

○ありへば　月日を過したならば

○なこその關　勿來の關の名に來るなの意をこめたもの。

○唐錦　語をへだててたちはててにかかる。

○みそかに　ひそかに。

便りにもあらぬおもひのあやしきは心をひとにつくるなりけり

人の家より物見に出づる車を見て心づきにおぼえ侍りければたそと尋ねとひければいでける家のあるじと聞きてつかはしける　　讀人しらず

ひとづまに心あやなくかけはしの危きものは戀にぞありける

人を思ひかけて心地もあらずやありけむ物もいはずして日暮るればおきもあがらずと聞きてこの思ひかけたる女の許よりなどかくすき〴〵しくはといひて侍りければ

いはで思ふ心ありそのはまかぜに立つ白波のよるぞわびしき

心かけて侍りけれどいひつかむ方もなくつれなきさまに見えければつかはしける

ひとりのみ戀ふればくるし呼子鳥聲になき出て君にきかせむ

男の女に文遣はしけるを返事もせで絶えにければ又遣はしける

ふしなくて君がたえにし白絲はよりつき難きものにぞありける

をとこの旅よりまできて今なむまできつきたるといひて侍りける返事に

くさ枕このたびへつる年月のうきはかへりてうれしからなむ

をとこの程久しうありてまできてみ心のいとつらさに十二年の山ごもり

〇心ありその云々　心ありと、荒磯の濱風をかけたもの。〇よるぞわびしき　寄ると夜とを通はせたもの。

〇ふしなくて　絲のふしと、をりとを通はせたもの。

してなむ久しうきこえざりつるといひ入れたりければ呼び入れて物など
いひて返しつかはしけるが又おともせざりければ

出でしより見えずなりにし月影はまた山のはに入りやしにけむ

かへし

足引の山に生ふてふもろかづらもろともにこそ入らまほしけれ

人を思ひかけて遣はしける　　平　定　文

濱千鳥たのむをしれと踏みそむる跡うちけつなわれをこす波

かへし　　おほつぶね

行く水の瀨毎にふまむ跡ゆゑに賴むしるしをいづれとか見む

人の許に初めて文遣はしたりけるに返事はなくてたゞ紙をひき結びて返
したりければ　　源もろあきらの朝臣

つまにおふることなし草をみるからに賴む心ぞ數まさりける

かくておこせて侍りけれど宮づかへする人なりければいとまなくて又の
あしたに常夏の花につけておこせて侍りける　　讀人しらず

置く露のかかるものとは思へどもかれせぬものはなでしこの花

かへし

○足引の　以下の三句は下の序。

○うちけつな　うち消すな。

○かかるもの　露がかゝると、このやうなものと、兩方にかけたもの。

かれずともいかゞ頼まむ撫子の花はときはの色にしあらねば

後撰和歌集　卷第十一

戀歌　三

女のもとにつかはしける　三條右大臣

名にしおはば逢坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

在原元方

戀しとはさらにもいはじ下紐のとけむを人はそれと知らなむ

かへし　讀人しらず

下紐のしるしとするも解けなくに語るが如(ごと)は戀ひずもあるかな

女のいと思ひ離れていふに遣はしける

現にもはかなきことの侘しきはねなくに夢とおもふなりけり

みやづかへする女の逢ひ難く侍りけるに　貫之

たむけせぬわかれする身の侘しきは人目を旅と思ふなりけり

かりそめなる所にはべりける女に心かはりにける男のこゝにてはかくびんなき所なれば心ざしはありながらなむえ立ちよらぬといへりければ所

○逢坂山のさねかづら　くるの緣に用ゐたもの。

○語るが如は　口でいふやうには

○現にも　現であつても。

○たむけせぬ　旅に出ればぬさを神に手向くるので、手向をせぬと云ふのは旅でないといふ意。
○びんなき所　都合のわるい所。

○つらき所　難儀な所とつれない所とを通はせたもの。
○かはらじを　心はかはらないだらうに。
○さうじ　障子。ふすま。
○鳥のかた　鳥の繪。

をかへて待ちけるに見えざりければ　　女

宿かへて待つにも見えずなりぬればつらき所の多くもあるかな

題しらず　　讀人しらず

思はむと頼めし人はかはらじを訪はれぬ我やあらぬなるらむ

源さねあきら頼む事なくば死ぬべしといへりければ　　中務

徒らにたび／＼死ぬといふめれば逢ふには何をかへむとすらむ

かへし　　源信明

死ぬ／＼と聞く／＼だにも相見ねば命をいつの世にか殘さむ

時々みえける男のゐる所のさうじに鳥のかたをかきつけて侍りければあたりにおしつけはべりける　　本院侍從

繪にかける鳥とも人を見てしがな同じところを常にとふべく

大納言國經朝臣の家に侍りける女に平定文いと忍びて語らひ侍りて行末まで契り侍りける頃この女俄に贈太政大臣に迎へられて渡り侍りにければ文だにも通はす方なくなりにければかの女の子の五つばかりなるが本院の西の對に遊びありきけるを呼びよせて母に見せ奉れとてかひなに書き付け侍りける　　平定文

○かねごと　かねて云つて置いた言葉、約束の言葉。

○二むら　むらは絹を數へるのに用ゐる語。二匹。これを三河國の二村山によそへたもの。

○たつををしみし心　唐衣裁つとつゞけて、出發するのを名殘惜しく思つた心とかけたもの。

○寐ぬに見しかば　寐もせぬのに見たので。

○空しらぬ雨　涙をいふ。

昔せし我がかねごとの悲しきはいかに契りしなごりなるらむ

かへし　讀人しらず

うつゝにて誰ちぎりけむ定めなき夢路に迷ふわれはわれかは

おほやけづかひにて東の方へ罷りける程にはじめてあひしりて侍る女にかくやんごとなき道なれば心にもあらずまかりぬるなど申して下り侍りけるを後に改め定めらるゝ事ありてめしかへされければこの女聞きて喜びながら問ひに遣はしたりければ道にて人の心ざし送りて侍りけるくれはとりといふ綾を二むら包みて遣はしける　清原諸實

くれはとりあやに戀しくありしかば二むら山もこえずなりにき

かへし　讀人しらず

からころもたつををしみし心こそふたむら山の關となりけめ

人のもとに遣はしける　清成が女

夢かとも思ふべけれど覺束な寐ぬに見しかばわきぞかねつる

少將實忠通ひ侍りける所をさりてこと女につきてそれより春日の使に出で立ちてまかりければ　もとの女

空しらぬ雨にもぬるゝ我が身かな三笠の山をよそにききつゝ

朝顏の花まへにありけるざふしより男のあけて出で侍りけるに　讀人しらず

もろともにをるともなしにうちとけて見えにけるかな朝顏のはな

内にまゐりて久しう音せざりける男に　女

もゝしきは斧の柄くたす山なれや入りにし人の音づれもせぬ

女の許にきぬをぬぎ置きて取りに遣はすとて　伊尹朝臣

すゞかやま伊勢をの海士の捨衣しほなれたりと人やみるらむ

題しらず　貫之

いかでなほ人にもとはむ曉のあかぬわかれやなにに似たりと　在原行平朝臣

戀しきに消えかへりつゝ朝露のけさはおきゐむ心地こそせね　讀人しらず

しのゝめにあかでわかれし袂をぞ露やわけしと人はとがむる　平中興

こひしきも思ひこめつゝあるものを人にしらるゝ涙なになり

からうじてあへりける女につゝむ事侍りて又えあはず侍りければ遣はしける　兼輔朝臣

○斧の柄くたす山　仙人の住む山卽ち藐姑射山をいつたもので、仙洞御所をさす。

○しほなれたりと　潮氣に染んで濕うてゐること。併せて馴れ〳〵し過ぎること。

○おきゐむ心地　起きてゐる心持に、朝露の置くといふをかけたもの。

○なになり　何故であるかわからぬ。

あふさかの木の下露にぬれしよりわが衣手はいまもかわかず

題しらず　　躬恒

君をおもふ心を人にこゆるぎのいその玉藻やいまもからまし

親ある女に忍びて通ひけるを男もしばしは人に知られじといひ侍りければ　　讀人しらず

なき名ぞと人にはいひて有りぬべし心のとはばいかゞ答へむ

なき名たちける頃　　伊勢

淸けれど玉ならぬ身の侘しきはみがけるものにいはぬなりけり

忍びてすみ侍りける女に遣はしける　　敦忠朝臣

逢ふことをいざほに出なむしの薄(すゝき)忍びはつべき物ならなくに

あひ語らひける人これもかれも包む事ありて離れぬべく侍りければ遣はしける　　讀人しらず

逢ひ見ても別るゝ事のなかりせばかつ〴〵ものは思はざらまし

人のもとより曉かへりて　　閑院左大臣

いつのまに戀しかるらむ唐衣ぬれにしそでのひるまばかりに

貫之

○はに出なむ　表面にあらはさう

○かつ〴〵　まあ〳〵。

○程もへなくに　間もないのに。○見まくほしきか　逢ひたいことかな。

○越えがたき云々　逢へぬといふ意。

○おほい君　大君。大姉君。第一の姉君。○今日しこそ　今日こそ。しは語意を强める助詞。

○かゝるおほみに　日陰のかづらは誰にでもかゝるので。おほみには多いので。

○わくる心　見わける心。朧の人影の中から君を見わける眞心。

女のもとにつかはしける　　これまさの朝臣

別れつる程もへなくに白波の立ちかへりても見まくほしきか

かへし　　小野好古朝臣女

人知れぬ身はいそげども年をへてなど越えがたきあふ坂の關

女のもとに遣はしける　　藤原清正

東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えむあふさかの關

かれがたになりにける男の許に裝束調じて送りけるにかかるからに疎き心地なむするといへりければ　　小野遠興がむすめ

つれもなき人にまけじとせし程に我もあだ名は立ちぞしにける

五節（ごせち）の所にて閑院のおほい君につかはしける　　もろまさの朝臣

つらからぬ中にあるこそ疎しといへ隔て果てでし衣（きぬ）にやはあらぬ

かへし

ときはなる日かげのかづら今日しこそ心の色にふかく見えけれ

藤壺の人々月夜にありきけるを見て一人がもとに遣はしける　　清正

誰となくかゝるおほみに深からむ色をときはにいかゞ賴まむ

たれとなくおぼろに見えし月影にわくる心をおもひしらなむ

左兵衛督師尹朝臣に遣はしける　本院兵衞

春をだに待たで鳴きぬる鶯はふるすばかりのこゝろなりけり

題しらず　兼茂朝臣女

夕されば我が身のみこそかなしけれいづれのかたに枕さだめむ

在原元方

夢にだにまだ見えなくに戀しきはいつにならへる心なるらむ

壬生忠岑

思ふてふ事をぞねたく古しける君にのみこそいふべかりけれ

戒仙法師

やむことなき事によりて遠き所にまかりてたたむ月ばかりになむまかり歸るべきといひてまかりくだりて道よりつかはしける

あなこひし行きてや見まし津の國のいまもありてふ浦の初島

貫之

月かへて君をば見むといひしかど日だに隔てず戀しきものを

同じ所に宮づかへし侍りて常に見ならしける女に遣はしける　躬恆

伊勢の海にしほやくあまの藤衣なるとはすれどあはぬ君かな

題しらず　是則

○たたむ月　來月。

○月かへて　月がかはって。來月の意。

○なるとはすれど　藤衣を使ひならして古びてはゐるが。併せて馴れてしたしくなつてはゐるが。

わたのそこかづきて知らむ君がためおもふ心の深さくらべに

人のをとこにてはべる人をあひしりてつかはしける　右近

からころもかけて頼まぬ時ぞなき人のつまとは思ふものから

人の許にまかれりけるに簾のとにすゑて物いひけるを簾を引きあげければいたく騒ぎければまかりかへりて又のあしたにつかはしける　藤原守正

あらかりし波の心はつらけれどすごしによせし聲ぞこひしき

あひしりて侍りける女の心ならぬやうに見え侍りければつかはしける　藤原後蔭朝臣

いづ方に立ち隠れつゝ見よとてか思ひぐまなく人のなりゆく

男の心やう〳〵かれがたに見えゆきければ　土佐

つらきをも憂きをも外に見しかども我が身に近きよにこそ有りけれ

女に心ざしあるよしをいひ遣はしければ世の中の人の心さだめなければ頼み難きよしをいひて侍りければ　在原元方

淵は瀬になり變るてふ飛鳥川わたり見てこそ知るべかりけれ

題しらず　伊勢

厭はるゝ身をうれはしみいつしかと飛鳥川をも頼むべらなり

○わたのそこ　海の底。
○人のつま　人の夫。人の男。
○すごし　簾ごし。
○よせし　波の縁でよせると云つたもの。自分に云ひかけた。
○思ひぐまなく　思ひやりなく。心にもかけぬやうに。
○うれはしみ　歎かはしさに。

○よをへて　いつまでも。長らくの間。

かへし　　贈太政大臣

飛鳥川せきてとゞむるものならば淵瀬になると何かいはせむ

女四のみこにおくり侍りける　　右大臣

あしたづの澤邊に年はへぬれどもこゝろは雲の上にのみこそ

かへし

蘆鶴(あしたづ)の雲居にかゝる心あらばよをへて澤に住まずぞあらまし

消息つかはしける女のまたこと人に文遣はすと聞きて今は思ひたえねといひ送りて侍りける返事に　　贈太政大臣

松山につらきながらも波こさむことはさすがに悲しきものを

宮づかへし侍りける女程久しくありて物いはむといひ侍りけるに遅くまかり出でければ　　枇杷左大臣

宵のまにはや慰めよいそのかみふりにし牀もうちはらふべく

かへし　　伊勢

わたつみとあれにし牀を今さらにはらはば袖や沫とうきなむ

心ざしありていひかはしける女のもとより人數ならぬやうにいひ侍りければ　　長谷雄朝臣

汐のまに漁する蜑もおのがよゝかひありとこそ思ふべらなれ

題しらず　贈太政大臣

あぢきなくなどかまつ山波こさむことをばさらに思ひはなるゝ

かへし　伊勢

岸もなく汐しみちなばまつ山をしたにて波はこさむとぞ思ふ

まもりをおきて侍りける男の心かはりにければ其のまもりを返しやるとて　伊衡朝臣の女いまき

よと共に歎きこりつむ身にしあればなぞ山守の有るかひもなき

人の心つらくなりにければ袖といふ人をつかひにて　讀人しらず

人しれぬ我が物おもひの涙をば袖につけてぞ見すべかりける

文などおこする男ほかざまになりぬべしと聞きて　藤原眞忠が妹

山のはにかかる思ひのたえざらば雲居ながらも哀れと思はむ

町尻の君に文遣はしたりける返事に見つとのみありければ　もろうぢの朝臣

なき流す涙のいとゞそひぬればはかなきみづも袖ぬらしけり

題しらず　源たのむ

夢のごとはかなきものはなかりけり何とて人に逢ふとみつらむ

○かひありと　蜑の縁で貝ありと云つて、甲斐ありにかけたもの。

○歎きこりつむ　歎きがかたまりつもる。併せて歎きといふ木を伐つて積む。

○袖につけて　袖といふ人にことづけて、著物の袖につけて、兩方にかけたもの。

○雲居　空。

○はかなきみづも　みづを見つにかけたもの。

○片時のうつゝ云々　たゞ半時はかりでもよいから夢でなくて現で逢ひたい。

○玉津島云々　上三句は下の句の序。

○すくもたく火　海岸で蜑がかりに焚く藻屑の火。

○あらませば　あつたならば。

○涙川ながす　川のやうにも涙をながす。

心ざし侍りける女のつれなきに　　讀人しらず

思ひねのよな〳〵夢にあふことをたゞ片時のうつゝともがな

かへし　　黒主

時のまのうつゝをしのぶ心こそはかなき夢にまさらざりけれ

題しらず　　紀内親王

玉津島ふかき入江をこぐふねのうきたる戀もわれはするかな

津の國のなにはたたまく惜しみこそすくもたく火の下にこがるれ

人の許にまかりていれざりければ簀子(すのこ)にふしあかして歸るとていひいれ侍りける　　讀人しらず

夢路にもやどかす人のあらませば寐覺に露ははらはざらまし

かへし

涙川ながすねざめもあるものをはらふばかりの露やなになり

心ざしはありながらえあはざりける人につかはしける

みるめ刈るかたぞあふみになしと聞く玉藻をさへや蜑(あま)は潛(かづ)かぬ

かへし

名のみして逢ふことなみの繁きまにいつか玉藻を蜑はかづかむ

心ざしありて人にいひかはし侍りけるをつれなかりければいひわづらひて止みにけるを思ひ出でてしきりにいひ送りける返事に心ならぬさまなりといへりければ

葛城やくめぢの橋にあらばこそ思ふこゝろをなかぞらにせめ

人のもとにつかはしける　右大臣

隱沼(かくれぬ)にすむ鴛鴦(をしどり)の聲たえずなけどかひなきものにぞありける

釣殿のみこに遣はしける　陽成院御製

筑波嶺の嶺より落つるみなのがは戀ぞつもりて淵となりける

相知りて侍りける人のまうでこずなりて後心にもあらず聲をのみきくばかりにてまた音もせず侍りければ遣はしける　讀人しらず

鴈が音のくもゐ遙かにきこえしは今はかぎりの聲にぞありける

かへし　兼覧王

今はとて行きかへりぬる聲ならば追風にてもきこえましやは

男のけしきやうやうつらげに見えければ　小町

心からうきたる船にのりそめてひとひも波にぬれぬ日ぞなき

○逢ふことなみの云々　逢ふ事がなさにと、波の繁きと、兩方にかけたもの。

○くめぢの橋　役小角が呪術で大和國葛城山から金峯山に石の橋をかけたといふその橋。
○なかぞら　中空。久米路の橋の緣によつたもので、うはのそらの意。

○今はかぎりの聲　最後の聲。

○ゆゝしく　甚しく。
○あらがふ　あらそふ。

○關の此方は云々　逢坂の關を越えたい。卽ち思ふ人に逢ひたいの意。

男の心つらく思ひかれにけるを女なほざりになどか音もせぬといひ遣はしたりければ　　讀人しらず

忘れなむと思ふ心のやすからばつれなき人をうらみましやは

宵に女にあひて必ず後にあはむと誓言(ちかごと)をたてさせてあしたに遣はしける　　藤原滋幹

千早振神ひきかけて誓ひてしこともゆゝしくあらがふなゆめ

院のやまとに扇つかはすとて　　右大臣

おもひには我こそ入りて惑はるれあやなく君やすゞしかるべき

兼通の朝臣かれがたになりて年こえてとぶらひて侍りければ　　元平の親王の母

あらたまの年もこえぬるまつ山のなみの心はいかゞなるらむ

もとの女にかへりすむときゝて男のもとに遣はしける　　讀人しらず

わがためはいとゞ淺くやなりぬらむ野中の清水ふかさまされば

女のもとに遣はしける　　源中正

あふみぢを案内(しるべ)なくても見てしがな關の此方(こなた)は侘しかりけり

かへし　　下野

道しらでやみやはしなぬ逢坂の關のあなたはうみといふなり

女の許にまかりたるにはや歸りねとのみいひければ　　讀人しらず

つれなきを思ひしのぶのさね蔓はてはくるをも厭ふなりけり

あつよしのみこの家にやまとといふ人につかはしける　　左大臣

いまさらに思ひ出でじと忍ぶるを戀しきにこそ忘れわびぬれ

いひかはしける女の今は思ひ忘れぬといひ侍りければ　　紀長谷雄朝臣

わがためは見るかひもなし忘草わするばかりの戀にしあらねば

忍びて通ひける人に　　藤原有好

あひみてもつゝむ思ひの侘しきは人まにのみぞ音はなかれける

物いひける男いひわづらひていかゞはせむいなともいひはなちてよとい
ひ侍りければ　　讀人しらず

小山田のなはしろみづは絶えぬとも心の池のいひははなたじ

方たがへに人の家に人を具してまかりて歸りて遣はしける　　源重光朝臣

千代へむと契りおきてし姫松のねざしとめてし宿はわすれじ

物いひける女に蟬のからを包みて遣はすとて　　坂上是則

これをみよ人もすさめぬ戀すとて音をなくむしのなれる姿を

人のもとより歸りまうできて遣はしける

○はや歸りね　もうお歸りなさい

○さね蔓　くるの緣語。

○わするばかりの　忘れる事の出來る位な淺い。

○人ま　人の見てゐない時。

○すさめぬ　めではやさない。賞翫せぬ。

逢ひ見ては慰むやとぞ思ひしになごりしもこそ戀しかりけれ

後撰和歌集　卷第十二

戀歌四

女につかはしける　　敏行朝臣

我が戀のかずをかぞへば天の原くもりふたがりふる雨のごと

忘れにける女を思ひ出でてつかはしける　　讀人しらず

うちかへし見まくぞほしき古里のやまと撫子いろやかはれる

女につかはしける　　枇杷左大臣

山彥の聲にたてても年はへぬ我がものおもひを知らぬ人きけ

身よりあまれる人を思ひかけて遣はしける　　紀友則

玉藻かる蜑(あま)にはあらねどわたつみの底ひもしらず入る心かな

返事侍らざりければ又かさねて遣はしける

みるもなくめもなき海の磯に出てかへる〴〵もうらみつるかな

あだに見え侍りける男に　　讀人しらず

こりずまの浦の白波たちいでてよるほどもなく歸るばかりか

○ふたがり　ふさがり。

○うちかへし云々　もう一度逢ひたいの意。

○みるもなくめもなき　海松もなく海布もないを、見ると目とに云ひかけたもの。
○かへる〴〵も云々　ふりかへりふりかへり浦を見たと云つて、返す返すも恨んだの意にかけたもの
○こりずまの　こりずに。併せて須磨の浦とつゞけたもの。
○よるほどもなく　寄ると間もなく。

相知りて侍りける人の近江の方へ罷りければ

關越えてあはづの森のあはずとも清水に見えし影をわするな

かへし

近けれど何かはしるしあふさかの關のほかぞと思ひたえなむ

つらくなりにける男のもとに今はとて裝束など返し遣はすとて　　平なかきが女

今はとて梢にかゝるうつせみのからを見むとは思はざりしを

かへし　　城巨城

忘らるゝ身をうつせみのからころも返すはつらき心なりけり

物いひける女のかゞみをかりてかへすとて　　讀人しらず

影にだに見えもやすると賴みつるかひなくこひをます鏡かな

男の物などいひつかはしける女の田舍の家にまかりてたゝきけれども聞きつけずやありけむ門もあけずなりにければ田のほとりにかへるの鳴きけるを聞きて

足引の山田のそほづうちわびて一人かへるの音をぞなきぬる

文遣はしける女の母のこひをし戀ひばといへりけるが年頃へにければ遣はしける

○關越えて　一二の句は三の句の序。

○影にだに云々　戀しい其許の面影にだけでも逢へるかと。

○山田のそほづ　案山子。そほづに濡れるといふ意を含めたもの。○一人かへるの云々　一人で歸ると、蛙の音とをかけたもの。

○こひをし戀ひば　古今集の戀の部一にある讀人しらずの「種しあれば岩にも松は生ひにけり戀ひをし戀ひばあはざらめやも」といふによつたもの。それで返歌もこの歌によつて詠んである。

種はあれどあふこと難き岩の上のまつにて年をふるはかひなし

女につかはしける　　贈太政大臣

ひたすらに厭ひ果てぬるものならば吉野の山にゆくへ知られじ

かへし　　伊勢

我が宿と頼む吉野に君しいらば同じかざしをさしこそはせめ

題しらず　　讀人しらず

くれなゐに袖をのみこそ染めてけれ君をうらむるなみだかゝりて

つれなく見えける人に遣はしける

紅になみだうつると聞きしをばなどいつはりとわれ思ひけむ

かへし

くれなゐに涙し濃くばみどりなる袖も紅葉と見えましものを

あひすみける人心にもあらで別れにけるが年月をへてもあひ見むと書きて侍りける文を見いでて遣はしける

いにしへの野中の清水みるからにさしぐむものは涙なりけり

思ふ事侍りて男の許に遣はしける

あま雲のはるゝ夜もなくふるものは袖のみ濡るゝ涙なりけり

○岩の上のまつにて　岩の上の松と、待つことばかりでこを通はせたもの。

○吉野の山に　吉野の山にわけ入つて。

○などいつはりと云々　今までどうして詐りと思つてゐたらう、今のわが身はまさしくそれであるが

○見えましものを　見えるだらうに。實はさう見えないが。

方ふたがるとて男の來ざりければ

あふことのかたふたがりて君こずばおもふ心のたがふばかりぞ

相語らひける人の久しう來ざりければ遣はしける

常磐にと頼めしことはまつ程の久しかるべき名にこそありけれ

題しらず

濃さまさる涙の色もかひぞなき見すべき人のこの世ならねば

女のもとにつかはしける　　伊勢

すみよしの岸にきよする沖つ波まなくかけても思ほゆるかな

かへし

住の江のめにちかからば岸にゐて波の數をもよむべきものを

つらかりける人の許に遣はしける　　贈太政大臣

戀ひて經むと思ふ心のわりなさは死にても知れよ忘れ形見に

かへし　　讀人しらず

もしもやとあひ見む事をたのまずはかくする程にまづぞけなまし

題しらす

逢ふとだにかたみに見ゆる夢ならば忘るゝ程もあらましものを

○あふことのかたふたがりて方ふたがりといふ詞を詠み込んだので、逢ふ事の出來ぬの意。なほ方ふたがりに對して次に方たがへを用ゐてある。

○まなくかけても　上三句はこの句の序。

波の數をも　波は立ち寄つて來るものであるから、男のたち寄る數をかぞへようと云ひよそへたもの。

○まづぞけなまし　まづ消えてしまふだらう。死んでしまふだらう。

○かたみに見ゆる云々　互に相見ることの出來るものならば。

○山下水にあらぬものから　山下水ではないのだが。
○つとめて　朝早く。
○言はぬを知るは　口にはあらはさないのを知つてゐるのは。
○衣かへしつゝ云々　衣をかへして寢れば戀しい人を夢に見るといふ事によつて詠んだもの。
○なげなるもの　ないやうな物、なほざりなもの、かりそめなもの
○おほしまに　以下三句は四句をいふための序。大島は備前にある

おとにのみ聲をきくかなあしびきの山下水にあらぬものから

秋霧の立ちたるつとめていとつらければ此の度ばかりなむいふべきといへりければ　　伊勢

秋とてや今はかぎりの立ちぬらむ思ひにあへぬものならなくに

心のうちに思ふ事やありけむ

見し夢の思ひ出らるゝよひごとに言はぬを知るは涙なりけり

題しらず　　讀人しらず

白露のおきてあひみむ事よりは衣かへしつゝ寐なむとぞ思ふ

人の許につかはしける

言の葉はなげなるものといひながら思はぬためは君もしるらむ

女のもとに遣はしける　　朝忠朝臣

白波のうち出づる濱の濱千鳥あとやたづぬるしるべなるらむ

女につかはしける　　大江朝綱朝臣

おほしまに水をはこびし早船のはやくも人にあひ見てしがな

伊勢なむ人に忘られて歎き侍ると聞きてつかはしける　　贈太政大臣

ひたぶるに思ひな侘びそふるさるゝ人の心はそれよ世のつね

かへし　　伊勢

世の常の人の心をまだ見ねばなにかこのたび消ぬべきものを

浄藏くらまの山へなむ入るといへりければ　　平中興が女

墨染のくらまのやまに入る人はたどる／＼も歸りきななむ

あひしりて侍りける人の稀にのみ見えければ　　伊勢

日をへても影にみゆるは玉蔓つらきながらも絶えぬなりけり

わざとにはあらず時々物いひ侍りける女程久しう問はず侍りければ　　讀人しらず

高砂のまつをみどりと見しことは下の紅葉を知らぬなりけり

かへし

時わかぬ松のみどりもかぎりなきおもひにはなほ色やもゆらむ

文かはすばかりにて年へ侍りける人に遣はしける

水鳥のはかなき跡に年をへて通ふばかりのえにこそ有りけれ

かへし

波の上にあとやはみゆる水鳥のうきてへぬらむ年はかずかは

せうそこ遣はしける女の許よりいな舟のといふ事を返事にいひて侍りけ

○たどる／＼も　鞍馬を暗に云ひかけて、探り／＼しての意を表はし併せて考へ／＼とかけたもの。

○わざと　わざ／＼。ことさらに

○高砂のまつを云々　常磐の意を表はして、いつまでもかはらぬ心と思つたのはといふ意。

○水鳥のはかなき跡　はかない水鳥の跡。はかない手紙。

○えに　緣。えにし。因果。

○いな舟のといふ事を云々　古今集の「最上川上ればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり。」をさしたもので、いやではないが今少しお待ち下さいといふ意。

れば頼みていひ渡りけるに猶あひ難きけしき侍りければしばしとありし
をいかなればかくはといへりける返事につかはしける

ながれよる瀬々の白波淺ければとまるいな舟かへるなるべし

かへし　三條右大臣

最上川ふかきにもあへずいな舟の心かろくもかへるなるかな

いと忍びて語らふ人のおろかなるさまに見えければ　讀人しらず

花薄(すゝき)ほにいづることもなきものをまだき吹きぬるあきの風かな

心ざしおろかに見えける人につかはしける　なかきが女

待たざりし秋はきぬれど見し人の心はよそになりもゆくかな

かへし　源是茂朝臣

君をおもふ心ながさは秋の夜にいづれまさると空にしらなむ

ある所にあふみといふ人をいとしのびて語らひ侍りけるを夜あけてかへ
りけるを人見てさゝやきければその女の許につかはしける　坂上つねかげ

鏡山あけてきつれば秋ぎりのけさや立つらむあふみてふ名は

あひしりて侍る女の人にあだ名たち侍りけるに遣はしける　平まれよの朝臣

枝もなく人にをらるゝ女郎花ねをだにのこせ植ゑしわがため

○ながれよる云々　自分に對する心が深くないからといふ意。

○おろかなるさま　おろそかなさま。うと／＼しい様子。

○ほにいづることもなきものを　忍び／＼に逢つて表面にあらはれることもないのに。

○まだき　もう、はやくも。

○いづれまさると　どちらがまさつてゐるかと。

○秋ぎり云々　飽くといふ名の秋霧が立つて間をへだてるだらう。

○あだ名　好色の名。すき／＼しい評判。

〔一〕徒らいね　徒宿と徒寢ねとを通はせたもの。

〔二〕音はしてまし　詞書のかれがた及び三の句に應じたもの。

〔三〕消えこそかへれ　命が絶えるやうな心持がする。

〔四〕くゆる　煙が立つ、もえる。

人の許にまかりて侍るに呼び入れねば簀子(すのこ)にふしあかしてつかはしける　藤原成國

秋の田のかりそめぶしもしてけるが徒(いたづ)らいねをなににつまし

平かねきがやう〳〵かれがたになりにければ遣はしける　中務

秋風の吹くにつけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし

年月をへて消息し侍りける人につかはしける　讀人しらず

君見ずていくよ經ぬらむ年つきのふるとともにもおつる涙か

女につかはしける

なか〳〵に思ひかけては唐衣身になれぬをぞうらむべらなる

かへし

うらむともかけてこそみめ唐衣身に馴れぬればふりぬとかきゝ

人につかはしける

歎けどもかひなかりけり世の中に何にくやしくおもひそめけむ

忘れがたになり侍りける男に遣はしける　承香殿中納言

こぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれくゆる思ひに

忘れ侍りにける女に遣はしける　讀人しらず

○かへる色　もとの色にもどる。

○もりもわびぬる　漏り侘びると守りわびるとを通はせたもの。

○ほのめきつれば　かすかに見たので。

○臥返り　ねがへり。

○あふみ　近江と逢ふ身とをかけたもの。

菊の花うつる心をおくしもにかへりぬべくもおもほゆるかな

かへし

今はとてうつりはてにし菊の花かへる色をばたれか見るべき

人の女にいと忍びて通ひ侍りけるにけしきを見て親のまもりければ五月長雨の頃遣はしける

ながめしてもりもわびぬる人めかないつか雲まのあらむとすらむ

まだあはず侍りける女の許に死ぬべしといへりければ返事にはや死ねかしといへりければ又遣はしける

おなじくば君とならびの池にこそ身を投げつとも人にきかせめ

女につかはしける

陽炎(かげろふ)のほのめきつれば夕暮のゆめかとのみぞ身をたどりつる

かへし

ほの見ても目馴れにけりと聞くからに臥返(ふしかへ)りこそしなまほしけれ

消息しばし遣はしけるを父母侍りて制し侍りければ逢ひ侍らで　源よしの朝臣

あふみてふかたの案内(しるべ)もえてしがなみるめなきことゆきて恨みむ

かへし　春澄善縄朝臣の女

（一）おきてわびしき　白露が置くと起きてわびしきとをかけたもの。

（一）人の心をしらつゆの　人の心を知らずの意を含めたもの。

（一）くゆる煙の立ち出でても　忍んでゐた自分の思ひを人に知られても

（一）こりずまの浦　こりないこと、須磨の浦とをかけたもの。

逢坂のせきとめらるゝ我なればあふみてふらむかたも知られず

女のもとに遣はしける　よしの朝臣

あしびきの山した水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

かへし　讀人しらず

木がくれてたぎつ山水いづれかは目にしもみゆる音にこそきけ

人の許より歸りて遣はしける　貫之

曉のなからましかば白つゆのおきてわびしきわかれせましや

かへし　讀人しらず

おきてゆく人の心をしらつゆのわれこそまづは思ひ消えぬれ

女の許に男かくしつゝよをやつくさむ高砂のといふことをいひ遣はしたりければ

高砂のまつといひつゝ年をへてかはらぬ色ときかばたのまむ

人のむすめのもとに忍びつゝ通ひ侍りけるを親聞きつけていといたくいひければかへりて遣はしける　貫之

風をいたみくゆる煙の立ち出でてもなほこりずまの浦ぞこひしき

はじめて女の許に遣はしける　讀人しらず

○君がねに云々　君の聲とくらぶの山の郭公の聲とをくらべる。
○いづれあだなる云々　うはきな聲はどちらがまさつて居るであらうか。

○菅の根に　菅の根のは、ながしにかけていふ枕詞。こゝではこの枕詞を長いといふ意に用ゐてある。
○玉の緒　みじかしにかけていふ枕詞。前の語に對してこれは短いといふ意。

○はかられて　たまされて。

いはねども我がかぎりなき心をば雲居にとほき人も知らなむ

題しらず

君がねにくらぶのやまの郭公いづれあだなるこゑまさるらむ

消息かよはしける女おろかなるさまに見え侍りければ

戀ひてぬる夢路に通ふたましひのなるゝかひなくうとき君かな

女につかはしける

篝火にあらぬおもひのいかなれば涙のかはとうきて燃ゆらむ

人のもとにまかりて朝につかはしける

待ち暮す日は菅の根に思ほえて逢ふ夜しもなど玉の緒ならむ

大江千里まかり通ひける女を思ひかれがたになりて遠き所にまかりにたりといはせて久しうまからずなりにけりこの女思ひわびてねたる夜の夢にまうできたりと見えければうたがひにつかはしける

はかなかる夢のしるしにはかられて現にまくる身とやなりなむ

かくて遣はしたりければ千里見侍りてなほざりに誠にをとゝひなむ歸りまうでこしかど心地のなやましくてありつるとばかりいひ送りて侍りければかさねて遣はしける

おもひ寐の夢といひてもやみなましなか〳〵何にありと知りけむ

大和のかみに侍りける時かの國のすけ藤原清秀が女をむかへむと契りておほやけごとによりてあからさまに京にのぼりたりける程にこのむすめ眞延法師に迎へられてまかりにければ國に歸りてたづねてつかはしける

忠房朝臣

いつしかの音になき歸りこしかども野邊の淺茅は色づきにけり

せうそこ遣はしける女の返事にまめやかにしもあらじなどいひて侍りければ

引きまゆのかく二籠(ふたごも)りせまほしみくはこきたれてなくをみせばや

ある人のむすめあまたありけるを姉よりはじめていひ侍りけれどきかざりければ三にあたる女に遣はしける

讀人しらず

關山のみねの杉むら過ぎゆけどあふみはなほぞはるけかりける

朝忠朝臣久しう音もせで文おこせて侍りければ

思ひ出でておとづれしける山彦のこたへにこりぬ心なになり

いと忍びてまかりありきて

まどろまぬ物からうたてしかすがに現にもあらぬ心地のみする

○おほやけごと　朝廷の事。公用
○あからさまに　にはかに。急に
○野邊の淺茅　女をさしていふ。
○まめやか　忠實。眞實。誠實。
○引きまゆ　一匹の蠶で作つたまゆ。
○二籠り　一つの繭に二匹の蠶のこもつたもの。
○せまほしみ　したさに。
○こきたれて　垂れさがつて。搔き垂れて。
○姉よりはじめて　姉を最初に。

かへし

うつゝにもあらぬ心はゆめなれや見てもはかなきものを思へば

うづまさわたりに大輔が侍りけるに遣はしける　　小野道風朝臣

かぎりなく思ひ入る日のもとにのみ西の山邊をながめやるかな

女五のみこに　　忠房朝臣

君が名のたつに咎（とが）なき身なりせばおほよそ人になしてみましや

かへし　　女五のみこ

絶えぬると見ればあひぬる白雲のいとおほよそに思はずもがな

みくしげ殿にはじめて逢ひて遣はしける　　敦忠朝臣

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

道風忍びてまうできけるに親聞きつけてせいしければ遣はしける　　大輔

いとかくてやみぬるよりは稻妻の光のまにもきみを見てしが

大輔が許にまうできたりけるに侍らざりければ歸りて又のあしたに遣はしける　　朝忠朝臣

いたづらに立ちかへりにし白波のなごりに袖のひる時もなし

○おほよそ人　世間一般の人。路傍の人。

○いとおほよそに云々　そのやうによそ／＼しく思はないでいたゞきたい。

○そへに　そいやうに。

○せいしければ　禁じ止めたので

○なごり　海の波が風の止んだ後にもまだ靜まらずにあること。轉じて別れた後に心殘りして忘れられぬ意。

○みつとはなしに　難波の縁で三津とかけ、併せて見たといふことゝもなくの意を含めたもの。○よの短くて　夜が短いと、蘆の節が短いとを通はせたもの。

○こゝなるみをも　水脈もと身をもとをかけたもの。○いひ出づる　いひとは遠隔の地から水を引くために作つたもの。かけひと併せて云ひ出すとかけたもの。

かへし　大輔

なにかは袖のぬるらむ白波のなごりありげも見えぬこゝろを

好古朝臣に更にあはじと誓言(ちかごと)をして又のあしたにつかはしける　藏内侍

誓ひてもなほ思ふにはまけにけり誰がためをしき命ならねば

忍びてまかりけれどあはざりければ　道風

難波女(なにはめ)にみつとはなしに蘆のねのよの短くて明くるわびしさ

物いはむとてまかりたりけれどさきだちてむねもちが侍りければはや歸りねといひ出し侍りければ

かへるべきかたもおぼえずなみだ川いづれかわたる淺瀬なるらむ

かへし　大輔

涙川いかなる瀬より歸りけむこゝなるみをもあやしかりしを

大輔がもとに遣はしける　敦忠朝臣

池水のいひ出づる事のかたければみごもりながら年ぞへにける

後撰和歌集　卷第十三

戀歌五

題しらず　　業平朝臣

伊勢の海に遊ぶ蜑（あま）ともなりにしが波かき分けてみるめ潛（かづ）かむ

かへし　　伊勢

おぼろけの蜑やは潛（かづ）く伊勢の海の波たかき浦におふるみるめは

つれなく見え侍りける人に　　讀人しらず

つらしとやいひはててまし白露の人に心はおかじとおもふを

題しらず　　小町が姉

ながらへば人の心もみるべきに露のいのちぞかなしかりける

ひとりぬる時は待たるゝ鳥の音もまれにあふ夜はわびしかりけり

女の恨みおこせて侍りければ遣はしける　　深養父

空蟬のむなしきからになるまでも忘れむと思ふ我ならなくに

○なりにしが　なりたいものだ。

○おぼろけの　なみ／＼の。普通の。
○伊勢の海の　作者の名を詠み込んだもの。
○みるめ　海松と見る目とをかけたもの。

○鳥の音　曉を告げる鷄の音。

あだなる男をあひしりて心ざしはありと見えながら猶疑はしく覺えければ遣はしける　　讀人しらず

いつまでのはかなき人の言の葉か心のあきのかぜを待つらむ

題しらず

うたゝねの夢ばかりなるあふ事を秋の夜すがら思ひつるかな

女の許にまかりたりける夜門をさしてあけざりければまかり歸りて朝に遣はしける　　兼輔朝臣

秋の夜の草のとざしの侘しきは明くれどあけぬものにぞありける

かへし　　讀人しらず

いふからにつらさぞ增る秋の夜の草のとざしにさはるべしやは

桂のみこにすみ初めけるあひだに彼のみこあひ思はぬけしきなりければ　　さだかずのみこ

人しれず物思ふころの我が袖はあきの草葉におとらざりけり

忍びたる人につかはしける　　贈太政大臣

しづはたに思ひ亂れて秋の夜の明くるも知らず歎きつるかな

消息かよはしけれどもまだあはざりける男をこれかれあひにけりといひ

○あだなる男　うはきな男。

○明くれどあけぬ　夜が明けても　とざしをあけぬ。

○つらさぞ增る　其許のつれなさが一段こわかる。

○しづはたに　亂れにかけていふ枕詞。

○あらがはざ　爭はない。

○逢坂にきて　逢ひに來て。

○人笑へ　人笑はれ。人に笑はれる。

○鬼のかた　鬼の繪。

騒ぐをあらがはざなりと恨みければ　　讀人しらず

蓮葉(はちすば)のうへはつれなき裏にこそ物あらがひはつくといふなれ

男のつらうなりゆく頃雨の降りければ遣はしける

降りやめば跡だに見えぬ泡沫(うたかた)の消えてはかなき世をたのむかな

女の許にまかりてえあはで歸りてつかはしける

あはでのみあまたの夜をも歸るかな人めのしげき逢坂にきて

女に物いふ男二人ありけりひとりに返事すと聞きて今一人が遣はしける

靡く方ありけるものをなよ竹のよにへぬものと思ひけるかな

女の心かはりぬべきを聞きてつかはしける

ねになけば人笑へなり呉竹のよにへぬをだに勝ちぬと思はむ

文遣はしける女の親の伊勢へまかりければ共にまかりけるに遣はしける

伊勢の蜑と君しなりなば同じくば戀しきほどにみるめからせよ

一條がもとにいとなむ戀しきといひにやりたりければ鬼のかたをかきて

やるとて　　一條

戀しくばかげをだに見て慰めよ我がうちとけてしのぶ顔なり

かへし　　伊勢

影みればいとゞ心ぞまどはるゝ近からぬけのうときなりけり

人のむすめに忍びて通ひ侍りけるにつらげに見え侍りければ消息ありける返事に

讀人しらず

人毎のうきをも知らずありかせし昔ながらの我が身ともがな

見なれたる女に物いはむとてまかりたりけれど聲はしながら隱れければ遣はしける

郭公なつきそめにしかひもなく聲をよそにも聞きわたるかな

人の許にはじめてまかりてつとめて遣はしける

常よりもおきうかりける曉は露さへかゝるものにぞ有りける

忍びてまできける人の霜のいたくふりける夜罷らでつとめて遣はしける

置く霜のあかつきおきをおもはずば君が夜殿に夜がれせましや

かへし

霜おかぬ春より後のながめにもいつかは君がよがれせざりし

心にもあらで久しく訪はざりける人の許に遣はしける

源英明朝臣

伊勢の海の蜑のまてがた暇なみ長らへにける身をぞうらむる

えがたう侍りける女の家の前よりまかりけるを見ていづこへいくぞとい

〇近からぬけの云々　けうとしの意。おそろしい。うとましい。

〇なつきそめにし　馴れ親しみそめた。心をよせそめた。

〇つとめて　翌朝早く。

〇あかつきおき　曉置きに曉起きをかけたもの。

〇夜がれ　夜の通ひが絶える。

〇心にもあらで　本心からではなく。

〇蜑のまてがた　語義には諸說があるが詳かでない。意は暇なみを云ふための序に用ゐたもの。

○あふ事のかた野へ　逢ふ事が難いと、方の邊とをかけたもの。

○いはぬなければ　云はぬ人はないから。誰でも皆いふから。

○消えでありつる　死ないでゐた。

○露のやどり　露のとまる所。少しのやどり。

ひ出して侍りければ　　藤原爲世

あふ事をかた野へとてぞ我はゆく身を同じ名に思ひなしつゝ

題しらず　　讀人しらず

君があたり雲居に見つゝ宮路山うち越えゆかむ道もしらなく

男の返事につかはしける　　俊子

思ふてふ言の葉いかになつかしな後うきものとおもはずもがな

題しらず　　兼茂朝臣女

思ふてふことこそうけれ呉竹のよにふる人のいはぬなければ

讀人しらず

思はむとわれをたのめし言の葉はわすれ草とぞ今はなるらし

男の病にわづらひて罷らで久しくありて遣はしける

今までも消えでありつる露の身はおくべき宿のあればなりけり

かへし

言の葉もみな霜枯れになりゆけば露のやどりもあらじとぞ思ふ

恨みおこせて侍りける人の返事に

忘れなむといひしことにもあらなくに今はかぎりと物おもふかは

題しらず

現にはふせど寐られずおきかへり昨日の夢をいつかわすれむ

女につかはしける

さゝら波まなく立つめる浦をこそよに淺しとも見つゝわすれめ

西四條の齋宮(さいぐう)まだみこにものし給ひし時心ざしありて思ふ事はべりける間に齋宮に定まり給ひにければそのあくるあしたに榊の枝につけてさしおかせ侍りける　　敦忠朝臣

伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも今はなにてふかひかあるべき

朝頼朝臣の年頃せうそこ通はし侍りける女の許より用なし今は思ひ忘れねとばかり申して久しうなりにければこと女にいひつきて消息もせずなりにければ　　本院のくら

忘れねと言ひしに叶ふ君なれど訪はぬはつらきものにぞありける

題しらず　　讀人しらず

春霞はかなく立ちてわかるとも風よりほかにたれか訪ふべき

かへし　　伊勢

目に見えぬかぜに心をたぐへつゝやらば霞のわかれこそせめ

〇さゝら波　さゞ波。

〇なにてふかひか有るべき　何の貝もない　何の甲斐もない。

〇忘れね　忘れて下さい。

〇かぜに心をたぐへつゝ　心を風とそへて。

土佐が許よりせうそこ侍りける返事につかはしける　貞元親王

深緑そめけむ松のえにしあらばうすき袖にもなみはよせてむ

かへし　土佐

松山のするゑこす波のえにしあらば君の袖にはあともとまらじ

女のもとより定めなき心ありなど申したりければ　贈太政大臣

深く思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる

男の心かはるけしきありければたゞなりける時この男の心ざせりける扇にかきつけて侍りける　讀人しらず

人をのみうらむるよりは心からこれ忌まざりし罪とおもはむ

忍びたる女の許に消息つかはしたりければ

あしびきの山下しげくゆく水のながれてかくしとはば賴まむ

男の忘れ侍りにければ　伊勢

わびはつる時さへもののかなしきはいづこをしのぶ心なるらむ

親のまもりける女をいなともせとも言ひはなてと申しければ　讀人しらず

いなせともいひ放たれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり

男のいかにぞえまうでこぬことといひて侍りければ

○いなともせとも　否とも諾とも　いやともおうとも。

來ずやあらむ來やせむとのみ河岸のまつの心を思ひやらなむ

とまれと思ふ男の出でてまかりければ

しひてゆく駒の足をるはしをだになど我が宿に渡さざりけむ

ものいひ侍りける人の久しう訪(おとづ)れざりけるからうじてまうで來たりける
になどか久しうといへりければ

年をへて生けるかひなき我が身をば何かは人にありとしられむ

いと忍びてまできたりける男をせいしける人ありけり罵りければ歸りま
かりて遣はしける

あさりする時ぞ侘しき人知れずなにはの浦にすまふ我が身は

公頼朝臣今まかりける女の許にのみまかりければ　寛湛法師母

ながめつゝ人待つよひの呼子鳥いづ方へとか行きかへるらむ

忍びたる人に　讀人しらず

人ごとのたのみがたさは難波なる蘆のうら葉のうらみつべしな

忍びて通ひ侍りける人今歸りてなどたのめ置きておほやけの使に伊勢の
國にまかりて歸りまうできて後久しうとはず侍りければ　少將内侍

人はかる心のくまはきたなくて淸きなぎさをいかで過ぎけむ

〇思ひやらなむ　思ひやつていただきたい。

〇駒の足をる　駒がつまづく。

〇あさり　漁夫のするわざ。

〇人ごと　人の言葉。

〇難波なる蘆のうら葉の　五の句の序。

〇今歸りて　すぐに歸つて來る。

〇人はかる　人をだます。

〇淸きなぎさ　伊勢の海の渚をいふ。

かへし　兼輔朝臣

たがためにわれが命をながはまの浦に宿りをしつゝかはこし

女の許につかはしける　讀人しらず

せきもあへず淵にぞ迷ふ涙川わたるてふ瀬を知るよしもがな

かへし

淵ながら人かよはさじなみだがは渡らばあさき瀬もこそはみれ

常にまうできて物などいふ人の今はなまうでこそ人もうたていふなりと

いひ出して侍りければ

きてかへる名をのみぞたつから衣したゆふひもの心とけねば

左大臣河原にいであひて侍りければ　内侍平子

たえぬともなに思ひけむ涙川ながれあふ瀬もありけるものを

大輔につかはしける　左大臣

いまははやみやまを出でて郭公けぢかき聲をわれにきかせよ

かへし

人はいさみやまがくれの郭公ならはぬさとは住みうかるべし

左大臣に遣はしける　中務

○なまうでこそ　來るな。

○したゆふひもの云々　心もとけず下紐も解かないので。

○けぢかき聲　近く鳴く聲　親しい詞。

○ならはぬさと　住みなれぬ里。知らぬ土地。

有りしだに憂かりし物をあはずとて何處(いづこ)にそふるつらさなるらむ

右近につかはしける　　左大臣

思ひわび君がつらきに立ちよらば雨も人目ももらさざらなむ

高明朝臣に笛をおくるとて　　讀人しらず

笛竹のもとの古ねは變るとも己がよゝにはならずもあらなむ

こと女に物いふと聞きてもとのめの内侍(ないし)のふすべ侍りければ　　好古朝臣

めも見えず涙のあめのしぐるれば身の濡衣(ぬれぎぬ)はひるよしもなし

かへし　　中將内侍

にくからぬ人のきせけむ濡衣はおもひにあへず今かわきなむ

題しらず　　小野道風

おほかたは瀬とだにかけじ天の川ふかき心をふちとたのまむ

かへし　　讀人しらず

淵とてもたのみやはする天の川としにひとたび渡るてふ瀬を

みくしげ殿の別當につかはしける　　清蔭朝臣

身のならむことをも知らず漕ぐ船は波の心もつゝまざりけり

事いできて後に京極御息所につかはしける　　元良親王

○有りしだに　以前でさへも。

○雨も人目も云々　雨も漏らさず人にも見られないであつてほしい

○ふすべ　ねたむ。悋氣する。怨ずる。

○おもひにあへず　思ひといふ火に燃られて濡れおほせず。

○今かわきなむ　すぐに乾るだらう。

かへし

露ばかりぬるらむ袖のかわかぬは君がおもひの程やすくなき

女の許にまかりたるに立ちながらかへしたれば道よりつかはしける

常よりもまどふ／＼ぞ歸りつるあふみちもなき宿に行きつゝ

雨にもさはらずまできてそら物語などしける男の門よりわたるとて雨のいたく降ればなむまかり過ぎぬるといひければ

濡れつゝも來ると見えしは夏引の手引にたえぬ絲にやありけむ

人に忘られて侍りける時

數ならぬ身は浮草と成りななむつれなき人によるべ知られじ

思ひ忘れにける人の許にまかりて

ゆふやみは道もみえねど故郷はもとこし駒にまかせてぞくる

かへし

駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな

朝綱朝臣の女に文など遣はしけるをこと女にいひつきて久しうなりて秋とぶらひて侍りければ

いづかたに言傳(ことづて)やりて鴈がねのあふことまれに今はなるらむ

○おもひの程　思ひの程度。

○そら物語　いつはりの物語。
○門よりわたる　門前を通る。

○來るさ見えしは　絲の縁で繰るの意を含ませたもの。

○もとこし駒　以前に乘つて來た馬。

○ありとだに　無事であるといふだけは。

○もる人　守る人と漏る人とをかけたもの。

○久米路にわたす岩橋　役小角が大和の葛城山から金峯山にかけた橋といふ。なかを云ふための序。

○くる人もなき　かづらの縁から繰るの意を含めて見る。

○立ち出て　とりたてて、とりわけて。

男のかれはてぬにこと男をあひしりて侍りけるにもとの男の東へまかりけるを聞きて遣はしける

ありとだに聞くべきものを逢坂の關のあなたぞはるけかりける

かへし

關守のあらたまるてふ逢坂のゆふつけどりはなきつゝぞゆく

又女のつかはしける

行きかへりきてもきかなむ逢坂の關にかはれる人もありやと

かへし

もる人のありとは聞けどあふ坂のせきもとゞめぬわがなみだかな

かれにける男の思ひ出でてまできて物などいひて歸りて

葛城や久米路にわたす岩橋のなか〳〵にてもかへりぬるかな

かへし

中たえてくる人もなきかづらきのくめぢの橋は今もあやふし

白ききぬども著たる女どものあまた月あかきに侍りけるを見てあしたに一人がもとにつかはしける　藤原有好

白雲のみなひとむらに見えしかど立ち出て君を思ひそめてき

女の許に遣はしける　　讀人しらず

外(よそ)なれど心ばかりはかけたるをなどかおもひに乾かざるらむ

題しらず

我が戀の消ゆるまもなく苦しきは逢はぬ嘆きやもえ渡るらむ

かへし

消えずのみ燃ゆる思ひは遠けれど身も焦れぬるものにぞ有りける

又をとこ

上にのみおろかに燃ゆる蚊遣火(かやりび)のよにもそこには思ひ焦れじ

又かへし

かはとのみ渡るをみるになぐさまで苦しきことぞいや増りける

又をとこ

水増る心地のみしてわがために嬉しき瀬をば見せじとやする

後撰和歌集　卷第十四

戀歌　六

人のもとにつかはしける　　　　　　　　讀人しらず

逢ふ事をよどにありてふみづのもりつらしと君を見つる頃かな

かへし

みづの森もるこのごろのながめにはうらみもあへず淀の川波

みづからまできて夜もすがら物いひ侍りけるに程もなくあけ侍りければ

まかりかへりて

うきよとは思ふものから天のとの明くるはつらきものにぞありける

女の許に遣はしける

恨むれど戀ふれど君がよと共にしらず顔にてつれなかるらむ

かへし

恨むとも戀ふともいかゞ雲居より遙けき人をそらに知るべき

いひわづらひて止みにける人に久しうありて又遣はしける

○よどにありてふみづのもり　みづのもりは水守。田をつくる人が堤樋をわたして淀川の水を受け、その加減を見るものを云ふ。

○ながめ　あるに對して長雨と云ひ、詠歎の意を通はせたもの。

○うきよ　憂き夜。

しづ機にへつるほどなり白絲のたえぬる身とは思はざらなむ

かへし

へつるよりうすくなりにし賤機の絲は絶えでもかひやなからむ

男のまできてすき事をのみしければ人やいかゞ見るらむとて

來ることは常ならずとも玉蔓たのみは絶えじとおもほゆるかな

かへし

玉蔓たのめくる日の數はあれどたえ〴〵にてはかひなかりけり

男の久しう音づれざりければ

いにしへの心はなくや成りにけむ頼めしことのたえて年ふる

かへし

いにしへも今も心のなければぞうきをもしらで年をのみふる

男のたゞなりける折には常にまできけるが物いひて後は門よりわたりけれどまで來ざりければ

絶えたりし昔だに見しうきはしを今はわたると音にのみ聞く

いひわびて二年ばかりも音もせずなりにける男の五月ばかりにまできて年頃久しうありつるなどいひてまかりにけるに

○しづ機に　亂るにかけていふ枕詞。こゝでは枕詞そのもので亂れるの意をあらはす。

○すき事　好色のしわざ。

○たゞなりける折　逢はなかつた時。深い關係のなかつた時。

忘られてとしふるさとの郭公なににひと聲なきて行くらむ

題しらず

とふやとて杉なき宿に來にたれど戀しきことぞしるべなりける

ものいひわびて女のもとにいひやりける

露の命いつとも知らぬ世の中になどかつらしと思ひおかるゝ

女のほかに侍りけるをそこにと敎ふる人も侍らざりければ心づからとぶらひ侍りける返事に遣はしける

狩人の尋ぬる鹿はいなみ野にあはでのみこそあらまほしけれ

忍びたる女の許よりなどか音もせぬと申したりければ　　右大臣

小山田の水ならなくにかくばかり流れそめてはたえむものかは

男のまうでこでありくて雨のふる夜おほがさをこひに遣はしたりければ　　伊衡朝臣の女いまき

月にだに待つほど多く過ぎぬれば雨もよにこじと思ほゆるかな

はじめて人に遣はしける　　讀人しらず

思ひつゝまだいひそめぬわが戀をおなじ心にしらせてしがな

いひわづらひてやみにけるを又思ひ出でてとぶらひ侍りければ定めなき

○としふるさと　年を經た古里。

○ありくて　そのまゝにあつて

○おほがさ　柄でさしかざすやうにした大きな笠。

○いひわづらひて　云ひ出しかねて。

心かなといひて飛鳥川の心をいひつかはし侍りければ

飛鳥川こゝろのうちに流るれば底のしがらみいつかよどまむ　　朝頼朝臣

思ひかけたる女の許に

富士のねをよそにぞ聞きしいまはわが思ひにもゆる煙なりけり

かへし　　讀人しらず

驗(しるし)なきおもひとぞきく富士の嶺もかごとばかりの煙なるらむ

いひかはしける男の親いといたうせいすと聞きて女のいひつかはしける

いひさしてとゞめらるなる池水の波いづかたに思ひよるらむ

同じ所に侍りける人の思ふ心侍りけれどいはで忍びけるをいかなる折にかありけむあたりに書きて落せりける

知られじな我がひとしれぬ心もて君をおもひの中にもゆとは

心ざしをばあはれと思へど人めになむつゝむといひて侍りければ

あふばかりなくてのみふるわが戀を人めにかくることの侘しさ

題しらず

夏衣身にはなるともわがためにうすき心はかけずもあらなむ

いかにしてことかたらはむ郭公なげきの下(した)になけばかひなし

○飛鳥川の心　古今集卷十八の「世の中はなにか常なる」の歌をさしたものであらう。

○よそにぞ聞きし　よそ事に聞いた。今まで自分には關係のない事として聞いてゐた。

○かごとばかりの　言譯だけの。わづかばかりの。

○君をおもひの中に云々　君を思ふ思ひといふ火の中に燃えてゐるとは。

○あふばかりなくて　逢ふといふ程のこともなくて。

○身にはなるとも　身には馴れても。

○ことかたらはむ　話をしよう。

思ひつゝ經にける年をしるべにてなれぬるものは心なりけり

文などつかはしける女のこと男につき侍りけるに遣はしける　源　整

我ならぬ人すみの江の岸に出て難波のかたをうらみつるかな

整（とゝのふ）がかれがたになり侍りければとゞめ置きたる笛をつかはすとて　讀人しらず

濁り行く水には影の見えばこそあしまよふえを止めても見め

菅原のおほいまうち君の家に侍りける女に通ひ侍りける男中たえて又とひて侍りければ

すがはらや伏見の里のあれしより通ひし人のあとも絶えにき

女の男を厭ひてさすがにいかゞおぼえけむ言へりける

ちはやぶる神にもあらぬ我がなかの雲居遙かになりもゆくかな

かへし

ちはやぶる神にも何かたとふらむおのれ雲居に人をなしつゝ

女三のみこに　敦慶親王

うきしづみ淵瀬に騷ぐ鳰鳥（にほどり）はそこものどかに有らじとぞ思ふ

甲斐に人の物いふと聞きて　藤原守文

（一）おのれ雲居に人をなしつゝ　自分が人を遠ざけ隔てて置いて。

松山になみたかき音ぞきこゆなる我よりこゆる人はあらじを

男の許に雨ふる夜かさをやりて呼びけれど來ざりければ　讀人しらず

さしてこと思ひしものを三笠山かひなく雨のもりにけるかな

かへし

もるめのみ數多みゆれば三笠山しる〳〵いかゞさして行くべき

女の許よりいといたくな思ひわびそと賴めおこせて侍りければ

なぐさむる言の葉にだにかゝらずはいまも消ぬべき露の命を

元慶親王のみそかにすみ侍りける頃今來むとたのめて來ずなりにければ　兵衞

人知れずまつにねられぬ有明の月にさへこそあざむかれけれ

忍びて住み侍りける人の許よりかゝるけしき人に見すなといへりければ　元方

龍田川たちなば君が名ををしみいはせの森のいはじとぞ思ふ

宇多院に侍りける人に消息遣はしける返事も侍らざりければ　讀人しらず

うだの野はみゝなしやまか呼子鳥よぶ聲にさへこたへざるらむ

かへし　宇多院の女五のみこ

○さしてこ　さして來よ。

○もるめ　守る目と漏る目とをかけたもの。

○君が名ををしみ　君の名が惜しいので。

○みゝなしやまか　耳梨山。大和三山の一。山名を耳がないとかけたもの。

○さへは出づらむ　外に出るのだらうか。

○こりともこりぬ　み山木のこりといふを受けて伐ると續け、併せて此の上なくこりたといふ意を含めたもの。

みゝなしの山ならずとも呼子鳥なにかはきかむ時ならぬ音を

つれなく侍りける人に　　忠岑

戀ひわびて死ぬてふ事はまだなきに世の例にもなりぬべきかな

立ちよりけるに女にげて入りければつかはしける　　讀人しらず

影みればおくへ入りける君によりなどか涙のとへは出づらむ

逢ひにける女の又あはざりければ

知らざりし時だにこえしあふ坂をなど今さらに我まどふらむ

女の許にまかりそめてあしたに　　藤原蔭基

あかずして枕のうへにわかれにし夢路を又もたづねてしがな

男のとはずなりにければ　　讀人しらず

音もせずなりも行くかな鈴鹿山こゆてふ名のみたかく立てつゝ

かへし

越えぬてふ名をな恨みそ鈴鹿山いとゞま近くならむと思ふを

女に物いはむとて來たりけれどこと人に物いひければ歸りて

かへし

我が爲にかつはつらしとみ山木のこりともこりぬかかる戀せじ

○あふご　逢ふ期。逢ふ時。

○戀しきよりは　遠く隔ててゐて戀しく思ふよりも。

○心づくしに　憂へに。心配に。併せて筑紫に云ひかけたもの。

○こゆるぎの　越えるといふに磯の名をかけたもの。

○忘草なにをか種と云々　古今集卷十五、素性法師の歌で、下の句は、「つれなき人の心なりけり」とある。

あふごなき身とはしる〳〵戀すとて嘆きこりつむ人はよきかは

人につかはしける　　戒仙法師

朝ごとに露はおけども人こふるわが言の葉はいろもかはらず

來て物いひける人のおほかたむつまじかりけれど近うはえあはずして　　讀人しらず

ま近くてつらきを見るはうけれども憂きは物かは戀しきよりは

女の許につかはしける　　藤原さねたゞ

筑紫なるおもひそめがは渡りなば水やまさらむ淀むときなく

かへし　　讀人しらず

わたりてはあだになるてふ染川の心づくしに成りもこそすれ

男のもとより花盛りに來むといひて來ざりければ

花ざかり過ぐし人はつらけれど言の葉をさへかくしやはせむ

をとこの久しうとはざりければ　　右近

とふ事をまつに月日はこゆるぎの磯にや出でて今はうらみむ

あひしりて侍りける人の許に久しうまからざりければ忘草なにをか種と思ひしはといふことをいひ遣はしければ　　讀人しらず

忘草名をもゆゝしみかりにても生ふてふ宿は行きてだに見じ

かへし

憂きことのしげきやどには忘草植ゑてだに見しあきぞ佗しき

女ともろともに侍りて

數しらぬおもひは君にあるものをおきどころなき心地こそすれ

かへし

おき所なき思ひとし聞きつればわれにいくらもあらじとぞ思ふ

元長親王に夏のさうぞくしておくるとて添へたりける　南院式部卿のみこの女

わがたちてきるこそうけれ夏衣おほかたとのみ見べき薄さを

久しうとはざりける人の思ひ出て今宵までこむ門さきであひまてと申してまで來ざりければ　讀人しらず

八重葎さしてし門をいまさらに何にくやしくあけて待ちけむ

人をいひわづらひてこと人にあひ侍りて後いかゞありけむはじめの人に思ひかへりて程へにければ文はやらずして扇に高砂のかた書きたるにつけて遣はしける　源庶明朝臣

さを鹿のつまなきこひを高砂のをのへの小松ききもいれなむ

○名をもゆゝしみ　名だけでもいやさに。

○われにいくらも　私に對する思ひはいくらもないだらうと思ひます。

○さしてし門　閉した門。

かへし　　　　読人しらず

さを鹿の聲高砂にきこえしは妻なきときの音にこそありけれ

思ふ人にえあひ侍らで忘られにければ

せきもあへず涙の川の瀬を早みかからむものと思ひやはせし

題しらず

瀬を早みたえず流るゝ水よりもたえせぬものは戀にぞありける

こふれども逢ふよなき身は忘草夢路にさへやおひしげるらむ

世の中の憂きはなべてもなかりけり頼むかぎりぞ恨みられける

頼めたる人に

夕されば思ひぞしげきまつ人のこむやこじやのさだめなければ

女につかはしける　　　　源よしの朝臣

厭はれて歸りこしぢの白山はいらぬに惑ふものにぞ有りける

題しらず　　　　読人しらず

人なみにあらぬ我が身は難波なる蘆のねのみぞ下にながるゝ

白雲のゆくべき山はさだまらずおもふかたにも風はよせなむ

世の中になほありあけのつきなくて闇に惑ふをとはぬつらしな

○せきもあへず　せきとめおはせず。

○逢ふよ　逢ふ時。よは男女のなからひをいふ。

○こむやこじや　來るだらうか來ないだらうか。

○歸りこしぢの　歸つて來た越路の。

○難波なる云々　ねをいふための序。音の意味。

○つらしな　あゝ辛いことである。

さだまらぬ心ありと女のいひたりければつかはしける　　贈太政大臣

飛鳥川せきてとゞむるものならば淵瀬になると何かいはれむ

久しうまかり通はずなりにければ十月ばかりに雪の少し降りたるあした
いひ侍りける　　右近

身をつめば哀れとぞ思ふ初雪のふりぬることもたれにいはまし

源正明朝臣十月ばかりに常夏を折りて送りて侍りければ　　讀人しらず

冬なれど君が垣ほに咲きぬればむべとこなつに戀しかりけり

女の恨むる事ありて親の許にまかり渡りて侍りけるに雪の深く降りて侍
りければあしたに女のむかへに車遣はしける消息にくはへて遣はしける　　兼輔朝臣

白雪のけさは積れるおもひかなあはでふる夜の程もへなくに

かへし　　讀人しらず

白雪のつもるおもひも賴まれず春よりのちはあらじと思へば

心ざし侍る女みやづかへし侍りければあふ事難く侍りけるを雪のふるに
つかはしける

我がこひし君があたりを離れねばふる白雪もそらに消ゆらむ

○ふりぬる　初雪が降つたと、身が古くなつて年寄つたとを通はせたもの。

○むべとこなつに　常夏に常にといふ意をかけたもの。

○ふる夜　雪の降る夜と、經る夜とを通はせたもの。

○我がこひし　我が戀。しは意を強める助詞。

かへし

山がくれ消えせぬ雪の侘しきは君まつの葉にかゝりてぞふる

物いひ侍りける女に年のはてのころほひ遣はしける　藤原ときふる

あらたまの年は今日あすこえぬべし逢坂山をわれやおくれむ

○山がくれ消えせぬ雪　女自身を喩へたもの。
○君まつの葉云々　君を待つといふことをたのみにして日を暮すことである。

後撰和歌集　巻第十五

雑歌一

仁和の帝嵯峨の御時の例にて芹川に行幸し給ひける日　　在原行平朝臣

嵯峨の山みゆきたえにし芹川のちよのふるみち跡はありけり

同じ日鷹飼にてかりぎぬに鶴のかたをぬひて書きつけたりける

翁さびひとなとがめそかり衣今日ばかりとぞたづもなくなる

行幸の又の日なむ致仕の表奉りける

紀友則まだつかさ賜はらざりける時事のついで侍りて年はいくらばかりになりぬと問ひ侍りければ四十餘りなむなりぬると申しければ　　贈太政大臣

今までになどかは花の咲かずしてよそとせあまり年きりはする　　友則

かへし

はるばるの數は忘れずありながら花さかぬ木を何に植ゑけむ

外吏にしばしばまかりありきて殿上おりて侍りける時兼輔朝臣の許に送り侍りける　　平なかき

○芹川　山城國紀伊郡にある。
○みゆきたえにし　行幸の絶えたといふにみ雪をかけたもの。これに對して千代の古道に降るをかけて應じてある。
○翁さび　老人らしいこと。
○つかさ　官職。
○年きり　樹木の實を結ぶことの少ない年。轉じて人の運のつたないのに喩へたもの。
○はるばるの數　春々の數、年數の意。併せて多くの數の意を含めたもの。
○外吏　外任の官吏。受領。國司

よとともに峯へ麓へおりのぼり行く雲の身は我にぞありける

まだ后になり給はざりける時かたはらの女御たちそねみ給ふけしきなりけるとき帝御ざうしに忍びて立ちより給へりけるに御對面はなくて奉り給ひける　　嵯峨后

こと繁ししばしはたてれ宵のまにおくらむ露は出でてはらはむ

家に行平朝臣まうで來たりけるに月の面白かりける夜酒などたうべてまかりたたむとしけるほどに　　河原左大臣

照る月を正木のつなによりかけてあかず別るゝ人をつながむ

かへし　　行平朝臣

かぎりなき思ひの綱のなくばこそ正木のかづらよりもなやまめ

世の中を思ひうじて侍りける頃　　業平朝臣

住みわびぬ今はかぎりと山里につま木こるべき宿もとめてむ

我をしりがほにないひそと女のいひ侍りける返事に　　躬恒

あしびきの山におひたる白樫のしらじなひとを朽木なりとも

はちすのはひをとりて　　讀人しらず

蓮葉のはひにぞ人はおもふらむよにはこひぢの中におひつゝ

○よとともに　時勢につれて。

○こと繁し　人の言葉がとかくとうるさい。

○正木のつな　まさきの蔓。はひひろがつて物にまきつく蔓をなひ合はせた綱。

○つま木　たきものに用ゐる木の枝。

○こる　伐る。

○こひぢ　泥。戀路をかけたもの

姿あやしと人の笑ひければ

伊勢の海のつりのうけなるさまなれど深きこゝろは底にしづめり

おほきおほいまうち君の白河の家にまかりわたりて侍りけるに人のざふしにこもり侍りて　　中　務

白河の瀧のいと見まほしけれどみだりに人をよせじものとや

かへし　　おほきおほいまうち君

白河の瀧のいとなみみだれつゝよるをぞ人はまつといふなる

逢坂の關に庵室を造りて住み侍りけるに行きかふ人を見て　　蟬　丸

これやこのゆくもかへるも別れつゝ知るもしらぬも逢坂の關

さだめたる男もなくて物思ひけるころ　　小野小町

蜑のすむ浦こぐ船のかぢをなみ世をうみわたるわれぞ悲しき

あひしりて侍りける女心にもいれぬさまに侍りければこと人の心ざしあるにつき侍りけるをなほしもあらず物いはむと申し遣はしたりけれど返事もせず侍りければ　　讀人しらず

濱千鳥かひなかりけりつれもなき人のあたりはなき渡れども

法皇寺めぐりし給ひける道にてかへでの枝を折りて　　素性法師

○うけ　うき。釣をする時絲につけて水面に浮ばせるもの。

○よるをぞ　寄るのを。夜を。

○知るもしらぬも云々　知る人も知らぬ人も行き逢ふ逢坂の關。

○世をうみわたる　浦、船、の縁で海を渡るといひ、これを世を倦みわたるにかけたもの。

この御幸千年かへても見てしがなかかる山ぶし時にあふべく

西院の后おほんぐしおろさせ給ひておこなはせ給ひける時彼の院の中島の松をけづりて書きつけ侍りける

おとにきく松が浦島けふぞ見るむべも心あるあまは住みけり

齋院のみそぎの垣下に殿上の人々まかりて曉に歸りてむまが許につかはしける　右衞門

われのみはたちもかへらぬ曉にわきてもおける袖のつゆかな

しほなきとしたゝみあへてと侍りければ　忠岑

鹽といへばなくても辛き世の中にいかにあへたるたゝみなるらむ

ひたゝれこひに遣はしたるに裏なむなきそれは著じとやいかゞといひたれば　藤原元輔

住吉のきじともいはじ沖つ浪なほうちかけようらはなくとも

法皇はじめて御ぐしおろし給ひて山ぶみし給ふあひだ后をはじめ奉りて女御更衣なほひとつ院にさぶらひ給ひける三年といふになむみかど歸りおはしましたりける昔のごと同じ所にておほんぐしおろし給うけるついでに　七條のきさき

○おほんぐし　御髮。
○おこなはせ給ひける時　佛戒を修せられた時。
○心あるあま　髮を尼に通はせたもの。

○ひたゝれ　直垂ではない。老人の著る綿衣といふ。

○きじ　著じに岸をかけたもの。うちかけよ、うら、共に著物と海とをかけた詞。
○山ぶみ　山あるき。山遊び。

○昔おぼゆる　昔のことが思ひ出される。
○そながら　それながら。さながら。上の海に對して磯ながらの意を含めたもの。
○へたのみるめ　邊の海松。沖つ玉藻に對した語。併せて女の名のみるに通はせたもの。
○召しとゞめらるゝ　宮中に留め置かれる。
○相撲のかへりあるじ　相撲の節會が終つた後、勝つた方の大將がその里の館で配下の者を饗應すること。
○あがれけるに　わかれけるに。
○酒あまたたびの後　酒を澤山飲んだ後。

言の葉のたえせぬ露はおくらむや昔おぼゆるまとゐしたれば　　伊勢

御かへし

海とのみ圓居(まとゐ)の中は成りぬめりそながらあらぬ影の見ゆれば

志賀の唐崎にてはらへしける人のしもづかへにみるといふ侍りけり大伴黑主そこにまできてかのみるに心をつけていひ戲れけりはらへはてて車より黑主に物かづけけり其の裳の腰にかきつけてみるに送り侍りける　　黑主

何せむにへたのみるめを思ひけむ沖つ玉藻をかづく身にして

月の面白かりけるを見て　　躬恒

晝なれや見ぞ紛(まが)へつる月影を今日とやいはむ昨日とや言はむ

五節(ごせち)の舞姫にてもし召しとゞめらるゝ事やあると思ひ侍りけるをさもあらざりければ　　藤原滋包女

くやしくぞ天つ乙女となりにける雲路たづぬる人もなき世に

太政大臣の左大將にて相撲のかへりあるじし侍りける日中將にてまかりて事をはりてこれかれまかりあがれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞめてまらうどあるじ酒あまたたびの後醉ひにのりて子どもの上など

申しけるついでに　　　　兼輔朝臣

人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまどひぬるかな

女友だちの許につくしよりさし櫛を心ざすとて　　大江玉淵朝臣女

難波潟なにもあらずみをつくしふかき心のしるしばかりぞ

元長親王のすみ侍りける時てまさぐりに何いれて侍りける箱にか有りけむしたおびしてゆひて又こむ時にあけむとて物のかみにさし置きていで侍りにける後常明親王にとりかくされて月日久しく侍りてありし家にかへりてこの箱を元長親王に送るとて　　中務

明けてだになにかはせむ水の江の浦島の子を思ひやりつゝ

忠房朝臣津の守にて新司治方がまうけに屛風てうじて彼の國の名ある所所繪にかかせてさび江といふところに書けりける　　忠岑

年をへて濁りだにせぬさび江には玉もかへりて今ぞすむべき

兼輔朝臣宰相中將より中納言になりて又の年のり弓のかへりだちのあるじにまかりてこれかれ思ひをのぶるついでに　　兼輔朝臣

ふるさとの三笠の山はとほけれどこゑは昔のうとからぬかな

淡路のまつりごと人の任はててのぼりまうできての頃兼輔朝臣の粟田の

○さし櫛　飾りのために女の額の處にさす櫛。

○てまさぐり　手弄。てあそび。

○ありし家　元の家。

○まうけ　したく。用意。

○かへりだちのあるじ　前のかへりあるじと同じ。

○まつりごと人　四部官の一、判官。掾。

家にて　　躬恒

ひき植ゑし人はむべこそ老いにけれ松のこ高くなりにけるかな

人のむすめに源かねきがすみ侍りけるを女の母聞き侍りていみじうせいし侍りければ忍びたる方にて語らひける間に母しらずして俄にいきければかねきがにげてまかりければ遣はしける　　女の母

小山田のおどろかしにもこざりしをいとひたぶるににげし君かな

三條右大臣みまかりてあくる年の春大臣めしありと聞きて齋宮のみこにつかはしける　　むすめの女御

いかでかの年ぎりもせぬ種もがな荒れたる宿に植ゑてみるべく

かの女御左のおほいまうち君にあひにけりと聞きて遣はしける　　齋宮のみこ

春毎に行きてのみ見む年ぎりもせずといふ種はおひぬとか聞く

庶明朝臣中納言になり侍りける時うへのきぬつかはすとて　　右大臣

おもひきや君が衣をぬぎかへて濃きむらさきの色をきむとは

かへし　　庶明朝臣

いにしへも契りてけりな打ちはぶき飛びたちぬべき天の羽衣

雅正がとのゐ物をとりたがへて大輔が許にもてきたりければ　　大輔

○年ぎり　樹木の實の少ない年をいふ。人の運のつたないのに喩へる。

○うへのきぬ　束帶の時に用ゐる上衣。袍。

○濃きむらさきの色　三位の袍を云ふ。

○打ちはぶき　羽ばたきをして。

○なれにけり　使ひ古してよごれてゐる。

○流れてのよ　後の世。

○あけ衣　緋の袍。五位の人の著たもの。

○ながらの橋　古いものの喩へに云つたもの。

ふるさとの奈良の都のはじめよりなれにけりとも見ゆる衣か

かへし　　雅正

ふりぬとて思ひも捨てじ唐衣よそへてあやなうらみもぞする

世の中の心にかなはぬなど申しければ行くさき頼もしき身にてかかる事あるまじと人の申し侍りければ　　大江千里

流れてのよをも頼まず水の上の泡に消えぬるうき身と思へば

藤原さねきが藏人よりかうぶり賜はりてあす殿上まかりおりなむとしける夜酒たうべけるついでに　　兼輔朝臣

うば玉のこよひばかりぞあけ衣あけなば人をよそにこそ見め

法皇御ぐしおろし給ひての頃　　七條后

人わたす事だになきを何しかもながらの橋と身のなりぬらむ

御かへし　　伊勢

ふるゝ身は涙のなかに見ゆればや長柄の橋にあやまたるらむ

京極の御息所尼になりて戒うけむとて仁和寺にわたりて侍りければ　　あつみのみこ

ひとりのみながめて年をふる里の荒れたるさまをいかに見るらむ

○まめなれど　眞實であるが。
○たはれ島　肥後國にある。
○ひとの心のうきはし　つらい人の心の一端。併せて浮橋の意を含ませて下のふみ見つるかなに應じたもの。
○ふみ見つるかな　文を見たと踏んで見たとを通はせたもの。
○うての使　追討使。
○あけながら　玉櫛笥を受けて開けながらといひ。朱ながらとかけたもの。緋は五位の色である。

女のあだなりといひければ　朝綱朝臣

まめなれどあだ名は立ちぬたはれ島よる白浪をぬれ衣(ぎぬ)にきて

あひかたらひける人の家の松の梢のもみぢたりければ　讀人しらず

年をへて頼むかひなしときはなる松のこずゑも色かはりゆく

男の女の文を隠しけるを見てもとの妻(め)の書きつけ侍りける　四條御息所女

へだてつるひとの心のうきはしを危きまでもふみ見つるかな

小野好古朝臣西の國のうての使にまかりて二年といふ年四位には必ずまかりなるべかりけるをさもあらずなりにければかかる事にしもさされける事の安からぬ由をうれへ送りて侍りける文の返事の裏にかきつけて遣はしける　源公忠朝臣

玉櫛笥(たまくしげ)二年あはぬ君が身をあけながらやはあらむとおもひし

かへし　小野好古朝臣

あけながら年ふることは玉櫛笥みのいたづらになればなりけり

後撰和歌集　卷第十六

雜歌二

思ふ心ありて前太政大臣によせて侍りける　在原業平朝臣

賴まれぬ憂世の中をなげきつゝ日陰におふる身をいかにせむ

やまひし侍りて近江の關寺にこもりて侍りけるに前の道より閑院のご石山に詣でけるをたゞ今なむ行き過ぎぬると人のつげ侍りければおひてつかはしける　敏行朝臣

逢坂のゆふつけになく鳥の音を聞き咎めずぞ行き過ぎにける

前中宮宣旨贈太政大臣の家よりまかり出でてあるにかの家にことにふれて日ぐらしといふことなむ侍りける　宣旨

み山よりひゞき聞ゆる日ぐらしの聲をこひしみ今もけぬべし

かへし　贈太政大臣

蜩のこゑをこひしみ消ぬべくば深山ほとりにはやも來ねかし

河原に出でてはらへし侍りけるにおほいまうち君もいであひ侍りければ

○しばし水かへ　暫く駒に水を飼へ。
○うしとや　牛を憂しに通はせたもの。
○賀茂臨時祭　十一月の中の酉の日に行はれる。
○いくその世々　幾度の世。多くの世。
○しづめる影　井の底にうつつた影。自分の影。

誓はれし賀茂の河原に駒とめてしばし水かへかげをだに見む　　敦忠朝臣母

人の牛をかりて侍りけるに死に侍りければいひ遣はしける　　閑院のご

わがのりしことをうしとや消えにけむ草葉にかゝる露の命は

延喜の御時賀茂臨時祭の日御前にてさかづきとりて　　三條右大臣

かくてのみやむべきものかちはやぶる賀茂の社の萬代をみむ

同じ御時北野の行幸にみこし岡にて　　枇杷左大臣

御輿岡いくその世々に年を經て今日の行幸を待ちてみつらむ

戒仙が深き山寺に籠り侍りけるにこと法師まうできて雨に降りこめられて侍りけるに　　讀人しらず

いづれをか雨ともわかむ山ぶしの落つる涙もふりにこそふれ

これかれ逢ひて夜もすがら物語してつとめて送りける　　おきかぜ

思ひにはきゆるものぞと知りながら今朝しもおきて何にきつらむ

若う侍りける時は志賀に常にまうでけるを年老いては參り侍らざりけるに參り侍りて　　讀人しらず

めづらしや昔ながらの山の井はしづめる影ぞくちはてにける

宇治のあじろに知れる人の侍りければまかりて　　大江興俊

宇治川の波にみなれし君ませば我もあじろによりぬべきかな

院のみかど内におはしましし時人々に扇てうぜさせ給ひける奉るとて　　小貳のめのと

ふき出づるねどころ高くきこゆなり初秋風はいざ手ならさじ

かへし　　大輔

心してまれにふきつるあきかぜを山おろしにはなさじとぞ思ふ

男のふみ多く書きてといひければ　　讀人しらず

はかなくて絶えなむ蜘の絲ゆゑに何にか多くかかむとすらむ

鞍馬の家をよる越ゆとてよみ侍りける　　亭子院いまあことめしける人

昔よりくらまの山といひけるはわがごと人もよるや越えけむ

男につけてみちのくにへむすめを遣はしたりけるがこのをとこ心かはりたりと聞きて心うしと親のいひ遣はしたりければ　　讀人しらず

雲居路の遙けき程のそらごとはいかなる風の吹きてつげけむ

かへし　　女の母

天雲のうきたることと聞きしかどなほぞ心はそらになりにし

○あじろ　氷魚をとるために冬期川の瀬に木や竹を編んで網の代りにするもの。

○くらまの山　鞍馬を暗いといふにかけたもの。

○そらごと　雲居路に對して空を受けたもの。詐りごと。

○うきたること　根據のない事。いつはり。

たまさかに通へりける文をこひかへしければその文にぐして遣はしける

もとよしのみこ

やればをしやらねば人に見えぬべし泣く〳〵もなほ返すまされり

延喜の御時御馬を遣はして早くまゐるべき由おほせつかはしたりければ卽ちまゐりておほせ言うけたまはれる人につかはしける

素性法師

望月のこまより遲く出でつればたどる〳〵ぞ山は越えつる

病して心細しとて大輔につかはしける

藤原敦敏

萬代と契りしことのいたづらに人わらへにもなりぬべきかな

かへし

大輔

かけていへばゆゝしきものを萬代と契りし事やかなはざるべき

あられの降るを袖にうけて消えけるを海のほとりにて

讀人しらず

散るとみて袖にうくれど溜らぬは荒れたる波の花にぞありける

ある所のわらは女五節見に南殿にさぶらひて沓を失ひてけり輔臣朝臣藏人にて沓をかして侍りけるをかへすとて

立ち騷ぐ波まを分けてかづきてし沖のもくづをいつか忘れむ

かへし

輔臣朝臣

○人に見えぬべし　人に見られるだらう。
○返すまされり　返す方がまさつてゐる。
○望月のこま　八月の駒牽に信濃の望月の牧から逢坂山を經て禁中に牽つた駒。
○人わらへ　人からわらはれる。他人の笑ひぐさ。
○かけていへば　言葉にあらはしていへば。
○かづきてし　御恩を被つたの意を込めたもの。
○沖のもくづ　藻屑に沓を云ひかけたもの。

かづきてし沖のもくづを忘れずば底のみるめを我にからせよ

人の裳をぬはせ侍るにぬひて遣はすとて　　讀人しらず

かぎりなく思ふ心は筑波嶺のこのもやいかゞ有らむとすらむ

男のやまひしけるをとぶらはでありく〵てやみがたにとへりければ

思ひ出でてとふ言の葉を誰みまし身の白雲になりなましかば

みそか男したる女をあらくはいはでとへど物いはざりければ

忘れなむと思ふ心のつくからに言の葉さへやいへばゆゝしき

男のかくれて女を見たりければつかはしける

隱れゐてわがうきさまをみづの上の沫ともはやく思ひ消えなむ

世の中をとかく思ひ煩ひける程に女友だちなる人猶わがいはむことにつきねと語らひはべりければ

ひとごゝろいさやしら波たかければ寄らむ渚ぞかねて悲しき

いたくこと好む由を時の人いふと聞きて　　高津内親王

直き木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなさ

帝に奉り給ひける　　嵯峨后

移ろはぬ心の深くありければこゝら散る花はるにあへるごと

○筑波嶺のこのもやいかゞ　此の裳をどういふ風に縫はせたものでと、古今集卷二十東歌の「筑波根の此面彼面にかげはあれど。」によつたもの。
○やみがた　病氣のよくなる頃。
○言の葉さへや云々　言葉に出して云ふのさへもいやなのであるが。
○わがうきさまをみづの上の　見られてはならぬ私のさまを見られたので。
○ひとごゝろいさやしら波　人の心はどうだか知らぬ。
○毛をふき疵を云々　藪をつゝいて蛇を出すの意。いらぬ事に手出しをして却つて案外の災を受ける意。
○こゝら　許多。多く。

これかれ女の許にまかりて物いひなどしけるに女のあな寒(さむ)の風やと申しければ　讀人しらず

玉垂のあみめのまより吹く風の寒くばそへて入れむおもひを

男のいひけるを騷ぎければ歸りて朝(あした)に遣はしける

白波のたち騷がれて立ちしかば身をうしほにぞ袖はぬれにし

かへし

とりもあへず立ち騷がれしあだ波にあやなく何に袖の濡れけむ

題しらず

たゞちとも賴まざらなむ身にちかき衣の關もありといふなり

友達の久しくあはざりけるにまかりてあひて詠み侍りける

逢はぬまは戀しきみちも知りにしをなど嬉しきにまどふ心ぞ

題しらず　賀朝法師

いかなりし節(ふし)にか絲の亂れけむしひてくれども解けずみゆるは

人のめに通ひける見つけられ侍りて

身なぐとも人に知られじ世の中に知られぬ山を知る由もがな

かへし　もとのをとこ

○玉垂　玉で飾った簾。珠簾。
○そへて入れむおもひを　熱い思ひを風に添へて入れよう。

○身をうしほにぞ　潮にと、身を憂く思ふと兩方にかけたもの。

○たゞち　うちつけに。ぢかに。すぐに。

○いかなりし節　絲のふしと、時とをかけたもの。
○人のめ　人の妻。人の女。

世の中にしられぬ山に身なぐともたにの心やいはでおもはむ

山の井の君に遣はしける　　讀人しらず

音にのみ聞きてはやまじ淺くともいざ汲み見てむ山の井の水

やまひしけるをからうじておこたれりと聞きて

しでの山たどる〳〵も越えななむうき世の中に何歸りけむ

題しらず

數ならぬ身を重荷(おもに)にて吉野山たかきなげきをおもひこりぬる

かへし

吉野山こえむことこそ難からめこらむなげきの數はしりなむ

陽成院の帝時々とのゐにさぶらはせ給ひけるを久しうめしなかりければ　　武藏
奉りける

數ならぬ身におくよひの白玉は光みえさすものにぞ有りける

まかり通ひける女の心とけずのみ見え侍りければ年月も經ぬるを今さら
かかる事といひ遣はしたりければ　　讀人しらず

難波潟みぎはの蘆のおひかぜにうらみてぞふる人のこゝろを

女の許より恨みおこせて侍りける返事に

○淺くとも　假令淺い契りでも。

○おこたれり　回復した。

○こらむなげき　こるは伐る。なげきを木に通はせたもの。

○うらみてぞふる　恨むに裏見てぞをかけたもの。

○もみぢず　紅葉しない。

○朝なけに　朝ごとに。毎朝。

○おぼつかな　おぼつかなし。たしかでない。

忘るとは恨みざらなむはしたかのとかへる山の椎はもみぢず

昔同じ所に宮づかへし侍りける女の男につきて人の國におちゐたりけるを聞きつけて心ありける人なればいひ遣はしける

をちこちの人めまれなる山里にいへゐせむとは思ひきや君

かへし

身をうしと人しれぬよを尋ねこし雲の八重だつ山にやはあらぬ

をとこなど侍らずして年頃山里に籠り侍りける女を昔あひしりて侍りける人道まかりけるついでに久しうきこえざりつるをこゝになりけりといひ入れて侍りければ　　土佐

朝なけに世の憂きことを忍びつゝながめせしまに年はへにけり

山里に侍りけるに昔あひしれる人のいつよりこゝにはすむぞと問ひければ　　閑院

春やこし秋や行きけむおぼつかな陰は朽木と世をすぐす身は

題しらず　　貫之

世の中はうき物なれや人ごとのとにもかくにもきこえ苦しき

讀人しらず

○袖ひづばかり　袖がぬれる程。草の露に袖がぬれる意。

○大荒木の森　山城の久世郡にある。この歌は古今集の「大荒木の森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし」によつて詠んだもの。

○かりに　刈りにを假りににかけたもの。

○ふるさと　佐保川は奈良の東にあるので古里と云つたのである。

○ならし顔　なれさせるやうな様子。

武藏野は袖ひづばかり分けしかど若むらさきは尋ねわびにき

暇にてこもり侍りける頃人のとはず侍りければ　　壬生忠岑

大荒木の森の草とや成りにけむかりにだにきて訪ふ人のなき

ある所に宮づかへし侍りける女のあだ名たちけるがもとよりおのれがうへはそこになむ口のけにかけていはるなど恨み侍りければ　　讀人しらず

あはれてふことこそ常の口のはにかゝるや人を思ふなるらむ

題しらず　　伊勢

吹く風の下の塵にもあらなくにさも立ちやすきわが浮名かな

春日にまうでける道にさほ川のほとりに初瀬より歸る女車のあひて侍りけるにすだれのあきたるより僅かに見入れければあひしりて侍りける女の心ざし深く思ひかはしながら憚る事侍りてあひ離れて六七年ばかりに成り侍りにける女に侍りければ彼の車にいひいれ侍りける　　閑院左大臣

ふるさとの佐保の川水けふも猶かくてあふせは嬉しかりけり

枇杷左大臣よう侍りて楢の葉をもとめ侍りければ千兼があひしりて侍りける家にとりにつかはしければ　　俊子

我が宿をいつならしてか楢の葉をならし顔には折りにおこする

○葉守の神　女の深く契つてゐる男をさして云つた詞。

○一よ　一夜と竹の一ふしとをかけたもの。

○ひとふしに　竹の一節にといふのに一途にをかけたもの。

かへし　枇杷左大臣

ならの葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな

友達の許に罷りてさかづきあまたたびになりければ逃げてまかりけるを止めわづらひもて侍りける笛を取りとゞめて又の朝に遣はすとて　讀人しらず

かへりては聲やたがはむ笛竹のつらき一よのかたみと思へば

かへし

ひとふしに恨みなばこそ笛竹の聲のうちにも思ふこゝろあり

もとより友達に侍りければ貫之にあひ語らひて兼輔朝臣の家に名簿を傳へさせ侍りけるにその名づきに加へて貫之におくりける　躬恒

人につぐたよりだになし大荒木の森のしたなる草の身なれば

兼忠朝臣の母みまかりにければ兼忠をば故枇杷左大臣の家にむすめをば后の宮にさぶらはせむとあひ定めて二人ながらまづ枇杷の家に渡し送るとてくはへ侍りける　兼忠朝臣の母の乳母

結び置きしかたみのこだになかりせば何に忍の草をつままし

物思ひ侍りける頃やんごとなき高き所よりとはせ給へりければ　讀人しらず

うれしきも憂きも心はひとつにてわかれぬものは涙なりけり

世の中の心にかなはぬ事申しけるついでに　　貫之

惜しからでかなしきものは身なりけり憂世そむかむ方を知らねば

思ふこと侍りけるころ人に遣はしける　　讀人しらず

思ひ出づることぞ悲しき世の中は空ゆく雲のはてを知らねば

題しらず

哀れともうしともいはじ陽炎(かげろふ)のあるかなきかに消(け)ぬる世なれば

あはれてふことに慰む世の中をなどか悲しといひて過ぐらむ

播磨の國に高潟(たかがた)といふ所に面白き家もちて侍りけるを京にて母がおもひにて久しう罷らで彼の高潟に侍る人にいひつかはしける

物思ふと行きてもみねば高潟の蜑(あま)のとまやは朽ちやしぬらむ

延喜の御時ときの藏人のもとに奏しもせよとおぼしくてつかはしける　　躬恒

夢にだに嬉しとも見ばうつゝにて侘しきよりはなほまさりなむ

○惜しからで云々　惜しくはない が可愛いものは。

○母がおもひ　母の喪。

○物思ふこ　物思ふこて。

○奏しもせよ　奏上して貰ふのもよい。

後撰和歌集　卷第十七

雜　歌　三

いそのかみといふ寺に詣でて日の暮れにければ夜あけてまかり歸らむとてとゞまりてこの寺に遍昭侍りと人の告げ侍りければ物いひ心みむとていひ侍りける　　小　町

岩の上にたびねをすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ

かへし　　遍　昭

世をそむく苔の衣はたゞ一重(ひとへ)かさねばうとしいざふたりねむ

法皇かへりみ給ひけるを後々は時衰(おとろ)へありしやうにもあらずなりにければ里にのみ侍りて奉らせける　　せかゐの君

逢ふ事の年ぎりしぬる歎きにはみの數ならぬものにぞ有りける

女の許よりあだにきこゆることなどいひて侍りければ　　左　大　臣

あだ人もなきにはあらず有りながら我が身にはまだ聞きも習はぬ

題しらず　　讀人しらず

○岩の上に　石上寺の名によつて云つたもの。
○苔の衣　修驗者や仙人などの著る衣。
○かさねば　重ねばと貸さねばとをかけたもの。
○後々は時衰へ　後には寵愛衰へ
○ありしやうにもあらず　以前のやうにもなく。
○年ぎり　人の運のつたないのに喩へたもので、木の實の少ない年をいふ。
○みの數ならぬ　年ぎりであるから實が澤山ならぬと云ひ、併せて自分は身のつまらぬといふ意にかけたもの。
○我が身には云々　自分はまだあだな事をしたことはない。

○かしこまる事侍りて　御咎めを受けることがあつて。

○我が身にもあらぬ我が身　謹愼中であるから。

○なにはたちぬる　津の國の難波と云つて、それに名に立つたと云ひかけたもの。

○もてたがへたりければ　間違つて持つて來たので。

宮人とならまほしきを女郎花野邊よりきりの立ち出てぞくる

かしこまる事侍りてさとに侍りけるをしのびてざふしに參れりけるをおほいまうち君のなどか音もせぬとうらみければ　大輔

我が身にもあらぬ我が身の悲しきは心も異になりやしにけむ

人のむすめに名たち侍りて　讀人しらず

世の中をしらずながらも津の國のなにはたちぬる物にぞ有りける

なき名たちける頃

よとともに我ぬれぎぬとなるものはわぶる涙のきするなりけり

前坊おはしまさずなりての頃五節の師のもとにつかはしける　大輔

うけれども悲しきものをひたぶるに我をや人の思ひすつらむ

かへし　讀人しらず

悲しきもうきも知りにし一つ名を誰をわくとか思ひ捨つべき

大輔がざふしに敦忠朝臣のもとへ遣はしける文をもてたがへたりければ遣はしける　大輔

道しらぬものならなくにあしびきの山ふみ惑ふ人もありけり

かへし　敦忠朝臣

○あらませば　あらうならば。

○ありそ　荒磯。
○ふみおく跡　踏み置く跡。通つた足跡。併せて文置く跡とかけたもの。

しらがしの雪も消えぬる足引の山路をたれかふみまよふべき

いひちぎりて後こと人につきてと聞きて　讀人しらず

いふことの違(たが)はぬものにあらませば後(のち)憂きことも聞えざらまし

題しらず　伊勢

面影をあひみしかずになすときは心のみこそしづめられけれ

かしら白かりける女を見て

ぬきとめぬ髪の筋(すぢ)もてあやしくもへにける年の數をしるかな

題しらず　讀人しらず

なみ數にあらぬ身なれば住吉の岸にもよらずなりや果てなむ

つきもせずうき言の葉のおほかるを早くあらしの風も吹かなむ

いと忍びて語らひける女の許につかはしける文を心にもあらで落したりけるを見つけてつかはしける

島がくれありそに通ふあしたづのふみおく跡は波もけたなむ

昔同じ所に宮づかへしける人年ごろいかにぞなどとひおこせて侍りければ遣はしける　伊勢

身は早くなきもののごとなりにしを消えせぬ物は心なりけり

はらからの中にいかなる事かありけむ常ならぬさまに見え侍りければ

讀人しらず

睦ましきいもせの山のなかにさへ隔つる雲のはれずもあるかな

女のいとくらべ難く侍りけるを相はなれにけるがこと人にむかへられぬと聞きて男のつかはしける

我が爲におきにくかりしはし鷹の人の手にありときくは誠か

梔子(くちなし)ある所にこひに遣はしたるに色のいと惡かりければ

聲にたてていはねどしるし口なしの色は我がため薄きなりけり

題しらず

瀧つ瀬の早からぬをぞ恨みつるみずとも音に聞かむと思へば

人のもとに文遣はしける男人に見せけりと聞きてつかはしける

皆人にふみみせけりな水無瀬川そのわたりこそまづは淺けれ

つくしの白河といふ所にすみ侍りけるにまへより大貳藤原興範朝臣のまかり渡るついで水たべむとてうち寄りてこひ侍りければ水をもて出でて詠み侍りける

檜垣の嫗

年ふればわが黑髮もしら河のみづはぐむまで老いにけるかな

○いもせの山のなか　兄弟の間。

○はし鷹　鷹の一種。

○こひに　請ひに。貰ひに。

○しるし　著し。あきらかである

○ふみみせけりな　踏み見せけりなと文見せけりなとを通はせたもの。

○みづはぐむまで　長壽の相として瑞齒の生えるまで。

○しぞく　親族。

○人のふみ見ぬ　踏み見ぬと文見ぬとをかけたもの。

○ことのいふかひ　言ふ甲斐を貝にかけたもの。

かしこに名高く事好む女になむ侍りける

しぞくに侍りける女の男に名たちてかかる事なむある人にいひさわげといひ侍りければ　　貫之

かざすとも立ちと立ちなむなき名をば事無し草のかひやなからむ

題しらず

歸りくる道にぞけさは迷ふらむこれになずらふ花なきものを

女の許に文遣はしけるを返事もせずして後々は文を見もせで取りなむ置くと人の告げければ　　讀人しらず

大空にゆきかふとりの雲路をぞ人のふみ見ぬものといふなる

紀のすけに侍りける男のまかり通はずなりにければ彼の男の姉の許にうれへおこせて侍りければいと心うきことかなと言ひつかはしたりける返事に

紀の國のなぐさの濱は君なれやことのいふかひありと聞きつる

すみ侍りける女宮づかへし侍りけるを友達なりける女同じ車にて貫之が家にまうできたりけり貫之が妻(め)客人(まらうど)にあるじせむとてまかりおりて侍りける程に彼の女を思ひかけて侍りければ忍びて車にいひいれ侍りける

波にのみぬれつるものを吹く風のたよりうれしきあまの釣舟　　貫之

男の物にまかりて二年ばかりありてまうできたりけるを程へて後にことなしびにこと人に名だつと聞きしはまことなりといへりければ　　讀人しらず

綠なるまつほど過ぎばいかでかは下葉ばかりも紅葉せざらむ

故女四のみこの後のわざせむとて菩提子のずゝをなむ右大臣もとめ侍ると聞きてこのずゝを送るとて加へ侍りける　　眞延法師

おもひ出のけぶりやまさむなき人の佛になれるこのみ見ば君

かへし　　右大臣

道なれるこのみ尋ねて心ざしあると見るにぞ音をば增しける

定めたる女も侍らずひとりぶしをのみすと女友だちのもとよりたはぶれて侍りければ　　讀人しらず

いづこにも身をば離れぬ影しあればふす牀ごとにひとりやはぬる

前栽の中にすろの木おひて侍ると聞きてゆきあきらのみこの許より一木こひに遣はしたれば加へてつかはしける　　眞延法師

風霜に色もこゝろもかはらねばあるじに似たる植木なりけり

○ことなしびに　何もこともないさまに。

○まつほど　綠なる松と待つ程とをかけたもの。

○後のわざ　追善供養。佛事。

○菩提子のずゝ　菩提樹の實で作つた數珠。

○すろの木　椶櫚。しゆろ。

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　行明親王

山深みあるじに似たる植木をば見えぬ色とぞいふべかりける

　大井なる所にて人々酒たうべけるついでに　　業平朝臣

大井川うかべる船のかゞり火にをぐらの山も名のみなりけり

　題しらず　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

飛鳥川わが身ひとつの淵瀨ゆゑなべての世をもうらみつるかな

　思ふ事侍りける頃志賀にまうでて

世の中を厭ひがてらにこしかども憂き身ながらの山にぞ有りける

　父母侍りける人のむすめに忍びて通ひ侍りけるを聞きつけてからじせられ侍りけるを月日へて隱れ渡りけれど雨降りてえまかり出で侍らで籠り侍りけるを父母聞きつけていかゞはせむずるとてゆるす由いひて侍りければ

下にのみはひわたりにし蘆の根の嬉しき雨にあらはるゝかな

　人の家にまかりたりけるに遣水に瀧いと面白かりければ歸りてつかはしける

瀧つ瀨にたれしら玉をみだりけむ拾ふとせしに袖ぞひぢにき

○大井なる所　大井といふ所。○をぐらの山　山の名に小暗をかけたもの。

○憂き身ながらの山　長良山に憂き身ながらにかけたもの。○からじ　勘事。惡い事をした人を咎め責めること。

○みだりけむ　亂したのであらう。○拾ふとせしに　拾はうとしたところが。

法皇吉野の瀧御覽じける御ともにて　源昇朝臣

いつのまに降り積るらむみ吉野の山のかひより崩れ落つる雪

法皇御製

宮の瀧むべも名におひて聞えけり落つる白沫（しらあわ）の玉とひゞけば

山ぶみしはじめける時　僧正遍昭

今さらに我は歸らじ瀧見つゝよべど聞かずと問はばこたへよ

題しらず　讀人しらず

瀧つせのうづまき毎にとめくれどなほ尋ねくるよのうきめかな

はじめて頭おろし侍りける時物にかきつけ侍りける　遍昭

たらちねはかかれとてしもうば玉の我が黑髮をなですやありけむ

みちのくにの守にまかり下れりけるにたけくまの松の枯れて侍りけるを見て小松を植ゑつかせ侍りて任はてて後又同じ國にまかりなりて前の任に植ゑし松を見て　藤原元善朝臣

植ゑし時契りやしけむたけくまの松をふたゝびあひ見つるかな

ふしみといふ所にて其の心をこれかれよみける　讀人しらず

すがはらや伏見のくれに見渡せば霞にまがふをはつせのやま

○よべど聞かずと云々　人が問うたならば呼んだが聞き入れないと答へよの意。

○とめくれど　たづね來れど。

○たらちね　母親。

○みちのくに　みちのくといふに同じ。陸奥。

題しらず

言の葉もなくてすぎぬる年月にこの春だにもはなは咲かなむ　業平朝臣

身のうれへ侍りける時津の國にまかりて住みはじめ侍りけるに

難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る船

時にあはずして身を恨みてこもり侍りける時　文屋康秀

白雲のきやどるみねの小松原えだしげければや日のひかり見ぬ

心にもあらぬ事をいふ頃男の扇にかきつけ侍りける　土佐

身にさむくあらぬものから侘しきは人の心のあらしなりけり

ながらへば人の心もみるべきに露のいのちぞかなしかりける

人の許より久しふ心地わづらひてほと〳〵死ぬべくなむ有りつるといひて侍りければ　閑院大君

諸共にいざとはいはでしでの山いかでかひとりこえむとはせし

月夜にかれこれして　上野岑雄

おしなべて峯もたひらに成りななむ山のはなくば月も隱れじ

○はなは咲かなむ　花は咲いてほしい。

○けふこそみつの浦　けふは見たと、三津の浦とを通はせたもの。

○この世をうみ渡る船　此の世を倦みわたると、海を渡る船とを通はせたもの。

○日のひかり見ぬ　日の光を見ないといふに自分の不遇を含ませたもの。

○身にさむくあらぬものから　身には寒く感じないものの。

○心地わづらひて　病氣をして。

○ほと〳〵　ほとんど。

○山のはなくば云々　月は山の端に入るものといふ思想から云つたもの。

○をぶちの駒　尾駮の牧に飼ふ駒
野飼ふ　野で放し飼ひにする。
○つぼやなぐひ　つぼやかになつた胡籙。
○おいかけ　武官が冠の左右につけた飾り。

後撰和歌集　卷第十八

雜歌四

蛙を聞きて　　讀人しらず

我が宿にあひやどりして鳴く蛙よるになればや物はかなしき

人々あまたしりて侍りける女のもとに友達のもとよりこの頃は思ひ定めたるなめり頼もしき事なりとたはぶれおこせて侍りければ

玉江こぐ蘆刈りをぶねさし分けて誰をたれとか我はさだめむ

男のはじめいかに思へる樣にか有りけむ女のけしきも解けぬを見てあやしく思はぬ樣なる事といひ侍りければ

陸奥のをぶちの駒も野飼ふには荒れこそまされなつくものかは

少將にて內にさぶらひける時あひしりたりける女藏人(にょくらうど)のざうしにつぼやなぐひおいかけを宿し置きて遠き所にまかり侍りけりこの女の許より此のおいかけをおこせてあはれなる事などいひて侍りける返事に　　源善朝臣

いづくとて尋ねきつらむ玉かづらわれは昔のわれならなくに

たよりにつきて人の國のかたに侍りて京に久しうまかりのぼらざりける時に友だちに遣はしける　　讀人しらず

朝ごとにみし都路の絶えぬればことあやまりにとふ人もなし

遠き國に侍りける人を京に上(のぼ)りたりと聞きてあひまつにまうできながら訪はざりければ

いつしかとまつちのやまの櫻花まちてもよそにきくが悲しさ

題しらず　　伊勢

いせ渡る川は袖より流るればとふにとはれぬ身は浮きぬめり

北邊左大臣

人めだに見えぬ山路にたつ雲をたれすみがまの煙といふらむ

男の人にもあまた問へわれやあだなる心あるといへりければ　　伊勢

あすかがは淵瀬にかはる心とはみなかみしもの人もいふめり

人のむこの今まうでこむといひて罷りにけるが文おこする人ありと聞きて久しうまうでこざりければあとうがたりの心をとりてかくなむ申しけるどいひつかはしける　　女の母

今こむといひしばかりを命にてまつに消(け)ぬべしさくさめのとじ

○ことあやまりに　まちがひにでも。けがにも。

○いつしかとまつちのやま　いつになつたら來るかと待つ。これに待乳山をかけたもの。

○いせ　五十瀬。多くの瀬。

○たれすみがまの云々　誰が炭を燒く竈の煙といふらむに、誰が住むといひかけたもの。

○あとうがたり　詳かでないが、一說になぞ〳〵の意ともいふ。

○さくさめ　年寄つた女。又姑の義ともいふ。

かへし　　　　むこ

數ならぬ身のみ物うく思ほえて待たるゝまでもなりにけるかな

常にまらでくとてうるさがりて隱れければ遣はしける　　讀人しらず

ありときく音羽の山のほとゝぎす何かくるらむなく聲はして

物にこもりたるにしりたる人のつぼねならべて正月おこなひていづる曉
にいときたなげなるしたうづを落したりけるを取りて遣はすとて

あしのうらのいときたなくも見ゆるかな波は寄せても洗はざりけり

題しらず

人心たとへて見ればしらつゆの消ゆるまもなほ久しかりけり

世の中といひつるものは陽炎(かげろふ)のあるかなきかの程にぞ有りける

友達に侍りける女年久しく賴みて侍りける男にとはれず侍りければもろ
ともに歎きて

かくばかりわかれのやすき世の中に常とたのめる我ぞはかなき

つねになき名立ち侍りければ　　伊勢

塵にたつ我が名きよめむもゝしきの人の心をまくらともがな

あだ名たちていひ騷がれける頃ほのかに聞きてあはれいかにとぞとひ

○したうづ　裝束の時に靴の下にはくもの。くつした。襪。
○あしのうら　足の裏を蘆の生えた浦にかけたもの。

○人心云々　人の心は常に變るものといふ意。

○世の中云々　世の中は極めてはかないものといふ意。
○常とたのめる　常住と賴んだ。いつまでも變らぬと賴んだ。

○えこそあらぬものなれ　ありえないものである。

侍りければ　　小町がむまご

憂き事を忍ぶるあめのしたにしてわれ濡衣(ぬれぎぬ)はほせどかわかず

鄰なりける琴をかりて返す序(ついで)に　　讀人しらず

あふことのかたみの聲の高ければわがなくねとも人はきかなむ

題しらず

涙のみしる身のうさも語るべくなげく心をまくらともがな

物思ひける頃　　伊勢

あひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるゝがほなる

ある所にて簾(す)のまへにかれこれ物語し侍りけるを聞きてうちより女の聲にてあやしく物のあはれしりがほなる翁かなといふを聞きて　　貫之

あはれてふ事にしるしはなけれども言はではえこそあらぬものなれ

女友だちの常にいひかはしけるを久しう音づれざりければ十月(かみなづき)ばかりにあだ人の思ふといひし言の葉はといふ古ごとをいひ遣はしたりければ竹の葉にかきつけてつかはしける　　讀人しらず

移ろはぬ名に流れたる河竹のいづれのよにか秋を知るべき

題しらず　　贈太政大臣

深き思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる

かへし　　伊勢

心なき身は草葉にもあらなくにあきくる風にうたがはるらむ

題しらず　　讀人しらず

身のうきを知ればはしたになりぬべみ思へば胸の焦れのみする

雲路をもしらぬわれさへ諸聲(もろごゑ)にけふばかりとぞなき歸りぬる

まだきからおもひこき色にそめむとや若紫のねをたづぬらむ

伊勢

見えもせぬ深き心をかたりては人にかちぬとおもふものかは

伊勢が亭子院にまゐりてさぶらひけるに御ときのおろしたまはせたりければ

伊勢の海に年へて住みし蜑なれどかかるみるめは潛かざりしを

粟田の家にて人に遣はしける　　兼輔朝臣

あしびきの山のやどりのかひもなし峯の白雲たちしよらねば

左大臣の家にてかれこれ題をさぐりて歌よみけるに露といふ文字をえ侍

○秋風ふきてちりぬる　言の葉と云つたので散ると結んだもの。

○はしたに　中途はんぱに。

○諸聲　もろともに呼ぶ聲。

○御ときのおろし云々　御衣のふるいのを賜はるといふ意。

○山のやどりのかひもなし　山に宿つた甲斐もないといふを山の峽もないといふにかけたもの。
○題をさぐりて云々　探題を云つたもの。

りて

われならぬ草葉もものはおもひけり袖よりほかにおける白露　　藤原忠國

人のもとに遣はしける　　伊勢

人心あらしのかぜのさむければこのめもみえず枝ぞしをるゝ

こと人をあひかたらふと聞きてつかはしける　　讀人しらず

うきながら人を忘れむことかたみ我が心こそかはらざりけれ

ある法師の源等朝臣の家にまかりてずゝのすがりをおとしおけるを朝(あした)におくるとて

うたゝねの牀にとまれる白玉は君がおきつる露にやあるらむ

かへし

かひもなき草の枕におく露のなにに消えなで落ちとまるらむ

題しらず

思ひやる方もしられずくるしきは心まどひのつねにやあるらむ

昔を思ひ出でてむら子の内侍につかはしける　　左大臣

鈴蟲におとらぬ音こそなかれけれ昔のあきをおもひやりつゝ

ひとり侍りけるころ人の許よりいかにぞととぶらひて侍りければ朝顏の

○うきながら　憂きながら。悲しくつらい事ではあるが。

○ずゝのすがり　珠數の總の綱のやうに編んであるところ。

花につけて遣はしける　　讀人しらず

ゆふぐれの寂しきものは朝顔の花をたのめる宿にぞありける

左大臣のかかせ侍りけるさうしのおくに書きつけ侍りける　　貫之

柞山(ははそやま)みねのあらしの風をいたみふる言の葉をかきぞあつむる

題しらず　　小町があね

世の中を厭ひてあまの住むかたもうきめのみこそ見え渡りけれ

昔あひ知りて侍りける人のうちに侍ひけるがもとに遣はしける　　伊勢

山川のおとにのみきく百敷(もゝしき)をみをはやながら見るよしもがな

人に忘られたりと聞く女のもとに遣はしける　　讀人しらず

世の中はいかにやいかに風の音をきくにも今はものや悲しき

かへし　　伊勢

世の中はいさともいさや風の音は秋にあきそふ心地こそすれ

題しらず　　讀人しらず

譬へくる露と等(ひと)しき身にしあれば我が思ひにも消えむとやする

つらかりける男のはらからのもとに遣はしける

さゝがにの空にすがける絲よりも心細しや絶えぬとおもへば

○さうし　冊子。巻物に對して綴ぢた書籍をいふ。

○いかにやいかに　いかにといふを強く云つたもの。

○秋にあきそふ心地　秋の上に更に秋が添ふ心地。非常に悲しいといふ意。

○すがける絲　蜘蛛の巣をはつた絲。

かへし

風ふけば絶えぬと見ゆる蜘(くも)の絲(い)も又かきつかでやむとやはきく

伏見といふ處にて　　均子内親王

名に立ててふしみの里といふ事は紅葉を牀にしけばなりけり

題しらず　　山田法師

我もおもふ人も忘るなありそ海のうら吹く風のやむ時もなく

神無月(かみなづき)のついたち頃妻のみそか男したりけるを見つけいひなどしてつとめて　　讀人しらず

あしびきの山下とよみなく鳥もわがごとたえず物思ふらめや

今はとてあき果てられし身なれども霧たつ人をえやは忘るゝ

十月ばかり昔面白かりし所なればとて北山のほとりにこれかれ遊び侍りけるついでに　　兼輔朝臣

思ひ出てきつるもしるくもみぢ葉の色は昔にかはらざりけり

おなじ心を　　坂上是則

峯高み行きても見べきもみぢ葉を我がゐながらも插(かざ)しつるかな

○ふしみ　伏して見るの意。

○山下とよみなく鳥　山下をとよもして鳴く鳥。山下を響きとゞろかせて鳴く鳥。

○あき果てられて　飽き果てられたといふに、秋が終つたの意を通はせたもの、十月は冬のはじめである。

○霧たつ人　隔心の出來た人。

しはすばかりにあづまよりまうできける男の許より京にあひ知りて侍りける女の許に正月ついたちまで音づれず侍りければ

讀人しらず

待つ人はきぬと聞けどもあらたまの年のみ越ゆるあふ坂の關

後撰和歌集　卷第十九

離別歌

みちのくにへまかりける人に火うちを遣はすとて書きつけける　　　貫　之

をりくにうちてたく火の煙あらば心さすがを忍べとぞ思ふ

あひ知りて侍りける人の東の方へまかりけるに櫻の花のかたに幣をさして遣はしける　　　讀人しらず

あだ人の手向にをれる櫻花あふさかまでは散らずもあらなむ

遠くまかりける人に餞し侍りける時にて　　　橘　直　幹

思ひやるこゝろばかりはさはらじを何へだつらむみねの白雲

下野にまかりける女に鏡にそへてつかはしける　　　讀人しらず

ふたご山ともに越えねどます鏡そこなる影をたぐへてぞやる

信濃へまかりける人にたきもの遣はすとて　　　す　る　が

信濃なるあさまの山も燃ゆなればふじの煙のかひやなからむ

遠き所へまかりける友達に火うちにそへて遣はしける　　　讀人しらず

○心さすが　こゝろざしておくつたもの。

○あふさかまでは　逢坂までは。再び逢ふまでは。

○ふじの煙のかひやなからむ　するがといふ自分の名によつて云つたもの　わが思ひも甲斐ないことだらうの意。

このたびも我を忘れぬものならばうちみむたびに思ひ出でなむ

京に侍りける女子をいかなる事か侍りけむ心うしとて留め置きて因幡國へまかりければ　　むすめ

うちすてて君しいなばの露の身は消えぬばかりぞありと賴むな

伊勢へまかりける人疾く去なむと心もとながると聞きて旅の調度などとらする物からたゞら紙にかきてとらする名をば馬といひけるに

をしと思ふ心はなくてこのたびは行く馬に鞭をおほせつるかな

かへし

君が手をかれゆく秋のすゑにしも野飼にはなつ馬ぞかなしき

同じ家に久しう侍りける女の美濃の國に親侍りけるとぶらひにまかりけるに　　藤原清正

今はとて立ちかへりゆくふるさとの不破の關屋に都わするな

遠き所にまかりける人に旅の具つかはしける鏡の箱のうらに書きつけて遣はしける　　大窪則善

身をわくることの難さにます鏡かげばかりをぞ君にそへつる

このたびのいでたちなむ物うく覺ゆるといひければ　　讀人しらず

○君しいなばの　君が往なばに因幡をかけたもの。○消えぬばかりぞ　たゞ消えずにあるといふに過ぎぬ。○旅の調度　旅行に要する具。

○身をわくる云々　身をわけることは出來ぬから。

初鴈のわれもそらなる程なれば君もものうき旅にやあるらむ

あひしりて侍りける女の人の國にまかりけるにつかはしける　　公忠朝臣

いとせめて戀しきたびの唐ころもほどなくかへす人もあらなむ

かへし　　女

唐衣たつ日をよそにきく人はかへすばかりのほども戀ひじを

三月ばかりに越の國へまかりける人に酒たうべけるついでに　　讀人しらず

戀しくばことづてもせむ歸るさの鴈がねはまづ我が宿になけ

善祐法師伊豆の國に流され侍りけるに　　伊勢

別れてはいつあひ見むと思ふらむかぎりある世の命ともなし

題しらず　　讀人しらず

そむかれぬ松の千年の程よりもとも〴〵とだに慕はれぞせし

かへし

とも〴〵と慕ふなみだのそふ水はいかなるいろに見えて行くらむ

亭子院の帝おりゐ給うける年の秋弘徽殿（こきでん）のかべに書きつける　　伊勢

別るれどあひもをしまぬ百敷を見ざらむことのなにか悲しき

帝御覽じて御かへし

○人の國　よその國。他國。

○歸るさ　歸り。歸途。

身一つにあらぬばかりをおしなべて行き廻りてもなどか見ざらむ

みちのくにへまかりける人に扇調(てう)じて歌繪に書かせ侍りける　讀人しらず

別れゆく道のくもゐになりゆけばとまる心もそらにこそなれ

宗于の朝臣のむすめみちのくにへ下りけるに

いかでなほ笠取山に身をなして露けきたびに添はむとぞおもふ

かへし

笠とりの山とたのみし君をおきて涙の雨にぬれつゝぞ行く

をとこの伊勢の國へまかりけるに

きみが行くかたにありてふ涙川まづは袖にぞながるべらなる

旅にまかりける人に裝束つかはすとて添へて遣はしける

袖ぬれてわかれはすとも唐ころもゆくとな言ひそきたりとを見む

かへし

わかれぢは心もゆかずからころもきては涙ぞさきにたちける

旅にまかりける人に扇つかはすとて

そへてやる扇の風し心あらばわがおもふ人の手をなはなれそ

友則がむすめのみちのくへまかりけるにつかはしける　滋幹が女

○くもゐ　遠くなる、遙かになるの意。

○笠取山に身をなして　身を笠にして。旅に出るには笠をはなすことは出來ぬので。

○涙のあめに云々　笠をおいて雨にぬれて行く、君をおいて涙にぬれつゝ行くとかけたもの。

○きたりとを見む　著たりとを見むと云つて、來たと見ようといふ意を含めたもの。

○心もゆかず　ゆくとな言ひそに對して云つたもの。心が晴れぬ、氣がすゝまない。

○しのぶの里　忍ぶに信夫の里をかけたもの。信夫は陸奥にある。
○あひづ山　會津山。陸奥國に在る。
○いさきよいこ　いさ一本になし　きよいこは名。
○年をへてあひみる人の云々　多くの年を經た後に逢ふことの出來る人とのわかれ。

○いやしき名　罪があると云つて官位を下げられたといふ噂。

○あからさまに　にはかに。急に
○こゝろざす　こゝろむけをして贈る。
○思ひつるが　敦賀を詠み込んだもの。
○かへるの山　歸山。越前國にある。
○いつはた　伊津波多は越前國に在り、敦賀をうけたのである。而して何時將とかけた。

君をのみしのぶの里へ行くものをあひづの山の遙けきやなぞ

つくしへまかるとていさきよいこの命婦におくりはべりける　　小野好古朝臣

年をへてあひみる人のわかれには惜しきものこそ命なりけれ

出羽よりのぼりけるにこれかれむまのはなむけしけるにかはらけとりて　　源　済

行くさきを知らぬ涙の悲しきはたゞめのまへに落つるなりけり

平高遠がいやしき名とりて人の國へまかりけるに忘るなといへりければ

高遠が妻のいへる

忘るなといふにながるゝ涙川うき名をすゝぐ瀬ともならなむ

あひしりて侍りける人のあからさまに越の國へまかりけるに幣こゝろざすとて　　讀人しらず

我をのみ思ひつるがのこしならばかへるの山は惑はざらまし

かへし

君をのみいつはたと思ひこしなれば往來の道は遙けからじを

秋旅にまかりける人に幣をもみぢの枝につけてつかはしける

秋ふかく旅ゆく人のたむけにはもみぢにまさる幣はなかりき

西四條の齋宮の九月晦日くだり侍りける.ともなる人にぬさ遣はすとて　大輔

もみぢ葉を幣とちらしてたむけつゝ秋とともにや行かむとすらむ

物へまかりける人に遣はしける　伊勢

待ちわびて戀しくならばたづぬべく跡なき波の上ならで行け

題しらず　贈太政大臣

來むといひて別るゝだにもある物をしられぬ今朝のまして侘しき

かへし　伊勢

さらばよと別れしときにいはませば我も涙におぼほれなまし

讀人しらず

春霞はかなく立ちて別るとも風よりほかにたれか訪ふべき

かへし　伊勢

めに見えぬかぜに心をたぐへつゝやらば霞のへだてこそせめ

甲斐へまかりける人につかはしける

きみが代はつるの郡にあえてきね定めなき世のうたがひもなく

船にて物へまかりける人に遣はしける

○おぼほれなまし　溺れよう。

○はかなく立ちて別るとも　春霞が立つといふに、はかなく立ちわかれてゆくと云ひかけたもの。

○かぜに心をたぐへつゝ　風に心を添へて。

○あえて　あやかつて。

おくれずぞ心にのりてこがるべき波にもとめよ船みえずとも

かへし　　讀人しらず

船なくば天の川までもとめてむ漕ぎつゝ汐のなかにきえずば

船にて物へまかりける人

かねてより涙ぞ袖をうちぬらすうかべる船にのらむとおもへば

かへし　　伊勢

おさへつゝ我は袖にぞせきとむる船こす汐になさじと思へば

遠き所にまかるとて女の許につかはしける　　貫之

忘れじとことに結びてわかるれば逢ひみむまでは思ひみだるな

羇旅歌

ある人いやしき名とりて遠江の國へ罷るとて泊瀬川を渡るとてよみ侍りける　　讀人しらず

泊瀬川わたる瀬さへや濁るらむ世にすみ難き我が身と思へば

たはれ島をみて

名にしおはばあだにぞ思ふたはれ島波の濡衣いく世きぬらむ

○おさへつゝ　涙をおさへつゝ。

○いやしき名　わるい名。罪によつて官名を下げられたといふ噂。

○世にすみ難き　住み難きに澄み難きをかけたもの。

○名にしおはば　たはれといふ名を負うてゐるならば。たはれは、みだりがましくふるまふこと。

東(あづま)の方へまかりけるに過ぎぬるかた戀しく覺えける程に川を渡りけるに波の立ちけるを見て　業平朝臣

いとゞしく過ぎ行くかたのこひしきに羨ましくもかへる波かな

白山へまうでけるに道中よりたよりの人につけて遣はしける　讀人しらず

みやこまで音にふりくる白山はゆきつきがたきところなりけり

○ゆきつきがたき　行き著きにくいこゝろの意に、ふりくるを受けて雪の意を通はせたもの。

中原宗興が美濃の國へ罷り下り侍りける道に女の家に宿りていひつきてさりがたく覺え侍りければ二三日侍りてやんごとなき事によりてまかり立ちければきぬを包みてそれが上にかきて送り侍りける　中原宗興

山里の草葉の露はしげからむみのしろごろも縫はずともきよ

土佐よりまかりのぼりける船のうちにて見侍りけるに山の端ならで月の波の中より出づるやうに見えければ昔安倍仲麿がもろこしにてふりさけみればといへる事をおもひやりて　貫之

みやこにて山の端にみし月なれど海より出でて海にこそいれ

（昔安倍仲麿が云々「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。」の歌をさしたもの

法皇宮の瀧といふ所御覽じける御供にて　菅原右大臣

みづひきの白絲はへて織るはたを旅のころもにたちや重ねむ

道まかりける序にひぐらしの山をまかり侍りて

○山のべ　山邊といふ地名に、山のほとりの意をかけたもの。
○水もせに云々　紅葉が水の上一面に浮いてゐる時は。
○うちのとのとも　柵の內の外のともの意を宇治の殿ともに通はせたもの。
○花さきて　白波を波の花といふ所から、これを花と云つたもの。

○道俗　僧と俗人。
○けふ〳〵とのみ　けふこそけふこそとしきりに。

日ぐらしの山路を暗み小夜ふけて木の末ごとに紅葉てらせる

初瀬へ詣づとて山のべといふわたりにてよみ侍りける　伊勢

くさまくら旅となりなば山のべに白雲ならぬわれややどらむ

宇治殿といふ所を

水もせにうきたるときは柵のうちのとのとも見えぬもみぢ葉

海のほとりにてこれかれ逍遙し侍りけるついでに　小町

花さきて實ならぬものはわたつみのかざしにさせる沖つ白波

東なる人の許へまかりける道に相摸の足柄の關にて女の京にまかり上りけるにあひて　眞靜法師

足柄の關のやまぢを行く人はしるも知らぬもうとからぬかな

法皇遠き所に山ぶみし給ひて京に歸り給ふに旅のやどりし給うて御供にさぶらふ道俗に歌よませ給ひけるに　僧正聖寶

人ごとにけふ〳〵とのみ戀ひらるゝ都近くもなりにけるかな

土佐より任はててのぼり侍りけるに船の中にて月を見て　貫之

照る月の流るゝ見れば天の川いづるみなとは海にぞありける

題しらず　亭子院御製

くさまくら紅葉むしろにかへたらば心をくだくものならましや

京に思ふ人侍りて遠き所よりかへりまうで來ける道にとゞまりて九月ばかりに

讀人しらず

思ふ人ありて歸ればいつしかのつま待つよひの秋ぞかなしき

草枕ゆふ手ばかりはなになれや露もなみだもおきかへりつゝ

宮の瀧といふ所に法皇おはしましたりけるにおほせごとありて

素性法師

秋山にまどふ心をみやたきの瀧のしらあわに消(け)ちやはててむ

一いつしかの　いつしかといふに鹿の妻待つ宵とかけたもの。

後撰和歌集　巻第二十

慶賀歌

女八のみこ元良のみこのために四十の賀し侍りけるに菊の花をかざしに折りて　　藤原伊衡朝臣

萬代のしもにもかれぬ白菊をうしろやすくもかざしつるかな

典侍あきらけいこ父の宰相のために賀し侍りけるに玄朝法師の裳唐衣ぬひて遣はしければ　　典侍あきらけいこ

雲わくるあまの羽衣うちきては君がちとせにあはざらめやは

題しらず　　太政大臣

今年より若菜にそへて老の世に嬉しきことをつまむとぞ思ふ

章明親王かうぶりしける日あそびし侍りけるに右大臣かれこれ歌よませ侍りけるに　　貫之

琴の音も竹もちとせのこゑするは人のおもひも通ふなりけり

賀のやうなる事し侍りけるところにて　　讀人しらず

○うしろやすくも　心配なしに。あとに心が残らずに。

○つまむとぞ　若菜を摘むと嬉しいことを摘むと両方にかけたもの

○かうぶり　うひかうぶりの畧。はじめて冠を被ること。元服。

○琴の音も竹も　琴は絃、竹は管で、共に樂器。

○ちとせのこゑ　萬秋樂千秋樂等の音を云つたもの。

百年と祝ふをわれは聞きながら思ふが爲はあかずぞありける

左大臣の家のをの子をんな子からうぶりし裳著侍りけるに　　貫之

大原やをしほのやまの小松原はや木だかかれ千世のかげみむ

人のからぶりする所にて藤の花をかざして　　讀人しらず

うちよする波のはなこそ咲きにけれ千世まつ風や春になるらむ

女の許につかはしける

君がため松の千年も盡きぬべしこれよりまさる神のよもがな

年星(ねんさう)おこなふとて女檀越(によだんをち)のもとよりずゝをかりて侍りければ加へてつかはしける　　惟濟法師

百年にやとせをそへていのりける玉のしるしを君みざらめや

左大臣の家にけふそく心ざしおくるとてくはへける　　僧都仁教

けふそくをおさへてまさへ萬世にはなのさかりを心しづかに

今上帥(そち)のみこと聞えし時太政大臣の家にわたりおはしまして歸らせたまふ御おくりものに御本奉るとて　　太政大臣

君がため祝ふ心のふかければひじりの御代のあとならへとぞ

御かへし　　今上御製

○裳著　女子が成長して裳を著そめる式。裳は女の腰から下に著けるもので、唐衣の下袴の上に著ける。
○はや木だかかれ　はやく成長なされよ。
○波のはな　藤波の花。藤の花。
○年星　自分の生まれ年の星を祭ること。
○女檀越　女の施主。
○けふそく　脇息。
○まさへ　ませの延言。おはせ。
○ひじりの御代　聖天子の御代。

敎へおくことたがはずば行末の道とほくともあとはまどはじ

今上海壺におはしましし時たき木こらせて奉り給ひける

山人のこれるたき木は君がためおほくの年をつまむとぞおもふ

御かへし　御製

年の數つまむとすなる重荷にはいとゞ小附（こづけ）をこりもそへなむ

東宮の御前にくれ竹うゑさせたまひけるに　清正

君がためうつして植うる呉竹（くれたけ）にちよもこもれる心地こそすれ

院の殿上にて宮の御かたより碁盤いださせ給ひけるごいしのふたに　命婦清子

斧の柄のくちむもしらず君が代のつきむ限りはうちこゝろみよ

西四條のみこの家の山にて女四のみこのもとに　右大臣

なみたてる松の緑の枝わかずをりつゝ千代をたれとかは見む

十二月（しはす）ばかりにかうぶりする所にて　貫之

祝ふ事ありとなるべし今日なれど年のこなたに春もきにけり

哀傷歌

○山人のこれるたき木　仙人の伐つた薪。

○小附　或荷物の上に別に添へる小さい荷。

○斧の柄のくちむもしらず　晉の王質が山に入つて碁を見てゐた間に斧の柄が朽ち幾多の年月が經てゐたといふ故事。

○春もきにけり　祝事を春と云つたもの。

〇ぶく　服。喪服を著て喪にこもつてゐる間。

〇はてのころ　忌の終り頃。四十九日の近く。

敦敏が身まかりにけるをまだ聞かであづまより馬を送りて侍りければ　左大臣

まだしらぬ人もありけり東路にわれも行きてぞ住むべかりける

兄のぶくにて一條にまかりて　太政大臣

春の夜の夢のうちにもおもひきや君なき宿をゆきて見むとは

かへし

宿みればねてもさめても戀しくて夢現ともわかれざりけり

先帝おはしまさで世の中を思ひ嘆きて遣はしける　三條右大臣

はかなくて世にふるよりは山階（やましな）の宮の草木とならましものを

かへし　兼輔朝臣

山階の宮のくさきと君ならばわれはしづくに濡るばかりなり

時望朝臣みまかりて後はてのころ近くなりて人のもとよりいかに思ふらむといひおこせたりければ　時望朝臣妻

別れにしほどをはてともおもほえず戀しきことの限りなければ

女四のみこの文の侍りけるに書きつけて内侍のかみにおくり侍りける　右大臣

〇忍の草をつむ　忍ばれる。

〇いたづらに今日や暮れなむ　新春の元日ながら諒闇であるので何の樂しいことさへせずに今日を送つてしまふことであらう。
〇なく涙云々　泣く涙の雨と降つた去年の袖は。
〇あたらしきにも　新しい年にも
〇人の世の云々　人の世が自分の思ひ通りになるものならば。

種もなき花だにちらぬ宿もあるをなどか形見のこだになからむ

かへし　　　　内侍のかみ

結びおきし種ならねども見るからにいとゞ忍の草をつむかな

女四のみこの事とぶらひ侍るとて　　　　伊勢

こゝら世をきくがなかにも悲しきは人の涙もつきやしぬらむ

かへし　　　　讀人しらず

聞くひとも哀れてふなるわかれにはいとゞ涙ぞつきせざりける

先帝おはしまさでの又の年の正月一日に送り侍りける　　　　三條右大臣

いたづらに今日や暮れなむ新しきはるのはじめは昔ながらに

かへし　　　　兼輔朝臣

なく涙ふりにしとしの衣手はあたらしきにもかはらざりけり

かさねて遣はしける　　　　三條右大臣

人の世のおもひにかなふものならば我が身は君に後れましやは

女のみまかりて後すみ侍りける所の壁に彼の侍りける時書きつけて侍りける手を見て　　　　兼輔朝臣

寐ぬゆめに昔のかべを見てしよりうつゝに物ぞ悲しかりける

あひしりて侍りける女のみまかりにけるを戀ひ侍りけるあひだに夜ふけてをしの鳴きければ　閑院左大臣

ゆふされば音になく鴛のひとりして妻ごひすなる聲の悲しさ

七月ばかりに左大臣の母みまかりにける時におもひに侍りけるあひだ后の宮より萩の花を折りて給へりければ　太政大臣

女郎花かれにし野邊にすむ人はまづさく花をまたでともみず

なくなりける人の家にまかりてかへりてのあしたにかしこなる人に遣はしける　伊勢

なき人のかげだに見えぬやり水のそこに涙をながしてぞこし

大和に侍りける母みまかりて後かの國へまかるとて

ひとりゆく事こそうけれ故鄕のならのならびて見し人もなみ

法皇の御ぶくなりける時にび色のさいでに書きて人におくり侍りける　京極御息所

墨染のこきもうすきも見るときは重ねてものぞかなしかりける

女四のみこのかくれ侍りにける時　右大臣

きのふまで千世と契りし君をわがしでの山路に尋ぬべきかな

○をし　鴛鴦。

○おもひ　喪。

○ならのならびて　大和の緣から奈良と云ひ、それを受けてならびてと云つたもの。竝びて見し人は母をさして云ふ。

○にび色のさいで　薄墨色の小ぎれ。

先坊うせ給ひての春大輔につかはしける　　玄上朝臣女

あらたまのとし越えつらしつねもなき初鶯のねにぞなかるゝ

かへし　　大輔

音にたてゝなかぬ日はなし鶯のむかしの春を思ひやりつゝ

同じ年の秋　　玄上朝臣女

もろともにおきゐし秋の露ばかりかゝらむものと思ひかけきや

清正が枇杷大臣のいみにこもりて侍りけるにつかはしける　　藤原守文

世の中のかなしきことをきくのうへにおく白露ぞ涙なりける

かへし　　清正

きくにだに露けかるらむ人のよをめにみし袖を思ひやらなむ

兼輔朝臣なくなりて後土佐の國よりまかりのぼりて彼の粟田の家にて　　貫之

植ゑおきし二葉の松はありながら君がちとせのなきぞ悲しき

そのついでにかしこなる人

君まさで年はへぬれど故郷につきせぬものはなみだなりけり

人のとぶらひにまうできたりけるに早くなくなりにきといひ侍りければ

○先坊　さきの東宮。

○むかしの春　昔の春と併せて先の春宮の意を含めたもの。

○かゝらむもの　露がかかると、このやうになるとを通はせたもの

○かなしきことをきくのうへに　悲しい事を聞く、菊の上に。

楓の紅葉にかきつけ侍りける　　戒仙法師

過ぎにける人を秋しもとふからに袖はもみぢの色にこそなれ

なくなりて侍りける人のいみにこもりて侍りけるに雨のふる日人のとひて侍りければ　　讀人しらず

袖かわく時なかりける我が身にはふるを雨ともおもはざりけり

人のいみはててもとの家にかへりけるに

故鄕にきみはいづらと人とはばいづれのそらの霞といはまし

敦忠朝臣みまかりて又の年かの朝臣の小野なる家みむとてこれかれまかりて物語し侍りけるついでによみ侍りける　　淸正

君がいにし方やいづれぞ白雲のぬしなき宿と見るぞかなしき

親のわざしに寺にまうできたりけるを聞きつけて諸共にまうでましものをと人のいひければ　　讀人しらず

わび人のたもとに君がうつりせば藤の花とぞ色は見えまし

かへし

よそにをる袖だにひぢし藤衣なみだに花も見えずぞあらまし

題しらず　　伊勢

○袖はもみぢの色に　血の涙で袖がそまるといふ意。

○親のわざ　親の法事。

○藤の花とぞ　藤衣を著てゐる袂にうつるので藤の花と云つたもの

程もなく誰も後れぬ世なれどもとまるは行くを悲しとぞ見る

人をなくなして限りなく戀ひて思ひいりて寐たる夜の夢にみえければ思ひける人にかくなむと言ひ遣はしたりければ　　玄上朝臣女

時のまもなぐさめつらむ覺めぬまは夢にだに見ぬわれぞ悲しき

かへし　　大輔

悲しさの慰むべくもあらざりつ夢のうちにもゆめと見ゆれば

在原としはるがみまかりにけるを聞きて　　伊勢

かけてだに我が身の上と思ひきやこむとし春の花を見じとは

一つがひ侍りける鶴の一つがなくなりければとまれるがいたくなき侍りければ雨のふり侍りけるに

なく聲にそひて涙はのぼらねど雲のうへより雨とふるらむ

妻のみまかりての年のしはすのつごもりの日ふるごといひ侍りけるに　　兼輔朝臣

なき人の共にしかへる年ならば暮れゆく今日は嬉しからまし

かへし　　貫之

戀ふるまに年のくれなばなき人の別れやいとゞとほくなりなむ

○程もなく　間もなく。

○とまれるが　殘つた鶴が。

○共にしかへる年　年がかへつて春になるが、それと共に死んだ人もまた歸つて來るならば。

後撰和歌集　終

拾遺和歌集

拾遺和歌集　卷第一

春

平貞文が家の歌合によみ侍りける　　壬生忠岑

春立つといふばかりにやみよし野の山も霞みて今朝は見ゆらむ

承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風の歌　　紀文幹

春霞たてるを見ればあらたまの年はやまより越ゆるなりけり

霞をよみ侍りける　　山邊赤人

きのふこそ年はくれしか春がすみ春日の山にはや立ちにけり

冷泉院東宮におはしましける時歌奉れとおほせられければ　　源重之

吉野山みねの白雪いつ消えて今朝はかすみの立ちかはるらむ

延喜の御時月次(つきなみ)の御屏風に　　素性法師

あら玉のとしたちかへるあしたより待たるゝものは鶯のこゑ

天暦の御時歌合に　　源順

氷だにとまらぬ春のたに風にまだうち解けぬうぐひすの聲

○春立つといふばかりに　春が來たといふだけで。

○いつ消えて　いつの間に消えて

○立ちかはる　雪のかはりに霞がかゝる意。

○月次の御屏風　十二箇月のことを畫がいた御屏風。

題しらず　平祐擧

春たちてあしたの原の雪みればまだふる年のこゝちこそすれ

貞文が家の歌合に　躬恒

春たちてなほふる雪は梅の花さくほどもなく散るかとぞ見る

題しらず　讀人しらず

わがやどの梅にならひてみ吉野のやまの雪をも花とこそ見れ

天暦十年三月二十九日内裏歌合に　中納言朝忠

うぐひすの聲なかりせば雪きえぬ山里いかで春を知らまし

鶯をよみ侍りける　大伴家持

うちきらし雪は降りつゝしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく

題しらず　柿本人丸

梅の花それとも見えず久方のあまぎるゆきのなべて降れれば

延喜の御時宣旨にてたてまつれる歌の中に　貫之

梅が枝に降りかゝりてぞ白雪の花のたよりに折らるべらなる

同じ御時の御屏風に　躬恒

降る雪に色はまがひぬ梅の花香にこそ似たるものなかりけれ

○まだふる年のこゝち　まだ雪の降る舊年の心持。

○さくほどもなく　咲くと間もなく。

○やまの雪をも云々　わが宿では雪が消えて梅が咲いてゐるので、山でも雪が消えたものと考へたのである。

○うちきらし　空がかきくもつて

○あまぎるゆき　空かき曇つて降る雪。

冷泉院の御屏風の繪に梅の花ある家にまらうどきたる所　　平　兼　盛

わが宿の梅の立枝や見えつらむおもひのほかに君が來ませる

齋院の御屏風に　　躬　恒

香をとめてたれ折らざらむ梅の花あやなし霞立ちな隱しそ

桃園に住み侍りける前齋院の御屏風に　　貫　之

白妙の妹がころもにうめのはな色をも香をもわきぞかねつる

題しらず　　人　麿

あすからは若菜摘まむと片岡のあしたの原はけふぞ燒くめる

恆佐右大臣の家の屏風に　　貫　之

野邊みれば若菜摘みけりうべしこそ垣根の草も春めきにけれ

若菜を御覽じて　　圓融院御製

春日野(かすがの)におほくの年は摘みつれど老いせぬものは若菜なりけり

題しらず　　大　伴　家　持

春の野にあさるきゞすの妻戀におのがありかを人に知れつゝ

おほきさいの宮に宮內といふ人の童なりける時醍醐の帝の御前に侍ひける程に御前なる五葉に鶯の鳴きければ正月初子の日つかうまつりける

○あやなし霞云々　霞が立ちかくしても香があるのですぐわかるから、何の役にも立たぬ、霞よ立ちかくすな。

○うべしこそ　いかにも尤もである。

○あさるきゞす　餌を求めあるく雉子。

○妻戀に　妻を慕うて鳴く聲に。

○人に知れつゝ　人に知られつゝの意。

○はつねの日　鶯の初音の日と初めの子の日とをかけたもの。
○摘みたむる　若菜を摘んでためる。
○とがむばかりの　とがめる程の。
○木づたひちらす　木づたひをして、その羽風で散らす。
○うしろめたさに　氣にかゝるので。こゝろもとなさに。

松のうへに鳴く鶯の聲をこそはつねの日とはいふべかりけれ

忠岑

題しらず

子の日する野邊に小松のなかりせば千世のためしに何をひかまし

大中臣能宣

入道式部卿のみこの子の日し侍りける所に

千年までかぎれる松もけふよりはきみにひかれて萬代やへむ

貫之

延喜の御時の御屛風に水のほとりに梅の花見たる所

梅の花まだ散らねども行く水のそこにうつれる影ぞ見えける

讀人しらず

題しらず

摘みたむることのかたきは鶯のこゑする野邊の若菜なりけり

梅の花よそながら見む吾妹子（わぎもこ）がとがむばかりの香にもこそしめ

兵部卿元良親王

そで垂れていざ吾がそのに鶯の木（こ）づたひちらす梅のはな見む

躬恆

朝まだき起きてぞみつる梅の花夜のまの風のうしろめたさに

大中臣能宣

吹く風をなにいとひけむ梅の花ちりくるときぞ香はまさりける

にほひをば風にそふとも梅の花色さへあやなあだに散らすな

讀人しらず

ともすれば風のよるにぞ青柳の絲はなか〳〵みだれそめける

屏風に　　大中臣能宣

近くてぞ色もまされる青柳のいとはよりてぞ見るべかりける

題しらず　　凡河内躬恒

青柳のはなだのいとをよりあはせてたえずも鳴くか鶯のこゑ

讀人しらず

花見にはむれて行けども青柳の絲のもとにはくる人もなし

子にまかりおくれて侍りける頃東山にこもりて　　中務

咲けば散るさかねば戀し山ざくら思ひ絕えせぬ花のうへかな

題しらず

よしの山たえず霞のたなびくはひとに知られぬ花やさくらむ

天暦九年内裏歌合に　　讀人しらず

咲きさかずよそにても見む山櫻みねのしら雲たちなかくしそ

題しらず

○風のよるにぞ　風が吹きかゝるので。

○よりて　絲の緣語撚りてに近寄りをかけたもの。

○はなだのいと　はなだ色の絲。淺葱色の絲。

○思ひ絕えせぬ　散るを惜しみ咲くをまつ思ひ。

○花のうへ　花のことといふ意。

○咲きさかず　咲いたか咲かないかを。

吹く風にあらそひかねてあしびきの山の櫻はほころびにけり

菅家萬葉集の中　　讀人しらず

あさみどり野邊の霞はつゝめどもこぼれてにほふはな櫻かな

題しらず

吉野やまきえせぬゆきと見えつるは峯つゞき咲くさくらなりけり

天暦の御時麗景殿の女御と中將の更衣と歌合し侍りけるに　　清原元輔

春霞たちなへだてそ花ざかり見てだに飽かぬ山のさくらを

平貞文が家の歌合に　　忠岑

春は猶われにて知りぬ花ざかりこゝろのどけき人はあらじな

賀の御屏風に　　藤原千景

咲きそめていくかへぬらむ櫻花いろをば人にあかず見せつゝ

天暦の御時の御屏風に　　忠見

春くればまづぞうち見る石(いそ)の上(かみ)めづらしげなき山田なれども

題しらず　　在原元方

春くれば山田のこほりうち解けてひとの心にまかすべらなり

承平四年中宮の賀し給ひける時の屏風に　　齋宮内侍

○こぼれてにほふ　包みからこぼれると、咲きこぼれるとを通はせたもの。

○われにて知りぬ　自分の心で他の人の心もわかる。

○いくかへぬらむ　幾日たつたらうか。

○山田のこほりうち解けて　山田の氷もとけて、心もうちとけて、兩方にかけたもの。

はるの田を人にまかせてわれはたゞ花に心をつくるころかな

宰相中將敦忠朝臣の家の屏風に　　貫之

あだなれど櫻のみこそ故郷のむかしながらのものにはありけれ

齋院の屏風に山道ゆく人ある所　　伊勢

散りちらず聞かまほしきを故郷の花見てかへる人も逢はなむ

題しらず　　讀人しらず

櫻がり雨はふり來ぬおなじくは濡るとも花のかげにかくれむ

元輔

訪ふ人もあらじとおもひし山里に花のたよりに人め見るかな

圓融院の御時三尺の御屏風に　　平兼盛

花の木を植ゑしもしるく春くれば吾が宿すぎて行く人ぞなき

題しらず　　讀人しらず

櫻色に我が身はふかくなりぬらむこゝろにしみて花を惜しめば

權中納言義懷の家の櫻の花惜しむ歌よみはべりけるに　　藤原長能

身にかへてあやなく花を惜しむかないけらば後の春もこそあれ

題しらず　　讀人しらず

○散りちらず　散つてしまつたかまだ散らずにあるか。○花見てかへる人も逢はなむ　花を見てかへる人に逢ひたいものだ

○花のたより　花が咲いたといふたより。花信。

○いけらば　生きてゐたならば。

見れどあかぬ花のさかりにかへる鴈なほ故郷の花やこひしき
ふる鄕の霞とびわけ行くかりはたびのそらにや春をくらさむ

天曆の御時の御屛風に　　藤原清正

散りぬべき花みるときは菅の根のながき春日もみじかかりけり

題しらず　　讀人しらず

つげやらむ閒にも散りなば櫻花いつはり人にわれやなりなむ

屛風に　　能宣

散りそむる花を見すてて歸らめや覺束なしといもはみるとも

題しらず　　讀人しらず

見もはてで行くとおもへば散る花につけて心のそらになるかな

延喜の御時藤壺の女御の歌合の歌に

朝ごとにわが掃く宿の庭ざくら花ちるほどは手もふれで見む

荒れ果てて人も侍らざりける家に櫻の咲き亂れて侍りけるを見て　　惠慶法師

あさぢ原ぬしなき宿のさくら花こゝろやすくや風に散るらむ

きたの宮の裳著の屛風に　　貫之

春ふかくなりぬとおもふを櫻花ちる木のもとはまだ雪ぞ降る

○散りぬべき花　すぐに散ってしまふだらう花。○菅の根の　ながきにかけて云ふ枕詞。

○覺束なしと　何處で何をしてゐるか心許ないと。

○花ちるほどは　花の散る閒は。

○こゝろやすくや　主ある宿では散るを惜しまれるが、主のない宿では誰も惜しむ人もないから心やすくと云つたのである。○裳著　女が成長して裳を著そめる式。

○空に知られぬゆき　花を云つたもの。

○井手の川なみ立ちかへり　井手の川波の立つところを立ちかへつて。

○そこに見ゆらむ　澤水の底に山吹のかげが見えるのであらう。

亭子院の歌合に　　　　　讀人しらず

櫻ちる木のした風はさむからで空に知られぬゆきぞ降りける

題しらず　　　　　讀人しらず

足引の山路に散れるさくらばな消えせぬ春のゆきかとぞ見る

天曆の御時の歌合に　　　　　小貳命婦

あし引の山がくれなるさくら花散りのこれりと風に知らるな

題しらず　　　　　讀人しらず

岩間をもわけくる瀧の水をいかで散り積む花のせきとゞむらむ

天曆の御時の歌合に　　　　　源順

春ふかみ井手の川なみ立ちかへり見てこそ行かめ山吹のはな

井手といふ所に山吹の花の面白く咲きたるを見て　　　　　惠慶法師

山吹のはなのさかりに井手に來てこのさと人になりぬべきかな

屛風に　　　　　元輔

物もいはでながめてぞ經る山吹のはなに心ぞうつろひぬらむ

題しらず　　　　　讀人しらず

澤水にかはづ鳴くなり山吹のうつろふかげやそこに見ゆらむ

わがやどの八重山吹はひとへだに散り殘らなむ春のかたみに

亭子院の歌合に　坂上是則

花の色をうつしとゞめよかゞみ山はるより後の影や見ゆると

題しらず　讀人しらず

春霞たちわかれ行くやまみちは花こそぬさと散りまがひけれ

年の中はみな春ながら暮れななむ花見てだにも憂き世すぐさむ

延喜の御時の春宮(とうぐう)の御屏風に　貫之

風吹けば方もさだめず散る花をいづかたへ行く春とかは見む

同じ御時月次の御屏風に

花もみな散りぬる宿は行く春のふる里とこそなりぬべらなれ

閏三月侍りけるつごもりに　躬恒

常よりものどけかりつる春なれど今日の暮るゝはあかずぞありける

○みな春ながら云々　一年中いつも春のまゝでゐてほしい。

○方もさだめず　方向もきまらせず。

○常よりものどけかりつる　春が四箇月あつたので長閑であつたと云つたもの。

拾遺和歌集　巻第二

夏

天暦の御時の歌合に　　大中臣能宣

鳴く聲はまだ聞かねども蟬の羽のうすき衣はたちぞきてける

屏風に　　したがふ

わがやどのかきねや春を隔つらむ夏來にけりと見ゆる卯の花

冷泉院の東宮におはしましける時百首歌奉れと仰せられければ　　源重之

花の色にそめし袂の惜しければ衣かへうき今日にもあるかな

夏の初めによみ侍りける　　盛明のみこ

花散るといとひしものを夏衣たつやおそきとかぜを待つかな

百首歌の中に　　重之

夏にこそ咲きかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな

圓融院の御時の御屏風の歌　　平兼盛

すみよしの岸の藤なみ我がやどの松のこずゑに色はまさらじ

○衣かへうき　衣がへをするのが惜しいといふ意。

○花散るといとひしものを　花が散ると風の吹くのをいとうたものを。

紫のふぢ咲くまつの梢にはもとのみどりも見えずぞありける　　したがふ

延喜の御時飛香舎にて藤の花の宴侍りける時に　　小野宮太政大臣

薄くこく亂れて咲ける藤の花ひとしき色はあらじとぞおもふ

題しらず　　躬恒

手もふれでをしむかひなく藤のはな底にうつれば浪ぞ折りける

たごの浦の藤の花を見侍りて　　柿本人麿

たごの浦の底さへにほふ藤浪をかざして行かむ見ぬ人のため

山里の卯の花に鶯の啼き侍りけるを　　平公誠

卯の花を散りにし梅にまがへてや夏の垣ねにうぐひすのなく

題しらず　　讀人しらず

卯の花の咲けるかき根はみちのくのまがきの島の浪かとぞ見る

延喜の御時の月次の御屏風に　　躬恒

神祭る卯月にさける卯の花はしろくもきねがしらげたるかな

貫之

神まつる宿の卯のはな白妙のみてぐらかとぞあやまたれける

○もとのみどり　松の葉の緑。梢一面に藤の花が咲いてゐることを云つたもの。

○まがへてや　見間違へたのであらうか。

○まがきの島　松島にある。

○きねがしらげたるかな　きねは宜禰、神に奉仕する女。併せて杵の意を含めて杵で舂いて白くしたと云つたのである。

○みてぐら　神に奉るもの。ぬさ

○山がつ　山里に住む人。樵夫。

○たわに　たわむほどに。

○はるかけて　春のうちから。

○家に來て　家に歸つて來て。山越えの家苞として時鳥を聞きたいといふのである。

○つげに來るがに　告げ知らせに來て貰ふために。

題しらず　　讀人しらず

山がつのかきねに咲ける卯の花はたがしろたへの衣かけしぞ

時わかず降れる雪かと見るまでにかき根もたわにさけるうの花

はるかけて聞かむともこそ思ひしかやま時鳥おそく啼くらむ

はつごゑのきかまほしさに郭公夜ぶかく目をもさましつるかな

夏山を越ゆとて　　久米廣縄

家に來てなにをかたらむ足引のやまほとゝぎすひとこゑもがな

延喜の御時の御屏風に　　貫之

山ざとに知るひともがな郭公なきぬときかばつげに來るがに

題しらず　　讀人しらず

やま里にやどらざりせば郭公きくひともなき音をや鳴かまし

天暦の御時の歌合に　　坂上望城

ほのかにぞ鳴きわたるなる時鳥み山を出づる今朝のはつこゑ

　　平兼盛

み山いでて夜はにや來つる時鳥あかつきかけて聲のきこゆる

寛和二年の内裏歌合に　　右大將道綱母

都人ねで待つらめやほとゝぎすいまぞ山べを鳴きて出づなる　　坂上是則

女四のみこの家の歌合に

山がつと人はいへどもほとゝぎすまづ初ごゑは我のみぞ聞く　　壬生忠見

天曆の御時の歌合に

さ夜ふけてねざめざりせば郭公人づてにこそ聞くべかりけれ　　伊勢

同じ御時の御屛風に

ふた聲と聞くとはなしに時鳥よぶかく目をもさましつるかな　　源公忠朝臣

北宮の裳著の屛風に

行きやらで山路くらしつほとゝぎすいまひと聲の聞かまほしさに　　貫之

敦忠朝臣の家の屛風に

このさとにいかなる人かいへゐして山郭公たえず聞くらむ　　讀人しらず

延喜の御時の歌合に

五月雨は近くなるらし淀川のあやめのくさもみ草生ひにけり　　大中臣能宣

屛風に

昨日までよそに思ひし菖蒲(あやめ)ぐさ今日わが宿のつまと見るかな　　讀人しらず

題しらず

○山路くらしつ　山路に日を暮した。

○いへゐ　家居。住むこと。

○あやめのくさもみ草生ひ　菖蒲に水草が生ひそはつて。

○今日わが宿のつまと云々　家の軒に菖蒲をさした事を云つたもの

今日みれば玉のうてなもなかりけり菖蒲のくさの庵（いほり）のみして　　延喜御製

あしびきの山時鳥けふとてやあやめのくさのねに立てて鳴く　　讀人しらず

たが袖におもひよそへてほとゝぎすはな橘のえだに鳴くらむ

天暦の御時の御屏風に淀のわたりする人かける所に　　壬生忠見

いづ方に鳴きて行くらむ郭公よどのわたりのまだ夜ふかきに

しけるごと眞孤（まこも）の生ふる淀野には露のやどりを人ぞかりける

小野宮の大臣の家の屏風にわたりしたる所に郭公なきたるかたあるに　　貫之

かのかたにはや漕ぎよせよ郭公みちに鳴きつと人にかたらむ

貞文が家の歌合に　　躬恒

郭公をちかへり鳴けうなゐ子がうちたれがみのさみだれの空

題しらず　　讀人しらず

なけや鳴けたかまのやまの郭公この五月雨に聲なをしみそ

五月雨はいこそ寐られね郭公夜ぶかく鳴かむこゑを待つとて

〇玉のうてなもなかりけり　菖蒲を葺いたので金殿玉樓も庵のやうになつたといふ意。

〇たが袖におもひよそへて　花橘を誰の袖の香とたずらへ考へて。

〇みちに鳴きつ　途中で鳴いた。

〇をちかへり鳴け　元にもどつて鳴け。初めに返つて鳴け。

〇うなゐ子　髮を項に垂れるやうに結んでゐる童子。

〇うちたれがみ　垂れかゝつた童兒の髮。

〇いこそ寐られね　寐られぬ。安眠出來ぬ。

うたて人おもはむものを郭公よるしもなどかわがやどに啼く

大伴坂上郎女

郭公いたくな啼きそひとり居ていの寐られぬに聞けば苦しも

中務

なつの夜のこゝろを知れる郭公はやもなかなむ明けもこそすれ

夏の夜は浦島の子が箱なれやはかなく明けてくやしかるらむ

延喜の御時の中宮の歌合に　　讀人しらず

夏くれば深草山のほとゝぎす鳴くこゑしげく成りまさるかな

春宮(とうぐう)にさぶらひける繪にくらはし山に郭公とびわたりたる所　　藤原實方朝臣

さつきやみくらはし山の郭公おぼつかなくも啼きわたるかな

題しらず　　讀人しらず

郭公なくや五月のみじか夜もひとりし寢(ね)ればあかしかねつも

西宮左大臣の家の屏風に　　源順

ほとゝぎすまつにつけてや照射(ともし)する人も山べに夜をあかすらむ

延喜の御時の月次の御屏風に　　貫之

さつき山木の下闇(したやみ)にともす火は鹿のたちどのしるべなりけり

○はやもなかなむ　はやく鳴いてほしい。

○浦島の子が箱　所謂浦島太郎の玉手箱をいふ。

○くらはし山　大和國十市郡にある。

○照射　狩人が夏、火串に火をつけ、鹿を寄せて射ること。

○鹿のたちど　鹿の立ち處。鹿の立ち場。

九條右大臣の家の賀の屛風に　　平兼盛

怪しくも鹿のたちどの見えぬかなをぐらの山に我や來ぬらむ

女四のみこの家の屛風に　　躬恒

ゆく末はまだとほけれど夏山の木のしたかげは立ち憂かりけり

延喜の御時の御屛風に　　貫之

夏山のかげをしげみや玉ぼこのみちゆき人も立ちとまるらむ

河原院の泉のもとに涼み侍りて　　惠慶法師

松かげの岩井の水をむすびあげて夏なき年とおもひけるかな

家に咲きて侍りける撫子(なでしこ)を人のがりつかはしける　　伊勢

いづくにも咲きはすらめどわが宿のやまと撫子たれに見せまし

題しらず　　讀人しらず

底きよみ流るゝ川のさやかにもはらふることを神は聞かなむ

藤原長能

さばへなす荒ぶる神もおしなべて今日はなごしの祓(はらへ)なりけり

讀人しらず

紅葉せばあかくなりなむをぐら山秋待つ程の名にこそありけれ

〇立ち憂かりけり　立ち去ることがつらい。

〇かげをしげみや　陰が繁つてゐるためであらうか。

〇岩井の水　岩の間から出る水。

〇咲きはすらめど　咲きはするだらうが。

〇さばへなす　うるさく騒ぐ五月頃の蠅のやうだ。

〇なごしの祓　名越の祓。六月晦日の大祓をいふ。併せて、荒ぶるに對して和す祓と云つたもの。

右大將定國の四十の賀に內より屛風てうじて賜ひけるに　　忠岑

おほあらきの森の下草茂りあひて深くも夏のなりにけるかな

拾遺和歌集　巻第三

秋

秋の初めによみ侍りける　　安法法師

夏衣まだひとへなるうたゝねにこゝろして吹け秋のはつ風

題しらず　　讀人しらず

秋は來ぬ立田の山も見てしがなしぐれぬさきに色やかはると

延喜の御時の御屏風に　　貫之

荻の葉のそよぐおとこそ秋風の人に知らるゝはじめなりけれ

河原院にて荒れたる宿に秋來るといふ心を人々よみ侍りけるに　　惠慶法師

八重葎しげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋は來にけり

題しらず　　安貴王

秋立ちていくかもあらねどこの寢ぬるあさけの風は袂すゞしも

延喜の御時の屏風に　　躬恒

彦星のつま待つよひのあき風にわれさへあやな人ぞこひしき

○見てしがな　見たいものである
○しぐれぬさき　時雨の降らぬさき。

○いくかもあらねど　幾日も經ないが。
○この寢ぬるあさけの風　ねて起きたこの早朝の風。

秋風に夜のふけ行けば天の川かは瀬になみのたちゐこそ待て　貫之

題しらず　柿本人麿

あまの川遠きわたりにあらねども君が船出はとしにこそまて

天の川こそのわたりの移ろへば淺瀬ふむまに夜ぞ更けにける　讀人しらず

さ夜更けて天の川をぞ出でて見るおもふさまなる雲やわたると　湯原王

彦星の思ひますらむことよりも見る我くるし夜の更けゆけば　人麿

年にありて一夜妹に逢ふ彦星もわれにまさりて思ふらむやぞ

延喜の御時の月次の御屏風に　貫之

織女に脫ぎてかしつるからごろもいとゞ涙にそでや濡るらむ

右衛門督源淸蔭の家の屏風に

ひととせに一夜と思へどたなばたの逢ひ見む秋の限りなきかな　惠慶法師

左兵衛督藤原懷平の家の屏風に

○淺瀬ふむまに　淺瀬をさがして渡る間に。

○年にありて　一年のうちで。

いたづらに過ぐる月日を織女の逢ふ夜のかずと思はましかば

七夕庚申にあたりて侍りける年　　元輔

いとゞしくいも寢ざるらむと思ふかなけふの今宵にあへる織女

題しらず　　讀人しらず

逢ひ見てもあはでもなげく織女はいつか心ののどけかるべき

我がいのる事はひとつぞ天の川そらに知りてもたがへざらなむ

きみ來ずはたれに見せまし我がやどの垣根に咲けるあさがほの花

女郎花おほかる野べにはな薄いづれをさしてまねくなるらむ

手もたゆく植ゑしもしるく女郎花いろゆゑ君が宿りぬるかな

小野宮太政大臣

くちなしの色をぞたのむ女郎花はなにめでつと人にかたるな

女郎花多く咲ける家にまかりて　　能宣

女郎花にほふあたりにむつるればあやなくつゆや心おくらむ

題しらず　　讀人しらず

しら露のおくづまにする女郎花あなわづらはし人な手ふれそ

嵯峨に前栽ほりにまかりて　　藤原長能

○手もたゆく　手も疲れるほど。

○むつる　したしみ馴れる。

○おくづま　甚しく愛する妻。
○わづらはし　いとはしい。

日ぐらしに見れども飽かぬ女郎花のべにや今宵旅寢しなまし　惠慶法師

八月ばかりに鴈の聲待つ歌よみ侍りけるに

荻の葉もやゝうちそよぐ程なるになどかりがねの音なかるらむ

齋院の屏風に　讀人しらず

かりにとて來べかりけりや秋の野の花みる程に日も暮れぬべし

題しらず

秋の野の花の名だてに女郎花かりにのみくるひとに折らるな　紀貫之

かりにとてわれは來つれど女郎花みるに心ぞ思ひつきぬる

陽成院の御屏風に小鷹狩したる所

かりにのみ人の見ゆればをみなへし花の袂ぞつゆけかりける

亭子院の御前に前栽うゑさせ給ひてこれよめとおほせごとありければ　伊勢

植ゑ立てて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露も置くらむ

題しらず　讀人しらず

來でずぐす秋はなけれど初鴈の聞くたびごとに珍らしきかな

○來べかりけりや　やは反語。

○名だて　評判の立つやうにすること。

○思ひつきぬる　心を寄せるやうになつた。

少將に侍りける時駒迎へにまかりて　　大貳高遠

逢坂のせきのいはかどふみならし山立ち出づるきりはらの駒

延喜の御時の月次の御屛風に　　貫之

あふさかの關のしみづにかげ見えていまや引くらむ望月のこま

屛風に八月十五夜池ある家に人あそびしたる所　　源順

水のおもに照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける

水に月の宿りて侍りけるを　　能宣

秋の月浪のそこにぞ出でにける待つらむ山のかひやなからむ

廉義公の家の紙繪（かみゑ）に秋の月おもしろき池ある家ある所　　源景明

秋の月西にあるかと見えつるは更けゆくほどの影にぞありける

圓融院の御時八月十五夜かける所に　　元輔

飽かずのみ思ほえむをば如何（いかゞ）せむかくこそは見め秋の夜の月

延喜の御時八月十五夜藏人所のをのこども月の宴し侍りけるに　　藤原經臣

こゝにだに光さやけき秋の月くものうへこそ思ひやらるれ

同じ御時の御屛風に　　躬恒

いづこにか今宵の月の見えざらむ飽かぬはひとの心なりけり

（　）駒迎へ　八月十五日に逢坂山で諸國から獻進する駒を請取るために、殿上人を使として遣はされるので、これを駒迎へといふ。
（　）きりはら　桐原。信濃國にある御牧。
（　）望月のこま　信濃國望月の御牧の駒。
（　）月なみ　月次。月々の次第。
（　）かひやなからむ　山の峽に、待つ山の甲斐がないだらうと云ひかけたもの。
（　）紙繪　繪紙にかきたる繪。絹などにかきたると區別していふ。

○雲なからなむ　雲が出ないでほしい。

○草の枕をすゞむし　草の枕をする鈴蟲。草の枕に旅の意を含めたもの。

○ちぎりけむ程や過ぎぬる　來ようと約束した時期が過ぎたのであらうか。

○裳著　女が成長して裳をはじめて著る儀式。

○けふごとに　毎年九月九日毎に

題しらず　　兼盛

よもすがら見てをあかさむ秋の月こよひの空に雲なからなむ

廉義公の家にて草むらの夜の蟲といふ題をよみ侍りける　　藤原爲頼

おぼつかないづこなるらむ蟲の音を尋ねば草の露やみだれむ

前栽に鈴蟲を放ち侍りて　　伊勢

いづこにも草の枕をすゞむしはこゝを旅ともおもはざらなむ

屛風に　　貫之

秋來ればはた織るむしのあるなべに唐にしきにも見ゆる野べかな

題しらず　　讀人しらず

ちぎりけむ程や過ぎぬる秋の野に人まつ蟲のこゑの絶えせぬ

躬恆

露けくて吾がころもでは濡れぬとも折りてを行かむ秋はぎの花

亭子院の御屛風に　　伊勢

移ろはむことだに惜しき秋萩に折れぬばかりも置ける露かな

三條の后の宮の裳着侍りける屛風に九月九日のところ　　元輔

我がやどの菊の白露けふごとにいくよつもりて淵となるらむ

○わがから衣うつとき　擣衣を云つたもの。

○した草かけて　木は勿論下草まで。

○風の音にや　常磐の山は紅葉せぬから風の音で。

○そむくものから　秋風の吹き來る方をあとにしながら。

題しらず　躬恒

長月のこゝぬかごとにつむ菊の花もかひなく老いにけるかな

右大將定國の家の屛風に　忠岑

千鳥なく佐保の川霧たちぬらし山の木(こ)の葉もいろかはり行く

延喜の御時の御屛風に　貫之

かぜ寒みわがから衣うつときぞ萩のした葉も色まさりける

三百六十首の中に　曾根好忠

神なびの三室の山を今日みればした草かけていろづきにけり

題しらず　大中臣能宣

紅葉せぬときはの山は吹く風のおとにや秋を聞きわたるらむ

もみぢせぬ常磐(ときは)の山にすむ鹿はおのれ鳴きてや秋を知るらむ

讀人しらず

秋風のうちふくごとにたかさごのをのへの鹿の鳴かぬ日ぞなき

秋風をそむくものから花すゝき行くかたをなど招くなるらむ

初瀨へ詣ではべりける道に佐保山の下にまかり宿りて朝に霧の立ち渡りて侍りければ　惠慶法師

紅葉見にやどれる我と知らねばや佐保の川霧たちかくすらむ

題しらず　讀人しらず

もみぢ葉の色をし添へてながるれば淺くも見えず山川のみづ

大井河に人々まかりて歌よみ侍りけるに　能宣

紅葉(もみぢは)を今日はなほみむ暮れぬともをぐらの山の名にはさはらじ

題しらず　讀人しらず

秋霧のたたまくをしきやまぢかなもみぢの錦織りつもりつゝ

大井河に紅葉の流るゝを見て　健守法師

水のあやに紅葉の錦かさねつゝ川瀨のなみの立たぬ日ぞなき

西宮左大臣の家の屛風に志賀の山越に壺裝束(つぼさうぞく)したる女ども紅葉などある所に　したがふ

名を聞けば昔ながらの山なれどしぐるゝ秋はいろまさりけり

東山に紅葉見にまかりて又の日のつとめてまかり歸るとてよみ侍りける　惠慶法師

きのふよりけふは優れるもみぢ葉(は)のあすの色をば見でややみなむ

天曆の御時殿上のをのこども紅葉見に大井河にまかりけるに　源延光朝臣

○山川のみづ　山の中から流れる川をいふ。

○秋霧のたたまくをしき　秋霧の立つのが惜しい。立つに錦を裁つをかけてある。

○壺裝束　市女笠を被つて薄絹を著た女のいでたち。

○昔ながらの山　昔のまゝの山と長良山とを云ひかけたもの。

○又の日のつとめて　翌日の朝早く。

もみぢ葉を手ごとに折りてかへりなむ風の心もうしろめたきに
源　兼光
枝ながら見てをかへらむ紅葉(もみぢは)は折らむ程にも散りもこそすれ
題しらず　深養父
河霧のふもとをこめて立ちぬればそらにぞ秋の山は見えける
竹生島(ちくぶしま)に詣で侍りける時紅葉のかげの水にうつりて侍りければ　法橋觀教
水うみにあきの山邊をうつしてははたばりひろき錦とぞ見る
二條の右大臣粟田の山里の障子の繪に旅人紅葉の下に宿りたる所　惠慶法師
今よりは紅葉のもとにやどりせじ惜しむに旅の日かず經ぬべし
題しらず　讀人しらず
訪ふ人もいまはあらしの山風にひとまつむしの聲ぞかなしき
延喜御時の中宮の御屛風に　貫之
ちりぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立ちかくすらむ
題しらず　僧正遍昭
秋山のあらしの聲を聞く時は木の葉ならねどものぞかなしき
貫之

○折らむ程　折らうとする時。

○はたばり　布の幅。

○惜しむに　紅葉をめでをしむによつて。

○訪ふ人もいまはあらしの　訪ねて來る人も今はあるまいと、嵐にあらじを通はせたもの。

○木の葉ならねど　我は木葉ではないが。

あきの夜に雨ときこえて降るものは風にしたがふ紅葉なりけり

心もて散らむだにこそ惜しからめなどか紅葉に風の吹くらむ　　右衛門督公任

嵐の山のもとをまかりけるに紅葉のいたく散り侍りければ

あさまだき嵐の山のさむければもみぢのにしき著ぬ人ぞなき　　能宣

題しらず

秋霧のみねにもをにもたつ山は紅葉のにしきたまらざりけり　　壬生忠岑

大井に紅葉の流るゝを見侍りて

いろ〳〵の木の葉流るゝ大井河しもはかつらの紅葉とや見む　　好忠

題しらず

招くとて立ちもとまらぬ秋ゆゑにあはれかたよる花薄かな　　平兼盛

くれの秋重之が消息(せうそこ)して侍りけるかへりごとに

暮れて行く秋の形見(かたみ)に置くものは我が元結の霜にぞありける

○風にしたがふ　風の吹くのにつれて散る。

○みねにもをにも　山の頂にも麓にも。

○秋ゆゑに　秋であるのに然るに。

拾遺和歌集　巻第四

冬

延喜の御時の内侍のかみの屏風に　　貫之

足曳の山かきくもりしぐるれど紅葉はいとゞ照りまさりけり

寛和二年清涼殿のみさうじに網代かける所　　讀人しらず

網代木(あじろぎ)にかけつゝあらふ唐錦ひをへて寄するもみぢなりけり

時雨し侍りける日　　貫之

かきくらししぐるゝ空をながめつゝおもひこそやれ神なびの杜(もり)

題しらず　　讀人しらず

神無月しぐれしぬらし葛の葉のうらこがる音に鹿も啼くなり

奈良のみかど龍田川に紅葉御覽じに行幸ありける御供につかうまつりて　　柿本人麿

龍田川もみぢ葉ながる神なびのみむろのやまに時雨ふるらし

散り殘りたる紅葉を見侍りて　　僧正遍昭

○網代木　冬氷魚をとるために、川の瀬に竹や木を編んで網の代りとするその木。

○かきくらし　かきくもり。

○うらこがる音に　葛の葉のうらと受け、心の中にこがれてゐる聲とつゞけたもの。

○時雨ゆゑ　時雨をよけるために

○よそ人　他の所の人。時雨の降つてゐない所の人。

○こや　昆野。攝津國にある。

○あらはに　隱れて住みしと云ふに對する語。かくれた所もなく一面に。

○いもがり　妹の許に。

○みなる　水に浸り馴れる。

唐にしき枝にひとむら殘れるは秋のかたみをたゝぬなるべし

延喜の御時の女四のみこの家の屛風に　貫之

ながれくるもみぢ葉みれば唐錦瀧のいともて織れるなりけり

屛風に　平兼盛

時雨ゆゑかづくたもとをよそ人は紅葉をはらふ袖かとや見む

百首歌の中に　源重之

蘆の葉に隱れて住みし津の國のこやもあらはに冬は來にけり

題しらず　貫之

おもひかねいもがり行けば冬の夜の河風さむみ千鳥なくなり

讀人しらず

ひねもすに見れども飽かぬもみぢ葉はいかなる山の嵐なるらむ

夜をさむみ寢ざめて聞けばをし鳥の羨ましくもみなるなるかな

水鳥のしたやすからぬおもひにはあたりの水も凍らざりけり

夜を寒み寢覺めてきけば鴛（をし）ぞ鳴くはらひもあへず霜や置くらむ

貞文が家の歌合に

霜のうへに降る初雪のあさごほり解けずも物を思ふころかな

題しらず　　右衞門督公任

霜置かぬ袖だにさゆる冬の夜は鴨のうは毛をおもひこそやれ

　　橘ゆきより

いけみづやこほりとくらむ葦鴨（あしがも）の夜深く聲のさわぐなるかな

　　紀友則

飛びかよふをしの羽風のさむければ池の冰ぞさえまさりける

　　讀人しらず

水のうへに思ひし物を冬の夜のこほりは袖のものにぞありける

屛風に　　平兼盛

ふしづけしよどのわたりを今朝みれば解けむ期（ご）もなく冰しにけり

題しらず　　讀人しらず

冬さむみ凍らぬみづはなけれども吉野の瀧はたゆるせもなし

恆德公の家の屛風に　　能宣

冬されば嵐のこゑもたかさごの松につけてぞ聞くべかりける

　　元輔

たかさごの松にすむ鶴冬くればをのへの霜や置きまさるらむ

○水のうへに云々　氷は水の上にあるものと思つたのに。

○ふしづけし　柴漬けしの義。柴漬は、柴を束ねて川に漬けて置いて、魚が集まつて來るのを待つてとらへること。

題しらず　　紀友則

夕されば佐保の川原の河ぎりにともまどはせる千鳥なくなり

人麿

浦ちかく降り來る雪はしらなみの末の松山こすかとぞ見る

廉義公の家の障子に　　元輔

冬の夜のいけの氷のさやけきは月のひかりのみがくなりけり

題しらず　　讀人しらず

ふゆの池の上は冰に閉ぢられていかでか月のそこに入るらむ

月を見てよめる　　惠慶法師

天の原そらさへ冱(さ)えやわたるらむこほりと見ゆる冬の夜の月

初雪をよめる　　源景明

みやこにてめづらしと見る初雪は吉野の山にふりやしぬらむ

女を語らひ侍りけるが年頃になり侍りにけれどうとく侍りければ雪の降り侍りけるに　　元輔

ふる程もはかなく見ゆる泡雪のうらやましくもうち解くるかな

山あひに雪の降りかゝりて侍りけるを　　伊勢

○そこに入るらむ　其處と底とをかけたもの。

○吉野の山にふりやしぬらむ　都では珍らしいが吉野山では古いだらう。降りに古りをかけたもの。

○うち解くるかな　泡雪のとけるのを、うちとけて心をゆるす意にかけ、女のうちとけぬを恨んだのである。

〇すれる衣　青摺にした衣。白い雪の間から木の葉が少し見えるのを云つたもの。

〇雪ふりにける　雪降りにけるを往き古りにけるにかけたもの。

足曳のやまあひに降れるしら雪はすれる衣のこゝちこそすれ　　貫之

齋院の屏風に

よるならば月とぞ見まし我が宿のにはしろたへに降れるしら雪　　能宣

題しらず

我が宿の雪につけてぞふるさとの吉野の山はおもひやらるゝ　　藤原佐忠朝臣

屏風の繪に越の白山かきて侍りける所に

われひとり越の山路にこしかども雪ふりにける跡を見るかな　　忠見

題しらず

年ふれば越のしらやま老いにけりおほくの冬の雪つもりつゝ　　兼盛

入道攝政の家の屏風に

見渡せば松の葉しろき吉野山いく世つもれる雪にかあるらむ

題しらず

山里はゆきふり積みて道もなし今日こむ人をあはれとは見む　　人麿

足曳の山路も知らずしらかしの枝にも葉にも雪の降れれば

右大將定國の家の屏風に　　貫之

白雪のふりしくときはみよし野の山した風に花ぞ散りける　兼盛

冷泉院の御時の御屛風に

ひと知れず春をこそ待てはらふべき人なきやどに降れる白雪　能宣

屛風に

あたらしき春さへ近くなり行けばふりのみまさる年の雪かな　右衞門督公任

梅が枝にふりつむ雪は一年(ひととせ)にふたゝび咲けるはなかとぞ見る　能宣

屛風の繪に佛名(ぶつみやう)の所

おきあかす霜とともにや今朝はみな冬の夜ふかき罪もけぬらむ　貫之

延喜の御時の御屛風に

年のうちに積れる罪はかきくらし降る白雪とともに消えなむ　能宣

屛風の繪に佛名のあしたに梅の木の下(もと)に導師と主人(あるじ)とかはらけとりてわかれ惜しみたる所

雪ふかき山路になにかへるらむ春待つ花の陰にとまらで　兼盛

屛風の繪に佛名の所

人はいさ犯しやすらむ冬來ればとしのみつもる雪とこそ見れ

○ふりのみまさる　雪が降りまさること、ます〳〵古くなることをいひかけたもの。

○佛名　十二月十九日から三日間淸涼殿で六根の罪をほろぼすために三世の諸佛の名號を稱へることで、朝廷の年中行事。

○おきあかす　起き明かすと置き明かすを通はせたもの。

○冬の夜ふかき　冬の夜深きに、深き罪をかけたもの。

齋院の御屏風に十二月つごもりの夜

かぞふれば我が身につもる年月を送りむかふとなに急ぐらむ

百首歌の中に　　源　重　之

雪つもるおのが年をば知らずして春をばあすと聞くぞうれしき

()雪つもる　雪のつもるやうに積る自分の年。

拾遺和歌集　卷第五

賀

天暦の御時齋宮下り侍りける時の長奉送使にてまかりかへらむとて　　中納言朝忠

萬代のはじめと今日をいのり置きて今ゆくすゑは神ぞ知るらむ

はじめて平野祭に男使たてし時歌ふべき歌よませしに　　大中臣能宣

ちはやぶる平野の松の枝しげみ千世も八千世も色はかはらじ

仁和の御時大嘗會の歌　　讀人しらず

かまふ野のたまのを山にすむ鶴の千年は君が御代のかずなり

贈皇后宮の御産屋の七夜に兵部卿致平のみこの雉のかたを作りて誰ともなくて歌をつけて侍りける　　清原元輔

朝まだききりふの岡に立つ雉は千代の日嗣のはじめなりけり

藤氏のうぶやにまかりて　　能宣

二葉よりたのもしきかな春日山こだかき松のたねぞと思へば

○長奉送使　齋宮が伊勢にお下りになる時にお送りする御使。

○かまふ野　蒲生野。近江國にある。

○春日山　春日神社は藤原氏の氏神であるから、その縁によつて云つたもの。

産屋の七夜にまかりて　　平兼盛

君がへむやほ萬代をかぞふればかつ〳〵今日ぞ七日なりける

右大將藤原實資のうぶやの七夜に　　能宣

今年おひの松は七日となりにけり殘りのほどをおもひこそやれ

或人のうぶやにまかりて　　源順

ちとせとも數は定めず世の中にかぎりなき身と人もいふべく

藤原誠信元服し侍りける夜詠みける　　能宣

老いぬれば同じ事こそせられけれ君は千世ませ君は千世ませ

三善(みよし)のすけたゞがかうぶりし侍りける時　　兼盛

結(ゆ)ひそむる初もとゆひのこむらさき衣の色にうつれとぞ思ふ

天暦の帝四十になりおはしましける時山階寺(やましなでら)に金泥(こんでい)壽命經四十八卷を書き供養し奉りて御卷數鶴(ごくわんじゆ)にくはせて洲濱に立てたりけりそのすはまの敷物にあまたの歌葦手(あしで)にかける中に　　仲算法師

山階のやまの岩根に松を植ゑてときはかきはに祈りつるかな

聲たかく三笠のやまぞよばふなる天の下こそたのしかるらし

○かつ〳〵　僅かに。
○今年おひの松　生れた子供をさしたもの。
○かうぶり　元服。はじめて冠を被ること。
○こむらさき　濃紫。
○衣の色にうつれ　濃紫の衣は三位以上の人の著るものであるから立身出世するやうにと祝つたのである。
○洲濱　洲濱の形に造つた臺に松竹等を植ゑたもので、祝事の飾りものとしたもの。
○葦手　文字をくづして葦などの生えてゐるやうなさまに書くもので、中古の優美な戯れ書き。
○ときはかきはに　常磐堅磐。常に變らずに。とこしへに。

承平四年中宮の賀し侍りける時の屛風に　　齋宮内侍

いろかへぬ松と竹との末のよをいづれひさしと君のみぞ見む

おなじ賀に竹の枝作りて侍りけるに　　大中臣頼基

ひとふしにちよをこめたる杖なればつくともつきじ君が齢は

清愼公五十の賀し侍りける時の屛風に　　元輔

君が世を何にたとへむさゞれ石の巖とならむほども飽かねば

青柳のみどりの絲をくりかへしいくらばかりの春をへぬらむ　　兼盛

わが宿に咲けるさくらの花ざかりちとせ見るともあかじとぞ思ふ

同じ人の七十の賀し侍りけるに竹の杖を作りて　　能宣

君がため今日きる竹の杖なればまたもつきせぬよゝぞ籠れる

くらゐ山みねまでつける杖なれどいま萬代のさかのためなり

一條攝政中將に侍りける時父の大臣の五十の賀し侍りける屛風に　　小野好古朝臣

吹く風によその紅葉は散り來れど君が常磐のかげぞのどけき

權中納言敦忠母の賀し侍りけるに　　源公忠朝臣

萬代もなほこそあかね君がためおもふ心のかぎりなければ

○いづれひさしと　どちらが久しくあるかといふことを。

○つくともつきじ　杖をつくといふのを受けて、盡くとも盡きじと云つたもの。

○またもつきせぬよゝ　竹の杖の節々と受けて、盡きぬ代々とかけたもの。
○くらゐ山みねまで云々　位の最上まで登る間ついて來た杖だが。

○さしながら　さながら。

○年の數をもつまむとぞおもふ　若菜を受けて摘むと云ひ、併せて年の數を積まうと思ふとかけたもの。

○下﨟　年功を積むことが短くて身分のまだ貴くない者。

五條内侍のかみの賀民部卿清貫し侍りける時屏風に　　伊勢

おほ空に羣れたる鶴(たづ)のさしながらおもふ心のありげなるかな

春の野の若菜ならねど君がため年の數をもつまむとぞおもふ

天德三年内裏に花の宴せさせ給ひけるに　　九條右大臣

櫻花こよひかざしに插しながらかくて千とせの春をこそ經め

題しらず　　讀人しらず

かつ見つゝ千年の春をすぐすともいつかは花のいろにあくべき

亭子院の歌合に　　躬恒

三千年になるてふ桃の今年よりはなさく春に逢ひにけるかな

康保三年内裏にて子の日せさせ給ひけるに殿上のをのこども和歌つかうまつりけるに　　藤原信賢

珍らしき千代の初めの子の日にはまづ今日をこそ引くべかりけれ

小野宮太政大臣の家にて子の日し侍りけるに下﨟(げらふ)に侍りける時よみ侍りける　　三條太政大臣

ゆく末も子の日の松のためしには君が千年を引かむとぞ思ふ

延喜の御時の御屏風に　　貫之

○水無月のなごしのはらへ　六月晦日の大祓。

○まけわざ　前栽合で負けた方からその罰として、酒肴などを出して饗應することをいふ。

松をのみときはと思ふに世とともに流すいづみも緑なりけり

題しらず　　讀人しらず

水無月のなごしのはらへする人はちとせの命のぶといふなり

承平四年中宮の賀し侍りける屏風に　　參議伊衡

みそぎしておもふことをぞ祈りつるやほよろづ代の神のまに〳〵

天暦の御時前栽の宴せさせ給ひける時　　小野宮太政大臣

萬代にかはらぬ花のいろなればいづれのあきか君は見ざらむ

廉義公の家にて人々に歌よませ侍りけるに草むらの中の夜の蟲といふ題を　　平兼盛

ちとせとぞ草むらごとにきこゆなるこや松蟲の聲にはあるらむ

右大臣源の光の家に前栽合しはべりけるまけわざを内舍人橘資澄がし侍りける千鳥のかた作りて侍りけるによませはべりける　　貫之

誰が年の數とかは見む行きかへり千鳥なくなる濱のまさごを

天暦の御時清愼公御笛たてまつるとてよませ侍りければ　　能宣

生ひ初むるねよりぞしるき笛竹の末のよ長くならむものとは

鏡鑄させ侍りける裏に鶴のかたを鑄つけさせ侍りて　　伊勢

○天の羽衣云々　天人が三年に一度梵天より降つて來て、四十里四方の岩を三銖の衣で撫で盡す間を一劫といふ。其の意で永久不變をいつたもの。

千年とも何か祈らむうらに棲（す）む鶴（たづ）のうへをぞ見るべかりける

題しらず　　　讀人しらず

君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬいはほならなむ

賀の屛風に　　　元輔

動きなきいはほの果ても君ぞ見むをとめに袖のなでつくすまで

拾遺和歌集　巻第六

別

春ものへまかりける人の曉に出で立ちける所にてとまり侍りける人のよみ侍りける

讀人しらず

春霞たつあかつきを見るからにこゝろぞ空になりぬべらなる

題しらず

さくら花つゆにぬれたる顔見ればなきてわかれし人ぞこひしき

散る花は道見えぬまでうづまなむ別るゝ人も立ちやとまると

物へまかりける人の許に人々まかりてかはらけ取りて

曾根好忠

かりがねのかへるを聞けばわかれ路は雲居遙かに思ふばかりぞ

天暦の御時小貳命婦豐前にまかり侍りける時大盤所にて餞(せん)せさせ給ふに

かづけ物賜ふとて

御製

夏衣たちわかるべき今宵こそひとへに惜しきおもひ添ひぬれ

題しらず

讀人しらず

○うづまなむ　埋めてほしい。

○夏衣云々　夏衣と云つた縁から裁つ、單衣、と云つたもの。

わするなよわかれ路に生ふる葛の葉の秋風ふかばいまかへり來む　御製

別（わか）れてふことは誰かは始めけむ苦しきものと知らずやありけむ

時しもあれ秋しも人のわかるればいとゞ袂ぞつゆけかりける

天暦の御時九月十五日齋宮下り侍りけるに　忠見

きみが代を長月とだに思はずばいかにわかれの悲しからまし

十月ばかりに物へまかりける人に　能宣

露にだにあてじと思ひし人しもぞ時雨ふるころ旅に行きける

物へまかりける人に馬の餞（はなむけ）し侍りて扇つかはしける　讀人しらず

わかれ路をへだつる雲の爲にこそあふぎの風をやらまほしけれ

題しらず　貫之

別れては逢はむあはじぞ定めなきこの夕ぐれや限りなるらむ

わかれ路は戀しき人の文なれややらでのみこそ見まくほしけれ

物へまかりける人の送り關山までし侍るとて　能宣

別れ行くけふは惑ひぬ逢坂に歸り來む日の名にこそありけれ

伊勢より上り侍りけるに忍びて物いひはべりける女のあづまへ下りける

が逢坂にまかりあひて侍りけるに遣はしける

○いまかへり來む　すぐに歸つて來よう。上の葛の葉に對する縁でかへると云つたもの。

○時しもあれ　時節もあるのに。

○馬の餞　はなむけ。餞別。

○やらでのみこそ　遣らないで。破らないで。兩方にかけたもの。

○おくり　見送り。

○けふあふ坂や云々　けふ逢坂で逢つたのが最後であらう。

○しかすがの渡と云々　しかすがの渡は三河國にある。その地名にさすがにとかけたもの。

○心のみこそつくし櫛　筑紫櫛を詠み込んだもので、心を盡すといふ意。

○とゞめがたみのから衣　留め難さにと、形見の唐衣とに通はせたもの。

○たつより　衣を裁つと、出發するともうとにかけたもの。

ゆくするの命も知らぬわかれ路はけふあふ坂やかぎりなるらむ

大江爲基あづまへまかりくだりけるに扇を遣はすとて　　赤染衞門

惜しむともなきものゆゑにしかすがの渡と聞けば唯ならぬかな

源のよしたねが參河の介にて侍りける娘の許に母のよみて遣はしける

もろともにゆかぬ三河の八橋は戀しとのみやおもひわたらむ

兼盛駿河の守にて下り侍りける馬の餞しはべるとて　　源順

わかれ路は渡せるはしもなきものをいかでか常に戀ひわたるべき

信濃の國に下りける人の許に遣はしける　　貫之

月影はあかす見るともさらしなの山のふもとにながゐすな君

共政朝臣肥後の守にて下り侍りけるに妻の肥前が下りけるにつくしぐし御ぞなど賜ふとて　　天暦御製

別るれば心のみこそつくし櫛さして逢ふべきほどを知らねば

天暦の御時御めのと肥前が出羽の國に下り侍りけるに餞たまひけるに藤壺より裝束賜ひけるにそへられたりける　　讀人しらず

行くひとをとゞめがたみのから衣たつより袖の露けかるらむ

同じ御めのとの餞に殿上のをのこども女房などわかれ惜しみ侍りけるに

○おくるゝ　後に残る。

○をし　鴛鴦にかけて、其の緣によつて翹羽といつた。

○まだきも　早くも。もう。露もはらはないうちから。

○とまることこそ難からめ　留るといふことは出來ないだらうが。

御乳母少納言

をしむともかたしやわかれ心なる涙をだにもえやはとゞむる

女藏人三河

あづまぢの草葉を分けむ人よりもおくるゝ袖ぞまづは露けき

題しらず

讀人しらず

別るればまづ涙こそさきに立ていかでおくるゝ袖のぬるらむ

別るゝををしとぞ思ふつるぎばの身をより砕く心地のみして

源弘景ものへまかりけるにさうぞく給ふとて

三條太皇太后宮

旅人の露はらふべきからころもまだきも袖のぬれにけるかな

橘公頼帥(そち)になりてまかり上りける時利貞が繼母内侍のすけの馬の餞(はなむけ)し侍りけるにさうぞくに添へて遣はしける

貫之

あまたにはぬひかさねねど唐衣おもふ心は千重にぞありける

題しらず

讀人しらず

遠く行く人のためにはわが袖のなみだの玉もをしからなくに

惜しむとてとまることこそ難からめわが衣手をほしてだに行け

ゐなかへまかりける時　　貫之

絲による物ならなくにわかれぢは心ぼそくもおもほゆるかな

みちの國の守これともがまかり下りけるに彈正(だんじやう)のみこのかうやく遣はしけるに　　戒秀法師

かめ山にいく藥のみありければとゞむる方もなきわかれかな

藤原のまさたゞが豐前守に侍りける時爲頼がおぼつかなしとて下り侍りけるに馬の餞し侍るとて　　藤原清正

おもふ人あるかたへ行くわかれぢを惜しむ心ぞかつはわりなき

肥後守にて清原元輔くだり侍りけるに源滿仲餞し侍りけるにかはらけとりて　　元輔

いかばかり思ふらむとか思ふらむ老いて別るゝ遠きわかれを

かへし　　源滿仲朝臣

君はよし行末とほしとまる身の待つ程いかゞあらむとすらむ

題しらず　　讀人しらず

後れゐて我が戀ひ居れば白雲のたなびく山を今日や越ゆらむ　　右衞門

○絲による云々　古今集の羇旅の部にも出てゐる。

○かうやく　膏藥。藥を膏に混和して煉つたもの。

○いく藥　死なぬくすり。

○わりなき　わけがない。わけがわからぬ。

○思ふらむとか思ふらむ　上の思ふは自分の心、下の思ふは相手の人の心。自分がどんなに悲しく思つてゐるかと其許は思ふだらう。

○とまる身　あとに殘る自分。

○待つ程いかゞ云々　其許の御歸りを待つ間にどうなるかわかりませぬ。

○いきの松原　筑前國早良郡にある松原。

○したぐら　鞍の下に置いて馬の背の處をおほふもの。藻又は毛毡でつくる。○都のつき　都の月。併せて都のてがゝりの意。

○しほみてるほどに云々　潮が滿ちてゐて濱がないといふ意。

命をぞいかならむとは思ひこし生きて別るゝ世にこそありけれ

筑紫へまかりける人の許にいひ遣はしける　　橘倚平

むかし見しいきの松原こととはば忘れぬひともありと答へよ

陸奥守にてくだり侍りける時三條太政大臣餞し侍りければよみ侍りける　　藤原爲賴

たけくまの松を見つゝやなぐさめむ君が千年の影にならひて

みちの國の白河の關越え侍りけるに　　平兼盛

たよりあらばいかで都へ告げやらむけふ白河の關は越えぬと

實方朝臣みちの國へ下り侍りけるにしたぐら遣はすとて　　右衞門督公任

東路(あづまぢ)の木のしたぐらくなり行かば都のつきを戀ひざらめやは

題しらず　　讀人しらず

旅行かば袖こそぬるれもるやまの雫にのみはおほせざらなむ

恆德公の家の障子に　　兼盛

しほみてるほどに行きかふ旅人や濱名の橋と名づけそめけむ

田蓑の島の邊にて雨にあひて　　貫之

雨により田蓑の島をわけ行けど名には隱れぬものにぞありける

○草のまくら　旅寢。

○露しげからぬ云々　涙にぬれぬ曉もない。

○印南野　播磨國にある。

○おきながら　起きたまゝで。寢ないで。

難波にはらへし侍りてまかり歸りける曉に森の侍りけるに郭公の鳴き侍りけるを聞きて　伊

郭公ねぐらながらのこゑ聞けば草のまくらぞつゆけかりける

物へまかりける道にて鴈の鳴くを聞きて　能宣

草まくらわれのみならずかりがねも旅の空にぞ鳴き渡りける

題しらず　讀人しらず

君をのみ戀ひつゝ旅の草まくら露しげからぬあかつきぞなき

源公貞が大隅へまかり下りけるにせきとの院にて月のあかかりけるにわかれ惜しみ侍りて　平兼盛

はるかなる旅の空にもおくれねばうらやましきは秋の夜の月

秋旅にまかりけるに印南野に宿りて　能宣

女郎花われに宿かせいなみ野の否といふともこゝを過ぎめや

筑紫へ下りける道にて　重之

船路にはくさの枕もむすばねばおきながらこそ夢も見えけれ

帥伊周つくしへまかり下りけるにかはじり離れ侍りけるによみける　弓削嘉言

思ひでもなき故郷の山なれどかくれ行くはたあはれなりけり

流され侍りて後いひおこせて侍りける　　贈太政大臣

君がすむ宿の梢をゆく／＼とかくるゝまでにかへり見しはや

かさの金岡が唐土(もろこし)に渡りて侍りける時妻(め)の長歌よみて侍りける返し　　金岡

浪の上に見えし小島のしまがくれ行く空もなし君にわかれて

もろこしにて　　柿本人麿

あま飛ぶやかりの使にいつしかも奈良の都にことづてやらむ

○あま飛ぶや　かりにかけていふ枕詞。

拾遺和歌集　卷第七

物名

紅梅　　讀人しらず

鶯の巣つくる枝を折りつればこうばいかでか生まむとすらむ

さくら

花の色を顯(あら)はにめでばあだめきぬいざくら闇になりてかざさむ

いはやなぎ　　藤原輔相

旅のいはやなきとこにも寢られけり草の枕につゆは置けども

さるとりのはな

鳴く聲は數多(あまた)すれども鶯にまさるとりのはなくこそ有りけれ

かにひのはな　　伊勢

わたつ海の沖なかにひのはなれ出でて燃ゆと見ゆるは蜑(あま)の漁(いさり)か

かいつばた　　讀人しらず

こき色がいつはた薄くうつろはむはなに心もつけざらむかも

○こうは　子をはといふ意。

○旅のいはやなきとこにも　旅で寢るのは屋のない牀にも。

○さるとりのはな　さるとりいばらの花。柿に似た葉で花は黄色。

○かにひのはな　雁皮の花。丁子に似た花。

さくなむさ　　　如法師

むらさきの色にはさくなむさし野の草のゆかりと人もこそ知れ

しもつけ　　　讀人しらず

植ゑて見る君だに知らぬ花の名を我しもつけむことのあやしさ

りうたむ

川上に今よりうたむ網代には先づもみぢばやよらむとすらむ

きちかう

あだ人のまがきちかうな花植ゑそ匂ひもあへず折りつくしけり

あさがほ

我が宿の花のはにのみぬる蝶のいかなる朝かほかよりは來る

けにごし

忘れにし人のさらにも戀しきかむげにこじとは思ふものから

ら　に

秋の野に花てふ花を折りつればわびしらにこそ蟲も鳴きけれ　　　忠岑

かるかや

白露のかかるがやがて消えざらば草葉ぞ玉のくしげならまし

○さくなむさ　さくなげに同じ。

○な花植ゑそ　花を植ゑるな。

○けにごし　牽牛子。あさがほに同じ。
○むげにこじとは思ふものから　一概に、むやみに來ないだらうとは思ふものの。
○らに　蘭。
○花てふ花　花といふ花すべて。
○わびしらに　わびしげに。なげかはしさうに。

○たまつむ　玉を積む。
○ながるゝ水を緒にぞ云々　流れる水を緒さして貫いたものである。
○思ひくらしの　毎日々々思ひ通して。
○ひともどきくる　人が非難する

はぎのはな

山河はきのはながれずあさき瀬をせけば淵とぞ秋はなるらむ

まつむし

瀧つ瀬の中にたまつむしら浪はながるゝ水を緒にぞぬきける

ひぐらし

今こむといひてわかれし朝(あした)より思ひくらしの音をのみぞ鳴く

貫之

杣人は宮木ひくらし足引のやまのやまびこころゑとよむなり

松の音は秋のしらべに聞ゆなり高くせめあげて風ぞひくらし

すけみ

ひともとぎく

あだなりとひともどきくる者しもぞ花のあたりを過ぎがてにする

すはうごけ

鶯のすはうごけどもぬしもなし風にまかせていづち往(い)ぬらむ

やまと

古道にわれやまどはむいにしへの野中の草はしげり合ひにけり

いなみの

○松かささしつれば　松かささ、かさをさすさを通はせたもの。

○白浪のうちかくるす　白浪が打ち掛ける洲。

○なまめかるらむ　生海藻を刈るたらうさ、いろめいてゐるだらうさを通はせたもの。

○苞　土産物。

住吉のをかの松かささしつれば雨は降るともいなみのは著じ

くるすの

白浪のうちかくるすのかわかぬに我が袂こそおとらざりけれ

この島にあまの詣でたりけるを見て　　在原元方

水もなく舟もかよはぬこの島にいかでか蜑(あま)のなまめかるらむ

よどがは

植ゑていにし人も見なくに秋萩の誰みよとかは花の咲くらむ

貫之

あしびきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

をがはのはし　　在原業平朝臣

筑紫よりこゝまでくれど苞(つと)もなしたちのをかはのはしのみぞある

くまのくらといふ山寺に賀縁法師の宿りて侍りけるに住持し侍りける法師に歌よめといひければよめる　　讀人しらず

身をすてて山に入りにし我なればくまのくらはむことも覺えず

いぬかひのみゆ

鳥の子はまだ雛ながら立ちていぬかひのみゆるは巣守なりけり

あらふねのみやしろ

葦も葉も皆みどりなる深芹はあらふねのみやしろく見ゆらむ　すけみ

なとりのこほり

仇なりなとりのこほりに下(お)りゐるは下より解くる事は知らぬか　重之

なとりのみゆ

覺束(おぼつか)な雲のかよひぢ見てしがなとりのみゆけば跡はかもなし　兼盛

さはこのみゆ

あかずして別るゝ人の住む里はさはこのみゆる山のあなたか　讀人しらず

つゝみのたけ

篝火(かゞりび)のところ定めず見えつるは流れつゝみのたけばなりけり　紀輔時

むろの木

神なびのみむろのきしやくづるらむ立田の河の水のにごれる　高向草春

きさのき

怒り猪(ゐ)の石を銜(くゝ)みて噛(か)みこしはきさのきにこそ劣らざりけれ　すけみ

はなかむじ

五月雨にならぬかぎりは郭公なにかはなかむしのぶばかりに　仙慶法師

○あらふねのみや　洗ふ根ばかりか。

○さはこのみゆる　それはそこに見える。

○きさのき　象牙に同じ。

○はなかむ　鼻汁をふきとる。

もゝ　すけみ

心ざし深き時には底のももかづき出でぬるものにぞありける

はしばみ　讀人しらず

おもかげにしばしはみゆる君なれど戀しきことぞ時ぞともなき

ねりかき　すけみ

古はおごれりしかどわびぬればとねりがきぬも今は著つべし

をはりごめ

池をはりこめたる水の多かれば井樋(ゐひ)の口よりあまるなるべし

まつだけ

あしびきの山した水にぬれにけりその火まづたけ衣あぶらむ

厭へどもつらき形見を見る時はまづたけからぬ音こそ泣かるれ

くゝたち

やま高み花の色をも見るべきににくくたちぬる春がすみかな

こにやく

野をみれば春めきにけり青葛(あをつゞら)草こにやくままし若菜つむべく

そやしまめ　高岳相如

○時ぞともなき　いつといふ時もない。常に戀しいの意。

○わびぬれば　望みも絶えてしまへば。

○とねりがきぬ　牛飼や口取などの著る衣。

○くゝたち　大根の根などのたうにおなじ。莖立。

○こにやく　こんにやく。

○こにやくままし　こは籠。籠に編まう。

漁(いさり)せし蜑の教へしいづくぞやしまめぐるとて有りといひしは

きじのをとり　　すけみ

河ぎしのをどりおるべき所あらば憂(う)きに死にせぬ身は投げてまし

やまがらめ

もみぢ葉に衣の色はしみにけり秋のやまからめぐりこしまに

かやくき

なにとかやくきの姿はおもほえてあやしく花の名こそ忘るれ

つぐみ　　大伴黒主

わが心あやしくあだに春來れば花につくみといかでなりけむ

咲く花に思ひつくみの味氣(あぢき)なさ身にいたづきの入るもしらずて

つばくらめ　　すけみ

難波づはくらめにのみぞ舟はつくあしたの風の定めなければ

はらか　　元輔

み吉野も若菜つむらむまきもくのひばらかすみて日數へぬれば

さけがらみ　　すけみ

絁(あしぎぬ)はさけからみてぞ人はきるひろやたらぬとおもふなるべし

○をどりおるべき所　飛び下りる所。

○かやくき　鶫に似た鳥で、羽に斑紋がなく腹白く尾短く上の嘴が長い。

○くらめにのみぞ　暗い頃を見はからつて。

○はらか　腹赤。ますに同じ。

○まきもくのひばら　卷向の檜原大和國にある。

○絁　粗末な絲で織つた絹。それで裂けからんでと云つたもの。

○ひろやたらぬと　長さが足らないと。

ひぼしのあゆ

雲迷ひほしのあゆぐと見えつるは螢のそらに飛ぶにぞありける

おしあゆ

はし鷹のをぎ餌にせむと構へたるおしあゆがすな鼠取るべく

つゝみやき

わぎも子が身を捨てしより猿澤の池のつゝみやきみは戀しき　重之

うるかいり

此の家はうるかいりても見てしがな主人ながらも買はむとぞ思ふ　讀人しらず

したゞみ

あづまにて養はれたる人の子はしたゞみてこそ物はいひけれ

さはやけ

春かぜのけさはやければうぐひすの花のころもほころびにけり

まがり

霞わけいまかりかへる物ならば秋來るまでは戀ひやわたらむ

とち　ところ　たちばな

思ふどちところもかへず住み經なむたちはなれなば戀しかるべし　すけみ

○あゆぐ　動く。

○をぎ餌　鷹を招きよせるために供へる餌。

○おしあゆがすな　おしは鼠落しの類、それを動かすな。

○つゝみやき　或ものを中に包んで燒いたもの。

○うるかいりても云々　賣るか入つて見よう。

○主人ながらも　主人ごみにそつくり。

○したゞみ　螺の小さいもの。

○しただみてこそ　聲が濁つて。詞が訛つて。

○さはやけ　大根などのもやし。

○まがり　まがり餅。菓子の名。

○住み經なむ　いつまでも住まう

くちばいろのをしき

あし引の山の木の葉のおちくちばいろのをしきぞ哀れなりける

あしがなへ

津の國の難波わたりに作る田はあしかなへかとえこそ見分かね

むなぐるま

鷹飼のまだも來なくに繋ぎ犬の離れていかむなぐるまつほど

いかるがにげ　　　躬恒

事ぞとも聞くだに分かず理なくも人のいかるかにげやしなまし

ねずみの琴のはらに子を生みたるを　　　すけみ

年を經て君をのみこそねすみつれこと腹にやは子をば生むべき

月のきぬをきて侍りけるに

久方のつきのきぬをば著たれども光は添はぬ我が身なりけり

きさのきのはこ

よと共に鹽燒く蜑の絕えせねばなぎさのきのはこがれてぞ散る

ながむしろ

鶯のなかむしろにはわれぞなく花のにほひやしばしとまると

○をしき　片木板を折りまげて造つた盆。土器などをのせるもの。

○あしかなへかと云々　蘆であるか稻の苗であるか見分け得ない。

○むなぐるま　人の乘つてゐない車。から車。一說に屋形のない車ともいふ。

○ねずみつれ　寢住みつれ。

○月のきぬ　月經衣であらう。

○きさのきのはこ　象牙の箱。

○かのかはのむかはぎ　鹿の皮でつくつたむかばき。腰につけて兩方の股脚ー垂れるもの。
○むかはぎ　向脛。むかうずね。
○かのえさる舟　彼方の江を去る舟。

へうのかは

底へうのかは浪分けて入りぬるか待つ程過ぎて見えずもあるかな

かのかはのむかばき

かのかはのむかはぎ過ぎて深からば渡らでたゞに歸るばかりぞ

かのえさる

かのえさる舟まてしばしこと問はむ沖の白浪まだ立たぬ閒に

惠慶法師

かのとゝいふことを

さをしかのともまどはせる聲すなり妻やこひしき秋の山べに

讀人しらず

ね　うし　とら　う　たつ　み

一夜ねてうしとらこそは思ひけめうきなたつみぞ侘しかりける

むま　ひつじ　さる　とり　いぬ　ゐ

むまれよりひつじ作れば山にさるひとりいぬるに人ゐておはせ

すけみ

四十九日

秋風のよもの山よりおのがじゝふくにちりぬるもみぢ悲しな

拾遺和歌集　卷第八

雜　上

月を見侍りて　　中務卿具平親王

世に經るに物思ふとしもなけれども月に幾たびながめしつらむ

清愼公の家の屏風に　　貫　之

思ふことありとはなしに久方の月夜となれば寢られざりけり

妻(め)におくれて侍りける頃月を見侍りて　　大江爲基

ながむるに物思ふことの慰むは月はうき世のほかよりや行く

法師にならむと思ひ立ち侍りけるころ月を見侍りて　　藤原たかみつ

かくばかり經がたく見ゆる世のなかに羨ましくもすめる月かな

冷泉院の東宮におはしましける時月を待つ心の歌をのこどもよみ侍りけるに　　藤原仲文

有明の月のひかりを待つ程にわが世のいたく更けにけるかな

參議玄上(はるかみ)が妻の月のあかき夜かどの前を渡るとてせうそこいひ入れて侍

○月に幾たび云々　月に對して幾度歎いたことだらう。世にふるに對してながめと云つたもの。

○うき世のほか　この憂世の外憂世とはちがつた世界。

○羨ましくもすめる月かな　羨ましくも住んでゐるといふのを、澄んでゐる月にかけたもの。

○もち月の駒より云々　後撰集雜歌の二に出てゐる。

○常よりも云々　紅葉をわけて出る月であるから、照りまさると云つたのである。

○除目　公事の名。大臣以外の諸臣の官位を陞叙すること。

○身をしづむらむ　官位の昇進せぬを歎いたもの。

りければ　　伊勢

雲居にてあひかたらはぬ月だにも我が宿すぎて行くときはなし

花山にまかりて侍りけるに駒牽(こまひき)の御馬を遣はしたりければ　　素性法師

もち月の駒よりおそく出でつればたどる〳〵ぞ山は越えける

屏風の繪に　　貫之

常よりも照りまさるかな山のはのもみぢを分けて出づる月影

　　躬恒

ひさかたの天つ空なる月なれどいづれの水にかげやどるらむ

廉義公後院に住み侍りける時歌よみ侍りける人々召し集めて水上秋月といふ題をよませ侍りけるに　　左大將濟時

みなそこに宿る月さへうかべるを深きや何のみくづなるらむ

　　式部大輔文時

水のおもに月の沈むを見ざりせば我ひとりとや思ひはてまし

除目(ぢもく)の朝(あした)に命婦(みやうぶ)左近が許に遣はしける　　元輔

年ごとに絶えぬ涙やつもりつゝいとゞ深くは身をしづむらむ

圓融院の御時の御屏風の歌奉りけるついでに添へて奉りける　　したがふ

○君がくる　君が來るに君だ繰るをかけたもの。

○ぬけど　貫いても。絲を通しても。

○名こそ流れて　名だけはつゞいて。

○野宮　皇女が齋宮齋院に立たれる前に暫く居られて潔齋される所で、齋宮の野宮は嵯峨の有栖川にあつた。
○いづれの緒より　緒は琴の絃を云つたもの。

権中納言敦忠が西坂本の山莊の瀧の岩にかきつけ侍りける　　伊勢

程もなくいづみばかりに沈む身はいかなる罪の深きなるらむ

　　　　　　　　　　　　　　　　中務

音羽川せき入れて落す瀧つ瀬に人のこゝろの見えもするかな

題しらず　　貫之

君がくる宿に絶えせぬ瀧の絲はへて見まほしきものにぞ有りける

延喜十三年齋院の御屛風四帖が歌おほせによりて

ながれくる瀧の白絲たえずしていくらの玉の緒とかなるらむ

流れくるたきの絲こそよわからしぬけどみだれて落つる白玉

大覺寺に人々あまたまかりたりけるに古き瀧をよみ侍りける　　右衞門督公任

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ

題しらず　　躬恒

大空をながめぞくらす吹く風の音はすれども目にし見えねば

野宮（ののみや）に齋宮（さいぐう）の庚申し侍りけるに松風入ル夜琴ニといふ題をよみ侍りける　　齋宮女御

琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒よりしらべ初めけむ

○ひけば子の日の　琴を彈くと云ふに松を引くと云ひかけたもの。

○まさらざりけり　水は增さない

○かかるみゆきやありし昔も　昔もこのやうな行幸があつたか。

○ひぢたる　ぬれた。水にひたつた。

○いくしほ　幾入。染汁の中にひたすのが幾度か。併せて幾潮の意を含めたもの。

松風のおとにみだるゝ琴の音をひけば子の日の心地こそすれ

天暦の御時名ある所を御屏風にかかせ給ひて人々に歌奉らせ給ひけるに

高砂を　　忠見

尾上なる松のこずゑはうちなびき浪のこゑにぞ風も吹きける

延喜の御時の御屏風に　　貫之

雨ふると吹く松風はきこゆれど池のみぎははまさらざりけり

同じ御時大井に行幸ありて人々に歌よませさせたまひけるに

大井河かはべのまつにこととはむかかるみゆきやありし昔も

住吉に國のつかさの臨時祭し侍りける舞人にてかはらけとりてよみ侍りける

音にのみ聞きわたりつる住吉の松のちとせを今日見つるかな

五條の内侍のかみの賀の屏風に松の海にひたりたる所を　　伊勢

海にのみひぢたる松のふか緑いくしほとかは知るべかるらむ

物へまかりける人にぬさつかはしける衣筥に浮島のかたおしはべりて　　能宣

わたつ海の浪にもぬれぬうきしまは松に心をよせてたのまむ

○かごのしま　賀古島。播磨國にある。

○何をまつとて　何を待つと云ふのと併せて松の意を含ませたもの。○つかさ　官職。

○世にふるものと　世に經ると世に古るとを云ひかけたもの。

○よと共にあかしの浦　夜とともに明すと云つて明石にかけ、併せて波を寄ると云ふのを夜にかけたもの。

題しらず　讀人しらず

かごのしま松原ごしに鳴くたづのあな長々し聞くひとなしに

あひかたらひ侍りける人みちのくにへまかりければ　能宣

いかでなほ我が身にかへて武隈(たけくま)の松ともならむ行く人のため

河原院の古松をよみ侍りける　源道濟

行末のしるしばかりにのこるべき松さへいたく老いにけるかな

題しらず　讀人しらず

世の中を住よしとしも思はぬに何をまつとて我が身經ぬらむ

つかさたまはらで歎き侍りける頃人のさうしかかせ侍りける奥に書き付け侍りける　貫之

いたづらに世にふるものと高砂の松もわれをや友と見るらむ

明石の浦のほとりを舟に乘りてまかりけるに　源爲憲

よと共にあかしの浦に松原はなみをのみこそよると知るらめ

題しらず　讀人しらず

藻かり舟今ぞなぎさに來寄すなるみぎはの鶴(たづ)も聲さわぐなり

うちしのびいざすみのえのわすれ草わすれて人のまたや摘まぬと

○あけぐれ　夜の明ける前のまだ少し暗いときのこと。

○ほど　あひだ。

○折りし桂云々　試驗に及第する意。晉書の郤詵傳にある故事。○つきのはやし　月林寺を訓讀したもの、月卿、うへ人の意。

山寺にまかりける曉に蜩(ひぐらし)の鳴き侍りければ　　左大將濟時

朝ぼらけひぐらしの聲聞ゆなりこやあけぐれと人のいふらむ

天曆の御時の御屛風の繪に長柄の橋の橋柱の僅かにのこれるかたありけるを　　藤原清正

蘆間より見ゆるながらの橋柱むかしのあとのしるべなりけり

大江爲基が許にうりにまうで來たりける鏡の包みたりける紙に書きつけて侍りける　　讀人しらず

けふまでと見るに淚のます鏡なれにしかげを人にかたるな

橘たゞもとが人の娘に忍びて物いひ侍りけるころ遠き所にまかり侍るとてこの女の許にいひ遣はしける

忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐり逢ふまで

題しらず　　貫之

年月はむかしにあらずなり行けど戀しきことはかはらざりけり

淸愼公月林寺にまかりけるに後れて詣できてよみ侍りける　　藤原後生

昔わが折りし桂のかひもなしつきのはやしのめしに入らねば

菅原の大臣かうぶりし侍りける夜母のよみ侍りける

○吹かせてしがな　吹かせてもらひたいものである。
○ちゝわくに　むづかしく。兎や角と。面倒に。
○はたもの　機物。機を織るに用ゐる道具。
○久方のあめには　天を雨に通はせたもの。
○ときあらひ衣　解いて洗濯した衣服。萬葉集には「夕されば秋風さむし。」とある。
○空にうきても　空に浮いてゐるやうに。
○木にも生ひず羽もならべで　長恨歌の中にある句によつたもので木は連理の枝、羽は比翼の鳥。

ひさかたの月の桂も折るばかり家のかぜをも吹かせてしがな

題しらず　　人麿

月草にころもはすらむ朝露にぬれてののちはうつろひぬとも

ちゝわくに人はいふとも織りて著む我がはたものにしろき麻衣

久方のあめには著ぬをあやしくもわが衣手のひるときもなき

白浪は立てど衣にかさならずあかしも須磨もおのがうら／＼

もろこしへ遣はしける時によめる

夕されば衣手さむしわぎもこがときあらひ衣ゆきてはや著む

流され侍りける道にてよみ侍りける　　贈太政大臣

天つ星みちもやどりもありながら空にうきても思ほゆるかな

浮木といふ心を

流れ木も三年ありては逢ひ見てむ世の憂きことぞ返らざりける

つかさとられて侍りける時妹の女御の御許に遣はしける　　平定文

憂世(うきよ)には門させりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする

中宮の長恨歌(ちやうごんか)の御屏風に　　伊勢

木にも生ひず羽もならべで何しかも浪路隔てて君を聞くらむ

大津の宮の荒れて侍りけるを見て　　人麿

さゞ浪や近江の宮は名のみしてかすみたなびき宮木もりなし

初瀬へ詣でける道にさほ山のわたりに宿りて侍りけるに千鳥の鳴くを聞きて　　能宣

曉の寢覺のちどりたがためか佐保のかはらにをちかへり鳴く

物へまかりける人の許にぬさを結びふくろに入れて遣はすとて

淺からぬちぎり結べるこゝろ葉は手向の神ぞ知るべかりける

初瀬の道にて三輪の山を見侍りて　　元輔

三輪の山しるしの杉はありながらをしへし人はなくて幾代ぞ

對馬守小野あきみちが妻隱岐がくだり侍りける時にともまさ朝臣の妻肥前がよみて遣はしける

沖つ島雲居の岸を行きかへりふみかよはさむまぼろしもがな

詠天　　人麿

空の海にくものなみたち月のふね星のはやしに漕ぎかへる見ゆ

藻を詠める

川の瀬のうづまく見れば玉藻かるちりみだれたる川の舟かも

○をちかへり　立ちかへつて。元にもどつて。

○こゝろ葉　大嘗會の時冠の上の飾りにつける造花。後には贈物につける飾りとなつた。
○初瀬の道　初瀬へ行く道。

○ふみかよはさむ　踏み通ふと文通ふとをかけたもの。

山をよめる

なる神の音にのみきくまきもくの檜原の山を今日みつるかな

詠　葉

いにしへにありけむ人もわがごとや三輪のひばらにかざし折りけむ

題しらず　　貫　之

人知れず越ゆとおもひしあしびきの山したみづに影はみえつゝ

伊勢のみゆきにまかりとまりて　　人　麿

をふの海に船のりすらむ吾妹子が赤裳の裾にしほ滿つらむか

天曆十一年九月十五日齋宮くだり侍りけるに內よりすゞりてうじて賜はすとて　　御　製

思ふことなるといふなる鈴鹿山こえて嬉しきさかひとぞ聞く

圓融院の御時齋宮くだり侍りけるに母の前齋宮もろともに越え侍りて　　齋宮女御

世に經れば又も越えけりすゞか山むかしの今になるにやあるらむ

あすかの女王ををさむる時よめる　　人　麿

あすか川しがらみ渡しせかませば流るゝ水ものどけからまし

○なる神の　おとにかけて云ふ枕詞。

○內より　內裏から。

○思ふことなるといふなる　思ふことが成就するさ云ふに併せて鳴るさいふ鈴鹿山と云ひかけたもの

○をさむる時　葬送の時。

小一條左大臣まかりかくれて後かの家に侍りける鶴のなき侍りけるを聞き侍りて

小野宮太政大臣

おくれゐて鳴くなるよりは蘆鶴（あしたづ）のなどか齡をゆづらざりけむ

左大臣の土御門の左大臣のむこになりて後したうづのかたをとりにおこせて侍りければ

愛宮

年を經て立ちならしつる蘆鶴のいかなるかたに跡とゞむらむ

大貳國章ごくの帶をかり侍りけるを筑紫より上りて返し遣はしたりければ

元輔

ゆくすゑのしのぶ草にもありやとて露の形見もおかむとぞ思ふ

題しらず

中務

植ゑてみる草葉ぞ世をば知らせける置きては消ゆるけさの朝露

田舍にて煩ひ侍りけるを京より人のとぶらひにおこせて侍りければ

ゆげのよしとき

露の命惜しとにはあらず君を又見でやと思ふぞ悲しかりける

神明寺の邊に無常所まうけて侍りけるがいとおもしろく侍りければ

元輔

○などか齡を云々　鶴は千年の壽を保つといふから、自分の齡をゆづればよかつたのにと云ふ意。

○ごくの帶　玉帶。石帶のこと。

○世をば知らせける　此の世の中を知らせてくれた。無常の世といふことを。

○無常所　墓所。

惜しからぬ命や更に延びぬらむをはりの煙しむる野べにて

二條右大臣左近番長佐伯淸忠を召して歌よませ侍りけるを望む事侍りけるがかなひ侍らざりける頃にてよみ侍りける

かぎりなき淚の露に結ばれて人のしもとはなるにやあるらむ

加階し侍るべかりける年えし侍らで雪の降りけるを見て　　元　輔

うき世にはゆき隱れなでかき曇りふるは思ひのほかにもあるかな

つかさ申しにたまはらざりける頃人のとぶらひにおこせたりける返事に

源　景　明

わび人はうき世の中にいけらじと思ふことさへかなはざりけり

題しらず　　讀人しらず

世の中にあらぬ所も得てしがな年ふりにたるかたちかくさむ

よの中をかくいひ〳〵の果て〳〵はいかにやいかに成らむとすらむ

男侍りける女をせちにけさうし侍りて男のいひ遣はしける

古の虎のたぐひに身をなげばさかとばかりは問はむとぞ思ふ

○加階　位階の昇進すること。

○いけらじ　生きてゐまい。

○けさう　懸想、思ひをかけて戀ひ慕ふ。

○さか　さうか。さやうか。

○春秋に思ひみだれて　春には春がよいと思ひ、秋には秋がまさつてゐると思つて。

○花のひとへに咲くばかり　花が一重に咲くと、花がいちづに咲くとをかけたもの。

○折からに　その折々によつて。

拾遺和歌集　卷第九

雜　下

ある所に春秋いづれかまさると問はせ給ひけるをよみて奉りける　紀貫之

春秋に思ひみだれてわきかねつ時につけつゝうつるこゝろは

元良親王承香殿のとしこに春秋いづれかまさると問ひ侍りければ秋もをかしう侍りといひければ面白き櫻をこれはいかゞといひて侍りければ

おほかたの秋にこゝろはよせしかど花見るときはいづれともなし

題しらず　讀人しらず

春はたゞ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる

圓融院のうへ鶯と郭公といづれかまさると仰せられければ　大納言朝光

折からにいづれともなき鳥の音もいかゞ定めむ時ならぬ身は

躬恆忠岑に問ひ侍りける　參議伊衡

白露はうへより置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづらむ

こたふ　躬恆

さを鹿のしがらみふする秋はぎは下葉やうへになりかへるらむ

忠岑

秋萩はまづさすえよりうつろふを露のわくとは思はざらなむ

又とふ　　伊衡

千年ふる松の下葉の色づくは誰がしたかみにかけてかへすぞ

こたふ　　躬恒

松といへど千年の秋に逢ひ來ればしのびに落つる下葉なりけり

又とふ　　伊衡

しろたへの白き月をも紅の色をもなどかあかしといふらむ

こたふ　　躬恒

昔よりいひし來にけることなれば我らはいかゞ今はさだめむ

又とふ　　伊衡

影見れば光なきをもころも縫ふ絲をもなどかよるといふらむ

こたふ　　躬恒

むば玉の夜は戀しき人にあひて絲をもよれば逢ふとやは見ぬ

又とふ　　伊衡

○あかし　赤し。明し。

○よる　縒る。夜。

夜晝のかずはみそぢにあまらぬをなど長月といひはじめけむ

こたふ　　躬恒

秋深み戀する人のあかしかね夜を長月といふにやあるらむ

歌合のあはせずなりにけるに　　讀人しらず

水の泡やたねとなるらむ浮草のまく人なみのうへに生ふれば

此の歌貫之が集にあり

草合（くさあはせ）し侍りける所に　　惠慶法師

種なくてなき物草は生ひにけり蒔くてふことはあらじとぞ思ふ

なぞなぞ物語しける所に　　曾根好忠

わがことはえもいはしろの結び松千年を經ともたれか解くべき

題しらず　　讀人しらず

足曳の山のこでらに住む人は我がいふこともかなはざりけり

健守法師佛名（ぶつみやう）ののぶしにて罷り出でて侍りける年いひ遣はしける　　源經房朝臣

山ならぬすみか數多に聞く人は野ぶしにとくもなりにけるかな

かへし　　健守法師

山ぶしも野ぶしもかくてこゝろみつ今はとねりのねやぞゆかしき

○まく人なみの　蒔く人がないと波の上に生えるとをかけたもの。

○草合　闘草。各、色々の草を出し合はせ類のないのを勝とする遊戯。

○わがことは　わが言葉は。

○のぶし　野伏。山野に露臥して佛道を修行する人。

屛風に法師の舟に乘りて漕ぎ出でたる所　右大將道綱母

わたつみは蜑の舟こそありと聞けのり違へても漕ぎ出でたるかな

内より人の家に侍りける紅梅を掘らせ給ひけるに鶯の巢くひて侍りければ家のあるじの女まづかく奏せさせ侍りける

勅なればいともかしこし鶯のやどはと問はばいかゞこたへむ

かく奏せさせければほらずなりにけり

ある所に說經し侍りける法師の從僧ばらのゐて侍りけるに簾の中より花を折りてといひ侍りければ　壽玄法師

いな折らじ露に袂のぬれたらば物おもひけりと人もこそ見れ

月を見侍りて　能宣

梓弓はるかに見ゆるやまのはをいかでか月のさしているらむ

賀茂に詣でて侍りける男の見侍りて今はな隱れそいとよく見てきといひおこせて侍りければ　伊勢

そら目をぞ君はみたらし川の水あさしや深しそれはわれかは

能宣に車のかもをこひに遣はして侍りけるに侍らずといひて侍りければ　藤原仲文

○蜑の舟　尼の舟にかけたもの。

○從僧ばら　從僧達。

○いな折らじ　お斷りします、折りますまいの意。

○梓弓　はるにかけた枕詞。

○そら目　空目。見ちがへること。
○みたらし　見たるらし。併せてみたらし川の水さかけたもの。
○車のかも　車の轂の口にある鐵をいふ。

○鹿をさして云々　秦の趙高を云つたもの。
○かもをゝをしと　鴨をも鴛鴦と云つて、車のかもをも惜しいと思ふのだらうとかけたもの。
○あしかる業　惡しかる業と、蘆刈る業とをかけたもの。
○すみよし　住吉。住みよい。
○怪しき樣　賤しい樣。貧しい樣
○うみ奉りたりけるみこ　藤原繼蔭の娘伊勢の產み奉つた、宇多天皇の皇子行明親王。

鹿をさして馬といふ人ありければかもをもをしと思ふなるべし　能宣

かへし

なしといへば惜しむかもとや思ふらむ鹿や馬とぞいふべかりける

廉義公の家の紙繪にあを馬ある所に葦の花毛の馬ある所　惠慶法師

難波江の葦のはなげのまじれるは津の國飼ひの駒にやあるらむ

津の守に侍りける人の許にて　忠見

難波潟しげりあへるは君が代にあしかる業をせねばなるべし

津の國にまかれりけるに知りたる人の逢ひ侍りて

都には住みわびはてて津の國のすみよしと聞く里にこそ行け

難波に祓しにある女まかりたりけるにもと親しく侍りける男の蘆を刈りて怪しき樣になりて道に逢ひて侍りけるにさりげなくて年頃えあはざりつる事などいひ遣はしければ男のよみ侍りける

君なくてあしかりけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞ住み憂き

かへし

あしからじよからむとてぞ別れけむ何か難波の浦は住みうき

伊勢の御息所うみ奉りたりけるみこのなくなりにけるが書き置きたりけ

る綺を藤壺より麗景殿の女御の方に遣はしたりければこの綺を返すとて

麗景殿のみやの君

なき人の形見と思ふに怪しきはゑみても袖のぬるゝなりけり

地獄のかたかきたるを見て

菅原道雅女

みつせ川渡るみさをもなかりけりなにに衣を脫ぎてかくらむ

去年の秋むすめに後れて侍りけるに孫の後の春兵衞佐になりて侍りける

よろこびを人々いひ遣はし侍りければ

皇太后宮權大夫國章

かくしこそはるの初めは嬉しけれつらきは秋のをはりなりけり

源重之が母の近江の國府に侍りけるに孫のあづまより夜上りて急ぐ事侍りてえこの度はあはでのぼりぬることといひて侍りければおばの女のよみ侍りける

親の親と思はましかば訪ひてまし我が子のこにはあらぬなるべし

題しらず

人麿

山高みゆふひかくれぬ淺茅原のち見むためにしめ結はましを

貫之

名のみして山は三笠もなかりけり朝日夕日のさすをいふかも

○ゑみても　笑つても。綺を見ても。

○みつせ川　三瀨川。三途の川。

○後の春　其の明春。

○かくしこそ　かうしてこそ。

○親の親　親のまた親。祖母。子のこゝは孫をいつたもの。

○しめ結はましを　注連を引き延へて我が領したしるしにせよう。

○水はぬるめり　水がぬるくなつてゐる。併せて漆を受けて塗ると云つたもの。

○大原川のひる　蛭を川の乾るにかけたもの。

○からぶり柳　かはやなぎ。

○跡のなきかな　文字の書いてない事を云つたもの。

なのみしてなれるも見えず梅津がは堰(ゐせき)の水ももればなりけり

讀人しらず

名にはいへど黒くも見えず漆河(うるしがは)さすがにわたる水はぬるめり

雨降る日大原川をまかり渡りけるに蛭のつきたりければ　　惠慶法師

よの中にあやしきものは雨降れど大原川のひるにぞありける

からぶり柳を見て　　仲文

かはやなぎいとは緑にあるものをいづれかあけの衣なるらむ

天暦の御時一條攝政藏人頭にて侍りけるに帶をかけて御棊あそばしける
まけ奉りて御數多くなり侍りければおびを返し給ふとて　　御製

白浪のうちやかへすと待つほどに濱の眞砂のかずぞつもれる

内侍馬が家に右大將實資がわらはに侍りける時棊うちにまかりたりけれ
ば物書かぬさうしを賭物(かけもの)にして侍りけるを見侍りて　　小野宮太政大臣

いつしかとあけて見たれば濱千鳥あとあることに跡のなきかな

かへし

とゞめても何にかはせむ濱千鳥ふりぬるあとは浪に消えつゝ

題しらず　　讀人しらず

みなそこのわくばかりにやかゝるらむよる人もなき瀧の白絲

清原元輔肥後守に侍りける時かの國の鼓の瀧といふ所を見にまかりたりけるにことやうなる法師のよみ侍りける

音に聞くつゞみの瀧をうち見れば唯山川の鳴るにぞありける

三位國章小さき瓜を扇に置きて藤原かねのりに持たせて大納言朝光が兵衞佐に侍りける時遣はしたりければ

おとにきくこまの渡のうりつくりとなりかくなりなる心かな

かへし

定めなくなる／＼瓜のつらみても立ちやより來むこまのすき物

みちのくに名取の郡黑塚といふ所に重之が妹あまたありと聞きていひ遣はしける　兼盛

陸奥のあだちの原のくろづかに鬼こもれりと聞くはまことか

廉義公の家の紙繪に旅人のぬす人に逢ひたるかたかける所　藤原爲賴

盜人のたつたの山に入りにけり同じかざしの名にやけがれむ

なき名のみたつ田の山の麓には世にもあらしの風も吹かなむ

高尾にまかり通ふ法師に名たち侍りけるを少將しげもとが聞きつけてま

○こまの渡のうりつくり　催馬樂に「山城のこまのわたりの瓜作り瓜作り我をほしと云ふ云々。」とある。
○となりかくなり　心があゝなりかうなりいろ／＼にかはる意。併せて瓜がなる意を含めたもの。
○瓜のつら　姫瓜の類。
○こまのすき物　催馬樂に、我をほしと云ふとあるので、此の顏を見ても寄り來るだらうと云つたもの。

〇召しかんがへむ　召しかゝへむの意。

〇しもと見るにぞ　霜と見ると云つて、下を見るに云ひかけたもの

〇しかな刈りそ　そんなに刈るな

ことかといひ遣はしたりければ　　八條のおほい君

無き名のみ高尾の山といひ立つる君は愛宕の峯にやあるらむ

みたけに年老いて詣で侍りて　　元輔

いにしへものぼりやしけむ吉野山やまより高きよはひなる人

大隅守さくらじまの忠信が國に侍りける時郡のつかさに頭白き翁の侍りけるを召しかんがへむとし侍りにける時翁のよみ侍りける

老い果てて雪の山をば戴けどしもと見るにぞ身はひえにける

かの歌によりてゆるされ侍りにける

旋頭歌

ますかゞみ　そこなる影に　むかひ居て
見る時にこそ　知らぬおきなに　逢ふこゝちする　　柿本人麿

増かゞみ　見しかとぞ思ふ　妹に逢はむかも
玉の緒の　たえたる戀の　しげきこのごろ

かのをかに　草かるをのこ　しかな刈りそ

○みまくさ　み馬に與へるまぐさをいふ。

○さもねたく　さも妬く。さも寝たく。兩方にかけたもの。

○ちはやぶる　神にかけて云ふ枕詞。こゝでは現つ神として大君にかけたもの。萬葉集にはやすみしゝとある。

○きこしめす　しろしめす。

○うるひにたり　富み潤うたといふ意。

○たきつのみやこ　瀧のやうに水の流れる都。

有りつゝも　君が來まさむ　みまくさにせむ　　源かげあきら

女の許にまかりたりけるにとく入りにければ朝(あした)に

あづさゆみ　思はずにして　いりにしを
さもねたく　引きとゞめてぞ　ふすべかりける

長歌

吉野の宮にたてまつる歌　　人麿

ちはやぶる　わがおほきみの　きこしめす　あめのしたなる
くさの葉も　うるひにたりと　やまかはの　澄めるかうちと
みこゝろを　よしののくにの　はなざかり　あきつの野邊に
みやばしら　ふとしきまして　もゝしきの　おほみやびとは
ふねならべ　あさかはわたり　ふなくらべ　ゆふかはわたり
このかはの　絶ゆることなく　このやまの　いやたかからし
たまみづの　たきつのみやこ　見れどあかぬかも

反歌

見れどあかぬ吉野の河の流れても絶ゆる時なく行き還り見む

身の沈みぬる事をなげきて勘解由（かげゆ）の判官（はうぐわん）にて　　源　順

あらたまの　としのはたちに　たらざりし　ときはのやまの
やまさむみ　かぜもさはらぬ　ふぢごろも　ふたゝびたちし
あさぎりに　こゝろもそらに　まどひそめ　みなしごぐさに
なりしより　ものおもふ言の　葉をしげみ　消（け）ぬべきつゆの
夜（よる）は置きて　なつはみぎはに　もえわたる　ほたるをそでに
ひろひつゝ　ふゆははなかと　見えまがひ　このもかのもに
降りつもる　ゆきをたもとに　あつめつゝ　ふみ見て出でし
みちはなほ　身のうきにのみ　ありければ　こゝもかしこも
あし根はふ　したにのみこそ　しづみけれ　たれこゝのつの
さはみづに　鳴くたづの音を　ひさかたの　くものうへまで
かくれなみ　たかくきこゆる　かひありて　いひながしけむ
ひとはなほ　かひもなぎさに　みつしほの　世にはからくて
すみの江の　まつはいたづら　老いぬれど　みどりのころも
脱ぎすてむ　はるはいつとも　しらなみの　なみぢにいたく
ゆきかよひ　ゆも取りあへず　なりにける　ふねのわれをし

○勘解由　國司の任が終つた時にその事務や租税などの滞りない事を記した文書を後任の國司から受取ること。
○としのはたちに　年のはじめと年の二十歳とをかけたもの。
○かぜもさはらぬ　藤衣は閒遠であるから、風もふせがない意。
○みなしごぐさ　草の名。併せて孤兒の意。
○夜は置きて　以下、螢雪の窗に學んだことを云ふ。
○かひもなぎさに　甲斐もなくと渚とをかけたもの。
○みどりのころも　緑は六位の袍
○しらなみの　知らず。白波の。
○ゆも取りあへず　ゆは舟の隙間から入つた水。あか。
○ふねのわれをし　破舟と我が身とをかけて云つたもの。

きみ知らば　あはれいまだに　しづめじと　あまのつりなは
うちはへて　引くとしきかば　ものはおもはじ

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　能　宣

世のなかを　おもへばくるし　わするれば　えもわすられず
たれもみな　おなじみやまの　まつが枝と　枯るゝことなく
すべらぎの　千代もやちよも　つかへむと　たかきたのみを
かくれぬの　したより根ざす　あやめぐさ　あやなき身にも
ひとなみに　かかるこゝろを　おもひつゝ　世にふるゆきを
きみはしも　ふゆはとり積み　なつはまた　くさのほたるを
あつめつゝ　ひかりさやけき　ひさかたの　つきのかつらを
折るまでに　しぐれにそぼち　つゆにぬれ　經にけむそでの
ふかみどり　いろあせがたに　いまはなり　かつした葉より
くれなゐに　うつろひはてむ　秋にあはば　まづひらけなむ
はなよりも　こだかきかげと　あふがれむ　ものとこそ見し
しほがまの　うらさびしげに　なぞもかく　世をしもおもひ
那須の湯の　たぎるゆゑをも　かまへつゝ　わが身をひとの

○うちはへて　延ばして。
○わするれば云々　身の述懐の忘れられぬ意。
○かくれぬの　隠沼に、たのみをかくると云ひかけたもの。
○あやなき身　頼みをかけても詮のない身。
○世にふるゆき　降る雪と世に經ることをかけたもの。
○くさのほたるを云々　雪をとり積むと併せて螢雪の功をつむ意。
○つきのかつらを云々　勉强して試驗に合格することを云ふ。
○かつした葉よりくれなゐに　五位になるだらうの意。五位の袍は紅である。
○たぎるゆゑ云々　湯のたぎるに思ひの燃えるを云ひかけたもの。

身になして　おもひくらべよ　もゝしきに　あかしくらして
とこなつの　くもゐはるけき　みなひとに　おくれてなげく
我もあるらし

ある男の物いひ侍りける女の忍びてにげ侍りて年頃ありて消息して侍りけるに男のよみ侍りける　讀人しらず

いまはとも　いはざりしかど　やをとめの　たつやかすがの
ふるさとに　かへりや來ると　まつちやま　待つほど過ぎて
かりがねの　くものよそにも　きこえねば　われはむなしき
たまづさを　かくてもたゆく　結び置きて　つてやるかぜの
たよりだに　なぎさに來居る　ゆふちどり　うらみはふかく
みつしほに　そでのみいとゞ　濡れつゝぞ　あともおもはぬ
きみにより　かひなきこひに　なにしかも　われのみひとり
うきふねの　こがれて世には　わたるらむ　とさへぞはては
かやりびの　くゆるこゝろも　つきぬべく　おもひなるまで
おとづれず　おぼつかなくて　かへれども　けふみづぐきの
あと見れば　ちぎりしことは　きみもまた　わすれざりけり

○やをとめ　彌少女。多くの少女
○まつちやま　待乳山を待つの意にかけたもの。
○かくてもたゆく　たまづさを書く手もたゆく。
○つてやるかぜ　ことづけてやる風。
○うきふね　憂きと浮舟とをかけたもの。
○こがれて　舟の緣で漕がれと云ひ、併せて思ひ焦れての意を含めたもの。
○おもひなるまで　思ふやうになるまで。
○みづぐきのあと　文字のあと。消息。

暫(しば)しあらば　たれもうき世の　あさつゆに　ひかり待つ間の
身にしあれば　おもはじいかで　とこなつの　はなのうつろふ
あきもなく　おなじあたりに　すみの江の　きしのひめまつ
ねをむすび　世々をへつゝも　しもゆきの　降るにもぬれぬ
中となりなむ

圓融院の御時大將はなれ侍りてのち久しく參らで奏せさせ侍りける　　東三條太政大臣

あはれわれ　いつゝのみやの　みやびとと　そのかずならぬ
身をなして　おもひしことは　かけまくも　かしこけれども
たのもしき　かげにふたゝび　おくれたる　ふたばのくさを
吹くかぜの　あらきかたには　あてじとて　せばきたもとを
ふせぎつゝ　ちりもすゑじと　みがきては　たまのひかりを
たれか見む　と思ふこゝろに　おふけなく　かみつえだをば
さし越えて　はなさくはるの　みやびとと　なりしときはは
いかばかり　しげきかげとか　たのまれし　すゑの世までと
おもひつゝ　こゝのかさねの　そのなかに　いつきすゑしも

○いつゝのみや　圓融院が村上天皇の第五皇子でおはす事を云ふ。

○かみつえだをば云々　圓融院が御兄宮をさし越えて東宮に立たれたことを云つたもの。

○こゝのかさね云々　天子とあがめ奉つたのも、それを申し出したのは自分であるといふ意。

○ふたはるみはる　二春三春。二三年。

○みなしも　水下。自分より下であつた者共。

○しきたへの　牀にかけて云ふ枕詞。こゝでは牀の意。

○ましてかすがの云々　春日は藤原の氏神であるから云つたもの。次の大原野とあるは春日神社を遷祀したものであるからこれも藤原氏関係の神社である。

ことでしも　たれならなくに　をやま田を　ひとにまかせて
われはたゞ　たもとそほづに　身をなして　ふたはるみはる
すぐしつゝ　そのあきふゆの　あさぎりの　絶えまにだにも
と思ひしを　みねのしらくも　よこさまに　立ちかはりぬと
見てしかば　身をかぎりとは　おもひにき　いのちあらばと
たのみしは　ひとにおくるゝ　名なりけり　おもふもしるし
やまがはの　みなしもなりし　もろびとも　うごかぬきしに
まもりあげて　しづむみくづの　はて〳〵は　かきながされし
かみなづき　うすきこほりに　閉ぢられて　とまれるかたも
なきわぶる　なみだしづみて　かぞふれば　ふゆもみつきに
なりにけり　ながき夜な〳〵　しきたへの　ふさずやすまず
明けくらし　おもへどもなほ　かなしきは　八十うぢびとも
あだし世の　ためしなりとぞ　さわぐなる　ましてかすがの
すぎむらに　いまだ枯れたる　枝はあらじ　おほはらのべの
つぼすみれ　つみおかしある　ものならば　照る日も見よと
いふことを　としのをはりに　きよめずば　我が身ぞつひに

朽ちぬべき　たにのうもれ木　あをくとも　さてやみなむ
としの内に　はる吹くかぜも　こゝろあらば　そでのこほりを
解けと吹かなむ

これが御かへりたゞいなぶねのと仰せられたりければまた御返し

いかにせむ我が身くだれる稲舟のしばしばかりの命たえずば

○いなぶねの　古今集の「最上川上れば下る稲舟の」によつたもので、承諾はするがしばらく待ての意。

拾遺和歌集　卷第十

神樂歌

さかき葉にゆふしでかけて誰が世にか神の御前にいはひそめけむ

賢木葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞ圓居せりける

御幣にならましものを皇神の御手に取られてなづさはましを

みてぐらは我がにはあらず天にます豐岡姫のみやの御てぐら

逢坂を今朝こえ來ればやま人の千歳つけとてきれるつゑなり

四方山の人のたからとする弓を神の御前に今日たてまつる

石の上ふるや男の太刀もがなくみの緒しでてみや路かよはむ

　銀の目拔の太刀をさげはきて奈良のみやこをねるや誰が子ぞ

我が駒ははやく行かなむあさびこがやへさす岡のたま笹の上に

さいはりに衣はすらむ雨降れど移ろひがたしふかく染めてば

しなが鳥ゐなのふし原飛びわたるしぎのはねおと面白きかな

すみよしのきしもせざらむもの故にねたくや人にまつといはれむ

○ゆふしで　木綿のしで。

○香をかぐはしみ　香がかんばしさに。

○とめくれば　尋ねて來て見ると

○なづさはましを　狎れ添はうものを。

○やま人　仙人。

○くみの緒しでて　組絲のさげ緒を垂らして。

○ねる　徐歩する。

○あさびこ　やまびこ。物の聲の空にひゞくもの。

○さいはり　さきはり。榛の木を細かにさいたもので、染料に用ゐる。

○しなが鳥　にほに同じ。

○ゐなのふし原　攝津國にある。

ある人のいはく住吉明神のたくせんとぞ

左兵衞督高遠賀茂に七日まうでけるはての夢に御社よりとてちはや著たるおうなの文をもてまできたりけるをあけて見侍りければかく書きて侍りけるそののち大貳になりて侍りける

ゆふ襷(だすき)かかる袂はわづらはしゆたけにとけて有らむとを知れ　安法法師

住吉に詣でて

あま降るあらひと神のあひおひをおもへば久しすみよしのまつ　惠慶法師

箱崎を見侍りて

我とはば神代のこともこたへなむむかしを知れる住吉のまつ　重之

幾世にかかたりつたへむはこざきの松の千歳のひとつならねば　元輔

源遠古朝臣子うませて侍りけるに

生ひしげれひら野のはらのあや杉よこき紫にたちかさぬべく　僧都實因

比叡の社にてよみ侍りける

ねぎかくるひえの社のゆふ襷(だすき)くさのかき葉もことやめて聞け　源兼澄

恒德公の家の障子に

○ちはや　神巫の服。

○ゆたけに　ゆるやかに。

○あひおひ　同時に生じること。

○ねぎかくる　神主のかけると、願をかけるとを通はせたもの。○ことやめて　言葉を靜めて。ものを云ふをやめて。

○神さびにたる　年久しくなつて神々しくなつた。

○神のうけひく　神の御承諾になる。

○神のたもてるいのち　神の壽命は無量である故にいふ。

○風俗　風俗歌。

○さゞ波のながらの山の　長らへての序として用ゐたもの。

大淀のみそぎいくよに成りぬらむ神さびにたる浦のひめまつ

粟田右大臣の家の障子に唐崎に祓したる所に網ひくかたかける所　平祐擧

御祓するけふ唐崎におろす網は神のうけひくしるしなりけり

題しらず　人麿

千早振神のたもてるいのちをばたれがためにか長くとおもはむ

千早振かみもおもひのあればこそ年へて富士の山も燃ゆらめ

安和元年大嘗會の風俗ながらの山　大中臣能宣

君が代の長柄の山のかひありとのどけき雲のゐるときぞ見る

さゞ波のながらの山の長らへてたのしかるべき君が御代かな

いはくら山　讀人しらず

動きなきいはくら山に君が代を運びおきつゝ千世をこそつめ

みかみの山　よしのぶ

千早ぶるみかみの山のさかき葉はさかえぞまさる末の世までに　讀人しらず

よろづ世の色も變らぬさかき葉は三上の山に生ふるなりけり　もとすけ

萬代をみかみの山のひゞくにはやすの川水澄みぞあひにける

おほくら山　　よしのぶ

みつぎ積むおほくら山は常磐にていろもかはらず萬代や經む

みを山　　讀人しらず

高島やみをのなかやまそま立ててつくりかさねよ千世の竝藏

かゞみ山　　よしのぶ

磨きけるこゝろもしるし鏡山くもりなき世に逢ふがたのしさ

松が崎　　清原元輔

千歲ふる松がさきには羣れ居つゝたづさへあそぶ心あるらし

おものゝ濱　　かねもり

とゞこほる時もあらじな近江なる御膳の濱のあまの日つぎは

天祿元年大嘗會の風俗千世能山　　よしのぶ

今年より千歲の山はこゑたえずきみが御代をぞ祈るべらなる

いやたかの山　　かねもり

あふみなるいやたか山の榊にて君が千代をばいのりかざさむ

みかみの山　　よしのぶ

○おほくら山　近江國にある。
○みつぎ積む　調を積むの意で大倉にかけて云ふ枕詞。
○みを山　近江國高島郡にある。
○そま　山林から伐つた材木。
○竝藏　幾つも竝び立つてゐる藏
○たづ　田鶴。鶴。
○あまの日つぎ　毎日奉る供御。
○千世能山　千歲山。丹波國桑田郡にある。

祈りくる三上の山のかひしあればちとせの影にかくて仕へむ

いはくら山

今日よりはいはくら山によろづ代を動きなくのみ積まむとぞ思ふ　中務

かゞみ山

よろづ世をあきらけく見むかゞみ山千年の程は塵もくもらじ

大くにの里　かねもり

年もよしこがひも得たりおほ國の里たのもしく思ほゆるかな

よしだの里

名にたてる吉田のさとの杖なればつくとも盡きじきみが萬代

いづみ川

いづみ川のどけき水のそこ見れば今年はかげぞ澄みまさりける

松が崎

鶴の住む松がさきにはならべたる千代の例（ためし）を見するなりけり

延長四年八月二十四日民部卿清貫が六十の賀中納言恆佐が妻し侍りける

時の屏風に神樂する所のうた　つらゆき

あしびきの山の賢木（さかき）葉（は）ときはなる陰にさかゆる神のきねかな

○大くにの里　山城國にある。

○年もよしこがひも得たり　豐年ではあるし、養蠶は上結果であつた。

○よしだの里　山城國愛宕郡にある。吉田神社のある所。

○つくとも盡きじ　杖をつくこと、盡きることを通はせたもの。

いづみ川　山城國木津川の古名

○きね　神に奉仕する女。女巫。

旅にてよみ侍りける　人麿

おほなむちすくな御神の造れりし妹背の山を見るぞうれしき

延喜二十年亭子院の春日に御幸侍りけるに國のつかさ二十一首の歌よみて奉りけるに　藤原忠房

めづらしき今日の春日のやをとめを神もうれしと忍ばざらめや

拾遺和歌集　卷第十一

戀　一

天暦の御時の歌合　　壬生忠見

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそおもひ初めしか

平兼盛

忍ぶれど色に出にけり我がこひはものやおもふと人の問ふまで

題しらず　　貫之

色ならばうつるばかりも染めてましおもふ心をしる人のなき

女の許にはじめて遣はしける　　平公誠

しのぶるも誰ゆゑならぬものなれば今は何かは君にへだてむ

題しらず　　讀人しらず

歎き餘り遂に色にぞ出でぬべきいはぬを人の知らばこそあらめ

逢ふ事をまつにて年の經ぬるかな身は住の江におひぬものゆゑ

おとに聞く人に心をつくばねのみねど戀しき君にもあるかな

○まだき立ちにけり　早くももう立つてしまつた。

○何かは君にへだてむ　どうして君にへだてを置くことをしようや

○心をつくばねのみねど　筑波根の嶺を、心をつくすと、まだ見ないがさにかけたもの。

○夢よりぞ　夢からして。夢に見たのがはじめで。
○あはする人　逢はせてくれる人
○よそになきつゝ　逢ふことさへせずに歎きつゝ。

天雲の八重ぐもがくれ鳴る神の音にのみやは聞きわたるべき　人麿

讀人しらず

見ぬ人の戀しきやなぞおぼつかな誰とか知らむ夢に見ゆとも

夢よりぞこひしき人を見そめつる今はあはするひともあらなむ

かくてのみありその浦の濱千鳥よそになきつゝ戀ひや渡らむ

よそにのみ見てやは戀ひむ紅(くれなゐ)のすゑ摘む花のいろに出でずば

まさたゞがむすめにいひ始め侍りける侍從に侍りける時　權中納言敦忠

身にしみて思ふ心の年經ればつひに色にも出でぬべきかな

侍從に侍りける時女にはじめて遣はしける　くにまさ

いかでかは知らせそむべき人しれずおもふ心の色にいでずば

權中納言敦忠

いかでかはかく思ふてふことをだに人傳(ひとづて)ならで君に知らせむ

つゝみの中納言のみやす所をみて遣はしける　小野宮太政大臣

あな戀しはつかに人を水の泡の消え返るとも知らせてしがな

かへし

ながからじと思ふ心は水の泡によそふる人のたのまれぬかな

題しらず　　讀人しらず

港いづるあまのを舟の碇なはくるしきものとこひを知りぬる

おほゐ河くだす筏のみなれざをみなれぬ人もこひしかりけり

人丸

みなそこに生ふる玉藻のうちなびき心をよせて戀ふるころかな

讀人しらず

音にのみ聞きつる戀を人知れずつれなき人にならひぬるかな

いかゞせむ命はかぎりあるものをこひは忘れず人はつれなし

女のもとに男のふみ遣はしけるに返事もせず侍りければ

山彦もこたへぬやまの呼子鳥われひとりのみなきやわたらむ

題しらず

やまびこは君にも似たる心かなわれ聲せねばおとづれもせず

足びきのやましたとよみ行く水の時ぞともなく戀ひわたるかな

いかにして暫し忘れむ命だにあらば逢ふ夜の有りもこそすれ

ぬき亂る涙の玉もとまるやと玉の緒ばかり逢はむといはなむ

○くるしきものと　上の二句は四句のくるを云ふための序。
○みなれざを　水に馴れた棹。初句からこの句までは、四句みなれぬを云ふための序。
○うちなびき　上の二句はこの詞の序。
○やましたとよみ　山下をひゞきとゞろかして。
○時ぞともなく　何時と時の分ちなく。
○玉の緒ばかり　暫時。しばしの間。

岩の上におふる小松も引きつれど猶ねがたきは君にぞありける

棚機(たなばた)もあふ夜ありけり天の川このわたりにはわたる瀬もなし

九條右大臣

澤にのみとしは經ぬれどあしたづの心は雲のうへにのみこそ

讀人しらず

おほ空はくもらざりけり神無月(かんなづき)しぐれごゝちは我のみぞする

忍ぶれど猶しひてこそ思ほゆれ戀といふものの身をし去らねば

男のよみておこせて侍りける

あはれとも思はじものを白雪の下に消えつゝなほもふるかな

かへし　中務

程もなく消えぬる雪はかひもなし身をつみてこそ哀れと思はめ

題しらず　讀人しらず

外(よそ)ながら逢ひ見ぬほどに戀ひ死なば何にかへたる命とかいはむ

いつとてか我が戀やまむ千はやぶるあさまの嶽の煙絶ゆとも

大原野祭の日榊にさして女のもとに遣はすとて　一條攝政

大原の神もしるらむ我がこひは今日氏びとのこゝろやらなむ

○猶ねがたきは　なほ根の難いのは、併せて寢ることの出來にくいのは。

○このわたり　この渡。自分のところ。

○忍ぶれど　忍んではゐるが。

○あはれとも云々　男から女の心を云つたもの。

○なほもふる　白雪がなほも降ると、なほも思ひつゝ日を經るとをかけたもの。

○身をつみてこそ　雪が積ると、併せて身せまるの意。

かへし　　讀人しらず

榊葉の春さす枝のあまたあれば咎むる神もあらじとぞおもふ

題しらず

あめつちの神ぞ知るらむ君がため思ふこゝろの限りなければ

海もあさし山もほどなし我がこひを何によそへて君にいはまし

人麿

奥山のいはがき沼のみごもりに戀ひや渡らむ逢ふよしをなみ

大嘗會の御禊に物見侍りける所にわらはの侍りけるをみて又の日つかはしける　　寛祐法師

あまた見しとよのみそぎの諸人の君しも物をおもはするかな

題しらず　　讀人しらず

玉すだれ絲のたえまに人を見てすけるこゝろは思ひかけてき

玉垂のすけるこゝろとみてしよりつらしてふことかけぬ日はなし

我こそや見ぬ人こふる病すれ逢ふ日ならではやむくすりなし

玉江こぐ菰刈舟のさしはへて浪間もあらば寄らむとぞおもふ

みるめかる海人とはなしに君こふる我が衣手のかわくときなき

○いはがき沼　岩が垣のやうに繞つた中にある沼。

○みごもり　水の中に隱れることで、自分の身の中に隱す意にかけたもの。

○とよのみそぎ　大嘗會の後に行はれる御禊。

○すけるこゝろ　絲の絕目を隙けること受け、併せて好色心の意に云つたもの。

○やむくすりなし　逢へは病もよくなる。逢ふ日が即ち藥である。

○さしはへて　棹をさすの意で受けたもの。ことさらに。

み熊野の浦のはまゆふ百重なる心は思へどたゞに逢はぬかも　　柿本人麿

朝な〳〵けづれば積るおち髪のみだれて物をおもふころかな　　貫之

懸想し侍りける女の返事し侍らざりければ　　藤原實方朝臣

我が爲は棚井の清水ぬるけれど猶かきやらむさてはすむやと

かへし　　讀人しらず

かきやらば濁りこそせめ淺き瀬の水屑はたれか澄ませても見む

題しらず

人知れぬ心のうちを見せたらばいままでつらき人はあらじな

女のもとに遣はしける　　小野宮太政大臣

ひとしれぬ思ひは年もへにけれど我のみ知るはかひなかりけり

女の許につかはしける　　讀人しらず

人しれぬなみだに袖はくちにけり逢ふ夜もあらばなにに包まむ

かへし

君は只袖ばかりをや朽すらむ逢ふには身をもかふとこそ聞け

○けづれば　梳けづれば。髪をとかせば。

○猶かきやらむ　猶書き遣らむ。なほ文を送らう。併せて水を掻き流さうの意。

○身をもかふとこそ聞け　身も換へると聞いてゐる。

題しらず

ひと知れず落つる涙は津の國のながすとみえて袖ぞくちぬる

戀といへば同じ名にこそ思ふらめいかで我が身を人にしらせむ

天暦の御時の歌合に　　中納言朝忠

逢ふことのたえてしなくばなか〱に人をも身をも恨みざらまし

題しらず　　兼盛

逢ふ事はかたゐざりする嬰兒（みどりご）の立たむ月にも逢はじとやする

讀人しらず

あふ事を月日にそへて待つ時は今日ゆく末になりねとぞ思ふ

逢ふことをいつとも知らで君がいはむ常磐（ときは）の山のまづぞ苦しき

命をば逢ふにかふとか聞きしかどわれや例（ためし）にあはぬ死にせむ

貫之

行末はつひに過ぎつゝあふことの年月なきぞわびしかりける

讀人しらず

いきたれば戀することの苦しきに猶いのちをば逢ふにかへてむ

大伴百世

〇逢ふことのたえてしなくば　絶えて逢ふ事がないならば。

〇常磐の山のまづぞ苦しき　君がいはぬ時と受け、山の松に併せて待つのは苦しいの意。

〇命をば逢ふにかふ云々　古今集戀の二にある友則の歌「命やはなにぞは露のあだ物を逢ふにしかへばをしからなくに」を本歌としたもの。

〇例にあはぬ死にせむ　例にあはずに、逢はないで死んでしまふだらう。

戀ひ死なむ後はなにせむ生ける日の爲こそ人は見まくほしけれ

源　經　基

哀れとも君だにいはば戀ひわびて死なむ命も惜しからなくに

けさうし侍りける女の家の前をわたるとていひいれ侍りける　　讀人しらず

人しれず思ふこゝろをとゞめつゝいくたび君が宿をすぐらむ

題しらず

時雨(しぐれ)にも雨にもあらで君戀ふるとしのふるにも袖はぬれけり

ちぎりけることありける女に遣はしける　　菅原輔昭

露ばかり頼めし事のすぎ行けば消えぬばかりの心地こそすれ

かへし　　讀人しらず

露ばかりたのむる事もなきものをあやしやなにに思ひ置きけむ

題しらず

流れてとたのむるよりは山川の戀しき瀬々にわたりやはせぬ

逢ひ見ては死(し)にせぬ身とぞ成りぬべき頼むるにだに延ぶる命は

いかでかと思ふ心のあるときはおぼめくさへぞ嬉しかりける

わびつゝも昨日ばかりは過(すぐ)してき今日や我が身のかぎりなるらむ

○としのふるにも　年が經るに降るをかけたもの。

○消えぬばかりの心地　今にも消えさうな心配。

○流れてと　後になつてからと。

○おぼめく　はつきりしない。

○昨日ばかりは　昨日だけは。

○霞たつ明日の春日　長い春の日といふ意。

○思ひかけごの　思ひかけるを、掛子とを云ひかけたもの。掛子は箱の緣に他の箱をかけ重ねるもので、この詞から次に玉櫛笥とつゞけたのである。
○あけたつごとに　開けたりたてたりする毎に。併せて夜が明けるごとに。

人麿

戀ひつゝも今日は暮しつ霞たつ明日の春日をいかでくらさむ

戀ひつゝも今日はありなむ玉匣あけむあしたをいかで暮さむ

讀人しらず

君をのみ思ひかけごの玉櫛笥あけたつごとに戀ひぬ日はなし

拾遺和歌集　卷第十二

戀　二

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

春の野に生ふるなきなの侘（わび）しきは身をつみてだに人の知らぬよ

なき名のみたつたの山のあをつゞらまたくる人もみえぬ所に

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　人　　麿

無き名のみたつの市とは騷げどもいさまだ人をうる由もなし

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

なき事を磐余（いはれ）の池の浮蓴（うきぬなは）くるしきものは世にこそありけれ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　人　　麿

竹の葉におきゐる露の轉（まろ）びあひてぬるとはなしに立つ我が名かな

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず

あぢきなや我が名は立ちて唐衣身にもならさでやみぬべきかな

唐衣我はかたなの觸れなくにまづ立つものはなき名なりけり

○なきな　春の野に生える菜と、無き名とを通はせたもの。無き名は跡方もない評判。○身をつみてだに　菜を受けて摘むと云ひ、自分の身にひきあてての意にかけたもの。

○たつの市　辰市。大和國添上郡にあつた市で、無き名が立つとかけたもの。

○なき事を云々　磐余の池を、無き事を云はれるにかけ、浮蓴を繰るを苦しいとかけたもの。○ぬるとはなしに　濡れると寢るとを云ひかけたもの。○身にもならさで　肌身にも觸れなくて。

○かたな云々　刀は觸れないのに早くも衣を裁つと世人がいふ。卽ち肌身も觸れないのに、早くも人と戀中であるやうに風評に上つた。

染河にやどかる浪のはやければなき名たつとも今はうらみじ　源重之

木幡川(こはたがは)こは誰がいひしことの葉ぞなき名すゝがむ瀧つ瀬もなし　讀人しらず

女のもとに遣はしける

君が名の立つにとがなき身なりせば大凡人(おほよそびと)になして見ましや　藤原忠房朝臣

題しらず

ゆめかとも思ふべけれど寢やはせし何ぞ心にわすれがたきは　讀人しらず

夢よゆめ戀しき人に逢ひみすな覺めての後はわびしかりけり

逢ひ見ての後の心にくらぶればむかしは物をおもはざりけり　權中納言敦忠

逢ひ見てはなぐさむやとぞ思ひしをなごりしもこそ忘れ難けれ　坂上これのり

逢ひみでもありにし物をいつのまに習ひて人の戀しかるらむ　讀人しらず

我がこひはなほあひ見ても慰まずいやまさりなる心地のみして

○寢やはせし　寢はしない。

○夢よゆめ　夢よ、決して。

○むかしは　逢ひ見ぬ前は。

○逢ひみでもありにし物を　逢はなければよかつたのに。

○いやまさりなる　だん／＼とまさつて來る。一層熱烈になる。

初めて女の許にまかりてあしたに遣はしける　　よしのぶ

逢ふ事を待ちし月日の程よりも今日のくれこそ久しかりけれ

貫之

あかつきのなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや

逢ひ見てもなほなぐさまぬ心かな幾千代ねてか戀のさむべき

人麿

むば玉の今宵なあけそ明けゆかば朝ゆく君をまつがくるしき

讀人しらず

ひとりねし時は待たれし鳥の音もまれにあふ夜は侘しかりけり

かづらきやわれやはくめの橋造り明け行くほどは物をこそ思へ

本院の五の君のもとに始めてまかりて朝に　　平行時

朝まだき露わけ來つる衣手のひるまばかりにこひしきやなぞ

本院のひんがしの對の君にまかり通ひて朝に　　大納言きよかげ

ふたつなき心は君におきつるをまたほどもなく戀しきやなぞ

題しらず　　讀人しらず

いつしかと暮を待つ間の大空はくもるさへこそ嬉しかりけれ

○おきてわびしき　白露が置くといふに、起きてわびしいとかけたもの。

○朝ゆく君　朝歸つてゆく君。

○くめの橋　大和の葛城山から金峯山に架けたもので役行者が造らせたものといふ傳說の橋。

○ひるまばかり　衣手の露の干る間ばかりと、晝間ばかりとをかけたもの。

○くもるさへこそ　くもれば薄暗くなるから、夕暮になつたかと思はれて。

女のもとにまかりそめて　大江爲基

日のうちにものを二度(ふたたび)思ふかな疾くあけぬると遲く暮るゝと

題しらず　貫之

もゝはがきはねかくしぎも我が如くあしたわびしき數は勝らじ

讀人しらず

現(うつゝ)にも夢にも人によるし逢へば暮れ行くばかり嬉しきはなし

曉のわかれのみちを思はずば暮れゆく空はうれしからまし

君こふる涙のこほる冬の夜はこゝろ解けたるいやは寢らるゝ

女に物いひはじめてさはること侍りてえまからでいひつかはし侍りける　在原業平朝臣

かからでもありにしものを白雪の一日もふればまさる我が戀

女につかはしける　よしのぶ

朝ごほり解くる間もなき君によりなどてそほつる袂なるらむ

讀人しらず

身をつめば露をあはれと思ふかな曉ごとにいかで置くらむ

うしと思ふものから人の戀しきはいづこを忍ぶこゝろなるらむ

○もゝはがき　百羽掻。鴫が羽を幾度も掻くこと。

○よるし逢へば　夜に逢ふので。

○こゝろ解けたる　涙のこほると云ふに對して解けたると受けたもの。

○よそにても云々　逢ひ見ずにあるべきであつたのに。

○夢だに見えず云々　寢る夜もないから夢さへも見ることが出來ない。

○あけぐれ　夜明のまだ薄暗い中。

○玉鉾の　みちにかけて云ふ枕詞

○君とねぬ夜　松の根と云つて、それを受けて寢ぬ夜と云つたもの

よそにてもありにしものを花薄（すゝき）ほのかにみてぞ人はこひしき

夢よりもはかなき物はかげろふのほのかに見えし影にぞありける

天暦の御時の歌合に　　たゞみ

夢の如（ごと）などか夜（よる）しも君を見む暮るゝ待つ間もさだめなき世に

したがふ

戀しきをなににつけてか慰めむ夢だに見えずぬる夜なければ

女のもとより暗きにかへりて遣はしける

あけぐれの空にぞわれは迷ひぬるおもふ心の行かぬまに〱

源公忠朝臣日々にまかりあひ侍りけるをいかなる日にかありけむあひ侍らざりける日つかはしける　　貫之

玉鉾（たまぼこ）のとほみちもこそ人は行けなど時のまも見ねばこひしき

題しらず　　讀人しらず

身にこひのあまりにしかば忍ぶれど人の知るらむことぞ侘しき

忍びつゝ思へばくるし住の江の松のねながらあらはれなばや

忠房がむすめの許に久しうまからでつかはしける　　大納言きよかげ

住吉の松ならねどもひさしくも君とねぬ夜のなりにけるかな

かへし

ひさしくも思ほえねども住吉の松やふたゝび生ひかはるらむ

あるをとこの松を結びてつかはしたりければ　讀人しらず

何せむに結びそめけむいはしろの松は久しきものと知る／＼

題しらず　人麿

片岸の松のうきねと忍びしはさればよつひにあらはれにけり

逢ひ見ではいくひささにもあらねども年月のごと思ほゆるかな

としを經て思ひ／＼て逢ひぬれば月日のみこそ嬉しかりけれ

杉板もてふける板間のあはざらばいかにせむとか我が寢そめけむ

讀人しらず

こぬかなとしばしは人に思はせむあはで歸りし夜半のねたさに

秋霧のはれぬあしたの大空をみるがごとくも見えぬきみかな

戀ひわびぬねをだになかむ聲立てて何處なるらむ音なしの瀧

忍びてけさうし侍りける女のもとに遣はしける　もとすけ

おとなしの河とぞ遂に流れ出づるいはで物思ふ人のなみだは

○松のうきね　松の浮き根と憂き音とをかけたもの。

○いくひささ　長く久しい事。

○あはざらは　逢はざらば。上の二句はこの序。

題しらず　讀人しらず

風さむみ聲よわり行く蟲よりもいはで物おもふ我ぞまされる

しかのあまの釣にともせる漁火のほのかに妹をみる由もがな

こひするは苦しきものと知らすべく人を我が身に暫しなさばや

知るや君しらずばいかにつらからむ我がかくばかり思ふ心を

懸想し侍りける女の五月夏至の日なりければうたがひなく思ひたゆみて物いひ侍りけるにしたしきさまになりにければいみじく恨みわびて後に更にあはじといひ侍りければ　よしのぶ

あす知らぬ我が身なりとて恨み置かむ此の世にてのみ止まじと思へば

題しらず　人麿

思ふなと君はいへども逢ふ事をいつと知りてかわが戀ひざらむ

萬葉集和し侍りけるに　源順

思ふらむ心の中をしらぬ身は死ぬばかりにもあらじとぞ思ふ

侍從に侍りける時村上の先帝の御めのとにしのびて物のたうびけるにつきなき事なりとて更にあはず侍りければ　一條攝政

かくれぬの底の心ぞ恨めしきいかにせよとてつれなかるらむ

○しかのあまの云々　三句までは四句の序。

○つきなき事　似合はしくない。不相應な事。

○さももどかしき心　何とも皆に思ふやうにならぬ心。

○ぬるくとも　あつくなくても。

○涙のみかかりけるとも　涙ばかりがかゝつたこと。涙ばかりを流してこのやうであつたことを云ひかけたもの。

○みをつくしても　身を盡してもを難波の縁の澪標にかけたもの。

題しらず　讀人しらず

我ながらさもどかしき心かなおもはぬ人はなにかこひしき

ふるく物いひ侍りける人に　もとすけ

草がくれかれにし水はぬるくともむすびし袖は今もかわかず

題しらず　讀人しらず

我がおもふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづしをるらむ

袂より落つるなみだはみちのくの衣がはとぞいふべかりける

衣をやぬぎてやらまし涙のみかかりけりとも人の見るべく

しのびて物いひ侍りける人のひとしげき所に侍りければ　實方朝臣

人目をもつゝまぬものと思ひせばそでの涙のかからましやは

題しらず　大伴方見

石（いそ）の上（かみ）ふるとも雨にさはらめや逢はむと妹にいひてしものを

もとよしのみこ

わびぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ

五月五日ある女のもとにつかはしける　讀人しらず

いつかとも思はぬ澤の菖蒲草（あやめぐさ）たゞつくづくとねこそ泣かるれ

題しらず　　躬恒

生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人の來ぬがわびしき

蚊遣火を見侍りて　　能宣

蚊遣火はものおもふ人の心かも夏の夜すがらしたにもゆらむ

題しらず　　勝觀法師

しのぶれば苦しかりけり篠薄あきのさかりになりやしなまし

讀人しらず

思ひきやわが待つ人はよそながら棚機つめのあふを見むとは

けふさへやよそに見るべき彦星の立ちならすらむ天の河なみ

侘びぬればつねはゆゝしき棚機も羨まれぬるものにぞ有りける

露だにもなからましかば秋の夜を誰とおきゐて人を待たまし

今さらに問ふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

秋はわが心の露にあらねども物なげかしきころにもあるかな

○すさめぬ　賞翫せぬ。
○かりにも人の來ぬ　菖蒲草を刈りにも人が來ぬと、かりそめにも人が來ぬとをかけたもの。
○篠薄あきのさかり　篠薄の穗に出るやうに、表面にあらはれて言ひ寄る。
○つねはゆゝしき　常は忌々しくいやな。棚機は一年に一度しか逢はぬもの故、それをいやに思ふのである。
○門させりてへ　門を閉してあるといへ。
○わが心の露　我が涙。

拾遺和歌集　巻第十三

戀　三

題しらず　　　　讀人しらず

足引の山した風もさむけきにこよひもまたや我がひとりねむ

　　　　人　　　麿

あしびきの山鳥のをのしだり尾の長々し夜をひとりかもねむ

　　　　讀人しらず

足引の葛城（かづらき）やまにゐる雲の立ちてもゐてもきみをこそおもへ

あし引の山のやますげやまずのみ見ねば戀しき君にもあるかな

旅のおもひを述ぶといふことを　　　　石上乙麿

足引の山こえ暮れて宿からばいも立ち待ちていねざらむかも

題しらず　　　　人　　　麿

あしびきの山より出づる月まつと人にはいひて君をこそまて

三日月のさやかに見えず雲隠れ見まくぞほしきうたてこの頃

○さむけきに　寒いのに。

○長々し夜を　長い夜を。上の三句はこの句をいふための序。

○立ちてもゐても　上の句はこの句を云ふための序。

○逢ふことはかたわれ月の　逢ふ事に難いの意をかけたもの。
○おぼろげにやは　ぼんやりさしたことでなく。なみ〳〵でなく。

○こよひの月をきみ見ざらめや　今晩の月を君は見ない事はあるまい。

○何によそへて　何によせて。何にかこつけて。

読人しらず

逢ふことはかたわれ月の雲がくれおぼろげにやは人のこひしき

人麿

秋の夜の月かも君は雲がくれしばしも見ねばこゝらこひしき

圓融院の御時の御屏風八月十五夜月のかげ池にうつれる家にをとこ女ゐてけさうしたる所

平兼盛

秋の夜の月見るとのみおきゐつゝこよひもねでや我はかへらむ

月のあかかりける夜女のもとに遣はしける

源さねあきら

戀しさはおなじ心にあらずともこよひの月をきみ見ざらめや

かへし

中務

さやかにも見るべき月を我はたゞ涙にくもるをりぞおほかる

題しらず

人麿

ひさかたのあま照る月もかくれ行く何によそへて君をしのばむ

京に思ふ人をおきてはるかなる所にまかりけるみちに月のあかかりける夜

読人しらず

都にて見しにかはらぬ月影をなぐさめにてもあかすころかな

○ありつゝも　はじめの通りに。

○ことならば　このやうなことならば。○同じことならば。

○人だのめ　頼もしく思はせて置いてその實のないこと。

題しらず　貫之

照る月も影みなそこにうつりけり似たるものなき戀もするかな

月を見てゐなかなる男をおもひ出でてつかはしける　中宮内侍

こよひ君いかなるさとの月を見て都にわれをおもひ出づらむ

題しらず　たゞみね

月影を我が身にかふるものならば思はぬ人もあはれとやみむ

萬葉集和せる歌　したがふ

ひとりぬる宿には月の見えざらばこひしきことの數はまさらじ

題しらず　人

長月のあり明の月のありつゝも君し來まさばわれ戀ひめやも

月のあかき夜人を待ちはべりて

ことならば闇にぞあらまし秋の夜のなぞ月影の人だのめなる

題しらず　春宮左近

降らぬ夜のこゝろを知らで大空の雨をつらしと思ひけるかな

讀人しらず

衣だに中にありしはうとかりき逢はぬ夜をさへ隔てつるかな

○ねなくにあくる　寢ないであける。

○いたづらぶし　獨り空閨に寢る

○夕占　夕方にするうらなひ。

○見てしがな　見たいものである。

長き夜も人をつらしと思ふにはねなくにあくる物にぞ有りける

今はとはじといひ侍りける女のもとにつかはしける

忘れなむ今は問はじと思ひつゝぬる夜しもこそ夢に見えけれ

題しらず

よるとても寢られざりけり人知れず寢覺のこひに驚かれつゝ

むば玉の妹が黑髮こよひもや我がなき牀になびき出でぬらむ

我がせこが在所(ありか)も知らでねたる夜は曉がたのまくら寂しも

いかなりしとき吳竹の一よだにいたづらぶしを苦しといふらむ

いかならむ折節(をりふし)にかはくれ竹のよるはこひしき人に逢ひみむ

人麿

まさしてふやその衢(ちまた)に夕占(ゆふけ)とふうらまさにせよ妹に逢ふべく

夕占とふ占(うら)にもよくあり今夜だに來ざらむ君をいつか待つべき

夢をだにいかで形見(かたみ)に見てしがな逢はでぬる夜の慰めにせむ

うつゝには逢ふこと難し玉の緒のよるは絶えせず夢に見えなむ

ひろはたのみやす所久しう內にも參らざりける夢になむ例のやうにて內にさぶらひ給ひつるを人のいひ侍りけるを聞きて

古をいかでかとのみおもふ身にこよひの夢をはるになさばや

延喜十五年御屏風の歌　　貫之

忘らるゝときしなければ春の田をかへすがへすぞ人は戀しき

題しらず　　讀人しらず

あづさ弓春のあら田をうちかへし思ひやみにし人ぞこひしき　　躬恆

彼の岡にはぎかる男なはをなみねるやねりその碎けてぞ思ふ　　讀人しらず

春くれば柳の絲も解けにけりむすぼほれたる我がこゝろかな

いづ方によるとかは見む青柳のいとさだめなき人の心を

まきもくの檜原の霞たちかへりかくこそは見めあかぬ君かな

冬よりひえの山に登りて春まで音せぬ人のもとに　　藤原清正がむすめ

眺めやる山邊はいとゞ霞みつゝおぼつかなさのまさる春かな

題しらず　　人麿

我が背子をきませの山と人はいへど君もきまさぬ山の名ならし　　山邊赤人

○はるになさばや　冬が極まつて春になるやうにしたいものである

○かへすがへすぞ　春の田をかへすと云ひかけて、かへすがへすもと續けたもの。

○春のあら田をうちかへし　表面の字義と併せて、繰り返し／＼の意を含む。

○ねりそ　木の枝をねり搓つて繩の代りに用ゐるもの。上からこの句までは五句の序である。

○むすぼほれたる　解けにけりに對して結ばれたると續けたもので思ひが晴れず氣が塞ぐの意。

○おぼつかなさ　不安心、氣がゝり。たよりなき。

○きませの山　來增山。近江國にあるといふ。山の名を來ませとかけたもの。

我が背子をならしの岡のよぶこ鳥君よびかへせ夜のふけぬとき

讀人しらず

こぬ人をまつちの山のほとゝぎすおなじ心にねこそなかるれ

しのゝめに鳴きこそわたれ郭公(ほとゝぎす)ものおもふ宿はしるくやあるらむ

たゝくとて宿の妻戸を明けぬれば人もこずゑの水鷄(くひな)なりけり

夏衣うすきながらぞたのまるゝひとへなるしも身に近ければ

刈りてほす淀の眞菰の雨降ればつかねもあへぬ戀もするかな

みな月の土さへさけて照る日にも我が袖ひめや妹に逢はずして

人麿

なる神のしばしうごきて空くもり雨も降らなむ君とまるべく

人ごとは夏野の草のしげくとも君とわれとしたづさはりなば

讀人しらず

野も山もしげりあひぬる夏なれど人のつらさは言の葉もなし

なつくさの茂みに生ふる荊三稜(まろこすげ)まろがまろねよいく世經ぬらむ

天暦の御時ひろはたの御息所(みやすどころ)ひさしく參らざりければ御ふみつかはしける

御製

○こぬ人をまつちの山　來ぬ人を待つといふ名の待乳山。

○おなじ心に　待つといふ待乳山の郭公と同じやうに自分も待つ心で。

○人もこずゑの水鷄　人も來ないで、梢の水鷄がたゝくのであつたても。

○夏野の草のしげくとも　夏の野の草の繁つてゐるやうにうるさくても。

○たづさはりなば　手をひきつれてゆきさへすれば。

○言の葉もなし　野山の草木の葉がしげると云ふに對したもので、何の返事もないとかけたもの。

○まろがまろね　まろは自分の自稱。まろねは著物も脫がずに寢ること、轉じて獨寢。

○わがとこなつにおきゐたるつゆ　常夏の上に置いた露といふに、自分が牀の上に起きてゐたのをとかけたもの。

山がつの垣ほにおふる撫子におもひよそへぬときのまぞなき

廉義公の家の障子の繪になでしこ生ひたる家の心ぼそげなるを　　清原元輔

おもひ知る人にみせばや終夜わがとこなつにおきゐたるつゆ

題しらず　　讀人しらず

秋の野の草葉もわけぬ我が袖の露けくのみもなりまさるかな

三百六十首歌のなかに　　曾根好忠

我が背子がきまさぬよひの秋風は來ぬ人よりもうらめしきかな

題しらず　　讀人しらず

うらやまし朝日にあたる白露を我が身と今はなすよしもがな

人麿

秋の田の穗の上におけるしら露の消ぬべく我はおもほゆるかな

住吉の岸を田にほり蒔きし稻の刈るほどまでも逢はぬ君かな

赤人

戀しくば形見にせむと我がやどに植ゑし秋はぎ今さかりなり

中將のみやす所のもとに萩につけて遣はしける　　廣平親王

秋はぎのした葉を見ずばわすらるゝ人の心をいかで知らまし

題しらず　讀人しらず

しめゆはぬ野邊の秋萩風ふけばと伏しかく伏し物をこそおもへ

中宮内侍

移ろふは下葉ばかりと見し程にやがても秋になりにけるかな

女のもとにつかはしける　能宣

ことの葉も霜にはあへず枯れにけりこや秋果つるしるしなるらむ

貫之

色もなき心を人にそめしよりうつろはむとは我が思はなくに

讀人しらず

數ならぬ身をうぢ川の網代木に多くのひをもすぐしつるかな

した紅葉するをばしらで松の木のうへの緑をたのみけるかな

人麿

我が背子をわが戀ひをれば我が宿の草さへ思ひうらがれにけり

貞文が家の歌合に　讀人しらず

霜のうへにふる初雪のあさ氷とけずもものをおもふころかな

たえて年頃になりにける女のもとにまかりて雪の降り侍りければ　源景明

○と伏しかく伏し　あちらに伏しこちらに伏し。

○霜にはあへず　霜にはこらへおほせず。

○こや秋果つるしるしなるらむ　これは秋が終る、飽いてしまつたといふしるしであらう。

○うつろはむとは　心がうつろはうとは。心が淺くならうとは。

○多くのひをも　多くの氷魚をも多くの日をもに通ひかけたもの。

○した紅葉云々　心の中のうつろふこと。

み吉野の雪にこもれる山人もふるみちとめてねをや泣くらむ

題しらず　人麿

頼めつゝこぬ夜數多になりぬればまたじと思ふぞ待つに勝れる

拾遺和歌集　卷第十四

戀　四

題しらず　　人麿

朝寢がみわれはけづらじうつくしき人の手枕ふれてしものを

元輔が婿になりてあしたに　　藤原實方朝臣

ときのまも心は空になるものをいかですぐししむかしなるらむ

題しらず　　讀人しらず

白浪のうちしきりつゝ今宵さへいかでかひとり寢るとかや君

一條攝政内にては便なし里に出でよといひ侍りければ人もなき所にてまち侍りけるにまうでこざりければ　　小貳命婦

いかにして今日を暮さむ小餘綾のいそぎ出でてもかひなかりけり

題しらず　　人麿

みなといりの蘆わけ小舟さはり多み我が思ふ人に逢はぬ頃かな

岩しろの野なかに立てるむすび松心も解けずむかしおもへば

○便なし　ついでがわるい。都合がわるい。

○小餘綾の　いそぎに云ひかけた詞。

○さはり多み　支障が多さに。

○むすび松　有馬王子の故事。

○あかしも果てで　明石の意に明かしも果てでとかけたもの。夜の明けるのもまたないで。
○濱ひさぎ　久しくの枕詞。この句までは四句を云ふための序に用ゐたもの。

○手づくり　調布。手おりの白い布。
○さら〳〵に　さらに〳〵。かさねがさね。
○奈良の都　古い都。轉じて古いといふ意。

○ねぎぞかねつる　願ひかねた。

○かづらきのくめぢの橋の　次の句の序。くめぢの橋のことは前出

讀人しらず

我が宿は播磨潟にもあらなくにあかしも果てで人の行くらむ

浪間より見ゆる小島の濱ひさぎひさしくなりぬ君にあはずて

人麿

ますかゞみ手に取りもちて朝な〳〵見れども君にあくときぞなき

皆人の笠にぬふてふ有間すげありての後も逢はむとぞおもふ

讀人しらず

伊香保のやいかほの沼のいかにして戀しき人をいま一目みむ

玉川にさらす手づくりさら〳〵にむかしの人の戀しきやなぞ

身ははやく奈良の都になりにしを戀しきことのふりせざるらむ

藤原忠房朝臣

石(いそ)の上(かみ)ふりにしこひの神さびてたたるに我はねぎぞかねつる

讀人しらず

いかばかり苦しきものぞかづらきのくめぢの橋の中の絶えまは

かぎりなく思ふながらの橋ばしら思ひながらに中や絶えなむ

源　頼　光

女のもとにつかはしける

なかなかにいひもはなたで信濃なる木曾路の橋のかけたるやなぞ

題しらず　讀人しらず

杉立てるやどをぞ人はたづねける心のまつはかひなかりけり

石(いそ)のかみふるの社のゆふ襷(だすき)かけてのみやはこひむと思ひし

われやうき人やつらきと千早振(ちはやぶる)かみてふ神に問ひみてしがな

住吉のあら人神にちかひてもわするゝきみがこゝろとぞ聞く

右近

忘らるゝ身をば思はずちかひてし人の命の惜しくもあるかな

實方朝臣

女を恨みて更にまうでこじとちかひて後につかはしける

なにせむに命をかけて誓ひけむいかばやと思ふをりもありけり

題しらず　讀人しらず

塵ひぢの數にもあらぬわれゆゑに思ひわぶらむ妹(いも)がかなしさ

人麿

戀ひ戀ひてのちも逢はむと慰むる心しなくばいのちあらめや

讀人しらず

かくばかり戀しき物と知らませば外(よそ)に見るべくありけるものを

○心のまつは　待つと松とをかけたもの。

○かみてふ神　神といふ神。あらゆる神。

○忘らるゝ身をば思はず　忘られ捨てられる自分の身はどうでもよろしい。

○なにせむに　何のために。

○いかばや　往かばやと生かばやとをかけたもの。

○知らませば　知つたならば。

涙川のどかにだにもながれなむこひしき人のかげや見ゆると

貫之

なみだ河おつる水上(みなかみ)はやければせきぞかねつる袖のしがらみ

萬葉集和し侍りける歌　源順

涙川そこのもくづとなりはてゝ戀しき瀬々にながれこそすれ

女のもとにつかはしける　藤原惟成

人知れず落つる涙のつもりつゝ數かくばかりなりにけるかな

天暦の御時承香殿の前をわたらせ給ひてこと御方に渡らせたまひければ　齋宮女御

かつみつゝかげ離れ行く水の面(おも)にかく數ならぬ身をいかにせむ

題しらず　讀人しらず

さを鹿のつめだにひぢぬ山川のあさましきまで訪はぬ君かな

あさましや木の下陰のいは清水いくその人のかげを見つらむ

行く水の泡ならばこそ消えかへり人のふちせをながれても見め

津の國の堀江のふかく思ふともわれは難波のなにとだに見ず

津のくにの生田(いくた)の川のいくたびかつらき心をわれに見すらむ

○かつみつゝ　一方には見ながら

○つめだにひぢぬ　爪さへも濡れない。

○あさましきまで　上の三句を序として淺いさ受けたもの。あきれてしまふ程。驚きあきる程。

○いくその人　いくらの人。

○津の國の堀江の　次のふかくを云ふための序　次の歌も上の二句は三句の序。

つのくにの難波わたりに作るなるこやといはなむ行きて見るべく

旅人のかや刈りおほひつくるてふまろやは人を思ひわするゝ　　人麿

難波人葦火たくやはすゝたれどおのが妻こそとこめづらなれ　　讀人しらず

住吉の岸に生ひたるわすれ草見ずやあらまし戀ひは死ぬとも

やほか行く濱の眞砂(まさご)と我がこひといづれまされり沖つ島もり

屛風にみくま野のかたかきたる所　　兼盛

さしながら人の心をみくま野のうらのはまゆふ幾重なるらむ

ふじの山のかたをつくらせ給ひて藤壺の御方へつかはすとて　　天暦御製

世の人の及ばぬものは富士のねの雲居にたかきおもひなりけり

題しらず　　讀人しらず

我が戀のあらはに見ゆるものならば都のふじといはれなましを

蘆根はふうきはうへこそつれなけれ下はえならずおもふ心を

根蓴(ねぬなは)のくるしかるらむ人よりも我ぞますだのいけるかひなき　　人麿

○こやといはなむ　こやは上の三句を受け一蠶屋と續け、來いと云つてくれればよいの意。

○まろやは　まろは上の三句を受けて假に造つた家と、併せて自分の意。

○とこめづらなれ　いつまでも珍らしい。常に珍らしい。

○すゝたれど　煤が垂れてあるが

○やほか行く　八百日行く。多くの日をかけて行く。

○いづれまされり　どちらがまさつてゐるか。

○都のふじ　常に思ひがもえてゐると云ふ意から云つたもの。

○くるしかるらむ　根蓴の繰ると苦しとをかけたもの。

○我ぞますだの云々　自分の方が増つてゐると、生きてゐる甲斐がないとに、ますだの池とかけたもの。

○親のかふこ　親の飼ふ蠶。

○こやそなるらむ　これがそれであらう。これが戀といふものだらう。

○内外なく　簾ごしといふやうなへだてなく。

○うかりけるふし　つらかつたこと。白絲に對する緣語でふしと云つたもの。四句の今くる人も同じ緣語で繰るの意を含めたもの。

○雲のはたて　雲の形が旗のなびくやうに見えるもの。心の亂れるのを形容する詞。

○なつけわびぬる　馴れさせるのにこまる。

○かたかひ　養ひの不足なこと。飼養するのによく精を出さぬこと。

○こまほしく　駒がほしいと、來てもらひたいとをかけたもの。

○こゝろこはく　上の三句はこの詞の序。心强く、氣が强く。

足乳根（たらちね）の親のかふこのまゆ籠（ごも）りいぶせくも有るか妹（いも）にあはずて

讀人しらず

いさやまだ戀てふ事も知らなくにこやそなるらむいこそ寢られね

たらちねの親の諫めしうたゝ寢は物思ふ時の業にぞありける

年をへてさねあきらの朝臣まうで來たりければ簾ごしにすゑて物語し侍りけるにいかゞありけむ　　中務

内外（うちと）なく馴れもしなまし玉だれのたれ年月をへだて初めけむ

題しらず　　貫之

うかりけるふしをば捨てて白絲の今くる人とおもひなさなむ

讀人しらず

思ふとていとこそ人になれざらめしか慣ひてぞ見ねば戀しき

手枕（たまくら）の隙間の風もさむかりき身はならはしのものにぞありける

吹く風に雲のはたてはとゞむともいかゞ賴まむ人のこゝろは

若草にとゞめもあへぬ駒よりもなつけ侘びぬる人の心か

あふ事のかたかひしたる陸奥（みちのく）のこまほしくのみおもほゆるかな

陸奥のあだちの原のしらま弓こゝろこはくも見ゆるきみかな

伊勢

年月の行くらむ方もおもほえず秋のはつかにひとの見ゆれば

思ひきや逢ひ見ぬほどの年月をかぞふばかりにならむものとは

はるかなる程にも通ふこゝろかなさりとて人の知らぬものゆゑ

遠き所に思ふ人をおき侍りて　源經基

雲居なる人をはるかに思ふには我がこゝろさへ空にこそなれ

道をまかりてよみ侍りける　人麿

よそにありて雲居に見ゆる妹(いも)が家に早くいたらむあゆめ黒駒

題しらず　讀人しらず

我がかへる道のくろごま心あらば君は來ずともおのれいなゝけ

入道攝政まかりたりけるに門をおそくあけければ立ちわづらひぬといひいれて侍りければ　右大將道綱母

歎きつゝひとりぬる夜のあくるまはいかに久しきものとかはしる

題しらず　讀人しらず

なげきこる人入る山の斧の柄のほど〲しくも成りにけるかな

おこなひせむとて山に籠り侍りけるに里の人につかはしける

○立ちわづらひぬ　立つてゐてなやんだ。

○いかに久しきものとかはしる　どんなに久しいものかといふ事を御存じですか。

○なげきこる　歎きを木にかけてそれを伐ると云ふ意に、歎きのつもるの意をかけたもの。

○ほど〲しく　程へて久しく。

人にだに知らせで入りしおく山に戀しさいかで尋ね來つらむ

くにもちがむすめをともみつまかりさりて後鏡を返し遣はすとてかきつけてつかはしける

かげたえて覺束なさのます鏡みずばわが身のうさも知られじ

題しらず　　讀人しらず

おもひます人しなければます鏡うつれるかげとねをのみぞ泣く

我が袖のぬるゝを人の咎めずばねをだにやすく泣くべきものを

元眞のみこまの命婦に物いひ侍りける時女のいひ遣はしける

數ならぬ身は唯にだに思ほえでいかにせよとか眺めらるらむ

題しらず　　讀人しらず

夢にさへ人のつれなくみえつれば寢ても覺めても物をこそ思へ

みる夢のうつゝになるは世の常ぞ現のゆめになるぞかなしき

逢ふことは夢の中にもうれしくて寢覺のこひぞわびしかりける

忘れじよゆめと契りしことの葉はうつゝにつらき心なりけり　　柿本人麿

あたらしと何に命を思ひけむわすればふるく成りぬべき身を

○うつれるかげ　鏡に寫った影と色のおとろへた姿とをかけたもの

○あたらし　惜しい。

千早振（ちはやぶる）神のいがきも越えぬべし今はわが身の惜しけくもなし

○神のいがき　神の忌垣。瑞籬。

拾遺和歌集　巻第十五

戀　五

善祐法師流されて侍りける時母のいひ遣はしける

なく涙世は皆うみとなりななむ同じなぎさにながれよるべく

題しらず　　　人

住吉のきしにむかへる淡路島あはれときみをいはぬ日ぞなき

讀人しらず

捨て果てむ命を今はたのまれよ逢ふべきことのこの世ならねば

生き死なむことの心にかなひせば二度ものは思はざらまし

燃えはてて灰となりなむ時にこそ人を思ひのやまむ期にせめ

いづ方に行き隠れなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ

ありへむと思ひもかけぬ世のなかは中々身をぞ歎かざりける

いつはりと思ふものから今さらに誰がまことをか我はたのまむ

世の中のうきもつらきも忍ぶれば思ひ知らずと人やみるらむ

○住吉の云々　はじめの三句は四句を云ふための序。

○今は　今となつては。

○期　時。

○いつはりと思ふものから　詐りであることは思ふものの。

一向(ひたぶる)に死なば何かはさもあらばあれ生きてかひなき物思ふ身は　人麿

こひするに死(し)にする物にあらませば千度(ちたび)ぞ我はしにかへらまし

こひて死ね戀ひてしねとや吾妹子(わぎもこ)が我が家の門を過ぎて行くらむ

戀ひしなばこひも死ねとや玉鉾の道行く人にことづてもなき　重之

戀しきを慰めかねてすがはらや伏見にきても寢られざりけり　讀人しらず

戀しきは色に出でてもみえなくにいかなる時か胸にしむらむ

忍ばむに忍ばれぬべき戀ならば辛(つら)きにつけてやみもしなまし

女につかはしける　大中臣能宣

いかで〳〵戀ふる心を慰めてのちの世までのものを思はじ

題しらず　讀人しらず

かぎりなく思ふ心の深ければつらきも知らぬものにぞありける

理(わり)なしやしひてもたのむ心かなつらしとかつは思ふものから

うしと思ふものから人の戀しきはいづくを忍ぶこゝろなるらむ

○伏見にきても　伏見に伏すをかけたもの。

○胸にしむ　色は物にしむものなれはいふ。

○忍ばれぬべき戀　忍ばれるやうな戀。

○いかで〳〵　どうかして。

身のうきを人のつらきと思ふこそ我ともいはじ理(わり)なかりけれ

つらしとはおもふものから戀しきは我にかなはぬ心なりけり

つらきをも思ひ知るやは我がためにつらき人しも我をうらむる

心をばつらきものぞといひ置きてかはらじと思ふ顔ぞこひしき

淺ましや見しかとだにもおもはぬにかはらぬ顔ぞ心ならまし

物いひ侍りける女の後につれなく侍りて更にあはず侍りければ　一條攝政

哀れともいふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな

題しらず　伊勢

さもこそは逢ひ見むことの難からめ忘れずとだにいふ人のなき

藤原有時

逢ふ事のなげきのもとを尋ぬれば獨り寢よりぞおひはじめける

貫之

大方の我が身ひとつのうきからになべての世をも恨みつるかな

人麿

あらちをのかる矢の先にたつ鹿もいとわればかり物はおもはじ

荒磯のほかゆく浪のほかごゝろ我はおもはじ戀ひは死ぬとも

○心ならまし　忘れぬ我が心であらう。

○獨り寢よりぞ　寢に根の意をかけて、次におひはじめけると續けたもの。

○あらちを　荒々しい男。

○かるや　鹿を射る矢。また[illegible]矢かこもいふ。

かきくもり雨ふる川のさゞら波まなくも人の戀ひらるゝかな
我がごとや雲の中にもおもふらむあめも涙もふりにこそ降れ
貫之
降る雨に出でても濡れぬ我が袖の陰にゐながらひぢまさるかな
讀人しらず
これをだにかきぞ煩ふあめとふる涙をのごふいとまなければ
君こふる我もひさしくなりぬればそでに涙もふりぬべらなり
きみ戀ふる涙のかゝる袖のうらは巖(いはほ)なりとも朽ちぞしぬべき
まだ知らぬ思ひにもゆる我が身かなさるは涙の川の中にて
源景明
女の許に罷りけるをもとのめの制し侍りければ
風をいたみ思はぬ方にとまりする蜑(あま)の小舟もかくやわぶらむ
讀人しらず
題しらず
瀬を早みたえずながるゝ水よりも盡きせぬものは涙なりけり
わがごとく物おもふ人はいにしへも今行くすゑもあらじとぞ思ふ
坂上郎女
黑髮に白髮まじり生ふるまでかかる戀にはいまだあはざるに

○のごふ　ぬぐふ。拭く。
○ふりぬべらなり　降りと古りとをかけたもの。
○もとのめ　はじめの女。
○風をいたみ　風が強いので。

汐みてば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく戀ふらくの多き
しがの蜑の釣にともせる漁火のほのかに人を見るよしもがな
岩根ふみ重なる山はなけれども逢はぬ日數を戀ひやわたらむ

藤原有時

なげきこる山路は人も知らなくに我が心のみつねに行くらむ

圓融院の御時少將の更衣のもとに遣はしける

かぎりなき思ひの空に滿ちぬればいくそのけぶり雲となるらむ

御かへし

空にみつおもひの煙くもならばながむる人の目にぞ見えまし

題しらず　　讀人しらず

思はずばつれなき事もつらからじ頼めば人をうらみつるかな
つらけれど恨むる限りありければ物はいはれでねこそ泣かるれ
紅のやしほの衣かくしあらばおもひそめずぞあるべかりける
ほのかにも我をみしまのあくた火のあくとや人の音信もせぬ

延喜の御時承香殿女御の方なりける女にもとよしのみこまかり通ひ侍りけるたえて後いひつかはしける　　承香殿中納言

○見らくすくなく　見らくは見るの延言。見ることが少なく。
○しがの蜑の云々　三句までは四句を云ふための序。

○思はずば　人を深く思はないならば。

○紅のやしほの衣　幾度も〳〵もそめた紅の衣。
○あくた火　芥を焚いた火。

人をとくあくた川てふ津の國のなには違はぬものにぞありける

題しらず　　讀人しらず

限りなく思ひそめてしくれなゐの人をあくにぞかへらざりける

ありそ海の浦とたのめしなごりなみうち寄せてける忘れ貝かな

つらけれど人にはいはず岩見潟うらみぞ深きこゝろひとつに

怨みぬもうたがはしくぞおもほゆる賴むこゝろのなきかと思へば

近江なる打出の濱のうちいでつゝうらみやせましひとの心を

わたつ海の深き心はありながらうらみられぬる物にぞありける

かずならぬ身は心だになからなむ思ひ知らずば怨みざるべく

恨みての後さへ人の辛からばいかにいひてか音をも泣かまし

小野宮のおほいまうち君につかはしける　　閑院大君

君をなほうらみつるかなあまの刈る藻にすむ蟲の名を忘れつゝ

題しらず　　讀人しらず

蜑のかる藻に住む蟲の名はきけどたゞわれからの辛きなりけり

戀ひわびぬかなしき事も慰めむいづれながすの濱邊なるらむ

かくばかり憂しと思ふに戀しきはわれさへ心ふたつ有りけり

○人をとくあくた川てふ　人をすぐに飽きてしまふ芥川といふ。○なには違はぬ　津の國の難波といひつゞけて、飽くといふ芥川の名に違はぬとかけたもの。

○なごりなみ　餘波の波。風が止んだ後にも波の靜まらないでゐるその波。併せて名殘もなさに。

○近江なる打出の濱の　次の句の序。

○思ひ知らずは　思ひを知らないならば。

○藻にすむ蟲の名　われから。蟲の名に自分からの意をかけたもの

人麿

とにかくに物は思はず飛騨たくみうつすみなはのたゞ一筋に

左大臣の女御うせ侍りにければ父おとゞのもとにつかはしける　天暦御製

いにしへを更にかけじと思へどもあやしく目にもみつ涙かな

女のもとにつかはしける　平忠依

あふ事は心にもあらで程ふともさやは契りし忘れはてねと

題しらず　讀人しらず

忘るゝかいざさは我も忘れなむ人にしたがふこゝろとならば

わすれぬる君はなか〳〵つらからで今まで生ける身をぞうらむる

我ばかりわれをおもはむ人もがなさてもやうきと世を試みむ

怪しくもいとふにはゆる心かないかにしてかはおもひ絶ゆべき

思ふことなすこそ神のかたからめしばしわするゝ心つけなむ

遠き所に侍りける人京に侍りける男を道のまゝに戀ひまかりて高砂といふ所にてよみ侍りける

たかさごに我がなく聲はなりにけり都の人は聞きやつくらむ

題しらず

○飛騨たくみうつすみなはの　一筋にかけた序。
○かけじ　思ひかけじ。思ふまい
○さやは契りし　そんなに契りはしなかつた。
○忘れはてね　忘れてしまへ。
○我ばかりわれをおもはむ云々　自分が自分自身を思ふ程に、自分を思つてくれる人があればよい。
○さてもやうきと　それでも此の世が憂きものであるかどうかと。
○はゆる心　もゆる心。
○たかさごに　高砂といふ地名に高い意をかけたもの。

鹿島なるつくまの神のつくぐと我が身一つに戀を積みつる

拾遺和歌集　卷第十六

雜春

題しらず　　凡河内躬恒

春立つとおもふ心はうれしくていまひととせの老ぞ添ひける

讀人しらず

新しき年は來れどもいたづらに我が身のみこそふりまさりけれ

新しきとしにはあれども鶯の鳴く音さへにはかはらざりけり

北宮の屏風に　　右近

としつきのゆくへも知らぬ山賤(やまがつ)は瀧のおとにや春をしるらむ

延喜十五年齋院の屏風の歌　　紀貫之

春くれば瀧の白絲いかなれやむすべどもなほあわに見ゆらむ

正月(むつき)に人々まうできたりけるに又の日のあしたに右衞門督公任朝臣のもとに遣はしける　　中務卿具平親王

あかざりし君がにほひの戀しさに梅の花をぞ今朝は折りつる

○あわ　泡と緒の結び方の名沫緒とをかけたもの。

流され侍りける時家の梅の花を見侍りて　　贈太政大臣

こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな

もゝぞのの齋院の屏風に　　讀人しらず

梅の花春よりさきに咲きしかどみる人まれにゆきの降りつゝ

題しらず　　中納言安倍廣庭

いにし年ねこじて植ゑし我が宿のわか木の梅は花咲きにけり

天暦の御時大盤所の前に鶯の巣を紅梅の枝につけて立てられたりけるを見て　　一條攝政

花の色はあかず見るとも鶯のねぐらのえだに手なな觸れそも

おなじ御時梅花のもとに御倚子たてさせ給ひて花の宴せさせ給ふに殿上のをのこども歌つかうまつりけるに　　源寛信朝臣

折りて見るかひもあるかな梅の花今日九重ににほひまさりて

内裏の御遊侍りける時　　參議伊衡

かざしては白髪にまがふ梅の花今はいづれをぬかむとすらむ

清和の七のみこ六十の賀の屏風に　　貫之

數ふれどおぼつかなきを我が宿の梅こそ春のかずを知るらめ

○ねこじて植ゑし　根ながら掘り取つて植ゑた。

○手なな觸れそも　手なふれそといふに同じ。手をふれるな。

○御倚子　御椅子。

○おぼつかなきを　不分明であるが。

○あはれなる香　趣深い香。

○もしほの煙　鹽を燒く煙。海藻に幾度も海水を注ぎかけて乾しその藻を燒いて鹽をとるその煙。

○たちもこそ聞け　春霞が立つと立ち聞くとをかけたもの。

題しらず　　讀人しらず

年毎に咲きは代れど梅の花あはれなる香はうせずぞありける

圓融院の御時の三尺の御屏風の十二帖の歌の中に　　源　順

梅が枝をかりに來て折る人やあると野べの霞は立ち隠すかも

北白川の山莊に花のおもしろく咲きて侍りけるを見に人々まうで來りければ　　右衞門督公任

春來てぞひともとひける山里は花こそやどのあるじなりけれ

鞍馬にまうで侍りける折に道をふみたがへてよみ侍りける　　安法法師

おぼつかなくらまの山のみち知らで霞のうちに惑ふ今日かな

延喜十五年齋院の屏風に霞をわけて山寺に入る人あり　　紀　貫　之

思ふことありてこそ行けはる霞みちさまたげに立ちなかくしそ

小一條のおほいまうちぎみの家の障子に　　よしのぶ

田子の浦に霞のふかく見ゆるかなもしほの煙たちや添ふらむ

山里に忍びて女をゐてまうで來てある男のよみ侍りける　　よみ人しらず

思ふことといはでやみなむ春がすみ山路も近したちもこそ聞け

人に物いふと聞きてとはざりける男の許に　　中宮内侍

春日野の荻のやけ原あさるとも見えぬなきなをおほすなるかな

女の許になづなの花につけてつかはしける　　藤原長能

雪をうすみ垣根に摘めるから薺なづさはまくのほしき君かな

東三條院の御四十九日のうちに子の日いできたりけるに宮の君といひける人の許に遣はしける　　右衞門督公任

たれにより松をも引かむ鶯のはつねかひなきけふにもあるかな

子の日　　惠慶法師

引きてみる子の日の松は程なきをいかで籠れる千世にかあるらむ

題しらず　　讀人しらず

しめてこそ千歳の春は來つゝみめ松を手たゆく何かひくべき

齋院の子の日　　したがふ

ひともとの松の千歳もひさしきにいつきの宮ぞ思ひやらるゝ

右大將實資下臈に侍りける時子の日しけるに　　清原元輔

老のよにかかるみゆきはありきやと木高き峯の松に問はばや

正月敍位の頃ある所に人々まかりあひて子の日の歌よまむといひて侍りけるに六位に侍りける時　　大中臣能宣

○あさる　さがし求める。
○なきな　無き名と無き菜とをかけたもの。
○なづさはまく　狎れ添ふ。なじむ。
○手たゆく　手のだるくなる程。
○いつきの宮　齋宮を五つ木にかけたもの。

○そでの緣　六位を云つたもの。緣は松に緣があるから對照したもの。

○ひくひと　梓弓の緣語として用ゐたもの。併せて助けてくれる人の意。
○もろや　諸矢。梓弓の緣語で二度のよろこびを云つたもの。

○家居　住居。家。
○外に見ゆ　霞の外に見える。
○壺裝束　市女笠を被つて薄絹を著た女のいでたち。
○ところ　野老。山の芋に似たもの。
○二人ぬばかり　二人寢る位。野老を所にかけて云つたもの。
○所せき人　世を窮屈に暮してゐる人。

松ならばひく人今日はありなましそでの緣ぞかひなかりける

除目のころ子の日にあたりて侍りけるに按察の更衣の局より松を箸にてたべものを出して侍りけるに　　元輔

引く人もなくてやみぬるみ吉野の松は子の日をよそにこそ聞け

康和二年春宮の藏人になりて月のうちに民部丞にうつりて二度よろこびをのべて右近命婦がもとに遣はしける　　したがふ

ひくひともなしと思ひし梓弓いまぞうれしきもろやしつれば

題しらず　　讀人しらず

咲きし時なほこそ見しかもゝの花散れば惜しくぞ思ひなりぬる

帥のみこ人々に歌よませ侍りけるに　　弓削嘉言

山ざとの家居はかすみこめたれどかきねの柳すゑは外に見ゆ

春ものへまかりけるに壺裝束して侍りける女どもの野邊に侍りけるを見て何わざするぞと問ひければところ掘るなりといらへければ　　賀朝法師

春の野にところ求むといふなるは二人ぬばかり見出たりや君

かへし　　讀人しらず

春の野にほるほるみれどなかりけり世に所せき人のためには

○吹き果てね　吹いてしまへ。
○思ひなくてみるべく　散るを惜しむための物思ひもなくて見るために。
○なき物ぐさは　他に何物がなくても。
○見まうき　見ることのつらい。
○みづし所　御厨子所。宮中で樂器や書籍などを納めて置かれる所
○諸ともに　皆と一緒に。

題しらず
かきくらし雪もふらなむ櫻花まだ咲かぬまはよそへても見む
春風ははなのなき間に吹き果てね咲きなば思ひなくてみるべく
躬恒
咲かざらむものとはなしに櫻花おもかげにのみまだき見ゆらむ
讀人しらず
いづこにかこの頃花の咲かざらむ心からこそたづねられけれ
延喜の御時の月次の御屏風のうた　躬恒
櫻花わがやどにのみありと見ばなき物ぐさはおもはざらまし
さくらの花の咲きて侍りける所にもろともに侍りける人の後の春ほかに侍りけるに卯の花を折りてつかはしける　讀人しらず
もろともに折りしはるのみ戀しくてひとり見まうき花盛りかな
みづし所に侍ひけるに藏人所のをのこども櫻の花を遣はしたりければ
壬生忠見
諸ともにわれし折らねば櫻ばなおもひやりてや春をくらさむ
ある人のもとに遣はしける　御導師淨藏

○待てさいはゞ　法皇様にお待ち下さいと申してはゞ。

○ふるさとに云々　古里の奈良に咲くから君に見ていたゞけぬと侘びてゐた櫻が。

○しづめる人　沈淪してゐる人。身分の賤しくなつた人。

霞立つ山のあなたのさくら花おもひやりてやはるをくらさむ　　貫之

題しらず

をちかたの花も見るべく白浪のともにや我も立ちわたらまし　　僧正遍昭

はる花山に亭子法皇おはしましてかへらせ給ひければ

待てといはばいともかしこし花山にしばしとなかむ鳥の音もがな　　藤原忠房朝臣

京極御息所春日(かすが)にまうで侍りけるとき國司の奉りける歌あまた有りける中に

鶯のなきつるなべに春日野の今日のみゆきをはなとこそ見れ

ふるさとに咲くと侘びつるさくらばな今年ぞ君に見えぬべらなる

春がすみかすがの野邊に立ちわたり滿ちても見ゆる都人かな

圓融院の御時の三尺の御屏風に花の木のもとに人々あつまり居たる所　　兼盛

世の中に嬉しきものはおもふどち花見てすぐすこゝろなりけり

清愼公の家にて池のほとりの櫻の花をよみ侍りける　　元輔

櫻花そこなるかげぞをしまるゝしづめる人のはるとおもへば

上總より上りて侍りけるころ源頼光が家にて人々酒たうべけるついでに

あづまぢの野路の雪間を分けて來てあはれ都の花をみるかな　藤原長能

清愼公の家のさぶらひにともし火のもとに櫻の花を折りてさして侍りけるをよみ侍りける　兼盛弟

ひのもとに咲ける櫻の色みれば人の國にもあらじとぞおもふ

山櫻をみ侍りて　平公誠

み山木の二葉みつばにもゆるまで消えせぬ雪と見えもするかな

金鼓(こんぐ)うち侍りける時に畑やき侍りけるを見てよみ侍りける　藏原長能

かた山にはたやくをのこかの見ゆるみ山櫻はよきてはた燒け

石山の堂のまへに侍りけるさくら木にかきつけ侍りける　讀人しらず

うしろめたいかで歸らむ山櫻あかぬにほひをかぜにまかせて

敦慶(あつよしの)式部卿のみこのむすめ伊勢が腹に侍りけるが近き所に侍りけるに瓶(かめ)にさしたる花を贈るとて　貫之

久しかれあだに散るなと櫻花かめにさせれどうつろひにけり

延喜の御時南殿に散りつみて侍りける花を見て　源公忠朝臣

殿もりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな

○さぶらひ　高貴の人の傍に侍ふ者の詰めて居る所。
○ひのもと　火のもとを日の本にかけたもの。
○人の國　他國。外國。
○金鼓　佛家の樂器の一。今日の伏鉦と云ひ、又鰐口ともいふ。
○うしろめた　後日痛し。心もとない。
○かめにさせれど　瓶に挿すといふのに長壽の龜をかけたもの。
○南殿　紫宸殿をいふ。
○殿もりのとものみやつこ　主殿寮の下司で禁庭の掃除などをするもの。
○心あらば　風流心があるならばといふ。
○朝ぎよめ　禁庭の朝の掃除をいふ。

○春はくれども　來るに繰るをかけ、ぬなはは、たえず、の緣語としたもの。

○やな　梁。魚をとるために河の瀬に木や竹を簀のやうに竝べて水をせくもの。

○ひげこ　籠を編んだ竹の端を編み殘して鬚のやうにしたもの。○とぐら　鳥のねや。ねぐら。とや。

○たき物　焚いてその香をかぐもの。主に煉香などをいふ。

題しらず　　讀人しらず

櫻花み笠の山のかげしあれば雪と降れども濡れじとぞおもふ

年ごとに春のながめはせしかども身さへふるとも思はざりしを

したがふ

年毎に春はくれども池水に生ふるぬなははたえずぞ有りける

三月閏月ありける年八重山吹をよみ侍りける　　菅原輔昭

春風はのどけかるべし八重よりもかさねてにほへ山吹のはな

屛風の繪に花のもとに網ひく所

浦人はかすみをあみにむすべばや浪の花をもとめて曳くらむ

延喜の御時の御屛風に　　貫之

やな見ればかは風いたく吹くときぞ浪の花さへ落ちまさりける

亭子院京極のみやす所に渡らせ給うて弓御覽じてかけ物いださせ給ひけるにひげこに花をこき入れて櫻をとぐらにして山菅を鶯に結びすゑてかくかきてくはせたりける　　一條のきみ

木の間より散り來る花をあづさ弓えやはとゞめぬ春の形見に

比叡の山に住み侍りける頃人のたき物をこひて侍りければ侍りけるまゝ

にすこしを梅の花の僅かに散り殘りて侍る枝につけて遣はしける　如覺法師

春過ぎて散り果てにける梅のはなたゞかばかりぞ枝に殘れる

右衞門督公任こもり侍りけるころ四月一日にいひつかはしける　左大臣

たにの戸をとぢや果てつる鶯のまつにおとせで春も過ぎぬる

かへし　公任朝臣

行きかへる春をもしらず花咲かぬみ山がくれのうぐひすの聲

四月朔日よみ侍りける　元輔

春はをし郭公はた聞かまほしおもひわづらふしづごゝろかな

延長四年九月二十八日法皇の御六十の賀京極のみやす所のつかうまつりける屛風の歌藤の花　貫之

松風の吹かむ限りは打ちはへてたゆべくもあらず咲ける藤なみ

延喜の御時藤壺の藤花の宴せさせ給ひけるに殿上のをのこども歌つかうまつりけるに　皇太后宮權大夫國章

藤の花宮のうちにはむらさきの雲かとのみぞあやまたれける

左大臣のむすめの中宮の料にてうじ侍りける屛風に　右衞門督公任

むらさきの雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらむ

○たゞかばかりぞ　たゞこればかり。併せてたゞ香だけ。

○まつにおとせで　まつてゐても訪ねて來ないで。

○紫のいろしこければ　紫の色が濃いから。

○藥玉　種々の香を包んだ袋を玉のやうに造つて、造花などで飾りそれに五色の絲を長く垂らしたもの、端午には柱に掛けて邪氣を拂つたもの。

○そらね　實際ならぬ鳴き聲。併せてうそ泣き。

○なのり　鳴くこと。郭公は鳴き聲と名も同じであるから鳴くのを名告ると云つたもの。

讀人しらず

紫のいろしこければふぢの花まつのみどりもうつろひにけり

題しらず　人麿

郭公かよふかきねの卯の花のうきことあれやきみが來まさぬ

屏風の繪に　重之

卯の花の咲ける垣根にやどりせじ寢ぬに明けぬと驚かれけり

みちのくににまかり下りて後郭公の聲を聞きて　實方朝臣

としをへてみ山がくれの杜宇(ほとゝぎす)きくひともなき音をのみぞ鳴く

女のもとに白き絲を菖蒲(さうぶ)の根にして藥玉(くすだま)をおこせ侍りてあはれなる事どもをある男のいひおこせて侍りければ　讀人しらず

聲立ててなくといふとも郭公たもとは濡れじそらねなりけり

廉義公の家の障子に　元輔

かくばかり待つと知らばや郭公木ずゑたかくも鳴きわたるかな

題しらず　大中臣輔親

あしびきの山ほとゝぎす里なれて黄昏(たそがれ)どきになのりすらしも

坂上郎女につかはしける　大伴像見

ふる里のならしのをかに郭公ことづてやりきいかに告げきや

螢をよみ侍りける　健守法師

終夜(よもすがら)もゆるほたるを今朝みれば草の葉ごとにつゆぞ置きける

延長七年十月十四日もとよしのみこの四十の賀し侍りける時の屛風に　貫之

常夏(とこなつ)の花をし見れば打ちはへて過ぐる月日のかずも知られず

一條攝政の北の方ほかに侍りける頃女御と申しける時　贈皇后宮

しばしだにかげに隱れぬときは猶うなだれぬべき撫子(なでしこ)のはな

題しらず　躬恆

いたづらに老いぬべらなり大荒木(おほあらき)の森の下なる草葉ならねど

○うなだれぬべき　うなだれるだらう。

拾遺和歌集　卷第十七

雜秋

屏風に七月七日　　源順

棚機はそらに知るらむさゝがにのいとかくばかりまつる心を

圓融院の御屏風に七夕まつりしたる所にまがきのもとに男たてり　　平兼盛

織女のあかぬ別れもゆゝしきを今日しもなどかきみが來ませる

七夕の後朝に躬恆がもとにつかはしける　　貫之

朝戸あけてながめやすらむ棚機のあかぬ別れのそらを戀ひつゝ

題しらず　　人麿

わたし守はや舟よせよひととせに二たび來ますきみならなくに

七夕まつりかける御扇に書かせ給ひける　　天暦御製

棚機のうらやましきに天の川こよひばかりはおりやたたまし

題しらず　　讀人しらず

よをうみて我がかすいとは七夕の涙のたまの緒とやなるらむ

○さゝがにの　いとの緣語。

○おりやたたまし　おり立たうと折りた、まうとをかけたもの。○よをうみて　世を倦みてと、績みてとをかけたもの。績むは麻や苧を細く裂いて長く合はせて經ること。

天祿四年五月二十一日圓融院のみかど一品宮に渡らせ給ひて亂棊(らんご)とらせ給ひけるにまけわざを七月七日にかの宮より内の大盤所に奉られける扇にはられて侍りけるうすものにおりつけて侍りける　中務

天の河かはべすゞしきたなばたに扇のかぜをなほやかさまし

　元輔

あまの川あふぎの風にきり晴れて空澄みわたるかさゝぎの橋

同じ御時の御屛風に七月七日の夜琴ひく女あり　源順

琴の音はなぞやかひなき織女(たなばた)のあかぬわかれをひきしとめねば

仁和の御時の屛風に七月七日女の河水あみたる所　平定文

水のあやをおりたちて著むぬぎちらし七夕つめに衣かす夜は

七月七日よみ侍りける　藤原義孝

秋風よ棚機つめにこと問はむいかなるよにか逢はむとすらむ

寂昭がもろこしにまかり渡るとて七月七日舟にのり侍りけるにいひ遣はしける　右衞門督公任

天の川後のけふだにはるけきをいつとも知らぬ舟出かなしも

七夕の後朝に躬恒がもとより歌よみておこせて侍りけるかへりごとに

○亂棊　遊戯の名で、石はじきの類である。
○まけわざ　棊などで負けた方から酒肴を出して饗應すること。
○水のあやを　水の波紋と綾とをかけたもの。
○七夕つめ　棚機女。
○後のけふ　來年のけふ。

貫之

あひ見ずてひと日も君にならはねば棚機よりもわれぞまされる

題しらず　　讀人しらず

むつまじき妹背(いもせ)の山と知らねばやはつ秋霧の立ちへだつらむ

天暦の御屏風に

藻鹽やく煙になるゝ須磨の蜑(あま)は秋たつ霧もわかずやあるらむ

三條太政大臣の家にて歌人めし集めてあまたの題よませ侍りけるに岸のほとりの花といふことを　　源重之

行くみづの岸ににほへる女郎花しのびに浪や思ひかくらむ

房の前栽(せんざい)見に女どもまうで來たりければ　　僧正遍昭

こゝにしも何にほふらむ女郎花人のものいひさがにくき世に

題しらず　　讀人しらず

あきの野のはなのいろ〳〵とりすべて我が衣手にうつしてしがな

ふな岡の野中に立てる女郎花わたさぬ人はあらじとぞおもふ

圓融院の御屏風に秋の野に色々の花咲きみだれたる所に鷹すゑたる人ありけり　　平兼盛

○妹背の山　妹山と背山。

○さがにくき　よくない。不祥な

○わたさぬ人　濟度しない人。あまねくこの人に及ぼす意。ふな岡の船に對して渡すと云つたもの。

家苞にあまたの花も折るべきにねたくも鷹をすゑてけるかな

女郎花といふことを句のかみに置きて　　貫之

をぐら山みね立ちならしなく鹿のへにける秋をしる人のなき

題しらず　　よしのぶ

こてふにも似たるものかな花薄こひしき人に見すべかりけり

歸りにしかりぞなくなるむべ人はうき世の中をそむきかぬらむ

中宮の内におはしましける時月のあかき夜うたよみ侍りけるに　　善滋爲政

九重のうちだにあかき月影に荒れたるやどをおもひやるかな

延喜十九年九月十三日の御屛風に月にのりて翫二潺湲一　　讀人しらず

もゝしきの大宮ながら八十島を見るこゝちするあきの夜の月

八月に人の家の釣殿にまらうどあまたありて月をみる　　したがふ

水の面に宿れる月ののどけきはなみ居て人の寢ぬ夜なればか

清愼公の五十の賀の屛風に　　元輔

はしり井の程を知らばや逢坂のせき引き越ゆるゆふかげのこま

題しらず　　曾禰好忠

○こてふにも　來よといふにも。

○歸りにしかり　歸って來た雁。

○はしり井の程　はしり井への距離。走井は近江國にある。

○蟲ならぬ　蟲より外。

○蜘のすがき　蜘蛛の巣。

○秋風し　しは強辭。秋風がまあ。

蟲ならぬ人もおとせぬ我がやどに秋の野邊とて君はきにけり

人麿

庭草にむらさめ降りてひぐらしの鳴くこゑきけば秋は來にけり

三百六十首の中に　よしたゞ

秋風は吹きなやぶりそ我が宿のあばらかくせる蜘(くも)のすがきを

右大將定國の家の屏風に　みつね

すみの江の松を秋かぜ吹くからに聲うち添ふるおきつしらなみ

題しらず　人麿

秋風のさむく吹くなる我が宿の淺茅(あさぢ)がもとにひぐらしも鳴く

秋風し日ごとにふけば我が宿のをかの木の葉はいろづきにけり

秋霧のたなびく小野の萩の花今や散るらむいまだあかなくに

近どなりなる所に方たがへに渡りて宿れりと聞きてある程に事にふれて見きくに歌よむべき人なりと聞きてこれが歌よまむさまいかでよくみむと思へどもいとも心にしあらねば深くも思はずすゝみてもいけぬ程にかれも又試みむと思ひければ萩の葉のもみぢたるにつけて歌をなむおこせたる　女

秋萩の下葉につけて目にちかくよそなる人のこゝろをぞ見る

かへし　貫之

世の中の人にこゝろをそめしかば草葉にいろも見えじとぞおもふ

題しらず　人麿

このごろのあかつき露に我がやどの萩の下葉はいろづきにけり

夜をさむみ衣かりがねなくなべに萩の下葉はいろづきにけり

讀人しらず

かの見ゆる池邊に立てるそが菊のしげみさ枝の色のてこらさ

天暦の御時菊の宴侍りけるあしたに奉りける　忠見

吹く風に散るものならば菊のはな雲居なりともいろは見てまし

ものねたみしける男はなれ侍りて後に菊の移ろひて侍りけるをつかはすとて　讀人しらず

老が世に憂きこと聞かぬ菊だにも移ろふ色はありけりと見よ

題しらず　人麿

わぎもこが赤裳(あかも)ぬらして植ゑし田を刈りてをさむる藏なしの濱

屛風におきなの稻運ばするかたかきて侍りける所に　忠見

○人にこゝろをそめしかば　人を心に深く思ひ込んだので。

○衣かりがね　夜を寒みといふを受けて衣を借るゝと云ひ、併せて雁金と續けたもの。

○そが菊　黃菊。仁明天皇が黃菊を好まれたのでその年號によつて承和菊と云つたものといふ說があるが詳かでない。

○てこらさ　色の美しいといふ意。

○ものねたみ　何となくものごとを妬むこと。

○赤裳　女が腰から下につける衣で色の赤いもの。

○藏なしの濱　四句まではすべて藏といふための序。

秋ごとにかりつる稲は積みつれど老いにける身ぞおきどころなき

延喜の御時の月次の御屏風の歌　躬恒

刈りてほす山田の稲をほしわびて守る假庵(かりいほ)にいくよ經ぬらむ

祓(はらへ)しに秋からさきにまかり侍りて舟のまかりけるを見侍りて　惠慶法師

おく山に立てらましかば汀漕(なぎさこ)ぐ舟木(ふなき)もいまはもみぢしてまし

題しらず　讀人しらず

ひさかたの月をさやけみもみぢばのこさも薄さもわきつべらなり

亭子院大井河に御幸ありて行幸もありぬべき所なりとおほせ給ふに事のよし奏せむと申して　小一條太政大臣

小倉山みねのもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ

旅人の紅葉のもと行くかたかける屏風に　大中臣能宣

故郷にかへるとみてや立田姫もみぢのにしきそらに著すらむ

題しらず　讀人しらず

しら浪はふるさとなれやもみぢばの錦をきつゝたちかへるらむ

躬恒

もみぢ葉のながるゝ時はたけ河の淵のみどりも色かはるらむ

○立てらましかば　立つてゐただらうならば。
○舟木　舟に造つてある木。

○故郷に云々　旅人を故郷に歸つて行くのと考へてか。

齋院の御屛風に

水の面のふかくあさくも見ゆるかな紅葉のいろや淵瀨なるらむ　清原元輔

內裏の御屛風に

月影のたなかみ川にきよければ網代にひをのよるも見えけり　清原元輔

藏人所にさぶらひける人の氷魚の使にまかりにけるとて京に侍りながら音もし侍らざりければ　修理

いかでなほ網代のひをにこと問はむ何によりてか我を問はぬと

題しらず　讀人しらず

祝子が齋ふ社のもみぢ葉もしめをば越えて散るといふものを

九月つごもりの日をとこ女野に遊びて紅葉を見る　源順

いかなれば紅葉にもまだあかなくに秋果てぬとは今日をいふらむ

十月ついたちの日殿上のをのこども嵯峨野にまかりて侍るともによばれて　清原元輔

秋もまだ遠くもあらぬにいかでなほ立ち歸れともつげにやらまし

時雨を　能宣

そま山に立つけぶりこそ神無月しぐれをくだす雲となりけれ

○月影のたなかみ川に云々　たなかみ川に照る月影が淸いから。

○秋果てぬとは　飽き果てぬに通はせたもの。

○昔ながらの山　昔のまゝの山、長等の山。

○落ちつもるてへ　落ちつもるとはいへ。

○垣ほ　垣。

十月(かみなづき)しがの山ごえしける人々　　源　順

名をきけばむかしながらの山なれどしぐるゝころは色かはりけり

冬おやの喪(さう)にあひて侍りける法師のもとにつかはしける　　躬　恒

もみぢばや袂なるらむ神無月しぐるゝごとにいろのまされば

天暦の御時伊勢が家の集召したりければ參らすとて　　中　務

しぐれつゝふりにし宿の言の葉はかき集むれどとまらざりけり

御かへし　　天暦御製

昔より名だかきやどの言の葉はこの下(もと)にこそ落ちつもるてへ

權中納言義懷入道して後むすめの齋院にやしなひたまひけるがもとより東(ひんがし)の院に侍りける姉のもとに十月ばかりにつかはしける

やまがつの垣ほわたりをいかにぞと霜がれ〴〵に訪ふ人もなし

三百六十首の中に　　曾禰好忠

み山木を朝な夕なにこりつめてさむさをこふる小野の炭やき

にほ鳥の冰のせきに閉ぢられて玉藻のやどをかれやしぬらむ

高岳相如(たかをかのすけゆき)が家に冬の夜の月おもしろう侍りける夜まかりて　　元　輔

いざかくて居りあかしてむ冬の月はるの花にもおとらざりけり

祭の使にまかりいでける人の許よりすり袴すりに遣はしけるをおそしと責められければ　　東宮女藏人左近

かぎりなくとくとはすれど足引の山ゐの水はなほぞこほれる

小忌（をみ）にあたりたる人の許にまかりたりければ女どもさかづきに日陰をそへて出したりければ　　よしのぶ

有明の心地こそすれさかづきに日かげも添ひて出でぬと思へば

右大臣恆佐の家の屛風に臨時祭かきたる所に　　つらゆき

足引の山ゐに摺れるころもをば神につかふるしるしとぞ思ふ

題しらず　　讀人しらず

千早ぶる神のいがきに雪ふりて空よりかゝるゆふにぞありける

　　つらゆき

ひとり寢はくるしき物と懲りよとやたびなる夜しも雪の降るらむ

雪を島々のかたに作りて見侍りけるにやう〳〵きえ侍りければ　　中務のみこ

わたつみもゆきげの水はまさりけりをちの島々見えずなり行く

東宮の御屛風に冬野やく所　　藤原道頼

もとゆひにふり添ふ雪の雫には枕のしたになみぞ立ちける

○とくとはすれど　疾くと解くとをかけ、解くに對して終りを冰れると結んだもの。
○小忌　大嘗會や新嘗會の時にものいみをすること。
○さかづきに　酒杯と逆月とを通はせたもの。逆月は下弦の月を云つたもの。
○山ゐ　山藍の畧。
○空よりかゝるゆふ　ゆふは木綿楮のあま皮で織つた白い布。木綿してを云つたもの。
○もとゆひにふり添ふ雪　年々頭髪の白くなつて行く歎き。

さわらびやしたにもゆらむ霜枯の野原のけぶり春めきにけり

十二月のつごもり頃に身の上をなげきて　貫之

霜枯にみえこし梅は咲きにけり春には我が身逢はむとはすや

西なる鄰にすみてかく近どなりにありけることなどいひおこせ侍りて　三統元夏

梅の花にほひの深く見えつるは春のとなりの近きなりけり

かへし　貫之

梅もみな春ちかしとて咲くものをまつ時もなきわれやなになる

しはすのつごもり方に年の老いぬることをなげきて

むば玉の我がくろかみに年暮れてかゞみの影にふれるしら雪

○まつ時もなき　立身の望みもないことをいつたもの。

拾遺和歌集　卷第十八

雜　賀

延喜二年五月の中宮の御屛風元日　　紀　貫　之

昨日よりをちをばしらず百歳のはるの初めは今日にぞありける

屛風に　　伊　勢

はるばると雲居をさして行く舟の行末とほくおもほゆるかな

九條右大臣の五十の賀の屛風に竹ある所に花の木ちかくあり　　元　輔

花のいろも常磐ならなむなよ竹のながきよに置く露しかからば

ためあきらの朝臣紀の守に侍りける時ちひさき子をいだきいでてこれ祈れ祈れといひたる歌よめといひ侍りければ

萬代をかぞへむものは紀の國の千ひろの濱のまさごなりけり

東宮のいしなどりの石めしければ三十一をつゝみてひとつに一文字をかきて參らせける　　讀人しらず

苔むさば拾ひもかへむさゞれ石のかずをみなとる齡いくよぞ

○昨日よりをち　昨日よりも以前

○いしなどり　石投取。子供の遊戲で、石を空中に投げ上げてその落ちて來ぬひまに地上にある石を拾つて落ちて來る石にねらひ當てること。おてだまの類。

○さゞれ石のかず　世にありとあるさゞれ石の數。

賀の屏風人の家に松のもとより泉出でたり　　貫之

松の根に出づる泉の水なればおなじきものを絶えじとぞおもふ

冷泉院五六のみこ袴著侍りける頃いひおこせて侍りける　　左大臣

岩の上に松にたとへむ君々は世にまれらなる種ぞとおもへば

ある人の產して侍りける七夜　　元輔

松が枝のかよへる枝をとぐらにて巣立てらるべき鶴の雛かな

大貳國章うまごの五十日にわりご調じて歌を繪にかかせける

松の苔千歳をかねて生ひしげれ鶴のかひこの巣とも見るべく

題しらず　　讀人しらず

我のみや子もたるてへばたかさごの尾上に立てるまつも子もたり

延喜の御時齋院の屏風四帖宣旨によりて　　貫之

幾世へし磯邊の松ぞむかしより立ちよる浪やかずは知るらむ

人のかうぶりし侍りけるに　　元輔

こむらさきたなびく雲をしるべにて位の山のみねをたづねむ

天曆の御時内裏にて爲平のみこ袴著侍りけるに　　參議好古

もゝしきに千歳のことはおほかれど今日の君はた珍らしきかな

○まれらなる　まれな。

○とぐら　鳥の巣。

○わりご　食物を入れて携へる器物で、辨當箱のやうなもの。
○鶴のかひこ　鶴の卵。

○子もたるてへば　子を持つてゐると云へば。

○こむらさき　濃紫。この色は三位以上の人の袍の色に用ゐられたものであるから、立身出世するやうにと祝つたのである。

○かざりちまき　美しく飾つた粽。
○山菅のこ　山菅でつくつた籠。
○いつかわすれむ　五日にかけたもの。
○上達部　公卿。

五月五日ちひさきかざりちまきを山菅のこに入れて爲まさの朝臣のむすめに心ざすとて　　春宮大夫道綱母

心ざしふかきみぎはに刈るこもは千歳の五月いつかわすれむ

天德四年右大臣の五十の賀の屛風に　　清原元輔

千歳へむ君しいまさばすべらぎの天の下こそうしろやすけれ

東三條院の賀左大臣のし侍りけるに上達部かはらけ取りて歌よみ侍りけるに　　右衞門督公任

君が世にいま幾たびかかくしつゝ嬉しきことに逢はむとすらむ

右大臣家つくりあらためて渡りはじめける頃ふみつくり歌など人々によませ侍りけるに水樹多佳趣といふ題を

澄みそむる末の心の見ゆるかなみぎはの松のかげをうつせば

ある人の賀し侍りけるに　　權中納言敦忠

ちとせ經る霜の鶴をば置きながら久しきものは君にぞありける

清和の女七のみこの八十の賀重明のみこのし侍りける時の屛風に竹に雪の降りかゝりたるかたある所に　　貫之

白雪はふりかくせども千世までに竹のみどりは變らざりけり

子をとみはたとつけて侍りけるに袴著すとて　元輔

世の中にことなる事はあらずともとみはたしてむ命ながくば

中將に侍りける時右大辨源致方朝臣のもとへ八重紅梅を折りてつかはすとて　右大將實資

流俗(りうしよく)の色にはあらずうめのはな　むねかたの朝臣

珍重すべきものとこそ見れ

筑紫へまかりける時にかまど山のもとに宿りて侍りけるに道づらに侍りける木に古くかきつけて侍りける　元輔

春はもえ秋はこがるゝかまど山

霞もきりもけぶりとぞ見る

春よしみねのよしかたがむすめの許に遣はすとて　藤原忠君朝臣

おもひ立ちぬる今日にもあるかな　むすめ

かからでもありにしものを春霞

〇とみはたしてむ　名を詠み込んで、富み果すであらうの意にかけたもの。

〇道づら　道中。

〇かまご山　竈の緣によつて、もえ、こがる、と云つたもの。

廣幡の御息所(みやすどころ)內に參りて遲く渡らせ給ひければ

くらすべしやは今までに君

と奏し侍りければ　　天曆御製

問ふやとぞ我も待ちつる春の日を

よひに久しうおほとのごもらで仰せられける

さ夜ふけて今はねぶたくなりにけり

御前にさぶらひて奏しける　　しげのの內侍

夢にあふべき人や待つらむ

內にさぶらふ人を契りて侍りける夜遲くまうできける程にうしみつと時申しけるを聞きて女のいひつかはしける　　良岑宗貞

人ごゝろうしみつ今は賴まじよ

夢に見ゆやとねぞすぎにける

題しらず　　平定文

引きよせばたゞにはよらで春駒の綱引するぞなはたつと聞く

讀人しらず

○おほとのごもらで　御寢殿に入御あらせられずに。

○うしみつ　丑三つと憂し見つとをかけたもの。

○なはたつ　綱絕つと名は立つとをかけたもの。

○うつろふ色に人ならひけり　花の色のあせて行くのに人がならつてかれ〴〵になつた。

○さき〴〵も語らひて云々　以前から交はつて消息などもしてゐたので。

花の木は籬ちかくは植ゑて見じうつろふ色に人ならひけり

夏は扇ふゆは火桶に身をなしてつれなき人に寄りもつかばや

こひするに佛になるといはませばわれぞ淨土のあるじならまし

灌佛のわらはを見侍りて

修理大夫惟正が家に方たがへにまかりたりけるに出して侍りける枕にかきつけ侍りける　藤原義孝

から衣たつより落つる水ならで我が袖ぬらすものやなになる

つらからば人にかたらむしきたへの枕かはして一夜ねにきと

同じ少將かよひ侍りける所に兵部卿致平のみこまかりて少將の君おはしたりといはせ侍りけるを後に聞きてかのみこのもとに遣はしける

あやしくも我濡衣(ぬれぎぬ)をきたるかな三笠のやまをひとにかられて

しのびたる人の許につかはしける　平公誠

かくれ蓑かくれ笠をも得てしがなきたりと人に知られざるべく

年月をへてけさうし侍りける人のつれなくのみ侍りければ今は更によにもあらじといひて後久しくおとづれず侍りければかの男の妹にさき〴〵も語(かた)らひてふみなど遣はしければいひ遣はしける　讀人しらず

○たかうな　筍。

○したに待ちつゝ　心の中で待ちつゞけて。

○すなはち　すぐに。

○とほちの里　十市の里を遠方の里にかけたもの。

○おろかにも　なほざりに。

○文のつま　手紙の端。

○ひきやりて　引き破つて。

○ふみみれば　踏み見ればを文見ればに云ひかけたもの。

○かたはし　片端と片橋とを通はせたもの。

心ありて問ふにはあらず世の中に有りやなしやの聞かまほしきぞ

かたらひける人の久しう音せず侍りければたかうなを遣はすとて

君とはで幾よへぬらむ色かへぬ竹のふる根の生ひかはるまで

紀貫之

延喜の十七年八月宣旨によりてよみ侍りける

こぬ人をしたに待ちつゝひさかたの月をあはれといはぬ夜ぞなき

柿本人麿

梓弓ひきみ引かずみこずばこずこばこそ猶ぞよそにこそみめ

春日の使にまかりて還りてすなはち女のもとにつかはしける

一條攝政

暮ればとく行きて語らむ逢ふ事のとほちの里のすみうかりしも

あづまよりある男のまかり上りてさきざきものいひ侍りける女の許にまかりたりけるにいかでいそぎ上りつるぞなどいひ侍りければ

讀人しらず

おろかにもおもはましかば東路のふせやといひし野邊に寢なまし

女のもとに遣はしける文のつまをひきやりて返事をせざりければ

跡もなき葛城山をふみみれば我が渡しこしかたはしかもし

人のさらしかかせ侍りける奥にかきつけ侍りける

かきつくる心みえなるあとなれどみても忍ばむ人やあるとて

○明くるわびしき云々　葛城の神は容貌の見苦しいために晝は隱れ夜だけ出て橋を作つたといふ。

○もる人　守ると漏るとをかけたもの。

大納言朝光下らふに侍りける時女のもとに忍びてまかりて曉にかへらじ
といひければ　　春宮女藏人左近

岩橋のよるの契りも絶えぬべし明くるわびしきかづらきのかみ

入道攝政まかり通ひける時女のもとに遣はしけるふみを見侍りて　　春宮大夫道綱母

うたがはし外にわたせる文見ればわれやとだえにならむとすらむ

題しらず　　讀人しらず

いかでかは尋ね來つらむ逢生(よもぎふ)の人も通はぬ我がやどのみち

東三條にまかり出でて雨の降りける日　　承香殿女御

雨ならでもる人もなきわが宿を淺茅(あさぢ)がはらと見るぞかなしき

まかり通ふ所の雨のふりければ　　大納言朝光

いにしへはたが故郷ぞおぼつかな宿もる雨に問ひて知らばや

中納言平惟仲久しうありて消息(せうそこ)して侍りける返事にかかせ侍りける　　高階成忠女

ゆめとのみ思ひなりにし世の中をなに今さらにおどろかすらむ

題しらず　　源公忠朝臣

人もみぬ所にむかし君と我がせぬわざ〳〵をせしぞこひしき

左大將濟時があひ知りて侍りける女筑紫にまかり下りけるに實方朝臣宇佐の使にて下り侍りけるにつけてとぶらひに遣はしたりければ　藤原後生女

今日まではいきの松原生きたれど我が身のうさに歎きてぞふる

成房朝臣法師にならむとていひむろにまかりて京の家に枕ばこをとりに遣はしたりければかきつけて侍りける　則忠朝臣女

いきたるか死ぬるかいかに思ほえず身よりほかなる玉匣(たまくしげ)かな

○我が身のうさ　憂さと宇佐とをかけたもの。

拾遺和歌集　卷第十九

雜戀

題しらず　　柿本人麿

少女子が袖ふる山のみづがきのひさしき世よりおもひそめてき

稲荷にまうであひて侍りける女の物いひかけ侍りけれどいらへもし侍らざりければ　　平定文

稲荷山やしろのかずを人問はばつれなき人をみつとこたへむ

題しらず　　柿本人麿

三島江の玉江の葦をしめしよりおのがとぞ思ふいまだ刈らねど

大中臣能宣

あだなりとあだにはいかゞさだむらむ人の心を人は知るやは

讀人しらず

雙六（すぐろく）の市場に立てる人づまの逢はでやみなむものにやはあらぬ

濡衣をいかゞきざらむ世の人は天（あめ）のしたにし住まむかぎりは

○つれなき人をみつ　つれない人を見たを、三つにかけて云つたもの、

○おのがとぞ思ふ　おのがものとぞ思ふの意。

○天のした　雨の下に通はせたもの。

流され侍りける時　贈太政大臣

天のしたのがるゝ人のなければや著てし濡衣ひるよしもなき

題しらず　讀人しらず

いづくとも所さだめぬしら雲のかゝらぬ山はあらじとぞおもふ

白雲のかかるそらごとする人を山のふもとによせてけるかな

いつしかもつくまのまつりとくせなむつれなき人の鍋の數みむ

まだ少將に侍りける時采女町の前をまかりわたりけるにあすかの采女ながめ出して侍りけるにつかはしける　小野宮太政大臣

人知れぬ人待ち顏にみゆめるは誰がたのめたる今宵なるらむ

かへし　明日香采女

池水の底にあらではねぬなはのくる人もなし待つ人もなし

中納言敦忠兵衛佐に侍りける時に忍びていひ契りて侍りけることの世にきこえ侍りければ　右近

人知れずたのめしことは柏木のもりやしにけむ世にふりにけり

やんごとなき所にさぶらひける女のもとに秋頃しのびてまからむと男のいひければ　讀人しらず

○白雲のかかるそらごと　白雲のかゝると、このやうなそらごととを云ひかけたもの。

○筑摩のまつり云々　近江國坂田郡にある筑摩神社の祭で、この祭には里の女が、男に逢つた數だけ鍋をかぶつて神輿に從ふ習慣である。それによつて詠んだもの。

○もりやしにけむ　漏る意を受けて、降りにけりと結んだもの。

○しか立ちよらむ　そのやうにと鹿とを通はせたもの。

○人のめし侍りける男　人妻をおかした男。

○ひとや見むとは　人が見るだらうとは、獄を見るとをかけたもの。

○まどひて　當惑して。

○ぬりごめ　家の奥まつた所にあるもので、土で塗りめぐらしてある寢所としたもの。

○ほと〳〵しかるめ　上の三句はこの句の序。危い目。今少しで見つけられるめ。

○むすぶ手の云々　古今集離別の部にも出てゐる。

秋萩の花も植ゑ置かぬやどなればしか立ちよらむ所だになし

題しらず

小餘綾(こゆるぎ)のいそぎて來つるかひもなくまたこそ立てれ沖つしらなみ

人のめし侍りける男の獄(ひとや)に侍りてめのとのもとに遣はしける

忍びつゝよろこそきしか唐衣ひとや見むとはおもはざりしを

さだもりがすみ侍りける女にくにもちが忍びてかよひ侍りける程にさだもりまうで來ければまどひてぬりごめに隱してうしろの戸よりにがし侍りけるつとめていひつかはしける　　くにもち

みや造るひだの工匠(たくみ)の手斧(てをの)音ほと〳〵しかるめをも見しかな

男もちたる女をせちにけさうし侍りてあるをとこの遣はしける

ありとても幾世かは經るから國の虎ふす野邊に身をも投げてむ

しがの山ごえにて女の山の井に手洗ひむすびてのむを見て　　貫之

むすぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな

三條の尙侍方たがへに渡りてかへるあしたにしづくに濁るばかりの歌今はえよまじと侍りければ車にのらむとしけるほどに

家ながらわかるゝ時は山の井のにごりしよりもわびしかりけり

題しらず　　讀人しらず

はしたかのとかへる山の椎柴のはがへはすとも君はかへせじ

久しうまうで來ざりける男のたまさかに來りければ女のとみにも出でざりければ

あやまちのあるかなきかを知らぬ身は厭ふに似たるこゝちこそすれ

題しらず　　在原業平朝臣

行く水のあわならばこそ消えかへり人の淵瀬を流れても見め

ともかくもいひはなたれよ池水の深さあささをたれか知るべき

染川をわたらむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ

賀茂の臨時祭の使に立ちてのあしたにかざしの花にさして左大臣の北の方のもとにいひ遣はしける　　兵衞

千早ぶるかもの河邊の藤なみはかけてわするゝ時のなきかな

題しらず　　讀人しらず

世のなかはいかゞはせましゝげ山の青葉の杉のしるしだになし

埋木はなか蟲ばむといふめればくめぢの橋はこゝろして行け

○君はかへせじ　君は變るまい。

○染川　筑前にありと。

世の中はいさともいさや風の音は秋にあき添ふこゝちこそすれ

いはみに侍りける女のまうで來りけるに　人麿

石見なるたかまの山の木の間より我がふる袖を妹見けむかも

和泉の國に侍りける程に忠房朝臣やまとよりおくれるかへし　貫之

沖つ浪たかしの濱のはま松の名にこそきみを待ちわたりつれ

かみいたく鳴り侍りけるあしたにせんやう殿の女御のもとに遣はしける　天暦御製

君をのみ思ひやりつゝ神よりもこゝろの空になりしよひかな

越（こし）なる人の許につかはしける　貫之

おもひやる越のしら山しらねどもひと夜も夢に越えぬ日ぞなき

題しらず　人麿

山科のこはたの里に馬はあれどかちよりぞ來る君をおもへば

春日やま雲居かくれてとほけれど家はおもはず君をこそおもへ

物へまかりける道に濱づらに貝の侍りけるを見て　坂上郎女

我が背子（せこ）を戀ふるもくるしいとまあらば拾ひて行かむ戀忘れ貝

人の國へまかりけるに海士（あま）のしほたれ侍りけるを見て　惠慶法師

○たかまの山　萬葉集には高津の山。

○たかしの濱　沖つ浪高しとかけたもの。

○かみ　鳴神。雷。

ふるさとをこふる袂もかわかぬにまたしほたるゝ海士(あま)もありけり

仁和の御屏風にあま汐たるゝ所に鶴なく　　大中臣頼基

鹽たるゝ身は我のみと思へども外(よそ)なるたづもねをぞ鳴くなる

まうで來(く)る事かたく侍りける男のため渡りければ　　讀人しらず

つれ〴〵と思へばうきに生ふる蘆のはかなきよをばいかゞ頼まむ

うきしま　　順

さだめなき人のこゝろに比ぶればたゞ浮島は名のみなりけり

なか〳〵ひとりあらばなど女のいひ侍りければ　　元輔

ひとりのみ年へけるにも劣らじを數ならぬ身のあるは有るかは

題しらず　　讀人しらず

風はやみみねのくず葉のともすればあやかりやすき人の心か

紀郎女におくり侍りける　　中納言家持

久方の雨のふる日をたゞひとり山邊に居(を)ればうもれたりけり

男のまかり絶えたりける女のもとに雨ふる日見馴れて侍りける從者(ずさ)の鹿(か)毛(け)の馬もとめにとてなむまうで來つるといひ侍りければ　　讀人しらず

雨降りてにはにたまれるにごり水たがすまばかはかげの見ゆべき

○鹽たるゝ身は　潮じみてぬれそぼつ意から、歎きに沈む意に轉じたもの。

○數ならぬ身　作者自身をさして云つたもの。

○あるは有るかは　無いと同じである。

○あやかりやすき　他のものに觸れて似よりやすい。

○たがすまばかは　誰が住むと、澄むとをかけたもの。かはは反語

○かげ　影を鹿毛とをかけたもの

よとともに雨ふるやどの行潦すまぬにかげは見ゆるものかは

日蝕の時太皇太后宮より一品のみこの許につかはしける

逢ふことのかくてや遂にやみの夜のおもひも出でぬ人のためには

題しらず　　　　人麿

いはしろの野中に立てるむすび松心も解けずむかしおもへば

女のもとに菊を折りてつかはしける　　　　讀人しらず

今日かとも明日とも知らぬ白菊のしらず幾世をふべき我が身ぞ

忠君宰相まさのぶがむすめにまかり通ひて程なく調度どもを運びかへしければ沈の枕を添へて侍りけるを返しおこせたりければ

涙がはみづまさればやしきたへの枕の浮きてとまらざるらむ

延喜の御時按察のみやす所久しく勘事にて御めのとにつけて參らせける

世の中を常なきものと聞きしかどつらきことこそ久しかりけれ

御かへし

つらきをばつねなきものと思ひつゝ久しきことを頼みやはせぬ

題しらず　　　　伊勢

我こそは憎くもあらめ我が宿の花見にだにもきみが來まさぬ

○行潦　雨の降つた後に庭にたまつてゐる水。

○やみの夜　止むに闇の夜をかけたもの。

○いはしろの云々　萬葉集にある歌「いはしろのはま松が枝をひきむすびまさきくあらばまたかへりこむ」によつたもの。

○沈の枕　沈香で作つた枕。

○勘事　勘當。

つゝむこと侍りける女の返事をせずのみ侍りければ一條攝政いはみがたといひ遣はしたりければ　　讀人しらず

石見潟何かはつらき辛からばうらみがてらに來ても見よかし

一條攝政下らふに侍りける時承香殿の女御に侍りける女に忍びて物いひ侍りけるに更にな問ひそといひて侍りければ契りし事有りしかばなどいひ遣はしたりければ　　本院侍從

それならぬ事も有りしを忘れねといひしばかりを耳にとめけむ

題しらず　　讀人しらず

みかりする駒のつまづく青つゞら君こそわれはほだしなりけれ

君みれば結ぶの神ぞうらめしきつれなき人をなにつくりけむ

延喜の御時の中宮の屛風に　　貫之

いづれをか標と思はむ三輪の山ありとしあるは杉にぞ有りける

稻荷にまうでて懸想しはじめて侍りける女のこと人にあひて侍りければ　　藤原長能

我といへば稻荷の神もつらきかな人のためとは祈らざりしを

稻荷のほくらに女の手にて書きつけて侍りける　　讀人しらず

○うらみがてら　浦見がてらと、怨みがてらとを通はせたもの。

○ほだし　馬を繫き止めるに用ゐる繩。併せて心ひかされる意を含めたもの。

○ありとしあるは　あるものはすべて。

○ほくら　神の寶物ををさめて置く倉。轉じて、ほこら、やしろ。

瀧の水かへりてすまば稲荷山なぬかのぼれるしるしと思はむ

元良のみこ久しくまからざりける女の許に紅葉をおこせて侍りければ

思ひ出でて問ふにはあらずあき果つる色の限りを見するなりけり

女のもとに扇を遣はしたりければいひ遣はしける

ゆゝしとて忌むとも今はかひもあらじ憂きをば風につけてやみなむ

題しらず　　　　貫之

ひとりして世をしつくさば高砂の松のときはもかひなかりけり

三條右大臣の屏風に

玉藻かるあまのゆきかたさす棹の長くや人をうらみわたらむ

年の終りに人待ち侍りける人のよみ侍りける

たのめつゝ別れし人を待つほどにとしさへせめて恨めしきかな

○かへりてすまば　返りて住まばと、返りて澄まばとをかけたもの

○あき果つる色の限り　秋の終りの最後の色。飽きはてた最後の心

○ゆゝし　忌々し。いや。

○ゆきかた　行くへ。出て行った方面。

拾遺和歌集　卷第二十

哀傷

むすめにまかり後れて又の年の春さくらの花ざかりに家の花を見ていささかに思ひを述ぶといふ題をよみ侍りける　　小野宮太政大臣

さくら花のどけかりけりなき人を戀ふる涙ぞまづは落ちける

平兼盛

おもかげに色のみのこるさくら花いく世のはるを戀ひむとすらむ

清原元輔

花の色もやども昔のそれながらかはれるものは露にぞありける

大中臣能宣

さくら花にほふものから露けきはこのめも物を思ふなるべし

この事を聞き侍りて後に　　大納言延光

君まさばまづぞ折らまし櫻花かぜのたよりに聞くぞかなしき

中納言敦忠まかり隱れてのち比叡の西坂本に侍りける山里に人々まかり

○ねこそなかるれ　根と受けて、音こそ泣かるれの意にかけたもの

○おひ出でて　菖蒲が芽を出して

○子戀のもり　森の名を、なくなつた子を戀ふる所といふにかけたもの。

て花見侍りけるに　　一條攝政

いにしへは散るをや人のをしみけむ花こそいまはむかし戀ふらし

天暦の御門かくれ給ひて又の年五月五日に宮内卿かねみちが許につかはしける　　女藏人兵庫

五月きてながめまされば菖蒲草思ひ絶えにしねこそなかるれ

ふくたりといひ侍りける子の遣水にさうぶをうゑおきてなくなり侍りにける後の年おひ出でて侍りけるを見て　　栗田右大臣

忍べとやあやめも知らぬ心にもながからぬ世のうきに植ゑけむ

右兵衛佐のぶかたまかりかくれにけるに親のもとにつかはしける　　右大臣

此處にだにつれづれとなく郭公まして子戀のもりはいかにぞ

朝顔の花を人の許につかはすとて　　藤原道信朝臣

朝顔をなにはかなしとおもひけむ人をも花はさこそ見るらめ

夏柞の紅葉のちり殘りたりけるにつけて女五のみこのもとに　　天暦御製

ときならぬ柞の紅葉散りにけりいかにこのもと寂しかるらむ

妻のなくなりて侍りける頃秋風の夜寒に吹き侍りければ　　大貳國章

おもひきや秋の夜風のさむけきに妹なき牀にひとり寝むとは

中宮かくれ給ひての年の秋御前の前栽（せんざい）に露のおきたるを風の吹きなびかしたるを御覽じて　　天曆御製

秋かぜになびく草葉の露よりも消えにし人をなにゝたとへむ

妻にまかりおくれて又の年の秋月を見侍りて　　人麿

こぞ見てし秋の月夜はてらせどもあひ見し妹（いも）はいやとほざかる

朱雀院の御四十九日の法事にかの院の池の面に霧のたち渡りて侍りけるを見て　　權中納言敦忠

君なくて立つあさ霧はふぢごろも池さへきるぞかなしかりける

猿澤の池に釆女（うねべ）の身なげたるを見て　　人麿

わぎもこがねくたれがみを猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき

題しらず　　讀人しらず

心にもあらぬうき世に墨染のころものそでの濡れぬ日ぞなき

服ぬぎ侍るとて

藤衣はらへてすつるなみだ川きしにもまさるみづぞながるゝ

藤ごろもはつるゝいとは君戀ふるなみだのたまの緒とやなるらむ

恆德公の服ぬぎ侍るとて　　藤原道信朝臣

○池さへきる　池までも藤衣を著ると、池さへも霧がかゝるとをかけたもの。

○ねくたれがみ　寢て亂した髮。朝起きたまゝの亂髮。

○服　喪服。

○きしにもまさる　岸と著しとをかけたもの。

○はつるゝいと　編んだ絲が片はしからとけること、ほつれる絲。

○はてなきものは　上のかぎりあれば に對するもの。
○重服　忌服中に更に忌服を重ねること。

○ひとなしし　養育した。
○やくすみ染　燒く炭をかけて、黑染を受けたもの。

○あらましかば　あつたならば、

かぎりあれば今日ぬぎすてつふぢ衣はてなきものは涙なりけり

としのぶが流されける時ながさるゝ人は重服をきてまかると聞きて母が

もとよりきぬに結びつけて侍りける

ひとなしし胸のちぶさをほむらにてやくすみ染の衣著よきみ

思ふ妻におくれて歎く頃よみ侍りける　　大江爲基

藤衣あひ見るべしと思ひせばまつにかゝりてなぐさめてまし

年ふれどいかなる人かとこふりて相思ふひとにわかれざるらむ

題しらず　　讀人しらず

すみぞめのころもの袖は雲なれや涙の雨のたえずふるらむ

謙德公の北の方二人の子どもなくなりて後

蜑といへどいかなる蜑の身なればか世に似ぬ潮をたれ渡るらむ

昔見侍りし人々多くなくなりたる事を歎くを見侍りて　　藤原爲賴

世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな

かへし　　右衞門督公任

常ならぬ世は憂き身こそ悲しけれその數にだに入らじと思へば

親におくれて侍りける頃をとこの問ひ侍らざりければ　　伊勢

なき人もあるがつらきをおもふにも色わかれぬはなみだなりけり

題しらず　　讀人しらず

うつくしと思ひし妹を夢に見て起きてさぐるになきぞ悲しき

順が子なくなりて侍りける頃とひに遣はしける　　清原元輔

思ひやるこゝひの杜(もり)のしづくにはよそなる人の袖もぬれけり

子におくれてよみ侍りける　　平兼盛

なよ竹の我が子のよをば知らずして生(おほ)し立てつと思ひけるかな

大納言朝光がむすめの女御まかりかくれにける事を聞き侍りて筑紫より
とひにおこせて侍りけるころ子馬助たかしげがなくなりて侍りければ　　藤原共政朝臣妻

我のみやこの世はうきと思へども君も歎くと聞くぞかなしき

かへし

うき世にはある身もうしと歎きつゝ涙のみこそふるこゝちすれ

うみ奉りたりけるみこのなくなりて又の年郭公を聞きて　　伊勢

しでの山こえてきつらむ時鳥こひしき人のうへかたらなむ

伊勢がもとにこの事をとひに遣はすとて　　平定文

○あるがつらき　訪れぬ男を云つたもの。

○しでの山こえて云々　郭公のことをしでのたをさと云ふので、それを緣として詠んだもの。

○こひしきひとのうへかたらなむ　なくなられた皇子がどうして居られるか話して呉れよ。

（）いふはおろかになりぬれば　詞で云ふ方がなほざりになるので。

（）こだに　草を摘むといふより籠（こ）と云ひて子にかけた。

（）このもと　木の下。子にかけたもの。

（）うきながら　浮きながらと、憂きながらとをかけたもの。

おもふよりいふはおろかになりぬれば譬へていはむ言の葉ぞなき

中納言兼輔妻（め）なくなりて侍りける年のしはすにつらゆきまかりて物いひ侍りけるついでに　　貫之

戀ふるまに年の暮れなばなき人のわかれやいとゞ遠くなりなむ

妻（め）なくなりて後に子もなくなりにける人をとひに遣はしたりければ　　讀人しらず

いかにせむ忍の草もつみわびぬかたみと見えしこだになければ

子ふたり侍りける人のひとりは春まかりかくれ今ひとりは秋なくなりけるを人のとぶらひて侍りければ

春は花秋は紅葉と散り果てて立ちかくるべきこのもともなし

娘におくれ侍りて　　中務

忘られて暫しまどろむほどもがないつかは君を夢ならで見む

むまごにおくれ侍りて

うきながら消えせぬものは身なりけり羨ましきは水のあわかな

題しらず　　讀人しらず

世の中をかくいひくてはてくは如何（いか）にや如何（いか）にならむとすらむ

吉備津の釆女なくなりて後よみ侍りける　人麿

さゞ波やしがのてこらがまかりにし川瀬の道をみれば悲しも

讃岐のさみねの島にしていはやの中にてなくなりたる人をみて

沖つ浪よる荒磯をしきたへのまくらとまきてなれるきみかも

紀友則みまかりにけるによめる　貫之

あす知らぬ我が身と思へど暮れぬまの今日は人こそ悲しかりけれ

あひ知れる人のうせたる所にてよめる

夢とこそいふべかりけれ世の中はうつゝある物と思ひけるかな

妻の死に侍りて後悲しびてよめる　人麿

家にいきて我が家を見れば玉篋のほかにおきたる妹がこまくら

まきもくの山べ響きて行く水のみなわの如くよをば我がみる

石見に侍りてなくなり侍りぬべき時にのぞみて

いも山の岩根における我をかも知らずて妹が待ちつゝあらむ

世の中心細くおぼえて常ならぬ心地し侍りければ公忠朝臣のもとによみて遣はしけるこのあひだ病おもくなりにけり　紀貫之

手に掬ぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ

てこら　てこなたち。美しい少女達。

しきたへのまくらとまきて　枕として。

こまくら　木枕。

○とりべ山　京都の東、清水寺の傍にある。死人を葬つた地。

○あとのしらなみ　跡に白浪の立つ―あと方もないやうなものである。

この歌よみ侍りて程なくなくなりにけるとなむ家の集にかきて侍る

朱雀院うせさせ給ひける程ちかくなりて太皇太后宮の幼くおはしましけるを見奉らせ給ひて　　御製

呉竹の我がよは異になりぬともねは絶えせずもなかるべきかな

題しらず　　讀人しらず

とりべ山谷に煙のもえ立たばはかなく見えしわれとしらなむ

やまひして人多くなくなりし年なき人を野らやぶなどにおきて侍るを見て　　すけきよ

みな人の命をつゆにたとふるは草むらごとにおけばなりけり

世のはかなき事をいひてよみ侍りける　　したがふ

草枕ひとはたれとかいひおきしつゆのすみかは野山とぞ見る

題しらず　　沙彌滿誓

世の中をなににたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあとのしらなみ

忠蓮南山の房の縁に死人を法師の見侍りて泣きたるかたを書きたるをみて　　源相方朝臣

契りあれば屍（かばね）なれども逢ひぬるをわれをば誰かとはむとすらむ

〔憂世をは背かは　出家する意。

〔うしの車　牛車と憂しの來る關とを通はせたもの。

〔おもひの家　思ふ家と思ひといふ火の家とをかけたもの。火の家は火宅。卽ちこの世をいふ。

〔ふるぞはかなき　降ると經るとを通はせたもの。

題しらず　讀人しらず

山寺の入相のかねの聲ごとに今日もくれぬと聞くぞかなしき

法師にならむとて出でける時に家にかきつけて侍りける　慶滋保胤

憂世をば背かばけふもそむきなむ明日もありとは頼むべき身か

題しらず　讀人しらず

世の中にうしの車のなかりせばおもひの家をいかで出でまし

法師にならむとしける頃雪の降りければたゝうがみにかきをさめて侍りける　藤原高光

世の中にふるぞはかなき白雪のかつは消えぬるものとしる／＼

服に侍りける頃あひしりて侍りける女の尼になりぬとききて遣はしける　よしのぶ

墨染のいろはわれのみと思ひしを憂世をそむく人もありとか

かへし　讀人しらず

墨染の衣と見ればよそながらもろともにきる色にぞ有りける

成信重家ら出家し侍りける頃左大辨行成が許にいひ遣はしける　右衛門督公任

思ひ知る人もありける世の中をいつをいつとてすぐすなるらむ

○ごふつくす　業盡す。齋院は佛事を忌まれるので、この御八講にも逢はれなかつたから、その心持を詠まれたのである。

○若菜をば云々　法華經の提婆品に、法華經を我得しことは薪こり菜摘み水汲みつかへてぞえしによつていふ。

少納言藤原統理に年頃ちぎること侍りけるを志賀にて出家し侍るときき
ていひ遣はしける

さゞなみや志賀のうら風いかばかり心のうちのすゞしかるらむ

女院の御八講(みはつかう)の捧物にかねして龜のかたを造りてよみ侍りける　齋院

ごふつくす御手洗川(みたらしがは)の龜なれば法(のり)の浮木にあはぬなりけり

天暦の御時故きさいの宮の御賀せさせ給はむとて侍りけるを宮うせ給ひ
にければやがてそのまうけして御諷誦行はせ給ひける時　御製

いつしかと君にと思ひし若菜をば法(のり)の道にぞ今日は摘みつる

爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍りて又の日これかれもろともに歸り侍り
にけるついでに小野にまかりて侍りけるに花のおもしろかりければ　春宮大夫道綱母

薪こることは昨日につきにしをいざ斧の柄はこゝに朽たさむ

左大將濟時白川にて說經せさせ侍りけるに　實方朝臣

今日よりは露の命も惜しからずはちすのうへの玉とちぎれば

おこなひし侍りける人の苦しく覺え侍りければえおき侍らざりける夜の
夢にをかしげなる法師のつきおどろかしてよみ侍りける

〇朝每にはらふ塵だに云々　塵は每朝拂つても猶盡きぬものであると云つて、懈怠なく佛の敎をつとめても猶あきたらぬと云ふ意に喩へたもの。

〇三十ぢあまりふたつの姿　三十二相、佛の顏にそなはつた三十二の相。

〇かびらゑ　伽毘羅衞。天竺の國の名。

朝每にはらふ塵だにあるものをいまいく世とてたゆむなるらむ　雅致女式部

性空上人のもとによみて遣はしける

くらきより暗き道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山の端の月　仙慶法師

極樂を願ひてよみ侍りける

極樂ははるけきほどと聞きしかどつとめていたるところなりけり　空也上人

市門にかきつけて侍りける

ひとたびも南無阿彌陀佛といふ人の蓮(はちす)の上にのぼらぬはなし

光明皇后山階寺にある佛跡にかきつけ給ひける

三十(みそ)ぢあまりふたつの姿そなへたる昔の人の蹈める跡ぞこれ

大僧正行基よみ給ひける

法華經を我が得しことは薪こり菜(な)つみ水くみつかへてぞえし

百草にやそくさ添へてたまひてし乳房のむくい今日ぞ我がする

南天竺より東大寺供養にあひに菩提(ぼだい)が渚(なぎさ)につきたりける時よめる

靈山(りやうぜん)の釋迦(しやか)のみまへに契りてし眞如(しんによ)くちせずあひ見つるかな　波羅門僧正

かへし

かびらゑに共に契りしかひありて文殊の御顏(みかほ)あひ見つるかな

○ぶち　むち。鞭。

○うゑ人　餓ゑ人。

○しなてるや　かたにかけて云ふ枕詞。

　いひにうゑて　飯に餓ゑて。

○に汝なれりけめや　日本書紀卷二十二、廐戸皇子の歌「しなてるや片岡山にいひにゑてこやせるその旅人あはれ親なしになれなりけめやさす竹のきみやはなきいひに餓ゑてこやせるその旅人あはれ。」とあり

聖徳太子高岡の山邊道人の家におはしけるに餓ゑたる人道のほとりにふせり太子の乘り給へる馬とゞまりて行かずぶちをあげてうち給へどしりへ退きてとゞまる太子すなはち馬よりおりて餓ゑたる人のもとに歩み進み給ひて紫の上の御ぞをぬぎてうゑ人の上におほひ給ふ歌をよみてのたまはく

しなてるや片岡山にいひにうゑてふせる旅人あはれおやなし
　に汝(なれ)なれりけめやさす竹のきねはやなきいひに飢ゑてこやせるたび人
　あはれ〳〵といふ歌なり

　うゑ人かしらをもたげて御かへしを奉る

いかるがや富の小川の絶えばこそ我が大君の御名をわすれめ

拾遺和歌集 終

後拾遺和歌集

後拾遺和歌集序

我が君あめの下しろしめしてよりこの方、四の海波の聲聞えず、九の國みつぎ物たゆる事なし。おほよそ日の中によろづのことわざ多かる中に、花の春月の秋、折につけ事にのぞみて空しくすぐしがたくなむおはします。これによりて、近くさぶらひ遠く聞く人、月にあざけり風にあざけること絶えず、花をもてあそび、鳥をあはれまずといふことなし。つひにおほんあそびのあまりに、敷島のやまと歌集めさせ給ふ事あり。拾遺集に入らざる中頃のをかしき言の葉もしほ草かきあつむべきよしなむありける。仰せをうけたまはれる我ら、朝にみことのりをうけたまはり、夕にのべ給ふ事まことにしげし。この仰せ心にかかりて思ひながら年を送る事、こゝのかへりの春秋になりにけり。いぬる應德の初めの年の、夏みな月の二十日餘りの頃ほひ、やくらの官にそなはりて、五日の暇もさまたげなし。そのかみの仰せを老曾の森に思ひ給へて、ちり〴〵になる言の葉かき出づる中に、石の上ふりにたる事は、古今後撰拾遺集にのせて

○我が君　白河天皇を申す。
○よろづのことわざ　萬機の政をいふ。
○月にあざけり風にあざける　風月に對して吟嘯する意。
○こゝのかへりの春秋　九年。
○やくらの官　參議の異名。
○老曾の森に云々　老の身といふ意に云つたもの。

○世は十つぎあまりひとつぎ　村上、冷泉、圓融、花山、一條、後朱雀、後冷泉、後三條、白河の十一代をいふ。

○事を撰ぶ道　この集を撰ぶについての態度を云つたもの、即ち貴賤に關係せず、歌の姿詞のよいものを採つたと云ふのである。

○梨壺のいつゝの人　梨壺の五人で、後撰集の撰者。

○聞く事をかしこしとし云々　耳に聞くだけの古をよいものと考へ現に目に見る今を卑しいものとする事を云ふ。

ひとつも殘らず、その外の歌、秋の蟲のさせるふしなく、蘆間の舟の障り多かれど、中頃よりこのかた今に至るまで歌の中に、とりもてあそぶべきもあり。天曆の末より今日に至るまで、世は十つぎあまりひとつぎ、年は百年(もゝとせ)あまりみそぢになむ過ぎにける。住吉の松久しく、あらたまの年も過ぎて、濱の眞砂の數知らぬまで家々の言の葉多くつもりにけり。事を撰ぶ道、すべらぎのかしこきしわざとてもさらず。ほまれをとる時、山がつの賤しき事とてもすつる事なし。すがた秋の月のほがらかに、ことば春の花のにほひあるをば、千歌二百十(ちうたふたもゝちとを)あまり八を撰びて二十巻(はたまき)とせり。名づけて後拾遺和歌集といふ。おほよそ古今後撰ふたつの集に入りたるともがらの家の集をば世もあがり人もかしこくて、難波のよしあし定めむ事もはゞかりあれば、これに除きたり。昔梨壺のいつゝの人といひて、歌にたくみなるものあり、いはゆる大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等これなり。さきに歌の心を得て、呉竹のよゝに、池水のいひふるされたる人なり。これらの人の歌をさきとして、今の世のことを好む輩(ともがら)に至るまで、目につき心にかなふをば入れたり。世にある人聞く事をか

しこしとし、見る事をいやしとすることわざによりて、近き世の歌に心をとゞめむこと難くなむあるべき。しかはあれど、後みむ爲に吉野川よしといひながさむ人に、あふみのいさら川のいさゝかにこの集を撰べり。此の事今日にはじまれるにあらず。ならの帝は萬葉集二十卷を撰びて、つねのもてあそびものとし給へり。かの集の心は、やすきことをかくして、かたき事をあらはせり。そのかみのこと今の世にかなはずして、まどへる者多し。延喜のひじりの帝は、萬葉集の外の歌二十卷を撰びて世に傳へ給へり。いはゆる今の古今和歌集これなり。村上のかしこき御代には、又古今和歌集に入らざる歌二十卷を撰び出でて、後撰集となづけ、又花山の法皇はさきの二の集に入らざる歌をとりひろひて、拾遺集と名づけ給へり。かの四の集は、ことはえぬ物の如くにして、心は海よりも深し。この外大納言公任卿みそぢあまり六の歌人をぬき出でて、これかれたへなる歌、百あまり五十を書き出し、又十餘り五つがひの歌を合はせて世に傳へたり。しかるのみにあらず、やまともろこしのをかしきこと二卷を撰びて、物につけ事によそへて、人の心をゆかさしむ。又九しなのやまと歌を撰

○此の事　撰集を云ふ。
○延喜のひじりの帝　醍醐天皇。
○かの四の集　萬葉集、古今集。後撰集、拾遺集。
○みそぢあまり六の云々　三十六人集。
○十あまり五つがひの云々　十五番歌合に云ふ。
○やまともろこし云々　和漢朗詠集。
○九しなのやまと歌　和歌九品。

びて人にさとし、我が心にかなへる歌一巻を集めて、深き窗にかくす集といへり。今もいにしへも、すぐれたる中にすぐれたる歌をかき出して、こがねの玉の集となむ名づけたる。その言葉名にあらはれて、その歌なさけ多し。おほよそこの六くさの集は、かしこきもいやしきも知れるも知らざるも、玉くしげあけくれの心をやるなかだちとせずといふことなし。又近く能因法師といふ者あり。心花の山の跡を願ひて、言葉人に知られたり。わが世に逢ひとしあひたる人の歌をえらびて、玄々集と名づけたり。これらの集に入りたる歌は、海士(あま)のたく繩くりかへし、同じことをぬき出づべきにもあらざれば、この集にのする事なし。又うるはしき花の集といひ、足引の山伏がしわざなど名づけ、うゐ木の下の集といひ集めて、言の葉いやしく姿だみたる物あり。これらの類(たぐひ)は誰がしわざとも知らず、又歌のいで所も詳かならず。たとへば山河の流れを見て水上ゆかしく、霧の中の梢を望みて、いづれのうゐ木と知らざるが如し。しかれば、これらの集にのせたる歌は、かならずしもさらず、土の中に黄金(こがね)をとり、石の中に玉のまじはれる事もあれば、さもありぬべき歌は所々のせたり。この

○深き窗にかくす集　深窓秘抄。
○こがねの玉の集　金玉集。
○この六くさの集　三十六人集以下、公任の撰した六種の集。
○玄々集　永延から寛徳までの歌を集めたもの。
○うるはしき花の集　麗花抄。撰者未詳。
○足引の山伏がしわざ　山伏集。これも撰者未詳。
○うゐ木のもとの集　樹下集。源賢の撰。
○だみたる　清絹でないこと。田舎びたること。
○さもありぬべき歌　然るべき歌の意。立派な歌。

内に、みづからの拙き言の葉も、たび〳〵の仰せ背きがたくして、はゞかりの關のはゞかりながら所々のせたる事あり。この集もてやつすなかだちとなむあるべき。おほよそこの外の歌、み熊野の浦のはまゆふ世を重ねて、白浪のうちきく事、鴫のはねがきかきつめたる色ごのみの家々あれど、埋木のかくれて見る事かたし。今の撰べる心は、それかしにはあらず。身はかくれぬれど、名は朽ちせぬ物なれば、いにしへも今も情ある心ばせを、行末にも傳へむ事を思ひて撰べるならし。しかあらずば、たへなる言の葉も、風の前にちりはて、光ある玉の言葉も、露とともに消えうせなむことによりて、すがの根の長き秋の夜筑波ねのつく〴〵と、白絲の思ひ亂れつゝ、三年になりぬれば、おなじきみつの年のくれの秋いさよひのころほひ、撰び終りぬることになむありけるといへり。

（）はゞかりの關　奥州にある。次に憚りさいふための序。
（）もてやつす　やつしそこなふ。
（）おなじきみつの年　應徳三年を云ふ。

後拾遺和歌集　第一

春　上

正月一日によみ侍りける　　小大君

いかにねて起くる朝にいふことぞ昨日を去年と今日を今年と

みちのくにに侍りける時春立つ日よみ侍りける　　光朝法師母

出でて見よ今はかすみもたちぬらむ春はこれよりすぐとこそきけ

春は東よりきたるといふ心をよみ侍りける　　源師賢朝臣

東路はなこその關もあるものをいかでか春のこえて來つらむ

春立つ日よみ侍りける　　橘俊綱朝臣

あふ坂の關をや春もこえつらむ音羽の山の今朝はかすめる

寛和二年花山院の歌合によみ侍りける　　大中臣能宣朝臣

春のくる道のしるべはみ吉野の山にたなびくかすみなりけり

年ごもりに山寺に侍りけるに今日はいかゞと人のとひて侍りければよめる

○春はこれよりすぐ　都の春は東から來るといふので、陸奥で詠むのであるからすぐと云つたのである。

なこその關　關の名に來るなの意をかけたもの。

○年ごもり　冬ごもり。

人知れず入りぬと思ひしかひもなく年も山路を越ゆるなりけり　平兼盛

山寺にて正月に雪の降れるをよめる

雪ふりてみち踏みまよふ山里にいかにしてかは春の來つらむ　加賀左衞門

題しらず

新しき春はくれども身にとまる年はかへらぬものにぞありける　大中臣能宣朝臣

天曆三年太政大臣の七十の賀し侍りける屏風によめる

たづのすむ澤べの蘆の下根とけ汀（みぎは）もえ出づるはるは來にけり

一條院の御時殿上人春の歌とてこひ侍りければよめる　紫式部

み吉野は春のけしきにかすめどもむすぼほれたるゆきのした草

花山院の歌合に霞をよみ侍りける　藤原長能

谷川の氷はいまだ消えあへぬに峯のかすみはたなびきにけり

題しらず　藤原隆經朝臣

春ごとに野べのけしきのかはらぬはおなじ霞や立ちかへるらむ　和泉式部

春がすみ立つやおそきと山川の岩間をくゞるおときこゆなり

鷹司殿の七十の賀の月次の屏風に臨時客のきたる所をよめる　赤染衞門

○太政大臣　藤原忠平。

○むすぼほれたる　結ぼれたやうになつてゐる。雪に氷つて芽の出さうなけしきもない。

○消えあへぬに　消えてしまはないのに。

○臨時客　春のはじめに、攝關の家に大臣以下の官人を招いて遊ぶことをいふ。

むらさきの袖をつらねてきたるかな春立つことはこれぞ嬉しき

春臨時客をよめる　　小辨

羣れてくる大宮人は春をへてかはらずながらめづらしきかな

入道前太政大臣大饗（だいきやう）し侍りける屏風に臨時客のかたかきたる所をよめる

藤原輔尹朝臣

紫もあけもみどりも嬉しきは春のはじめにきたるなりけり

同じ屏風に大饗のかたかきたる所をよみ侍りける　　入道前太政大臣

君ませとやりつる使來にけらし野邊の雉子（きゞす）はとりやしつらむ

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるによめる

讀人しらず

春立ちてふるしら雪のうぐひすの花散りぬとやいそぎ出づらむ

鶯をよみ侍りける　　大中臣能宣朝臣

山たかみゆきふるすより鶯の出づるはつ音は今日ぞ聞きつる

正月二日逢坂にて鶯の聲を聞きてよみ侍りける　　源兼澄

ふるさとへ行く人あらばことづてむけふ鶯のはつ音聞きつと

選子内親王いつきときこえける時正月三日上達部（かんだちめ）あまた參りて梅が枝とい

○むらさきの袖をつらねて　紫の袍は三位以上の人の著るもの。高位高官の人が澤山來る意。

○入道前太政大臣　藤原道長。

○紫もあけもみどりも　紫は三位以上の人、緋は五位の人、綠は六位の人の袍の色。

○君　大饗の時の尊者の君。

○花散りぬとや　花が散つたと思つてであらうか。

○ゆきふるす　雪の降ると、古巣とをかけたもの。

○ふるさとへ云々　任國に赴く途中の歌であらう。

○いつき　齋院。

ふ歌をうたひて遊びけるに内よりかはらけ出すとてよみ侍りける　讀人しらず
降りつもる雪きえがたきやまざとにはるを知らする鶯のこゑ

加階申しけるに賜はらで鶯のなくを聞きてよみ侍りける　清原元輔
うぐひすのなく音ばかりぞきこえける春のいたらぬ人のやどにも

俊綱朝臣の家にて春山里に人を尋ぬといふ心をよめる　藤原範永朝臣
たづねつるやどは霞にうづもれて谷のうぐひすひとこゑぞする

小野宮太政大臣の家に子の日し侍りけるによみ侍りける　清原元輔
千年へむやどの子の日の松をこそよその例(ためし)に引かむとすらめ

題しらず　和泉式部
ひきつれてけふは子の日の松にまた今千歳(ちとせ)をそのべに出でつる

正月子の日庭におりて松など手ずさびにひき侍りけるを見てよめる　讀人しらず
春の野に出でぬ子の日は諸人(もろびと)の心ばかりをやるにぞありける

正月子の日にあたりて侍りけるに良暹法師のもとより子の日しにたむ出づるいざなどいひにおこせ侍りけるに又も音せで日くれにければよみて遣はしける　賀茂成助

○加階申しけるに　位階の昇進を願つたのに。
○春のいたらぬ　加階をたまはらなかつた事をいふ。
○ひとこゑぞする　一聲を人聲にかけたもの。
○今千歳をそのべに　野邊にのべる意をかけたもの。

けふは君いかなる野べに子の日して人のまつをば知らぬなるらむ

今上六條におはしまして上達部（かんだちめ）うへのをのこどもなど中島に渡りて子の日し侍りけるによみ侍りける　右大臣北の方

袖かけて引きぞやられぬ小松原いづれともなき千代の景色に

三條院の御時に上達部殿上人など子の日せむとし侍りけるに齋院の女房船岡に物見むとしけるをとゞまりにければそのつとめて齋院に奉り侍りける　堀河右大臣

とまりにし子の日の松を今日よりはひかぬ例（ためし）に引かるべきかな

題しらず　民部卿經信

淺みどり野邊の霞のたなびくに今日の小松をまかせつるかな

承暦二年の內裏歌合によみ侍りける　左近中將公實

君が代にひきくらぶれば子の日する松の千年もかずならぬかな

正月七日子の日に當りて雪のふり侍りけるによめる　伊勢大輔

人はみな野邊の小松を引きに行くけふの若菜は雪やつむらむ

正月七日卯の日にあたりて侍りけるに今日は卯杖つきてやなど道宗朝臣の許よりいひおこせて侍りければよめる

○人のまつをば　松を待つに云ひかけたもの。
○今上　白河院を申す。
○齋院　賀茂神社のいつきの宮。伊勢の齋宮に準じて、未婚の女王又は內親王を奉仕せしめられたもの。
○たなびくに　霞がたなびくと、手に引くとにかけたもの。
○ひきくらぶれば　小松引きをひきくらぶればとかけたもの。
○卯杖　正月の初卯の日に邪氣を避けるために兵衞府から奉つたもの、五色の絲で卷いてある。

卯杖つき摘ままほしきはたまさかに君がとふひの若菜なりけり

題しらず　大中臣能宣朝臣

白雪のまだふるさとの春日野にいざうちはらひ若菜摘みてむ　和泉式部

春日野は雪のみつむと見しかども生ひ出づるものは若菜なりけり

後冷泉院の御時后の宮の歌合によみ侍りける　中原頼成妻

摘みにくる人は誰ともなかりけり我がしめし野の若菜なれども

正月七日周防の内侍のもとに遣はしける　藤三位

かず知らずかさなるとしを鶯のこゑするかたの若菜ともがな

長樂寺にて故郷の霞の心をよみ侍りける　大江正言

山たかみ都のはるを見わたせばたゞ一むらのかすみなりけり　能因法師

よそにてぞかすみたなびくふるさとの都のはるは見るべかりける

題しらず　選子内親王

春はまづ霞にまがふやまざとを立ちよりて問ふ人のなきかな

春難波といふ所にて網ひくを見てよみ侍りける　藤原節信

○白雪のまだふるさと　白雪のまだ降ると、古里とをかけたもの。

○しめし野　山城にありと。トめゆひ領する野とかく。

○たなびくものは　綱を手で引くといふを霞のたなびくにかけたもの。
○三島江　攝津國にある。
○つのぐみ渡る　一面に芽を出すもの。
○一よ　一夜と一ふしとをかけたもの。
○心あらむ人　風雅を解する心のある人。
○見えみ見えずみ　見えたり見えなかつたりする。
○すぐろのすゝき　燒草のために末の黒くなつてゐる薄。

はる〴〵と八重の潮路におく綱をたなびくものは霞なりけり

題しらず　曾禰好忠

三島江につのぐみ渡る蘆の根の一よのほどに春めきにけり

正月ばかりに津の國に侍りける頃人のもとにいひ遣はしける　能因法師

心あらむ人に見せばや津の國の難波わたりのはるのけしきを

題しらず　讀人しらず

難波がた浦ふく風になみ立てばつのぐむ蘆の見えみ見えずみ

春の駒をよめる　權僧正靜圓

あはづ野のすぐろのすゝきつのぐめば冬立ちなづむ駒ぞいばゆる

長久二年弘徽殿の女御歌合し侍りけるに春駒をよめる　源兼長

立ちはなれ澤べに荒るゝ春駒はおのがかげをや友と見るらむ

屏風の繪にきじの多くむれゐて旅人の眺望する所をよめる　藤原長能

狩にこば行きても見ましかた岡のあしたの原に雉子（きゞす）鳴くなり

題しらず　和泉式部

秋までの命も知らずはるの野に萩のふるえをやくと聞くかな

後冷泉院の御時后の宮の歌合に殘雪をよめる　藤原範永朝臣

花ならで折らまほしきは難波江の蘆のわか葉に降れるしらゆき

屛風の繪に梅の花ある家に男きたる所をよめる　平　兼　盛

梅が香をたよりの風や吹きつらむ春めづらしく君が來ませる

ある所の歌合に梅をよめる　大中臣能宣朝臣

梅の花にほふあたりの夕ぐれはあやなくひとにあやまたれつゝ

春の夜のやみはあやなしといふ事をよみ侍りける　前大納言公任

春の夜のやみにしなれば匂ひ來る梅よりほかの花なかりけり

題しらず　大　江　嘉　言

梅の香を夜はのあらしの吹きためてまきの板戸のあくる待ちけり

村上の御時御前の紅梅を女藏人どもによませさせ給ひけるに代りてよめる　清　原　元　輔

梅の花香はこと〴〵に匂はねどうすく濃くこそ色は咲きけれ

山里に住み侍りける頃梅花をよめる　讀　人　し　ら　ず

我がやどの垣根のうめのうつり香に獨寢もせぬ心地こそすれ

題しらず　前大納言公任

我がやどの梅のさかりに來る人はおどろくばかり袖ぞにほへる

〇春の夜のやみは云々　古今集の春の上にある躬恒の歌「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」をさしたもの。

〇梅よりほかの花なかりけり　梅は香で知れるが、他の花は香がないので闇に色が隱されてしまつて花はないやうに思はれる。

〇吹きためて　吹きたまらせて。

春はたゞ我が宿にのみ梅咲かばかれにし人も見にと來なまし　　和泉式部

山家の梅の花をよめる　　賀茂成助

うめのはな垣根ににほふ山ざとは行きかふ人のこゝろをぞ見る

春風夜芳といふ心をよめる　　藤原顯綱朝臣

梅の花かばかりにほふ春の夜のやみは風こそうれしかりけれ

梅の花を折りてよみ侍りける　　素意法師

梅が枝を折ればつゞれる衣手におもひもかけぬうつり香ぞする

太皇太后宮東三條にて后に立たせ給ひけるに家の紅梅を移し植ゑられて花の盛りにしのびにまかりていと面白く咲きたる枝に結びつけ侍りける　　辨乳母

かばかりのにほひなりとも梅の花しづが垣根を思ひわするな

題しらず　　大江嘉言

我が宿に植ゑぬばかりぞ梅の花主人(あるじ)なりともかばかりぞ見む　　清基法師

風吹けばをちの垣根の梅のはな香は我がやどのものにぞありける

○かれにし人　間が離れてうとうとしくなつた人。

○行きかふ人のこゝろ云々　往き來する人の態度によつてその人の心がわかるといふ意。

○つゞれる衣手　つゞり合はせた袖。法師の衣をいふ。

道雅三位の八條の家の障子に人の家に梅の木ある所に水流れて客人(まらうど)來れる所をよめる　藤原經衡

たづね來る人にも見せむ梅の花ちるとも水にながれざらなむ

水邊の梅花といふ心を　平經章朝臣

すゑむすぶ人の手さへや匂ふらむ梅の下行くみづのながれは

長樂寺に住み侍りける頃二月ばかりに人のもとにいひつかはしける　上東門院中將

思ひやれかすみこめたる山ざとに花待つほどの春のつれづれ

題しらず　小辨

ほに出でし秋と見しまに小山田を又うちかへす春は來にけり

歸鴈をよめる　赤染衞門

かへる鴈雲居はるかになりぬなりまた來む秋もとほしと思ふに

藤原道信朝臣

行きかへる旅に年ふるかりがねはいくその春をよそに見るらむ

馬內侍

とゞまらぬ心ぞ見えむかへるかり花のさかりを人にかたるな

○ながれざらなむ　ながれないであつてほしい。

○すゑむすぶ　流れの下を掬ふ。

○花待つほど　花の咲くのを待つ間。

○折しもあれ　時もあらうに。

うす墨にかく玉づさと見ゆるかなかすめる空に歸るかりがね　津守國基

折しもあれいかに契りてかりがねの花の盛りにかへりそめけむ　辨乳母

屛風に二月山田うつ所にかへる鴈などある所をよみ侍りける　大中臣能宣朝臣

かりがねぞ今日かへるなる小山田の苗代水のひきも留めなむ

天德四年の内裏歌合に柳をよめる　坂上望城

あらたまの年をへつゝも靑柳の絲はいづれの春か絶ゆべき

柳池の水を拂ふといふ心をよめる　藤原經衡

池水のみくさも取らで靑柳のはらふしづえにまかせてぞ見る

題しらず　藤原元眞

あさみどりみだれてなびく靑柳のいろにぞ春のかぜも見えける

二月ばかり良暹法師の許にありやと音づれて侍りければ人々倶して花見になむ出でぬと聞きて常は誘ふものをと思ひて尋ねて遣はしける　藤原孝善

春がすみへだつる山の麓までおもひも知らず行くこゝろかな

人々花見にまかりけるをかくとも告げ侍らざりければ遣はしける　藤原隆經朝臣

山ざくら見に行くみちをへだつれば人の心ぞかすみなりける

二月のころほひ花見に俊綱朝臣の伏見の家に人々まかれりけるに誰とも知らせでさし置かせて侍りける　皇后宮美作

うらやましいる身ともがな梓弓ふしみのさとの花のまとゐに

花見にまかりけるに嵯峨野を燒きけるを見てよみ侍りける　賀茂成助

小萩さく秋まであらば思ひ出でむ嵯峨野を燒きし春はその日と

題しらず　永源法師

さくら花さかば散りなむと思ふよりかねても風のいとはしきかな

中原致時

うめが香を櫻のはなににほはせて柳がえだに咲かせてしがな

橘元任

明けばまづ尋ねにゆかむ山櫻これぱかりだにひとにおくれじ

一條院の御時殿上の人々花見にまかりて女のもとに遣はしける　源雅通朝臣

折らば惜し折らではいかゞ山櫻今日をすぐさず君に見すべき

かへし　盛少將

折らでたゞかたりにかたれ山櫻かぜに散るだに惜しきにほひを

○へだつれば　間を隔てると、心にへだてを置くとをかけたもの。

○いる身　花のまとゐに入る身と梓弓の縁で射る身とをかけたもの

○秋まであらば　秋まで生きてゐたならば。

○かねても　前かたから。

○今日をすぐさず　今日の日のうちに。花の盛りの過ぎぬうちに。

後冷泉院の御時うへのをのこども花見にまかりて歌などよみてたかくらの一宮の御方にもて參りて侍りけるに　一宮駿河

思ひやる心ばかりはさくら花たづぬるひとにおくれやはする

今上の御時殿上の人々花見にまかり出でける道に中宮の御方よりとて人に代りて遣はしける　右大臣北の方

あくがるゝ心ばかりは山ざくらたづぬる人にたぐへてぞやる

障子の繪に花多かる山里に女ある所をよみ侍りける　源兼隆

今來むとちぎりしひとのおなじくば花の盛りをすぐさざらなむ

題しらず　祭主輔親

いづれをかわきて折らまし山櫻こゝろ移らぬえだしなければ

菅原爲言

行きとまるところぞ春はなかりける花にこゝろの飽かぬかぎりは

遠き花を尋ぬといふ心をよめる　小辨

山櫻こゝろのまゝにたづね來てかへさぞ道のほどは知らるゝ

長閑寺に侍りける頃齋院より山里の櫻はいかゞとありければよみ侍りける　上東門院中將

○思ひやる心　身こそ行かぬが花を思ひやる心。

○あくがるゝ心　山ざくらを見たいと胸をこがすこの思ひだけは。○たぐへて　添へて。

○すぐさざらなむ　過さないで來てほしい。

○かへさぞ道の云々　山櫻をたづねる時は夢中になつてゐるのでどの位道を來たのか氣がつかぬ。歸り道になつてはじめてそれがわかる。

にほふらむ花の都のこひしくてをるにもの憂き山ざくらかな　民部卿長家

白河院にて花を見てよみ侍りける

あづまぢの人に問はばや白川のせきにもかくや花はにほふと　高岳頼言

南殿の櫻を見るといふことを

見るからに花の名だての身なれどもこゝろは雲のうへまでぞ行く　大貳實政

上のをのこども歌よみ侍りけるに春心を花に寄すといふ事をよみ侍りける

春ごとに見るとはすれどさくら花あかでも年のつもりぬるかな　大中臣能宣朝臣

花を惜しむ心をよめる

さくら花にほふなごりに大方の春さへ惜しくおもほゆるかな　平兼盛

河原院にて遙かに山櫻を見てよめる

道とほみ行きては見ねどさくら花心をやりて今日はかへりぬ　能因法師

夜思レ櫻といふ心をよめる

櫻咲く春はよるだになかりせば夢にもものは思はざらまし　讀人しらず

櫻を植ゑおきて主なくなり侍りにければよめる

植ゑおきし人なきやどの櫻花にほひばかりぞかはらざりける

○をるにもの憂き　居るに折るをかけたもの。

○名だて　名をれ。不面目。

○かの山ざくら　かしこに見えるその山ざくらを。

○花見るほどのこゝろ　花を見る時の餘念なきほどの心。

○春はかぎりのなからましかば　春といふものに限りがなく、いつまでも春であつたらよいに。

遠き所にまうでて歸る道に山の櫻を見やりてよめる　和泉式部

都人いかにと問はば見せもせむかの山ざくらひとえだもがな

題しらず　道命法師

人も見ぬやどに櫻を植ゑたれば花もてやつす身とぞなりぬる

我がやどの櫻はかひもなかりけりあるじからこそ人も見に來れ

花見にと人は山邊に入り果てて春はみやこぞさびしかりける　紫式部

世のなかをなに歎かまし山ざくら花見るほどのこゝろなりせば

なげかしき事侍りける頃花を見てよめる　藤原公經朝臣

花見てぞ身のうきことも忘らるゝ春はかぎりのなからましかば

堀河右大臣の九條の家にて毎レ山春ありといふ心をよみ侍りける　前中納言顯基

我がやどの梢ばかりと見しほどによもの山邊に春は來にけり

題しらず　藤原元眞

おもひつゝ夢にぞ見つる櫻ばな春はねざめのなからましかば

承暦二年の內裏歌合によめる　右大辨通俊

○いとなく　いとまなく。少しの間もないやうに。

○おのがものとや　春の宮人であるから春を自分のものとして。

○さゝれざりけり　閉されない。

春の内は散らぬ櫻と見てしがなさてもや風のうしろめたきと

屏風に旅人の花見る所をよめる　　平　兼盛

花見ると家路におそく歸るかな待つとき過ぐと妹やいふらむ

屏風の繪に三月花の宴する所に客人きたる所をよめる

ひととせにふたゝびもこぬ春なればいとなく今日は花をこそ見れ

後冷泉院東宮と申しける時殿上のをのこども花見むとて雲林院にまかれりけるによみて遣はしける　　眞遲法師

うらやまし春の宮人うち羣れておのがものとや花を見るらむ

通宗朝臣能登守に侍りける時國にて歌合し侍りけるによめる　　源緣法師

山ざくら白雲にのみまがへばや春のこゝろのそらになるらむ

宇治前太政大臣花見になむと聞きて遣はしける　　民部卿濟信

いにしへの花見しひとはたづねしを老は春にも知られざりけり

つゝしむべき年なればありくまじき由いひ侍りけれど三月ばかりに白川にまかりけるを聞きて相撲が許よりかくもありけるはといひおこせて侍りけるによめる　　中納言定賴

櫻花さかりになればふる里のむぐらのかどもさゝれざりけり

遠花誰家ぞといふ心をよめる　　坂上定成

よそながら惜しきさくらの匂ひかなたれ我が宿の花と見るらむ

年毎に花を見るといふ心をよめる　　源縁法師

春毎に見れどもあかず山ざくらとしにや花の咲きまさるらむ

高陽院の花盛りに忍びて東西の山の花見に罷りてければ宇治前太政大臣聞きつけて此の程いかなる歌かよみたるなど問はせ侍りければ久しく田舍に侍りてさるべき歌などもよみ侍らず今日かくなむ思ほゆるとてよみ侍りける　　能因法師

世の中をおもひすててし身なれども心よわしと花に見えぬる

これを聞きて太政大臣いとあはれなりといひてかづけ物などして侍りけるとなむいひ傳へたる

美作にまかり下りけるにおほいまうち君のかづけ物の事を思ひ出でて範永朝臣の許に遣はしける

よゝふとも我わすれめや櫻花こけのたもとに散りてかゝりし

高倉の一宮の女房花見に白川にまかれりけるによめる　　伊賀少將

なにごとを春のかたみに思はまし今日しら川のはな見ざりせば

○たれ我が宿の花と云々　あれを自分の家の花として見る家の主人は誰だらう。

○としにや花の云々　年一年を花が咲きまさつて來るのだらうか。

○花に見えぬる　花から見られたことよ。

○こけのたもと　修驗者や仙人などの著る衣。出家の袖。

○散りてかゝりし　かづけ物を賜はつたといふ意。

内のおほいまうち君の家にて人々酒たうべて歌よみ侍りけるに遙かに山櫻を望むといふ心をよめる　　大江匡房朝臣

たかさごのをのへの櫻咲きにけり外山のかすみ立たずもあらなむ

遠山櫻といふ心をよめる　　藤原清家

吉野山八重たつみねのしら雲にかさねて見ゆる花ざくらかな

周防に罷り下らむとしけるに家の花惜しむ心人々よみ侍りけるによめる　　藤原通宗朝臣

おもひ置くことなからまし庭ざくらちりての後のふな出なりせば

花の下に歸らむ事を忘るといふ心をよめる　　良暹法師

訪ふ人も宿にはあらじ山ざくら散らでかへりし春しなければ

基長中納言東山に花見侍りけるにぬの衣きたる小法師して誰とも知らせでとらせ侍りける　　加賀左衞門

散るまでは旅寝をせなむ木のもとに歸らば花の名立てなるべし

東三條院の御屏風に旅人山の櫻を見る所をよめる　　源道濟

散り果てて後やかへらむふる里も忘られぬべき山ざくらかな

おなじ御時屏風の繪に櫻花多く咲ける所に人々あるをよめる

○たかさご　單に山の事を云つたもの。播州の名所ではない。
○外山　端の山。里に近い山。

○おもひ置くこと　心殘り。

○ぬの衣　布で作つた衣。

○名立て　不面目。

○忘れぬべき　忘られるやうな。

○なににつけて　何によつて。

我がやどに咲きみちにけり櫻花ほかには春もあらじとぞ思ふ

大納言公任花の盛りに來むといひて音づれ侍らざりければ　中務卿具平親王

花もみな散りなむ後は我が宿になににつけてか人を待つべき

後拾遺和歌集　第二

春　下

三月三日桃の花を御覽じて　　花山院御製

三千代へてなりけるものをなどてかは桃としも將名づけ初めけむ

天曆の御時の屛風に桃の花ありける所をよめる　　淸原元輔

あかざらば千代までかざせ桃の花はなも變らじ春も絕えねば

世尊寺の桃の花をよめる　　出羽辨

故鄕の花のものいふ世なりせばいかに昔のことを問はまし

永承五年六月祐子內親王の歌合し侍りけるにこのなかの題を人々よみ侍りけるによめる　　堀河右大臣

櫻花あかぬあまりにおもふかな散らずば人やをしまざらまし

題しらず　　內大臣

惜しめども散りもとまらぬ花ゆゑに春は山べをすみかにぞする

天德四年の歌合に　　平兼盛

○三千代へて云々　西王母が漢の武帝に三千年に一度實のなると云ふ桃を奉つたと云ふ故事によつたもの。

○桃　百に通はせたもの。

○故鄕の花のものいふ云々　桃をものを云はぬ花と云つたのは、史記の「桃李不レ言下自成レ蹊。」によつたのである。

世とともに散らずもあらなむさくら花あかぬ心はいつかたゆべき

大中臣能宣朝臣

さくら花まだきな散りそ何により春をば人のをしむとか知る

屏風の繪に櫻の花の散るを惜しみ顔なる所をよみ侍りける　　源道濟

山里に散り果てぬべき花ゆゑにたれとはなくて人ぞ待たるゝ

大神宮の燒けて侍りける事しるしに伊勢の國に下りて侍りけるにいつき
上り侍りて彼の宮人もなくて櫻いと面白く散りければ立ちとまりてよみ
侍りける　　右大辨通俊

しめ結ひしそのかみならば櫻花惜しまれつゝや今日は散らまし

山路落花をよめる　　橘成元

櫻花みち見えぬまで散りにけりいかゞはすべき志賀の山ごえ

鄰の花をよめる　　坂上定成

さくら散るとなりにいとふ春かぜは花なき宿ぞうれしかりける

花の庭にちり侍りける所にてよめる　　清原元輔

花のかげたたまく惜しきこよひかな錦をさらす庭と見えつゝ

承暦二年の内裏後番の歌合に櫻をよみ侍りける　　藤原通宗朝臣

○まだきな散りそ　早くから散るな。急いで散るな。

○そのかみ　その當時。以前。

○さくら散るとなりに云々　風があるために花のない我が宿にも花が散つて來るので、鄰では厭ふ風も自分の方では嬉しいといふ意。

○たたまく惜しきこよひ　立ち去ると裁ち切るとを通はせたもの。

○心から　自分の心から。心掛けから。

○こゝろと散れる　自分の心で散つた。

惜しむには散りもとまらでさくら花あかぬこゝろぞ常磐なりける

題しらず　　永源法師

心から物をこそおもへ山ざくら尋ねざりせば散るを見ましや

三月ばかりに花のちるを見てよみ侍りける　　土御門御匣殿

うらやましいかなる花か散りにけむ物思ふ身しも世には殘りて

永承五年六月五日祐子内親王の家に歌合し侍るによめる　　大貳三位

吹く風ぞ思へばつらきさくら花こゝろと散れる春しなければ

題しらず　　中納言定頼

年をへて花にこゝろをくだくかな惜しむにとまる春はなけれど

家の櫻の散りて水に流るゝをよめる　　大江嘉言

こゝに來ぬ人も見よとてさくら花みづの心にまかせてぞやる

白河にて花のちりて流れけるをよみ侍りける　　土御門右大臣

行末もせきとゞめばやしら川の水とともにぞ春も行きける

粟田の右大臣の家に人々のこりの花を惜しみ侍りけるによめる　　藤原爲時

おくれても咲くべき花は咲きにけり身を限りとも思ひけるかな

庭に櫻の多く散りて侍りければよめる　　和泉式部

風だにも吹きはらはずば庭櫻ちるともはるのほどは見てまし

藤原義孝

三月ばかりに野の草をよみ侍りける

野邊見れば彌生(やよひ)の月のはつるまでまだうら若きさいたづまかな

和泉式部

躑躅をよめる

岩つゝじ折りもてぞ見るせこが著しくれなゐぞめの色に似たれば

藤原義孝

わぎもこが紅ぞめの色と見てなづさはれぬるいはつゝじかな

大中臣能宣朝臣

月輪といふ所にまかりて元輔惠慶などと共に庭の藤の花をもてあそびてよみ侍りける

藤の花さかりとなれば庭の面におもひもかけぬ浪ぞ立ちける

齋宮女御

題しらず

紫にやしほ染めたるふぢの花いけにはひさすものにぞありける

源爲善朝臣

藤の花をりてかざせばこむらさき我が元結(もとゆひ)のいろやそふらむ

大納言實季

承暦二年の内裏歌合に藤花をよめる

水そこもむらさきふかく見ゆるかな岸の岩根にかゝる藤なみ

○はるのほどは　春の間は。春のうちは。

○さいたづま　いたどり。又春の若草の總稱ともいふ。

○せこ　女から夫又は戀しく思ふ男をさして呼ぶ稱。

○なづさはれぬる　狎れしたしまれる。

○おもひもかけぬ浪　藤浪を云つたもの。

○いけにはひさす　池に灰さす。紫色に染める時に椿の灰を差すから、それによつて云つたもの。

○岩根にかゝる藤なみ　なみの緣でかゝると云つたもの。岩根に咲きかゝつてゐる藤の花。

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるに藤の花をよみ侍りける　讀人しらず

すみの江の松のみどりもむらさきの色にぞかくるきしの藤なみ

題しらず　藤原伊家

道とほし井手へも行かじこの里も八重やは咲かぬ山吹のはな

大貳高遠

沼水に蛙なくなりむべしこそ岸のやまぶきさかりなりけれ

長久二年の弘徽殿の女御の家の歌合に蛙をよめる　良暹法師

みがくれてすだく蛙のもろ聲にさわぎぞわたる井手のうき草

題しらず　藤原長能

聲絶えずさへづれ野邊の百千鳥のこりすくなき春にやはあらぬ

法輪に道命法師の侍りけるとぶらひにまかりわたる夜に呼子鳥のなき侍りければよめる　法圓法師

我ひとり聞くものならば呼子鳥ふた聲までは鳴かせざらまし

三月つごもりに郭公のなくを聞きてよみ侍りける　中納言定頼

ほとゝぎす思ひもかけぬ春なければ今年ぞ待たではつ音聞きつる

○井手　山吹の名所。

○みがくれて　水に隱れて。○すだく　集まる。集まつて鳴く
○もろ聲　もろともに鳴きかはす聲。

○ふた聲までは云々　自分一人で聞くのなら二聲を呼ばせずに、すぐに返事をするのだが、聞く人が多いので誰を呼ぶのかわからぬので自分一人で答へることも出來ない。

三月つごもりの日春を惜しむ心を人々よみ侍りけるによめる　大中臣能宣朝臣

郭公なかずばなかずいかにして暮れゆく春をまたもくはへむ

三月つごもりの日親の墓にまかりてよめる　永胤法師

思ひ出づることのみ繁き野邊に來てまた春にさへ別れぬるかな

○郭公なかずはなかず　郭公鳴かずに居られるなら鳴かないでくれよ、しからは夏が來ぬかも知れぬの意か。

後拾遺和歌集　第三

夏

四月(うづき)ついたちの日よめる　和泉式部

さくらいろにそめし衣をぬぎかへて山ほとゝぎす今日よりぞ待つ

四月一日郭公待つ心をよめる　藤原明衡朝臣

きのふまでをしみし花はわすられて今日は待たるゝ郭公かな

津の國の古曾部(こそべ)といふ所にてよめる　能因法師

我がやどの梢のなつになるときはいこまの山ぞ見えずなりける

冷泉院の東宮と申しける時百首歌奉りける中に　源重之

夏草は結ぶばかりになりにけり野飼ひし駒やあくがれぬらむ

題しらず　曾根好忠

さかきとる卯月になれば神山の楢のはがしはもとつ葉もなし

山里の水鶏(くひな)をよみ侍りける　大中臣輔弘

八重しげる葎(むぐら)の門のいぶせきにさゝずやなにをたゝくくひなぞ

○いこまの山　河内國にある。古曾部とさしむかひにある山。

○楢のはがしは　楢の樹の葉。○もとつ葉　もとの葉。末葉に對するもの。

山里の卯の花をよみ侍りける　藤原通宗朝臣

あとたえて來る人もなき山里にわれのみ見よと咲ける卯のはな

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるに卯の花をよめる　讀人しらず

しらなみの音せで立つとみえつるは卯の花さけるかきねなりけり

題しらず

月影を色にて咲ける卯の花はあけばありあけの心地こそせめ

ある所に歌合し侍りけるに卯の花をよみ侍りける　大中臣能宣朝臣

卯の花の咲けるあたりは時ならぬ雪ふる里のかきねとぞ見る

正子内親王の繪合し侍りけるにかねのさうじにかき侍りける　相摸

見わたせば浪のしがらみかけてけり卯のはな咲ける玉川のさと　伊勢大輔

卯の花の咲ける垣根はしら浪のたつたの川のゐぜきとぞ見る

卯の花をよみ侍りける　源道濟

雪とのみあやまたれつゝ卯の花にふゆごもれりと見ゆる山里

筑紫の大山寺といふ所にて歌合し侍りけるによめる　元慶法師

()月影を色にて咲ける　月影の色を花の色として咲いてゐる。
()あけば　夜が明けたならば。
()しら浪のたつたの川　白浪の立つと、立田の川とをかけたもの。

わがやどのかきねな過ぎそ郭公いづれのさともおなじ卯の花

題しらず　　慶範法師

ほとゝぎすわれは待たでぞこゝろみる思ふことのみたがふ身なれば

四月つごもりの日右近の馬場に郭公きかむとてまかり侍りけるに夜ふくるまで鳴き侍らざりければ　　堀河右大臣

郭公たづぬばかりの名のみして聞かずばさてや宿にかへらむ

道命法師山寺に侍りけるに遣はしける　　藤原尙忠

こゝに我がきかまほしきをあしびきの山郭公いかに鳴くらむ

かへし　　道命法師

あしびきの山ほとゝぎすのみならずおほかた鳥のこゑも聞えず

禖子內親王賀茂のいつきと聞えける時女房にて侍りけるを年へて後三條院の御時齋院に侍りける人のもとに昔を思ひ出でて祭のかへさの日神館(かんたち)に遣はしける　　皇后宮美作

聞かばやなそのかみ山のほとゝぎすありし昔のおなじ聲かと

祭の使して神館に侍りけるに人々多くとぶらひに音なひ侍りけるを大藏卿長房みえ侍らざりければ遣はしける　　備前典侍

○待たでぞこゝろみる　待つてゐても鳴かないから、待たないでゐて鳴くか鳴かぬかをためしてみる

○そのかみ山のほとゝぎす　そのかみと、其の神山とをかけたもの　そのかみは昔の意。

郭公なのりしてこそ知らるなれたづねぬ人に告げややらまし

四月ばかり有馬の湯より歸り侍りて郭公をなむ聞きつると人のいひおこせて侍りければ　大中臣能宣朝臣

聞きすててきみが來にけむほとゝぎすたづねにわれは山路こえ見む

いにしへを戀ふる事侍りける頃田舍にて郭公を聞きてよめる　増基法師

この頃は寢てのみぞ待つ郭公しばしみやこのものがたりせよ

題しらず　橘資成

よひのまはまどろみなまし郭公あけて來鳴くとかねて知りせば

永承五年六月五日祐子内親王の家の歌合によめる　伊勢大輔

聞きつとも聞かずともなく郭公こゝろまどはすさ夜のひと聲

能因法師

夜だにあけばたづねて聞かむ郭公しのだの杜のかたに鳴くなり

藤原兼房朝臣

夏の夜はさてもや寢ぬと郭公ふたこゑ聞ける人に問はばや

小辨

寢ぬ夜こそかずつもりぬれ郭公きくほどもなき一こゑにより

○よひのまは云々　終夜待ちあかして、夜が明けた後にはじめて聲をきいて詠んだもの。

○聞きつとも聞かずともなく　聞いたとも聞かなかつたとも、はつきりしない。

○しのだの杜　和泉國にある。

○月だにあれや　月だにあれかしと願ふ意。

○おいその杜　近江國にある。

○聞きつるや初音なるらし　今聞いたのが初音であるらしい。

○まつほどとこそおもひつれ　待つてゐる間だけ寐ないでゐようと思つたのに。

○とりどころ　とりえ。よいところ。

祐子内親王の家に歌合など果てて後人々おなじ題をよみ侍りける　宇治前太政大臣

ありあけの月だにあれや郭公たゞひとこゑの行くかたも見む

宇治前太政大臣三十講の後歌合し侍りけるに郭公をよめる　赤染衛門

鳴かぬ夜もなく夜もさらに郭公待つとてやすきいやは寢らるゝ

夜もすがら待ちつるものを郭公又だに鳴かで過ぎぬなるかな

相摸守にて上り侍りける夜おいその杜(もり)のもとにて郭公を聞きてよめる　大江公資朝臣

あづまぢのおもひ出にせむ郭公おいそのもりの夜はのひとこゑ

郭公を聞きてよめる　法橋忠命

聞きつるや初音なるらし郭公おいは寐ざめぞうれしかりける

長保五年五月十五日入道前太政大臣の家の歌合に遙聞二郭公一といふ心をよめる　大江嘉言

いづかたと聞きだにわかず郭公たゞひと聲のこゝろまどひに

五月ばかり赤染がもとにつかはしける　道命法師

郭公まつほどとこそおもひつれ聞きての後も寐られざりけり

ほとゝぎす夜深き聲をきくのみぞ物おもふ人のとりどころなる

○御かしこまり　御咎め。御勘當
○ともになく身　わが身も郭公と共に泣く身。
○しるからば　はつきりとわかるならば。
○寝てのみや云々　郭公の鳴く聲を聞かれぬといふ人は、寝て待つから眠つてしまつて聞かれないのであらう。
○みたや守　御田舎守。田を守つてゐるもの。
○みづのみ牧　美豆の御牧。山城國淀の邊にある。

おほやけの御かしこまりにて山寺に侍りけるに郭公を聞きてよめる

律師長濟

一こゑも聞きがたかりし郭公ともになく身となりにけるかな

郭公をよめる

能因法師

郭公きなかぬよひのしるからばぬる夜もひと夜あらましものを

大貳三位

待たぬ夜も待つ夜も聞きつ郭公花たちばなのにほふあたりは

小辨

寝てのみや人は待つらむほとゝぎす物思ふやどは聞かぬ夜ぞなき

早苗をよめる

曾根好忠

みたや守けふは五月(さつき)になりにけりいそげや早苗老いもこそすれ

永承六年五月殿上の根合に早苗をよめる

藤原隆資

さみだれに日も暮れぬめり道遠み山田の早苗とりも果てぬに

宇治前太政大臣の家に三十講の後歌合し侍りけるに五月雨をよめる

相摸

五月雨はみづのみ牧の眞菰草(まこもぐさ)刈りほすひまもあらじとぞ思ふ

宮内卿經長が桂の山莊にて五月雨をよみ侍りける　藤原範永朝臣

五月雨は見えし小笹のはらもなしあさかの沼の心地のみして

橘俊綱朝臣

つれ〴〵と音たえせぬは五月雨の軒の菖蒲(あやめ)のしづくなりけり

題しらず　叡覺法師

五月雨のをやむ景色の見えぬかなにはたづみのみ數まさりつゝ

五月五日はじめたる所にまかりてよみ侍りける　惠慶法師

香をとめて訪ふ人あるを菖蒲草あやしく駒のすさめざりけり

永承六年五月五日殿上の根合によめる　良暹法師

筑摩江(つくまえ)の底の深さをよそながら引けるあやめの根にて知るかな

右大臣中將に侍りける時歌合し侍りけるによめる　大中臣輔弘

ねやの上に根ざしとゞめよ菖蒲草たづねて引くも同じよどのを

年頃すみ侍りける所はなれて外にわたりて又の年の五月五日よめる　伊勢大輔

けふもけふ菖蒲も菖蒲かはらぬに宿こそありし宿とおぼえね

花橘をよめる　相摸

○にはたづみ　雨が地上にたまつて流れるもの。

○筑摩江　近江國にある。

○よどの　菖蒲草の名所淀野と、ねやの夜殿とをかけたもの。

五月雨の空なつかしくにほふかな花たちばなに風や吹くらむ　大貳高遠

むかしをば花たちばなのなかりせば何につけてかおもひ出でまし　源重之

螢をよみ侍りける　源重之

音もせでおもひにもゆる螢こそなく蟲よりもあはれなりけれ

宇治前太政大臣三十講の後歌合し侍りけるに螢をよめる　藤原良經朝臣

澤水に空なる星のうつるかと見ゆるは夜半のほたるなりけり

題しらず　能因法師

ひとへなる蟬の羽衣夏はなほうすしといへどあつくぞありける　源重之

夏がりの玉江の蘆をふみしだき羣れゐる鳥の立つそらぞなき　曾根好忠

なつごろもたつた河原の柳かげすゞみに來つゝならすころかな　源賴實

氷室(ひむろ)をよめる

夏の日になるまで消えぬ冬ごほり春立つ風やよきて吹くらむ　土御門右大臣

夏の夜の月といふ心をよみ侍りける

○音もせで　聲も立てずに。

○うすしといへど云々　うすしにあつくを對照したもの。蟬の羽衣はうすいが、夏の事故暑い。

○夏がりの云々　蘆は夏に刈り取るものである。

夏の夜の月はほどなく入りぬともやどれる水にかげはとめなむ　大貳資通

何をかは明くるしるしとおもふべき晝にかはらぬ夏の夜の月

宇治前太政大臣の家に三十講の後歌合し侍りけるによみ侍りける　民部卿長家

夏の夜もすゞしかりけり月影はにはしろたへの霜と見えつゝ　中納言定頼

とこなつのにほへる庭はからくにに織れる錦もしかじとぞ見る

道濟が家にて雨の夜とこなつを思ふといふ心をよめる　能因法師

いかならむ今宵の雨にとこなつの今朝だにつゆのおもげなりつる

題しらず　曾根好忠

來て見よと妹が家路に告げやらむわれひとり寢るとこなつの花　平兼盛

夏ふかくなりぞしにける大あらきのもりの下草なべて人刈る

夏の夜涼しき心をよみ侍りける　堀河右大臣

ほどもなく夏のすゞしくなりぬるは人に知られで秋や來ぬらむ

くれの夏有明の月をよめる　內大臣

○からくにに織れる錦　唐錦。

○われひとり寢るとこなつの花　ひとり、寢る牀と常夏の花とをかけたもの。

○くれの夏　晩夏。

夏の夜のありあけの月を見るほどに秋をも待たでかぜぞすゞしき

俊綱朝臣の許にて晩涼如レ秋といふ心をよみ侍りける　源頼綱朝臣

夏山のならの葉そよぐ夕ぐれはことしも秋のこゝちこそすれ

屏風の繪に夏の末に小倉の山のかたかきたるところをよめる　大中臣能宣朝臣

紅葉せばあかくなりなむ小倉山秋まつほどの名にこそありけれ

泉の聲夜に入りて涼しといふ心をよみ侍りける　源師賢朝臣

さ夜ふかき岩井の水の音聞けばむすばぬ袖もすゞしかりけり

六月(みなづき)ばらへをよめる　伊勢大輔

水上もあらぶる心あらじかしなみもなごしのみそぎしつれば

○小倉山　山の名に小暗をかけたもの。
○秋まつ程　秋になるのをまつ間
○水上も　水上に、皆神を通はせたもの。
○なごしのみそぎ　浪も和しと、夏越の御禊とをかけたもの。夏越の禊は六月晦日の大祓をいふ。

後拾遺和歌集 第四

秋　上

秋立つ日よめる　　讀人しらず

うちつけに袂すゞしくおぼゆるはころもに秋はきたるなりけり

恵慶法師

あさぢ原玉まく葛のうら風のうらがなしかるあきは來にけり

扇の歌よみ侍りけるに　　藤原爲賴朝臣

大かたの秋くるからに身にちかくならすあふぎの風ぞかはれる

七月六日によめる　　小辨

一とせの過ぎつるよりも棚機の今宵をいかにあかしかぬらむ

七月七日庚申にあたりて侍りけるによめる　　大江佐經

いとゞしくつゆけかるらむたなばたの寢ぬ夜にあへる天の羽衣

七月七日よめる　　小左近

棚機はあさひく絲の亂れつゝとくとや今日のくれを待つらむ

○うちつけに　俄に。ふと。さしあてて。
○ころもに秋はきたるなりけり　衣に秋を著ると、秋は來たとをかけたもの。
○うらがなし　心がなしい。

○寢ぬ夜にあへる　庚申の夜に寢ると三尸と云つて惡い蟲が身中に入ると云ふので、寢ないで明すから斯く云つたのである。
○とくとや　絲の亂れを解くと、疾くとをかけたもの。

○牛女　牽牛と織女。

○なぬかなりせば　下に、どんなに嬉しからうと云ふ意の詞を省畧したもの。

○今日のことかけてもいはじ　棚機は一年に一度逢ふものであるから、口に出して言ふまいと云つたのである。

七月七日宇治前太政大臣賀陽院の家にて人々酒などたらべて遊びけるに憶ニ牛女ニ言レ志こゝろをよみ侍りける　堀河右大臣

たなばたは雲の衣を引きかさねかへさで寢るや今宵なるらむ

七月七日かぢの葉にかきつけ侍りける　上總乳母

天の河とわたる船のかぢの葉におもふことをもかきつくるかな

長能が家にて七夕をよめる　能因法師

秋の夜をながきものとは星合(ほしあひ)のかげ見ぬ人のいふにぞありける

七月七日よめる　橘元任

棚機の逢ふ夜の數のわびつゝも來る月毎のなぬかなりせば

右大將通房

待ちえたる一夜ばかりを棚機の逢ひ見ぬ程とおもはましかば

七月七日男の今日のことかけてもいはじなどいみ侍りけるに忘られにければゆきあひの空を見てよみ侍りける　新左衞門

忘れにし人に見せばや天の河いまれしほしのこゝろながさを

七月七日風などいたく吹きて齋院に七夕祭などとまりて八日まであるべきにあらずとて祭り侍りけるによめる　小辨

たまさかに逢ふことよりも棚機はけふ祭るをやめづらしと見る　藤原家經朝臣

居易初到二香山一心をよみ侍りける

急ぎつゝわれこそ來つれ山里にいつよりすめる秋の月ぞも　左近中將公實

客依レ月來といふ心を上のをのこどもよみ侍りけるによめる

わすれにし人も訪ひけり秋の夜は月でばとこそ待つべかりけれ　大貳高遠

花山院東宮と申しける時閑院におはしまして秋月をもてあそび給ひけるによみ侍りける

秋の夜の月見に出でて夜はふけぬ我も有明のいらであかさむ　平兼盛

三條太政大臣左右にかたわきて前裁うゑ侍りて歌に心えたるもの十六人を選びて歌よみ侍りけるに水上の秋月といふ心をよみ侍りける

にごりなく千世をかぞへてすむ水に光を添ふる秋の夜のつき　源爲善朝臣

土御門右大臣の家に歌合し侍りけるに秋月をよめる

大空の月のひかりしあかければ槇のいた戸もあきはさされず　惠慶法師

河原院にてよみ侍りける

すだきけむむかしの人もなき宿にたゞかげするは秋の夜の月　永源法師

題しらず

○居易　唐の詩人白居易。

○月でばとこそ　月が出たならばと。

○かたわきて　わけて。

○すだきけむ　集まつたゞらう。

身をつめばいるも惜しまじ秋の月山のあなたの人も待つらむ

藏人になりての秋南殿の月をもてあそびてよめる　源道濟

よそなりし雲の上にて見るときも秋の月には飽かずぞありける

寛和元年八月十日內裏歌合によみ侍りける　藤原長能

いつも見る月ぞと思へど秋の夜はいかなる影を添ふるなるらむ

八月ばかり月雲がくれけるをよめる　前大納言公任

すむとてもいくよもあらじ世の中に曇りがちなる秋の夜の月

廣澤の月を見てよめる　藤原範永朝臣

住むひともなき山里のあきの夜は月の光もさびしかりけり

山里に侍りけるに人々まうで來て歸り侍りけるによめる　素意法師

訪ふ人も暮るればかへる山里にもろともにすむ秋の夜の月

題しらず　藤原國行

白妙のころものそでを霜かとてはらへば月のひかりなりけり

八月十五日夜によめる　惟宗爲經

いにしへの月かかりせば葛城（かづらき）の神はよるともちぎらざらまし

堀河右大臣

○すむとても　住むと澄むとを通はせたもの。

○よるともちぎらざらまし　夜を契ることもなかつたらう。葛城の神は一言主の神で、容貌が醜くかつたといふ。

夜もすがら空すむ月を眺むれば秋はあくるも知られざりけり　藤原隆成

うきまゝに厭ひし身こそ惜しまるれあればぞ見ける秋の夜の月　赤染衞門

題しらず

今宵こそ世にある人はゆかしけれいづこもかくや月を見るらむ　讀人しらず

或人云く賀陽院にて八月十五夜月おもしろく侍りけるに宇治前太政大臣歌よめと侍りければ光源法師よみ侍りけるといへり

秋もあき今宵もこよひ月も月ところもところ見るきみもきみ

いろ〳〵の花のひもとく夕ぐれに千世まつ蟲のこゑぞきこゆる　清原元輔

鈴蟲の聲を聞きてよめる　大江公資朝臣

とやかへり我が手ならししはし鷹のくるときこゆる鈴蟲の聲　前大納言公任

年經ぬる秋にもあかず鈴蟲のふり行くまゝにこゑのまされば　四條中宮

かへし

○うきまゝに云々　憂くつらいので身をいたづらに思つたが。○あればぞ見ける　命があるからこそ見た。

○花のひもとく　花の開く。

○とやかへり　鷹が羽のぬけかはる夏の末から冬の初めにかけて鳥屋に居ること。

○ふり行く　古りゆく。

たづね來る人もあらなむとしを經て我がふるさとの鈴蟲のこゑ

長恨歌の繪に玄宗もとの所にかへりて蟲ども鳴き草も枯れわたりて帝歎き給へるかたある所をよめる　道命法師

故里は淺茅がはらとあれはてて夜すがら蟲のねをのみぞ鳴く

題しらず　平盛

淺茅生のあきの夕ぐれなく蟲は我がごとしたにものやかなしき　大江匡衡朝臣

秋風にこゑよわりゆく鈴蟲のつひにはいかゞならむとすらむ　曾根好忠

鳴けや鳴け蓬が杣のきり〴〵す過ぎゆく秋はげにぞかなしき

寛和元年八月十日内裏歌合によめる　藤原長能

わぎもこがかけて待つらむ玉づさをかきつらねたる初鴈のこゑ

久しくわづらひける頃鴈の鳴きけるを聞きてよめる　赤染衛門

起きもゐぬ我がとこよこそ悲しけれ春かへりにし鴈も鳴くなり

後冷泉院の御時后の宮の歌合によめる　伊勢大輔

小夜ふかく旅のそらにて鳴く鴈はおのが羽風や夜寒なるらむ

○したにものやかなしき　心の中に悲しい事でもあるのか。

○蓬が杣　蓬のおひしげつてゐる所。

○我がとこよ　わが牀とやが常世とをかけたもの　常世は常にかはらぬこと。常に寢たまゝでゐること。

八月ばかりに殿上のをのこ共を召して歌よませさせ給ひけるに旅中聞レ鴈といふ心を　御製

さしてゆく道もわすれて鴈がねの聞ゆるかたに心をぞやる

八月駒むかへをよめる　良暹法師

あふさかの關の杉むらひくほどはをぶちに見ゆる望月のこま

源緣法師

みちのくのあだちの駒はなづめどもけふ逢坂のせきまでは來(き)ぬ

屏風の繪に駒迎へしたる所をよみ侍りける　惠慶法師

望月の駒ひくときはあふ坂の木の下やみも見えずぞありける

禪林寺に人々まかりて山家秋晩といふ心をよみ侍りける　源頼家朝臣

暮れ行けばあさぢが原の蟲の音も尾上の鹿もこゑ立てつなり

公基朝臣丹後守にて侍りける時國にて歌合し侍りけるによめる　涼

鹿の音にあきを知るかなたかさごのをのへの松はみどりなれども

萩盛待レ鹿といふ心を　御製

かひもなき心地こそすれさを鹿のたつ聲もせぬ萩のにしきは

山里に鹿を聞きてよめる　大中臣能宣朝臣

○さしてゆく道　自分の目的地。

○をぶちに見ゆる　小斑に見える意。杉むらをもれる望月の影がうつるので、まだらに見える。併せて陸奥の尾駮の牧の名を含めたもの。

○なづめども　進み煩ふが。

○かひもなき心地　甲斐なしに、鹿の鳴聲かひよをかけたもので、聲もせぬからかひもなきと云つたのである。

○さを鹿のたつ聲もせぬ　鹿の出て鳴く聲もせぬ。萩のにしきの緣語としてたつと云つたもの。

○しがらみふする　しがらみとしてふせる。しがらみは水を防ぐために杙を打つて横に竹や木を編みわたしたもの。

○秋はなほ　秋はやはり。

○やがて　すぐそのまゝ。

○本あらの萩　もとの方がまばらになつてゐる萩。

○小野の草ぶし　野の草に寢ること。

秋萩の咲くにしもなど鹿の鳴くうつろふ花はおのがつまかも

土御門右大臣の家の歌合によみ侍りける　　源爲善朝臣

秋萩をしがらみふする鹿の音をねたきものからまづぞ聞きつる

題しらず　　安法法師

まがきなる萩の下葉のいろを見て思ひやりつる鹿ぞなくなる

能因法師

秋はなほ我が身ならねどたかさごのをのへの鹿も妻ぞ戀ふらし

夜宿㆓野亭㆒といふ心をよめる　　叡覺法師

今宵こそ鹿の音近くきこゆなれやがてかきねは秋の野なれば

題しらず　　藤原長能

宮城野に妻とふ鹿ぞさけぶなる本あらの萩に露やさむけき

祐子内親王の家の歌合によみ侍りける　　大貳三位

あきぎりの晴れせぬ峯に立つ鹿はこゑばかりこそ人に知らるれ

藤原家經朝臣

鹿の音ぞねざめの牀にきこゆなる小野の草ぶし露や置くらむ

江侍從

をぐら山たちども見えぬ夕ぎりに妻まどはせるしかぞ鳴くなる　和泉式部

題しらず　天台座主源心

晴れずのみ物ぞかなしき秋霧は心のうちに立つにやあるらむ

のこりなき命を惜しと思ふかなやどの秋はぎ散りはつるまで　伊勢大輔

物思ふ事ありける頃萩を見てよめる　能因法師

起きあかし見つゝながむる萩の上の露ふきみだる秋の夜の風

みなとといふ所を過ぐとてよめる

思ふことなけれど濡れぬ我が袖はうたゝある野べの萩の露かな　新左衞門

萩のねたるに露の置きたるを人々よみ侍りけるによめる

まだ宵にねたる萩かな同じ枝にやがて置きぬる露もこそあれ　中納言女王

おなじ心をよみ侍りける

人知れずものをやおもふ秋はぎのねたるがほにて露ぞこぼるゝ　和泉式部

八月つごもりに萩の枝につけて人の許に遣はしける

限りあらむ中ははかなくなりぬとも露けき萩のうへをだにとへ

はらからなる人の家に住み侍りける頃萩のをかしう咲きて侍りけるを家

○たちど　立つ處。ゐる場所。
○晴れずのみ　氣がはれないで。
○のこりなき命　今にも死なうとしてゐる命。
○ねたる萩　倒れた萩と、寢た萩とをかけたもの。
○置きぬる　置くと、起きるとをかけたもの。

あるじは外に侍りて音せざりければいひ遣はしける　　筑前乳母

しら露もこゝろおきてや思ふらむぬしもたづねぬ宿の秋はぎ

家の萩を人のこひ侍りければよめる　　橘則長

おく露にたわむ枝だにあるものをいかでか折らむやどのあき萩

題しらず　　源時綱

君なくて荒れたるやどのあさぢふにうづら鳴くなり秋のゆふ暮

藤原通宗朝臣

秋風にした葉やさむくなりぬらむ小萩が原にうづら鳴くなり

草むらの露をよみ侍りける　　藤原範永朝臣

けさ来つる野原の露にわれ濡れぬうつりやしぬる萩が花ずり

世をそむきて後いはれ野といふ所を過ぎ侍りてよめる　　素意法師

いはれ野の萩のあさ露わけ行けばこひせし袖のこゝちこそすれ

題しらず　　藤原長能

さゝがにの巣がくあさぢの末ごとにみだれてぬける白露の玉

寛和元年八月七日内裏の歌合によみ侍りける　　橘為義朝臣

いかにして玉にもぬかむ夕されば萩の葉分にむすぶしらつゆ

○うつりやしぬる萩が花ずり　萩の花を摺つた衣の色がさめたらうか。

○世をそむきて　世をのがれて。出家して。

○巣がく　蜘蛛が巣をかける。

○まくり手　袖をまくること。

○露ことならぬ　露と少しも異ならぬ。

○前栽ほりに　庭園の植木を掘りに。

○うしろめたくも　不安心に。氣がゝりに。こゝろもとなく。

○すまふ　負けまいとして爭ふ。をれじとすまふと云ふのは、まゝになるまいとしてこばむこと。

○かりぞ暮れぬる　狩をして日が暮れた。

題しらず　　良暹法師

袖ふれば露こぼれけり秋の野はまくり手にてぞ行くべかりける

土御門右大臣の家の歌合によめる　　源親範

秋の野は折るべき花もなかりけりこぼれて消えむ露の惜しさに

秋前栽のなかにおりゐて酒たうべて世の中の常なき事などいひてよめる　　大中臣能宣朝臣

草の上におきてぞあかす秋の夜の露ことならぬ我が身と思へば

人の家の水のほとりに女郎花の侍りけるをよみ侍りける　　堀河右大臣

をみなへし影をうつせばこゝろなき水も色なるものにぞありける

上のをのこども前栽ほりに野邊に罷り出でたりけるに遣はしける　　橘則長

女郎花多かる野邊に今日しもあれうしろめたくも思ひやるかな

題しらず　　前律師慶暹

秋風にをれじとすまふ女郎花いくたび野べにおきふしぬらむ

天暦の御時の御屏風に小鷹狩する野に旅人のやどれる所をよめる　　清原元輔

秋の野にかりぞ暮れぬる女郎花こよひばかりの宿もかさなむ

毎レ家有レ秋といふ心を　　御製

宿ごとにおなじ野べをやうつすらむおもがはりせぬ女郎花かな

題しらず　　源道濟

よそにのみ見つゝは行かじ女郎花をらむ袂はつゆに濡るとも

朝顏をよめる　　和泉式部

ありとてもたのむべきかは世の中を知らするものはあさがほの花

題しらず　　源道濟

いとゞしくなぐさめがたき夕暮に秋とおぼゆる風ぞ吹くなる

村上の御時八月ばかりうへ久しう渡らせ給はでしのびて渡らせ給ひけるを知らず顏にて琴ひき侍りける　　齋宮女御

さらでだにあやしきほどの夕暮に荻ふく風のおとぞきこゆる

土御門右大臣の家に歌合し侍りけるに秋風をよめる　　讀人しらず

荻の葉に吹きすぎて行く秋風のまた誰がさとにおどろかすらむ

資良朝臣音し侍らざりければ遣はしける　　三條小右近

さりともとおもひし人はおともせで荻の上葉に風ぞ吹くなる

こむと頼めて侍りける友だちの待てど來ざりければ秋風涼しかりける夜ひとりうちゐて侍りける　　僧都實誓

○ありとても　世に生きながらへて居るといつても。

○さりともと　さうはいつてもいつかは來ることはあらうと。○おともせで　訪れもせず。

荻の葉に人だのめなる風の音を我が身にしめてあかしつるかな

花山院の歌合せさせ給はむとしけるに留まり侍りにけれど歌をば奉りけるに秋風をよめる　　藤原長能

荻風もやゝ吹きそむる聲すなりあはれ秋こそふかくなるらし

山里の霧をよめる　　大納言經信母

あけぬるか川瀬の霧のたえ〴〵にをちかた人のそでの見ゆるは

土御門右大臣の家の歌合によめる　　藤原經衡

さだめなき風の吹かずば花すゝきこゝろとなびくかたは見てまし

野の花をもてあそぶといふ心をよみ侍りける　　源師賢朝臣

さらでだに心のとまる秋の野にいとゞもまねく花すゝきかな

天暦の御時の御屏風に八月十五夜前栽うゑたる所をよめる　　清原元輔

今年より植ゑはじめたる我がやどの花はいづれの秋か見ざらむ

桂にまかりて水邊秋花をよめる　　大中臣能宣朝臣

水のいろに花のにほひを今日そへて千歳の秋のためしとぞ見る

庭移二秋花一といふ心を　　關白前左大臣

我が宿に秋の野べをばうつせりと花見に行かむ人に告げばや

○人だのめ　たのみに思はせるだけで、その實のないこと。

○たえ〴〵に　絶間から。

○こゝろとなびく　自分の心としてなびく。心からなびく。

○かゝらぬ花の云々　どんな花にも思ふ心をかけるから、その心を露と見たてたものである。

○野べとなしつる　わが宿を野べとしたといふ意。

○あからさまに　かりそめに。しばらく。

思二野花一といふ心をよめる　　良暹法師

あさ夕に思ふこゝろは露なれやかゝらぬ花のうへしなければ

橘義清が家に歌合し侍りけるに庭に秋の花をつくすといふ心をよめる　　源頼家朝臣

我が宿に千草の花を植ゑつれば鹿の音のみや野べにのこらむ

源頼實

我が宿に花を殘さずうつし植ゑて鹿の音きかぬ野べとなしつる

題しらず　　良暹法師

さびしさに宿を立ち出でて眺むればいづくもおなじ秋の夕ぐれ

山里にあからさまにまかりて侍りけるに物思ふころにて侍りければ　　和泉式部

何しかは人も來て見むいとゞしくものおもひまさる秋の山ざと

後拾遺和歌集 第五

秋　下

永承四年内裏の歌合に擣衣をよみ侍りける　中納言資綱

から衣ながき夜すがらうつ聲にわれさへ寐でも明しつるかな

伊勢大輔

さ夜ふけて衣しで打つこゑ聞けばいそがぬ人も寐られざりけり

藤原兼房朝臣

うたゝねに夜やふけぬらむから衣うつ聲たかくなりまさるなり

花山院歌よませ給ひけるによみ侍りける　藤原長能

菅の根の長々してふあきの夜は月見ぬ人のいふにぞありける

選子内親王いつきと聞えける時九月の十日あまりに曉近うなるまで人々眺むるにきしかた行末もかかる夜はあらじなどいひてよみ侍りける　齋院中務

月はよしはげしき風の音さへぞ身にしむばかり秋はかなしき

○衣しで打つ　衣をしげくうつ。

○菅の根の　ながしにかけて云ふ枕詞。

○きしかた行末　今までにもこれからさきにも。

○しづの松がき　賤の松垣。賤の住む家の松の垣。○ひまをあらみ　間がすいてゐるので。

○はゝその杜のうすくこからむ　柞の杜の紅葉に薄いのと濃いのとがあるのだらう。

○秋のほど　秋の深くなつた事。

○車おさへて　車を停めて。

山家秋風といふ心をよめる　　大宮越前

山里のしづの松がきひまをあらみいたくな吹きそ木枯のかぜ

題しらず　　源道濟

見わたせば紅葉しにけりやま里にねたくぞ今日は一人きにける

永承四年内裏の歌合に　　堀河右大臣

いかなれば同じ時雨に紅葉するはゝその杜のうすくこからむ

宇治にて人々紅葉をもてあそぶ心をよみ侍りけるによめる　　藤原經衡

日を經つゝ深くなり行くもみぢ葉の色にぞ秋のほどは知らるゝ

長樂寺に住み侍りける頃人のもとより此の頃は何事かととぶらひ侍りければよめる　　上東門院中將

この頃は木々のこずゑにもみぢして鹿こそは鳴け秋の山ざと

屏風の繪に車おさへて紅葉見る所をよめる　　藤原兼房朝臣

ふるさとはまだ遠けれどもみぢ葉のいろに心のとまりぬるかな

紅葉猶色あさしといふ心を今上よませ給ふついでに奉り侍りける　　右大辨通俊

如何なれば船木の山のもみぢ葉の秋は過ぐれどこがれざるらむ

西の京に住み侍りける人の身まかりて後まがきの菊を見てよめる　　惠慶法師

植ゑ置きしあるじはなくて菊の花おのれひとりぞ露けかりける

中納言定賴かれ〲になり侍りけるに菊の花にさして遣はしける　　大貳三位

つらからむ方こそあらめ君ならでたれにか見せむ白菊のはな

上東門院菊合せさせ給ひけるに左の頭つかうまつるとてよめる　　伊勢大輔

目もかれず見つゝくらさむしら菊の花よりのちの花しなければ

藤原義忠朝臣

紫にやしほ染めたるきくの花うつろふ色とたれかいひけむ

後冷泉院の御時后宮にて人々翫二庭菊一題にてよみ侍りける　　大藏卿長房

朝まだき八重さく菊の九重に見ゆるはしもの置けるなりけり

菊の花おもしろき所ありと聞きて見にまかりける人のおそく歸りければ遣はしける　　赤染衞門

きくにだに心はうつる花のいろを見にゆく人は歸りしもせじ

天曆の御時の御屛風に菊をもてあそぶ家ある所をよめる　　清原元輔

うすくこく色ぞ見えける菊の花露やこゝろのわきて置くらむ

屛風の繪に菊の花さきたる家に鷹すゑたる人宿かる所をよめる　　大中臣能宣朝臣

かりにこむ人に折らるな菊の花うつろひ果てむすゑまでも見む

○左の頭　菊合の時左右に分れた左座の方の上席。
○目もかれず　目も離さず。

○やしほ染めたる　八入染めた。幾度も〱染めて色濃くした。

○きくにだに　菊に聞くをかけたもの。

○かりにこむ人　狩りに來む人と假に來む人とをかけたもの。
○折らるな　手折られるな。いひよられるな。

いもうとに侍りける人の許に男こずなりにければ九月ばかりに菊のうつろひて侍りけるを見てよめる　良暹法師

白菊のうつろひ行くぞあはれなるかくしつゝこそ人もかれしか

相撲公資に忘られて後かれが家にまかれりけるにうつろひたる菊の侍りければよめる　藤原經衡

植ゑおきし人の心はしら菊のはなよりさきにうつろひにけり

五條なる所に渡りて住み侍りけるにをさなき子どもの菊を翫び侍りければよめる　中納言定頼

我のみやかかると思へばふるさとのまがきの菊もうつろひにけり

永承四年内裏歌合に殘菊をよめる　中納言資綱

むらさきに移ろひにしを置く霜のなほ白菊と見するなりけり

寛仁二年正月入道前太政大臣大饗（だいきやう）し侍りける屛風に山里の紅葉みる人きたる所をよめる　前大納言公任

山里の紅葉見にとや思ふらむ散りはててこそ問ふべかりけれ

屛風の繪に山里に男女木の下に紅葉もてあそぶ所をよめる　平兼盛

唐にしき色みえまがふもみぢ葉の散る木のもとはたちうかりけり

○人もかれしか　枯れると離れるとをかけたもの。

○植ゑおきし人の心　人は公資をさしたもの。

○紅葉見にとや思ふらむ　紅葉を見に來たと思ふであらう。

○たちうかりけり　立ち去りにくい。唐錦の縁で裁つといふ意を含めたもの。

山里にまかりてよみ侍りける　　清原元輔

紅葉ちるころなりけりな山里のことぞともなく袖の濡るゝは

月前落葉といふ心を　　御製

もみぢ葉の雨と降るなる木の間よりあやなく月のかげぞ洩れくる

落葉道を隠すといふ心をよめる　　法印清成

紅葉ちる秋のやまべはしらかしの下ばかりこそ道は見えけれ

故式部卿のみこ大井河にまかれりけるに紅葉をよめる　　堀河右大臣

みなかみにもみぢ流れて大井がはむらごに見ゆる瀧のしらいと

大井河にてよみ侍りける　　中納言定頼

水もなく見えこそわたれ大井がはきしのもみぢは雨と降れども

永承四年内裏歌合によめる　　能因法師

あらし吹くみむろの山のもみぢ葉はたつ田の川の錦なりけり

題しらず　　藤原範永朝臣

見しよりも荒れぞしにける石(いそ)の上(かみ)秋は時雨の降りまさりつゝ

後冷泉院の御時后の宮の歌合によめる　　伊勢大輔

秋の夜は山田のいほにいなづまの光のみこそもりあかしけれ

○ことぞともなく　何といふこともなく。

○あやなく　道理なくも。

○むらご　斑に濃く染めてある色纈に紅葉の流れるさまを云つたもの。

○もりあかしけれ　漏り明かすと守り明かすとをかけたもの。

師賢朝臣梅津の山莊にて田家秋風といふ心をよめる　源頼家朝臣

宿ちかき山田のひたに手もかけで吹くあき風にまかせてぞ見る

土御門右大臣の家の歌合に秋の田をよめる　相模

あきの田になみよるいねは山川の水ひきかけし早苗なりけり

題しらず　源頼綱朝臣

夕日さすすそ野のすゝきかたよりに招くや秋をおくるなるらむ

九月盡日惜レ秋心をよみ侍りける　藤原範永朝臣

あすよりはいとゞ時雨や降りそはむ暮れゆく秋ををしむ袂に

九月盡日終夜惜レ秋心をよめる

明けはてば野邊をまづ見む花すゝきまねくけしきは秋にかはらじ

九月盡日よみ侍りける　法眼源賢

秋はたゞ今日ばかりぞと眺むれば夕暮にさへなりにけるかな

九月盡日伊勢大輔がもとに遣はしける　大貳資通

年つもる人こそいとゞ惜しまるれ今日ばかりなる秋の夕ぐれ

九月晦夜よみ侍りける　源兼長

夜もすがら眺めてだにも慰まむ明けて見るべき秋のそらかは

○山田のひたに手もかけで　ひたは引板。引板に手をかけて引き鳴らすこともなく。

○明けはてば　夜がすつかり明けてしまつたならば。

○今日ばかり　今日限り。

後拾遺和歌集　第六

冬

十月のついたちに上のをのこども大井河にまかりて歌よみ侍りけるによめる　前大納言公任

落ちつもる紅葉を見れば大井河ゐせきに秋もとまるなりけり

十月朔日ごろ紅葉の散るをよめる　大僧正深覺

手向にもすべき紅葉のにしきこそ神無月にはかひなかりけれ

承保三年十月今上みかりのついでに大井河にみゆきせさせ給ふによませ給へる　御製

大井河ふるきながれをたづね來てあらしの山の紅葉をぞ見る

桂の山荘にて時雨のいたうふり侍りければよめる　藤原兼房朝臣

哀れにもたえずおとする時雨かな問ふべき人もとはぬすみかを

山里の時雨をよみ侍りける　永胤法師

神無月ふかくなり行くこずゑよりしぐれて渡るみ山べのさと

○ゐせき　井堰。水が溜れる時には閉ぢ、溢れる時には開くもの。

○神無月には云々　神が居られぬ月の意を含めたもの。

○たえずおとする　絶えず音がするにおとづれる意を含めたもの。

○聞きわく　聞きわける。

○紅葉こきまぜよる氷魚　紅葉とまじつて寄り來る氷魚。

○こぼたれたるを　こはされたのを。

○ひをばくらさむ　日を暮さうと云ふのに、氷魚をかけたもの、氷魚は宇治川の名物である。

落葉如レ雨といふ事をよめる　源頼實

木の葉ちる宿は聞きわく事ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

藤原家經朝臣

紅葉ちるおとは時雨のこゝちしてこずゑの空はくもらざりけり

十月ばかり山里に夜とまりてよめる　能因法師

神無月ねざめに聞けば山里のあらしのこゑは木の葉なりけり

宇治にて網代をよみ侍りける　橘義通朝臣

網代木に紅葉こきまぜよる氷魚は錦をあらふこゝちこそすれ

宇治にまかりて網代のこぼたれたるを見てよめる　中宮内侍

うぢ河の早く網代はなかりけり何によりてかひをばくらさむ

俊綱朝臣の讃岐にてあや川の千鳥をよみ侍りけるによめる　藤原孝善

霧はれぬあやの河べになく千鳥こゑにや友の行くかたをしる

永承四年内裏の歌合に千鳥をよみ侍りける　堀河右大臣

佐保川の霧のあなたに鳴く千鳥聲はへだてぬものにぞありける

相模

なにはがた朝みつしほに立つ千鳥浦づたひする聲ぞきこゆる

題しらず　　和泉式部

さびしさに煙をだにもたたじとて柴折りくぶる冬の山ざと

冬の夜の月をよめる　　大貳三位

山の端は名のみなりけり見る人のこゝろにぞいる冬の夜の月

題しらず　　增基法師

冬の夜に幾度ばかり寐ざめしてものおもふ宿のひま白(しら)むらむ

障子に雪のあした鷹狩したる所をよみ侍りける　　民部卿長家

とやかへるしらふの鷹のこゐをなみ雪げの空に合はせつるかな

鷹狩をよめる　　能因法師

うち拂ふ雪もやまなむみ狩野のすゝきの跡もたづぬばかりに

律師長濟

萩原も霜がれにけりみ狩野はあさるきゞすのかくれなきまで

屏風の繪に十一月(しもつき)に女のもとに人の音したる所をよめる　　大中臣能宣朝臣

霜枯の草の戸ざしはあだなれどなべての人にあくるものかは

霜がれの草をよめる　　少輔

霜枯はひとつ色にぞなりにける千種に見えし野邊にはあらずや

○たたじとや　絶やすまいとしてか。

○山の端は云々　山の端に入るといふのは名ばかりである。○こゝろにぞいる　心にしみ入る

○ひま白む　夜があけて隙があかるくなる。

○とやかへる　鷹が羽のぬけかはる頃鳥屋に居ること。○白ふの鷹　白い斑のある鷹。○こゐ　木にとまつてゐる鷹をいふ。

○きゞす　雉子。

○驚くばかり　目のさめる程。

○甲斐の白根　雪のつもつてゐる甲斐の山。

霜落葉を埋むといふ心をよめる　讀人しらず

落ちつもる庭の木の葉の夜のほどにはらひてけりと見する朝霜

霰をよめる　大江公資朝臣

杉のいたをまばらにふける閨のうへに驚くばかりあられ降るらし

山里の霰をよめる　橘俊綱朝臣

とふ人もなき蘆ぶきの我がやどはふる霰さへおとせざりけり

永承四年内裏の歌合に初雪をよめる　相摸

都にもはつゆき降れば小野山のまきの炭がまたきまさるらむ

埋火をよめる　素意法師

埋火のあたりははるの心地して散りくる雪をはなとこそ見れ

染殿式部卿のみこの家にて松の上の雪といふ心を人々よみ侍りけるによめる　藤原國行

あわ雪の松の上にし降りぬれば久しく消えぬものにぞありける

隆經朝臣甲斐守にて侍りける時たよりにつけて遣はしける　紀式部

いづ方と甲斐の白根はしらねども雪ふるごとに思ひこそやれ

山の雪をよみ侍りける　能因法師

紅葉ゆふこゝろのうちにしめゆひし山の高峯(たかね)は雪ふりにけり

題しらず　　源道濟

あさぼらけ雪ふるそらを見わたせば山のはごとに月ぞのこれる

慶尋法師

こし道もみえず雪こそつもりけれ今やとくると人は待つらむ

藤原國房

いかばかり降る雪なればしながどりゐなのしば山道まどふらむ

旅宿の雪といふ心をよめる　　津守國基

ひとりぬる草の枕はさゆれども降りつむ雪を拂はでぞ見る

屛風の繪に雪降りたる所に女のながめしたる所をよめる　　赤染衛門

春やくる人や問ふとも待たれけりけさ山里のゆきをながめて

道雅三位の八條の家の障子に山里の雪のあしたまらうど門にある所をよめる　　藤原經衡

雪ふかき道にぞしるき山ざとはわれよりさきに人來ざりけり

源頼家朝臣

山里は雪こそふかくなりにけれとはでも年の暮れにけるかな

○こし道　通つて來た道。
○今やとくると　解けるに、來るをかけたもの。

○しながどり　にほ鳥。

○しるき　著しい。はつきりとわかる。

法師になりて飯室(いひむろ)に侍りけるに雪のあした人のもとに遣はしける　信寂法師

おもひやれ雪も山路もふかくしてあと絶えにける人のすみかを

題しらず　和泉式部

こりつみてまきの炭焼くけをぬるみ大原やまの雪のむらぎえ

天暦の御時屏風の繪に十二月雪ふれる所をよめる　清原元輔

我がやどに降りしくゆきを春にまだ年こえぬ間の花とこそ見れ

雪降れるあした大納言公任のもとに遣はしける　入道前太政大臣

おなじくぞ雪積るらむと思へども君ふるさとはまづぞ訪はるゝ

雪ふりて侍りけるあした娘の許におくりける　前大納言公任

ふる雪は年とともにぞ積りけるいづれか高くなりまさるらむ

薄氷をよめる　頼慶法師

さむしろはむべ冱えけらしかくれぬの蘆間の氷ひとへしにけり

題しらず　快覺法師

さ夜ふくるまゝに汀やこほるらむとほざかり行くしがの浦なみ

入道前太政大臣の修行のともにて冬の夜冰をよみ侍りける　僧都長算

鴎こそ夜かれにけらし猪名野なるこやの池水うはごほりせり

○雪も山路もふかくして　雪も深くつもり山路も奥深く人りこんで。
○こりつみて　伐り積んで。
○けをぬるみ　いきぼりが暖いので。
○春にまだ年こえぬ間　春は立って居てもまだ年内であることを云つたものであらう。
○君ふる里　君の住む里。ふるは經ると降るとを通はせたもの。
○さむしろ　狹席。はゞのせまいむしろ。併せて寒い意を含めたもの。
○夜かれにけらし　夜のかよひが絶えたらしい。
○猪名野　攝津國にある。

題しらず　　曾根好忠

岩間には冰のくさび打ちてけり玉ゐしみづもいまはもりこず

○くさび　物をはめ合はせた所に打ちこんで、拔けぬやうにするもの。

冰遂レ夜結　　藤原孝善

むばたまの夜をへて凍る原の池は春とともにや波も立つべき

後三條院東宮と申しける時殿上にて人々年の暮れぬる由をよみ侍りけるに　　藤原明衡朝臣

白たへにかしらのかみはなりにけり我が身に年の雪つもりつゝ

十二月（しはす）のつごもり頃備前の國より出羽辨がもとに遣はしける　　源爲善朝臣

都へは年とともにぞかへるべきやがて春をもむかへがてらに

○行末とほき心地　見渡しのはるかなことをいふ。賀の歌であるから芽出度い詞を用ゐたのである。

後拾遺和歌集　第七

賀

天暦の御時賀の御屏風の歌立春　　源　順

今日とくる氷にかへてむすぶらし千年の春にあはむちぎりを

入道攝政の賀し侍りける屏風にながらの橋のかたかきたる所をよめる　　平　兼　盛

朽ちもせぬながらの橋のはし柱ひさしきことの見えもするかな

おなじ屏風に武藏野のかたかきて侍りけるをよめる

むさし野をきりの晴間に見わたせば行末とほき心地こそすれ

東三條院四十の賀し侍りける屏風に子の日して男女車よりおりて小松引く所をよめる　　源　兼　隆

霞さへたなびく野べの松なればそらにぞ君が千代は知らるゝ

前大僧正明尊九十の賀し侍りけるに宇治の前太政大臣竹の杖遣はしける

返事によみ侍りける　　前律師慶暹

君をいのる年のひさしくなりぬれば老のさかゆく杖ぞうれしき

内裏の御屏風に命長き人の家に松鶴ある所を　平　兼盛

はる秋もしらで年ふる我が身かな松とつるとの年をかぞへて

屏風の繪に海のほとりに松の一本ある所を　源　兼隆

一本(ひともと)のまつのしるしぞたのもしきふたごゝろなき千代と見つれば

題しらず　讀人しらず

君が世を何にたとへむ常磐なる松のみどりも千代をこそふれ

後一條院生まれさせ給ひて七夜に人々參りあひて女房杯いだせと侍りければ　紫　式部

珍らしき光さし添ふさかづきはもちながらこそ千世もめぐらめ

後朱雀院うまれさせ給ひて七夜によみ侍りける　前大納言公任

いとけなき衣の袖はせばくともこふの上をば撫でつくしてむ

題しらず　讀人しらず

君が世はかぎりもあらじはま椿ふたゝび色はあらたまるとも

或人いはくこの歌七夜に中納言定頼がよめる

故第一親王うまれ給ひてうち續き前齋宮うまれさせ給ひて内裏より産養(うぶやしなひ)

○君をいのる年の云々　君を祈る年が久しくたつたこと、自分の年が積つたことをかけたもの。

○さかづきはもちながらこそ　杯を月に云ひかけて、望みながらと持ちながらとを通はせたもの。

○こふの上　劫の上。一本劫の石とある。四十里四方ある石を、天人が羽衣で三千年に一度づゝ撫でるといふその石。この石を撫でつくした時一劫である。

○はま椿　海邊に生じて、山茶花に似た葉があり、黄色な花が咲くもの。

○産養　皇子の御出生によつて御祝宴を開かれること。

など遣はして人々歌よみ侍りけるによめる　右大臣顯房

これもまた千代のけしきのしるきかな生ひそふ松の二葉ながらに

少將敦敏子うませて侍りける七夜によめる　清原元輔

ひめ小松おほはら山の種なれば千年はたゞにまかせてを見む

匡房朝臣うまれて侍りけるにうぶぎぬ縫はせてつかはすとてよめる　赤染衞門

雲の上にのぼらむまでも見てしがな鶴の毛衣とし經とならば

おなじ七夜によみ侍りける

千代を祈る心のうちのすゞしきは絶えせぬ家の風にぞ有りける

故第一親王の五十日まゐらせけるに關白前のおほいまうち君さはる事ありて内にも參り侍らざりければ内大臣下﨟に侍りける時抱き奉りて侍りけるを見てよめる　右大臣

千年ふる二葉の松にかけてこそ藤のわか枝もはる日さかえめ

みこだちを冷泉院の親王になして後よませ給ひける　花山院御製

おもふこと今はなきかな撫子の花咲くばかりなりぬとおもへば

後三條院みこの宮と申しけるとき今上幼くおはしけるにゆかりある事あ

○二葉ながらに　第一親王と前齋宮とをいふ。

○おほはら山の種　大原は春日神社を勸請したもので、藤原氏の氏神である。五の句まかせては、種の緣語。

○絶えせぬ家の風　世々儒家であるから云つたもの。

○撫子　愛子の意。

りて見まゐらせければ鏡を見よとて賜はせたりけるによみはべりける　伊勢大輔

君見ればちりもくもらで萬代のよはひをのみもますかゞみかな

かへし　閑院贈太政大臣

くもりなき鏡のひかります／＼も照らさむ影にかくれざらめや

むまごの幼きを周防内侍見侍りて後鶴の子の千代の氣色(けしき)を思ひ出づる由いひにおこせて侍りける返しにつかはしける　藤三位

思ひやれまだ鶴の子の生先(おひさき)を千世もと撫づるそでのせばさを

紀伊守爲光幼き子を出してこれ祝ひて歌よめといひ侍りければよめる　清原元輔

萬代をかぞへむものは紀のくにの千尋(ちひろ)の濱のまさごなりけり

人の裳著侍りけるによめる

すみ吉のうらの玉藻をむすびあげて渚の松のかげをこそ見め

人の幼きはら／＼の子ども裳著せからぶりせさせ袴著せなどし侍りけるにかはらけとりて　源重之

いろ／＼にあまた千年の見ゆるかなこ松がはらにたづや羣れゐる

○影にかくれざらめや　影にかくれることは、御蔭を被ること。

○そでのせばさ　自分の勢ひがあまりよくない意を云つたもの。

○裳著　女が成長してはじめて裳を著る儀式。裳は女の腰から下に著るもの。

○はら／＼の子ども　母の異なつた子供たち。

大中臣輔長袴著はべりけるに内外戚のおほぢにて輔親公賓侍りけるを見てよめる　　藤原保昌朝臣

かたがたの親の親どち祝ふめり子の子の千代をおもひこそやれ

三條院みこの宮と申しける時帶刀の陣の歌合によめる　　大江嘉言

君が代は千代にひとたびゐる塵のしら雲かゝる山となるまで

承暦二年内裏歌合によみ侍りける　　民部卿經信

君が代は盡きじとぞ思ふ神風やみもすそ河の澄まむかぎりは

宇治前太政大臣の家に三十講の後歌合し侍りけるによめる　　藤原爲盛女

おもひやれ八十うぢ人の君がためひとつこゝろに祈るいのりを

永承四年内裏歌合に松をよめる　　能因法師

かすが山いは根の松はきみがため千とせのみかはよろづ代ぞへむ

おなじ歌合によめる　　式部大輔資業

君が代は白たま椿八千代ともなにかぞへむかぎりなければ

冷泉院はじめて造らせ給ひて水などせき入れたるを御覧じてよませ給ひける　　御製

岩くゞる瀧の白絲たえせでぞひさしく代々にへつゝ見るべき

○子の子　孫をいふ。

○帶刀　東宮警衛の武士。

○千代にひとたびゐる塵　塵積りて山となるでさへ久しいのに、千世に一度居る塵。

東三條院に東宮わたり給ひて池の浮草などはらはせ給ひけるに　　小大君

君すめば濁れる水もなかりけりみぎはの鶴もこゝろしてゐよ

關白前のおほいまうち君六條の家に渡りはじめ侍りける時池水長く澄めりといふ心を人々よみ侍りけるに　　藤原範永朝臣

ことしだにかゞみと見ゆる池水の千代へてすまむかげぞゆかしき

後綱朝臣丹波守にて侍りける時かの國の臨時の祭の使にて藤の花をかざして侍りけるを見て　　良暹法師

千世をへむ君がかざせる藤の花まつにかゝれる心地こそすれ

後冷泉院の御時大嘗會の御屛風近江國龜岳松樹多生　　式部大輔資業

萬代に千代のかさねて見ゆるかな龜のをかなる松のみどりに

おなじ御屛風に大倉山をよめる

うごきなき大倉山を立てたれば治まれる世ぞひさしかるべき

陽明門院はじめて后に立たせ給ひけるを聞きて　　江侍從

むらさきの雲のよそなる身なれどもたつと聞くこそうれしかりけれ

○まつにかゝれる　藤の花を祝ふと共に、花をかざしてゐる後綱朝臣の上をも併せ祝つたもの。

○龜のをかなる松のみどり　龜に萬代を祝ひ、松に千代を祝つたもの。

○たつと聞くこそ　雲の縁について云つたもの。立后の御事を聞くといふ意。

後拾遺和歌集　第八

別

祭主輔親ゐなかへまかり下らむとしけるに野の花山の紅葉などは誰とか見むとするといひて遣はしける　　惠慶法師

紅葉見むのこりの秋もすくなきに君ながゐせば誰とをらまし

かへし　　祭主輔親

をしむべき都のもみぢまだ散らぬ秋のうちにはかへらざらめや

田舍へ下りける人の許にまかりたりけるに侍らざりければ家の柱にかきつけける　　源道濟

つねならばあはで歸るもなげかじをみやこ出づとか人のつげける

東（あづま）へまかるとて京を出づる日よみ侍りける　　增基法師

都いづるけさばかりだにはつかにも逢ひ見て人を別れましかば

遠江守爲憲まかり下りけるに或所より扇つかはしけるによめる　　藤原道信朝臣

わかれての四年のはるの春ごとに花のみやこを思ひおこせよ

○君ながゐせば　君が田舍に長く居たならば。

○四年のはる　國司の任期は四年であるから云つたもの。

父のもとに越後にまかりけるに逢坂のほどより源爲善朝臣のもとに遣はしける　　藤原惟規

逢坂のせき打ちこゆる程もなく今朝はみやこの人ぞこひしき

田舍へまかりける人に狩衣扇つかはすとて　　藤原長能

世のつねにおもふ別れのたびならば心見えなるたむけせましや

三月ばかりに筑後守藤原爲正國に下り侍りけるに扇賜はすとて藤の枝つくりたるに結びつけて侍りける　　選子内親王

ゆく春とともに立ちぬるふな道をいのりかけたる藤なみの花

かへし　　藤原爲正

祈りつゝ千代をかけたるふぢ波にいきの松こそおもひやられ

人の遠き所にまかりけるに　　藏原道信朝臣

たれが世も我が世もしらぬ世の中にまつほど如何(いかゞ)あらむとすらむ

入道攝政わから侍りける頃大納言道綱が母に通ひ侍りけるにみちのくにへまかり下らむとて見よとおぼしくて女の硯に入れて侍りける　　藤原倫寧朝臣

君をのみ頼むたびなる心には行くすゑとほくおもほゆるかな

かへし　　入道攝政

○心見え　なさけの見える。

○いきの松　生の松原。筑前國にある。

我をのみたのむといはばゆく末の松の千代をもきみこそは見め

筑紫に下りて侍りけるに上らむとて家あるじなる人のもとに遣はしける　　堪圓法師

山のはに月影みえば思ひ出でよ秋かぜ吹かばわれもわすれじ

源頼清朝臣みちのくにの守はてて又肥後守になりて下り侍りけるをいでたちの所に誰ともなくてさし置かせ侍りける　　相摸

たび／＼の千代をはるかに君やへむ末の松よりいきの松まで

嘉言對馬守になりて下り侍りけるに人に代りて遣はしける

いとはしき我が命さへ行く人の歸らむまでぞ惜しくなりぬる

對馬守になりてまかり下りけるに津の國の程より能因法師がもとに遣はしける　　大江嘉言

いのちあらば今かへり來む津のくにの難波ほり江の蘆のうらはに

橘則光みちのくにに下り侍りけるにいひ遣はしける　　中納言定頼

かりそめの別れとおもへどしら川のせきとゞめぬは涙なりけり

よしみちの朝臣十二月のころほひ宇佐の使に罷りけるに年あけばかうぶり賜はらむことなど思ひて餞賜ひけるにかはらけ取りてよみ侍りける

○たび／＼の　度々のを、旅々のに云ひかけたもの。
○末の松よりいきの松まで　末の松山は陸奥にあつて、生の松原は筑前にある。頼清の任地の名所を詠み込んでその國をさしたもの。
○いとはしき我が命　生き甲斐もない。いやなわが命。
○せきとゞめぬ　白川の關とせきとめぬとをかけたもの。
○宇佐の使　御即位のはじめに豐前の宇佐神宮に遣はされる勅使。
○かうぶり賜はらむ事など　位階を昇進させて下さるだらうなど。從五位下を賜はることを云つたもの。

○めぐりこむほど　年が一度廻って來る間。一年。

○むつまじく習ひにける　馴れ親しんだ。

○ともづなの　くるの緣語。
○またましものを　待たうものを

○頼めていにし　約束して往ったの意。これを、頼めでと濁るべきであるといふ說もある。

橘則長

わかれ路はたつ今日よりも歸るさをあはれ雲居にきかむとすらむ

筑紫へ下りける人にうまのはなむけし侍るとて人々酒たうべてひねもすに遊びて夜やう〳〵ふけゆくまゝに老いぬることなどいひ出してよみ侍りける

慶範法師

たれよりも我ぞかなしきめぐりこむほどを待つべき命ならねば

筑紫より上りて後良勢法師のもとに遣はしける

讀人しらず

別るべき中と知る〳〵むつまじく習ひにけるぞ今日は悔しき

かへし

良勢法師

なごりある命と思はばともづなの又もやくると待たましものを

能因法師伊豫の國にまかり下りけるにわかれ惜しみて

藤原家經朝臣

春は花秋は月にとちぎりつゝ今日をわかれとおもはざりけり

能因法師伊豫の國より上りてまた歸り下りけるに人々馬のはなむけして明けむ春のぼらむといひ侍りければよめる

源兼長

おもへたゞ頼めていにしはるだにも花の盛りはいかゞ待たれし

語らふ人のみちの國に侍りけるに

源道濟

思ひ出でよ道ははるかになりぬとも心のうちは山もへだてじ

能登へまかり下りけるに人々まで來て歌よみ侍りければ

とまるべき道にはあらず中々に逢はでぞ今日はあるべかりける　中納言定頼

讃岐へまかりける人に遣はしける

松山のまつのうら風吹きよせばひろひて忍べたびわすれがひ　源光成

かへし

たたぬよりしぼりもあへぬころも手にまだきなかけそ松が浦なみ　源兼澄

爲善伊賀にまかり侍りけるに人々餞賜ひけるにかはらけとりて

かくしつゝおほくの人は惜しみ來ぬわれを送らむ事はいつぞも　源爲善朝臣

大江公資朝臣遠江守にて下り侍りけるにしはすの二十日頃に馬のはなむけすとてかはらけとりてよみ侍りける

暮れて行く年とともにぞ別れぬる道にや春はあはむとすらむ　祭主輔親

あからさまに田舍へまかると女の許にいひつかはしたりける返事にしばしときけど關こゆるなどあれば遠き心地こそすれといひて侍りければ遣はしける

あふ坂の關路こゆともみやこなる人にこゝろの通はざらめや

○中々に逢はでぞ云々　逢つたので旅立ちがつらくなつた。却つて逢はないで居るべきであつた。

○まだきなかけそ　もう今から早くもかけてくれるな。

○われを送らむ事　自分が旅に出るのは。

○道にや春は云々　春は道中でふだらう。道中で春を迎へることだらう。

○あからさまに　かりに。しばらく。

橘道貞式部を忘れてみちのくにに下り侍りければ式部がもとに遣はしける　　赤染衛門

行く人もとまるもいかに思ふらむ別れてのちのまたの別れを

物いひける女のいづちともなく遠き所へなむいくといひ侍りければ　　中原頼成

いづちとも知らぬわかれの旅なれどいかで涙のさきに立つらむ

女に睦まじくなりて程なく遠き所にまかりければ女のもとより雲居はるかにいくこそあるかなきかの心地せらるれといひ侍りける返事につかはしける　　祭主輔親

逢ふことは雲居はるかにへだつとも心かよはぬ程はあらじを

筑紫にまかりけるむすめに　　藤原節信

かへりては誰を見むとか思ふらむ老いてひさしき人はありやは

筑紫に罷りて上り侍りけるに人々別れ惜しみ侍りけるによめる　　連敏法師

筑紫舟まだともづなも解かなくにさしいづる物は涙なりけり

出雲へ下るとて能因法師の許につかはしける　　大江正言

ふるさとの花の都に住みわびて八雲立つといふ出雲へぞ行く

○わかれてのちのまたの別れ　道貞が式部を忘れた事がはじめの別れで、陸奥に下るのが又の別れ。

○老いてひさしき人　女の親にあたる節信自身をいふ。

○さしいづる　涙の出るといふのに、棹さして出るとかけたもの。

○のちの今日　來年の七月七日。この次にたなばたの逢ふ日。

○そのほど　いつ頃と日限を定めること。

寂昭法師入唐せむとて筑紫へまかり下るとて七月七日舟に乘り侍りける
に遣はしける　　前大納言公任

天の河のちの今日だにはるけきをいつとは知らぬ舟出かなしな

入唐し侍りける道より源心が許に送り侍りける　　寂昭法師

そのほどとちぎれる旅の別れだに逢ふ事まれにありとこそ聞け

成尋法師もろこしに渡り侍りて後かの母のもとに遣はしける　　讀人しらず

いかばかり空を仰ぎて歎くらむいく雲居とも知らぬわかれを

後拾遺和歌集　第九

羇旅

石山よりかへり侍りける道に走井(はしりゐ)にて清水(しみづ)をよみ侍りける　　堀河太政大臣

あふ坂のせきとは聞けど走井の水をばえこそとゞめざりけれ

十月ばかりに初瀬に參りて侍りけるに曉に霧のたちけるをよみ侍りける　　前大納言公任

行く道の紅葉のいろも見るべきを霧とともにやいそぎ立つべき

かへし　　中納言定頼

霧分けて急ぎたちなむもみぢ葉の色し見えなば道もゆかれじ

熊野の道にて御心地例ならずおぼされけるに海士の鹽やきけるを御覽じて　　花山院御製

旅のそら夜はの煙とのぼりなばあまの藻しほ火たくかとや見む

熊野へ參り侍りける道にて吹上の濱を見て　　懷圓法師

都にて吹上のはまを人問はばけふ見るばかりいかゞかたらむ

○走井　逢坂の西にある。

○行く道の　行く道中の。

○夜はの煙とのぼりなば　死んで火葬にすることを云つたもの。

○さはるかとこそ　さし障りがあるかと。

○過ぎがてにおぼゆるもの　急いで通り過ぎにくく思はれるもの。

○堀江のほど　堀江を通る間。

○つなでゆるべよ　船に繫いで挽く綱をゆるめよ。

○ありのまにまに　ありのまゝに

熊野へ參る道にて月を見てよめる　　少輔

山のはにさはるかとこそ思ひしか峯にてもなほ月ぞ待たるゝ

舟にのりて堀江といふ所をすぎ侍るとて　　藤原國行

過ぎがてにおぼゆるものは蘆間かな堀江のほどはつなでゆるべよ

津の國へまかる道にて　　能因法師

あしの屋のこやの渡に日は暮れぬいづち行くらむ駒にまかせて

東へまかりける道にて　　增基法師

都のみかへり見られて東路をこまのこゝろにまかせてぞ行く

和泉へ下り侍りけるによる都鳥のほのかに鳴きければよみ侍りける　　和泉式部

こと問はばありのまにまにみやこ鳥都のことを我に聞かせよ

正月ばかりに近江へまかりけるに鏡山にて雨にあひてよみ侍りける　　惠慶法師

鏡山こゆる今日しも春さめのかきくもりやは降るべかりける

七月ついたち頃に尾張に下りけるに夕すゞみに關山を越ゆとて暫し車をとゞめて休み侍りてよみ侍りける　　赤染衛門

こえはてば都もとほくなりぬべし關のゆふ風しばしすゞまむ

題しらず　増基法師

今日ばかり霞まざらなむ飽かで行くみやこの山はそれとだに見む

津の國に下りて侍りけるに旅宿遠望の心をよみ侍りける　良暹法師

わたのべや大江のきしにやどりして雲居に見ゆる伊駒山かな

爲善朝臣三河守にて下り侍りけるにすのまたといふ渡りにおりゐて信濃のみ坂を見やりて詠み侍りける　能因法師

白雲のうへより見ゆる足びきの山のたか嶺やみさかなるらむ

東の方へまかりけるにうるまといふ所にて　源重之

東路にこゝをうるまといふことは行きかふ人のあればなりけり

父のともに遠江の國に下りて年經て後下野守にてくだり侍りけるに濱名の橋のもとにてよみ侍りける　大江廣經朝臣

あづまぢの濱名の橋を來て見ればむかし戀しきわたりなりけり

しかすがの渡にてよみ侍りける　能因法師

思ふ人ありとなければど故郷はしかすがにこそこひしかりけれ

みちのくにまかり下りけるに白川の關にてよみ侍りける

○こえはてば　越えてしまつたなら。

○わたのべ、大江　共に攝津國にある。
○おりゐて　馬から下りて。

○こゝをうるまといふ事は　うるまを賣馬の意に見たもの。宇留馬は美濃國の名所。

○しかすがにこそ　渡の名に、さすがにの意をかけたもの。しかすがの渡は三河國にある。

○かすみとともに立ちしかど　春のはじめに立ち出たが。

○けふ過ぎ行けど　一本に過ぎ行くとある。

○今宵あかしの月を見るにも　今晩明石で明るい月を見るにつけても。

出羽國にまかりて象潟(きさかた)といふ所にてよめる　　　能因法師

都をばかすみとともに立ちしかどあきかぜぞ吹く白川のせき

出羽國にまかりて象潟といふ所にてよめる

世の中はかくても經けりきさ潟の蜑のとまやを我が宿にして

筑紫へ下りける道にて須磨の浦にてよみ侍りける　　　大中臣能宣朝臣

すまの浦をけふ過ぎ行けどきし方へ歸る波にやことをつてまし

筑紫にまかり下りけるに鹽やくを見てよめる　　　大貳高遠

風吹けばもしほの煙うちなびきわれも思はぬかたにこそ行け

書寫のひじりにあひに播磨の國におはしまして明石といふ所の月を御覽じて　　　花山院御製

月かげはたびのそらとてかはらねどなほ都のみこひしきやなぞ

播磨の明石といふ所に汐湯あみにまかりて月のあかかりける夜中宮の臺盤所(だいはんどころ)に奉り侍りける　　　中納言資綱

おほつかな都のそらやいかならむ今宵あかしの月を見るにも

かへし　　　繪式部

ながむらむあかしの浦のけしきにて都の月をそらに知らなむ

常陸に下りける道にて月のあかく侍りけるをよめる　　　康資王母

月はかく雲居なれども見るものをあはれ都のかからましかば

宇佐の使にて筑紫へまかりける道に海の上に月を待つといふ心をよみ侍りける　橘爲義朝臣

みやこにて山のはに見し月かげをこよひは浪のうへにこそ待て

筑紫にまかりて月のあかかりける夜よめる　藤原國行

都いでて雲居はるかに來たれどもなほ西にこそ月は入りけれ

つくしへまかりける道にてよみ侍りける　西宮前左大臣

七日にもあまりにけりなたよりあらば數へきかせよ沖の島守

筑紫に下り侍りけるに明石といふ所にてよみ侍りける　帥前内大臣

ものおもふ心のやみしくらければあかしの浦もかひなかりけり

出雲の國に流され侍りける道にてよみ侍りける　中納言隆家

さもこそは都の外にやどりせめうたてつゆけき草まくらかな

伊豫の國より十二月の十日頃に舟にのりて急ぎ罷り上りけるに　式部大輔資業

いそぎつゝ舟出ぞしつる年のうちに花のみやこの春に逢ふべく

筑紫より上りける道にさやかた山といふ所をすぐとてよみ侍りける　右大辨通俊

○みやこにて山のはに云々　土佐日記に「都にて山のはに見し月なれど涙より出でて涙にこそ入れ」によつたもの。

○物おもふ心のやみ　榮華物語には、心のうちさある。

○あかしの浦も　明石の浦に明しをかけたもの。

○さやかた山　佐夜形山、筑前國宗像郡にある。

○あなし　西北から吹く風。

あなし吹くせとの汐合に舟出して早くぞ過ぐるさやかた山を

越後より上りけるに姨捨山の麓に月あかかりければ　　橘爲仲朝臣

これやこの月見るたびにおもひやるをば捨山のふもとなるらむ

春の頃田舍より上り侍りける道にてよめる　　源　道　濟

見わたせば都は近くなりぬらむ過ぎぬる山はかすみへだてつ

同じ道にて

さよふけて峯の嵐やいかならむみぎはの波の聲まさるなり

後拾遺和歌集第十

哀傷

一條院の御時皇后宮かくれ給ひて後御帳（みちやう）のかたびらの紐（ひも）に結びつけられたるふみを見つけたれば内にも御覽ぜさせよとおぼし顔に歌みつ書きつけられたりけるなかに

夜もすがら契りしことをわすれずば戀ひむ涙のいろぞゆかしき

知る人もなきわかれぢに今はとて心ぼそくもいそぎ立つかな

物いふ女の侍る所にまかれりけるによべなくなりにきといひければよめる　　源　兼長

ありしこそ限りなりけれ逢ふことをなど後の世とちぎらざりけむ

山里に籠りゐて侍りけるに人をとかくするが見え侍りければよめる　　和泉式部

立ちのぼる煙につけておもふかないつまた我を人のかく見む

三條院の皇太后宮かくれ給ひて葬送の夜月あかく侍りけるによめる

○夜もすがら　悦目抄には、夜とともにとある。

○ありしこそ　以前に逢ひ見た時がの意。

○人をとかくする　人をとやかくとする。死人を火葬することを云つたものであらう。

○いつまた我を人のかく見む　いつまた他の人が自分の上をこのやうに見るだらう。

命婦乳母

などてかく雲隱るらむかくばかりのどかに澄める月もあるよに

圓融院の法皇うせ給ひて紫野に御葬送侍りけるに一年この所にて子の日せさせ給ひし事など思ひ出でてよみ侍りける

左大將朝光

むらさきの雲のかけてもおもひきや春の霞になして見むとは

大納言行成

おくれじと常の行幸（みゆき）はいそぎしを煙に添はぬたびのかなしさ

長保二年十二月に皇后宮うせさせ給ひて葬送の夜雪の降りて侍りければよませ給うける

一條院御製

野邊までに心ひとつは通へども我がみゆきとは知らずやありけむ

入道前太政大臣の葬送のあしたに人々まかり歸るに雪の降りて侍りければよみ侍りける

法橋忠命

たきゞつき雪ふりしけるとりべ野は鶴の林のこゝちこそすれ

入道一品宮かくれ給ひて葬送のともにまかりて又の日相摸がもとに遣はしける

小侍從命婦

晴れずこそ悲しかりけれとりべ山立ちかへりつる今朝の霞は

○雲隱るらむ　皇太后の崩御をさして云つたもの。
○一年　以前に。かつて。
○雲のかけてもおもひきや　雲がかゝると、かけても思はなかつたとをかけたもの。
○たきゞつき　佛緣のつきる事。死ぬること。榮華物語には、煙たえとある。
○鶴の林　沙羅林の異名。釋迦の死去したところ。
○晴れずこそ　霞の晴れぬと、氣の晴れぬとをかけたもの。

二月十五日の事にやありけむかの宮の葬送の後相摸がもとに遣はしける

古（いにしへ）のたきゞもけふの君が代もつき果てぬるを見るぞかなしき

かへし　　相摸

時しもあれ春のなかばにあやまたぬよはの煙はうたがひもなし

三條院の御時皇后宮のきさいに立ち給ひける時藏人つかまつりける人のうせ給ひて葬送の夜したしき事つかうまつりけるを聞きて遣はしける　　山田中務

そなはれし玉の小櫛をさしながらあはれ悲しき秋にあひぬる

同じ頃その宮に侍りける人のもとに遣はしける　　相摸

問はばやと思ひやるだに露けきをいかにぞ君が袖は朽ちぬや

かへし　　大和宣旨

なみだ川ながるゝ水脈（みを）と知らねばやそでばかりをば人のとふらむ

後一條院の御時中宮九月にうせ給ひて後朱雀院の御時又弘徽殿の中宮八月にかくれ給ひにければかの宮に侍りける伊賀少將がもとに遣はしける　　前中宮出雲

いかばかり君なげくらむかずならぬ身だにしぐれし秋の哀れを

○時しもあれ　時もあるものを。

○そなはれし　足らないところもなかつた。

○こがらし　木枯の風に子枯しの意を通はせたもの。

○柞のもみぢ散りにけり　母親のなくなつた事をいふ。

○思ふらむ　自分が親に別れた時は非常に悲しかつたが、出羽辨もさう思ふだらう。

左兵衛督經成みまかりにけるその忌にいもうとのあつかひなどせむとて師賢朝臣籠りて侍りけるにつかはしける　　小左近

よそにきく袖も露けきかしはぎのもとの雫をおもひこそやれ

靈山に籠りたる人に逢はむとて罷りたりけるにみまかりて後十三日にあたりて物忌すと聞きて　　能因法師

主なしと答ふる人はなけれども宿のけしきぞいふにまされる

右兵衛督俊實子におくれて歎き侍りける頃とぶらひに遣はしける　　右大臣北の方

いかばかり寂しかるらむこがらしの吹きにし宿の秋のゆふぐれ

親なくなりて山寺に侍りける人の許に遣はしける　　讀人しらず

山里の柞のもみぢ散りにけりこのもといかにさびしかるらむ

出羽辨が親におくれて侍りけるを聞きて身をつめばいと哀れなることなど云ひ遣はすとてよみ侍りける　　前大納言隆國

思ふらむわかれし人のかなしさは今日までふべき心地やはせし

かへし　　出羽辨

悲しさのたぐひになにを思はましわかれを知れる君なかりせば

高階成棟父におくれにけると聞きて遣はしける　　中宮內侍

惜しまるゝ人なくなどてなりにけむ捨てたる身だにあればある世に

清原元輔が弟元定みまかりにけるを遲く聞きたるよし元輔が許にいひ遣はすとてよめる　　源　順

宵のまの空の煙となりにきとあまのはらからなどか告げこぬ

橘則長こしにてかくれ侍りにける頃相撲がもとにつかはしける　　橘　季通

思ひいづや思ひ出づるに悲しきは別れながらのわかれなりけり

後冷泉院の御時いとまなど申して筑紫に下り侍りけるほどに代もかはりぬと聞きて上東門院のとはせ給ひたる御返事に奉り侍りける　　式部命婦

おもひやれかねて別れしくやしさに添へて悲しき心づくしを

後三條院位につかせ給ひての頃五月雨ひまなく曇り暮して六月一日またかきくらし雨のふり侍りければ先帝の御事など思ひいづる事や侍りけむよめる　　周防内侍

五月雨にあらぬ今日さへ晴れせねば空も悲しきことやしるらむ

二條前太政大臣のめなくなりて後おちたる髮を見てよみ侍りける　　中納言定賴母

あだにかく落つと思ひしうば玉の髮こそながき形見なりけれ

子におくれて侍りける頃夢に見てよみ侍りける　　藤原實方朝臣

○なくなぞてなりにけむ　なぞてなくなりにけむ。
○捨てたる身だに　世に捨てられた身でさへ。

○別れながらのわかれ　別れたまゝの別れ。はじめ別れたまゝで遂に逢ふ時なく死別したこと。
○代もかはりぬ　陛下の御代がかはつた。

○五月雨にあらぬ今日　六月一日の事であるから云つたもの。

○ながき形見　將來永久の形見といふに、髮の長いといふ意を含めたもの。

〇覺めぬやがての命　覺めないままの命。覺めずにそのまゝ死んでしまひたいの意。

〇むまご　孫。

〇子はまさるらむ云々　小式部も親の自分よりも子を哀れと思つたであらう、自分も孫より子の小式部をいとしく思ふから。

轉寢(うたゝね)のこのよのゆめのはかなきに覺めぬやがての命ともがな

父のみまかりにける忌によみ侍りける　　藤原相如女

夢見ずとなげきし人をほどもなくまた我が夢に見ぬぞかなしき

この歌は粟田右大臣みまかりて後かの家に父の相如とのゐして侍りけるに夢ならで又も逢ふべき君ならば寢られぬいをも歎かざらましとよみて程もなくみまかりにければかくよめるとなむいひ傳へたる

物いひ侍りける女の程もなくみまかりにければ女の親の許につかはしける　　藤原實方朝臣

契りありてこの世にまたも生(う)まるとも面がはりして見もや忘れむ

一條攝政みまかりてのちわざの事などはてて人々ちりぢりになり侍りければ　　少將藤原義孝

今はとて飛び別るめるむら鳥の古巣にひとりながむべきかな

小式部內侍なくなりてむまごどもの侍りけるを見てよみ侍りける　　和泉式部

とゞめおきて誰を哀れと思ふらむ子はまさるらむ子は增りけり

一條院うせ給ひてのち撫子の花の侍りけるを後一條院幼くおはしまして何心もしらでとらせ給ひければおぼし出づる事やありけむ　　上東門院

○撫子の花　後一條院をさして申し上げたもの。

○なにしかは　何のために。一本なにしにかとある。

○そよその事　何か事にふれて思ひ出して、それよ、そのことかと輕く思ふ意。

○捨てはてむ　尼にならうとする事を云つたもの。

○なき人のくる夜　古くは十二月の晦日にも魂祭をした。

見るまゝに露ぞこぼるゝおくれにしこゝろも知らぬ撫子の花

道信の朝臣もろともに紅葉見むなど契りて侍りけるにかの人みまかりての秋よみ侍りける

藤原實方朝臣

見むといひし人ははかなく消えにしをひとり露けき秋の花かな

五月のころほひ女におくれ侍りける年冬雪の降りける日よみ侍りける

大江匡房朝臣

別れにしその五月雨のそらよりも雪降ればこそ戀しかりけれ

田舍に侍りける程に京に侍りける親なくなりにければ急ぎ上りて山里にて故郷を思ひおこせてよみ侍りける

大江嘉言

なにしかは今はいそがむ都には待つべき人もなくなりにけり

敦道親王に後れてよみ侍りける

和泉式部

今はたゞそよその事と思ひ出でて忘るばかりのうきこともがな

おなじ頃尼にならむと思ひてよみ侍りける

捨てはてむと思ふさへこそ悲しけれ君になれにし我が身と思へば

十二月のつごもりの夜よみ侍りける

なき人のくる夜と聞けど君もなし我がすむ宿やたまなきの里

右大將通房みまかりて後ふるくすみ侍りける帳の中に蜘蛛のいかきける
を見てよみ侍りける　土御門右大臣女
別れにし人は來べくもあらなくにいかに振舞ふさゝがにぞこは
筑紫よりまかり上りけるになくなりにける人を思ひ出でてよみ侍りける　大貳高遠
戀しさにぬる夜なければ世の中のはかなき時は夢とこそ見れ
兼綱の朝臣妻なくなりて後越前守になりてまかり下りけるに裝束遣はす
とてよみ侍りける　源道成朝臣
ゆゝしさにつゝめどあまる涙かなかけじと思ふたびのころもに
少納言なくなりて哀れなる事など歎きつゝおきたりける百和香をちひさ
き籠(こ)に入れてせうと棟政朝臣につかはしける　選子内親王
のりのためつみける花をかずかずに今はこの世の形見とぞ思ふ
思ふ人二人ありける男なくなりて侍りけるに末に物いはれける人に代り
てもとの女のもとに遣はしける　伊勢大輔
深さこそ藤のたもとはまさるらめ涙はおなじ色にこそしめ
服(ぶく)にて侍りける頃十月一日おなじさまなる人われのみなむ同じ姿にてと

○さゝがに　蜘蛛。
○ゆゝしさに　忌々しさに。
○百和香　薰香に同じ。種々の香類を細末にして甲香を和し、蜜で煉り合はせた薰物。
○せうと　兄。
○藤のたもと　藤衣のたもと。喪服。

いひにおこせて侍りければよめる　　康資王母

君のみや花のいろにもたちかへで袂の露はおなじ秋なる

赤染匡衡におくれて後五月五日よみて遣はしける　　美作三位

墨染のたもとはいとゞこひぢにてあやめの草のねやしげるらむ

圓融院の法皇うせさせ給ひて又の年の御はてのわざなどの頃にやありけむ内に侍りける御乳母(おんめのと)の藤三位の局(つぼね)にくるみ色の紙に老法師の手のまねをして書きてさし入れさせ給ひける　　一條院御製

これをだに形見とおもふを都には葉がへやしつるしひ柴の袖

後冷泉院位につかせ給ひければ里にまかり出で侍りて又の年の秋東三條の局の前に植ゑて侍りける萩を人の折りてもて來りければ　　麗景殿前女御

こぞよりもいろこそこけれ萩のはな涙のあめのかゝる秋には

成順におくれ侍りて又の年はてのわざし侍りけるに　　伊勢大輔

わかれにしその日ばかりはめぐり來ていきもかへらぬ人ぞ戀しき

年頃すみ侍りける女(め)におくれて又の年はてのわざつかうまつりけるによめる　　紀時文

年をへてなれたる人も別れにし去年(こぞ)は今年の今日にぞありける

○こひぢ　戀路と泥とをかけたもの。

○又の年の御はてのわざ　御一年祭。御一周忌。

○しひ柴の袖　つるばみ染の衣。喪服に用ゐたもの。

○いきもかへらぬ　生きかへらぬ

かへし　清原元輔

別れけむ心をくみて涙川おもひやるかなこぞの今日をも

後一條院の御時皇太后宮うせ給ひてはてのわざにさはることありて参らざりければかの宮よりきのふはなど参らざりしなどいひにおこせて侍りけるによめる　江侍従

我が身には悲しきことのつきせねば昨日をはてと思はざりけり

父のぶくぬぎ侍りける日よめる　平棟仲

思ひかねかたみに染めし墨ぞめの衣にさへもわかれぬるかな

平教成

うすく濃くこころもの色はかはれども同じ涙のかゝる袖かな

ぶくぬぎ侍りけるによめる　藤原定輔朝臣女

うきながらかたみに見つるふぢ衣はては涙にながしつるかな

十月ばかりに物へまかりける道に一條院をすぐとて車を引き入れて見侍りければ火たき屋などの侍りけるを見てよめる　赤染衛門

消えにける衛士(ゑじ)のたく火のあとを見て煙となりし君ぞかなしき

菩提樹院に後一條院の御影を書きたるを見て見なれ申しける事など思ひ

○かたみに染めし　父のかたみとして染めた。

○火たき屋　衛士などが終夜かゞり火をたいて守つてゐる小さい屋

出でてよみ侍りける　　出羽辨

いかにして寫しとめけむ雲居にて飽かずかくれし月の光を

匡衡におくれて後石山に參り侍りける道に新しき家のいたう荒れて侍りけるを問はせければ親におくれて二年にかくなりて侍るなりといひければ　　赤染衞門

ひとりこそ荒れゆく牀は歎きつれぬしなき宿はまたもありけり

熊野へまうで侍りけるに小一條院の通ひ給ひける難波といふ所にとまりて昔を思ひ出でてよめる　　源信宗朝臣

いにしへになにはの事はかはらねど涙のかかる旅はなかりき

かくよみて侍りけるをつてに聞きてかの信宗朝臣のもとにつかはしける　　伊勢大輔

思ひやるあはれ難波の浦さびて蘆のうきねはさぞなかれけむ

秋身まかりける人を思ひ出でてよめる　　源重之

年毎にむかしは遠くなりゆけど憂かりし秋はまたも來にけり

しかばかり契りしものをわたり川かへるほどには忘るべしやは

此の歌よしたかの少將わづらひ侍りけるになくなりたりとも暫しまて

○たにはの事　なにの事。何事。地名のなにはをかけたもの。

○涙のかかる旅　涙を流すこのやうな旅の意を含めたもの。

○蘆のうきねは云々　蘆の浮き根はさぞ枯れたことであらうと、併せて憂き音をたててさぞ泣かれたことであらうの意。

○しかばかり　それほど。

經よみはてむと妹の女御にいひ侍りて程もなく身まかりて後忘れてと
かくしてければその夜の母の夢に見え侍りける歌なり

時雨とは千草のはなぞ散りまがふなにふる里に袖ぬらすらむ

此の歌義孝かくれ侍りてのち十月ばかりに賀縁法師の夢に心地よげに
て笙をふくと見るほどに口をたゞならずになむ侍りける母のかくばか
り戀ふるを心地よげにていかにといひ侍りければ立つをひきとゞめて
よめるとなむいひ傳へたる

きてなれしころもの袖も乾かぬにわかれし秋になりにけるかな

此の歌身まかりて後あくる年のあき妹の夢に少將よしたかが歌とてみ
え侍りける

逢ふことを皆くれごとに出で立てど夢路ならではかひなかりけり

或人のいはく此の歌思ふ女をおきて身まかりにける男のむすめの夢に
かの女に取らせよとてよみ侍りける

むすめ彼の女のもとにやるとてよみ侍りける　　讀人しらず

なく〳〵も君には告げつなき人の又かへりこと如何(いかゞ)いはまし

女いみじう泣きてかへりごとによみ侍りける

さきにたつ涙を道のしるべにて我こそ行きていはまほしけれ

後拾遺和歌集 第十一

戀一

東宮と申しける時故内侍のかみの許にはじめてつかはしける　後朱雀院御製

ほのかにも知らせてしがなはる霞かすみのうちに思ふ心を

はじめたる人に遣はしける　叡覺法師

木の葉ちる山の下水うづもれて流れもやらぬ物をこそおもへ

題しらず　馬内侍

いかなればしらぬに生ふるうきぬなは苦しやこゝろ人しれずのみ

女をかたらはむとて乳母(めのと)のもとに遣はしける　源頼光朝臣

かくなむと蜑の漁火(いさりび)ほのめかせ磯邊のなみのをりもよからば

かへし　源頼家朝臣母

おきつ波うち出でむことぞつゝましき思ひよるべき汀ならねば

ある人のいはくこの歌中納言惟仲におくれて侍りける折かくいへりければめのとに代りてよめる

○故内侍のかみ　藤原道長の女、嬉子。

○流れもやらぬ　忘れられぬ意。

○うきぬなは　苦しの、くるにかけた序。

○蜑の漁火　ほのめかせの縁で云つたもの。

○うち出でむこと　うちあけて云ふ事。

○つゝましき　つゝしみたい。

○霜がれの　以下むら薄までは、ほの縁から四の句にかける序。○ほのめかさばや　仄かにあらはしたい。にほはせたい。

○忍びつゝ云々　心の中に思ひこがれるだけで、相手に知らせずにしまふよりも。

○おぼめく　はつきりしない。分明でない。

○えやは伊吹の　伊吹をいふにかけたもの。いひやらねばの意。○さしも知らじな　さうとも知るまい。これ程思ふといふことは知るまい。

はじめたる女に遣はしける　　平經章朝臣

霜がれの冬野に立てるむら薄ほのめかさばやおもふこゝろを

　　大江嘉言

忍びつゝやみなむよりは思ふことありけるとだに人に知らせむ

男のはじめて人のもとに遣はしけるに代りてよめる　　和泉式部

おぼめくな誰ともなくてよひ〳〵に夢に見えけむ我ぞその人

女に始めてつかはしける　　藤原實方朝臣

かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじなもゆる思ひを

はじめたる戀をよめる　　賓源法師

無き名たつ人だに世にはあるものを君戀ふる身と知られぬぞうき

月あかき夜ながめしける女に年へてのち遣はしける　　源則成

年もへぬながら月の夜の月かげの有明がたの空を戀ひつゝ

心かけたる人につかはしける　　藤原長能

くみて知る人もあらなむ夏山の木のしたみづは草がくれつゝ

はらから侍りける女の許に妹を思ひかけて姉なる女の許に遣はしける　　讀人しらず

○わたのはらから　わたの原にはらからをかけたもの。
○忍ぶとだにも　忍草と忍ぶとをかけたもの。
○ほにいづる　忍びかねてうはべにあらはす。
○我が思ふべき人はわれとも　我が思ふは兼房、下のわれは女自身をさす。兼房朝臣が戀する女は私であること。
○かいつくろひ　かきつくろひ。身なりをとゝのへること。
○君が氷柱　君の冷やかな心。
○山下みづのうす氷　許さなかつた冷やかなたの心。

小舟さしわたのはらからしるべせよいづれか蜑の玉藻かる浦

題しらず　藤原通頼

ひとりして眺むる宿のつまに生ふる忍ぶとだにも知らせてしがな

道命法師

思ひ餘りいひ出づる程に數ならぬ身をさへ人に知られぬるかな

八月ばかり女のもとに薄の穗にさしてつかはしける　祭主輔親

しの薄しのびもあへぬ心にて今日はほにいづる秋としらなむ

題しらず　藤原兼房朝臣

いはぬまはまだ知らじかし限りなく我が思ふべき人はわれとも

女をひかへて侍りけるになさけなくて入りにければつとめて遣はしける　源兼澄

吾妹子が袖ふりかけしうつり香の今朝は身にしむ物をこそ思へ

五節に出でてかいつくろひなどし侍りける女につかはしける　中納言公成

雲の上にさばかりさしし日影にも君が氷柱は解けずなりにき

初めて女の許に春立つ日遣はしける　藤原能道朝臣

とし經つる山下みづのうす氷けふ春風にうちも解けなむ

題しらず　能因法師

氷とも人の心をおもはばや今朝たつ春の風ぞとくやと

ふみ遣はしける女の返事せざりければよめる　祭主輔親

みつ汐のひるまだになき浦なれやかよふ千鳥のあとも見えぬは

返事せぬ女のこと人にはやると聞きて　道命法師

しほたるゝわが身の方はつれなくてこと浦にこそ煙立つなれ

返事せぬ人に山寺にまかりて遣はしける

思ひ侘び昨日山べに入りしかどふみみぬ道は行かれざりけり

女の家ちかき所に渡りて七月七日に遣はしける　前大納言公任

雲居にて契りし中はたなばたをうらやむばかりなりにけるかな

七夕の後朝(ごてう)に女の許に遣はしける　藤原隆資

逢ふ事のいつとなきには織女(たなばた)の別るゝさへぞうらやまれける

人の氷を包みて身にしみてなどいひて侍りければ　馬内侍

逢ふ事のとゞこほる間はいかばかり身にさへしみて歎くとか知る

題しらず　藤原顯季朝臣

鴫の臥す刈田にたてる稲茎のいなとは人のいはずもあらなむ

○こと人にはやる　他の男には返事をやる。

○しほたるゝ　歎きにしづんでゐる。涙で袖がぬれとほつてゐる。

○ふみみぬ道　通つたこともない道。併せて女の返事のないことを云つたもの。

○後朝　男女が共に寢た翌朝。

○とゞこほる間　氷に云ひかけたもの。つかへてはかどらぬ間。思ひ通りに事がすゝまぬこと。

○鴫の臥す云々　三句までは四句のいなを云ふための序。

○關のしみづ　關にせくをかけたもの。關をへだてられる意。

○奥山の云々　上の三句は、いつとくべしと云ふための序。

○つらき　うれしきの心を云つたもの。

うへのをのこども所の名を探りて歌奉り侍りけるに逢坂の關の戀をよませ給へる　　御製

あふさかの名をもたのまじ戀すれば關のしみづに袖も濡れけり

題しらず　　道命法師

逢ふことはさもこそ人目かたからめ心ばかりはとけて見えなむ

かへし　　讀人しらず

思ふらむしるしだになき下紐にこゝろばかりの何かとくべき

和泉式部

下消ゆる雪まの草のめづらしくわが思ふ人に逢ひ見てしがな

入道一品の宮に侍りけるみちのくにが許につかはしける　　源頼綱朝臣

奥山の眞木の葉しろく降る雪のいつとくべしと見えぬきみかな

うれしきといふわらはにふみ通はし侍りけるにこと人に物いはれて程なく忘られにけりと聞きてつかはしける　　源政成朝臣

うれしきを忘るゝ人もあるものをつらきを戀ふる我やなになる

題しらず　　平兼盛

戀ひそめし心をのみぞ恨みつる人のつらさをわれになしつゝ

文通はす女ことかたざまになりぬと聞きてつかはしける　藤原爲時

いかにせむかけても今は頼まじとおもふにいとゞ濡るゝ袂を

公資朝臣にあひ具して侍りけるに中納言定頼忍びて音づれけるをひまなき樣にや見えけむ絶間がちにおとなひ侍りければ　相模

逢ふ事のなきよりかねて辛ければさもあらましに濡るゝ袖かな

春より物いひける女の秋になりて露ばかり物いはむといひて侍りければ八月ばかりに遣はしける　大中臣能宣朝臣

まてといひし秋も半ばになりぬるを頼めかおきし露はいかにぞ

宇治前太政大臣の家の三十講の後の歌合に　堀河右大臣

逢ふまでとせめて命のをしければ戀こそ人のいのちなりけれ

やんごとなき人を思ひかけたる男にかはりて　相模

つきもせず戀に涙をながすかなこやなゝくりの出湯なるらむ

女の許につかはしける　藤原道信朝臣

近江にかありといふなる三稜草生ふる人くるしめの筑摩江の沼

題しらず　永源法師

戀してふことを知らでややみなましつれなき人のなき世なりせば

○さもあらましに　かねて。

○露はいかにぞ　露ばかり物いはむと云ふを受けて云つたもの。

○なゝくりの出湯　七久里の湯。信濃國にある溫泉。

○いひてまし　云ふだらう。
○戀するほど　自分がどの位思つてゐるかといふこと。

○そこの心　底の心と、其許の心とを通はせたもの。

○いづらつけし紐は　つけし紐はいづらの意。つけた紐はどこにあるか。

○錦木　古、奥州地方で男が女に逢はうとする時、一尺ばかりの木に彩色を施して、女の家の門に立てゝ置くもの。女が逢はうと思へばそれを取り入れて承諾の意を表す。

つれもなき人も哀れといひてまし戀するほどを知らせだにせば　赤染衛門

女のふちに身をなげよといひ侍りければ　源道濟

身をすてて深き淵にも入りぬべしそこの心の知らまほしさに

題しらず　大中臣能宣朝臣

戀ひ〳〵て逢ふとも夢に見つる夜はいとゞ寐覺ぞ侘しかりける

賀茂祭のかへさに前驅(ぜんく)つかうまつれりけるに青色の紐の落ちて侍りけるを女の車より唐衣(からぎぬ)の紐を解きてとぢつけ侍りけるを尋ねさせけれど誰とも知らでやみにけり又の年の祭の垣下(ゑんが)にて齋院に參りて侍りけるに女のいづらつけし紐はと音づれて侍りければ遣はしける

から衣むすびしひもはさしながら袂ははやく朽ちにしものを

かへし　讀人しらず

朽ちにける袖のしるしは下紐の解くるになどか知らせざりけむ

題しらず　能因法師

錦木は立てながらこそ朽ちにけれけふの細布むねあはじとや　西宮前左大臣

女のもとにつかはしける　小野宮太政大臣女

すまの蜑の浦こぐ舟のあともなく見ぬ人戀ふるわれやなになる

かへし

さりともと思ふ心にひかされて今まで世にもふる我が身かな

題しらず　小辨

たのむるに命の延ぶるものならば千歳もかくてあらむとや思ふ

　平兼盛

思ひしる人もこそあれ味氣(あぢき)なくつれなき戀に身をやかへてむ

人知れず逢ふを待つまに戀ひ死なば何にかへたる命とかいはむ

長久二年弘徽殿の女御の家に歌合し侍りけるによめる　永成法師

戀ひしなむ命はことの數ならでつれなき人のはてぞゆかしき

俊綱朝臣の家に題を採りて歌よみ侍りてけるに戀をよめる　中原政義

つれなくてやみぬる人に今はたゞ戀ひ死ぬとだに聞かせてしがな

ふみに書かむによかるべき歌とて俊綱朝臣人々によませ侍りけるによめる　良暹法師

朝寢髮みだれて戀ぞしどろなる逢ふよしもがな元結(もとゆひ)にせむ

○さりともと　つれなくはするが今に心を許すこともあらうかと。

○世にもふる我が身　世に經ると古くなつたわが身とをかけたもの

○つれなき人のはてぞゆかしき　つれない人の身のはてが知りたい

○ふみに書かむに　ふみは艶書を云つたものであらう。

から衣そでしの浦のうつせ貝むなしきこひに年の經ぬらむ　藤原國房

關白前左大臣の家に人々經ㇾ年戀といふ心をよみ侍りけるに

われが身はとかへる鷹となりにけり年はふれども戀はわすれず　左大臣

年をへて葉かへぬ山の椎しばやつれなき人のこゝろなるらむ　右大臣

日ごろ今日と賴めたりける人のさもあるまじげに見え侍りければよめる

うれしとも思ふべかりし今日しもぞいとゞ歎きのそふ心地する　道命法師

〇そでしの浦　袖師浦、出雲國にある。
〇うつせ貝　初句から此の句までは下の句にかゝる序。
〇とかへる鷹　鷹の羽が鳥屋ではえかはること。
〇思ふべかりし　思ふべき筈であつた。

後拾遺和歌集　第十二

戀　二

女にあひて又の日遣はしける　祭主輔親

程もなくこふる心はなになれや知らでだにこそ年はへにしか

實範朝臣のむすめの許に通ひそめてあしたにつかはしける　源頼綱朝臣

いにしへの人さへ今朝はつらきかな明くればなどか歸り初めけむ

惟任朝臣に代りてよめる　永源法師

夜をこめて歸る空こそなかりけれうらやましきはありあけの月

平行親朝臣のむすめの許にまかりそめて又のあしたによめる　藤原隆方朝臣

暮るゝまは千歳をすぐす心地してまつはまことに久しかりけり

題しらず　源定季

今日よりはとく呉竹のふしごとによは長かれと思ほゆるかな

女の許より歸りて遣はしける　少將藤原義孝

君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

○程もなく　閒もなく。前夜に逢つて居るのに、もう戀しく思ふのは。

○いにしへの人云々　古人も逢うて歸ることはつらかつたらうに、なぜ此の樣な歸るといふ例をつくつたか。

○とく呉竹の　呉竹に、早く暮れての意をかけたもの。

○よは長かれ　ふしの縁で節といひ、併せて夜とかけたもの。

○ながくもが　逢ふやうになつてからは、長くあれと思ふの意。

○ひるま　干る間と晝間とをかけたもの。

○ゆきあふ坂の關守　行き逢ふと逢坂の關とをかけたもの。

人の許に通ふ人にかはりてよめる　　伊勢大輔

今日くるゝ程待つだにも久しきにいかで心をかけて過ぎけむ

女の許より雪ふり侍りける日かへりて遣はしける　　藤原道信朝臣

かへるさの道やは變るかはらねど解くるにまどふ今朝のあわ雪

明けぬればくるゝものとは知りながら猶うらめしき朝ぼらけかな

ある人の許にまかりて侍りけるに晝はさらに見ぐるしとて出で侍らざりければよめる

千賀の浦に浪寄せかへる心地してひるまなくても暮しつるかな

題しらず　　永源法師

逢ひ見ての後こそ戀はまさりけれつれなき人を今はうらみじ

女につかはしける　　西宮前左大臣

現(うつゝ)にてゆめばかりなる逢ふことをうつゝばかりの夢になさばや

題しらず　　藤原道信朝臣

たまさかにゆきあふ坂の關守は夜を通さぬぞわびしかりける

清原元輔

知る人もなくてやみぬる逢ふ事をいかでなみだの袖にもるらむ

男の待てといひおこせて侍りける返事によみ侍りける　　相摸

賴むるを賴むべきにはあらねども待つとはなくて待たれもやせむ

時々物いふ男くれゆくばかりといひて侍りければよめる

眺めつゝ事ありがほにくらしてもかならず夢に見えばこそあらめ

中の關白少將に侍りける時はらからなる人に物いひわたり侍りけり賴めて來ざりけるつとめて女にかはりてよめる　　赤染衞門

やすらはで寢なましものをさ夜ふけて傾くまでの月を見しかな

人のためてこず侍りければつとめて遣はしける　　和泉式部

起きながら明しつるかなともねせぬ鴨の上毛の霜ならなくに

越前守景理夕さり來むといひて音せざりければよめる　　大輔命婦

夕露をあさぢがうへと見しものを袖におきても明しつるかな

女の許につかはしける　　藤原隆經朝臣

如何にせむあな生憎(あやにく)の春の日や夜半の景色のかからましかば

かへし　　童木

むば玉の夜半の景色はさもあらばあれ人のこゝろを春日ともがな

題しらず　　源重之

○賴むるを　男の方の心。

○見えばこそあらめ　見えるのならば、それでもよいが。

○やすらはで寢なまし物を　ためらはずに寢てしまへばよかつたものを。

○あさぢがうへ　淺茅の上に置く物と。

○さもあらばあれ　どうであらうとも。それはさもかくとして。

よど野へとみま草刈りに行く人も暮にはたゞにかへるものかは

女の許にまかりけるに隱れて逢はざりければかへりてつかはしける

源師賢朝臣

歸りしは我が身ひとつと思ひしを涙さへこそとまらざりけれ

左大將朝光女の許にまかれりけるになやまし歸りねといひ侍りければ歸りてのあした女の許より遣はしける

讀人しらず

天雲のかへるばかりのむら雨にところせきまで濡れし袖かな

物いひ侍りける男の晝はかよひつゝ夜とまらざりければよめる

一宮紀伊

我が戀はあまの原なる月なれや暮るれば出づる影をのみ見る

大貳高遠物いひ侍りける女の家の傍に又忍びて物いふ女の家侍りけり門の前より忍びて渡り侍りけるをいかでか聞きけむ女の許より遣はしける

讀人しらず

過ぎてゆく月をも何にうらむべき待つ我が身こそ哀れなりけれ

かへし

大貳高遠

杉立てる門ならませば問ひてまし心のまつはいかゞ知るべき

題しらず

和泉式部

○みま草　馬を飼ふためのまぐさ

○なやまし　苦しい。うれはしい

○暮るれば出づる影　夜はとまらずに歸ることを云つたもの。

○心のまつ　待つと松とをかけたもい。

○津の國のこや　こやは地名。それを來やにかけたもの。
○蘆の八重ぶき　隙のないと云ふこと。

○青つゞら　くるの序。くるは、繰ると苦しとをかけたもの。

○かたむすびなる　かたく結ぶといふのを、逢ふことの難いにかけたもの。

○淺きをふかく　男の心の淺いのを深く。

津の國のこやとも人をいふべきに隙(ひま)こそなけれ蘆の八重ぶき

兼仲朝臣のすみ侍りける時忍びたる人かたがたにあふ事かたく侍りければよめる

高階章行朝臣女

人目のみしげきみ山の青つゞらくるしき世をもおもひわびぬる

題しらず

讀人しらず

こぬもうくくるも苦しき青つゞらいかなるかたに思ひ絶えなむ

人の娘の親にも知られで物いふ人侍りけるを親聞きつけていひ侍りければ男まらで來りけれど歸りにけりと聞きて女にかはりて遣はしける

讀人しらず

知るらめや身こそ人目をはゞかりの關に涙はとまらざりけり

忍びて物思ひ侍りける頃色にやしるかりけむうちとけたる人などか物むづかしげにといひ侍りければ心の中になむ思ひける

相摸

もろともにいつか解くべき逢ふ事のかたむすびなる夜半の下紐

物いひわたる男の淵は瀨になどいへりける返事によめる

赤染衞門

淵やさは瀨にはなりける飛鳥川淺きをふかくなす世なりせば

道濟が田舍へまかり下りけるに女のもとよりつかはしける

讀人しらず

○夜がれむ牀　夜の通ひの絕えた牀。
○夕占をとはせけるに　夕占を卜はせたところが。
○よに來じ　決して來ないだらう
○來ぬまでも　來ないにしても。
○あすに我が身や云々　明日まで生きて居ることも出來まい。

相見ではありぬべしやと心みる程は苦しきものにぞありける

心ならぬ事や侍りけむ語らひける女の許に罷りて枕に書きつけ侍りける　　右大臣

我が心こゝろにもあらでつらからば夜がれむ牀の形見ともせよ

男の來むといひ侍りけるを待ちわづらひて夕占(ゆふけ)をとはせけるによに來じと告げ侍りければ心細く思ひてよみ侍りける　　讀人しらず

來ぬまでも待たましものをなか〳〵に頼む方なきこの夕けかな

入道攝政九月ばかりの事にや夜がれして侍りけるつとめてふみおこせて侍りける返事につかはしける　　大納言道綱母

消え返り露もまだひぬ袖の上に今朝はしぐるゝ空もわりなし

なかの關白の女の許より曉に歸りて内にも入らで外(と)に居ながら歸り侍りければよめる　　馬内侍

あかつきの露はまくらにおきけるを草葉の上となに思ひけむ

あすの程にまで來むといひたる男に　　相摸

昨日けふ歎くばかりの心地せばあすに我が身やあはじとすらむ

雨のいたら降る日涙の雨の袖になどいひたる人に　　和泉式部

輔親物いひ侍りける女の許によべは雨の降りしかばはゞかりてなどいへりける返事にとく止みにしものをとて女のつかはしける　　讀人しらず

見し人に忘られてふる袖にこそ身をしる雨はいつもをやまね

忍びて通ふ女の又こと人に物いふと聞きてつかはしける　　藤原能通朝臣

わすらるゝ身を知る雨は降らねども袖ばかりこそ乾かざりけれ

かたらひ侍りける女のこと人に物いふと聞きてつかはしける　　藤原實方朝臣

越えにける浪をば知らで末の松千代までとのみ頼みけるかな

清少納言人に知らせで絕えぬ中にて侍りけるに久しう音づれ侍らざりければよそ〳〵にて物などいひ侍りけり女さし寄りて忘れにけりなどいひ侍りければよめる

浦風になびきにけりな里のあまのたく藻の煙こゝろよわさは

男かれ〴〵になり侍りける頃よめる　　讀人しらず

忘れずよまた忘れずよかはらやのしたたく煙したむせびつゝ

かれ〴〵なる男のおぼつかなくなどいひたりけるによめる　　大貳三位

風の音の身にしむばかり聞ゆるは我が身に秋やちかくなるらむ

ありま山ゐなのさゝ原かぜ吹けばいでそよ人を忘れやはする

○忘られてふる　忘られて日を經る。

○越えにける浪　末の松山を越えた浪。女の心がはりしたこと。

○いでそよ　どうして。なにとして。上の三句、そよを云ふための序。

○今宵さへあらば　今宵もまた來ないならば。

○今日をすぐさぬ命ともがな　今日だけの命であつてほしい。

右大將道綱ひさしう音せでなど恨みぬぞといひて侍りければむすめにかはりて　赤染衛門

恨むとも今はみえじと思ふこそせめて辛さのあまりなりけれ

夜每に來むといひて夜がれし侍りける男のもとにつかはしける　和泉式部

今宵さへあらばかくこそ思ほえめけふ暮れぬ間の命ともがな

をとこ恨むることやありけむ今日をかぎりにて又は更に音せじといひて出で侍りにければいかにかおもひけむ晝つ方おとづれて侍りけるによめる　赤染衛門

あすならば忘らるゝ身になりぬべし今日をすぐさぬ命ともがな

題しらず　藤原長能

厭ふとは知らぬにあらず知りながら心にもあらぬ心なりけり

七月七日二條院の御方に奉らせたまひける　後冷泉院御製

逢ふ事は棚ばたつめにかしつれど渡らまほしきかさゝぎの橋

後拾遺和歌集　第十三

戀　三

陽明門院皇后宮と申しける時久しく内に參らせ給はざりければ五月五日うちより奉らせ給ひける　　後朱雀院御製

菖蒲草かけしたもとのねを絶えてさらにこひぢに迷ふころかな

ぶくに侍りける頃忍びたる人につかはしける　　清原元輔

藤衣はつるゝ袖のいとよわみ絶えてあひ見ぬほどぞわりなき

高階成順石山にこもりて久しう音し侍らざりければよめる　　伊勢大輔

みるめこそあふみの海にかたからめ吹きだに通へ志賀のうら風

逢ひそめて又も逢ひ侍らざりける女に遣はしける　　叡覺法師

秋風に靡きながらも葛の葉のうらめしくのみなどか見ゆらむ

津の國にあからさまにまかりて京なる女につかはしける　　大江匡衡朝臣

こひしきになにはの事もおもほえずたれ住吉の松といひけむ

源遠古が娘に物いひわたり侍りけるに彼が許にありける女を又つかへ人

○こひぢ　戀路と泥とをかけたもの。

○はつるゝ　ほつれる。

○絶えてあひ見ぬ　絲が弱さにさいふを受けて、絶えてと云ひ、更に少しも逢はぬ意に掛けたもの。

○みるめこそ云々　海松を近江の湖に求めることは難からうと、逢うて相見るといふことは難からうことを通はしたもの。

○うらめしく　葛の葉の裏とかけたもの。

○とふさ　木の末。（歌林良材）

○心におとる身　心は遠くに行くが身は心のやうに遣ることが出來ぬ意。

○たまさかに　時々に。

○ゆきあふ坂の云々　逢ふことがなかつたならば。

○これよりこゆる云々　今度はこれから行きますと、これ以上の物思ひはないとにかけたもの。

あひすみ侍りけり伊勢の國に下りて都戀しうおぼえけるにつかへ人もおなじ心にや思ふらむとおしはかりてよめる　祭主輔親

我が思ふみやこの花のとふさゆゑ君もしづえのしづこゝろあらじ

橘則光朝臣陸奥守にて侍りけるにおくの郡にまかり入るとて春なむ歸るべきといひおこせて侍りければ女のよめる　光朝法師母

片しきの衣のすそはこほりつゝいかですぐさむ解くる春まで

遠き所なる女に遣はしける　藤原國房

戀しさは思ひやるだになぐさむを心におとる身こそつらけれ

人の語らふ女を忍びて物いひ侍りけるに物にまかりて歸りける道にこの女を男田舍へゐて下り侍りけり逢坂の關に行き逢ひてせむかたなく思ひわびて人をかへしていひ遣はしける　大中臣能宣朝臣

いづ方を我ながめましたまさかにゆきあふ坂の關なかりせば

かへし　讀人しらず

往き返り後に逢ふともこの度はこれよりこゆる物おもひぞなき

あづまに侍りける人に遣はしける　民部卿經信

東路(あづまぢ)のたびの空をぞおもひやるそなたに出づる月をながめて

かへし　康資王母

思ひやれ知らぬ雲路も入りがたの月より外のながめやはある

同じ人に遣はしける　左近中將隆綱

かへるべき程をかぞへて待つ人はすぐる月日ぞうれしかりける

かへし　康資王母

東屋(あづまや)のかやが下ぶしみだるればいまや月日の行くも知られず

題しらず　藤原惟規

霜がれのかやが下をれとにかくに思ひみだれてすぐすころかな

物へまかりけるに鳴海の渡(わたり)といふ所にて人を思ひ出でてよみ侍りける　增基法師

かひなきはなほ人しれず逢ふことの遙かなるみのうらみなりけり

遠き所に侍りける女に遣はしける　右大辨通俊

思ひやる心のそらにゆき歸りおぼつかなさを語らましかば

清家が父の供にあはの國に下りて侍りける時彼の國の女に物いひ渡り侍りけり父津の國になり移りて罷り上りければ女便(たよ)りにつけて遣はしける　讀人しらず

○入りがたの月云々　東路から都を思ふのであるから、入り方の月と云つたのである。

○みだるれば　かやに應じたもので、思ひ亂れる意。

○遙かなるみのうらみ　鳴海の浦見に、遙かな身の恨みをかけたもの。

心をばいくたの杜にかくれども戀しきにこそ死ぬべかりけれ

賴めたるわらはの久しう見え侍らざりければよみ侍りける　律師慶意

賴めしを待つに日數の過ぎぬれば玉の緒よわみ絶えぬべきかな

源賴綱朝臣父のもとに美濃の國に下り侍りける時彼の國の女にあひて又音もし侍らざりければ女のよめる　讀人しらず

あさましや見しは夢かととふ程におどろかすにもなりぬべきかな

中納言定賴が許に遣はしける　大和宣旨

はる〲と野中に見ゆる忘れ水たえ間〲を歎くころかな

題しらず　大納言忠家

いかばかり嬉しからましおも影に見ゆるばかりの逢ふ夜なりせば

男ありける女を忍びて物いふ人侍りけりひまなきさまを見てかれ〲になり侍りければ女のいひ遣はしける　讀人しらず

我が宿の軒のしのぶにことよせてやがても茂るわすれ草かな

成資朝臣大和の守にて侍りける時物いひ渡り侍りけり絶えて年へにける後宮に參りて侍りける車に入れさせて侍りける　皇太后宮陸奥

逢ふ事を今はかぎりとみわの山杉のすぎにしかたぞこひしき

○おどろかすにも　目のさめること。夢かと思ふうちにその夢もさめたといふ意。

○忘れ水　初句からこの句までは次の絶えにかける序。

○軒のしのぶにことよせて　忍草に忍ぶをかけたもの。

○みわの山　三輪山に見るをかけたもの。

五節に出でて侍りける人をかならず尋ねむといふ男侍りけれど音せざりければ女に代りてつかはしける　　讀人しらず

杉村といひてしるしもなかりけり人のたづねぬみわの山もと

題しらず　　相摸

住吉のきしならねども人知れぬこゝろの中のまつぞわびしき

思ひけるわらはの三井寺にまかりて久しう音もし侍らざりければよみ侍りける　　僧都遍救

あふ坂の關の淸水やにごるらむ入りにし人のかげの見えぬは

題しらず　　左京大夫道雅

涙やはまたも逢ふべきつまならむ泣くより外のなぐさめぞなき

かたらひ侍りけるわらはのこと人に思ひつきければ久しう音もせで侍りけるにさすがに覺えければよみてつかはしける　　前律師慶暹

よそ人になり果てぬとや思ふらむ恨むるからに忘れやはする

忘れじとちぎりたる女の久しうあひ侍らざりければ遣はしける　　大中臣輔弘

つらしとも思ひ知らでぞやみなまし我もはてなき心なりせば

久しうとはぬ人の音づれて又音もせずなり侍りにければいひ遣はしける

○まつぞわびしき　待つに松をかけたもの。

○又も逢ふべきつま　つまはゆかりの意。

○恨むるからに云々　恨むのは思ふからの事である。だから忘れたのではないといふ意。

○はてなき心　末遂げぬ心。

和泉式部

なか〳〵にうかりしまゝにやみにせば忘るゝ程になりもしなまし

題しらず

うき世をもまた誰にかはなぐさめむ思ひ知らずもとはぬ君かな

物いひわたり侍りける女おやなどにつゝむ事ありて心にも叶はざりければよめる　源政成

逢ふまでや限りなるらむと思ひしを戀はつきせぬ物にぞありける

伊勢の齋宮わたりよりまかり上りて侍りける人に忍びて通ひける事をおほやけもきこし召してまもりめなどつけさせ給ひて忍びにも通はずなりにければよみ侍りける　左京大夫道雅

あふさかはあづま路とこそ聞きしかど心づくしの關にぞありける

榊葉のゆふしでかけしそのかみにおしかへしても渡るころかな

今は唯思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな

又おなじ所に結びつけさせ侍りける

みちのくの緒絶(をだえ)の橋やこれならむふみみ踏まずみ心まどはす

心ざし侍りける女のことざまになりて後石山に籠りあひて侍りければよみ

○うかりしまゝに　以前音づれなかつたまゝに。

○心づくしの關　心を盡す關と、筑紫の關とをかけたもの。

○思ひ絶えなむ　思ひきつてしまはう。忘れてしまはう。

○緒絶の橋　陸奥の歌枕。

○ふみみ踏まずみ　橋の縁で踏み見と云ひ、これに文見とかけたもの。

侍りける　前大納言經輔

こひしさもわすれやはするなか〳〵に心さわがす志賀のうら波

中納言定賴いまは更に來じなどいひて歸りて音もし侍らざりければ遣はしける　相摸

來じとだにいはで絕えなばうかりける人の誠をいかで知らまし

題しらず　和泉式部

誰が袖に君かさぬらむから衣夜な〳〵われにかたしかせつゝ

くろ髮の亂れて知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞこひしき

ある女に　清原元輔

うつり香の薄くなりゆく燒物(たきもの)のくゆる思ひに消えぬべきかな

男に忘られて裝束などつゝみておくり侍りけるにかはの帶に結びつけ侍りける　和泉式部

泣きながす淚に堪へでたえぬればはなだの帶の心地こそすれ

題しらず　相摸

中たゆるかづらき山の岩橋はふみみる事もかたくぞありける

○うかりける人の誠　更に來じと云つておいて來ないから、それを誠と云つたのである。

○淚に堪へでたえぬれば　淚に堪へかねて別れてしまへば。

○はただの帶の心地　催馬樂に、「石河のこまうどに帶をとられて辛きくいするいかなる帶ぞ花田の帶の中は絕えたる。」とあるによつて詠んだもの。

○かづらきの山の岩橋　役行者が架けさせたものといふ。葛城山と金峯山との間をわたす。

○やすれなむと云々　思ふ事叶はぬ身には忘れなむと思ふさへこそ叶はざりけれの意。

○あらざらむこの世のほかのおもひでに　いよ／＼死なうとするに際して來世での思出として。

二條院に侍りける人の許につかはしける　大貳長基

わすれなむと思ふさへこそ思ふ事かなはぬ身には叶はざりけれ

題しらず　高階長成

忘れなむとおもふに濡るゝ袂かな心ながきはなみだなりけり

大納言忠家母

いかばかりおほつかなさを歎かましこの世のつねと思ひなさずば

權僧正靜圓

逢ふ事のたゞひたぶるの夢ならばおなじ枕にまたも寢なまし

心地例ならず侍りける頃人のもとに遣はしける　和泉式部

あらざらむこの世のほかのおもひでに今一度の逢ふこともがな

父の許に越の國に侍りける時重くわづらひて京に侍りける齋院の中將が許に遣はしける　藤原惟規

都にも戀しきことのおほかれば猶このたびはいかむとぞ思ふ

心變りたる人の許に遣はしける　周防内侍

契りしにあらぬ辛さも逢ふ事のなきには得こそ恨みざりけれ

題しらず　西宮前左大臣

忘れなむそれも恨みず思ふらむ戀ふらむとだに思ひおこせよ

七月七日女の許に遣はしける　　藤原道信朝臣

年のうちにあはぬ例の名を立ててわれ棚機にいまるべきかな

　　増基法師

棚機をもどかしとのみ我が見しもはては逢ひ見ぬためしとぞなる

題しらず　　馬内侍

くもでさへかき絶えにけるさゝ蟹の命をいまは何にかけまし

〇年のうちにあはぬ例　一年のうちに一度も逢はぬといふ例。

後拾遺和歌集 第十四

戀四

心變り侍りける女に人にかはりて　清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつゝすゑの松山なみこさじとは

中納言定頼がもとに遣はしける　公圓法師母

蘆のねのうき身のほどと知りぬればうらみぬ袖も浪は立ちけり

年頃あはぬ人にあひて後につかはしける　道命法師

あひ見しを嬉しきことと思ひしもかへりて後のなげきなりけり

題しらず　藤原元眞

み山木のこりやしぬらむと思ふまにいとゞ思ひの燃えまさるかな

惠慶法師

岩代の杜(もり)のいはじと思へどもしづくに濡るゝ身をいかにせむ

曾根好忠

味氣(あぢき)なし我が身にまさる物やあると戀せし人をもどきしものを

○すゑの松山なみこさじ　心變りすることはあるまい。

○うらみぬ袖　怨まないと浦を見ぬとをかけたもの。

○岩代の杜の　岩代の語呂からいはじと續け、もりに對してしづくと云つたもの。

○もどきしものを　非難したのに

和泉式部

われといかにつれなくなりて試みむつらき人こそ忘れがたけれ

忍びて物思ひける頃によめる　　相模

怪しくもあらはれぬべき袂かな忍び音にのみぬらすと思へど

西宮前左大臣

うち忍びなくとせしかどきみ戀ふる涙は色にいでにけるかな

承暦二年内裏歌合によめる　　辨乳母

戀すとも涙のいろのなかりせばしばしは人に知られざらまし

題しらず　　源道濟

ひと知れぬ戀にし死なばおほかたの世のはかなきと人やおもはむ

忍びたる女に　　堀河右大臣

人しれず顔には袖を覆ひつゝ泣くばかりをぞなぐさめにする

冬の夜の戀をよめる　　藤原國房

おもひわびかへす衣のたもとより散るやなみだの氷なるらむ

題しらず　　清原元輔

なぐさむる心はなくて夜もすがらかへす衣のうらぞ濡れける

○われといかに云々　一本に、われといかでつれなき人をとある。

○かへす衣　夢に見ようとするためである。

○心や行きて云々　思つてゐる自分の心が行つて戀人の目をさますだらう。

○まろ　自分。

○さゝがにの　いづくのいにかけた序。

讀人しらず

世の中にあらばぞ人のつらからむと思ふにしもぞ物は悲しき

道命法師

夜な〳〵は眼のみさめつゝ思ひやる心や行きておどろかすらむ

平兼盛

おもふてふ事はいはでも思ひけりつらきも今はつらしと思はじ

中原頼成妻

男の絶えて侍りけるに程へて遣はしける

思ひやる方なきまゝに忘れ行く人のこゝろぞうらやまれける

能因法師

題しらず

閨ちかき梅のにほひに朝な〳〵あやしくこひのまさる頃かな

相模

あやふしと見ゆるとだえのまろ橋のまろなどかかるもの思ふらむ

和泉式部

世の中に戀てふ色はなけれども深く身にしむ物にぞありける

清原元輔

あり所知らぬ女に

さゝがにのいづくに人はありとだに心細くも知らでふるかな

○こひしさのうきに云々　つらさにまぎれて戀しさが忘れられるものならば。

○命もがな　命が惜しい。

○空なる星もしるものを　空の星でも數へれば數へられてその數がわかる。

堀河の右大臣の許に遣はしける　　大貳三位

こひしさのうきにまぎるゝ物ならばまたふたゝびと君を見ましや

題しらず　　藤原有親

あればこそ人もつらけれあやしきは命もがなと頼むなりけり

露おきたる萩にさして女の許につかはしける　　源道濟

庭の面(おも)の萩のうへにて知りぬらむものおもふ人の夜半の袂は

題しらず　　相摸

我が袖を秋の草葉にくらべばやいづれか露のおきはまさると

ありそ海の濱のまさごをみなもがなひとりぬる夜の數にとるべく

藤原長能

數ふれば空なる星もしるものをなにをつらさの數にとらまし

二月ばかりに女の許に遣はしける　　藤原道信朝臣

つれ〴〵と思へばながき春の日にたのむ事とはながめをぞする

五月五日に人の許に遣はしける　　和泉式部

ひたすらに軒の菖蒲(あやめ)のつく〴〵と思へばねのみかゝる袖かな

題しらず

○戀をばけたぬ　戀の思ひを消さぬ。

○くるしくてのみ　ます田の池の浮ぬなはは繰るの縁から次の語にかけた序。

○よそにふる　降ると經るとをかけたもの。

○忘られぬべきもの　忘られるもの。

たぐひなきうき身なりけり思ひしる人だにあらば問ひこそはせめ

君こふる心はちゞに碎くれどひとつもうせぬものにぞありける

小　辨

涙川おなじ身よりは流るれど戀をばけたぬものにぞありける

源　道　濟

わが戀はます田の池のうきぬなはくるしくてのみ年をふるかな

西宮前左大臣

大方にふるとぞ見えし五月雨は物思ふ袖の名にこそありけれ

よそにふる人はあめとや思ふらむ我が目にちかきそでの雫を

日にそへて憂き事のみも增るかな暮れてはやがて明けずもあらなむ

天徳四年内裏歌合によめる　藤　原　元　眞

君戀ふとかつは消えつゝ程ふるをかくてもいける身とや見るらむ

題しらず

こひしさの忘られぬべきものならば何にか生ける身をも恨みむ

中納言定頼が許に遣はしける　大　和　宣　旨

戀しさを忍びもあへずうつせみのうつし心もなくなりにけり

小辨が許につかはしける　　民部卿經信

君がためおつる涙の玉ならばつらぬきかけて見せましものを

題しらず　　西宮前左大臣

ちぎりあらば思ふがごとぞおもはまし怪しや何の報いなるらむ

女につかはしける　　入道攝政

今日死なばあすまで物は思はじと思ふにだにも叶はぬぞうき

題しらず　　相摸

おもひには露の命ぞきえぬべきことの葉にだにかけよかし君

永承六年内裏歌合に

やくとのみ枕のしたに潮たれてけぶり絶えせぬとこの浦かな

恨みわびほさぬ袖だにあるものを戀にくちなむ名こそ惜しけれ

題しらず　　和泉式部

神無月よはの時雨にこと寄せてかたしく袖をほしぞわづらふ

藤原長能

さまぐ\に思ふこゝろはあるものをおしひたすらに濡るゝ袖かな

○おつる涙の玉ならば　流れ落ちる涙が若しも玉であるならば。

○思ふにだにも　思ふたゞそれだけのことさへも。

○ことの葉にだに　言葉だけでもといふのに、露の命の縁で葉と云つたもの。

○世にすみがまの　世に住むと炭竈とをかけたもの。

○かるもかき　猪が眠らうとする時に行ふもので、枯草を掻き集めて臥す意。

我か心かはらむ物かかはらやの下たくけぶりわきかへりつゝ

かれ〴〵になり侍りける男によめる　　藤原範永朝臣女

うちはへてくゆるも苦しいかでなほ世にすみがまの煙絶えなむ

題しらず　　和泉式部

人の身も戀にはかへつ夏蟲のあらはに燃ゆと見えぬばかりぞ

かるもかき臥猪(ふする)の牀(とこ)のいを安(やす)みさこそ寝ざらめかからずもがな

女の許につかはしける　　入道攝政

我が戀は春の山べにつけてしを燃えても君が目にも見えなむ

かへし　　大納言道綱母

春の野につくる思ひの數多(あまた)あればいづれを君が燃ゆるとか見む

おなじ女に　　入道攝政

春日野は名のみなりけり我が身こそ飛火(とぶひ)ならねども燃え渡りけれ

永承四年内裏歌合によめる　　相摸

いつとなく心空なるわが戀や富士のたかねにかゝるしらくも

堀河右大臣

うしとても更に思ひぞかへされぬ戀はうらなき物にぞありける

つらかりける女に　　平兼盛

難波がた汀のあしのおひのよにうらみてぞふる人のこゝろを

題しらず　　源重之

松島やをしまの磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか

盛少將

かぎりぞと思ふにつきぬ涙かなおさふる袖もくちぬばかりに

雨のふり侍りける夜女に　　藤原長能

かきくらし雲まも見えぬ五月雨はたえず物思ふ我が身なりけり

題しらず　　相摸

涙こそ近江の海となりにけれ見るめなしてふながめせしまに

露ばかり逢ひそめたる男の許につかはしける　　和泉式部

白露もゆめもこの世もまぼろしもたとへていはば久しかりけり

○見るめなし　見る目なしと、海松なしとをかけたもの。

○西には山の云々　月は山の端に入るものといふ考へから云つたもの。

○さすにまかせて　月の光のさすと、棹をさすとを通はせたもの。

後拾遺和歌集　第十五

雜　一

題しらず　　善滋爲政朝臣

年ふれば荒れのみまさる宿のうちに心ながくもすめる月かな

宇治忠信女

月かげの入るを惜しむもくるしきに西には山のなからましかば

藤原爲時

われひとりながむと思ひし山里におもふことなき月もすみけり

舟中月といふ心をよみ侍りける　　源師賢朝臣

水馴棹（みなれざを）とらでぞくだすたかせ舟月のひかりのさすにまかせて

池上月をよめる　　良暹法師

月影のかたぶくまゝに池みづをにしへながると思ひけるかな

後冷泉院の御時后の宮にて月をよみ侍りける　　大藏卿長房

月影は山のは出づるよひよりもふけゆく空ぞ照りまさりける

連夜に月を見るといふ心をよみ侍りける　源頼家朝臣

敷妙(しきたへ)のまくらの塵やつもるらむ月のさかりはいこそ寢られぬ

月のいと面白う侍りける夜きし方ゆく末もありがたき事など思ひ給へて内より輔親が六條の家に罷れりけるに夜更けにければ人もあらじと思ひ給ひけるにすみあらしたる家のつまに出でゐて前なる池に月のうつりて侍りけるを眺めてなむ侍りけるおなじ心にもなどいひてよみ侍りける　懷圓法師

池水はあまの川にやかよふらむそらなる月のそこに見ゆるは

中納言泰憲近江守にて侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるに月をよみ侍りける　永胤法師

いづかたへ行くとも月の見えぬかなたなびく雲の空になければ

永承四年內裏歌合に月をよめる　江侍從

いつよりもくもりなき夜の月なれば見る人さへに入りがたきかな

麗景殿の女御の家の歌合に　堀河右大臣

山のはのかからましかば池水にいれども月はかくれざりけり

題しらず　加賀左衞門

○家のつま　家の端。緣のやうなところ。

○いれども月は云々　一本に、いるとも月は隱れざらましとある。

宿ごとにかはらぬものは山のはの月待つほどのこゝろなりけり

依レ月客來といふ心をよめる　　永源法師

われひとり眺めてのみや明さまし今宵の月のおぼろなりせば

賀陽院におはしましける時石立て瀧落しなどして御覽じける頃九月十三夜になりければ　　後冷泉院御製

岩間より流るゝ水ははやけれどうつれる月のかげぞのどけき

月の夜中納言定頼が許に遣はしける　　彈正尹淸仁親王

板間あらみ荒れたる宿のさびしきは心にもあらぬ月を見るかな

その夜かへしはなくて二三日ばかりありて雨の降りける日かの許につかはしける　　中納言定頼

雨ふれば閨の板間もふきつらむ漏りくる月はうれしかりしを

人の許より今宵の月はいかゞといひたるかへりごとに遣はしける　　藤原範永朝臣

月見てはたれも心ぞなぐさまぬをばすて山のふもとならねど

おほやけの御かしこまりにて侍りける頃賀茂の社によるよる參りて祈り申しけるに月のおもしろく侍りければ　　賀茂成助

かくばかり隈なき月をおなじくは心の晴れて見るよしもがな

○板間あらみ　葺いてある板の間がすいてゐるので。○心にもあらぬ月　板の間からもれる月であるから、心にもあらぬと云つたもの。

○御かしこまり　御勘當。御咎め。

○心の晴れて　御咎めも許されて心もはれ／＼と。

鞍馬より出で侍りける人の月のいとをかしかりければくらまの山もかくこそはなど思ひ出でけるを聞きて　齋院中務

住みなるゝみやこの月のさやけきになにかくらまの山のこひしき

かへし　齋院中將

もろともにやまのは出でし月なれば都ながらも忘れやはする

月のあかく侍りける夜小一條のおほいまうち君昔をこふる心よみ侍りけるによめる　清原元輔

天の原月はかはらぬ空ながらありしむかしのよをや戀ふらむ

月の前におもひを述ぶといふ心をよみ侍りける　藤原實綱朝臣

いつとてもかはらぬ秋の月見ればたゞいにしへの空ぞ戀しき

さきの藏人にて侍りける時對レ月懷レ舊といふ心を人々よみ侍りけるに　源師光

つねよりもさやけき秋の月を見てあはれこひしき雲のうへかな

齊信民部卿のむすめにすみ渡り侍りけるにかの女身まかりにければ法住寺といふ所に籠りゐて侍りけるに月を見て　民部卿長家

もろともに眺めしひとも我もなき宿にはひとり月やすむらむ

○くらまの山　鞍馬の山に闇いの意をかけたもの。

○都ながらも　今は都にはゐるが

○ひとり月やすむらむ　月だけが澄むと、月がひとりで住むとをかけたもの。

○賴めて　賴みに思はれて。あてにさせて。

○出でばといひし人　月いでば迎へに來むと云つた兼房朝臣をいふ

○みし世のすみか　以前住んでゐた家。

○出でての後　君がわが家を立ち出でた後。入りぬに對した詞。

兼房朝臣月いでばむかへに來むと賴めて音もせざりければよみ侍りける　江侍從

月見れば山のは高くなりにけり出でばといひし人に見せばや

思ふ事ありける頃山寺に月を見てよみ侍りける　源爲善朝臣

山の端に入りぬる月のわれならばうき世の中にまたはいでじを

山に住みわづらひて奈良にまかりて住み侍りけるに知りたる人もなく父みし世のすみかにも似ざりければ月の面白く侍りけるを眺めてよめる　聖梵法師

むかし見し月のかげにも似たるかなわれとともにや山を出でけむ

中關白少將に侍りける時内の御物忌にこもるとて月の入らぬさきにといそぎ出で侍りければつとめて女に代りてつかはしける　赤染衞門

いりぬとて人のいそぎし月影は出でての後もひさしくぞ見し

例ならずおはしまして位など去らむとおぼしめしける頃月のあかかりけるを御覽じて　三條院御製

心にもあらでうき世にながらへば戀しかるべき夜半の月かな

後朱雀院の御時月のあかかりける夜うへにのぼらせ給ひていかなる事か

申させ給ひけむ　　陽明門院

今はたゞ雲居の月を眺めつゝめぐり逢ふべきほども知られず

來むといひつゝ來ざりける人の許に月のあかかりければつかはしける　　小辨

なほざりの空だのめせで哀れにも待つにかならず出づる月かな

かへし　　小式部

たのめずば待たでぬる夜ぞ重ねまし誰ゆゑか見るありあけの月

月あかく侍りける夜はじとみに女どもの立ちて侍りけるを男まゐらむなどいひ入れよとて侍りければよめる　　讀人しらず

誰とてか荒れたる宿といひながら月よりほかの人をいるべき

こよひ必ずとたのめたる女の許に月あかかりける夜まかりて侍りけるにおろしこめて女のあひ侍らざりければ歸りて又の日つかはしける　　藤原隆方朝臣

よしさらば待たれぬ身をばおきながら月みぬ君は名こそ惜しけれ

月の山のはに入らむとするを見てよみ侍りける　　僧正深覺

眺むれば月傾きぬあはれ我がこの世のほどもかばかりぞかし

侍從の尼廣澤にこもると聞きてつかはしける　　藤原範永朝臣

○空だのめ　あてにならぬ頼み。たのみにした事が詮ないこと。

○はじとみ　半蔀。蔀のたけのひくいもの。

○誰とてか　月より外には、人は誰であつても入れないと云ふ意。

○おろしこめて　戸をおろして。戸をしめて。

○おきながら　起きながら。

山のはにかくれな果てそ秋の月この夜をだにも闇にまどはじ

月を見てよみ侍りける　　中原長國妻

もろともにおなじ憂世にすむ月のうらやましくも西へ行くかな

入道攝政物語などして寢待の月の出づる程にとまりぬべき事などいひたらばとまらむといひ侍りければよみ侍りける　　大納言道綱母

いかにせむ山の端にだにとゞまらで心のそらに出でむ月をば

月の朧なりける夜入道攝政まうで來て物語し侍りけるに賴もしげなき事などいひ侍りければよめる

くもる夜の月と我が身の行末とおぼつかなさはいづれまされり

村上の御時うへに上りて侍りけるにうへおほとのごもりにければ歸りおりてよみ侍りける　　齋宮女御

かくれぬに生ふる菖蒲のうきねして果てはつれなくなる心かな

題しらず　　曾根好忠

川上やあらふの池のうきぬなは憂きことあれやくる人もなし

六條前齋院に歌合あらむとしけるに右に心よせありと聞きて小辨が許に遣はしける　　小式部

○西へ行くかな　極樂淨土は西にあるので、その心を詠んだもの。
○寢待の月　十九日の月。

○いづれまされり　いづれまされりやの意。どちらがまさつてゐるか。
○おほとのごもりにければ　御寢になつたので。

○うきね　憂き寢と浮根とをかけたもの。

○くる人もなし　うきぬなはの縁で繰ると云ひ、それを來るにかけたもの。
○心よせ　心をかたむけること。ひいきすること。

○みぎはに寄せし　汀に寄せると右に心を寄せるとをかけたもの。

○帚木の　伯耆をかけたもの。

あらはれて恨みやせまし隱沼のみぎはに寄せし浪のこゝろを　小辨

かへし

岸とほみたゞよふ浪はなか空によるかたもなきなげきをぞせし

五月五日六條前齋院に物語合し侍りけるに小辨おそく出すとてかたの人々とめてつぎの物語をいだし侍りければ宇治の前太政大臣かの小辨が物語は見どころなどやあらむとてこと物語をとゞめて待ち侍りければ岩がきぬまといふ物語をいだすとてよみ侍りける

ひきすつる岩がき沼の菖蒲草おもひしらずもけふに逢ふかな

はゝきの國に侍りけるはらからの音し侍らざりければたよりにつけて遣はしける　馬内侍

行かばこそ逢はずもあらめ帚木のありとばかりは音づれよかし

煩ふ人の道命をよび侍りけるにまからで又の日いかゞと訪らひに遣はしたりける返事に　讀人しらず

思ひ出でてとふ言の葉を誰見ましつらきにたへぬ命なりせば

わづらひて山里に侍りける頃人のとひて侍りけれど又音もせずなりにければ　中務典侍

山里を尋ねてとふと思ひしはつらきこゝろを見するなりけり

馬の内侍が許に遣はしける　　　　齋宮女御

夢のごとおぼめかれ行く世の中にいつ問はむとか音づれもせぬ

ある人のむすめを語らひつきて久しく音し侍らざりければ　　　　相模

ふみ見ても物思ふ身とぞなりにける眞野の繼橋（つぎはし）とだえのみして

男の許よりけはひのかはりたるはいかに今はまかるまじきかといひおこせて侍りければ

野飼はねど荒れゆく駒をいかゞせむ杜（もり）の下草さかりならねば

忍ぶる事ある女に中納言兼頼忍びて通ふと聞きてをとこ絶え侍りにけり　　　　讀人しらず

中納言さへ又かれ〴〵になり侍りにければ女のよめる

いたづらに身はなりぬともつらからぬ人故とだに思はましかば

赤染右大將道綱に名たち侍りける頃遣はしける　　　　大江匡衡朝臣

あるが上に又ぬぎかくる唐衣みさをもいかゞつくりあふべき

定輔朝臣かれ〴〵になりてほか心などありければ時々引きとゞめよといふ人侍りければ　　　　源雅通朝臣女

わりなしや心にかなふ涙だに身のうきときはとまりやはする

○おぼめかれ行く　ぼんやりしてゆく。これに目離れゆくをかけたもの。

○ふみ見て　文見てもと踏み見てもとをかけたもの。

○眞野の繼橋　攝津國にある。

○野飼はねど云々　我年老いたれば、わが方になつかぬいもよんどころない。「大荒木の杜の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」によつたものである。

○あるが上に又ぬぎかくる　所謂つきがされの意。

熊野へ參るとて人の許にいひつかはしける　道命法師

忘るなよわするゝと聞かばみ熊野のうらのはまゆふ恨みかさねむ

思はむと賴めたりける人のさもあらぬけしきなりければよみ侍りける

忘れじといひつる中は忘れけり忘れむとこそいふべかりけれ

久しくおとづれぬ人のもとに

ものいはで人の心を見るほどにやがて問はれでやみぬべきかな

後冷泉院うせさせ給ひて世の憂きことなど思ひ亂れて籠りゐて侍りけるに後三條院位につかせ給ひて後七月七日參るべき由仰せごと侍りければよめる　周防內侍

天の河おなじながれと聞きながら渡らむことのなほぞかなしき

源賴光朝臣女におくれ侍りける頃霜のおきたるあしたにつかはしける　小大君

この頃の夜半のねざめは思ひやるいかなるをしか霜はふるらむ

大貳國章妻なくなりて秋風の夜寒なる由たよりにつけていひおこせて侍りける返事に遣はしける　清原元輔

おもひきや秋の夜風の寒けきにいもなき牀にひとり寢むとは

○み熊野のうらのはまゆふ　かさねるといふための序。

○ものいはで人の心を見る　こちらから物をいひかけてから人の問はれるのは、眞實の心のほどが分らぬからと思つて先方の心を試みて居る。

○いもなき牀　妻のゐない牀。

春頃爲賴長任など相共に歌よみ侍りけるにけふの事をば忘るなといひわたりて後爲賴朝臣みまかりて又の年の春長任が許に遣はしける

中務卿具平親王

いかなれば花の匂ひもかはらぬを過ぎにし春のこひしかるらむ

能宣みまかりて後四十九日の内にかうぶり給はりて侍りけるに大江匡衡が許より其の由いひおこせて侍りける返事にいひ遣はしける

祭主輔親

墨ぞめにあけの衣をかさね著てなみだの色のふたへなるかな

陸奧にまかり下りけるにしのぶの郡といふ所にはやう見し人を尋ねければその人なくなりにけりと聞きて

能因法師

淺茅原あれたるやどはむかし見し人を忍ぶのわたりなりけり

母におくれ侍りて又の年のわざなど過ぎてつれ／＼にはべりける夕暮に塵積りたる琴などおしのごひてひくとはなけれど今は程など過ぎにければ折々ならしけるをばなりける人のあひすみける方よりことの音きけば物ぞ悲しきなどいひおこせて侍りける返事によめる

大納言道綱朝臣

亡き人は音づれもせで琴の緒をたちし月日ぞかへり來にける

母に後れて侍りける頃兄弟のかた／＼にはとぶらひの人々まで來けれどわが方には音づるゝ人も侍らざりければ

源經隆朝臣

○墨ぞめにあけの衣を　墨ぞめは喪服。あけの衣は五位の服。喪中に加階を賜うたことをいふ。

しぐるれどかひなかりけり埋木はいろづく方ぞ人もとひける

物思ひける頃時雨いたく降り侍りけるあした今宵の時雨はなど人の音づれて侍りければよめる　少將井尼

人しれず落つるなみだの音をせば夜半の時雨におとらざらまし

故中宮うせ給ひての又の年の七月七日宇治前太政大臣の許につかはしける　後朱雀院御製

去年(こぞ)のけふ別れし星も逢ひぬめりなどたぐひなき我が身なるらむ

後朱雀院うせ給ひてうちつゞき世のはかなき事ども侍りける頃花の面白く侍りければ　小左近

はかなさによそへて見れば櫻花折しらぬにやならむとすらむ

故皇太后宮うせ給ひてあくる年その宮の櫻の花面白く咲きたりけるに人人いと口惜しくなどいひければ　辨乳母

形見ぞとおもはで花を見しだにも風をいとはぬ春はなかりき

世の中はかなくて右大將道房かくれ侍りぬと聞きて　小辨

數ならぬ身のうき事は世の中になきうちにだに入らぬなりけり

たゞにもあらで里にまかり出でて侍りけるに十月ばかり程近うなりてう

○埋木　作者が自身のことを云つたもの。○いろづく方　兄弟の方をさしたもの。世のおぼえはなやかなことをいふ。

○折しらぬ　世のはかない頃であるから、花の咲いたのを咲くべき折でないと見たのである。

○世の中になき中　死ぬる人の中

○けぬべき程　消えるたらう時。
死ぬる時。

ちより御とぶらひありける返事にたてまつり侍りける

齋宮女御

かれはつる淺茅が上の霜よりもけぬべき程をいまかとぞ待つ

後朱雀院うせさせ給ひて上東門院白河にわたり給ひて嵐のいたく吹きけるつとめてかの院に侍りける侍從内侍の許につかはしける

藤原範永朝臣

いにしへをこふる寐ざめやまさるらむ聞きもならはぬ峯のあらしに

○夜がれがち　夜の通ひが絶えることが多くなる。

○たのむるくれ　くれは材木と暮との意をかけたもの。三の句の大井川はくれを云ふための序。

○猶このくれも　前のくれと同じ意。

後拾遺和歌集 第十六

雜 二

入道攝政夜がれがちになり侍りける頃くれにはなどいひおこせて侍りければいひ遣はしける　　大納言道綱母

かしは木の杜の下草くれごとに猶たのめとやもるを見る〳〵

來むといひて來ざりける人の暮にかならずといひて侍りける返事に　　馬内侍

待つほどのすぎのみゆけば大井川たのむるくれも如何とぞ思ふ

女の許にくれにはと男いひ遣はしたるかへり事によみ侍りける　　讀人しらず

淺き瀬をこす筏士のつなよわみ猶このくれもあやふかりけり

中關白通ひ始めける頃よがれして侍りけるつとめて今宵は明しがたくてこそなどいひて侍りければよめる　　馬内侍

ひとりぬる人や知るらむ秋の夜をながしと誰か君に告げつる

忍びたる男の外に出で逢へなどいひ侍りければ　　新左衞門

○みあれ　賀茂神社で四月の中の酉の日に行ふ祭禮。

○その色の草とも見えず　葵を逢ふ日にかけて、逢ふといふ心も見えないと云つたもの。

○あらがひけるを　爭つてゐたのを。

春霞たち出でむ事もおもほえず淺みどりなるそらのけしきに

爲家朝臣物いひける女にかれ〴〵になりて後みあれの日くれにはといひて葵をおこせて侍りければむすめに代りてよみ侍りける　　小馬命婦

その色の草とも見えず枯れにしをいかにいひてか今日はかくべき

男の夜更けてまうで來て侍りけるに寢たりと聞きて歸りにければつとめてかくなむありしと男のいひおこせて侍りける返事に　　和泉式部

ふしにけりさしも思はば笛竹の音をぞせまし夜更けたりとも

よひの程まうで來りける男のとく歸りにければ

やすらはでたつにたてうき槇の戶をさしも思はぬ人もありけり

小式部内侍の許に二條前太政大臣はじめてまかりぬと聞きて遣はしける　　堀河右大臣

人知れずねたさもねたしむらさきの根摺の衣うはぎにもせむ

かへし　　和泉式部

ぬれぎぬと人にはいはむむらさきの根摺の衣うはぎなりとも

平行親藏人にて侍りけるに忍びて人の許に通ひながらあらがひけるを見あらはして　　兵衛内侍

秋霧はたちかくせども萩原にしかふしけりと今朝見つるかな

實方朝臣の娘に文通はしけるを藏人行資にあひぬと聞きてこの女の局にうかゞひて見あらはしてよみ侍りける　　左兵衞督公信

朝な〳〵起きつゝ見ればしら菊の霜にぞいたくうつろひにける

大江公資相摸守に侍りける時諸共に彼の國に下りて遠江守にて侍りける頃忘られにければこと女をゐて下ると聞きてつかはしける　　相摸

逢坂のせきにこゝろは通はねど見しあづまぢはなほぞ戀しき

左大將朝光通ひ侍りける女にあだなること人にいはるなりといひ侍りければ女のよめる　　讀人しらず

蓴(ねぬなは)のねぬ名のいたく立ちぬればなほ大(おほ)さはのいけらじや世に

太政大臣かれ〴〵になりて四月ばかりにまゆみのもみぢを見てよみ侍りける　　藤原兼平朝臣母

住む人のかれ行くやどは時わかず草木も秋の色にぞありける

女の許にてあかつき鐘を聞きて　　小一條院

曉の鐘のこゑこそきこゆなれこれをいりあひとおもはましかば

男の隔つる事もなく語らはむなどいひ契りていかゞ思ほえけむひるまに

○しかふしけりと　鹿が臥してゐたといふに、そのやうにして臥してゐたと云ひかけたもの。

○ねぬ名　寢もせぬ名。

○大さはのいけらじや　大澤の池に、生きてゐまいと云ひかけたもの。

○まゆみのもみぢ　檀の若葉の萌え出たもの。

はかくれもしつべくなどいひて侍りければ　　和泉式部

いづくにか來ても隱れむ隔てつる心の隈のあらばこそあらめ

來むといひてたゞにあかしてける男の許に遣はしける

休(やす)らひに槇の戸こそはさゞらめいかに明けぬる冬の夜ならむ

後三條院坊におはしける時女房の局の前に柳の枝を植ゑて侍りけるをよひに物語などして歸りたるあしたその柳なかりければよべの人のとりたるかとてこひにおこせたりければ　　藤原顯綱朝臣

青柳のいとになき名ぞ立ちにける夜くる人はわれならねども

皇后宮みこの宮の女御と聞えける時里へまかり出で給ひにければそのつとめて咲かぬ菊にさして御消息ありけるに　　後三條院御製

まだ咲かぬ籬の菊もあるものをいかなる宿にうつろひぬらむ

忘れじといひ侍りける人のかれ／＼になりて枕箱とりにおこせて侍りけるに　　馬内侍

玉くしげ身はよそ／＼になりぬともふたり契りし事な忘れそ

物へまかるとて人のもとにいひおき侍りける　　和泉式部

何方(いづかた)に行くとばかりは告げてまし問ふべき人のある身と思はば

○隔てつる心の隈の云々　隔てた心の奥の暗いところがあるならば、そこに隠れるだらうが。

○いかに明けぬる　戸を開けることを、夜が明けることを云ひかけたもの。

○坊におはしける時　東宮坊にいらつしやつた時。皇太子で居られた時。

○夜くる人　夜忍んで通つて來る人。

○うつろひぬらむ　色のうつろふこと、宿に移ることをかけたもの。

○ふたり　玉くしげの縁で、はじめに身と云つたのに對して蓋と云ひ、併せて二人の戀にかけたもの

○告げてまし　告げよう。

忍びたる男雨の降る夜まで來て濡れたるよし歸りていひおこせて侍りければ

かくばかりしのぶる雨を人とはばなにに濡れたる袖といふらむ

人の許にふみやる男を恨みやりて侍りける返事にあらがひ侍りければ

空になる人の心はさゝがにのいかに今日またかくてくらさむ

男の物いひ侍りける女を今は更にいかじといひて後雨のいたく降りけるにまかりけりと聞きてつかはしける

み笠山さしはなれぬと聞きしかど雨もよにとは思ひしものを

年頃住み侍りける女を男思ひはなれて物の具などはこひ侍りければ女のよめる　　讀人しらず

歎かじな終(つひ)にすまじき別れかはこれはある世にと思ふばかりを

兼房朝臣女の許にまうで來て物語し侍りけるをかくと聞きてうたてといひ遣はしたりける返事に物越(ものごし)になむと女のいひおこせて侍りければよめる　　中納言定頼

いにしへのきならし衣いまさらにそのものこしのとけずしもあらむ

大貳資通むつまじき樣になむいふと聞きてつかはしける　　相摸

○さゝがにの　いを云ふための序

○終にすまじき別れかは　いつかは別れる別れである。

○そのものこしの　物越のこ、裳の腰のこをかけたもの。

○柏木　兵衛の異名。

○わだのはら立つ白波　腹立つの意を含めたもの。

まことにや空になき名のふりぬらむあま照る神のくもりなきよに

元輔文かよはしける女に諸共にふみなど遣はしけるに元輔にあひて忘られにけりと聞きて女の許につかはしける　藤原長能

懲りぬらむあだなる人に忘られて我ならはさむ思ふためしに

入道前太政大臣兵衛佐にて侍りける時一條左大臣の家にまかりそめてかくなむあるとは知りたりやといひおこせて侍りける返事によめる　馬内侍

春雨のふるめかしくも告ぐるかなはや柏木のもりにしものを

早う住み侍りける女の許に罷りて端の方にゐて侍りけるにぬる所の見え侍りければ　清原元輔

いにしへの常世(とこよ)の國やかはりにしもろこしばかり遠く見ゆるは

赤染衛門うらむる事侍りける頃つかはしける　右兵衛督朝任

わだのはら立つ白波のいかなれば名殘久しく見ゆるなるらむ

かへし　赤染衛門

風はたゞ思はぬかたに吹きしかどわだのはらたつ浪はなかりき

中納言定頼家をはなれてひとり侍りける頃住み侍りける所のこしば垣の中におかせ侍りける　相摸

人しれず心ながくや時雨るらむふけゆく秋の夜半の寐ざめに

女の許にまかりたりけるにあづま琴をさし出して侍りければ　大江匡衡朝臣

逢坂の關のあなたもまだ見ねばあづまの琴も知られざりけり

十月ばかりまで來りける人の時雨し侍りければたゝずみ侍りけるに　馬内侍

かき曇れしぐるとならば神無月こゝろそらなる人やとまると

大納言行成物語などし侍りけるに内の物忌にこもればとて急ぎ歸りてつとめて鳥の聲にもよほされてといひおこせて侍りければ夜深かりける鳥の聲は函谷關のことにやといひ遣はしたりけるを立ち歸りこれは逢坂の關に侍りとあればよみ侍りける　清少納言

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ

みわの社わたりに侍りける人を尋ぬる人にかはりて　素意法師

ふるさとのみわの山邊をたづぬれどすぎまの月の影だにもなし

はらからなどいはむといふ人の忍びて來むといひたるかへり事に　相模

東路(あづまぢ)のそのはらからはきたりとも逢坂までは越さじとぞ思ふ

俊綱朝臣たび〳〵文遣はしけれど返事もせざりけるを猶などいひ侍りけ

○あづま琴　やまと琴。わが國の古代からあるもので、神樂や[illegible]樂に用ゐる。六絃。

○函谷關云々　孟嘗君の故事によつたもので、早く歸る計略の意を含めたもの。

○鳥のそら音　鳥の擬聲。鷄のうそ鳴き。

○はかるとも　たばかつても。いつはつても。

○そのはらからはきたりとも　はらからを、信濃國の昔の原からは來たとても云ふにかけたもの。

○逢坂までは　逢ふの意を含めたもの。

○ことの葉をさへ　言の葉と櫻の葉とをかけたもの。

○冰とけなば　自分の冷やかな心が解けたならば。

○ねたくと思ふ　妬く思ふと、寢たく思ふとをかけたもの。

れば櫻の花に書きて遣はしける　兵衛姫君

ちらさじと思ふあまりにさくら花ことの葉をさへをしみつるかな

睦まじくもなき男に名立ちける頃其の男の許より春もたちぬ今はうち解けねかしなどいひ侍りければ　下野

さらでだに岩間の水はもるものを冰とけなば名こそながれめ

能通朝臣女を思ひかけて石山に籠りてあはむ事を祈り侍りけるにあふ由の夢を見て女のめのとにかくなむ見たるといひ遣はして侍りければかくよみて遣はしける　四條宰相

祈りけむことは夢にて限りてよさても逢ふてふ名こそ惜しけれ

資長朝臣藏人にて侍りける時園韓神（そのからかみ）のまつりの內侍にもよほすとてみそぎすれど此の世の神はしるしなければ園韓神に祈らむといひて侍りける返事によめる　少將內侍

近きだにきかぬみそぎを何かそのから神まではとほく祈らむ

家綱朝臣ふみ通はし侍りけるに逢はぬさきにたえだえになりければ遣はしける　伊賀少將

忘るゝもくるしくもあらず蓴（ねぬなは）のねたくと思ふことしなければ

左衞門藏人にふみ遣はしけるに疎くのみ侍りければちひさき瓜に書きて遣はしける　　少將藤原義孝

ならされぬみそののうりと知りながらよひ曉と立つぞ露けき

人の娘の幼く侍りけるをおとなびてなど契りけるをことざまに思ひなるべしと聞きてそのわたりの人の扇に書きつけ侍りける　　左大將朝光

生ひたつを待つと賴めしかひもなく浪越すべしと聞くはまことか

秋を待てといひたる女に遣はしける　　源道濟

いつしかと待ちしかひなく秋風にそよとばかりも荻の音せぬ

男のふみ通はしけるにこの二十日の程にと賴めけるを待ち遠しといひ侍りければ　　和泉式部

君はまだ知らざりけりな秋の夜の木閒の月ははつかにぞ見る

中納言定賴馬に乘りてまで來りけるを門あけよといひ侍りけるにとかくいひてあけ侍らざりければ歸りける又の日つかはしける　　相摸

さもこそは心くらべに負けざらめ早くも見えし駒のあしかな

物いひかはしける人の音せずと恨みければ　　中原長國

おのづからわが忘るゝになりにけり人の心をこゝろみしまに

○ならされぬ　馴らされぬと、生らされぬとをかけたもの。

○浪越すべし　末の松山を浪が越すの意。心がはりするだらうといふこと。

○はつかにぞ見る　僅かに見ると二十日に見るとをかけたもの。

つらかりける童を恨むとて音し侍らざりければわらはの許より我さへ人をといひおこせて侍りければ　律師朝範

恨みずばいかでか人にとはれまし憂きも嬉しきものにぞありける

橘則長父の陸奥守にて侍りける頃馬に乗りてまかり過ぎけるを見侍りて男はさも知らざりければ又の日つかはしける　相模

綱たえて離れ果てにしみちのくのをぶちの駒を昨日みしかな

木の葉のいたく散りける日人の許にさしおかせける　中納言定頼

ことの葉につけてもなどか問はざらむ蓬の宿もわかぬあらしを

かへし

八重葺のひまだにあらば蘆の屋に音せぬ風はあらじとをしれ

三條太政大臣の家に侍りける女承香殿に參り侍りて見し人とだに更に思はずとうらみ侍りければ　藤原實方朝臣

わりなしや身は九重のうちながら問へとは人の恨むべしやは

高階成棟小一條院の御ともに難波に參るとていかに戀しからむずらむといひおこせ侍りければ　中宮内侍

しばしこそ思ひも出でめ津の國のながらへ行かば今わすれなむ

○八重葺の　ひまを云ふための序
○ひまだにあらば　いさゝかのすき間さへあればさへあればこをかけたもの。
○あらじとをしれ　をは感動の助詞。
○今わすれなむ　すぐに忘れるだらう。

人にはかなきたはぶれ事いふとて恨みける人に　　上總大輔

これもさはあしかりけりな津の國のこや事つぐる始めなるらむ

小一條院かれ〴〵になり給ひける頃よめる　　土御門御匣殿

心えつ蜑のたくなはうちはへてくるを苦しとおもふなるべし

日頃牛をうしなひて求めわづらひけるほどにたえ〴〵になりける女の家にこの牛入りて侍りければ女の許よりひかせてうしと見し心にまさりけりといひおこせて侍りけるかへり事に　　祭主輔親

數ならぬ人を野がひのこゝろにはうしとももの を思はざらなむ

人の局を忍びてたゝきけるに誰そととひ侍りければよみ侍りける　　大貳成章

磯なるゝ人は數多に聞ゆるを誰がなのりそとかりてこたへむ

久しう音せぬ人の山吹にさして日頃のつみはゆるせといひて侍りければ　　和泉式部

とへとしも思はぬ八重の山吹をゆるすといはば折りに來むとや

おなじ人の物よりきたりと聞きておなじ花につけてつかはしける

あぢきなく思ひこそやれつれ〴〵と一人やゐでの山ぶきの花

わづらふといひて久しう音せぬ男の外にはありくと聞きてつかはしける

○こや事つぐる　津の國の昆陽と受けて、併せてこれが事をつげるとかけたもの。

○磯なるゝ人　馴れしたしむ人。

○誰がなのりそと云々　海藻のなのりそを名告りにかけたもの。誰の名前をそつと借りて答へようか

○ねぬなはの　苦しきのくるにかけた序。
○苦しき程　病氣の間。
○まだしら雲の　白雲に、まだ知らぬの意をかけたもの。
○かかるやつらき　白雲が山の端にかかると、かういふのがつらい心と云ふのだらうとかけたもの。
○人のこゝろのあき　心の秋と心の飽きとをかけたもの。

少将内侍

ねぬなはの苦しき程の絶間かとたゆるを知らでおもひけるかな

師賢朝臣の物いひ渡りけるをたえじなど契りて後又たえて年頃になりにければ遣はしけるふみを返すとてその端に書きつけて遣はしける　式部命婦

行くすゑを流れてなににたのみけむ絶えけるものを中河の水

門おそくあくとて歸りける人の許につかはしける　和泉式部

長しとて明けずやはあらむ秋の夜は待てかし槇のとばかりをだに

内より出でばかならず告げむなど契りける人の音もせで里に出でにければ遣はしける　藤原道信朝臣

天の原はるかにわたる月だにも出づるは人に知られこそすれ

題しらず　藤原元眞

憂きこともまだしら雲の山の端にかかるやつらき心なるらむ

齋宮女御

吹くかぜになびく淺茅はわれなれや人のこゝろのあきを知らする

後拾遺和歌集 第十七

雜 三

備中守棟利みまかりにけるかはりを人々望み侍ると聞きて内なりける人の許に遣はしける　　清原元輔

たれかまた年へぬる身をふりすててきびの中山越えむとすらむ

田舍に侍りける頃つかさめしを思ひやりて　　源重之

春ごとにわすられにける埋木は花のみやこをおもひこそやれ

つかさめしにもれての年の秋上のをのこども大井にまかりて舟に乘り侍りけるによめる　　大江匡衡朝臣

河舟に乘りて心の行くときはしづめる身ともおもほえぬかな

大納言公任宰相になり侍らざりける頃よみてつかはしける　　大江爲基

世の中を聞くにたもとの濡るゝかな淚はよその物にぞありける

つかさめし侍りけるに申文にそへて侍りける　　藤原國行

いたづらになりぬる人のまたもあらばいひ合はせてぞねをば泣かまし

○つかさめし　都にある官人の除目。每年秋に行はれる。

○春ごとに　地方官の除目は春正月十一日から十三日までに行はれる。その除目に官位の陞敍されないことを云つたもの。

○しづめる身　船の緣で云つたもの。位階の陞敍もない身。

○申文　うれへぶみ。訴へ申す文書。

小一條右大將に名簿(なづき)たまふとてよみてそへて侍りける　　源重之

陸奥のあだちの眞弓(まゆみ)引くやとて君に我が身をまかせつるかな

後朱雀院の御時とし頃よゐつかうまつりけるに後冷泉院位につかせ給ひて又よゐに參りてのち上東門院にたてまつり侍りける　　天台座主明快

雲の上にひかりかくれし夕よりいく夜といふに月をみつらむ

藏人にて冠たまはりける日よめる　　源經任

限りあれば天の羽衣ぬぎかへておりぞわづらふ雲のかけはし

右大辨通俊藏人頭になりて侍りけるを程へてよろこびいひにつかはすとてよめる　　周防内侍

嬉してふ事はなべてになりぬればいはで思ふに程ぞへにける

後冷泉院の御時藏人にて侍りけるを冠たまはりて又の日大貳三位の局につかはしける　　橘爲仲朝臣

澤水におりゐるたづは年ふともなれし雲居ぞこひしかるべき

同じ御時藏人にて侍りけるに世の中かはりて前藏人にて侍りけるを當時に臨時祭の舞人にまかり入りて試樂の日よめる　　橘俊宗

思ひきや衣のいろはみどりにて三代(みよ)まで竹をかざすべしとは

○よゐ　夜居。夜間寝ないでゐること。

○おりぞわづらふ　殿上から下ることをいふ。

○衣のいろはみどりにて　緑の袍は六位。三代までといふのは後冷泉院以來の三代で、官位の昇進しないのを歎いた歌である。

世の中をうらみて籠りゐて侍りける頃八重菊を見てよみ侍りける　前大納言公任

おしなべて咲く白菊は八重々々の花のしもとぞ見えわたりける

年頃しづみゐてよろづを思ひなげき侍りける頃　藤原兼綱朝臣

待つ事のあるとや人の思ふらむ心にもあらでながらふる身を

はらからなる人の沈みたるよしいひおこせて侍りける返事につかはしける　藤原元眞

君をだに浮べてしがななみだ川しづむ中にもふち瀬ありやと

身のいたづらになりはてぬる事を思ひ歎きつゝ播磨にたび〳〵通ひ侍りけるに高砂の松を見て　藤原義定

われのみと思ひしかども高砂のをのへの松もまだ立てりけり

世の中をうらみける頃惠慶法師が許につかはしける　平兼盛

世の中を今はかぎりと思ふには君こひしくやならむとすらむ

賀茂神主成助が許にまかりて酒などたうべて今まで冠賜はらざりける事を歎きてよみ侍りける　津守國基

もみぢするかつらの中に住吉の松のみひとりみどりなるかな

つかさめしにもれて歎き侍りける頃女のもとにつかはしける　中納言基長

○君こひしくや云々　遁世の心が起るだらうといふ意。

○われ舟　破損した船。○しづみぬる身　舟の沈むと、沈みはてた身。

○思はずに　心からでなく。思ひもかけぬに。

われ舟のしづみぬる身のかなしきは渚に寄する浪さへぞなき

年頃しり侍りける牧のうれへある事ありて宇治前太政大臣にいひ侍りける頃雪ふりたるあした爲仲朝臣の許にいひつかはしける　源兼俊母

尋ねつる雪のあしたのはなれ駒君ばかりこそあとを知るらめ

小一條院春宮ときこえける時思はずに位おり給ひけるに火燒屋(ひたきや)などこぼちさわぐを見てよみ侍りける　堀河女御

雲居まで立ちのぼるべき煙かと見えしおもひの外にもあるかな

同院高松の女御にすみうつり給ひてたえ〴〵になり給ひての頃松風心すごく吹きけるを聞きて

松風は色やみどりに吹きつらむものおもふ人の身にぞしみぬる

題しらず　源道濟

世の中を思ひみだれてつく〴〵とながむる宿に松かぜぞ吹く

世の中心にかなはでうらみ侍りける頃月をながめてよみ侍りける　藤原爲任朝臣

こゝろには月見むとしも思はねどうきには空ぞ眺められける

ことありて播磨へまかり下りける道より五月五日に京へつかはしける　中納言隆家

○うきに生ひたる　浮きにと、憂きにとをかけたもの。浮きは、水のある所をいふ。
○菖蒲しられぬ　菖蒲に、物の善惡もわからぬ意をかけたもの。
○こゞひの杜　伊豆國にある。これに子を戀ふる意をよそへたもの
○あらひと神　現人神。
○なごむ　和む。心がやはらぐ。
○ことわりや　昨日は狩で命をとられるから今宵鳴くのも道理であるの意。

世の中のうきに生ひたる菖蒲(あやめ)ぐさけふは袂にねぞかゝりける

五月五日服なりける人の許につかはしける　　小　辨

今日とても菖蒲しられぬ袂には引きたがへたるねをやかくらむ

靜範法師やはたの宮の事にかゝりて伊豆の國に流されて又のとしの五月に內の大貳三位のもとに遣はしける　　藤原兼房朝臣

五月闇(さつきやみ)こゞひの杜(もり)のほとゝぎす人知れずのみ鳴きわたるかな

かへし　　大　貳　三　位

ほとゝぎすこゞひの杜に啼く聲は聞くよそ人の袖もぬれけり

これを聞召してめしかへすべき由おほせくだされけるを聞きてよめる　　素　意　法　師

すべらぎもあらひと神もなごむまで鳴きけるもりの子規かな

丹後の國にて保昌朝臣あす狩せむといひける夜鹿の鳴くを聞きてよめる　　和　泉　式　部

ことわりやいかでか鹿の鳴かざらむ今宵ばかりのいのちと思へば

西宮のおほいまうち君筑紫にまかりて後住み侍りける西の宮の家を見ありきてよみ侍りける　　憲　慶　法　師

松風もきし打つ波ももろともにむかしにあらぬ聲のするかな

二條前大(おほ)いまうち君日頃わづらひて怠りて後など訪はざりつるぞといひ侍りければよめる　　小式部内侍

死ぬばかり歎きにこそは歎きしか生きてとふべき身にしあらねば

題しらず　　齋宮女御

大そらに風待つほどのくものいの心ぼそさをおもひやらなむ

かへし　　東三條院

おもひやる我が衣手はさゝがにのくもらぬ空に雨のみぞ降る

世の中さわがしき頃久しう音せぬ人の許に遣はしける　　伊勢大輔

亡きかずに思ひなしてや問はざらむまだ有明の月まつものを

世の中はかなかりける頃梅の花を見てよめる　　小大君

散るをこそ哀れと見しかうめの花花やことしは人をしのばむ

京より具して侍りける女を筑紫にまかり下りて後こと女に思ひつきて思ひいでずなりにけり女たよりなくて京に上るべきすべもなく侍りける程に煩ふ事ありて死なむとしける折男の許にいひ遣はしける　　讀人しらず

問へかしないくよもあらじ露の身をしばしも言の葉にやかゝると

○怠りて　病氣のよくなることをいふ。

○風待つほどのくものい　風の吹いて來るのを待つ間の蜘蛛の巣。上の三句は、心ぼそさを云ふための序。

○まだ有明の月まつものを　まだ此の世にあつて待つてゐるのに。

或人いはくこの女經衡筑前守にて侍りけるときともにまかり下れりける人のめになむありけるかくて女なくなりにければ經衡のちに聞きつけて心うかりけるものゝふの心かなとて男おひ上せられにけり

世の中つねなく侍りける頃よめる　和泉式部

ものをのみ思ひしほどにはかなくて淺ぢが末に世はなりにけり

忍ぶべき人もなき身はある折にあはれ〳〵といひや置かまし

思ふ事侍りける頃紅葉をてまさぐりにしてよみ侍りける

いかなれば同じ色にて落つれどもなみだは目にもとまらざるらむ

世の中さわがしく侍りけるころ夕暮に中納言定賴が許につかはしける　堀河右大臣

常よりもはかなきころの夕暮はなくなる人ぞかぞへられける

かへし　中納言定賴

くさの葉に置かぬばかりの露の身はいつその數に入らむとすらむ

世の中つねなく侍りける頃久しう音せぬ人の許につかはしける　赤染衞門

消えもあへずはかなき程の露ばかりありや無しやと人のとへかし

世の中を何にたとへむといふなる事を上(かみ)におきてあまたよみ侍りけるに

○淺ぢが末に　淺茅の葉末には露が置くものであるから、露の世になつたといふ意である。

○同じ色にて　紅葉も紅淚も同じ色で落ちるが。

○露ばかり　少し許り。

○かからざりせばかからましやは　かうなかつたならば、かう歎きはしないのだが。

世の中を何にたとへむ秋の田をほのかに照らすよひのいなづま　　源　賴

中關白の忌に法興院に籠りてあかつき方に千鳥の鳴き侍りければ　　圓松法師

明けぬなり賀茂の河瀨に千鳥なく今日もはかなく暮れむとすらむ

文集の蕭々時雨打レ窗聲といふ心をよめる　　大貳高遠

こひしくば夢にも人を見るべきに窗うつ雨に目をさましつゝ

王昭君をよめる　　赤染衞門

なげき來(こ)しみちの露にもまさりけりなれにし里をこふる涙は　　僧都懷壽

おもひきやふるき都を立ちはなれこの國びとにならむものとは　　懷圓法師

見るたびに鏡の影のつらきかなかからざりせばかからましやは

入道前の大(おほ)いまうち君法成寺にて念佛行ひ侍りける頃後夜の時に逢はむとて近き所に宿りて侍りけるに鳥の鳴きければ昔を思ひ出でてよみ侍りける　　井手のあま

いにしへはつらく聞えし鳥の音の嬉しきさへぞ物はかなしき

修行に出でたつ日よみて右近馬場の柱に書きつけ侍りける　増基法師

ともすれば四方の山邊にあくがれし心に身をもまかせつるかな

語らひ侍りける人の許より世を背きなむとありしはいかゞといひおこせて侍りければ　馬內侍

しかすがにかなしき物は世の中をうきたつほどの心なりけり

山にのぼりて法師になり侍りける人につかはしける　藤原長能

なにかその身のいるにしもたけからむ心をふかき山にすませよ

頼家朝臣世をそむきぬと聞きてつかはしける　律師長濟

まことにや同じ道には入りにけるひとりはにしへ行かじと思ふに

中宮の內侍あまになりぬと聞きて遣はしける　加賀左衞門

いかでかく花の袂をたちかへてうらなる玉をわすれざりけむ

かへし　中宮內侍

かけてだに衣のうらに玉ありと知らで過ぎけむ方ぞくやしき

上東門院あまにならせ給ひける頃よみてきこえ侍りける　選子內親王

君すらもまことの道に入りぬなり一人やながき闇にまどはむ

高階成順世をそむき侍りけるに麻の衣を人の許よりおこせ侍るとて

○心に身をもまかせつるかな　心に身をまかせて、心の思ふやうに旅をする。

○うきたつ　憂きを絶つ。

○にしへ行かじ　西は極樂淨土のあるところ。

○一人やながき闇に　一人は作者選子內親王御自身。

○かかるべしとは 涙の玉がかゝること、このやうであらうことをかけて云つたもの。

今日としも思ひやはせし麻ごろも涙のたまのかかるべしとは　　讀人しらず

かへし　　伊勢大輔

思ふにもいふにもあまることなれや衣のたまのあらはるゝ日は

後一條院うせさせ給ひて世のはかなく思ほえければ法師になりて横川に籠りゐて侍りける頃上東門院より問はせ給ひたりければ　　前中納言顯基

世をすてて宿を出でにし身なれどもなほ戀しきはむかしなりけり

御かへし　　上東門院

ときのまも戀しきことのなぐさまば世は二度もそむかざらまし

世を背く人々多く侍りければ　　前大納言公任

思ひしる人もありける世の中をいつをいつとて過すなるらむ

三條院東宮と申しける時法師になりて宮のうちにたてまつりける　　藤原統理

君に人なれな習ひそおく山に入りてののちはわびしかりけり

御かへし　　三條院御製

忘られずおもひ出でつゝ山人をしかぞこひしくわれもながむる

法師になりて住み侍りける所に櫻の咲きて侍りけるを見て　　前中納言義懷

見し人もわすれのみ行くふるさとに心ながくもきたる春かな　前大納言公任

世を背きて長谷に侍りける頃入道中將の許よりまだ住みなれじかしなど申したりければ

谷風になれずといかゞ思ふらむこゝろは早くすみにしものを　素意法師

良暹法師大原に籠り居ぬと聞きて遣はしける

水草ゐしおぼろの清水そこすみてこゝろに月のかげはうかぶや　良暹法師

かへし

ほどへてや月もうかばむ大原やおぼろの清水すむ名ばかりに　藤原國房

良暹法師の許につかはしける

思ひやるこゝろさへこそさびしけれ大原やまの秋のゆふぐれ

おとうとなりける法師の山ごもりして侍りけるが許よりかくてなむあり遂ぐまじきといひて侍りける返事につかはしける　律師朝範

おもはずに入るとは見えきあづさ弓かへらばかへれ人のためかは

長樂寺に住み侍りけるころ人の何事かといひて侍りければつかはしける　上東門院中將

思ひやれとふ人もなき山里のかけひのみづのこゝろぼそさを

〇おもはずに　わが心ともなく。
〇かへらばかへれ　山ごもりからかへる意。

（一）みき　ふた木の緣、三木と云つて、見きの意を含めたもの。

後拾遺和歌集　第十八

雜　四

則光朝臣の許にみちのくにに下りて武隈の松をよみ侍りける　　橘　季　通

たけくまの松はふた木を都人いかゞと問はばみきとこたへむ

陸奥國にふたゝび下りて後のたびたけくまの松も侍らざりければよみ侍りける　　能　因　法　師

たけくまの松はこのたび跡もなし千とせを經てや我は來つらむ

河原院にてよみ侍りける　　大　江　嘉　言

里人のくむだにいまはなかるべし岩井の清水みくさゐにけり

同じ所にて松をよみ侍りける　　江　侍　從

年へたる松だになくば淺茅原なにか昔のしるしならまし

もと住み侍りける家を物へまかりけるに過ぐとて松の梢の見え侍りければよめる　　左衞門督北の方

年をへて見る人もなきふる里にかはらぬ松ぞあるじならまし

六條中務親王の家に子の日の松を植ゑて侍りけるを彼のみこ身まかりて後その松を見てよみ侍りける　源爲善朝臣

君が植ゑし松ばかりこそ殘りけれいづれの春の子の日なりけむ

けふは中の子の日とは知らずやとて友達の許なりける人の松を結びておこせ侍りければよめる　馬内侍

誰をけふまつとはいはむかくばかり忘るゝ中の妬げなる世に

綠竹不レ辨レ秋といふ心を　大藏卿師經

みどりにて色もかはらぬくれ竹はよのながきをや秋といふらむ

永承四年内裏歌合に松をよめる　前太宰帥資仲

岩しろの尾上のかぜに年ふれど松のみどりはかはらざりけり

上のをのこども松澗底に生ひたりといふ心をつかうまつりけるに　御製

よろづよの秋をも知らで過ぎきたる葉かへぬ谷の岩ね松かな

題しらず　藤原義孝

み山木をねりそもてゆふ賤の男はなほこりずまの心とぞみる

宇治にて人々歌よみ侍りけるに山家旅宿といふ心を　民部卿經信

旅寢する宿はみ山に閉ぢられてまさきのかづらくる人もなし

○子の日なりけむ　子の日に引いた松であらうか。

○よのながきをや　呉竹の節の長きと云ひ、夜の長きに通はせたもの。

○ねりそもてゆふ　ねりそは、木の枝をねぢ揉つて繩の代りに用ゐるもの、それで結ぶ。

○こりずま　こりないこと。

○くる人もなし　繰るに來るをかけたもの。來る人もない。

關白前のおほいまうち君の家にてかつまたの池をよみ侍りける　藤原範永朝臣

鳥もゐでいく世へぬらむかつまたの池にはいひの跡だにもなし

須磨の浦をよみ侍りける　藤原經衡

立ちのぼるもしほの煙たえせぬは空にもしるき須磨の浦かな

龍門の瀧にて　中納言定賴

來る人もなきおく山の瀧のいとは水のわくにぞまかせたりける

やよひの月龍門に參りて瀧のもとにて彼の國のかみ義忠朝臣が桃の花の侍りけるをいかゞ見るといひ侍りければ　辨のめのと

ものいはばとふべき物をもゝの花いく世かへたる瀧の白いと

美作守にて侍る時瀧のまへに石たて水せき入れてよみ侍りける　藤原兼房朝臣

堰き入るゝ名こそ流れてとまるとも絕えず見るべき瀧の絲かは

大覺寺の瀧殿を見てよみ侍りける　赤染衞門

あせにける今だにかかる瀧つ瀨のはやくぞ人は見るべかりける

法輪に參りてよみ侍りける　源道濟

年ごとにせくとはすれど大井川むかしの名こそ猶ながれけれ

桂なる所に人々まかりて歌よみて又來むといひて後に彼の桂にはまから

○いひ　樋。

○空にもしるき　煙が常に絕えないから云つたもの。

○水のわくにぞ　水が涌くこと、絲の縁で絲を卷くわくことをかけたもの。

○あせにける今だに　今でさへかくあせてをるから。

で月の輪といふ所に人々まかりあひて桂をあらためて來る由よみ侍りけるにかはらけとりて　　祭主輔親

さきの日に桂の宿を見しゆゑはけふ月の輪にくべきなりけり

修理大夫惟正信濃守に侍りける時ともにまかり下りてつかまの湯を見て　　源重之

出づる湯のわくにかゝれる白絲はくる人たえぬ物にぞありける

延久五年三月住吉にまゐらせ給ひてかへさによませたまひける　　後三條院御製

住吉の神はあはれと思ふらむむなしき舟をさしてきたれば

民部卿經信

おきつ風吹きにけらしな住吉の松のしづえをあらふしらなみ

花山院の御供に熊野へまゐり侍りける道に住吉にてよみ侍りける　　惠慶法師

すみよしの浦かぜいたく吹きぬらし岸うつなみの聲しきるなり

右大將濟時住吉にまうで侍りける供にてよみ侍りける　　藤原爲長

松見ればたちうき物をすみの江のいかなるなみかしづ心なき

住吉に參りてよみ侍りける　　平棟仲

わすれ草つみてかへらむ住吉のきし方の世はおもひでもなし

○つかま湯　筑摩湯。信濃國にあり。
○わくにかゝれる　湯の涌くと絲の卷くわくとをかけたもの。
○くる人　來る人と、絲の縁で繰るとをかけたもの
○かへさ　歸り路。
○松のしづえ　松の下枝。
○きし方の世　住吉の岸と云って來し方の世とかけたもの。過去。

藏人にて侍りける時御まつりの使にて難波にまかりてよみ侍りける　　源　頼實

思ふこと神はしるらむ住吉の岸のしらなみ誰が世なりとも

熊野へまうで侍りけるに住吉にて經供養すとてよみ侍りける　　增基法師

解きかけつ衣のたまはすみよしの神さびにける松のこずゑに

攝津和泉の任はててまかり上るまゝにいと重く煩ひ侍りけるを住吉のたたりなどいふ人侍りければみてぐら奉り侍りけるに書きつけける　　赤染衞門

たのみては久しくなりぬ住吉のまつこのたびのしるし見せなむ

上東門院住吉にまゐらせ給ひて秋の末より冬になりて歸らせ給ひけるによみ侍りける　　上東門院新宰相

みやこ出でて秋より冬になりぬればひさしき旅の心地こそすれ

天王寺に參りてかめ井にてよみ侍りける　　辨乳母

萬世をすめるかめ井の水やさはとみの小川のながれなるらむ

長柄の橋にてよみ侍りける　　前大納言公任

橋柱なからましかば流れての名をこそ聞かめあとを見ましや

天王寺に參るとてながらの橋を見てよみ侍りける　　赤染衞門

○萬世をすめるかめ井　住めると澄めるとをかけたもの。
○さは　それは。
○名をこそ聞かめ　名だけはきくだらうが。

わればかり長柄（ながら）の橋は朽ちにけりなにはの事もふるゝ悲しき

　上東門院住吉にまゐらせ給ひて歸るさに人々歌よみ侍りけるに　伊勢大輔

いにしへにふり行く身こそ哀れなれ昔ながらのはしを見るにも

　錦の浦といふ所にて　道命法師

名にたかき錦の浦をきて見ればかづかぬ蜑はすくなかりけり

　熊野に參りてあす出でなむとし侍りけるに人々しばしはさぶらひなむや神も許し給はじなどいひ侍りける程におとなしの川のほとりに頭（かしら）白き烏の侍りければよめる　增基法師

山がらすかしらも白くなりにけり我が歸るべきときや來ぬらむ

　住吉に參りて歸りにけるに隆經朝臣難波といふ所に侍ると聞きてまかりよりて日頃遊びてまかり上りけるに名殘戀しき由いひおこせて侍りければ道より遣はしける　藤原孝善

わかれ行く舟はつなでにまかすれどこゝろは君がかたにこそひけ

　賀茂に參りける男の狩衣の袂の落ちぬばかりほころびて侍りけるを見て又參りける女のいひ遣はしける　讀人しらず

道すがら落ちぬばかりにふる袖の袂になにをつゝむなるらむ

○なにはの事も　何事も。これに難波を云ひかけたもの。

○錦の浦　伊勢國にある。

○かづかぬ蜑　潜くといふに纏頭物の意をかけ、波をくゞるといふに云ひかけたもの。

○山がらす云々　燕の太子丹の故事。丹が秦に質となつてゐた時、秦王が無禮であつたから丹は燕に歸らうとしたのを、烏の頭が白くなり馬に角が生えたならば歸國させようと秦王が云つたといふ。

かへし

ゆふだすき袂にかけて祈りこし神のしるしをけふ見つるかな　安法法師

祭のかへさに醉ひさまたれたるかた書きたる所を

とゝのへし賀茂の社のゆふだすきかへるあしたぞ亂れたりける

實方朝臣女の許にまうで來て格子をならし侍りけるに女の心知らぬ人してあらくましげに問はせて侍りければ歸り侍りにけりつとめて女の遣はしける　讀人しらず

明けぬ夜の心地ながらにやみにしを朝倉といひし聲は聞ききや

かへし　實方朝臣

ひとりのみ木の丸どのにあらませば名のらで闇にまよはましやは

初瀬に參り侍りけるにきのとのといふ所に宿らむとし侍りけるに誰と知りてかなどいひければこたへずとて　赤染衞門

名告(なのり)せば人しりぬべし名のらずば木(こ)の丸殿(まろどの)をいかで過ぎまし

貫之が集をかりて返すとてよみ侍りける　惠慶法師

ひと卷に千々のこがねをこめたれば人こそなけれ聲はのこれり

かへし　紀時文

○醉ひさまたれたる　ひどく酒に醉つて心の亂れてゐる。
○かへるあした　ゆふだすきの夕に對して朝と言つたもの。
○心知らぬ人　情合を知らぬ人。
○あらくましげ　あらあらしく。
○朝倉　神樂歌の「朝倉や木の丸殿にわれをれば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」によつたもので、名のりせよといふ意味。
○ひとりのみ云々　君ひとりだけでないといたので、闇に迷うて歸つた。
○人こそなけれ　人は貫之をさしたもの。

いにしへのちゞの黄金(こがね)は限りあるをあふばかりなき君がたまづさ

紀時文が許につかはしける　　清原元輔

かへしけむむかしの人の玉章をききてぞそゝぐ老のなみだは

家集の初めに書きつけける　　祭主輔親

花のしべ紅葉の下葉かきつめて木の本よりや散らむとすらむ

伊勢大輔が集を人のこひにおこせて侍りけるに遣はすとて　　康資王母

尋ねずばかきやるかたやなからまし昔のながれ水草(みくさ)つもりて

後三條院の御時月あかかりける夜侍る人など庭におろして御覽じけるに人々多かる中にわきて歌よめとおほせごと侍りければよめる　　後三條院越前

いにしへの家の風こそうれしけれかかる言の葉ちりくと思へば

七月ばかりに若き女房月見に遊び歩きける夜藏人公後新少納言が局に入りにけりと人々いひあひつゝわらひけるを九月つごもり方に上(うへ)きこしめして御たゝう紙に書きつけさせ給ひける　　後三條院御製

秋風にあふ言の葉や散りぬらむその夜の月のもりにけるかな

義忠朝臣物いひける女の姪なる女に又すみうつり侍りけるを聞きてつかはしける　　赤染衛門

○かきつめて　かき集めて。

○いにしへの家の風　先祖の遺風を云つたもの。

○秋風に云々　秋風で木の葉が散つたのだらうその間から月がもれたと云ふ意で、語り合ふ言葉がもれ聞えたのだらう忍んだ事が聞えたとかけたもの。

まことにやをばすて山の月は見るよもさらしなと思ふわたりを
語らはむといひし道命法師の許にまうで來たる人のよみ侍りける　讀人しらず
絶えやせむいのちも知らぬ水無瀬川よしながれても心みよ君
近き所に侍りけるに音し侍らざりければ村上の女三宮の許より思ひへだ
てけるにや花心にこそなどいひおこせたる返事に　規子内親王
いはぬまをつゝみし程にくちなしのいろにや見えし山ぶきの花
良暹法師のいひ渡る人にあひ難き由をなげきわたり侍りけるに今日なむ
かの人にあひたるといひおこせ侍りければ遣はしける　藤原孝善
うれしさをけふは何にか包むらむ朽ち果てにきと見えし袂を
語らひたる男の女の許に遣はさむとて歌こひ侍りければまづ我が思ふ事
をよみ侍りける　和泉式部
語らへばなぐさむこともあるものを忘れやしなむ戀のまぎれに
五節の命婦のもとに高定忍びにかよふと聞きて誰とも知らでかの命婦の
許にさしおかせ侍りける　六條齋院宣旨
忍び音を聞きこそわたれ時鳥かよふ垣根のかくれなければ
そらごとなげき侍りける頃語らふ人のたえておとし侍らぬにつかはしけ

〇よもさらしな　まさかさうではあるまいの意を、更科にかけたもの。
〇花心　うはき心。あだな心。
〵聞きこそわたれ　常に聞く。

る　　　　馬内侍

憂かりける蓑宇（みのう）の浦のうつせ貝むなしき名のみ立つは聞ききや

御あが物の鍋をもちて侍りけるを大盤所より人のこひ侍りければ遣はすとて鍋に書きつけ侍りける　　藤原顯綱朝臣

おぼつかな筑摩（つくま）の神の爲ならばいくつか鍋のかずはいるべき

○蓑宇の浦　石見國にある。

○御あが物　祓をする時に罪のあがなひとして出すもの。

○筑摩の神の云々　近江國の筑摩神社の祭には、里の女が逢つた男の數だけの鍋をかぶつて神輿の御供をするので、その意味から詠んだもの。

○二葉の松　二條院を申し上げたもの。

○御はかし　御佩刀。

後拾遺和歌集第十九

雜五

後冷泉院のみこの宮と申しける時二條院はじめて參り給ひけるを見奉る事やありけむよみ侍りける　　出羽辨

春ごとの子の日は多く過ぎつれどかかる二葉の松は見ざりき

二條院東宮にまゐり給ひて藤壺におはしましけるに前中宮のこのふぢつぼにおはせし事など思ひ出づる人の侍りければ　　大貳三位

しのびねの涙なかけそかくばかりせばしと思ふころのたもとに

かへし　　出羽辨

春の日に歸らざりせばいにしへの袂ながらや朽ち果てなまし

後冷泉院のみこの宮と申しける時上のをのこども一品の宮の女房と諸共に花をもてあそびけるに故中宮の出羽も侍ると聞きて遣はしける　　源爲善朝臣

はなざかり春の山邊のあけぼのに思ひわするなあきのゆふぐれ

三條院春宮と申しける時式部卿敦義親王うまれて侍りけるに御はかし奉

るとて結びつけて侍りける　　入道前太政大臣

よろづ世を君がまもりといのりつゝたち造りえのしるしとを見よ

御かへし　　三條院御製

いにしへの近き守を戀ふる間にこれや忍ぶるしるしなりけり

或人云ふ此の歌は故左大將濟時みこたちのおほぢにて侍りければけふの事をかの大將や取扱はましなどおぼし出でてよませ給ひけるなり

一條攝政かくれ侍りて後少將義孝子うませて侍りける七夜に昔を思ひ出でてよみ侍りける　　法住寺太政大臣

ちゞにつけ思ひぞ出づる昔をばのどけかれとも君ぞいはまし

六條左大臣身まかりて後播磨の國に下り侍りけるに高砂の程にてこゝは高砂となむいふと或人いひ侍りければ昔を思ひ出づる事やありけむよみ侍りける　　源相方朝臣

高砂とたかくないひそむかし聞きし尾上のしらべまづぞこひしき

後一條院をさなくおはしましける時祭御覽じけるにいつきの渡り侍りけるをり入道前太政大臣いだき奉り侍りけるを見たてまつりてのちに太政大臣の許につかはしける　　選子内親王

○たち造りえ　太刀造江。攝津國にある。これに太刀を造り得たといふ意をよそへたもの。

○近き守　近衞大將をいふ。

○ちゞにつけ　あれこれにつけて

光出づるあふひの影を見てしかば年へにけるも嬉しかりけり

かへし　入道前太政大臣

もろかづら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらむ

後一條院の御時賀茂行幸侍りけるに上東門院御こしに乗らせ給ひて紫野よりかへらせ給ひける又のあした聞えさせ給ひける　選子内親王

行幸(みゆき)せし賀茂の川浪帰るさにたちやよるとて待ちあかしつる

後冷泉院の御時上東門院にみゆきあらむとしけるをとゞまりて後うちより硯の箱の蓋に櫻の枝を入れて奉らせ給ひたりける御返しにおほせごとにてよみ侍りける　上東門院中將

みゆきとか世にはふらせていまはたゞ梢のさくら散らすなりけり

小辨齋院にまゐり侍りてほのかに見奉りたるよしいひおこせて侍りける返事に　六條齋院宣旨

ゆふしでやしげき木のまを漏る月の朧げならで見えし影かは

宇治前太政大臣少將に侍りける時春日の使にいでたち侍るに又の日雪の降り侍りけるに大納言公任が許につかはしける　入道前太政大臣

わか菜つむ春日(かすが)のはらに雪ふれば心づかひを今日さへぞやる

○あふひや　葵に逢ふをかけたもの。

○たちやよるとて　歸途に立ち寄ると、川浪が寄るとをかけたもの

○みゆきとか世にはふらせて　みゆきと行幸、降らせと云ひふれさせるとをかけたもの。

○朧げならで　上の三句はこの句の序。

○心づかひ　春日の使にかけたもの。心配。氣遣ひ。

かへし　前大納言公任

身をつみておぼつかなきは雪やまぬ春日(かすが)の野邊の若菜なりけり

二條前太政大臣少將に侍りける時春日の使にまかりて又の日霧のいみじう立ち侍りければ入道前太政大臣の許につかはしける

みかさ山かすがの原の朝霧にかへり立つらむけさをこそ待て

上東門院長家の民部卿の三條の家に渡らせ給ひたりける頃にはかに行幸ありて近き人々の家めされければまかるべき所なき由奏せさせ侍りけりその返事に歌をよみて參らせよと仰せられければ雪ふる日よみてまゐらせける　伊勢大輔

年つもる頭(かしら)の雪はおほぞらのひかりにあたる今日ぞうれしき

家をかへしにすと仰せられてゆるされにけり

冷泉院東宮と申しける時女の石井に水くみたる形(かた)繪にかきたるをよめと仰せごと侍りければ　源重之

年をへてすめる清水に影見ればみづはぐむまで老いぞしにける

頭(かしら)白き人のゐたる所繪に書けるを　花山院御製

春來れど消えせぬ物は年をへてかしらに積る雪にぞありける

○家をかへしにす　家を返すと、家を返歌にすることを通はせたもの

○年をへてすめる　年を經て住むと、澄むとをかけたもの。

○みづはぐむ　水は汲むに、瑞齒ぐむをかけたもの。瑞齒ぐむは、年寄つて齒がぬけた後、更に小さい齒が出來る意で、非常に年寄ることをいふ。

○世にとよむ　世になりひゞく。
○小鹽の山　山城國乙訓郡にある
○みゆき　降りつみしみ雪と、すべらぎの行幸とをかけたもの。
○山井の水　五節の小忌衣の山藍色にかけていふ。

三條院の御時大嘗會の御禊など過ぎての頃雪の降り侍りけるに大原に住みける少將井の尼の許につかはしける　伊勢大輔

世にとよむ豐の御禊をよそにして小鹽の山のみゆきをや見し

かへし　少將井尼

小鹽山こずゑも見えず降りつみしそやすべらぎのみゆきなるらむ

一條院うせさせ給ひて上東門院里にまかり出で給ひにける又の年五節の頃昔を思ひ出でて上のをのこども引きつれて參りて侍りける中によみていだしける　伊勢大輔

はやくみし山井の水のうす氷うちとけざまはかはらざりけり

中納言實成宰相にて五節奉りけるに妹の弘徽殿の女御の御許に侍りける人かしづきに出でたりけるを中宮の御方の人々ほのかに聞きて見ならしけむ百敷をかしづきにて見るらむ程も哀れと思ふらむといひて箱の蓋に白銀のあふぎに蓬萊の山つくりなどしてさしぐしに日影の蔓を結びつけてたきものをたてぶみにこめてかの女御の御方に侍りける人の許よりとおぼしくて左京のきみの許にといはせて果ての日さしおかせける　讀人しらず

多かりし豐の宮人さし分けてしるき日かげをあはれとぞ見し

かくて臨時祭になりて二條前太政大臣中將に侍りて祭の使し侍りけるにありし箱の蓋にぢんの櫛白かねのかうがい金の筥に鏡など入れてつかひは中宮のはらからなればにや日かげと覺しくてかゞみの上に葦手にて書きて侍りけり

藤原長能

ひかげ草かゞやくかげやまがひけむますみの鏡くもらぬものを

同じ人の五節のわらはのかざみかしづきの唐衣に青ずりをして赤紐などつけたりけり人々見侍りけるに青き紙のはしに書きつけて結びつけさせ侍りける

選子内親王

神代よりすれる衣といひながら又かさねてもめづらしきかな

一條院の御時皇后宮五節奉らせ給ひけるにかいつくろひつかうまつりける人のつけて侍りける赤紐のとけていかにせむといひけるを聞きて結びつくとてよみ侍りける

藤原實方朝臣

足引の山井の水はこほれるをいかなるひもの解くるなるらむ

物いひ侍りける女の五節に出でてこと人にと聞き侍りければつかはしける

源頼家朝臣

まことにやあまたかさねし小忌衣とよのあかりのかくれなきよに

○葦手　文字をくづして葦などの生えたさまに書いたもの。

○かざみ　宮女や子供などが初夏の頃上著にした服。

○かいつくろひつかうまつりける人　五節の舞の時の衣紋などをかいつくろふことを掌る人。

○かくれなきよ　とよのあかりに對して云つた詞。

人のこをつけむと契りて侍りけれど籠りゐぬと聞きてこと人につけ侍りけれはよめる　法眼源賢

おもひきや我がしめゆひしなでしこを人の籬の花と見むとは

父のしなのなる女を住み侍りける許につかはしける　平正家

信濃なるその原にこそあらねども我がはゝき木と今はたのまむ

一條院の御時大貳佐理筑紫に侍りけるに御手本書きに下し遣はしたりければ思ふ心かきて奉らむとて書きつくべき歌とてよませ侍りけるによめる　源重之

みやこへといきのまつ原いきかへり君がちとせにあはむとすらむ

父の許にをさなくて筑前の國に侍りて年へて後成順が其の國になりて侍りければ下りてよめる　中將尼

そのかみの人はのこらじ箱崎の松ばかりこそわれを知るらめ

阿波守になりて又同じ國にかへりなりて下りけるにこづかみの浦といふ所に浪のたつを見てよみ侍りける　藤原基房朝臣

こづかみの浦にとしへてよる浪もおなじ所にかへるなりけり

賴國朝臣紀伊守にて侍りける時いふべき事ありてまかりてけるを殊更に

○その原にこそあらねども　信濃の地名曾の原にかけたもので、そなたの腹に生まれたのではないが

○おなじ所にかへる　波が返るのと自分が歸るのとをかけて云つたもの。

物いはざりければよみ侍りける　　　　連敏法師

老の波よせじと人はいとふとも待つらむものをわかのうらには

肥後守義清下り侍りての年の秋さが野の花は見きやといひおこせて侍りける返事に遣はしける　　　　源兼長

うちむれし駒もおとせぬ秋の野は草かれゆけど見る人もなし

あづまに侍りけるはらからの許にたよりにつけてつかはしける　　　　源兼俊母

にほひきや都の花はあづまぢの東風(こち)のかへしの風につけしは

かへし　　　　康資王母

吹きかへすこちのかへしは身にしみき都の花のしるべと思ふに

筑紫より上らむとてはかたに侍りけるに館の菊の面白く侍りけるを見て　　　　大貳高遠

とりわきて我が身に露やおきつらむ花よりさきにまづぞ移ろふ

みちのくにに侍りけるに中將宣方朝臣の許につかはしける　　　　藤原實方朝臣

やすらはで思ひたちにし東路(あづまぢ)にありけるものをはゞかりの關

語らひ侍りける人の許にみちのくにより弓をつかはすとてよみ侍りける

みちのくのあだちの眞弓(まゆみ)君にこそ思ひためたることはかたらめ

○はかた　博多。今の福岡市の中

○はゞかりの關　憚の關。陸奥にあつた關所。

○思ひためたる事　多く溜めて置いた思ひ。弓の縁でためると云つたもの。

實方朝臣みちのくにに侍りける時いひつかはしける　　大江匡衡朝臣

都にはたれをか君はおもひ出づるみやこの人はきみを戀ふめり

かへし　　藤原實方朝臣

忘られぬ人の中にはわすれぬを待つらむ人のなかに待つやは

攝津國に通ふ人の今なむ下るといひて後にも又京にありけるを聞きて人に代りてよめる　　赤染衞門

ありてやは音せざるべき津の國の今ぞいく田の杜といひしは

六波羅といふ寺にからに參り侍りけるにきのふの祭のかへさに見ける車の傍に立ちて侍りければいひつかはしける　　相模

きのふまで神に心をかけしかどけふこそ法にあふひなりけれ

石山に參りける道に山科といふ所にて休み侍りけるに家あるじの心あるさまに見え侍りければ今歸るさになどいひ侍りけるをよにさしもといひ侍りければ　　和泉式部

歸るさを待ちこゝろみよかくながらよもたゞにてはやましなの里

山階寺供養の後宇治前太政大臣の許につかはしける　　堀河右大臣

ふかきうみのちかひは知らずみかさ山心たかくも見えし君かな

○今ぞいく田の杜　生田の杜に、今行くといふをかけたもの。

○法にあふひ　法に逢ふ日を、葵にかけたもの。

○たゞにてはやましなの里　山科の里を詠み込んで、そのまゝではやまぬと云ふ意をあらはしたもの

○入江のあしのひとよ　葦の一節を一夜に云ひかけたもの。

○伏見の里の名をも　伏見の里を伏して見るに通はせたもの。

山里にまかりて歸る道に家經が西八條の家近しと聞きて車を引き入れて見ありきけるに難波わたりの心地せられていとをかしう侍りければ硯の箱の上に書きつけ侍りける　伊勢大輔

こも枕かりの旅寢にあかさばや入江のあしのひとよばかりを

山里にまかりて日暮れにければ　源頼實

日もくれぬ人もかへりぬ山ざとはみねの嵐のおとばかりして

伏見といふ所に四條宮の女房あまた遊びて日暮れぬさきにかへらむとしければ　橘俊綱朝臣

みやこ人暮るればかへるいまよりは伏見の里の名をもたのまじ

語らふ人の許に年頃ありてまかりたりけるにおぼめくさまにやありけむよみ侍りける　讀人しらず

杉もすぎ宿もむかしの宿ながらかはるは人のこゝろなりけり

ひえの山に二月五番とて花など作る事侍りけりその花つくらせむとて人の山によび登せて侍りければ昔この山にて物など學びける事思ひ出でて　蓮仲法師

思ひきやふるさと人に身をなして花のたよりに山を見むとは

ある所に庚申しけるに御簾のうちの琴のあかぬ心をよみ侍りける　大中臣能宣朝臣

絶えにけるはつかなるねを繰りかへし葛(かつら)のをこそ聞かまほしけれ

入道一品宮に人々參りて遊び侍りけるに式部卿敦貞のみこ笛などをかしく吹き侍りければかのみこの許に侍りける人の許に又の日よべの笛のをかしかりしよしいひに遣はしたりけるをみこ傳へ聞きて思ふ事の通ふにや人しもこそあれ聞きとがめける事など侍りける返事に　相摸

いつか又こちくなるべき鶯のさへづりそめし夜半のふえたけ

人のあふぎに山里の人も住まぬわたりかきたるを見てよめる　大中臣能宣朝臣

牡鹿(をじか)ふすしげみにはへる葛の葉のうらさびしげに見ゆる山里

法師の色このめるを見てよめる　源重之

常ならぬ山の櫻にこゝろいりて池のはちすをいひなはなちそ

人のかめに酒入れて杯にそへて歌よみて出し侍りけるに　藤原爲賴朝臣

もちながら千世もめぐらむさかづきの淸き光はさしもうけなむ

小倉の家に住み侍りける頃雨の降りける日蓑かる人の侍りければ山吹の枝を折りてとらせて侍りけり心もえでまかり過ぎて又の日山吹の心もえざりし由いひにおこせて侍りける返事にいひ遣はしける　中務卿兼明親王

〇人しもこそあれ　人もあるに。人も多くあるなかでそなたが。〇こちく　胡竹。竹の笛。此方來にかけたもの。

〇うらさびしげ　葛の葉の緣でうらさつゞけたもの。

〇常ならぬ　無常の。

〇もちながら　杯を持ちながらさかづきのつきの緣で望ながらさをかけたもの。〇さしもうけなむ　杯をさすこと、月の光がさすことをかけたもの。〇心もえで　事の心もわからずに

七重八重はなは咲けども山吹のみの一つだになきぞかなしき

陸奥守則光藏人にて侍りける時いもせなどいひつけて語らひ侍りけるに里へ出でたらむ程に人々尋ねむにありかな告げそといひて里にまかり出でて侍りけるを人々せめてせうとなれば知るらむとあるはいかゞすべきといひおこせて侍りける返事にめをつゝみて遣はしたりければ則光心もえでいかにせよとあるぞとまうで來て問ひ侍りければよめる　清少納言

潛する蜑のありかをそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ

駿河守國房と車に乘りて物にまかりける道に父の定季が墓ありとて俄に車よりおり侍りければよめる　源頼俊

足乳根ははかなくてこそやみにしかこは何處とて立ちどまるらむ

山にすみうかれて越の國にまかり下りけるに思ひかけず良暹法師などあそびて昔の事思ひ出でて侍りければよめる　慶範法師

おもへどもいかに習ひし道なれば知らぬ境とまどふなるらむ

筑紫より上りて道雅三位の童にて松君といはれ侍りけるを膝にすゑて久しう見たりつるなどいひてよみ侍りける　帥前内大臣

淺茅生にあれにけれども古里の松はこだかくなりにけるかな

○いもせ　妹と兄。

○めをつゝみて　めは海藻。

○めをくはせけむ　海藻にかけて云つたもので、めくはせをしたのであらうの意。めくはせは、目でその心をあらはすこと。

○はかなくて　墓がないとかけたもの。

〔まゆとしめ〕 美女をいふ。催馬楽に「みまくさとりかへまゆとしめ。」とあるによつて云つたもの。

〔かひこそなけれ〕 甲斐がないといふに、飼ひをかけたもの。

前伊勢守義孝宇治太政前大臣のうまやに下りたりと聞きて遣はしける

天台座主教圓

古のまゆとしめにもあらねども君はみまくさ取りてかふとか

使こざりけるさきに許されたりければ返事

藤原義孝

はなれてもかひこそなけれ青馬の取り繫がれし我が身と思へば

後拾遺和歌集 第二十

雜六

神祇

長元四年六月十七日伊勢のいつき内宮に參りて侍りけるに俄に雨ふり風吹きていつきみづから託宣して祭主輔親を召しておほやけの御事など仰せられけるついでにたび〳〵御みきめしてかはらけ賜はすとてよませ給ひける

杯にさやけきかげの見えぬれば塵のおそりはあらじとを知れ

御和を奉りける　　祭主輔親

おほぢちゝうまごすけちか三代までに戴きまつるすべら御神(おほんかみ)

男に忘られて侍りける頃貴船(きぶね)にまゐりてみたらし川に螢の飛び侍りけるを見てよめる　　和泉式部

もの思へばさはの螢もわが身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る

○伊勢のいつき　伊勢のいつきのみこ。齋王をいふ。

○塵のおそり　少しの恐れ。

○おほぢちゝうまごすけちか　祖父と父と、孫の輔親。

○あくがれ出づる玉　うかれて出る魂。

(一)玉散るばかり　瀧つ瀬の玉とかけて、魂の消える程と受けたもの

(一)ささのこね　里の刀禰。村の長

御かへし

おく山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉散るばかりものな思ひそ

此の歌はきぶねの明神の御返しなり男の聲にて和泉式部が耳に聞えけるとなむいひつたへたる

世の中さわがしく侍りける時さとのとね宣旨にてまつりつかうまつるべきを歌二つなむいるべきといひければよみ侍りける　藤原長能

しろたへのとよ御幣をとりもちていはひぞそむるむらさきの野に

今よりはあらぶる心ましますな花のみやこにやしろさだめて

此の歌或人のいはく世の中騷がしう侍りければ船岡の北に今宮といふ神をいはひておほやけも神馬たてまつり給ふとなむいひ傳へたる

稻荷によみて奉り侍りける　惠慶法師

いなり山みづの玉垣うちたゝき我がねぎ言を神もこたへよ

すみよしの宮うつりの日かきつけ侍りける　山口重如

住吉の松さへかはるものならば何かむかしのしるしならまし

一條院の御時はじめて松尾の行幸侍りけるにうたふべき歌つかうまつりけるに　源兼澄

後三條院の御時始めて日吉社に行幸侍りけるに東遊にうたふべき歌仰せごとにてよみ侍りける　大貳實政

千早ぶる松の尾山のかげ見ればけふぞ千年のはじめなりける

同じ御時祇園に行幸侍りけるに東遊にうたふべき歌めし侍りければよめる　藤原經衡

あきらけき日吉の御神きみがため山のかひあるよろづ代やへむ

大原野祭の上卿にてまゐりて侍りけるに雪の所々消えけるを見てよみ侍りける　治部卿伊房

ちはやぶる神の園なるひめ小松よろづよ經べきはじめなりけり

式部大輔資業伊豫守に侍りける時彼の國の三島明神にあづま遊して奉りけるをよめる　能因法師

さかき葉にふるしら雪は消えぬめり神のこゝろもいまや解くらむ

大貳成章肥後守にて侍りける時阿蘇社に御裝束奉り侍りけるに彼の國の女のよみ侍りける　讀人しらず

うど濱にあまの羽衣むかしきてふりけむ袖やけふのはふりこ

天(あめ)のしたはぐゝむ神のみぞなればゆたけにぞたつみづの廣前(ひろまへ)

○山のかひある　山の峽と、甲斐あることをかけたもの。

○うど濱　有度濱。駿河にある。三保の松原の附近。
○はふりこ　祝子。神に奉仕するもの。羽振りにかけて云ふ。

○みぞ　御衣。御裝束。
○ゆたけ　ゆたかに。十分に。

八幡（やはた）にまうでてよみ侍りける　　增基法師

こゝにしもわきて出でけむ石清水かみの心をくみも知らばや

住吉にまゐりてよみ侍りける　　蓮仲法師

住吉の松のしづえに神さびてみどりに見ゆるあけのたまがき

石清水に參りて侍りける女の杉の木の本に住吉の社をいはひて侍りければ社のはしらに書きつけて侍りける　　讀人しらず

さもこそは宿はかはらめすみよしの松さへ杉になりにけるかな

貴船（きぶね）にまゐりていがきに書きつけ侍りける　　藤原時房

思ふことなる河かみにあと垂れてきぶねは人をわたすなりけり

後冷泉院の御時きさいの宮の歌合に春日の祭をよみ侍りける　　藤原範永朝臣

けふ祭るみかさの山の神ませばあめが下にはきみぞさかえむ

釋　敎

山階寺（やましなでら）の涅槃講（ねはんこう）にまうでてよみ侍りける　　光源法師

いにしへのわかれの庭に逢へりともけふの涙ぞなみだならまし

前律師慶暹

○石清水　岩の間から出る清水に石清水八幡宮の意をかけたもの。

○いがき　忌垣。玉垣に同じ。

○きぶねは人を　貴船の神を、船にいひかけたもの。

○いにしへのわかれの庭　釋迦入滅の當時。

常よりも今日の霞ぞあはれなる薪つきにしけぶりとおもへば

二月十五日の夜中ばかりに伊勢大輔が許に遣はしける　慶範法師

いかなれば今宵の月のさ夜中に照らしも果てで入りしなるらむ

かへし　伊勢大輔

世をてらす月かくれにしさ夜中はあはれ闇にやみなまどひけむ

二月十五日夜月のあかく侍りけるに大江佐國が許につかはしける　讀人しらず

山のはに入りにし夜半の月なれどなごりは又もさやけかりけり

太皇太后宮東三條にわたり給ひたりける頃その御堂に宇治前太政大臣の扇の侍りけるに書きつけ侍りける　伊勢大輔

積るらむ塵をもいかではらはまし法(のり)にあふぎの風のうれしさ

懺法おこなひ侍りけるに佛に奉らむとて周防内侍の許に菊をこひ侍りけるにおこせて侍りける返事に　辨乳母

八重菊にはちすの露を置きそへて九(こゝの)しなまでうつろはしつる

太皇太后宮五部大乘經供養せさせ給ひけるに法華經にあたりたる日よみ侍りける　康資王母

咲きがたき御(み)法(のり)のはなにおく露ややがて衣のたまとなるらむ

○薪つきにし　機緣の盡きる事。入滅すること。

○二月十五日　釋迦入滅の日。

○法にあふぎの風　法に逢ふを、扇の風に云ひかけたもの。

○懺法　懺悔して修行すること。法華懺法、觀音懺法等がある。

○九しな　九品。極樂淨土をいふ

故土御門右大臣の家の女房車三つにあひ乘りてぼだい講に參りて侍りけるに雨の降りければ二つの車はかへり侍りにけり今一つの車に乘りたる人からにあひて後に歸りにける人の許に遣はしける

讀人しらず

もろともにみつの車にのりしかどわれはいちみの雨に漏れにき

月輪觀をよめる

僧都覺超

月の輪にこゝろをかけし夕よりよろづのことを夢と見るかな

維摩經の十喩のなかにこの身芭蕉の如しといふ心を

前大納言公任

風ふけばまづ破れぬる草の葉によそふるからに袖ぞ露けき

同喩の中にこの身水月の如しといふ心をよめる

小辨

常ならぬ我が身は水の月なれば世にすみとげむ事もおぼえず

三界唯一心

伊勢大輔

散る花もをしまばとまれ世の中は心のほかのものとやは聞く

化城喩品

赤染衞門

こしらへて假のやどりにやすめずばまことの道をいかで知らまし

康資王母

道とほみ中空にてやかへらましおもへばかりの宿ぞうれしき

○みつの車　三車。佛の教を三つの車に譬へていふ。聲聞乘を羊車とし、辟支佛乘を鹿車とし、大乘を牛車とする。
○いちみの雨　一味の雨。平等な佛の慈悲を、廣くうるほひわたる雨に譬へたもの。
○月の輪　月輪觀に同じ。十六觀相の一で、月の姿が水に浮ぶを觀る法。
○常ならぬ我が身　無常のわが身
○世にすみとげむ事　澄むを住むにかけたもので、この世にいつまでも住んでゐる事。

五百弟子品　　赤染衞門

衣なる玉ともかけて知らざりきゑひさめてこそ嬉しかりけれ

壽量品　　康資王母

わしの山隔つる雲やふかからむつねに澄むなる月を見ぬかな

普門品　　前大納言公任

世をすくふうちにはたれか入らざらむ普き門(かど)を人しささねば

書寫のひじり結緣(けちえん)經供養し侍りけるにひと〴〵あまた布施をおくりけるなかに思ふ心やありけむしばしとらざりければよめる　　遊女宮木

津の國のなにはのことか法(のり)ならぬあそびたはぶれまでとこそ聞け

誹諧歌

題しらず　　讀人しらず

笛の音の春おもしろく聞ゆるは花散りたりと吹けばなりけり

橘季通みちのくにに下りて武隈(たけくま)の松を歌によみ侍りけるに二本の松を人問はばみきと答へむなどよみて侍りけるをつてに聞きてよみ侍りける　　僧正深覺

○衣なる玉　衣の中にかくれた珠をいふ。法華經の中にある語。或人が醉うて寐た間に、他の人がその人の衣の裏に寶の珠を掛けて去つたが、その人は之れを知らずに他國に行き、その國人に衣の珠をみとめられて立身して長者となつたと云ふ。その譬へによつて云ふ。
○わしの山　鷲の山。比叡山をいふ。
○つねに澄むなる　常住の。
○花散りたり　笛の曲、落梅。ちりたりは曲の聲。
○二木の松を云々　雜の四の最初にある歌をさして云ふ。

武隈(たけくま)の松は二木(ふたき)をみきといふはよく詠(よ)めるにはあらぬなるべし

題しらず　源道濟

咲かざらば櫻をひとの折らましや櫻のあだはさくらなりけり

藤原實方朝臣

まだ散らぬ花もやありとたづね見むあなかま暫し風に知らすな

鄰より人の三月三日(やよひ)に桃の花をこひたるに　大江嘉言

桃の花やどに立てればあるじさへすけるものとや人の見るらむ

三條太政大臣の許に侍りける人の娘を忍びて語らひ侍りけり女の親腹だちて娘をいと淺ましうつみけるなどいひ侍りけるに三月三日かの北の方三夜の餅食(もちひくひ)へとて出しけるによめる　藤原實方朝臣

三日(みか)の夜の餅(もちひ)はくはじわづらはし聞けばよど野にはゝこつむなり

水無月はらへをよみ侍りける　和泉式部

思ふ事みなつきねとて麻の葉をきりにきりても祓(はら)へつるかな

ひるくひて侍りける人今は香もらせぬらむと思ひて人の許にまかりたりけるになごりの侍りけるにや七月(ふみづき)七日につかはしける　皇太后宮陸奥

君がかすよるの衣を棚ばたはかへしやしつるひるくさしとて

○よく詠める　二木、みき、に對してよくと云つたもの。

○櫻のあだはさくら　咲くとさくらとを通はせたもの。

○あなかま　あゝやかましい。

○つみける　つめつた。

○はゝこつむ　母子草を摘む。それに母が子をつめるの意を通はせたもの。母子草は三月三日餅の中にまぜて搗くものであるから、上の句に三日の夜の餅はくはじと云つたのである。

○みなつきね　皆盡きてしまへ。皆なくなつてしまへ。水無月をかけたもの。

○ひる　蒜。ねぎに似た葉で平たく、臭氣がある。

○ひるくさしとて　蒜くさいと、晝くさいとをかけたもの。棚ばたは夜逢ふので晝くさいと云つて返したらうと云ふ意。

小一條院入道前太政大臣の桂なる所にて歌よませ給ひけるに紅葉をよみ侍りける　堀河右大臣

紅葉ばは錦に見ゆと聞きしかど目もあやにこそ今日はなりぬれ

紅葉の散り果てたるに風のいたく吹き侍りければ　增基法師

落ちつもる庭をだにとて見るものをうたて嵐のはきに掃くかな

人の炭奉らむいかゞといひたりければよめる　讀人しらず

心ざしおほはら山の炭ならば思ひをそへておこすばかりぞ

題しらず　天台座主源心

雲居にていかであふぎと思ひしに手かくばかりになりにけるかな

法師の扇を落して侍りけるをかへすとて　和泉式部

はかなくも忘られにける扇かな落ちたりけりと人もこそ見れ

題しらず

さなくても寐られぬものをいとゞしくつき驚かす鐘のおとかな

七月ばかり月のあかかりける夜女の許につかはしける　少將藤原義孝

忘れてもあるべきものをこのごろの月夜よいたく人なすかせそ

三條院の御時うへのとのゐすとて近く侍りける人々枕をおとしてまかり

○目もあやにこそ　錦に對して綾と云つたもの。

○心ざしおほはら山　心ざし多しと、大原山とをかけたもの。

○落ちたりけり　墮落したの意を含めたもの。

○人なすかせそ　人に好色の心を起さすな。

出でければ書きつけて殿上につかはしける　　小大君

道芝やおどろの髪にならされて移れる香こそくさまくらなれ

人の草合しけるに朝がほかゞみ草など合はせけるにかゞみ草かちければ　　讀人しらず

まけがたのはづかしげなる朝がほを鏡草にも見せてけるかな

入道攝政かれ〴〵にてさすがに通ひ侍りけるころ帳の柱に小弓の矢を結びつけたりけるをほかにてとりにおこせて侍りければ遣はすとてよめる　　大納言道綱母

思ひ出づる事もあらじと見えつれどやといふにこそ驚かれぬれ

人の長門へ今なむ下るといひければよめる　　能因法師

白波の立ちながらだにながとなる豐浦の里のとよられよかし

めのとせむとてまうで來たりける女の乳のほそく侍りければよみ侍りける　　大江匡衡朝臣

はかなくも思ひけるかなちもなくて博士の家の乳母せむとは

かへし　　赤染衞門

さもあらばあれ大和心しかしこくば細ぢにつけてあらすばかりぞ

○くさまくら　草枕と臭枕とを通はせたもの。

○朝がほを鏡草にも云々　朝の顔を鏡に見せたの意。

○やといふにこそ　矢に、やと呼びかける詞をかけたもの。

○とよられよかし　立ち寄られよの意であらう。

○ちもなくて　乳がないと智がないとをかけたもの。

○細ぢ　乳の量の少ないのと、早く合點するとをかけたもの。

後拾遺和歌集終

昭和八年十一月一日　普及版印刷
昭和八年十一月十五日　普及版發行
昭和十二年一月十五日　再版發行

（非賣品）

校註國歌大系
第三卷

編輯者　中山泰昌
東京市神田區錦町一丁目五番地
發行者　小川菊松
東京市本所區厩橋一丁目廿七番地
印刷者　井上源之丞
東京市本所區厩橋一丁目廿七番地
印刷所　凸版印刷株式會社本場分工場

東京市神田區錦町一丁目五番地
發行所　株式會社誠文堂新光社
電話神田 自二一二六番 至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和二年十二月七日印刷　昭和二年十二月十日發行